宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第178集

国指定史跡

大島畠田遺跡
（おおしまはたけだ）

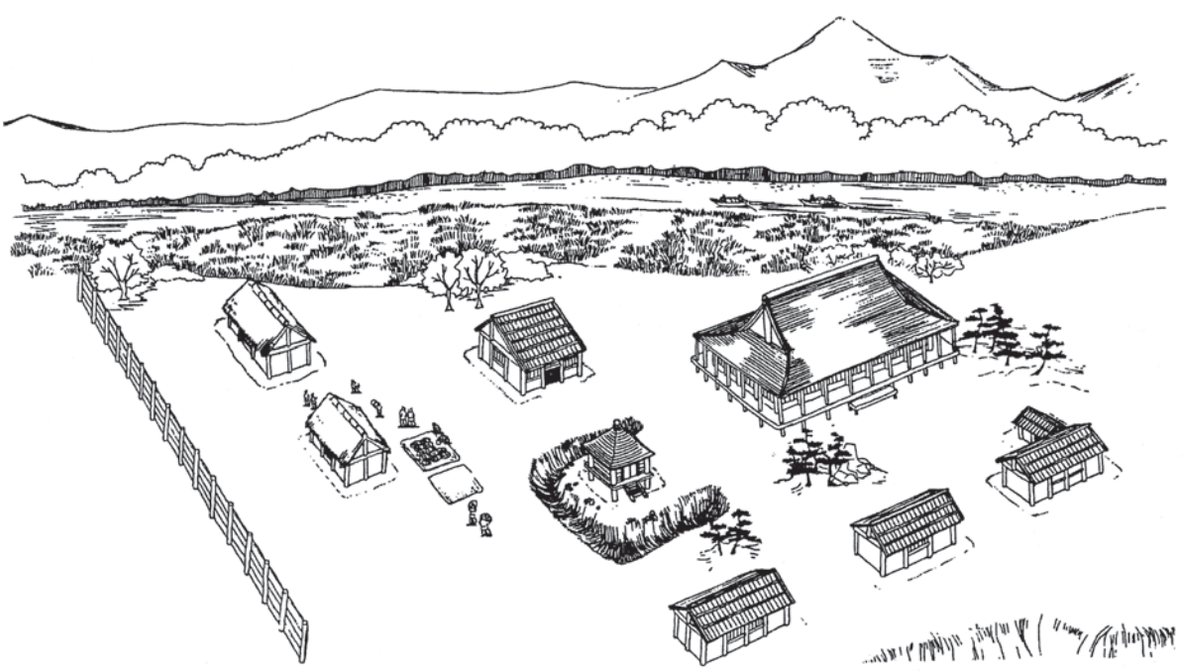
2008

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第178集

国指定史跡

大島畠田遺跡



2008

宮崎県埋蔵文化財センター

序

大島畠田遺跡は、宮崎県都城市金田町に所在する平安時代の遺跡であります。

この遺跡の調査は、もともと緑資源公団が実施する圃場整備事業に伴うものでありましたが、大型建物や池状遺構および門など平安時代の地方の有力者の邸宅跡の全容が明らかとなり、各方面から注目されるとともに、マスコミ等にも大きくとりあげられ、数多くの方が遺跡を訪れました。宮崎県では関係機関と協議を行い、邸宅跡およびその周辺地域の保存を決定し、発掘した遺構保護のため覆土を行いました。その後、都城市によって手続きがなされ、平成14年３月に国の史跡に指定されました。

本書は、平成10年度から平成11年度に宮崎県教育委員会が実施した発掘調査によって出土した資料や調査の記録をまとめたものであります。

今後は、本書を遺跡整備および調査研究に活用していただきますとともに、埋蔵文化財保護における理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり御指導いただいた文化庁はじめ諸先生方、ならびに遺跡保存のため御協力いただいた地元の方々、都城市、発掘に従事いただいた作業員の方々には衷心より感謝申し上げます。

平成20年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　清　野　　勉

例　　言

1　本書は、平成11年１月13日から平成11年11月９日にかけて、宮崎県教育委員会によって発掘調査が実施された都城市金田町所在の大島畠田遺跡の調査報告書である。

2　発掘調査は、緑資源公団の依頼により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

3　遺跡は、発掘調査中においてその重要性が判明し、協議の結果、調査対象地の約2.5haについて保存することになり、都城市を中心にその手続き等が行われ、平成14年３月19日に19,444.25㎡が国の史跡に指定され、残り5,550.77㎡についても平成16年２月27日に追加指定された。

4　出土した遺物の整理は、国庫補助を受けて平成17年度から平成19年度において「国指定史跡大島畠田遺跡整備活用支援事業」として宮崎県教育委員会で実施した。

5　報告書刊行後は、その成果をもとに都城市に遺跡整備が引き継がれる。

6　現地における実測等の記録は主に、柳田宏一、和田理啓、福田泰典、高橋　誠、久木田浩子、下田代清海、廣田晶子、柳田晴子、日高広人、甲斐貴充、橋川敬子、谷口武範が行い、一部、発掘作業員の協力を得た。

7　本書に使用した遺物実測図は、丹　俊詞、藤木　聡、谷口が行ったほか整理作業員が作成した。

8　本書に使用した実測図等の浄書は、丹、谷口が行ったほか整理作業員が実施した。

9　本書中の遺構写真は各調査員が、遺物写真については福田が撮影したものを使用した。

10　土器の圧痕については、柳田裕三が福岡市埋蔵文化財センターにて事前指導を受け、レプリカ作成を宮崎県埋蔵文化財センターにて行った。また、走査電子顕微鏡（SEM）の観察については、宮崎県総合農業試験場の溝辺　真氏の協力の下、同試験場にて柳田が行った。なお、レプリカに使用した溶剤や手順については、福岡市埋蔵文化財センター2006「付）土器圧痕レプリカ法作業の手引き」『福岡市埋蔵文化財センター年報』第25号を参照されたい。

11　測量・遺構実測・空中写真撮影・自然科学分析は次の機関に委託した。

基準杭設置：株式会社　平和総合技研

遺構実測：有限会社　ジパング・サーヴェイ

空中写真：㈱マエダ

植物珪酸体・花粉分析・種実同定・珪藻分析：㈱古環境研究所

年代測定：㈱古環境研究所および㈱パリノ・サーヴェイ

樹種同定：㈱古環境研究所および㈱パリノ・サーヴェイ

赤外分光分析：㈱パリノ・サーヴェイ

12　本書で使用したレベルは海抜絶対高であり、基準方位は座標北（G.N）である。

13　本書で使用している座標は、旧国土座標第Ⅱ系による。

14　土器および土層については農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準拠した。

15　挿図における遺物の縮尺は土器類は１：４を基本とし、陶磁器類については１：３で掲載した。石器については２：３、１：４を基本とする。

16　石器石材の同定および土師器胎土については赤崎広志氏（総合博物館）にご教示いただいた。

17　本書の執筆は、鉄製品について丹、石器について藤木・福田、調査の組織および近世陶磁器について福田、その他を谷口が行い、福田、谷口で編集を行った。

18　本書で使用した遺構の略号は次の通りである。

ＳＢ・・・掘立柱建物跡　　ＳＣ・・・土坑　　ＳＥ・・・溝状遺構

ＳＺ・・・不明遺構　　Ｐ・・・ピット

19　出土遺物、その他の諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

調査指導協力（所属は指導協力時）

小林　克（文化庁）　坂井秀弥（文化庁）　山中敏史（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）
柳沢一男（宮崎大学）　野口　実（京都女子大学）　永山修一（ラサール学園）　柴田博子（宮崎産業経営大学）　山本信夫(太宰府市教育委員会）　大久保徹也(徳島文理大学）　地畑耕一(鹿児島県教育委員会）　井上喜久男（愛知県陶磁資料館）　木村幾多郎（大分市歴史資料館）
中西武尚（大分市歴史資料館）　若山浩章（宮崎海洋高校）　赤井正秀（大刀洗町教育委員会）
重永卓爾（都城市史編纂室）　高妻洋成・降幡順子（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）
大盛祐子（都城市教育委員会）

そのほか、遺跡の保存のため「大島団地」圃場整備事業における換地委員や地元の方々には、いろいろご協力いただいた。また、都城市の教育委員会文化課・畑地かんがい推進課および緑資源公団の担当の方々には保存に向けての御指導、御尽力をしていただいた。

本 文 目 次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
　第１節　調査および遺跡保存に至る経緯…… 1
　第２節　調査の組織…… 2

第Ⅱ章　位置と環境 …… 4
　第１節　遺跡の環境…… 4

第Ⅲ章　調査の概要 …… 10
　第１節　調査の概要…… 10
　第２節　くぼ地の状況と遺構の分布…… 17

第Ⅳ章　調査の成果 …… 21
　第１節　遺　構…… 21
　　１　掘立柱建物跡…… 21
　　２　土　坑…… 57
　　３　溝状遺構…… 69
　　４　区画施設…… 87
　　５　池状遺構…… 92
　　６　道状遺構…… 119
　第２節　遺物の概要…… 124
　　１　土師器…… 124
　　２　須恵器…… 138
　　３　陶磁器類…… 142
　　４　石製品…… 144
　　５　弥生時代の遺物…… 145
　　６　近世の遺物…… 147
　　７　鉄製品…… 172
　　８　坩堝および金属滓の蛍光Ｘ線元素分析…… 177

第Ⅴ章　自然科学分析 …… 180

第Ⅵ章　まとめ…… 203

挿図目次

第１図　大島畠田遺跡の新聞記事…… 3
第２図　遺跡位置図…… 4
第３図　遺跡周辺地形図…… 6
第４図　遺跡配置図…… 6
第５図　遺構分布図…… 9
第６図　グリッド図…… 11
第７図　遺構配置図…… 12
第８図　トレンチ配置図…… 15
第９図　調査区地形図…… 16
第10図　くぼ地土層断面図…… 19・20
第11図　SB１実測図 …… 23・24
第12図　SB１土層断面図（１） …… 25
第13図　SB１土層断面図（２） …… 26
第14図　SB１土層断面図（３） …… 27
第15図　SB１土層断面図（４） …… 28
第16図　SB２実測図 …… 37
第17図　SB３実測図 …… 38
第18図　SB４実測図 …… 39
第19図　SB５実測図 …… 40
第20図　SB６実測図 …… 41
第21図　SB７・８実測図 …… 42
第22図　SB９実測図 …… 43
第23図　SB10・11実測図 …… 44
第24図　SB12・13実測図 …… 45
第25図　SB14実測図 …… 46
第26図　SB16・18実測図 …… 47
第27図　SB15・17実測図 …… 48
第28図　SB19・20実測図 …… 49
第29図　SB21・22・24実測図 …… 50
第30図　SB23・25・28実測図 …… 51
第31図　SB26・27・30実測図 …… 52
第32図　SB29・31・32実測図 …… 53
第33図　SB33・34実測図 …… 54
第34図　柱穴出土遺物（１）…… 55
第35図　柱穴出土遺物（２）…… 56
第36図　SC１・３・４・５・７実測図 … 60
第37図　SC６・８・11実測図 …… 61
第38図　SC９・10・12実測図 …… 62
第39図　SC13～17実測図 …… 63
第40図　SC18～21実測図 …… 64
第41図　SC22・23実測図 …… 65
第42図　SC24・25実測図 …… 66
第43図　土坑出土遺物実測図（１）…… 67
第44図　土坑出土遺物実測図（２）…… 68
第45図　溝状遺構土層断面図（１）…… 74
第46図　溝状遺構土層断面図（２）…… 75
第47図　溝状遺構土層断面図（３）…… 76
第48図　溝状遺構土層断面図（４）…… 77
第49図　溝状遺構土層断面図（５）…… 78
第50図　溝状遺構出土遺物実測図（１）… 79
第51図　溝状遺構出土遺物実測図（２）… 80
第52図　溝状遺構出土遺物実測図（３）… 81
第53図　溝状遺構出土遺物実測図（４）… 82
第54図　溝状遺構出土遺物実測図（５）… 83
第55図　溝状遺構出土遺物実測図（６）… 84
第56図　溝状遺構出土遺物実測図（７）… 85
第57図　溝状遺構出土遺物実測図（８）… 86
第58図　区画施設遺構実測図
　　および土層断面図…… 89
第59図　柵列・SE２断面図 …… 90
第60図　門跡実測図
　　および出土遺物実測図…… 91
第61図　池状遺構実測図…… 94
第62図　「コ」の字状区画範囲…… 95
第63図　池状遺構土層断面図（１）…… 96
第64図　池状遺構土層断面図（２）…… 97
第65図　池状遺構土層断面図（３）…… 98
第66図　SB35実測図 …… 99
第67図　池状遺構出土遺物実測図（１）… 101
第68図　池状遺構出土遺物実測図（２）… 102

第69図　池状遺構出土遺物実測図（３）… 103
第70図　池状遺構出土遺物実測図（４）… 104
第71図　池状遺構出土遺物実測図（５）… 105
第72図　池状遺構出土遺物実測図（６）… 106
第73図　池状遺構出土遺物実測図（７）… 107
第74図　池状遺構出土遺物実測図（８）… 108
第75図　池状遺構出土遺物実測図（９）… 109
第76図　池状遺構出土遺物実測図（10）… 110
第77図　池状遺構出土遺物実測図（11）… 111
第78図　池状遺構出土遺物実測図（12）… 112
第79図　池状遺構出土遺物実測図（13）… 113
第80図　池状遺構出土遺物実測図（14）… 114
第81図　池状遺構出土遺物実測図（15）… 115
第82図　池状遺構出土遺物実測図（16）… 116
第83図　池状遺構出土遺物実測図（17）… 117
第84図　池状遺構出土遺物実測図（18）… 118
第85図　SE１（道状遺構）土層断面図 … 121
第86図　SE１（道状遺構）および
出土遺物実測図…… 122
第87図　土師器形態分類図…… 131
第88図　土師器埦および大型鉢形態分類図 132
第89図　黒色土器形態分類図…… 133
第90図　くぼ地出土遺物実測図…… 149
第91図　包含層出土遺物実測図（１）…… 150
第92図　包含層出土遺物実測図（２）…… 151
第93図　包含層出土遺物実測図（３）…… 152
第94図　包含層出土遺物実測図（４）…… 153
第95図　包含層出土遺物実測図（５）…… 154
第96図　包含層出土遺物実測図（６）…… 155
第97図　包含層出土遺物実測図（７）…… 156
第98図　包含層出土遺物実測図（８）…… 157
第99図　包含層出土遺物実測図（９）…… 158
第100図　包含層出土遺物実測図（10） … 159
第101図　包含層出土遺物実測図（11） … 160
第102図　包含層出土遺物実測図（12） … 161
第103図　包含層出土遺物実測図（13） … 162
第104図　包含層出土遺物実測図（14） … 163
第105図　包含層出土遺物実測図（15） … 164
第106図　包含層出土遺物実測図（16） … 165
第107図　包含層出土遺物実測図（17） … 166
第108図　包含層出土遺物実測図（18） … 167
第109図　SC２実測図 …… 167
第110図　包含層出土遺物実測図（19） … 168
第111図　包含層出土遺物実測図（20） … 169
第112図　包含層出土遺物実測図（21） … 170
第113図　墨書土器・刻書土器
遺物実測図（S=1/3） … 171
第114図　鉄製品実測図（S=1/2） …… 173
第115図　羽口・鉱物滓実測図（S=1/2）… 174
第116図　遺構変遷図 …… 205

表　目　次

表１　掘立柱建物跡・門・柵列計測表…… 29
表２　柱穴計測表（１）…… 30
表３　柱穴計測表（２）…… 31
表４　土坑計測表…… 59
表５　土師器坏法量表（口径）…… 134
表６　土師器坏法量表（底径）…… 134
表７　土錘法量表…… 135
表８　遺構別出土遺物一覧…… 148
表９　鉄器計測表…… 172
表10　遺物観察表（土師器（甕・坏・埦・
黒色土器）・布痕土器・弥生土器）…… 207
表11　須恵器観察表…… 234
表12　陶磁器観察表…… 242
表13　石器計測表…… 251
表14　石製鈎具計測表…… 251
表15　輪計測表…… 251
表16　紡錘車計測表…… 251
表17　土錘計測表…… 252
表18　滑石製品計測表…… 252

図版・目次

図版１　現地説明会の様子…… 3
図版２　遺跡周辺航空写真
（昭和22（1947）年　米軍撮影）…… 7
図版３　遺構検出状況…… 8
図版４　調査区全景…… 13
図版５　くぼ地２　土層堆積状況…… 18
図版６　集中豪雨によるくぼ地冠水状況…… 18
図版７　ＳＢ１近景（北より）…… 22
図版８　ＳＢ１全景…… 22
図版９　柱穴の状況…… 22
図版10　遺跡より霧島を望む…… 73
図版11　区画施設等検出状況…… 88
図版12　区画施設等調査状況…… 88
図版13　池状遺構検出状況…… 93
図版14　池状遺構調査状況…… 93
図版15　ＳＥ１（道状遺構）調査状況
（東より）…… 120
図版16　ＳＥ１（道状遺構）調査状況…… 123
図版17　白磁片埋納状況…… 123
図版18　墨書土器（赤外線撮影）…… 137
図版19　鉄製品・鞴羽口・鉄滓…… 175
図版20　炭化材（１）…… 200
図版21　炭化材（２）…… 201
図版22　赤外分光分析試料の採取位置…… 202
図版23　遺跡遠景（南より）
遺跡遠景（東より）…… 253
図版24　遺跡遠景（北より）
遺構検出状況（南西より）…… 254
図版25　遺構調査状況（屋敷地）
遺構調査状況（調査区南部）…… 255
図版26　ＳＢ１　柱穴の状況…… 256
図版27　ＳＢ１・２・６・８・14　柱穴の
状況…… 257
図版28　ＳＢ35　柱穴の状況…… 258
図版29　ＳＥ２・３…… 259
図版30　ＳＥ３・４・５・８・27…… 260
図版31　ＳＥ７・10・11・12…… 261
図版32　ＳＥ16・26・30　ＳＣ１・２・４…… 262
図版33　ＳＥ25・くぼ地…… 263
図版34　ＳＣ５・６・７・９・12・13…… 264
図版35　ＳＣ14・18・19・24・25…… 265
図版36　ＳＺ１・３・４…… 266
図版37　池状遺構土層断面（１）…… 267
図版38　池状遺構土層断面（２）…… 268
図版39　池状遺構土層断面（３）…… 269
図版40　池状遺構土層断面（４）…… 270
図版41　SE １（道状遺構）および区画施設検
出状況…… 271
図版42　道状遺構土層断面（１）…… 272
図版43　道状遺構土層断面（２）…… 273
図版44　道状遺構土層断面（３）…… 274
図版45　土師器１（坏）…… 275
図版46　土師器２（坏）…… 276
図版47　土師器３（坏）…… 277
図版48　土師器４（坏）…… 278
図版49　土師器５（坏・皿・高台付皿・高台付
埦）…… 279
図版50　土師器６（高台付埦）…… 280
図版51　土師器７（高台付埦）…… 281
図版52　土師器８（高台付埦・黒色土器）…… 282
図版53　土師器９（甕）鉢　大型鉢　黒色土器
（鉢）脚柱と黒色土器（鼎脚）…… 283
図版54　布痕土器（内面）　紡錘車・鞴羽口 … 284
図版55　墨書土器　須恵器１…… 285
図版56　須須恵器２（坏・高台付埦・甕・壺） 286
図版57　須恵器ａ類（内面）（外面）…… 287
図版58　須恵器ｃ類（内面）（外面）…… 288
図版59　須恵器ｄ・ｅ・ｆ・ｇ・ｈ・ｉ・ｊ・
ｋ・ｌ類（内面）（外面）…… 289
図版60　緑釉陶器（Ａ類、内面）…… 290
図版61　緑釉陶器（Ａ類、外面）　…… 291
図版62　緑釉陶器（Ｂ類、内面）…… 292
図版63　緑釉陶器（Ｂ類、外面）…… 293
図版64　灰釉陶器（内面）（外面）…… 294
図版65　白磁Ⅰ類（内面）（外面）…… 295
図版66　白磁Ⅳ類（内面）…… 296
図版67　白磁Ⅳ類（外面）…… 297
図版68　白磁Ⅴ類（内面）…… 298
図版69　白磁Ⅴ類（外面）…… 299
図版70　白磁皿・合子（内面）（外面）…… 300
図版71　越州窯系青磁１（内面）…… 301
図版72　越州窯系青磁１（外面）…… 302
図版73　越州窯系青磁２（内面）（外面）…… 303
図版74　中世陶磁器（内面、外面　陶器・白磁
・青磁・青花）…… 304
図版75　土　錘…… 305
図版76　滑石製品　石製品　石製銙具…… 306
図版77　石製品（磨石・砥石）…… 307
図版78　弥生土器　近世陶磁器…… 308

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査および遺跡保存に至る経緯

緑資源公団（旧農用地整備公団）において、農用地整備事業として農業生産性の向上・農業経営の安定を図る圃場整備事業（204ha）やそれに伴う農産物流通の迅速化を目指した広域農道（総延長19.1㎞）建設が計画された。まず、平成５年11月に農用地整備事業の予定地内の文化財の所在の有無について、九州農政局南部九州土地改良調査管理事務所長より県文化課（現文化財課）に依頼があり、平成６年３月に遺跡数33箇所、試掘調査必要な29箇所を回答した。以後、発掘調査面積の平準化や調査員の確保などの問題について継続して協議を行った。

大島畠田遺跡は、「大島団地」圃場整備事業として計画され、平成６年12月～平成７年１月にかけて行われた試掘調査によって古代の遺構・遺物等が確認された。平成10年12月に再度、確認調査を実施し、遺跡保存のため工事計画との協議を行い、影響を受ける約6,000㎡について調査を実施することとなった。

調査は平成11年１月13日から宮崎県埋蔵文化財センターが主体となり実施したが、調査を進めるにつれ大型の建物や多くの建物群、門、区画溝、道状遺構など予想を大きく上回る重要な遺構・遺物が検出された。調査中、平成９月３日には都城市長が視察されたのをはじめ、遺跡の評価や調査の進め方など奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの山中敏史先生や柳沢一男宮崎大学教授、ほか多くの県内外の研究者や文化財担当者の訪問を受け貴重な意見を賜った。また、遺跡の全容が把握できた平成11年９月５日には、現地説明会を実施し、あいにくの天気にもかかわらず、事前に新聞等に取り上げられたこともあって、県内外から500名を超す多数の参加者があり、地域の人々の関心の高さを知ることになった。さらに平成11年９月25日には、文化庁の坂井秀弥調査官が来跡され、遺跡の重要性について高い評価をいただき保存・整備の検討を要請された。これを受け、県文化課、都城市では、遺跡の保存について、公団および地元の方々との話し合いを数度にわたり行い、最終的には公団が遺跡を含む約2.5haについて事業区域から除外し、今後、都城市が整備を進めることで御了解いただいた。このため調査を途中から保存を前提としたものに切り替え、遺構の分布状況や切り合い関係などの把握に主眼をおき、屋敷地の広がりを確認するため北側に調査区を拡張した。平成11年１月から開始した調査は、予想を上回る遺構の検出と調査区域の拡大、遺跡保存へ向けての協議、さらに夏の度重なる台風、長雨などの影響で当初の予定より大幅に遅れ、平成11年11月９日に終了した。そして、地権者の御理解のもと遺跡保存のため平成12年１月４日より２月12日まで、調査区全体をシラスで約20～30㎝ほどの厚さで被い、表土の埋め戻し作業を行い現状に復した。

また、遺跡の保存に向けて公団、都城市、県教委では協議を重ね、平成11年11月24日には関係地権者すべての方に集まっていただき、調査の内容報告や調査区域の取扱について具体的な説明を行った。さらに平成12年４月には都城市による遺跡範囲確定のための確認調査の実施や文化庁調査官の都城市長との会談など関係機関および地権者の方々の努力およびご厚意により、平成13年８月３日に都城市より遺跡区域の19,444.25㎡について国史跡指定文化財への申請書が提出され、平成14年３月19日に国の史跡に指定された。また、残りの5,550.77㎡についても平成16年２月27日に追加指定され、これにより大型建物などを含む古代の地方有力者層の屋敷地内全てが保存される運びとなった。

これを受け県教委では、平成17年度から平成19年度において「国指定史跡大島畠田遺跡整備活用支援事業」として出土遺物等の整理を行い遺跡の報告書を作成することとなった。

第２節　調査の組織

大島畠田遺跡の調査組織は以下のとおりである。

調査主体　宮崎県教育委員会

県教育庁文化財課（平成17年度より文化財課埋蔵文化財担当に改編）

調整担当

平成10年度　文化課埋蔵文化財係主査	長津宗重
平成11年度　文化課埋蔵文化財係主査主任主事	東　憲章

報告書執筆・編集担当

平成19年度　主幹（埋蔵文化財担当リーダー）	谷口武範

宮崎県埋蔵文化財センター

発掘調査（平成10・11年度）

平成10年度

所長	田中　守	庶務係長	児玉和昭
調査第二係長	青山尚友	調査第二係主査	谷口武範
調査第二係主事	和田理啓	調査員	橋川敬子

平成11年度

所長	田中　守	副所長	江口京子
庶務係長	児玉和昭	調査第二係長	青山尚友
調査第二係主査	柳田宏一	調査第二係主査	谷口武範
調査第二係調査員（嘱託）	橋川敬子		

整理作業（平成17～19年度）

平成17年度

所長	宮園淳一	副所長兼調査第二課長	岩永哲夫
総務課長	宮越　尊	総務課主幹兼総務係長	石川恵史
調査第二課調査第三係長	谷口武範		

平成18年度

所長	清野　勉	副所長	加藤悟郎
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫	総務課長	宮越　尊
総務課主幹（総務担当リーダー）	高山正信	調査第二課主幹（調査第三担当リーダー）	谷口武範

平成19年度

所長	清野　勉	副所長	加藤悟郎
総務課長	宮越　尊	調査第二課長	石川悦雄
調査第二課副主幹（調査第三担当リーダー）	福田泰典	調査第二課調査第三担当主事	丹　俊詞

都城に平安の広大建物跡

大島畠田遺跡

有力者の邸宅か

南九州最大級 敷地内に池やお堂も

大島畠田遺跡の現地説明会で、熱心に説明に聞き入る参加者＝5日午後3時半、都城市金田町の現地

大島畠田遺跡

土木技術「すごい」

450人参加し現地説明会

宮崎日日新聞掲載記事
左:1999年８月30日(月)
右および下:1999年９月６日(月)

第１図　大島畠田遺跡の新聞記事

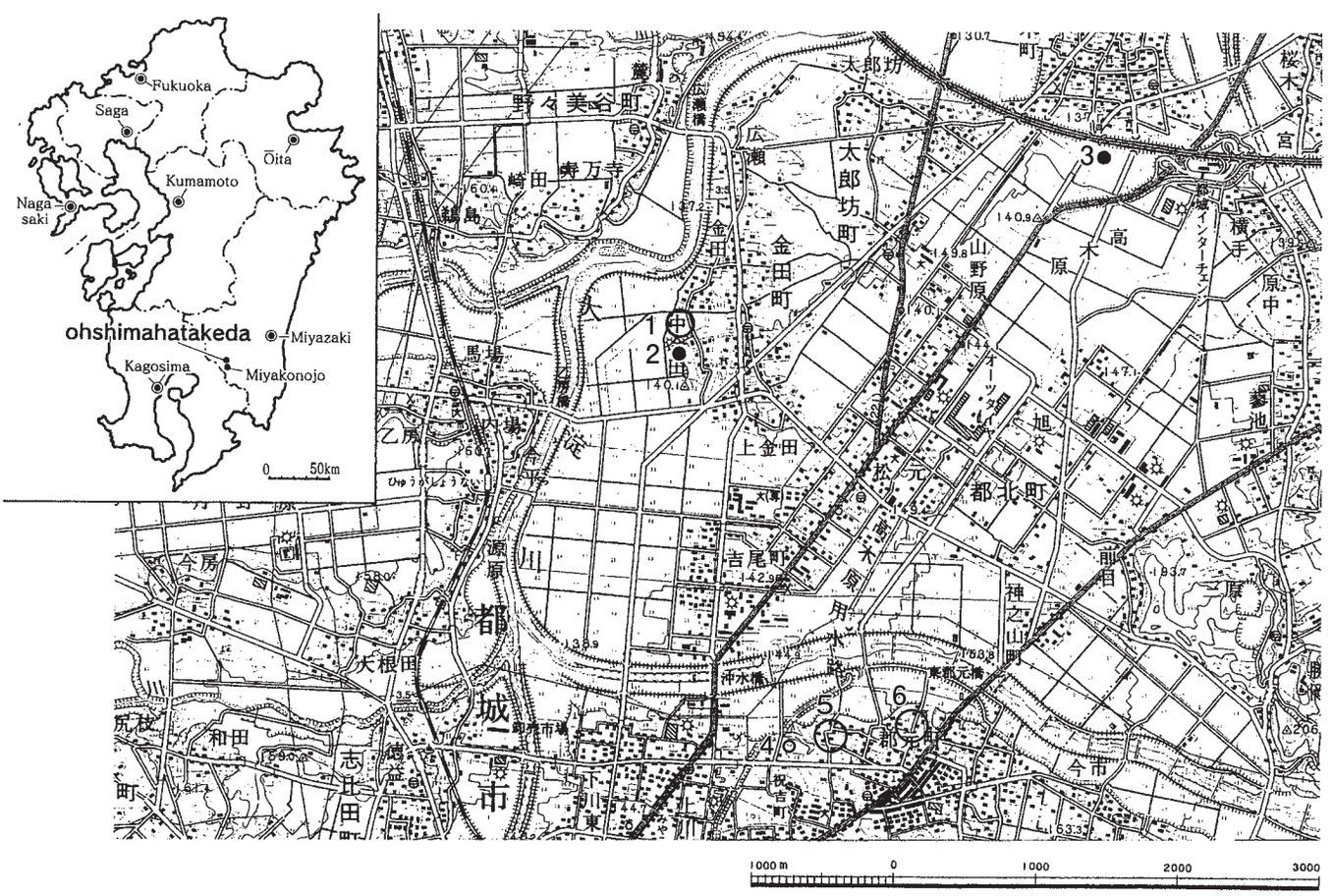
図版１　現地説明会の様子

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　遺跡の環境

遺跡は、都城市金田（かなだ）町字畠田に所在し、大淀川と庄内川との合流地点に形成された沖積地の微高地（標高133.80 ～ 133.0m）上に立地している。西側に広がる大淀川氾濫原とは約1.5m比高差を測る。遺跡周辺の現況は昭和初期の基盤整備によりほぼ平坦な水田であるが、遺跡の北側の集落（標高約136m）から緩やかに南に傾斜した縁辺部に遺跡は位置している。また、遺跡の南にある舌状台地の北側裾部には確認調査により小規模な谷が入り込み、水田として利用されていたことも判明した。さらに、航空写真をみると遺跡周辺はあちこちに旧河川の痕跡が認められ、発掘調査により調査区東から南にかけて旧河川と考えられる凹地も確認されている。このように、遺跡は氾濫原の中、大淀川に面したわずかに高く見透しのよい箇所を選んで形成されていたことが理解できる（第３・４図）。

遺跡のある大淀川東岸地域は、これまで、氾濫原地帯が大半を占め、さらに昭和初期に水田耕作の土地改良が完了していることなどから、丘陵上や微高地においてわずかに弥生時代や古代の遺跡が確認されているにすぎなかった。しかし、今回の発掘調査結果や遺跡の北東集落の屋敷内開墾中に軽石製の五輪塔が多数出土するなど、周辺地域には分布調査では発見されなかった多くの古代～中世の遺跡が存在すると考えられる。（第２図）



１　**大島畠田遺跡**　　２宮の下遺跡　　３並木添遺跡
４　祝吉遺跡　　５松原地区遺跡群　　６久玉遺跡

第２図　遺跡位置図

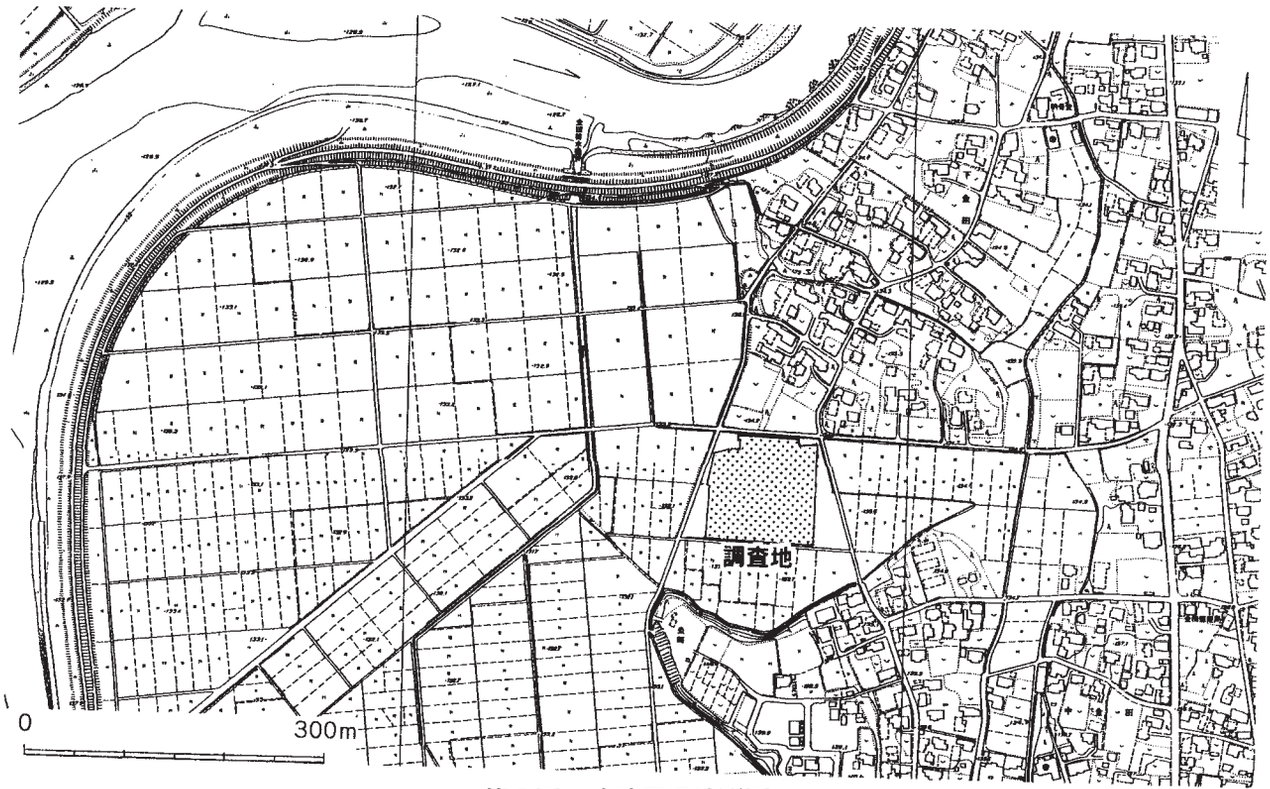
都城市域では、大淀川の支流である各河川流域ごとに多くの遺跡が確認および調査が実施されているが、本遺跡周辺では、確認あるいは調査された遺跡はそれほど多くない。発掘調査された遺跡としては、公園整備事業に伴い平成３年に調査が行われた宮の下遺跡があり、大島畠田遺跡の南に延びる舌状丘陵、約139mの縁辺部に立地し、弥生時代後期の住居跡１軒、包含層からは古代末～中世の須恵器や土師器などが出土している。大島畠田遺跡とは比高差は約７ｍである。宮崎自動車道都城インターチェンジに西に隣接した並木添遺跡では、平安時代の道路遺構が検出され、直線的に延びることから、広域を結ぶために計画的に造られた可能性が示されている。さらに石製鋳具が１点出土している。また、「延喜式」に記載された島津駅の比定地と推定される郡元町は、遺跡の南東約３㎞に位置し、遺跡一帯が交通の要所であったことがうかがえる。

中世では、前述した並木添遺跡で13 ～ 15世紀前半にかけての掘立柱建物跡群が検出された。大淀川の支流である沖水川左岸の縁辺部では、緑釉陰刻牡丹文水注が出土した祝吉遺跡、松原地区遺跡群では13世紀後半の大溝を巡らす館跡や土師器Ⅲ６枚、白磁Ⅳ類・刀子１振を供伴した土壙墓のほか、溝に区画された屋敷地など中世から近世まで営まれた集落が、その東に同様な集落である久玉遺跡は昭和63年から平成12年まで12次の調査まで実施されている。

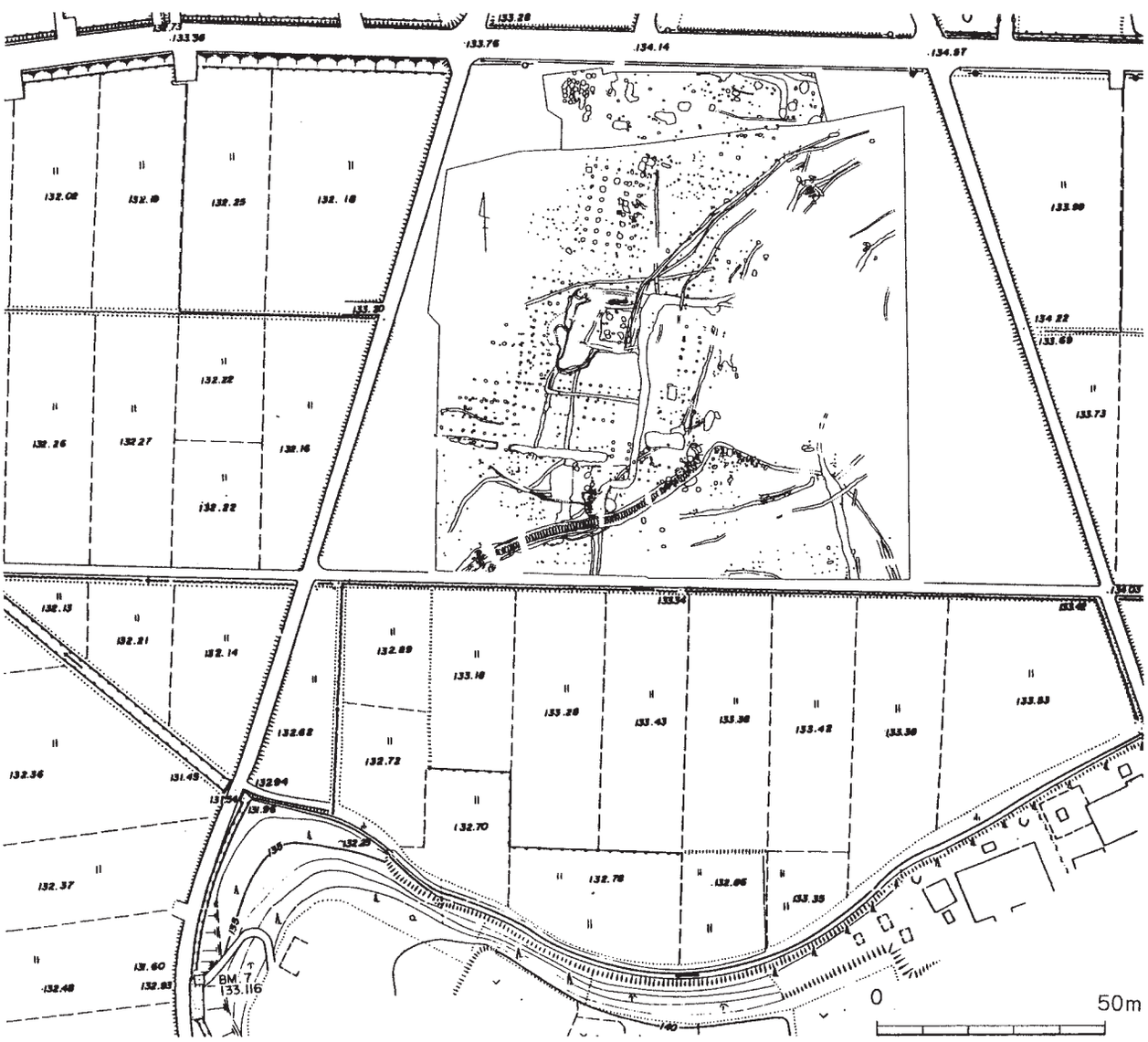
また、文献資料からみると、島津荘は万寿年間（1024 ～ 28）に大宰大監平季基が一族や近隣有力者の協力を得て島津駅周辺の荒野を開拓し、関白藤原頼通に寄進して成立したとされる。さらに時代がやや下るが、平季基の系譜を引く日置（北郷）氏系図によれば、12世紀後半頃「兼房、金田領主」とあり、金田町一帯が古代より連綿と続く主要な地域であったことがうかがえる。

参考文献

『宮の下遺跡』都城市文化財調査報告書　第13集　都城市教育委員会　1991
『並木添遺跡』都城市文化財調査報告書　第24集　都城市教育委員会　1993
『祝吉遺跡』都城市文化財調査報告書　第１集　都城市教育委員会　1981
『祝吉遺跡Ⅱ』都城市文化財調査報告書　第２集　都城市教育委員会　1982
『松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』都城市文化財調査報告書　第７集　都城市教育委員会　1989
『松原地区第Ⅴ遺跡』都城市文化財調査報告書　第10集　都城市教育委員会　1989
『松原地区第Ⅱ－２遺跡』都城市文化財調査報告書　第16集　都城市教育委員会　1992
『松原地区第Ⅳ遺跡の調査概要』都城市文化財調査報告書　第51集　都城市教育委員会　2000
『都城市史　通史編　自然・原始・古代』　都城市史編さん委員会　都城市　1997
『都城市史　通史編　中世・近世』　都城市史編さん委員会　都城市　2005
『都城市史　資料編　考古』　都城市史編さん委員会　都城市　2006
『宮崎県史　通史編　中世』　宮崎県　1998



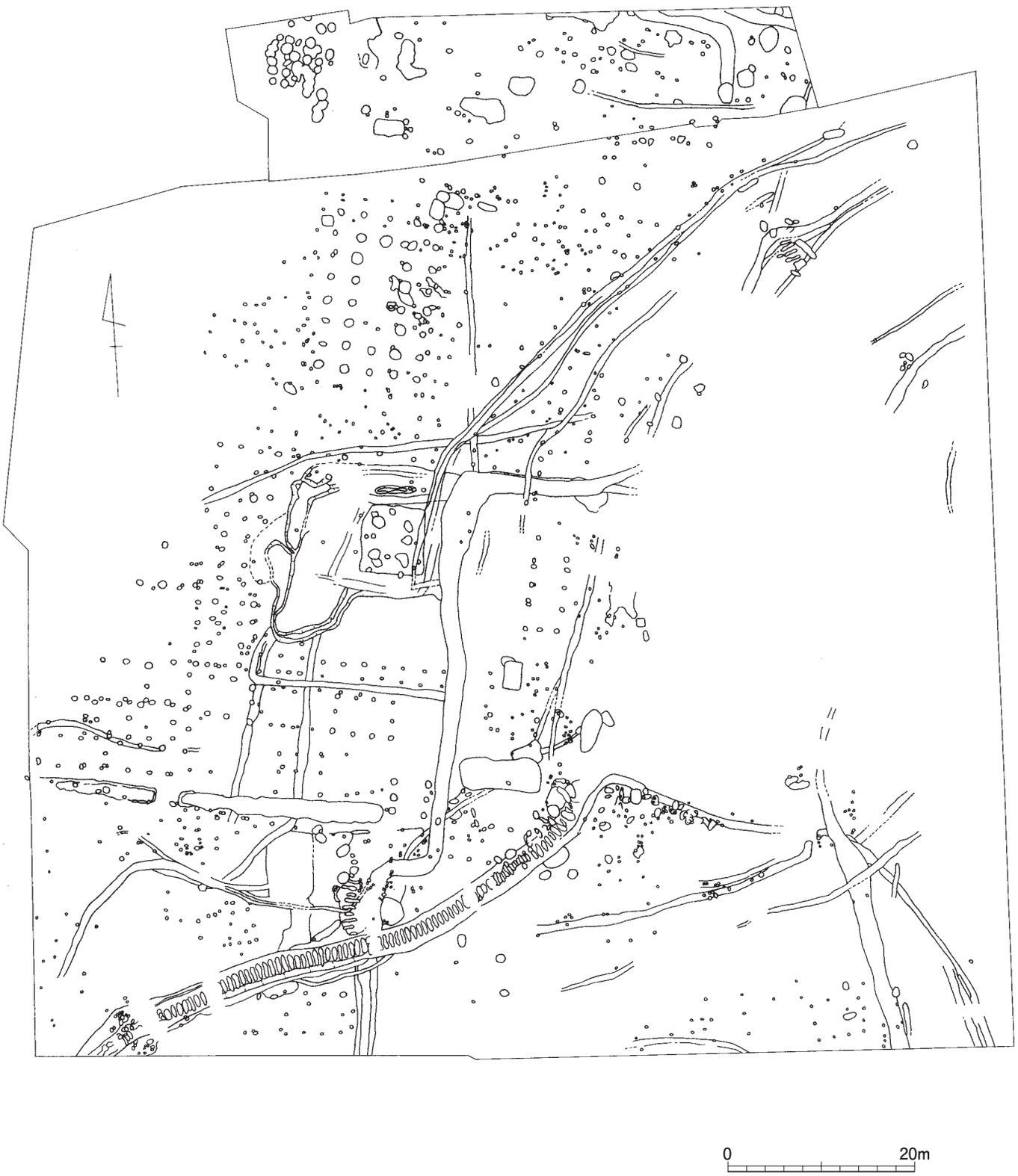
第３図　遺跡周辺地形図



第４図　遺跡配置図

図版２　遺跡周辺航空写真（昭和22（1947）年　米軍撮影）

図版３　遺構検出状況



第５図　遺構分布図（1/400）

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査の概要

緑資源公団による圃場整備事業に先行して、県文化課は平成６年度に試掘調査を実施し、古代の遺構・遺物等が発見され、遺跡の存在を確認していた。さらに平成10年度に再度、詳細な工事計画との調整協議のため確認調査を実施し、その結果、昭和初期の圃場整備によって、遺物包含層および遺構上部はすでに削平されていたものの、弥生土器や土師器・陶磁器類など古代から近世の遺物が多量に出土し、溝状遺構やピットのほか、低地部では､15世紀後半に桜島より噴出した白色軽石層が見られ、水田の痕跡も確認された。また、調査区北西隅においては、表土下すぐに自然礫層が露出し、遺跡は残存していないことも判明した。この結果をもとに緑資源公団との協議を行い、工事で影響を受ける約6,000㎡について調査を行うこととした。

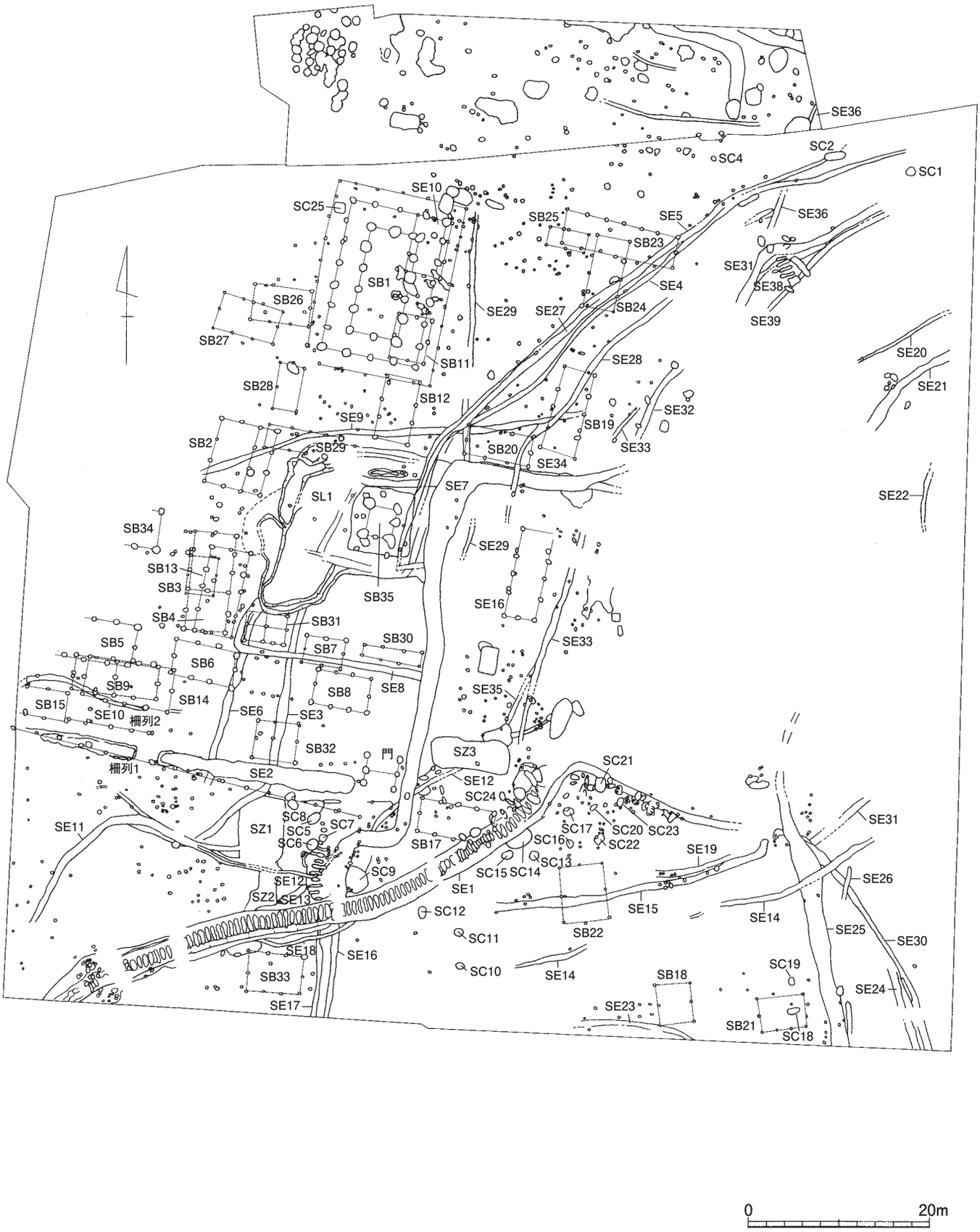
大島畠田遺跡の調査は平成11年１月より開始し、まず調査対象地全体の表土を剥いだ後、座標にあわせ10ｍグリッドを設定（第６図）し、全面の遺構検出から行った。調査地は沖積地微高地で、水はけが悪く、度重なる台風の襲来による遺構内の排水・汲み出しの繰り返し、さらには遺構検出面が褐色砂質土のため、乾燥を防ぐためのブルーシートの設置および調査や写真撮影のための除去など悪戦苦闘の日々であった。しかし、調査を進めるにつれ径１ｍを超える柱穴を有する建物をはじめとする多くの建物群、門、区画溝、道状遺構など予想を大きく上回る重要な遺構・遺物が検出され、ついに大型建物を核としそれに付随する掘立柱建物跡群や池状遺構、四脚門を有するなど、当該地域の有力者と考えられる居宅のほぼ全容を検出するに至った（第７図)。この有力者の居宅（屋敷地）は、微高地上の最高位付近に、凹地（自然地形）を活かしながら門や溝などの区画施設が作られ、建物群もそれに平行あるいは直行するように配置される。屋敷地内の遺構群は、133.60ｍの最も高い箇所にSB １が位置し、南へ下る緩斜面に沿って、池状遺構、掘立柱建物跡群、門跡や柵列などの区画施設の順に配置されている。屋敷の範囲は、南は区画施設により、東は凹地西をSB24・19・16の一直線による配置で、北は不明だが遺構の分布ではSB １およびSB23のラインまで、西端は削平より不明（明治時代の字図を参考にすればそれほどは広がらないと考えられる)、このことから屋敷は南北約65m、東西60ｍ＋αの規模となる。

併せて、遺物は坏など供膳用の遺物が多量に使用されており、緑釉陶器、灰釉陶器、越州窯系青磁、白磁Ⅰ類などもこの地域では群を抜いた出土量を誇ることから、９世紀後半頃から律令体制の変質に伴い、地方で台頭してくる在地の豪族などの有力者の邸宅跡として捉えられ、保存すべき重要な遺跡であることがわかってきた。このような状況下、文化庁などの指導・助言により事業者である緑資源公団や地権者および地元都城市との協議を繰り返し行い、その結果、事業区から遺跡範囲を除外し保存する方針が打ち出された。その後、都城市による地権者への同意書や保存地域の管理など努力の結果、平成14年３月に国の史跡に、さらに残りの約5,500㎡についても平成16年２月に追加指定され、遺跡全域の保存が終了した。

調査は、保存決定後から、遺構発掘からすでに調査した遺構の性格や重複の前後関係の把握の調査へと変更して進めた。そして平成11年11月に終了し、調査区全体をシラスで約20 ～ 30㎝ほどの厚さで被い、表土で埋め戻し現状に復した。

今回の調査で古代～中世の遺構として把握できたものは、掘立柱建物跡35棟、土坑25基、溝状遺構37条、池状遺構１基、区画施設として、区画溝１条、柵列２基、門１基のほか道状遺構１条や性格不明な土坑などがある。なお、遺構輪郭は確認したものの未掘のままのものも数多くある。

第６図　グリッド図（1/600）


SE36
SC4
SC2
SC1
SE10
SC25
SB25
SE5
SE36
SB23
SE31
SB1
SE4
SE38
SB26
SE29
SE27
SB24
SE39
SB27
SB11
SE28
SE20
SB28
SB12
SE21
SE9
SB19
SE32
SB2
SB29
SB20
SE33
SE34
SE7
SE22
SL1
SB34
SE29
SB13
SB3
SB35
SE16
SB4
SB31
SE33
SB5
SB30
SB7
SB6
SB9
SB8
SE8
SE35
SB15
SB14
SE10
SE6
SE3
柵列2
SB32
門
SZ3
柵列1
SE2
SE12
SC21
SC24
SE11
SC8
SC7
SZ1
SC5
SC6
SB17
SC16
SC17
SC20
SC23
SC22
SE19
SC9
SC15
SC14
SC13
SE1
SE31
SE12
SZ2
SE13
SC12
SE15
SE26
SB22
SE14
SC11
SE25
SE30
SE18
SE16
SC10
SE14
SB18
SC19
SB33
SE24
SE17
SE23
SB21
SC18
0
20m

第７図　遺構配置図

図版４　調査区全景

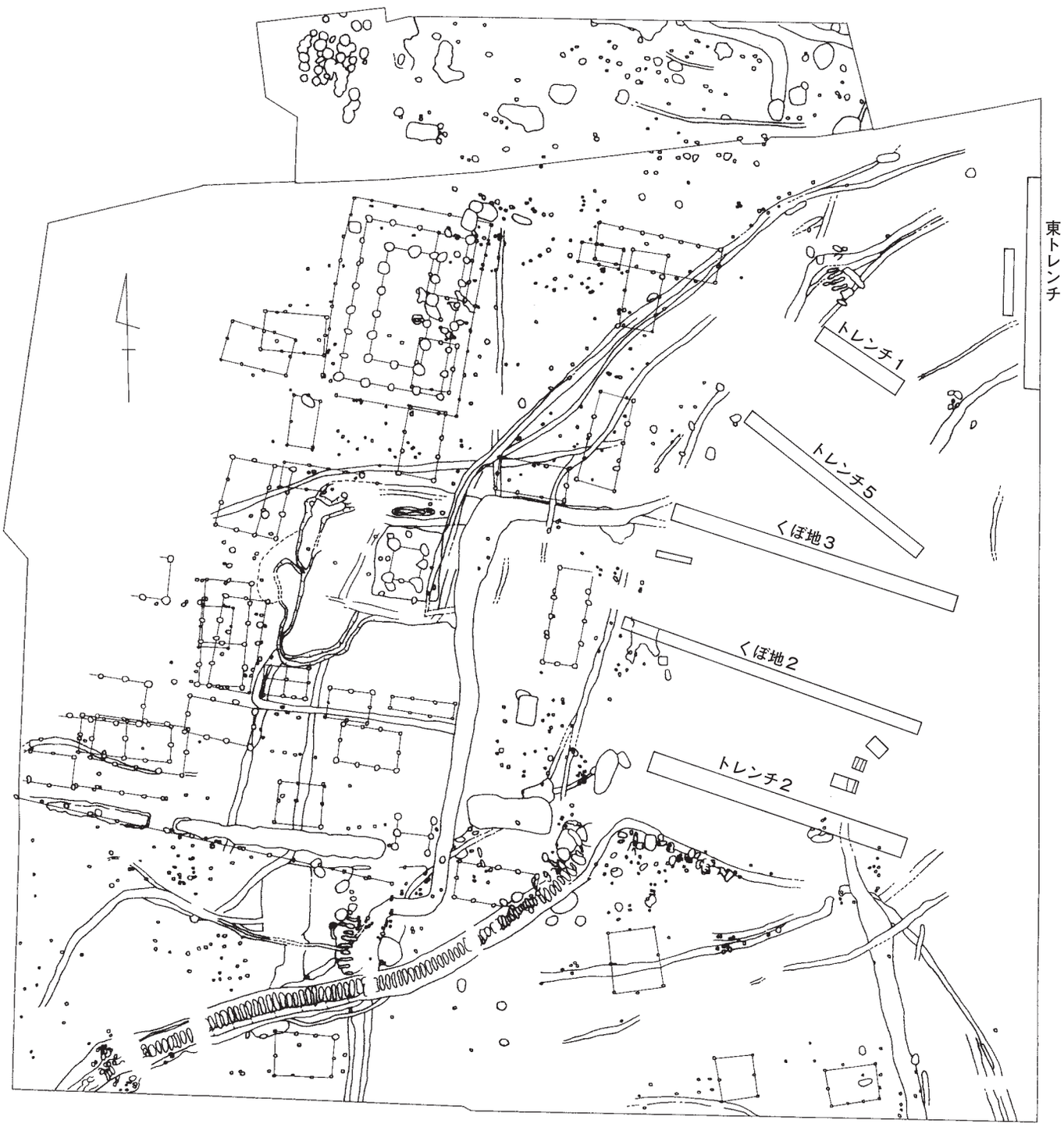
大型建物（SB 1）は、掘立柱建物跡群の最北端の最高部に位置し、四面庇の外側にさらに縁あるいは軒先の柱と推定される小柱穴が廻る。身舎部分の柱穴は、柱の周囲を突き固めた状況も明確で、底面は自然礫層まで掘り込み、礎石としての役割を持たせていたと考えられる。

掘立柱建物跡は、34棟（大型建物は除く）を確認し、重複関係や主軸によりおおよそ四つに分類できる。これらの建物群は、出土遺物から、9世紀後半から10世紀前半および12世紀前後の二時期に分かれ、特に古代の建物群については、区画溝や東側の凹地に囲まれた屋敷地内のみに分布し、池状遺構より北に位置する建物は基本的には南北を、池状遺構より南の建物は区画施設と平行の東西方向を示す。建物柱穴は径50㎝と同時期の遺跡より大きく、柱痕跡（20㎝前後）も明瞭である。中世に下る建物は、その規模や主軸など古代とは大きく異なり調査区全体に散漫に分布する。

池状遺構は大型建物（SB 1）の南側に位置し、複数の溝と切り合う。名称を池状遺構としているが、池としての確証は得られていない。人工的に造られたもので、素掘で形態としては、不定形の溝を周囲に掘り巡らし、中央に地山を残し、中島を形成している。溝発掘中、埋土から多量の河原石（10 ～ 30㎝）が検出されていることから、中島部分に葺石されていたと考えられる。橋については、はっきりせず、導水溝についてはくぼ地からのびる溝がその役割を果たしていた可能性もあるが、自然科学分析から常時水が満たされていた状態では無いようである。池状遺構埋没後、中島部を再利用して、北側が開いた「コ」の字状の区画溝が設けられ「コ」の字状に区画された内部に、柱の大きさや深さなど大型建物のそれと非常に類似した規模の柱穴からなる1間×1間の建物が設けられ、高床で信仰の対象となる建物であったのではないかと想定される。遺物は、供膳用の土師器坏類が最も多く、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、越州窯系青磁、灰釉陶器、白磁、布痕土器、鉄製品、土錘があるものの、木簡や仏具など祭祀的遺物はみられなかった。また『井』や『泉』と書かれた墨書土器があり水との関連を想起させる遺物として注目される。

区画施設としては屋敷地の南側を区画する遺構として、区画溝とそれに附随する四脚門や柵列が設けられるが、区画溝や門が同時期で、柵列はそれより新しいと考えられる。これら屋敷を区画する遺構は、東西に溝状遺構の西側ですべて止まり、その東側には明確な区画する遺構は検出されず、南の出入りは南東隅より行われていたことになる。しかし、門はこれまでの調査例から屋敷のほぼ中央に位置し、本遺跡と大きく食い違いを見せている。東側は自然のくぼ地を利用し、西側はさほど西に広がらず大淀川の氾濫原となるため、溝あるいは柵列が作られていた可能性が高い。一方、屋敷の北側では、明確な遺構が検出されず、今後、周辺域の確認調査で解決すべき課題である。このほか古代の遺構の広がりは凹地の南東、調査区の南東隅に、SE25など確認され、明確な建物等は確認できていないが、調査区の東に広がると想定される。12 ～ 13世紀では道状遺構が主たる遺構となるが、掘立柱建物跡や溝状遺構などあるもののその分布は散漫となり、15世紀代には一帯が水田として利用されていくようである。

道状遺構については、出土遺物より12世紀前後まで下るが、遺構が氾濫原の方向に延びており大淀川を利用した交通網への搬入・搬出が目的で作られたと考えられ、その荷物の集積地は、遺跡の北あるいは東に広がる現在の集落部分に形成されていた可能性が高い。12世紀後半頃「兼房、金田領主」の記述との関連も興味深い。



第８図　トレンチ配置図

第９図　調査区地形図

第２節　くぼ地の状況と遺構の分布

遺跡は、検出面での標高でみれば133.0ｍから133.6ｍの高さに分布するが、大型建物の西側は表土を除去するとすぐに礫層が露出したこと、さらに近世墓が検出された調査区北西隅では、御池ボラ層の堆積がみられることから、本来は、現在の集落のある北から調査区北西部に高地が延びていたと想定される。一方、南にも標高約140ｍの丘陵が東西に位置し、遺跡は南北の高地に挟まれた内湾気味の、大淀川の氾濫源よりわずかに高く形成された微高地に形成されていることが窺える。さらに都城市教育委員会の遺跡周辺の調査によって遺構群が分布する北側の微高地と南に標高が約1.5 ～ 2 ｍほど下がる低位面における水田域の存在が確認されている。この水田域では古代から中世にかけての水田も推定されている。

そして、調査区内での遺構の検出作業時に黒色土が広範囲に堆積する区域が東側から南にかけて分布することが確認され、トレンチ調査（第８図）により自然地形のくぼ地であることが判明し、その範囲は133.0ｍの等高線でみると調査区中央東より部分で、東西約30m、南北約45m、深さ約1.4ｍを測り、その範囲は幅約７ｍに狭めながら同様な深さを保ち調査区北東部へ延びている。東から南部にかけては、さほど深さをもたず門跡や柵列１・２のすぐ南に幅約６ｍの範囲で西に延びている（第９図）。このくぼ地の堆積土の火山灰分析によって、上層では桜島起源軽石（15世紀後半噴出）が堆積し、検出面より埋土中層より上位においては霧島を起源とする高原（黒灰色）スコリア（11 ～ 13世紀）が確認され、それ以下では検出されず、遺構分布をみてもくぼ地を跨ぐ遺構がみられないことや、遺構がくぼ地に平行している状況などから、黒灰色スコリア（11 ～ 13世紀）以前にはくぼ地として存在していたと考えられる（第10図）。さらにくぼ地遺跡東側のトレンチでは、表土下すぐに礫層が露出し、もともとの地形が削られ、現在のような平坦面になったことが想定され、調査区東にも屋敷地同様の高位面が広がっていた可能性がある。

くぼ地において植物珪酸体および花粉分析を行った結果をもとにくぼ地の変遷をみると、古代以前と考えられる溝底部の堆積当時は、ヨシ属が生育するような比較的湿潤な環境であり、周辺の比較的乾燥したところではメダケ属などの竹笹類をはじめ、ススキ属やチガヤ属などの草本類が生育していたと推定されている。また、周辺にはイネ科やキク亜科などの雑草がみられ、樹木は少なくクリやナラ・カシ類などが孤立木として生育していたと想定されている。中世の遺物包含層では、ヨシ属が見られず、堆積環境が乾燥化したことが、花粉はあまり検出されなかったことからも示唆され、部分的に少量のイネが検出されることから、当時は周辺で稲作が行われていたことが窺える。桜島文明軽石（Sz－３，1471年）混層およびその上下層の堆積当時は、おおむね継続して稲作が行われていたと考えられている。

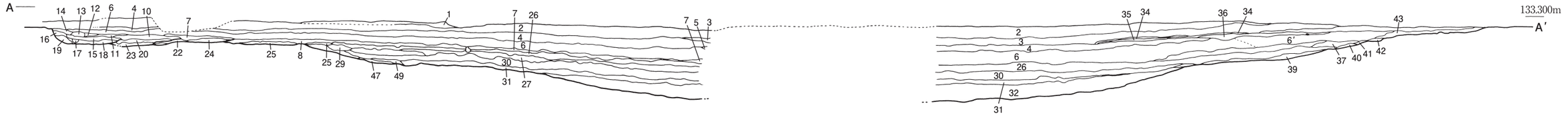
参考文献

『大島畠田遺跡』都城市文化財調査報告書第52集　都城市教育委員会　2000

図版５　くぼ地２　土層堆積状況

図版６　集中豪雨によるくぼ地冠水状況

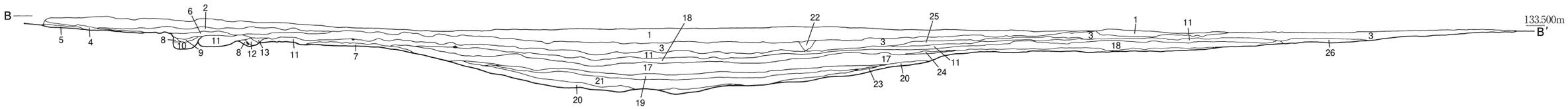
くぼ地２

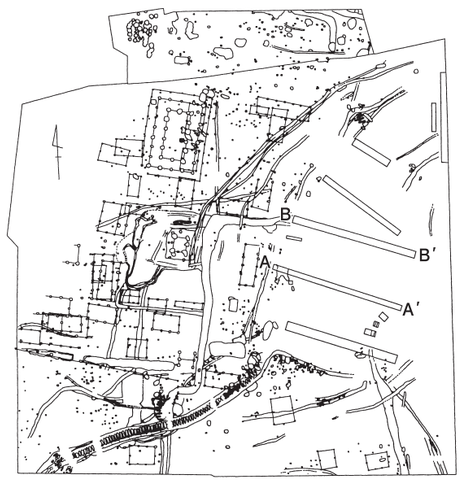


くぼ地－２

1	灰黄褐色土
2	灰黄褐色土　白色軽石粒　やや軟質でシルト質
3	褐灰色土　白色軽石粒　やや軟質でシルト質
4	灰黄褐色土　白色軽石粒　粘質　しまる
5	黒褐色シルト質土　白色軽石粒
6	黒褐色土　白色軽石粒
6'	暗褐色土　砂質土　軟質
7	暗褐色土　明褐色・黒褐色土混　８層と同一層か？
8	黒褐色土　７層と同一層か？
9	灰黄褐色土
10	灰黄褐色土　明褐色土ブロック混
11	にぶい黄褐色土　明褐色土ブロック混
12	暗褐色土　明褐色土ブロック混
13	にぶい黄褐色土　明褐色土ブロック混
14	黒褐色土　明褐色土ブロック混
15	灰黄褐色土
16	灰黄褐色土
17	黒褐色土
18	黒褐色土
19	黒褐色土
20	黒褐色土
21	黒褐色土
22	黒色土
23	にぶい黄褐色土
24	暗褐色土
25	黒褐色土　明褐色土ブロック混　やや粘質　しまる
26	黒褐色土　多量の明褐色土ブロック混　微量の白色軽石粒　やや粘質
27	暗褐色シルト質土　明褐色土ブロック混　やや粘質　しまる
28	黒褐色シルト質土　明褐色土ブロック混　やや粘質　しまる
29	黒褐色土　明褐色土ブロック混　やや粘質　しまる
30	黒褐色土　多量の明褐色土粒・ブロック混　やや粘質
31	黒褐色土　多量の明褐色土ブロック混　多量の粒子が混入　やや粘質しまる
32	黒色シルト質土
33	灰色粘質土　上部は黒褐色
33'	黒褐色粘質土
33"	にぶい黄褐色土
34	暗褐色土
35	黒褐色土
36	黒褐色土　多量の明褐色土ブロック混　やや粘質
37	暗褐色土
38	黒褐色土
39	黒褐色土　多量の明褐色土・赤褐色土・黒色土粒混　粘質土
40	黒褐色土
41	灰黄褐色土
42	にぶい黄褐色土
43	灰黄褐色土　砂質土
44	黒褐色シルト質土
45	黒褐色シルト質土
46	黒褐色シルト質土

くぼ地３





くぼ地－４

1	褐色の粘質土
2	１層よりやや赤みがかった褐色の粘質土
3	赤褐色の粘土層
4	橙色の粘質土
5	暗褐色の粘質土
6	黒褐色の粘質土
7	
8	暗褐色と橙色の粘質が混ざった層
9	暗褐色の中に細かい橙色粒が混ざった層
10	褐色と暗褐色のブロックの混ざった層
11	暗い灰色の粘質土
12	灰色がかった暗褐色土
13	12層よりやや橙色の強い灰色がかった暗褐色土
14	やや灰色がかった黒色土
15	７層のブロックの間に暗褐色の土の入った層
16	14層よりも灰色の強い黒色土（木の根が斜に入った痕？）
17	11層に橙色の粒の入った層
18	17層より粒の数が少ない層
19	17層よりも暗い褐色に少量の大きな明褐色粒混（上層のみに見られる）
20	灰色に褐色を混ぜた色の粘土層
21	真っ黒の粘土層
22	灰色の粘土層
23	20層よりも暗い灰色の粘土層
24	暗褐色に少量の橙色土粒混の粘土層
25	３層より暗く赤みの少ない粘土層
26	礫層

不明落込

1	暗褐色土　硬くしまるがパサパサしている　微量の炭化物・軽石遺物包含層
2	暗褐色土　１層より色調が明るい　やや粘質　１層より多量の炭化物
3	褐色土　少量の黒褐色土粒混　きめ細か　しまる
4	暗褐色土　少量の黒褐色土ブロック混　２層よりやや色調がうすい
5	黒褐色土・明褐色土・暗褐色土混　粘質　しまる

P7

1	暗褐色シルト質土
2	暗褐色シルト質土　多量の黒褐色粘質土ブロック・少量の黄褐色シルト質土ブロック混
3	暗褐色シルト質土　少量の黄褐色シルト質土混　少量の黒褐色粘質土ブロック
3'	暗褐色シルト質土　多量の黄褐色シルト質土ブロック　少量の暗褐色シルト質土ブロック・黒褐色粘質土ブロック
4	暗褐色シルト質土　多量の黄褐色シルト質土ブロック・少量の黒色土ブロック混
4'	暗褐色シルト質土　多量の黒褐色粘質土ブロック　少量の黄褐色シルト質土ブロック
5	暗褐色砂質土　多量の黄褐色シルト質大ブロック　少量の黒褐色粘質土ブロック

P50

1	暗褐色シルト質土　多量の黄褐色シルト質土粒・ブロック混　黒褐色粘質土ブロック
2	褐色シルト質土　少量の黒褐色粘質土ブロック混
3	暗褐色シルト質土　多量の黒褐色粘質土ブロック混　黄褐色シルト質土ブロック
4	暗褐色砂質土　円礫混

第10図　くぼ地土層断面図

第Ⅳ章　調査の成果

第１節　遺　構

調査によって検出された遺構は、ピット群および復元された掘立柱建物跡34棟、溝状遺構33条、土坑25基、道状遺構１条、区画施設として柵列が２基、区画溝１条、四脚門１基、池状遺構があるが、遺跡保存決定後、それ以上の調査を進めなかったことから、未掘のものが多数ある。そのため、ここでは調査によって判明した遺構の内容について記述を行う。また、出土遺物は、概略だけ触れ、詳細は遺物の章で述べる。

１　掘立柱建物跡

柱穴は削平を受けている北西隅と東側を除けば、まばらながら全体に分布する。建物はSB １とした大型建物をはじめ総数34棟を復元したが、径30㎝を超える柱穴で構成される建物群は調査区中央から北～西に30棟が分布する。また、調査区南端においては径20 ～ 30㎝の柱穴からなる掘立柱建物もみられる。柱穴はすべて円形を基調としており、検出面での柱痕跡の確認、その後1/4掘削を基本としながら埋土の状況を記録した。柱痕跡がみられた柱穴については、柱掘り方の床面に粘質土を敷き、柱を建てた状況がうかがえるものや柱掘り方床面に柱の痕跡（柱のあたり）が確認できるものがある。礎石や明確な根固め石などは確認できなかった。また、遺物には土師器甕・坏・皿、高台付埦、黒色土器、須恵器甕・坏、緑釉、越州窯系青磁、布痕土器、土錘、石鍋があり、ほとんどが柱穴の埋土中から出土している。（第34・35図）

掘立柱建物の平面図では、直接重複している遺構については表現しており、柱筋に並んでいる柱穴についても記載している。柱間寸法については、柱痕跡平面中央で心々距離を計測して載せている。柱痕跡不明なものについては柱掘り方中央で計測している。

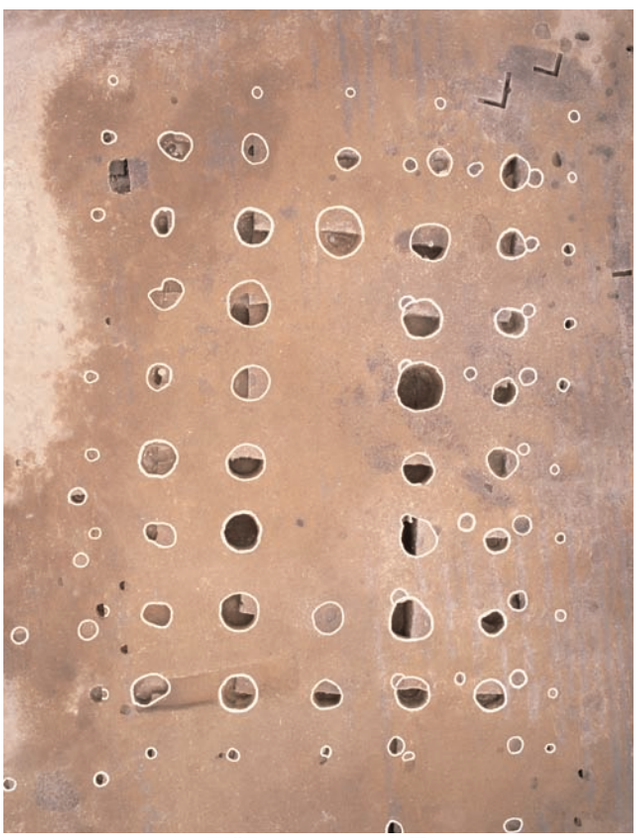
建物についての計測値については表を参照にされたい。（表１～３）

SB １（第11 ～ 15図）

SB １は、本遺跡最大の規模を誇る掘立柱建物で、遺跡の北端部、西側のやや高くなった箇所（削平部分）から東側に緩やかに傾斜すると想定される位置に形成されている。SB10・SB11を切る。建物は２間×５間の建物を身舎（面積：66.75㎡）とし、四面廂（面積182.01㎡）がつき、さらに孫廂を有する。建物は柱痕跡で計測した場合、身舎が11.92m×5.6m、孫廂では20.3m×14.3m（面積290.29㎡）と非常に大型となる。柱穴掘り方は円形を基本とするが、身舎においては長径1.4～0.96m、短径1.28～0.83m、深さ1.23～0.39mで、径、深さとも一定ではなく、柱痕跡でも径0.41 ～ 0.26m、深さ1.18 ～ 0.16mを測る。廂も柱穴掘り方は円形を基本とするが、長径0.64 ～ 1.10m、短径0.58 ～ 0.97m、深さ0.22 ～ 0.64m、柱痕跡径0.20 ～ 0.42m、深さ0.12 ～ 0.64m、孫廂長径0.23 ～ 0.62m、短径0.22 ～ 0.47m、深さ0.07 ～ 0.28m、柱痕跡径0.08 ～ 0.22m、深さ0.08 ～ 0.28mを測る。身舎と同様に規格性は認められない。廂部や孫廂部の柱穴掘り方についても同様だが、次第に掘り方が小さく、浅くなる。身舎や廂の柱痕跡はほぼ一直線上に並ぶが、孫廂について直線からずれている場合が多くみられる。

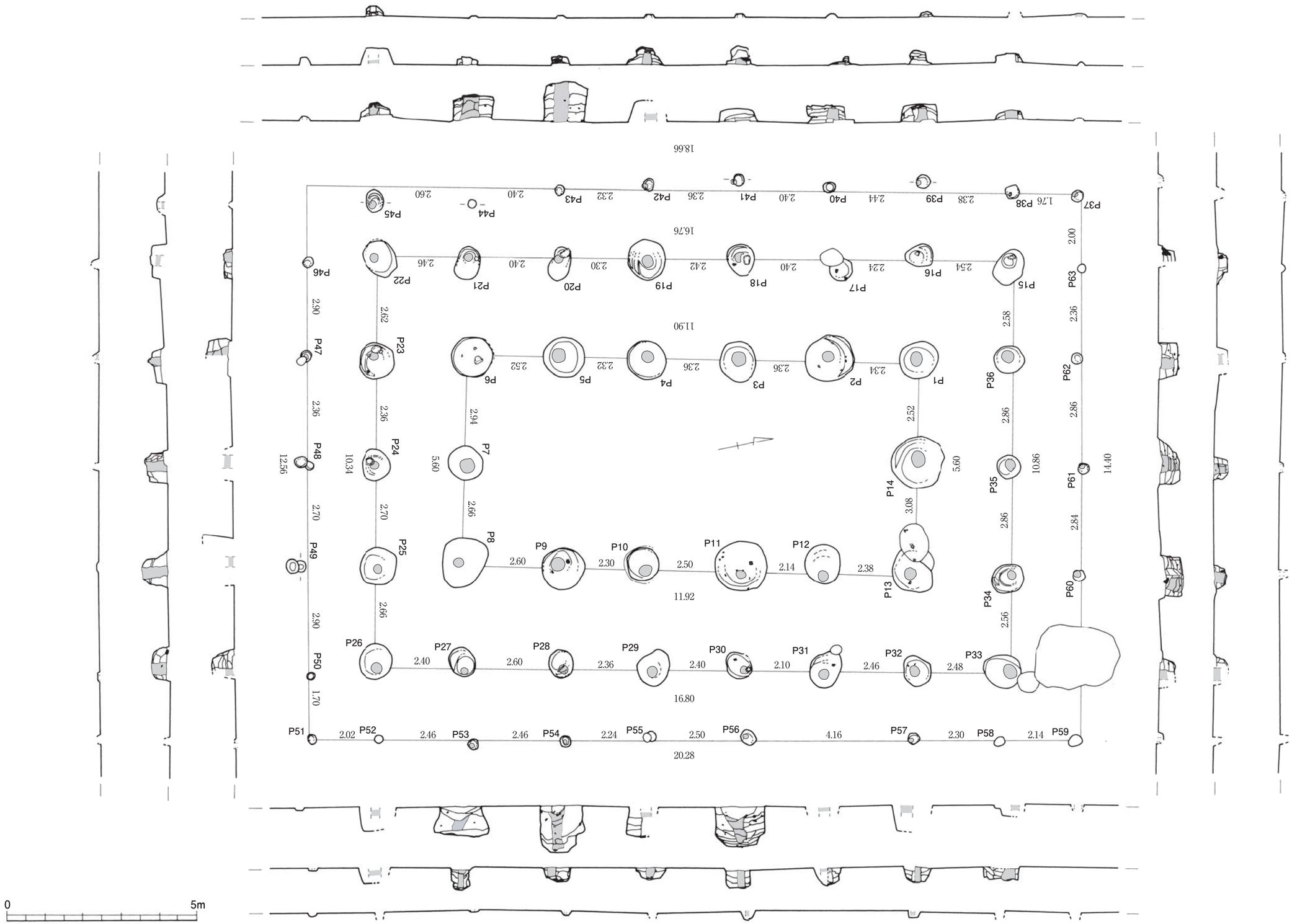
柱掘り方はまず、円形に掘り、柱を立て周囲に土を入れながら固められているが、埋土には暗褐色シルト質土を主体に明黄褐色粘質土や黒褐色土などを混ぜている。柱下部は、地山の礫層まで達しているものや掘り方下部を固めて柱を設置する方法がとられ、柱穴土層を観察すると柱が抜き取られたり（８・11）、そのままであったりした状態が想定され、１・13では柱を立て替えた可能性も考えられる。

図版７　SB １近景（北より）

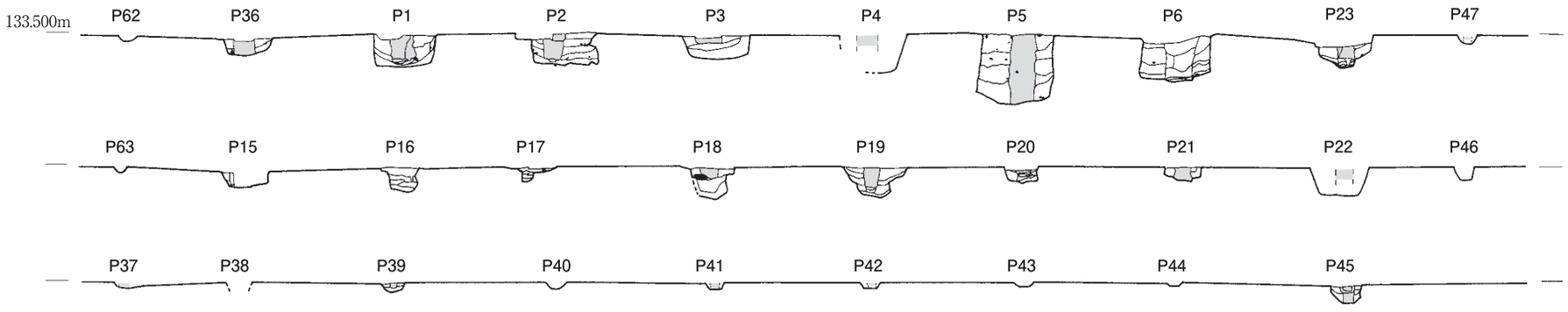


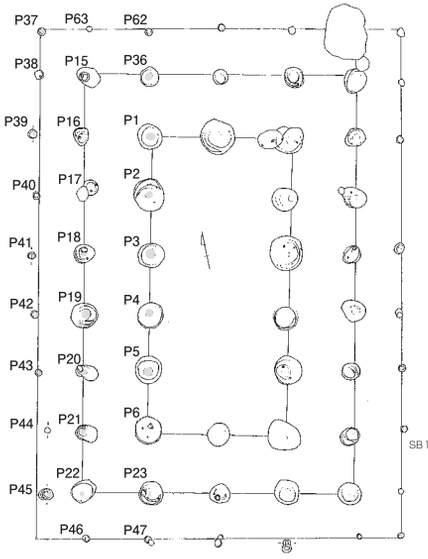
図版８　SB １全景

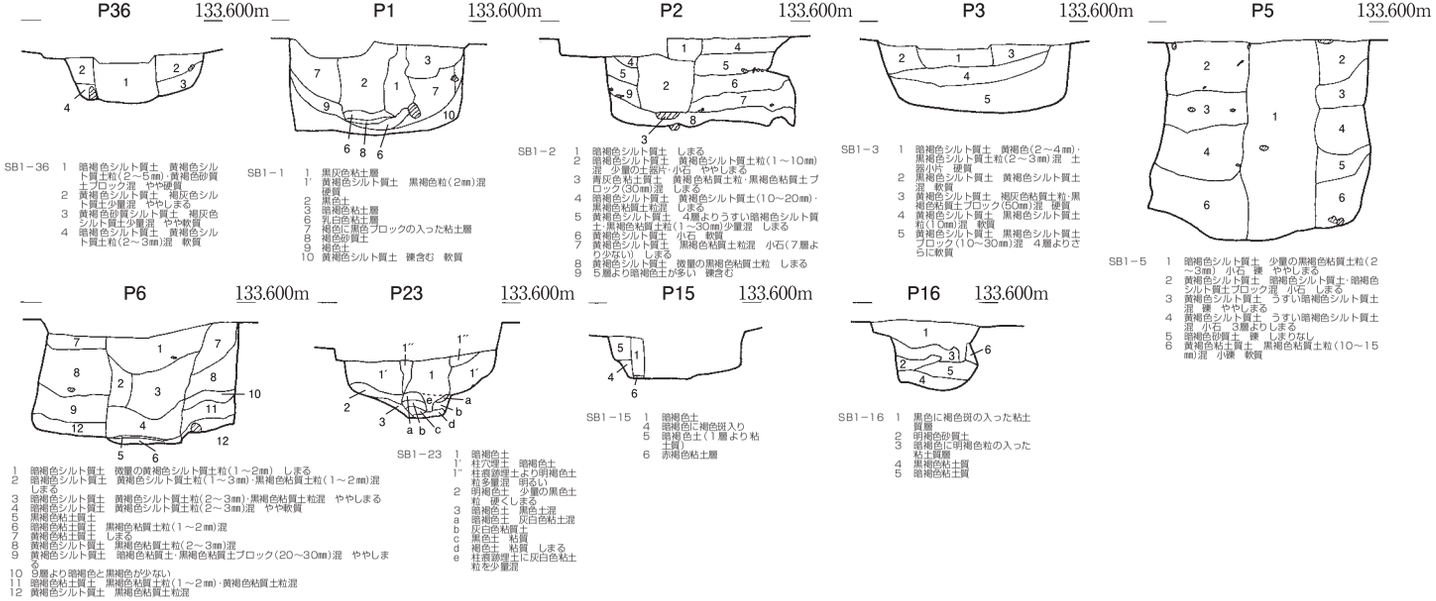
図版９　柱穴の状況


18.66
16.76
11.90
11.92
16.80
20.28
14.40
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
P32
P33
P34
P35
P36
P37
P38
P39
P40
P41
P42
P43
P44
P45
P46
P47
P48
P49
P50
P51
P52
P53
P54
P55
P56
P57
P58
P59
P60
P61
P62
P63
0
5m

第11図　SB１実測図







SB1－36
1 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒(2～5㎜)・黄褐色砂質土ブロック混　やや硬質
2 黄褐色シルト質土　褐灰色シルト質土少量混　ややしまる
3 黄褐色砂質シルト質土　褐灰色シルト質土少量混　やや軟質
4 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒(2～3㎜)混　軟質

SB1－1
1 黒灰色粘土層
1' 黄褐色シルト質土　黒褐色粒(2㎜)混　硬質
2 黒色土
3 暗褐色粘土層
6 乳白色粘土層
7 褐色に黒色ブロックの入った粘土層
8 褐色砂質土
9 褐色土
10 黄褐色シルト質土　礫含む　軟質

SB1－2
1 暗褐色シルト質土　しまる
2 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒(1～10㎜)混　少量の土器片・小石　ややしまる
3 青灰色粘土質土　黄褐色粘質土粒・黒褐色粘質土ブロック(30㎜)混　しまる
4 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土(10～20㎜)・黒褐色粘質土粒混　しまる
5 黄褐色シルト質土　4層よりうすい暗褐色シルト質土・黒褐色粘質土粒(1～30㎜)少量混　しまる
6 黄褐色シルト質土　小石　軟質
7 黄褐色シルト質土　黒褐色粘質土粒混　小石(7層よりかなり少ない)　しまる
8 黄褐色シルト質土　微量の黒褐色粘質土粒　しまる
9 5層より暗褐色土が多い　礫含む

SB1－3
1 暗褐色シルト質土　黄褐色(2～4㎜)・黒褐色シルト質土粒(2～3㎜)混　土器小片　硬質
2 黒褐色シルト質土　黄褐色シルト質土混　軟質
3 黄褐色シルト質土　褐灰色粘質土粒・黒褐色粘質土ブロック(5㎝)混　硬質
4 黄褐色シルト質土　黒褐色シルト質土粒(1㎜)混　軟質
5 黄褐色シルト質土　黒褐色シルト質土ブロック(10～30㎜)混　4層よりさらに軟質

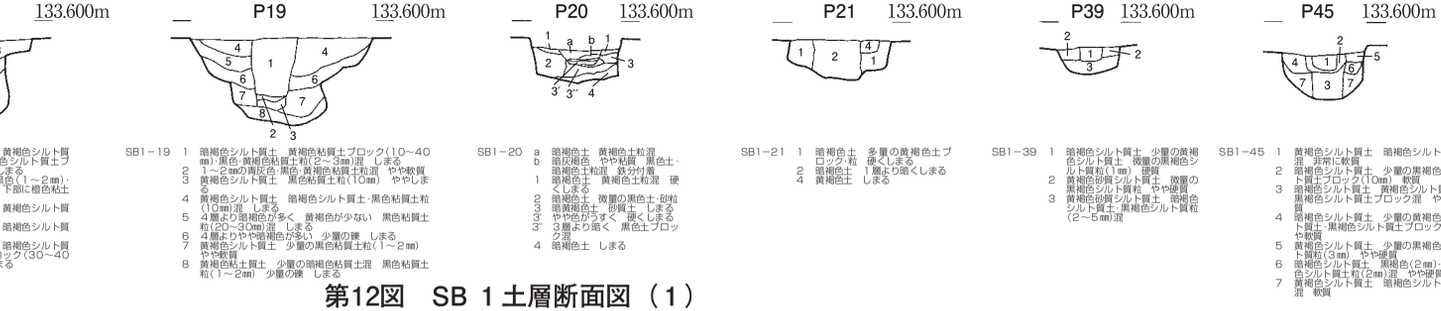
SB1－5
1 暗褐色シルト質土　少量の黒褐色粘質土粒(2～3㎜)　小石　礫　ややしまる
2 黄褐色シルト質土　暗褐色シルト質土・暗褐色シルト質土ブロック混　小石　しまる
3 黄褐色シルト質土　うすい暗褐色シルト質土混　礫　ややしまる
4 黄褐色シルト質土　うすい暗褐色シルト質土混　小石　3層よりしまる
5 暗褐色砂質土　礫　しまりなし
6 黄褐色粘土質土　黒褐色粘質土粒(10～15㎜)混　小礫　軟質

SB1－6
1 暗褐色シルト質土　微量の黄褐色シルト質土粒(1～2㎜)　しまる
2 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒(1～3㎜)・黒褐色粘質土粒(1～2㎜)混　しまる
3 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒(2～3㎜)・黒褐色粘質土粒混　ややしまる
4 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒(2～3㎜)混　やや軟質
5 黒褐色粘土質土
6 暗褐色粘土質土　黒褐色粘質土粒(1～2㎜)混
7 黄褐色粘土質土　しまる
8 黄褐色シルト質土　黒褐色粘質土粒(2～3㎜)混
9 黄褐色シルト質土　暗褐色粘質土・黒褐色粘質土ブロック(20～30㎜)混　ややしまる
10 9層より暗褐色と黒褐色が少ない
11 暗褐色粘土質土　黒褐色粘質土粒(1～2㎜)・黄褐色粘質土粒混
12 黄褐色シルト質土　黒褐色粘質土粒混

SB1－23
1 暗褐色土
1' 柱穴埋土　暗褐色土
1'' 柱痕跡埋土より明褐色土　粒多量混　明るい
2 明褐色土　少量の黒色土粒　硬くしまる
3 暗褐色土　黒色土混
a 暗褐色土　灰白色粘土混
b 灰白色粘質土
c 黒色土　粘質
d 褐色土　粘質　しまる
e 柱痕跡埋土に灰白色粘土粒を少量混

SB1－15
1 暗褐色土
4 暗褐色に褐色斑入り
5 明褐色土(1層より粘土質)
6 赤褐色粘土層

SB1－16
1 黒色に褐色斑の入った粘土質層
2 明褐色砂質土
3 暗褐色に明褐色粒の入った粘土質層
4 黒褐色粘土質
5 暗褐色粘土質



SB1－17
1 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色粘質土(2～5㎜)混　しまる
2 1層より黄褐色が多い
3 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土ブロック混
4 黄褐色シルト質土　暗褐色シルト質土混
5 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒(1～2㎜)・黒褐色粘質土粒(10㎜)混　しまる
6 黄褐色シルト質土　暗褐色シルト質土少量混　黒褐色粘質土粒(1～2㎜)混　しまる

SB1－18
1 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒(10㎜)・黄褐色シルト質土ブロック(40㎜)混　しまる
2 青灰色粘質土　黒色(1～2㎜)・黄褐色粘質土粒混　下部に橙色粘土層　やや軟質
3 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土混　しまる
4 黄褐色シルト質土　暗褐色シルト質土混
5 黄褐色シルト質土　暗褐色シルト質土・黒色粘質土ブロック(30～40㎜)混　4層よりしまる

SB1－19
1 暗褐色シルト質土　黄褐色粘質土ブロック(10～40㎜)・黒色・黄褐色粘質土粒(2～3㎜)混　しまる
2 1～2㎜の青灰色・黒色・黄褐色粘質土粒混　やや軟質
3 黄褐色シルト質土　黒色粘質土粒(10㎜)　ややしまる
4 黄褐色シルト質土　暗褐色シルト質土・黒色粘質土粒(10㎜)混　しまる
5 4層より暗褐色が多く　黄褐色が少ない　黒色粘質土粒(20～30㎜)混　しまる
6 4層よりやや暗褐色が多い　少量の礫　しまる
7 黄褐色シルト質土　少量の黒色粘質土粒(1～2㎜)　やや軟質
8 黄褐色粘土質土　少量の暗褐色粘質土混　黒色粘質土粒(1～2㎜)　少量の礫　しまる

SB1－20
a 暗褐色土　黄褐色土粒混
b 暗灰褐色　やや粘質　黒色土・暗褐色土粒混　鉄分付着
1 暗褐色土　黄褐色土粒混　硬くしまる
2 暗褐色土　微量の黒色土・砂粒
3 暗褐色土　砂質土　しまる
3' やや色がうすく　硬くしまる
3'' 3層より暗く　黒色土ブロック混
4 暗褐色土　しまる

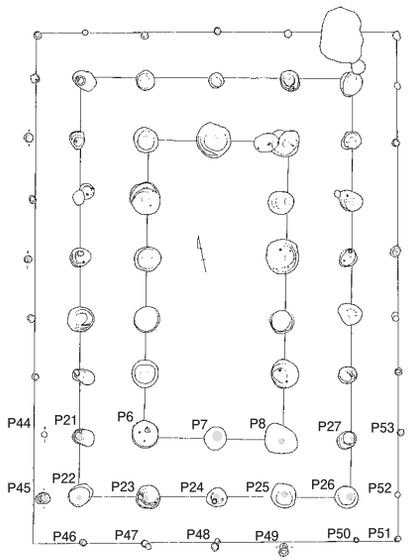
SB1－21
1 暗褐色土　多量の黄褐色土ブロック・粒　硬くしまる
2 暗褐色土　1層より暗くしまる
4 黄褐色土　しまる

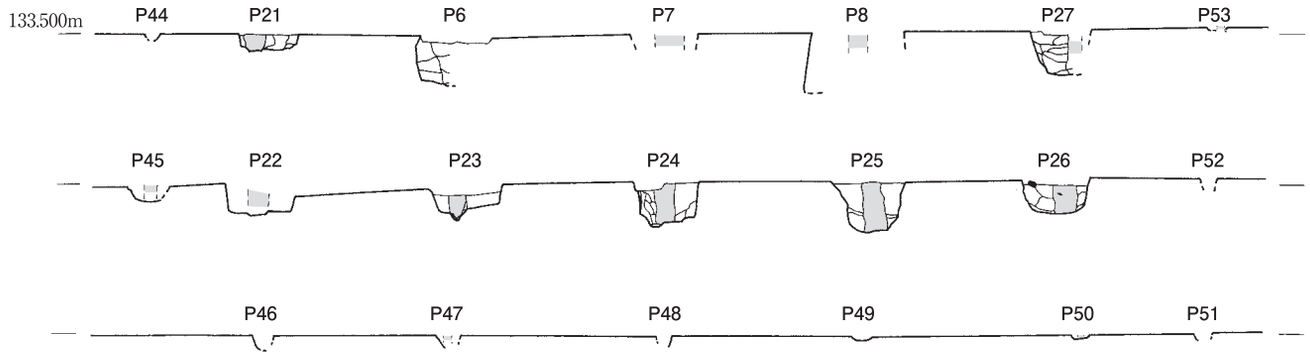
SB1－39
1 暗褐色シルト質土　少量の黄褐色シルト質土　微量の黒褐色シルト質粒(1㎜)　硬質
2 黄褐色砂質シルト質土　微量の黒褐色シルト質粒　やや硬質
3 黄褐色砂質シルト質土　暗褐色シルト質土・黒褐色シルト質粒(2～5㎜)混

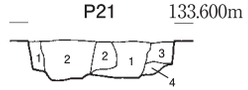
SB1－45
1 黄褐色シルト質土　暗褐色シルト質土混　非常に軟質
2 暗褐色シルト質土　少量の黒褐色シルト質ブロック(10㎜)　軟質
3 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色シルト質土ブロック混　やや軟質
4 暗褐色シルト質土　少量の黄褐色シルト質土・黒褐色シルト質土ブロック　やや軟質
5 黄褐色シルト質土　少量の黒褐色シルト質粒(3㎜)　やや硬質
6 暗褐色シルト質土　黒褐色(2㎜)・黄褐色シルト質土粒(2㎜)混　やや硬質
7 黄褐色シルト質土　暗褐色シルト質土混　軟質

0 1m

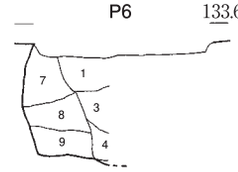
第12図　SB 1 土層断面図（1）



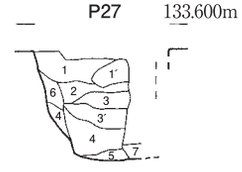




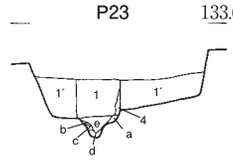
SB1－21　1　暗褐色土　多量の黄褐色土ブロック･粒　硬くしまる
2　暗褐色土　1層より暗くしまる
3　褐色土　黄褐色土混　粘質　しまる
4　黄褐色土　しまる



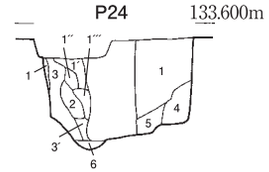
SB1－6　1　暗褐色シルト質土　微量の黄褐色シルト質土粒(1～2㎜)　しまる
3　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒(2～3㎜)･黒褐色粘質土粒混　ややしまる
4　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒(2～3㎜)混　やや軟質
6　暗褐色粘質土　黒褐色粘質土粒(1～2㎜)混
7　黄褐色粘土質土　しまる
8　黄褐色シルト質土　黒褐色粘質土粒(2～3㎜)混
9　黄褐色シルト質土　暗褐色粘質土･黒褐色粘質土ブロック(20～30㎜)混　ややしまる



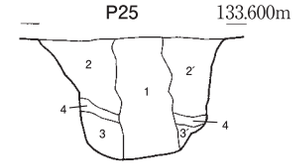
SB1－27　1　暗褐色土　黒色土粒混
1'　暗褐色土　黒色土粒混　しまる
2　暗褐色土　1層より明褐色土粒･黒色土が少ない
3　暗褐色土　2層より強い　多量の黒色土ブロック　やや粘質
3'　3層より明るく黒色土少ない
4　暗褐色土　1層に類似　1層より砂質が強い
4'　4層よりやや明るい
5　暗褐色砂質土　4層より強い
6　明黄褐色土　少量の暗褐色土ブロック･黒色土粒(地山に近い)
7　灰黄褐色土　灰色粒･粘質土混　しまる



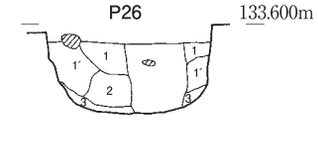
SB1－23　1　暗褐色土
1'　柱穴埋土　暗褐色土
4　1層より暗くしまる
a　暗褐色土　灰白色粘土混
b　灰白色粘質土
c　黒色土　粘質
d　褐色土　粘質　しまる
e　柱痕跡埋土に灰白色粘土粒を少量混



SB1－24　1　暗褐色土　多量の黒色土･明褐色土･暗褐色土　しまる
1'　1層より黒色土が少ない
1''　明褐色土を含む
1'''　1層より全体に明るく明褐色土を多く含む
2　褐色土
3　暗褐色土　1層と類似　1層より黒褐色土･明褐色土粒が少ない
3'　3層より強い
4　明褐色土　黒色土ブロック混
5　暗褐色土　明褐色土ブロック混
6　黒色土ブロック　明褐色ブロック混　やや粘質



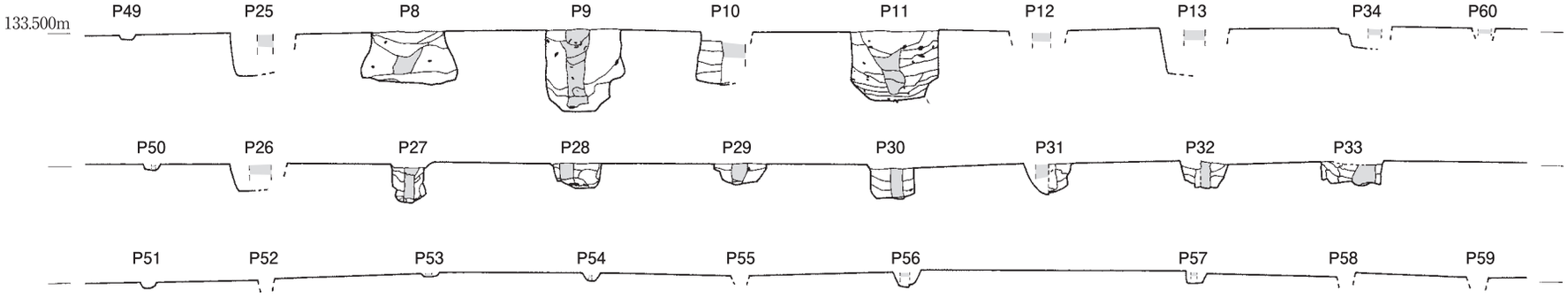
SB1－25　1　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒(10㎜内)･黒褐色シルト質土ブロック混(10～30㎜)　非常に硬質
2　黄褐色シルト質土　黒褐色シルト質土ブロック(10～40㎜)混　非常に硬質
2'　2層より黒褐色が少ない
3　黄褐色シルト質土　黒褐色シルト質土ブロック(10～15㎜)混　やや硬質
3'　3層より黒褐色が少ない
4　円礫(10～30㎜)混

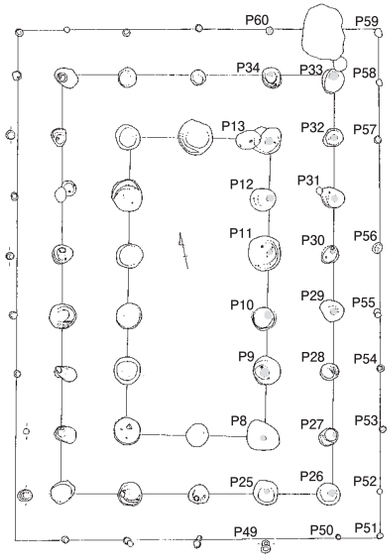


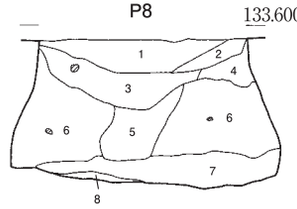
SB1－26　1　暗褐色土　黄褐色土混　硬くしまる
1'　1層より黒褐色土を多く含む
2　明褐色土　きめ細か
3　褐色土を多く含む

0　1m

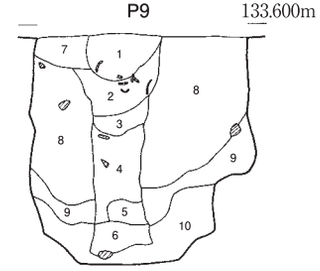
第13図　SB 1 土層断面図（2）



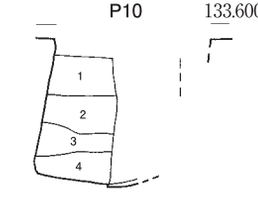




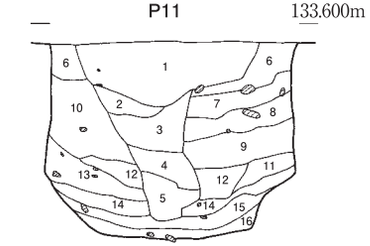
SB1－8
1 暗褐色シルト質土　明黄褐色（2～10㎜）・黒褐色シルト質土粒（3～5㎜）・黒褐色シルト質土ブロック混　非常に硬質
2 黄褐色シルト質土　明黄褐色シルト質土・黒褐色シルト質土粒（2～10㎜）混　硬質
3 1層と同じ　1層より黒褐色が多い　非常に硬質
4 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色シルト質土ブロック（10～30㎜）混　硬質
5 黄褐色シルト質土　褐灰色シルト質土・黒褐色シルト質土粒（3～10㎜）混　硬質
6 黄褐色シルト質土　黒褐色シルト質土ブロック（20～50㎜）混　硬質
7 黄褐色砂質シルト質土　ややしまる
8 黒褐色シルト質土　しまる



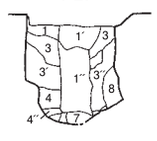
SB1－9
1 暗褐色シルト質土　少量の黄褐色シルト質土粒・黒褐色粘質土粒　土器　非常に硬質
2 1層より黄褐色と黒褐色土粒が多い　土器　小石　硬質
3 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色粘質土粒混　しまる
4 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質粒・黒褐色粘質土粒混　土器や石含む　2層よりやや軟質
5 黄褐色シルト質土　黒褐色粘質土粒混　しまる
6 暗褐色シルト質土　少量の黒褐色粘質土粒・黄褐色シルト質土粒　しまる
7 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土混　非常に硬質
8 黄褐色シルト質土　暗褐色シルト質土・黒褐色粘質土ブロック（20～40㎜）混　石　しまる
9 黄褐色粘土質土　黒褐色粘質土ブロック（30～40㎜）混
10 黄褐色粘土質土　黒褐色粘質土ブロック（20～40㎜）混　多量の小石



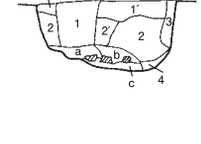
SB1－10
1 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒（10～20㎜）混　しまる　少量の小石
2 黄褐色シルト質土　少量の暗褐色シルト質土　ややしまる
3 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒（10～20㎜）混
4 黄褐色シルト質土　暗褐色シルト質土・黒褐色粘質土ブロック（10㎜）混　しまる



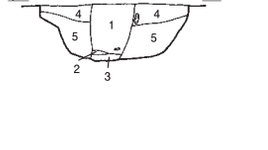
SB1－11
1 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒・黒褐色粘質土粒混　少量の小礫　土器片　しまる
2 1層よりやや明るい暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒・黒褐色粘質土粒混　しまる
3 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色粘質土粒混　少量の礫　しまる
4 2層より黒褐色土粒が多い
5 3層と類似
6 3層と類似　礫含む
7 黄褐色シルト質土　暗褐色シルト質土・黒褐色シルト質土粒混　少量の小礫
8 7層より黒褐色粒が多い　礫　土器片　しまる
9 8層よりやや軟質　少量の小礫
10 6層より黒褐色土粒が多い　少量の小礫
11 黄褐色シルト質土　少量の黒褐色シルト質土　しまる
12 11層より黒褐色土多い　しまる
13 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土ブロック・黒褐色粘質土ブロック混　多量の小礫・土器片
14 黒褐色粘土質土　黄褐色粘質土ブロック混
15 黄褐色粘土質土　硬きむ
16 14層より黄褐色が多い



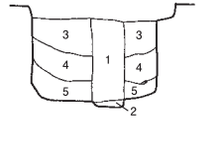
SB1－27
1 暗褐色土　黒色土粒混
1' 暗褐色土　黒色土粒混　しまる
1'' 1層より明るい
3 暗褐色土　2層より暗い　多量の黒色土ブロック　やや粘質
3' 3層より明るく黒色土少ない
3'' 暗褐色土　やや粘質　しまる
4 暗褐色土　1層に類似　1層より砂質が強い
4' 4層よりやや明るい
4'' 4層よりしまり明るい
7 灰黄褐色土　灰色粒・粘質土混　しまる
8 暗褐色土　黒色土ブロック混



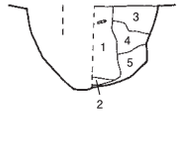
SB1－28
1 暗褐色土　黄褐色・黒色土粒混
1' 暗褐色土　黄褐色・黒色土粒混　硬くしまる
2 黒褐色土　黄褐色土混　しまる
2' 2層より軟質　暗褐色土混
3 褐色土　軟質
4 黄褐色土　やや粘質　褐色土粒混
a 黒褐色土　暗褐色土混　粘質　しまる
b 暗褐色土　多量の黄褐色土粒
c b層より色がうすい　しまる



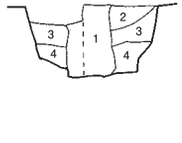
SB1－29
1 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒（2～10㎜）混
2 褐灰色粘土質土　黒褐色（0.5㎜）・黄褐色粘質土粒（0.5㎜）混
3 青灰色粘土質土　黄褐色・橙色シルト質土混　黒褐色粘質土（10～20㎜）混　しまる
4 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色粘質土ブロック混　しまる
5 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色粘質土ブロック（20～30㎜）混　4層よりしまりなく黒褐色多い



SB1－30
1 暗褐色シルト質土　少量の黄褐色シルト質土ブロック（20～40㎜）・黒褐色粘質土ブロック　ややしまる
2 2～5㎜の青灰色・黒褐色・黄褐色粘土質粒混
3 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質ブロック（20～40㎜）・黒褐色粘質土ブロック混
4 3層に30～50㎜の石を含む
5 黄褐色粘土質土　少量の黒褐色粘質土粒（10～20㎜）　暗褐色シルト質土



SB1－31
1 暗褐色シルト質土　少量の黄褐色シルト質土粒（10㎜）　しまる
2 青灰色・暗褐色粘質土ブロック混　しまる
3 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒（1～30㎜）・黒褐色粘質土粒（20㎜）混　しまる
4 3層より黄褐色が多い
5 3層より暗褐色が多く黒褐色が少ない

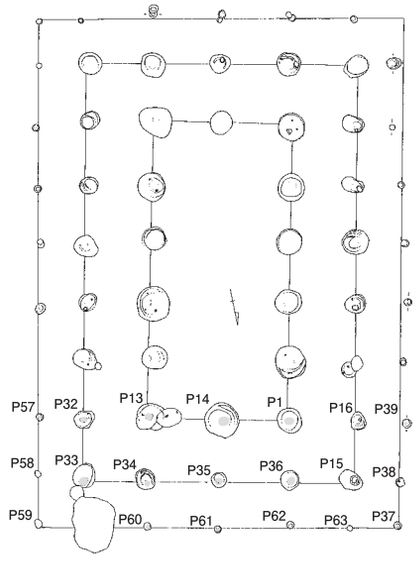


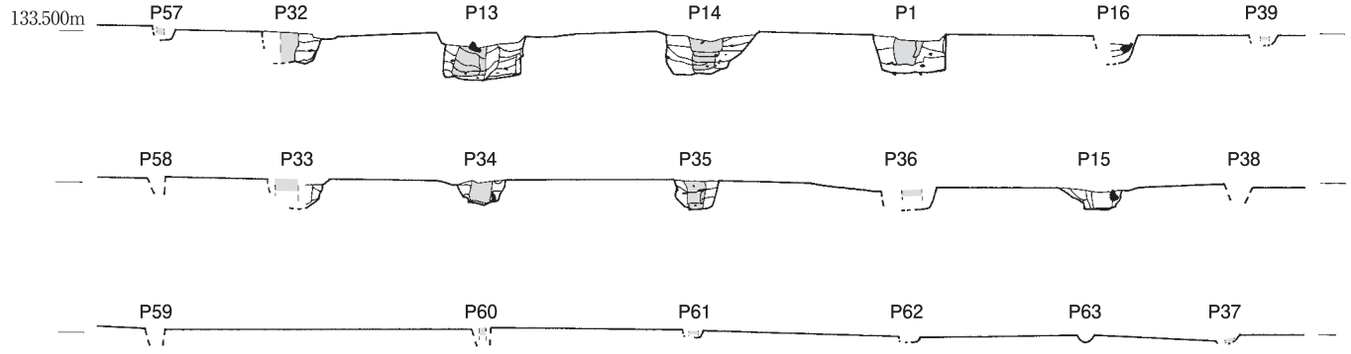
SB1－32
1 黒色・黄褐色粘質土ブロック
2 暗褐色・黄褐色土ブロック混　土
3 明褐色・暗褐色土ブロック混　入の粘土質層
4 褐色土にうすい黒色混入土

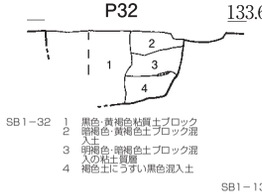
SB1－33
1 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒（2～5㎜）・黄褐色シルト質土ブロック（15㎜）・黒褐色シルト質土粒（2～3㎜）・黒褐色シルト質土ブロック（15㎜）混　土器片　硬質
2 淡黄色シルト質土　暗褐色シルト質土混　底部に橙色の筋　ややしまる
3 黄褐色シルト質土　暗褐色シルト質土・黒褐色シルト質土ブロック（20～40㎜）混　硬質
4 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色シルト質土ブロック（15～40㎜）混　やや硬質
5 黄褐色シルト質土　暗褐色シルト質土・黒褐色シルト質土粒（3～7㎜）混　やや硬質
6 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土混　やや硬質
7 暗褐色シルト質土（ややうすい暗褐色）　黄褐色シルト質土・黒褐色シルト質土ブロック（10～30㎜）混　やや硬質
8 暗褐色シルト質土（ややうすい暗褐色）　少量の暗褐色シルト質土　黒褐色シルト質土ブロック（10～20㎜）混　やや硬質
9 黄褐色シルト質土（ややうすい暗褐色）　少量の暗褐色シルト質土　黒褐色シルト質土ブロック（10～20㎜・8層より黒褐色が少ない）混　硬質
10 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒（10～20㎜）・黒褐色シルト質土ブロック（30～50㎜）混　ややしまる
11 暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色シルト質土ブロック（30㎜）混　やや硬質

0　1m

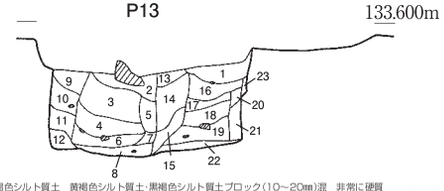
第14図　SB 1 土層断面図（3）



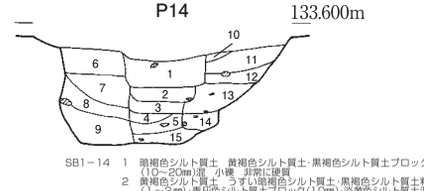




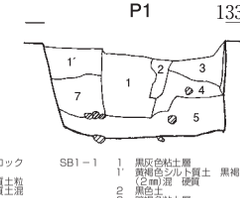
SB1－32　1　黒色・黄褐色粘質土ブロック
2　暗褐色・黄褐色土ブロック混入土
3　明褐色・暗褐色土ブロック混入の粘土質層
4　褐色土にうすい黒色混入土



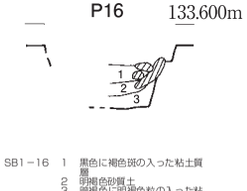
SB1－13　1　土坑　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色シルト質土ブロック(10～20㎜)混　非常に硬質
2　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土ブロック(10～20㎜)・黒褐色シルト質土粒(2～3㎜)・黒褐色シルト質土ブロック(20～30㎜)混　硬質
3　暗褐色シルト質土　多量の黄褐色(20～30㎜)・黒褐色シルト質土ブロック(10～50㎜)　やや硬質
4　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒(2～4㎜)混　少量の黒褐色シルト質土粒(5㎜)　硬質
5　4層と類似　4層より黒褐色が多く少し軟質
6　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒(5～10㎜)・黒褐色シルト質土ブロック(10～40㎜)混　礫　少量の土器　ややしまる
7　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒(2～3㎜)混　軟質
8　黄褐色シルト質土　黒褐色シルト質土ブロック(10～20㎜)混　ややしまる
9　暗褐色シルト質土　黒褐色(5～10㎜)・黄褐色シルト質土粒(3～5㎜)混　硬質
10　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒(2～5㎜)・黒褐色シルト質土ブロック(30㎜)混　軟質
11　6層と類似　6層より黒褐色が多い
12　オリーブ黄色シルト質土　黄褐色砂質シルト質土ブロック(30㎜)・黒褐色シルト質土粒(3㎜)混　軟質
13　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色シルト質土ブロック(30～40㎜)混　硬質
14　うすい暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色シルト質土粒(1～5㎜)・黒褐色シルト質土ブロック(20㎜)混　硬質
15　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色シルト質土粒(1～3㎜)混　やや硬質
16　黄褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色シルト質土ブロック(15～30㎜)混　ややしまる
17　暗褐色シルト質土　黒褐色シルト質土ブロック(3㎜)混　やや硬質
18　16層より黒褐色が多い
19　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色シルト質土ブロック(30㎜)混　軟質
20　暗褐色シルト質土　軟質
21　暗褐色シルト質土　黄褐色(10㎜)・黒褐色シルト質土ブロック(20㎜)混　軟質
22　黄褐色シルト質土　黒褐色シルト質土ブロック(50㎜)混　やや軟質
23　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色シルト質土ブロック(50㎜)混　やや軟質



SB1－14　1　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色シルト質土ブロック(10～20㎜)混　小礫　非常に硬質
2　黄褐色シルト質土　うすい暗褐色シルト質土・黒褐色シルト質土粒(1～2㎜)・青灰色シルト質土ブロック(10㎜)・淡黄色シルト質土混　硬質　小礫
3　黄褐色砂質シルト質土　褐灰色・淡黄色砂質シルト質土・黒褐色シルト質土ブロック(10～30㎜)混　硬質
4　暗褐色シルト質土　橙色シルト質土少量混　黒褐色シルト質土粒(1～8㎜)混　硬質
5　暗褐色シルト質土　淡黄色シルト質土・黒褐色シルト質土ブロック(10㎜)混　硬質
6　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色シルト質土粒(2～10㎜)混　非常に硬質
7　黄褐色シルト質土　褐灰色・黒褐色シルト質土粒(1～3㎜)・黒褐色シルト質土ブロック(10～30㎜)混　硬質
8　褐灰色シルト質土　黄褐色・暗褐色シルト質土・黒褐色シルト質土ブロック(10～30㎜)混　硬質　礫
9　黄褐色シルト質土　暗褐色シルト質土少量混　黒褐色シルト質土ブロック(10～40㎜)混　非常に硬質
10　暗褐色シルト質土　黒褐色シルト質土粒(2～5㎜)混　非常に硬質
11　黄褐色シルト質土　黒褐色シルト質土ブロック(10㎜)混　硬質
12　黄褐色シルト質土　暗褐色・黒褐色シルト質土(10～30㎜)混　硬質
13　7層と類似　礫含む
14　8層と類似
15　9層と類似　9層よりやや軟質　礫含む



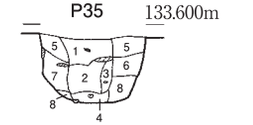
SB1－1　1　黒灰色粘土層
1'　黄褐色シルト質土　黒褐色粒(2㎜)混　硬質
2　黒色土
3　暗褐色粘土層
4　褐色粘土層
5　黒色と褐色の厚さ数ミリの互層
7　褐色に黒色ブロックの入った粘土層



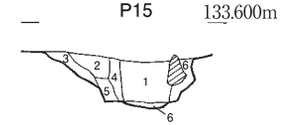
SB1－16　1　黒色に褐色斑の入った粘土質層
2　明褐色砂質土
3　明褐色に明褐色粒の入った粘土質層

SB1－33　1　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒(2～5㎜)・黄褐色シルト質土ブロック(15㎜)・黒褐色シルト質土粒(2～3㎜)・黒褐色シルト質土ブロック(15㎜)混　土器片　硬質
2　淡黄色シルト質土　暗褐色シルト質土混　底部に橙色の筋　ややしまる
3　黄褐色シルト質土　暗褐色シルト質土・黒褐色シルト質土ブロック(20～40㎜)混　硬質
4　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色シルト質土ブロック(15～40㎜)混　やや硬質

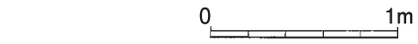
B1－34　1　暗褐色シルト質土　黄褐色(2㎜)・黒褐色シルト質土粒(2～5㎜)混　土器片　硬質
2　暗褐色粘質土　青灰色粘質土混　鉄分　軟質
3　暗褐色シルト質土　黒褐色シルト質土粒(2㎜)混　ややしまる
4　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色シルト質土粒(2～3㎜)・黒褐色シルト質土ブロック(10～20㎜)混　硬質
5　暗褐色シルト質土　やや軟質



SB1－35　1　暗褐色シルト質土　黄褐色(2～3㎜)・黒褐色シルト質土粒(2～3㎜)混　非常に硬質
2　1層と類似　1層よりやや軟質
3　1層と類似　2層より軟質
4　暗褐色シルト質土　青灰色シルト質土・黒褐色シルト質土粒(10㎜)混　やや軟質
5　1層と類似　1層より黄褐色・黒褐色が多い
6　黄褐色シルト質土　褐灰色シルト質土・黒褐色シルト質土粒(2～10㎜)混　硬質
7　黄褐色シルト質土　暗褐色シルト質土・黒褐色シルト質土粒(2～3㎜)・黒褐色シルト質土(10～30㎜)混　硬質
8　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質粒(2～4㎜)混　やや硬質



SB1－15　1　暗褐色土
2　褐色土(粘土質)
3　褐色に黒色斑入り
4　明褐色に褐色斑入り
5　明褐色土(1層より粘土質)
6　赤褐色粘土層



第15図　SB 1土層断面図（4）

遺構番号	間数	庇	方向	桁（m）				梁（m）				方位	面積(㎡)			時期	重複関係	備考
				実長	実長(庇含)	柱間	平均柱間	実長	実長(庇含)	柱間	平均柱間		身舎	庇	総面積			
SB1	5×2	四面	南北	11.92	16.76	2.10～2.60	2.38	5.6	10.86	2.36～2.86	2.80	N－12.5°－E	66.75	182.01	290.29	Ⅲ	SB10・11・12・26	孫庇
SB2	3×2	一面庇	南北	7.46		2.26～2.56	2.49	4.36	6.36	1.95～2.22	2.18	N－14.5°－E	30.76	14.79	45.55	Ⅳ	SE9に切られる	
SB3	5×2		南北	6.46	10.96	2.02～2.36	2.15	4.70		2.08～2.62	2.35	N－7°－E	48.47		48.47	Ⅰ	SB4・13・34	束柱あり
SB4	4×2		南北	9.42		1.90～2.66	2.35	4.45		2.05～2.33	2.23	N－13°－E	38.71		38.71	Ⅳ	SB3・13・34	
SB5	4?×2		東西	（　）		(2.26～2.54)		(4.24)		(1.96～2.28)	(2.12)	E－13.5°－S				Ⅲ	SB9・13　SE10	西側削平
SB6	3×2		東西	6.94		2.18～2.42	2.31	4.00		1.92～2.06	2.00	E－13.5°－S	27.50		27.50	Ⅲ	SB14　SE6を切る	
SB7	2×2		東西	4.36		2.12～2.24	2.18	3.10		1.46～1.64	1.55	E－10°－S	13.41		13.41	Ⅳ	SE8	
SB8	3×2		東西	6.28		2.00～2.18	2.09	3.80		1.66～2.14	1.90	E－11°－S	23.86		23.86	Ⅱ		
SB9	4×2		東西	9.30		2.16～2.46	2.35	3.52		1.38～1.94	1.76	E－7°－S	31.77		31.77	Ⅳ	SB5・14　SE10	束柱あり
SB10	3×2		南北	6.42		1.98～2.26	2.14	3.98		1.90～2.08	1.99	N－11°－E	25.29		25.29	Ⅱ	SB1に切られる	
SB11	2×2		南北	5.02		2.42～2.60	2.51	3.82		1.84～1.96	1.91	N－11°－E	18.97		18.97	Ⅱ	SB1に切られる	
SB12	3×1		南北	6.84		2.00～2.60	2.28	3.98		3.76～3.98	3.98	N－11°－E	26.58		26.58	Ⅱ	SB1　SE9	
SB13	2×1		南北	4.32		2.00～2.26	4.32	3.14		2.44～3.14	3.14	N－7°－E	11.91		11.91		SB4・9　SE10	
SB14	4×2		東西	9.56		2.16～2.50	2.39	4.69		2.04～2.42	2.35	E－10°－S	42.68		42.68	Ⅱ	SB6およびSE10に切られる	
SB15	4?×2?		南北	（　）		(2.20～2.64)		(3.14)		(1.32～1.82)	(1.57)	E－10°－S						西側削平
SB16	5×2		南北	(9.64)		(0.88～2.48)	1.93	(3.46)		(1.70～1.76)	(1.73)	N－13°－E	(33.35)		(33.35)	Ⅲ		
SB17	4×2		東西	8.10		1.84～2.14	2.03	3.74		1.54～2.20	1.87	E－10.5°－S	30.21		30.21	Ⅲ	SE1に切られる	
SB18	2×1		東西	4.36		1.98～2.20	2.18	3.74		3.66～3.74	3.74	N－7.5°－W	15.50		15.50	Ⅴ	SE23	
SB19	4×1		南北	9.26		1.82～2.78	2.32	3.76		3.68～3.76	3.76	N－14.5°－E	34.33		34.33	Ⅳ	SE9　SE28	
SB20	3×2		東西	7.20		2.32～2.54	2.40	3.36		1.64～1.72	1.68	E－11°－S	24.23		24.23	Ⅱ	SE4・SE5に切られる	
SB21	3×2		東西	5.04		1.46～3.18	1.64	3.66		1.66～2.00	1.83	E－7°－W	18.22		18.22	Ⅴ	SC18	
SB22	2×2		南北	6.04		2.88～3.16	3.02	5.06		2.36～2.70	2.53	N－8°－W	30.57		30.57	Ⅴ	SE15	
SB23	6×2		東西	12.58		1.86～2.46	2.10	3.84		1.76～2.08	1.92	E－13°－S	46.92		46.92	Ⅱ	SB24・25　SE4・5	
SB24	3×1		南北	6.36		1.98～2.32	2.12	3.60		3.60	3.60	N－11.5°－E	22.39		22.39	Ⅲ	SB23　SE4・5	
SB25	2×1		東西	4.26		1.98～2.28	2.13	2.16		2.12～2.16	2.16	E－11.5°－S	9.09		9.09	Ⅲ	SB23	
SB26	3×2		東西	6.30		2.00～4.20	2.10	4.04		1.96～2.08	2.02	E－7°－S	25.25		25.25	Ⅰ	SB1・27	
SB27	4×2		東西	6.80		1.08～2.32	1.70	4.04		1.84～2.20	2.02	E－15°－S	26.54		26.54	Ⅳ	SB26	
SB28	2×2		南北	5.00		2.34～5.00	2.50	2.68		1.32～1.36	1.34	N－11.5°－E	13.40		13.40	Ⅱ		
SB29	4?×1?		東西	(8.00)		(1.70～2.70)		(2.58)		(2.58)	2.58	E－10.5°－S					SE9に切られる　池状遺構	
SB30	3×1		東西	6.50		2.04～2.34	1.62	1.50		1.38～1.50	1.50	E－8.5°－S	9.40		9.40	Ⅰ		
SB31	2×2	総柱	東西	(4.30)		2.00～2.30	2.15	(3.22)		(1.52～1.76)	(1.61)	N－7°－E	(13.84)		(13.84)	Ⅰ	SE8に切られる　池状遺構	
SB32	2×2	総柱？	東西	4.84		1.86～2.52	2.42	4.32		1.90～2.32	2.16	E－6.5°－S	19.34		19.34	Ⅰ	SE3	
SB33	3×2		東西	6.14		1.88～2.24	1.02	4.26		1.98～2.22	2.13	E－2.5°－S	25.68		25.68			
SB34	?×?		南北	（　）		4.00		?		2.50		N－6°－E					SB3・4・13	西側削平
SB35	1×1		東西	3.44		3.44～3.42	3.44	3.39		3.38～3.39	3.39	N－11°－E	11.66		11.66	Ⅲ		
柵列1	15＋α		東西	39.82		2.54～2.88	2.65					E－9.5°－S				Ⅳ	SE2を切る	
柵列2	4		東西	9.32		2.28～2.40	2.33					E－7.5°－S				Ⅳ	SB15を切る　SE3・6	
門	1×2		東西	3.64		3.64	2.16	3.52		1.70～1.80	3.52	E－9°－S				Ⅲ		

表1　掘立柱建物跡・門・柵列計測表

SB 1

柱穴No.	柱穴掘り方 (m) 長軸径	短軸径	深さ	柱痕跡 (m) 径	深さ	出土遺物
1	1.04	0.94	0.52	0.38	0.41	坏2
2	1.36	1.18	0.48	0.34	0.40	
3	1.07	0.98	0.39	0.41	0.16	
4	1.06	0.98	(0.58)	(0.34)	(−)	坏3
5	1.12	1.06	1.07	0.40	1.07	須恵器4
6	1.16	1.07	0.66	−	−	
7	0.96	0.84	(−)	0.41	(−)	
8	1.40	1.10	0.81	0.26	0.66	
9	1.15	1.10	1.23	0.36	1.18	坏5・6、高台付椀7、須恵器8
10	0.86	0.83	0.79	0.36	0.77	高台付椀9、坏10
11	1.40	1.28	1.05	0.28	0.95	坏11・13、椀（越州）12
12	1.03	0.94	(−)	0.30	(−)	
13	(1.16)	1.03	0.64	0.33	0.58	坏1、須恵器14
14	1.46	1.30	0.58	0.42	0.53	
15	0.98	0.70	0.45	−	−	
16	0.73	0.58	0.37	−	−	緑釉15
17	0.65	(0.60)	0.24	−	−	
18	0.86	0.75	0.49	(0.32)	0.16	
19	1.10	0.97	0.47	0.32	0.32	
20	0.91	0.58	0.24	(0.25)	0.12	
21	0.90	0.62	0.22	0.25	0.22	坏16
22	1.00	0.80	0.46	0.22	(−)	
23	0.98	0.89	0.47	0.24	0.44	坏17
24	0.82	0.74	0.59	0.27	0.54	
25	1.06	0.96	0.64	0.25	0.64	
26	0.96	0.91	0.46	0.30	0.46	
27	0.80	0.68	0.60	0.20	0.52	
28	0.74	0.68	0.38	0.27	0.25	
29	0.98	0.83	0.30	0.30	0.30	
30	0.80	0.67	0.55	(0.24)	0.52	
31	(1.04)	0.80	0.45	0.28	0.43	土錘18
32	0.82	0.73	0.38	0.30	0.38	
33	(1.03)	0.88	0.37	0.42	0.37	
34	0.90	0.78	0.32	0.25	0.32	
35	0.64	0.60	0.37	0.32	0.37	
36	0.82	0.75	0.28	0.32	0.28	
37	0.34	0.30	0.10	0.17	(−)	
38	0.38	0.37	(−)	−	−	
39	0.38	0.34	0.14	0.14	0.08	
40	0.33	0.27	0.13	−	−	
41	0.33	0.28	0.11	0.16	(−)	
42	0.33	0.30	0.10	0.16	(−)	
43	0.30	0.28	0.08	−	−	
44	0.23	0.22	0.08	−	−	
45	0.62	0.47	0.28	0.23	0.28	
46	0.30	0.26	0.22	−	−	
47	(0.32)	0.28	0.12	0.17	(−)	
48	(0.28)	0.23	(−)	−	−	
49	0.30	0.27	0.08	−	−	
50	0.24	0.22	0.10	0.08	(−)	
51	0.28	0.24	0.10	−	−	
52	0.23	0.23	0.07	−	−	
53	0.30	0.28	0.07	0.13	(−)	
54	0.32	0.27	0.11	0.13	(−)	
55	0.29	0.23	(−)	−	−	
56	0.45	0.29	0.21	0.15	(−)	
57	0.33	0.28	0.13	0.17	(−)	
58	0.30	0.23	(−)	−	−	
59	0.38	0.30	(−)	−	−	
60	0.31	0.27	(0.10)	0.22	(−)	
61	0.32	0.27	(0.10)	0.16	(−)	
62	0.32	0.30	0.07	−	−	
63	0.25	0.22	0.08	−	−	

SB 2

柱穴No.	柱穴掘り方 (m) 長軸径	短軸径	深さ	柱痕跡 (m) 径	深さ	出土遺物
1	0.55	0.50	0.40	0.14	0.24	
2	0.45	0.42	0.39	0.15	0.22	
3	0.60	0.52	0.20	−	−	
4	0.57	0.50	0.25	0.18	0.25	高台付椀20
5	0.53	0.50	0.50	0.23	0.50	坏21・22
6	0.51	0.47	0.51	0.22	0.51	高台付椀23、布痕24
7	0.65	0.60	0.56	0.24	0.54	甕（須恵器）25、坏26
8	0.71	0.64	0.36	0.21	0.36	
9	(0.58)	0.45	0.20	0.27	0.20	坏27
10	0.75	0.64	0.35	0.18	0.35	
11	0.58	0.47	0.50	0.23	0.50	
12	0.45	0.43	0.52	0.22	0.52	布痕28
13	0.53	0.48	0.60	0.22	0.53	石鍋29
14	(0.58)	(0.48)	0.79	(0.13)	0.79	

SB 3

柱穴No.	柱穴掘り方 (m) 長軸径	短軸径	深さ	柱痕跡 (m) 径	深さ	出土遺物
1	0.47	0.42	0.33	0.23	0.31	
2	(0.44)	0.43	(0.35)	0.23	(0.35)	
3	0.65	0.48	0.23	0.14	0.17	
4	0.70	0.52	0.29	0.19	0.21	
5	0.63	0.60	0.33	0.27	0.33	
6	0.60	0.56	0.36	0.24	0.30	坏30
7	(0.54)	0.50	0.46	0.29	0.30	
8	0.68	0.60	0.49	0.24	0.49	坏31
9	0.74	0.68	0.39	−	−	
10	0.52	0.47	0.49	0.18	0.39	坏32、高台付椀33、皿（越州）34
11	0.53	0.48	0.50	−	−	坏35、甕36、布痕37・38、須恵器39
12	0.52	0.43	0.51	−	−	
13	0.62	0.55	0.37	0.21	0.37	
14	(0.52)	0.47	0.38	0.23	0.38	高台付椀40
15	0.52	0.44	0.22	0.20	(−)	

SB 4

柱穴No.	柱穴掘り方 (m) 長軸径	短軸径	深さ	柱痕跡 (m) 径	深さ	出土遺物
1	0.67	0.56	0.21	0.25	0.21	高台付皿41
2	0.66	0.62	0.19	−	−	
3	0.67	0.51	0.46	−	−	
4	0.60	0.52	0.20	0.11	0.14	
5	0.59	0.52	0.27	0.13	0.27	
6	0.45	0.44	0.38	0.16	(−)	
7	(0.44)	0.40	0.31	0.18	0.27	
8	0.45	0.38	0.13	−	−	
9	0.61	0.60	0.30	0.21	0.30	甕42、坏43、須恵器48
10	(0.68)	0.60	0.32	−	−	
11	0.60	0.57	0.63	0.28	0.43	鉢44・45、皿46、高台付椀47、坏48・50・51、鉢52
12	0.39	0.35	0.24	0.24	0.24	坏53、土錘54、緑釉55

SB 5

柱穴No.	柱穴掘り方 (m) 長軸径	短軸径	深さ	柱痕跡 (m) 径	深さ	出土遺物
1	0.60	0.58	0.32	0.12	0.32	
2	0.69	0.62	0.48	0.19	0.48	
3	0.62	0.53	0.32	0.20	0.32	坏57
4	0.65	0.63	0.40	0.16	0.40	
5	0.55	0.53	0.14	0.15	0.15	
6	0.84	0.77	0.41	0.21	0.41	
7	0.75	0.71	0.63	−	−	
8	0.64	0.58	0.33	0.19	0.33	甕（須恵器）58

SB 6

柱穴No.	柱穴掘り方 (m) 長軸径	短軸径	深さ	柱痕跡 (m) 径	深さ	出土遺物
1	0.57	0.54	0.66	0.17	0.56	
2	0.63	0.57	0.31	0.30	0.21	
3	0.65	0.55	0.49	0.24	0.49	
4	0.64	0.53	0.46	0.24	0.36	
5	0.65	0.57	0.78	0.22	0.69	
6	0.70	0.62	0.71	0.24	0.71	高台付椀59
7	0.58	0.51	0.55	0.23	0.35	
8	0.80	0.68	0.57	0.20	0.51	
9	0.63	0.55	0.61	0.13	0.61	坏60
10	0.53	0.50	0.50	0.22	0.43	

SB 7

柱穴No.	柱穴掘り方 (m) 長軸径	短軸径	深さ	柱痕跡 (m) 径	深さ	出土遺物
1	0.57	0.49	0.16	−	−	
2	0.25	0.17	0.07	−	−	
3	0.42	0.39	0.14	0.17	0.14	
4	0.35	0.30	0.17	−	−	
5	0.43	0.34	0.17	0.18	0.15	布痕61
6	0.42	0.37	0.19	−	−	
7	0.60	0.49	0.12	0.30	(−)	
8	0.47	0.41	0.12	−	−	

SB 8

柱穴No.	柱穴掘り方 (m) 長軸径	短軸径	深さ	柱痕跡 (m) 径	深さ	出土遺物
1	0.62	0.55	0.63	0.21	0.54	
2	0.50	0.45	0.34	0.23	(−)	
3	0.65	0.58	0.53	0.20	0.47	
4	0.64	0.57	0.37	0.24	0.29	
5	0.56	0.51	0.47	0.23	0.43	
6	0.71	0.54	0.36	0.24	0.30	
7	0.44	0.38	0.30	−	−	
8	0.43	0.38	0.56	0.17	0.43	
9	0.59	0.43	0.54	0.23	0.44	坏62
10	0.54	0.40	0.48	0.22	0.43	

SB 9

柱穴No.	柱穴掘り方 (m) 長軸径	短軸径	深さ	柱痕跡 (m) 径	深さ	出土遺物
1	0.55	0.50	0.21	0.27	0.21	
2	0.62	0.61	0.25	0.20	0.25	
3	0.58	0.52	0.23	0.23	0.23	
4	0.51	0.45	0.43	0.22	0.43	
5	0.57	0.48	0.11	0.26	0.08	土錘64
6	0.57	0.50	0.19	0.17	0.19	
7	0.60	0.55	0.17	0.27	0.17	
8	0.63	0.59	0.13	−	−	
9	0.52	0.40	0.40	0.19	(−)	坏63
10	0.59	0.56	0.54	0.23	(−)	
11	0.55	0.51	0.36	−	−	
12	0.43	0.40	0.32	−	−	
13	0.45	0.43	0.36	−	−	

SB10

柱穴No.	柱穴掘り方 (m) 長軸径	短軸径	深さ	柱痕跡 (m) 径	深さ	出土遺物
1	0.37	0.34	(−)	−	−	
(2)	−	−	−	−	−	
3	(0.44)	(0.36)	(−)	−	−	
4	(0.46)	0.37	(−)	(0.15)	(−)	
5	0.44	0.32	(−)	0.23	(−)	
6	0.47	0.43	(−)	0.21	(−)	
7	0.47	0.38	(−)	−	−	
8	0.39	0.35	(−)	0.14	(−)	
9	(0.50)	0.39	(−)	0.26	(−)	
10	0.37	(0.35)	(−)	−	−	

SB11

柱穴No.	柱穴掘り方 (m) 長軸径	短軸径	深さ	柱痕跡 (m) 径	深さ	出土遺物
1	(0.46)	(0.36)	(−)	−	−	
2	(0.50)	(0.44)	(−)	−	−	
3	(0.43)	0.37	(0.23)	(−)	(−)	
4	0.30	0.28	0.12	−	−	
5	0.46	0.42	(−)	0.24	(−)	
6	0.52	0.48	0.32	0.18	0.32	
7	0.57	0.52	(−)	0.21	(−)	
8	0.46	0.42	(−)	0.28	(−)	

SB12

柱穴No.	柱穴掘り方 (m) 長軸径	短軸径	深さ	柱痕跡 (m) 径	深さ	出土遺物
1	0.63	0.54	0.52	0.22	0.52	
2	0.48	0.48	(−)	0.18	(−)	
3	0.50	0.38	(−)	0.18	(−)	
4	0.48	0.43	(−)	0.22	(−)	
5	0.52	0.48	0.28	−	−	
6	0.49	0.40	0.49	0.23	0.49	
7	0.42	0.38	(−)	0.17	(−)	
8	0.55	0.45	(−)	0.20	(−)	

SB13

柱穴No.	柱穴掘り方 (m) 長軸径	短軸径	深さ	柱痕跡 (m) 径	深さ	出土遺物
1	0.28	0.27	0.30	−	−	
2	0.26	0.18	0.07	−	−	
3	0.29	0.24	0.11	−	−	
4	0.32	0.26	0.17	0.10	(−)	
4'	0.37	(0.30)	(0.08)	0.10	(−)	
5	0.32	0.27	0.10	0.13	(−)	
6	0.31	0.28	0.26	−	−	

SB14

柱穴No.	柱穴掘り方 (m) 長軸径	短軸径	深さ	柱痕跡 (m) 径	深さ	出土遺物
1	0.65	0.60	0.37	0.22	(−)	
2	0.63	0.58	0.39	0.21	0.19	
3	0.63	0.56	0.18	0.19	0.16	
4	0.73	0.52	0.20	0.27	0.16	
5	(0.50)	0.46	0.29	0.24	0.29	
6	0.67	0.64	0.10	0.20	0.10	
7	0.47	0.44	0.23	0.20	(−)	
8	0.57	0.50	0.20	−	−	
9	0.60	0.54	0.29	−	−	
10	0.61	0.59	0.33	−	−	
11	0.59	0.50	0.47	0.22	0.47	
12	0.64	0.59	0.41	0.20	0.41	高台付椀65

SB15

柱穴No.	柱穴掘り方 (m) 長軸径	短軸径	深さ	柱痕跡 (m) 径	深さ	出土遺物
(1)	−	−	−	−	−	
2	0.42	0.39	0.55	0.14	0.55	坏66・高台付椀67
3	0.50	0.44	0.44	0.20	0.44	
4	0.70	0.40	0.43	0.16	0.43	
5	(0.56)	(0.47)	0.40	−	−	須恵器68
6	0.46	0.46	0.25	0.22	0.20	
(7)	−	−	−	−	−	
8	0.50	0.43	0.32	0.26	(−)	
9	0.45	0.33	0.55	0.17	0.55	
10	0.51	0.47	0.45	0.18	0.45	

SB16

柱穴No.	柱穴掘り方 (m) 長軸径	短軸径	深さ	柱痕跡 (m) 径	深さ	出土遺物
1	0.54	0.52	0.40	0.20	0.40	
2	0.58	0.43	0.30	−	−	
3	0.59	0.54	0.34	0.28	(−)	
4	0.60	0.51	0.25	0.23	(−)	
5	(0.60)	0.52	0.41	0.21	0.39	
6	0.50	0.46	0.30	0.20	(−)	
7	0.59	0.56	0.28	0.21	(−)	
8	0.57	0.53	0.27	0.24	(−)	
9	0.46	0.41	0.25	0.17	0.25	
10	0.48	0.45	0.25	0.16	(−)	
11	0.62	0.55	(−)	−	−	

SB17

柱穴No.	柱穴掘り方 (m) 長軸径	短軸径	深さ	柱痕跡 (m) 径	深さ	出土遺物
1	0.57	0.46	(−)	0.26	(−)	
2	0.42	0.39	0.26	−	−	
3	0.55	0.54	(−)	0.24	(−)	
4	0.57	0.51	(−)	0.27	(−)	
5	0.50	0.45	(−)	0.21	(−)	
6	0.64	0.55	0.60	−	−	
7	0.68	0.60	0.50	−	−	
8	0.36	0.28	(−)	−	−	坏70
9	0.75	0.59	(−)	−	−	高台付椀69
10	0.62	0.58	(−)	−	−	
11	(0.56)	(0.54)	(−)	−	−	
12	(0.62)	0.58	(−)	−	−	

表2　柱穴計測表（1）

SB18

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	0.31	0.27	0.15	–	–	
2	0.30	0.27	0.35	–	–	小皿71
3	0.27	0.24	0.30	–	–	
4	0.30	0.21	0.30	–	–	
5	0.27	0.24	0.13	–	–	
6	0.22	0.21	0.10	–	–	

SB19

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	0.38	0.33	(–)	–	–	
2	0.63	0.49	0.52	0.23	0.52	
3	0.53	0.45	0.32	0.19	0.29	
4	0.43	0.39	0.21	–	–	坏72
5	0.53	0.41	0.20	–	–	
6	0.47	0.42	(–)	–	–	
7	0.64	0.48	0.29	–	–	
8	0.48	0.37	0.17	–	–	
9	0.67	0.54	0.40	0.22	0.40	
10	0.52	0.47	0.38	0.18	0.38	

SB20

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	(0.48)	(0.46)	(0.30)	–	–	
2	0.40	0.35	(–)	–	–	坏73
3	0.51	0.47	0.30	–	–	坏74
4	0.42	0.38	0.42	0.19	0.42	
5	0.36	0.33	0.14	0.19	(–)	
6	0.53	0.49	0.20	–	–	
7	0.54	0.46	0.27	–	–	
8	0.52	0.47	0.33	0.18	0.29	
9	0.46	0.38	0.34	0.19	0.34	

SB21

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	0.28	0.24	0.33	–	–	
2	0.30	0.18	0.17	–	–	
3	0.33	0.25	0.30	–	–	
4	0.31	0.25	0.17	–	–	
5	0.28	0.26	0.45	–	–	
6	0.33	0.30	0.25	–	–	
7	0.35	0.29	0.30	–	–	
8	0.29	0.26	0.25	–	–	
9	0.32	0.27	0.28	–	–	

SB22

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	0.24	0.20	0.42	–	–	
2	0.33	0.26	0.23	–	–	
3	0.33	0.24	0.30	–	–	
4	0.36	0.27	0.36	–	–	
5	0.30	0.26	0.32	–	–	
6	0.27	0.20	0.10	–	–	
7	0.32	0.30	0.18	–	–	
8	0.35	0.28	0.38	–	–	

SB23

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	0.66	0.57	0.35	–	–	
2	0.52	0.48	0.48	–	–	
3	0.44	0.41	0.87	–	–	
4	0.52	0.47	0.60	–	–	
5	0.48	0.42	0.40	–	–	
6	0.45	0.41	0.47	0.12	0.47	
7	0.41	0.36	(–)	0.17	(–)	
8	0.35	0.32	0.19	–		
9	0.40	0.33	(–)	–	–	
10	0.43	0.32	(–)	0.20	(–)	
11	0.45	0.40	0.40	0.17	0.40	
12	0.45	0.41	0.40	0.23	(–)	
13	0.38	0.35	(–)	0.16	(–)	
14	0.34	0.30	0.18	–	–	
15	0.50	0.40	0.32	–	–	
16	0.50	0.37	0.27	–	–	

SB24

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	0.46	0.40	(–)	0.22	(–)	
2	0.43	0.40	0.42	0.16	0.42	
3	0.40	0.35	(–)	0.17	(–)	
4	0.63	0.38	0.34	–	–	
5	0.37	0.28	(–)	–	–	
6	0.38	0.34	0.27	–	–	
7	0.65	0.60	0.30	–	–	
8	0.40	0.32	(–)	0.16	(–)	

SB25

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	0.31	0.28	0.27	–	–	
2	0.39	0.34	0.20	–	–	
3	0.41	0.29	(–)	0.16	(–)	
4	0.40	0.32	0.20	0.16	(–)	
5	0.37	0.30	(–)	–	–	
6	0.33	0.25	0.20	0.74	0.24	

SB26

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	0.42	0.37	0.22	0.16	0.22	
2	0.35	0.34	(–)	0.13	(–)	
3	0.41	0.34	0.06	–	–	
4	0.32	0.28	(–)	–	–	
5	0.39	0.33	(–)	0.19	(–)	
6	0.25	0.25	(–)	0.10	(–)	
7	0.37	0.35	0.18	0.18	(–)	
8	0.42	0.37	0.15	0.22	(–)	
9	0.32	0.28	(–)	–	–	

SB27

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	0.30	0.25	0.48	–	–	
2	0.32	0.29	(–)	–	–	
3	0.34	0.27	(–)	–	–	
4	0.18	0.17	(–)	–	–	
5	0.31	0.23	(–)	–	–	
6	0.30	0.27	(–)	–	–	
7	0.22	0.20	(–)	–	–	
8	0.23	0.22	(–)	–	–	
9	0.29	0.25	(–)	–	–	
10	0.35	0.31	0.27	0.18	0.27	
11	0.24	0.22	0.17	0.18	(–)	

SB28

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	0.33	0.29	0.19	–	–	
2	0.31	0.25	(–)	–	–	
3	0.37	0.30	0.14	–	–	
4	0.37	0.25	(–)	–	–	坏75
5	0.47	0.33	0.20	–	–	
6	0.32	(0.27)	(–)	–	–	

SB29

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	0.50	0.47	0.38	0.21	0.28	
2	0.58	0.37	0.10	–	–	
3	0.42	(0.42)	(–)	–	–	
4	0.41	0.35	0.10	–	–	
5	0.35	0.30	0.16	–	–	
6	0.48	0.32	0.15	0.17	(–)	
7	0.35	0.31	(–)	–	–	坏76

SB30

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	0.33	0.29	(–)	–	–	
2	0.31	0.24	(–)	–	–	
3	0.32	0.28	(–)	–	–	
4	0.25	0.23	(–)	–	–	
5	0.32	0.32	(–)	–	–	
6	0.20	0.15	(–)	–	–	
7	0.33	0.25	(–)	–	–	
8	0.37	0.29	(–)	–	–	
9	0.31	0.27	(–)	–	–	

SB31

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
(1)	–	–	–	–	–	
2	(0.41)	(0.40)	(–)	–	–	
3	(0.51)	(0.48)	(–)	–	–	
4	0.45	0.38	(–)	–	–	
5	0.61	(0.33)	(–)	–	–	
6	0.62	0.43	0.44	–	–	
7	0.41	0.39	(–)	–	–	
8	0.41	0.37	(–)	–	–	

SB32

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	0.35	0.33	0.34	–	–	
2	0.34	0.31	(–)	–	–	
3	0.33	0.30	(–)	–	–	
4	0.37	0.32	(–)	0.20	(–)	
5	0.30	0.26	(–)	–	–	
6	0.35	0.32	(–)	–	–	
7	(0.32)	(0.32)	(–)	–	–	
8	0.33	0.32	0.35	–	–	

SB33

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	0.40	0.32	0.71	–	–	
2	0.42	0.37	(–)	–	–	
3	0.43	0.35	(–)	–	–	
4	0.40	0.33	(–)	–	–	
5	0.30	0.29	(–)	–	–	
6	0.41	0.37	(–)	–	–	
7	0.28	0.23	(–)	–	–	
8	0.68	0.65	(–)	–	–	
9	0.50	0.48	(–)	–	–	
10	0.42	0.39	(–)	–	–	

SB34

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	0.93	0.77	0.14	–	–	
2	0.94	0.85	0.35	0.27	(–)	
3	0.94	0.75	0.20	–	–	

SB35

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	1.27	1.18	1.1	0.39	1.05	
2	(1.20)	1.15	1.16	0.4	1.08	坏83・84　椀85
3	1.26	0.95	1.05	0.38	0.99	
4	1.03	0.84	0.97	0.4	0.9	

門

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	0.80	0.74	0.25	0.20	0.22	
2	0.87	0.67	0.36	0.20	0.36	
3	0.84	0.79	0.47	0.25	0.44	
4	0.73	0.67	0.22	0.21	0.22	
5	0.63	(0.60)	0.27	0.24	0.27	
6	0.75	0.71	0.33	0.17	0.33	須恵器1069

柵列1

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	0.46	0.40	0.32			
2	0.42	0.41	0.27			
3	0.45	0.40	0.49	0.17	(–)	
4	0.40	0.40	0.22			
5	0.40	0.38	0.42			
6	0.44	0.38	0.60	0.17	(–)	
7	0.50	0.47	0.32			
8	0.64	0.38	0.59			
9	0.50	0.39	0.61			
10	0.80	0.60	0.51			
11	0.47	0.43	0.36			
12	0.42	0.37	0.22			
13	0.46	0.40	0.10			
14	0.48	0.36	0.44			
15	0.42	0.37	0.34			
15	0.66	0.53	0.63			

柵列2

柱穴No.	柱穴掘り方（m）			柱痕跡（m）		出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ	径	深さ	
1	0.72	0.54	0.22			
2	0.53	0.47	0.28			
3	0.60	0.50	0.30			
4	0.96	0.60	0.58			
5	0.86	0.65	0.32			

表３　柱穴計測表（２）

柱穴の深さについて、身舎の桁行間の南側部の柱穴、西側で３基（４・５・６）、東側で４基（８・９・10・11）が他のものに比較し倍以上の深さを呈している。この理由については、１：柱の高さ調整、２：下層の土層の状況、３：立て替え、４：上屋構造によるもの等推定されるが、１・２については他の柱穴では見られないことから除外できるのではと考えられるものの今後の課題である。出土遺物はＰ１・４・５・９・10・11・13・16・21・23・31の柱穴埋土中から出土したもので、ほとんどが破片であるが高台付埦、須恵器甕片、越州窯系青磁碗や緑釉陶器、土錘などがある（１～19)。Ｐ９からは土師器坏（５)、黒色土器（６)、須恵器（８）が、Ｐ11では越州窯系青磁碗（12)、土師器坏（13）など多種な遺物が混入している。Ｐ13では土師器坏（１）の埋土上層から完形で出土した。

SB ２（第16図）

SB １の南西、池状遺構のすぐ西に位置する南北棟で、SE ９に切られる。南北３間、東西２間の身舎で、東側に１間の廂がつく。身舎は桁行（南北）全長は7.46m、桁行柱間は約2.49m、梁行（東西）全長4.36m、梁行柱間は約2.18m、廂は2.0mの幅を測る。柱掘り方は円形で、径0.45 ～ 0.75m、深さ0.20 ～ 0.70m、柱痕跡はＰ３以外のすべての柱穴で確認され、径0.14 ～ 0.29mである。柱痕跡の下部には灰白色系の粘質土が認められる。身舎部分の面積は30.76㎡、廂まで含めると45.55㎡となる。Ｐ４・６・７・９・12・13で土師器類（坏・高台付椀)、布痕土器、須恵器、石鍋等の出土遺物（20 ～ 29)、Ｐ５の柱穴埋土より炭化物が出土している。Ｐ13出土の滑石製石鍋（29）は二次加工品の破損品と想定され、石鍋本来の器表面に残る鑿状工具のはつり痕はほとんど認められず、成形の際の所産と考えられる擦痕が明瞭に残る。Ｐ７出土の須恵器甕（25）はSE ２・Ｂ９およびF10グリッド出土と接合した。

SB ３（第17図）

SB ２の南、池状遺構の南西に位置する南北棟で、SB ４・13・34と重なり合う。建物は南北５間、東西２間で、南から２間の位置に間仕切り柱と想定されている柱を有する。身舎は桁行（南北）全長は10.96m、桁行柱間は約2.2m、梁行（東西）全長4.70m、梁行柱間は約2.35mを測る。柱掘り方は円形で、径0.45 ～ 0.74m、深さ0.22 ～ 0.51m、柱痕跡は径0.14 ～ 0.29mである。また、Ｐ１、Ｐ３やＰ６では柱掘り方の床面に黄褐色粘質土を敷き固めた後、柱を設置している状況がうかがえる。面積は48.47㎡。Ｐ６・８・10・11・14の柱穴埋土中から遺物が出土した。出土遺物（30 ～ 40）には土師器類（甕・坏・高台付椀)、布痕土器、須恵器、越州窯系青磁がある。Ｐ11から出土した須恵器甕（39）はSE ６出土のものと接合した。

SB ４（第18図）

SB ２の南、池状遺構の南西に位置する南北棟で、SB ３・13・34と重なり合う。建物は南北４間、東西２間で、桁行（南北）全長は9.42m、桁行柱間は約2.35m、梁行（東西）全長4.45m、梁行柱間は約2.23mを測る。柱掘り方は円形で、径0.39～0.67m、深さ0.13～0.28m、柱痕跡は八つの柱穴で確認され、径0.11～0.28mである。Ｐ２・３・10は柱掘り方が不正な楕円形を呈し、柱痕跡が認められないことから、柱が抜かれた可能性がある。面積は38.71㎡。Ｐ１・９・11・12から遺物が出土し、土師器類（甕・坏・高台付椀)、布痕土器、須恵器、土錘、緑釉陶器がある（41 ～ 55)。Ｐ９出土の須恵器甕（48）はSB ９のＰ10出土および包含層出土のものと接合関係にある。

SB ５（第19図）

調査区の西端、SB ４の南西位置する東西棟で、SB ９・14と重なり合う。建物は西側が削平のため全体的

な規模は不明だが、確認できる範囲では東西３間以上、南北２間で、桁行（東西）全長は7.20m、桁行柱間は約2.4m、梁行（南北）全長4.24m、梁行柱間は約2.12mを測る。柱掘り方は円形で、径0.55 ～ 0.84m、深さ0.14 ～ 0.63m、柱痕跡は径0.12 ～ 0.21mである。Ｐ３・８からそれぞれ土師器類坏（57）と須恵器甕（58）が出土している。

SB ６（第20図）

SB ３・４のすぐ南に位置する東西棟で、SB14と重なり合い、SE ６を切る。建物は東西３間、南北２間で、桁行（東西）全長は6.94m、桁行柱間は約2.31m、梁行（南北）全長4.00m、梁行柱間は約2.00mを測る。柱掘り方は円形で、径0.57 ～ 0.80m、深さ0.31 ～ 0.78m、柱痕跡はすべての柱で確認され、柱筋の通りがよく、径0.13 ～ 0.30mである。面積は27.50㎡。Ｐ６から土師器高台付埦（59）が、Ｐ９から土師器坏（60）が出土。

SB ７（第21図）

池状遺構のすぐ南に位置する東西棟で、SE ８と重なり合い、SB ８の北側に近接する。建物は東西２間、南北２間で、桁行（東西）全長は4.36m、桁行柱間は約2.18m、梁行（南北）全長3.10m、梁行柱間は約1.65mを測る。柱掘り方は円形で、径0.25 ～ 0.60m、深さ0.07 ～ 0.19m、柱痕跡は三つの柱で確認され、柱掘り方床面に柱の圧痕が見られる。また、柱痕跡下部には青灰色の粘質土が敷かれている。径0.17 ～ 0.30m、面積は13.41㎡。Ｐ５から出土した遺物として布痕土器（61）がある。

SB ８（第21図）

SB ７のすぐ南に位置する東西棟で、建物は東西３間、南北２間で、桁行（東西）全長は6.28m、桁行柱間は約2.1m、梁行（南北）全長3.80m、梁行柱間は約1.90mを測る。柱掘り方は円形で、径0.43 ～ 0.71m、深さ0.34 ～ 0.63m、柱痕跡はＰ７を除く九つの柱で確認され、柱筋の通りがよく、径0.17 ～ 0.24mである。また、柱痕跡下部には青灰色の粘質土が敷かれている。面積は23.86㎡。出土遺物（62）には土師器類（坏）がある。

SB ９（第22図）

SB ５・６と南側で重なり合い、SE10に切られる。建物は東西棟で、東西４間、南北２間で、南から３間の位置（建物中央）に束柱を有する。身舎は桁行（南北）全長は9.30m、桁行柱間は約2.32m、梁行（東西）全長4.70m、梁行柱間は約3.52mを測る。柱掘り方は円形で、径0.43 ～ 0.63m、深さは0.11 ～ 0.54mと格差が大きく、西側が深く、東側が浅い傾向にある。柱痕跡は径0.14 ～ 0.26mである。面積は31.77㎡。出土遺物はみられない。

SB10（第23図）

建物はSB １の東側柱と平行して作られるが、SB １に切られる。身舎は南北３間、東西２間で、遺跡保存のため遺構は掘らず、表面のみで確認した。身舎は桁行（南北）全長は6.42m、桁行柱間は約2.14m、梁行（東西）全長3.98m、梁行柱間は約1.99mを測る。柱掘り方は円形で、径0.37 ～ 0.47m、柱痕跡は四つの柱穴で確認され、径0.14 ～ 0.26mである。遺物は出土していない。

SB11（第23図）

建物はSB10の南に位置し、同様にSB １の東側柱と平行し、SB １に切られる。身舎は南北２間、東西２

間で、桁行（南北）全長は5.02m、桁行柱間は約2.51m、梁行（東西）全長3.82m、梁行柱間は約1.91mを測る。柱掘り方は円形で、径0.30 ～ 0.57m、深さは0.12 ～ 0.32m、柱痕跡は径0.18 ～ 0.28mである。

SB12（第24図）

建物はSB11の南に位置し、同様にSB １の東側柱と平行し、SB １・SE ９と重複する。身舎は南北３間、東西１間で、桁行（南北）全長は6.84m、桁行柱間は約2.28m、梁行（東西）全長3.8mを測る。柱掘り方は円形で、径0.42 ～ 0.55m、深さは0.28 ～ 0.52m、柱痕跡は径0.17 ～ 0.23mである。また、柱痕跡下部には青灰色のシルト土の堆積が確認できる。遺物は出土していない。

SB13（第24図）

池状遺構の西に位置する南北棟で、SB ３・４・34と重なり合う。建物は南北２間、東西１間で、桁行（南北）全長は4.32m、桁行柱間は約2.16m、梁行（東西）全長3.14mを測る。柱掘り方は円形で、径0.26 ～ 0.37m、深さ0.07 ～ 0.30m、柱痕跡は確認できなかった。面積は11.91㎡。建物としては小規模で柱穴も小さく、遺物も出土していない。

SB14（第25図）

調査区の西に位置する東西棟で、SB ５・９と重複し、埋土の状況からSB ６・SE10に切られる。建物は東西４間、南北２間で、桁行（東西）全長は9.56m、桁行柱間は約2.39m、梁行（南北）全長4.69m、梁行柱間は約2.34mを測る。柱掘り方は円形で、径0.47 ～ 0.73m、深さ0.10 ～ 0.47m、柱痕跡はすべての柱で確認され、径0.13 ～ 0.30mを測るが、柱筋の通りが悪く、特に桁部分にバラツキがみられる。面積は42.68㎡。Ｐ12から出土した土師器高台付埦（65）は高台内に放射状の圧痕がみられる。

SB15（第27図）

調査区の西端に位置する東西棟で、柵列２と重複する。建物は西側が削平で、北東隅の柱穴がはっきりしないため全体的な規模は不明だが、確認できる範囲では東西３間以上、南北２間で、桁行（東西）現存長は6.88m、桁行柱間は約2.29m、梁行（南北）推定長3.14m、梁行柱間は約1.57mを測る。柱掘り方は円形で、径0.42 ～ 0.70m、深さ0.25 ～ 0.55m、柱痕跡はすべての柱で確認され、径0.14 ～ 0.26mを測る。Ｐ３・４・８・10は土層断面から柱が抜き取られた可能性もある。面積は21.60㎡以上。遺物がＰ２から土師器坏（66）および黒色土器高台付埦（67）が、Ｐ５から須恵器甕（68）が出土し、池状遺構のものと接合した。

SB16（第26図）

屋敷地と想定される範囲の東端に位置する南北棟である。建物は北側の柱穴の状況が不明だが、おおよそ南北４間、東西２間で、桁行（東西）全長は8.10m、桁行柱間は約2.02m、梁行（南北）推定長3.74m、梁行柱間は約1.87mを測る。柱掘り方は円形で、径0.46 ～ 0.62m、深さ0.25 ～ 0.41m、柱痕跡はすべての柱で確認され、径0.16 ～ 0.28mを測る。面積は推定33.35㎡。出土遺物はなし。

SB17（第27図）

調査区の中央西寄りに位置する東西棟で、SE ２に切られる。建物は東西４間、南北２間で、桁行（東西）全長は8.10m、桁行柱間は1.84 ～ 2.14m、梁行（南北）全長3.74m、梁行柱間は1.54 ～ 2.20mを測る。柱掘り方は円形で、径0.36 ～ 0.75m、深さ0.26 ～ 0.60m、柱痕跡は四つの柱で確認され、径0.21 ～ 0.27mを測る。

梁中央の柱穴は、他の柱穴に比べ小さく浅い。面積は30.21㎡。Ｐ８から土師器坏（70）、Ｐ９から土師器高台付埦（69）が出土。

SB18（第26図）

調査区の南東隅、屋敷地とはずれて位置する南北棟で、建物は南北４間、東西１間で、桁行（南北）全長は4.36m、桁行柱間は1.98 ～ 2.20m、梁行（東西）全長3.66 ～ 3.74mを測る。柱掘り方は円形で、径0.22 ～ 0.30m、深さ0.10 ～ 0.35m、柱痕跡は確認できなかった。面積は15.50㎡。Ｐ２からの出土遺物として土師器皿（71）がある。

SB19（第28図）

調査区のほぼ中央、SE ７の東に位置する南北棟で、SE ９・28と重複する。建物は北側の柱穴の状況が不明だが、おおおよそ南北４間、東西１間で、桁行（東西）全長は9.26m、桁行柱間は1.82 ～ 2.78mと柱間の差が大きい。梁行（南北）3.68 ～ 3.76mを測る。柱掘り方は円形で、径0.38 ～ 0.67m、深さ0.17 ～ 0.52m、柱痕跡は径0.18 ～ 0.23mを測る。面積は推定34.33㎡。遺物はＰ４から土師坏（72）が出土している。

SB20（第29図）

調査区のほぼ中央、SB16の北に位置する東西棟で、SE ９・29と重複する。建物は北側桁部分の柱穴の状況が不明だが、東西３間、南北２間で、桁行（東西）全長は7.20m、桁行柱間は2.32 ～ 2.54m、梁行（南北）全長3.76m、梁行柱間は1.64 ～ 1.72mを測る。柱掘り方は円形で、径0.36 ～ 0.54m、深さ0.14 ～ 0.42m、柱痕跡は四カ所の柱穴で確認され、径0.18 ～ 0.19mを測る。面積は推定24.23㎡。遺物はＰ２・３から土師坏（73・74）がそれぞれ出土している。

SB21（第30図）

調査区の南東隅、SE25の西側に位置する東西棟で、SC18と重複する。建物は柱筋は良好でなく、柱痕跡は確認できなかった。北側柱の柱穴が一つ不明だが、東西３間、南北２間で、桁行（東西）全長は5.04m、桁行柱間は1.46 ～ 1.86m、梁行（南北）全長3.66m、梁行柱間は1.66 ～ 2.0mを測る。柱掘り方は円形で、径0.28 ～ 0.35m、深さ0.17 ～ 0.45mで、面積は18.22㎡。遺物は出土していない。

SB22（第30図）

調査区の南、SB18の北西側に位置する南北棟で、SE15と重複する。建物は南側梁の柱穴が北に比べ広がり、柱穴も外に開く。南北２間、東西２間の建物で、桁行（南北）全長は6.04m、桁行柱間は2.88 ～ 3.16m、梁行（北側）4.90m、南側で5.06mとなる。梁行柱間は2.36 ～ 2.7m柱掘り方は円形で、径0.24 ～ 0.36m、深さ0.10 ～ 0.42mで柱痕跡は確認できなかった。、面積は30.57㎡。遺物は出土していない。

SB23（第30図）

調査区の北側、SB １の東に位置する東西棟で、SB24・25、SE ４・５と重なり合う。建物は東西６間、南北２間で、桁行（南北）全長は12.58mとSB １以外では当遺跡で最も長い。桁行柱間は1.86 ～ 2.46m、梁行(東西)全長3.84m、梁行柱間は1.76 ～ 2.08mを測る。柱掘り方は円形で、径0.34 ～ 0.66m、深さ0.18 ～ 0.87m、柱痕跡は六つの柱穴で確認され、径0.12 ～ 0.23mを測る。面積は46.92㎡でSB １を除けば２番目の大きさとなる。遺物は出土していない。

SB24（第29図）

SB24はSB23と直行し、重なり合っている。それ以外にもSE ４・５と重複する。建物は南北３間、東西１間で、桁行（南北）全長は6.36m、桁行柱間は1.98 ～ 2.32m、梁行（東西）全長3.60mを測る。柱掘り方は円形で、径0.37 ～ 0.63m、深さ0.27 ～ 0.42m、柱痕跡は四つの柱穴で確認され、径0.16 ～ 0.22mを測る。面積は22.39㎡。遺物は出土していない。

SB25（第30図）

SB25はSB23と重複するが、SB24に直行し、それぞれ北側の平側と妻側が柱筋を揃える。建物は南北２間、東西２間と考えられ、桁行（南北）全長は4.26m、桁行柱間は1.98 ～ 2.28m、梁行（東西）全長2.16m、梁行柱間は2.12 ～ 2.16mを測る。柱掘り方は円形で、径0.31 ～ 0.41m、深さ0.20 ～ 0.27m、柱痕跡は西側梁の二つの柱穴で確認され、径0.16mを測る。面積は9.09㎡で最も小さい建物である。遺物は出土していない。

SB26（第31図）

調査区の北東部、SB １の西に位置する東西棟でSB １の孫廂部分およびSB27と重複する。建物は東西３間、南北２間と考えられ、桁行（東西）全長は6.30m、桁行柱間は2.0 ～ 2.26m、梁行（南北）全長4.04m、梁行柱間は1.96 ～ 2.08mを測る。柱掘り方は円形で、径0.25 ～ 0.42m、深さ0.06 ～ 0.22m、柱痕跡は南側桁と北側桁部で確認され、径0.10 ～ 0.22mを測る。面積は25.25㎡。遺物は出土していない。

SB27（第31図）

調査区の北東端部、SB １の西に位置する東西棟で、SB26と重複する。建物は東西３間、南北２間と考えられ、柱穴は柱筋はある程度良好だが、位置は不規則で、桁行（東西）全長は6.80m、桁行柱間は1.08 ～ 2.32m、梁行（南北）全長4.04m、梁行柱間は1.84 ～ 2.20mを測る。柱掘り方は円形で、径0.18 ～ 0.35m、深さ0.17 ～ 0.48m、全体は未掘であるため不明だが、調査した柱穴は礫層まで掘り下げられている。柱痕跡は二カ所で確認され径0.18mを測る。面積は26.54㎡。遺物は出土していない。

SB28（第30図）

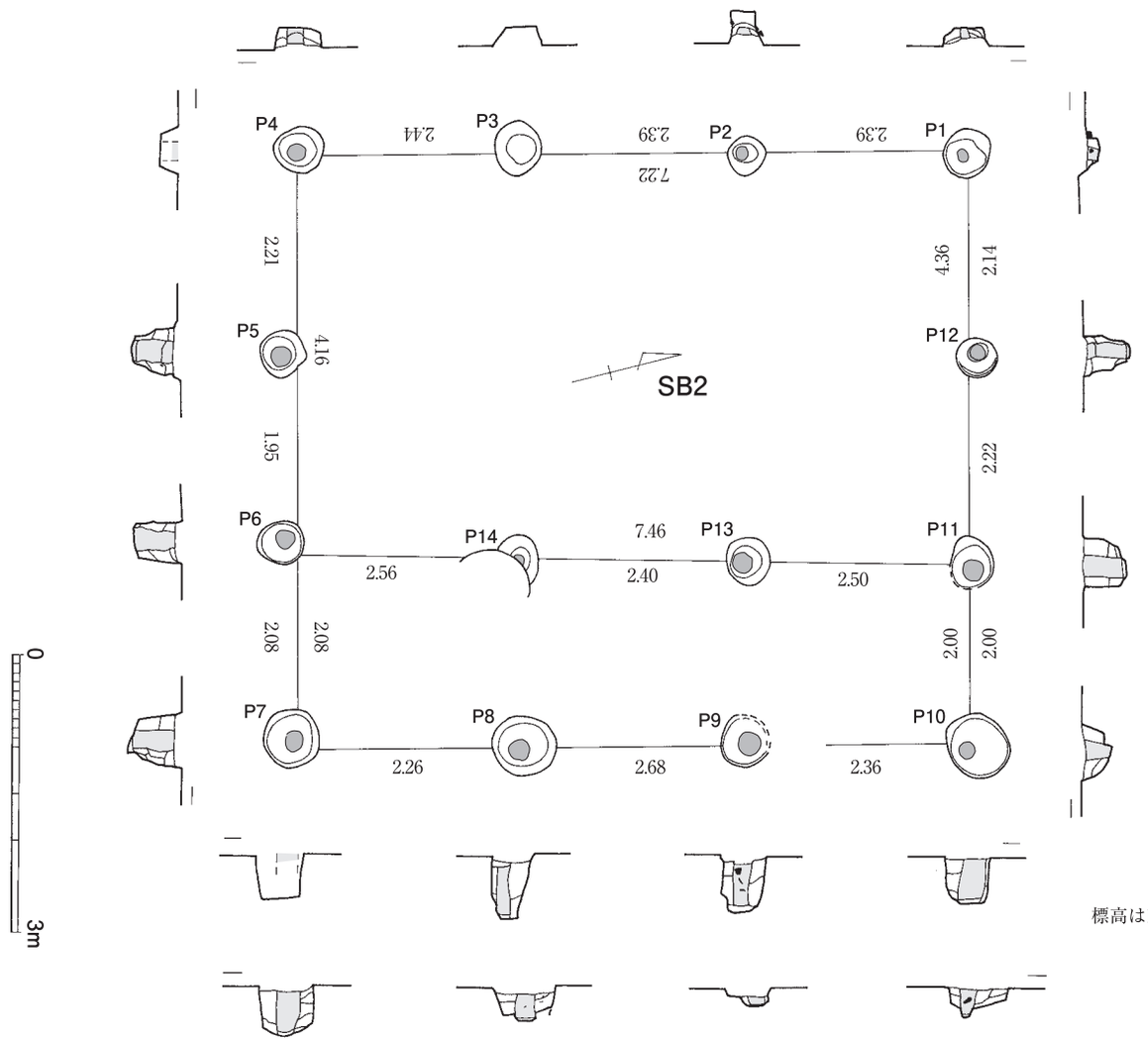
調査区の北東部、SB １南東隅とSB ２の間に位置する南北棟である。建物は南北２間、東西２間と考えられ、桁行（東西）全長は5.0m、桁行柱間は2.34 ～ 2.66m、梁行（南北）全長2.68m、梁行柱間は1.32 ～ 1.36mを測る。柱掘り方は円形で、径0.31 ～ 0.47m、深さ0.14 ～ 0.20m、柱痕跡は確認できなかった。面積は13.40㎡。遺物はＰ４から土師器坏（75）が出土している。

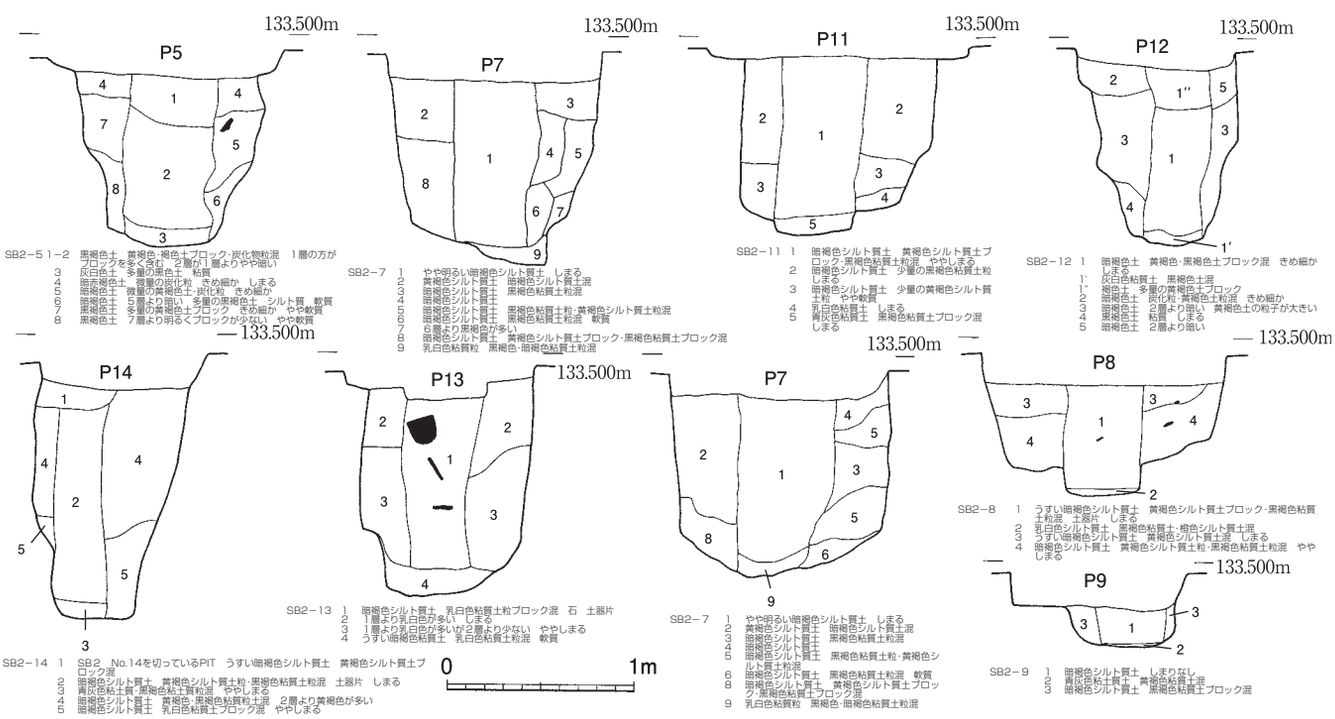
SB29（第32図）

調査区の中央西よりで、池状遺構およびSE ９と重複する。建物は南北１間、桁方向については４間の可能性が高い。桁行（東西）全長は約8.0mと想定され、桁行柱間は1.70 ～ 2.70mと一定でなく、梁行（南北）全長2.58mを測る。柱掘り方は円形で、径0.35 ～ 0.58m、深さ0.10 ～ 0.38m、柱痕跡は二カ所で確認され径0.17 ～ 0.21mを測る。遺物はＰ７から土師器坏（76）が出土している。

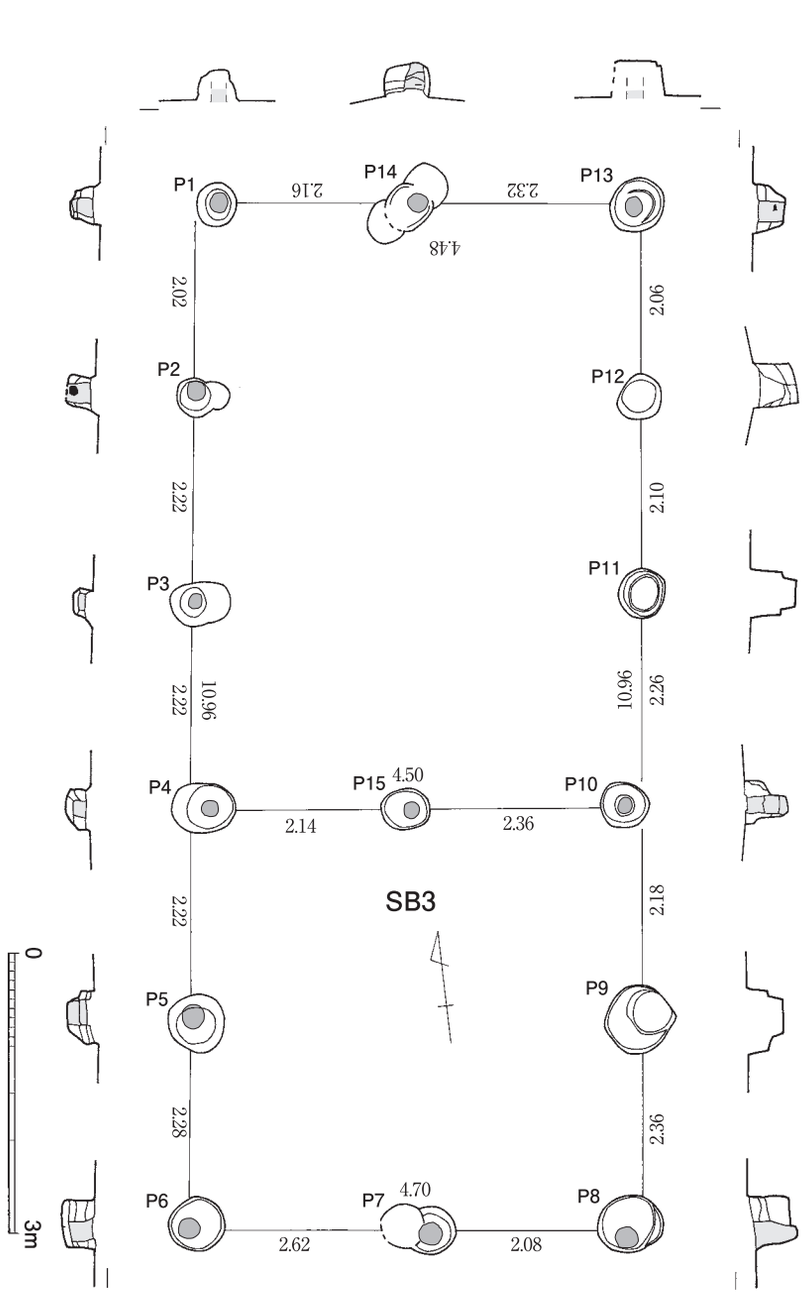
SB30（第31図）

調査区の中央付近、SB ７のすぐ東にあり、SE ６やSE ７に接するように位置する東西棟である。建物は東西３間、南北１間で、桁行（東西）全長は6.50m、桁行柱間は2.04 ～ 2.34m、梁行（南北）全長1.50mを測る。

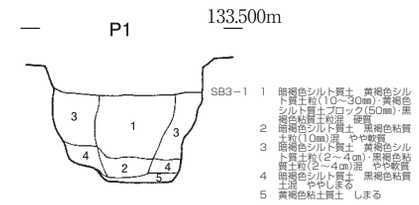

P4
P3
P2
P1
2.44
2.39
2.39
7.22
2.21
4.36
2.14
P5
P12
4.16
SB2
1.95
2.22
P6
P14
P13
P11
7.46
2.56
2.40
2.50
2.08
2.08
2.00
2.00
P7
P8
P9
P10
2.26
2.68
2.36
0
3m
標高は133.600m

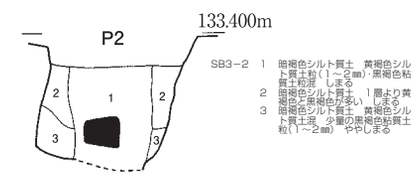

133.500m
P5
SB2－5 1－2 黒褐色土 黄褐色・褐色土ブロック・炭化物粒混 1層の方がブロックを多く含む 2層が1層よりやや暗い
3 灰白色土 多量の黒色土 粘質
4 暗赤褐色土 微量の炭化粒 きめ細か しまる
5 暗褐色土 微量の黄褐色土・炭化粒 きめ細か
6 暗褐色土 5層より暗い 多量の黒褐色土 シルト質 軟質
7 黒褐色土 多量の黄褐色土ブロック きめ細か やや軟質
8 黒褐色土 7層より明るくブロックが少ない やや軟質
133.500m
P7
SB2－7 1 やや明るい暗褐色シルト質土 しまる
2 黄褐色シルト質土 暗褐色シルト質土混
3 暗褐色シルト質土 黒褐色粘質土粒混
4 暗褐色シルト質土
5 暗褐色シルト質土 黒褐色粘質土粒・黄褐色シルト質土粒混
6 暗褐色シルト質土 黒褐色粘質土粒混 軟質
7 6層より黒褐色が多い
8 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土ブロック・黒褐色粘質土ブロック混
9 乳白色粘質粒 黒褐色・暗褐色粘質土粒混
133.500m
P11
SB2－11 1 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土ブロック・黒褐色粘質土粒混 ややしまる
2 暗褐色シルト質土 少量の黒褐色粘質土粒 しまる
3 暗褐色シルト質土 少量の黄褐色シルト質土粒 やや軟質
4 乳白色粘質土 しまる
5 青灰色粘質土 黒褐色粘質土ブロック混 しまる
133.500m
P12
SB2－12 1 暗褐色土 黄褐色・黒褐色土ブロック混 きめ細かしまる
1' 灰白色粘質土 黒褐色土混
1'' 褐色土 多量の黄褐色土ブロック
2 暗褐色土 炭化粒・黄褐色土粒混 きめ細か
3 暗褐色土 2層より暗い 黄褐色土の粒子が大きい
4 黒褐色土 粘質 しまる
5 暗褐色土 2層より暗い
133.500m
P14
SB2－14 1 SB2 No.14を切っているPIT うすい暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土ブロック混
2 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土粒・黒褐色粘質土粒混 土器片 しまる
3 青灰色粘土質・黒褐色粘土質粒混 ややしまる
4 暗褐色シルト質土 黄褐色・黒褐色粘質粒土混 2層より黄褐色が多い
5 暗褐色シルト質土 乳白色粘質土ブロック混 ややしまる
133.500m
P13
SB2－13 1 暗褐色シルト質土 乳白色粘質土粒ブロック混 石 土器片
2 1層より乳白色が多い しまる
3 1層より乳白色が多いが2層より少ない ややしまる
4 うすい暗褐色粘質土 乳白色粘質土粒混 軟質
0 1m
133.500m
P7
SB2－7 1 やや明るい暗褐色シルト質土 しまる
2 黄褐色シルト質土 暗褐色シルト質土混
3 暗褐色シルト質土 黒褐色粘質土粒混
4 暗褐色シルト質土
5 暗褐色シルト質土 黒褐色粘質土粒・黄褐色シルト質土粒混
6 暗褐色シルト質土 黒褐色粘質土粒混 軟質
8 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土ブロック・黒褐色粘質土ブロック混
9 乳白色粘質粒 黒褐色・暗褐色粘質土粒混
133.500m
P8
SB2－8 1 うすい暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土ブロック・黒褐色粘質土粒混 土器片 しまる
2 乳白色シルト質土 黒褐色粘質土・褐色シルト質土混
3 うすい暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土混 しまる
4 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土粒・黒褐色粘質土粒混 ややしまる
133.500m
P9
SB2－9 1 暗褐色シルト質土 しまりなし
2 青灰色粘土質土 黄褐色粘質土混
3 暗褐色シルト質土 黒褐色粘質土ブロック混

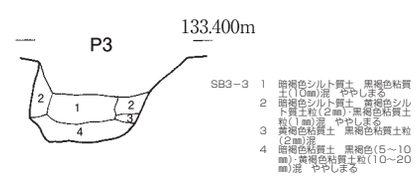
第16図　SB 2実測図

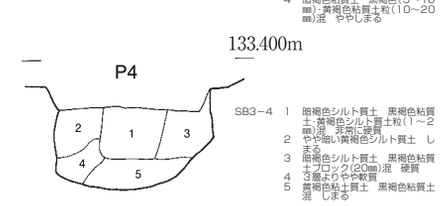


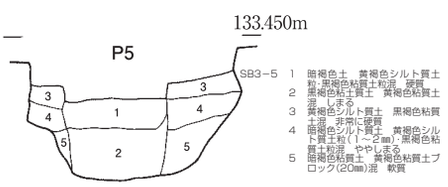
標高は133.500m

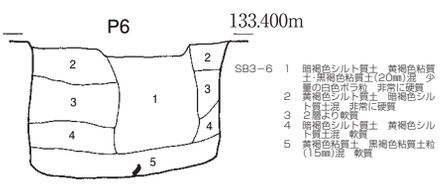


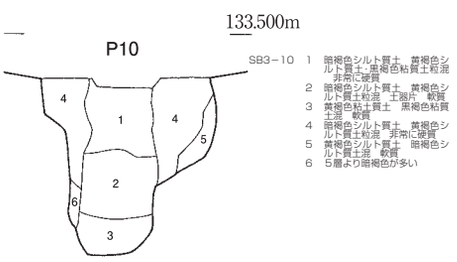


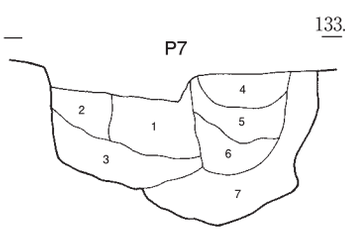


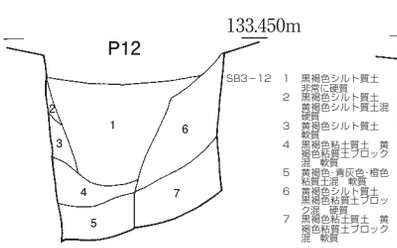


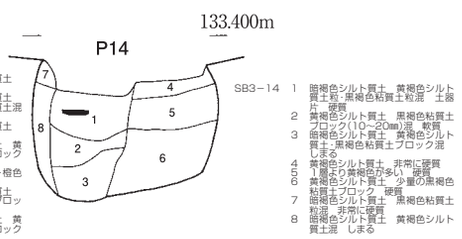








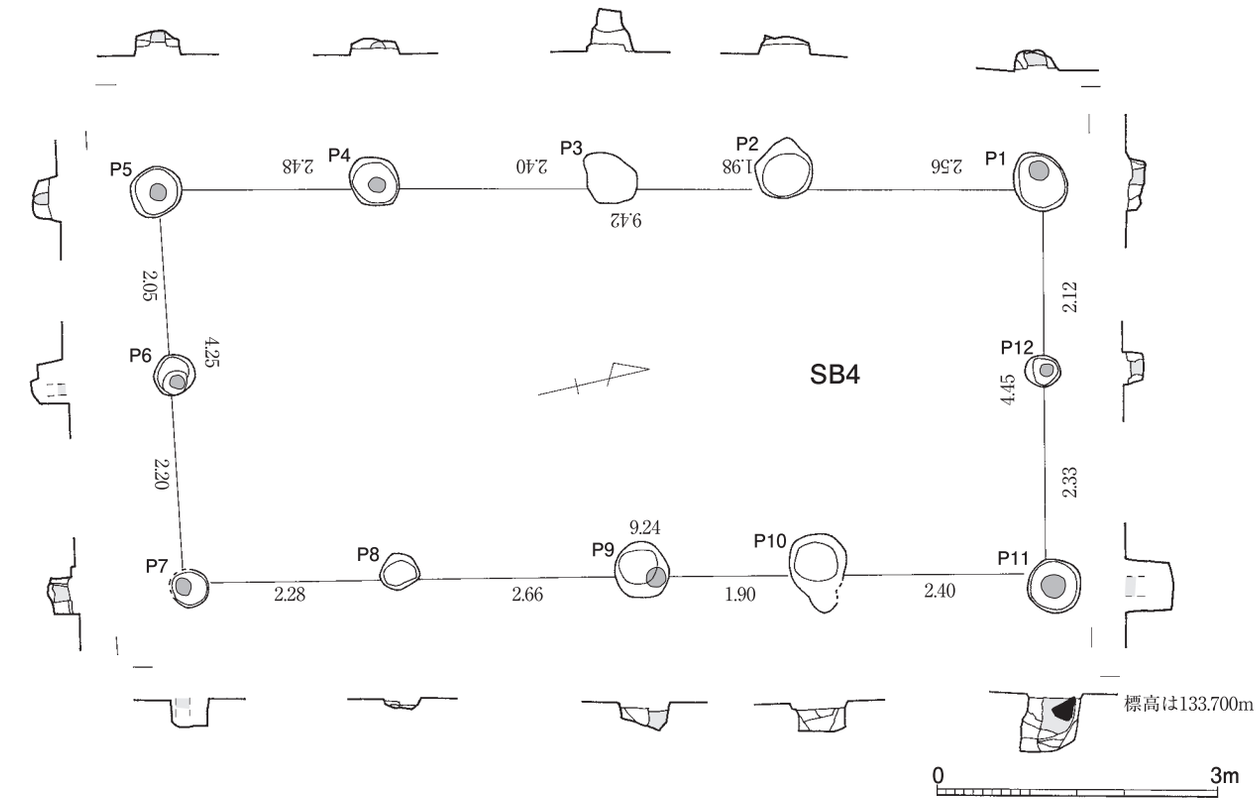


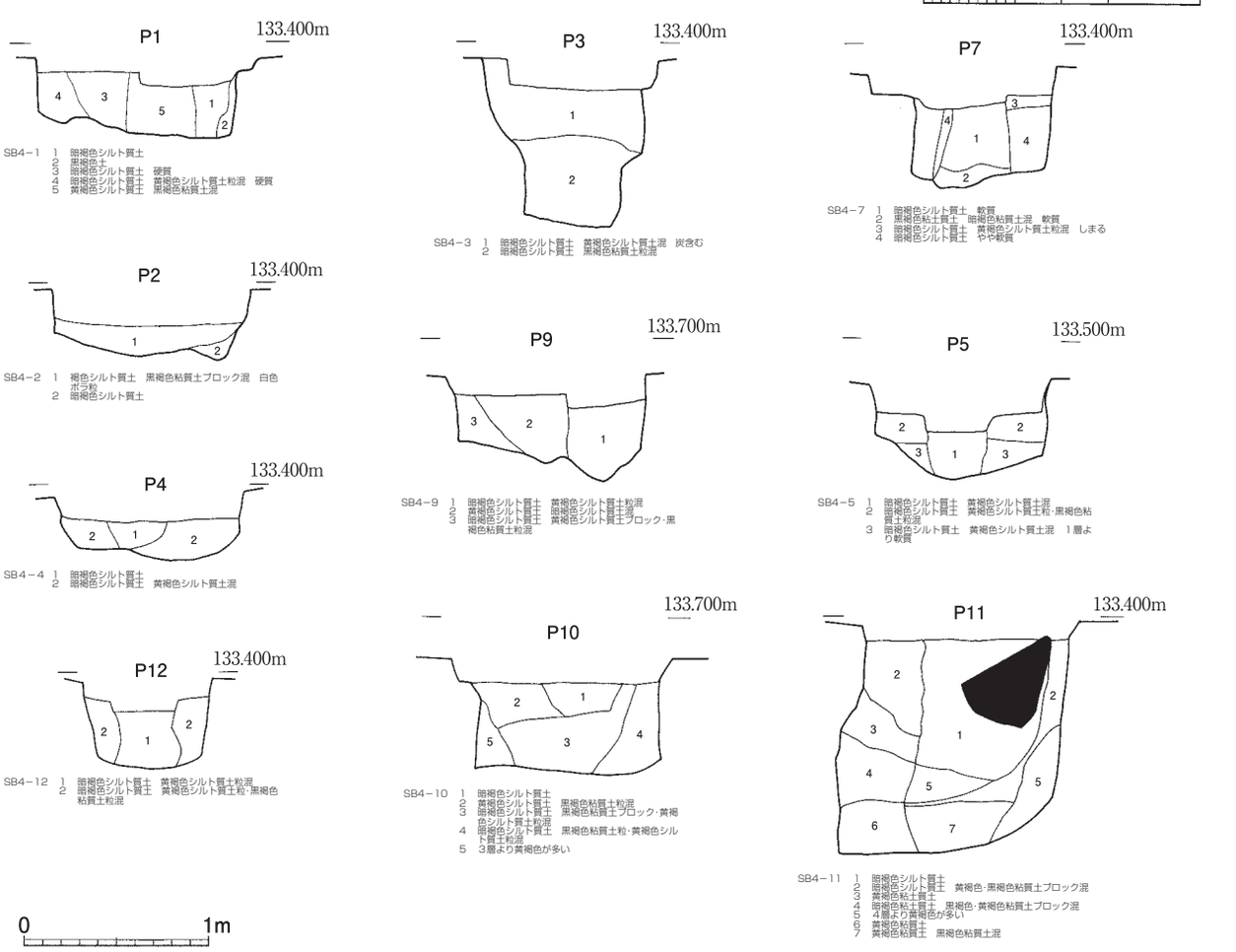


SB3−7 1 暗褐色シルト質土 褐色シルト質土・黄褐色シルト質土粒(ポラ粒)混 ややしまる
2 黒褐色シルト質土 黒色シルト質土・黄褐色シルト質土粒(ポラ粒)混 土器小片 ややしまる
3 黒褐色シルト質土 褐色・黒色シルト質土・黄褐色シルト質土粒(ポラ粒？)混 砂質性が強い 軟質
4 褐色シルト質土 黒色・灰褐色シルト質土混 しまる
5 3層に類似 黒褐色・褐色・黒色シルト質土・黄褐色シルト質土粒(ポラ粒)混 砂質性が強い 軟質
6 暗褐色粘質土 黒色・褐色シルト質土混 黄褐色ポラ粒 軟質
7 褐色シルト質土 黒色シルト質土混 やや粘性 やや軟質①(1～3)の柱穴が②(4～7)を切っている

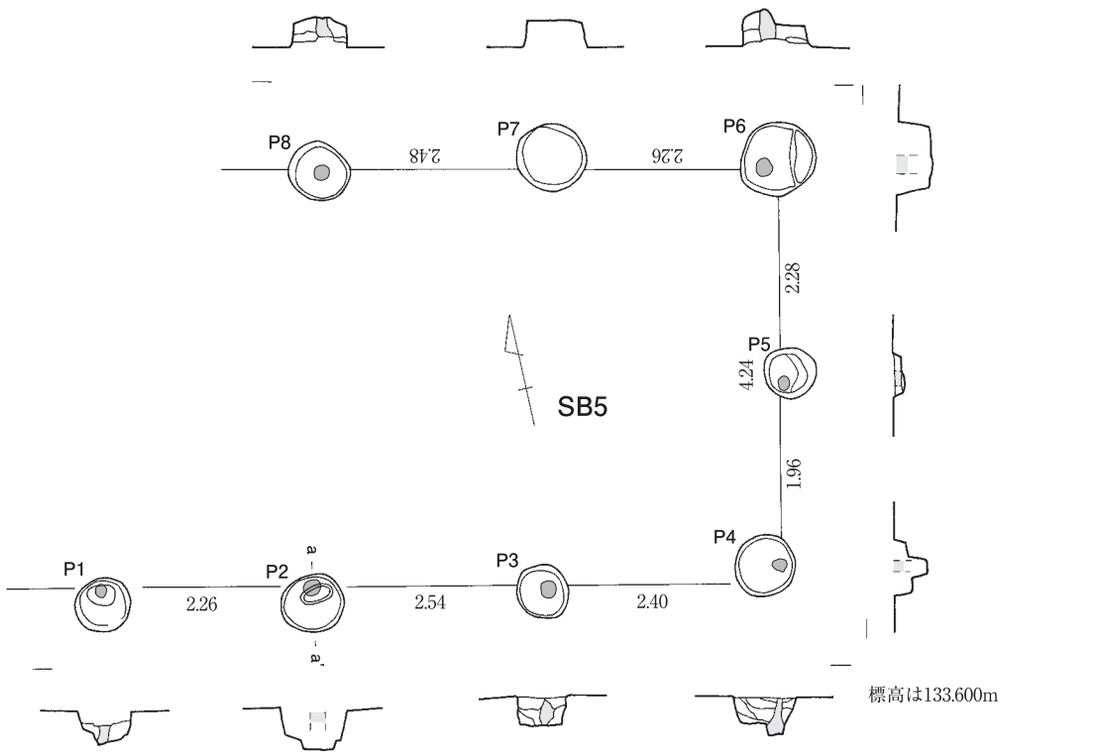
0 1m

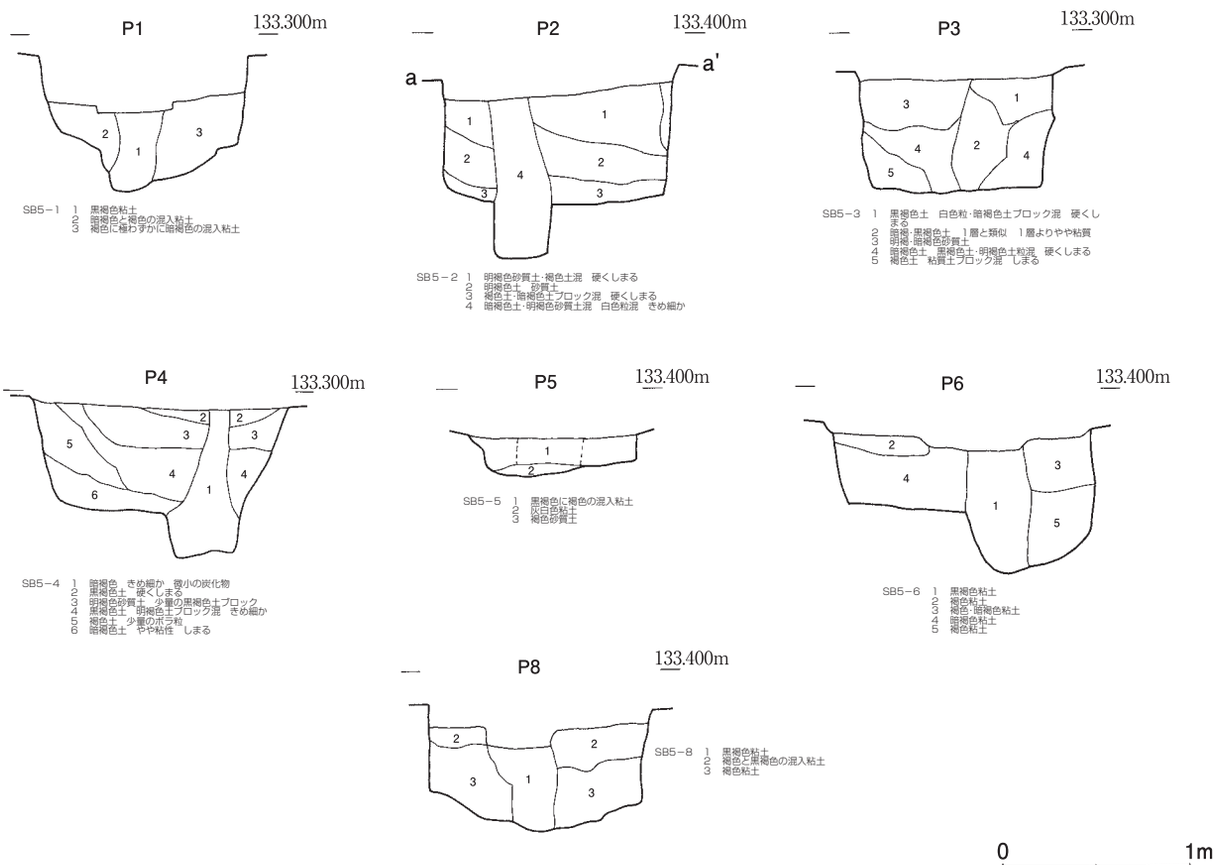
第17図 SB 3実測図


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
SB4
2.56
1.98
2.40
2.48
9.42
2.12
4.45
2.33
4.25
2.05
2.20
9.24
2.28
2.66
1.90
2.40
標高は133.700m
0
3m

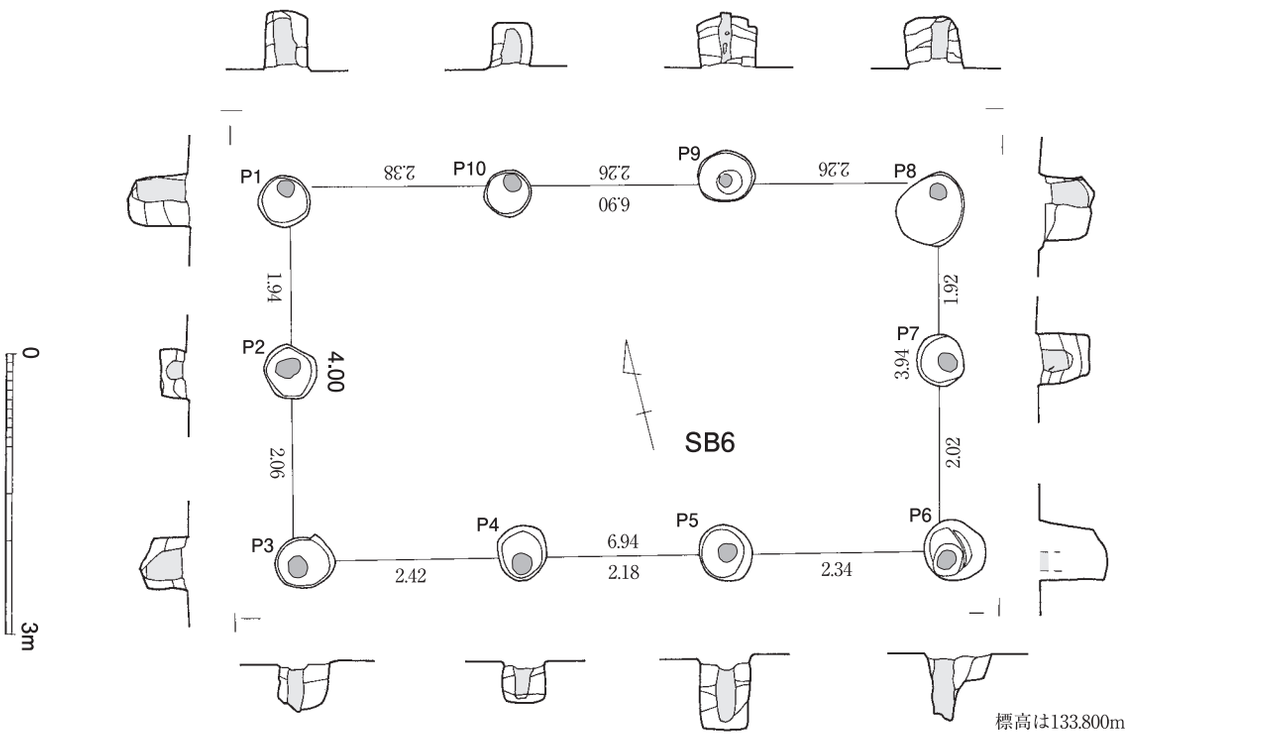

P1 133.400m
SB4−1 1 暗褐色シルト質土
2 黒褐色土
3 暗褐色シルト質土 硬質
4 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土粒混 硬質
5 黄褐色シルト質土 黒褐色粘質土混
P3 133.400m
SB4−3 1 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土混 炭含む
2 暗褐色シルト質土 黒褐色粘質土粒混
P7 133.400m
SB4−7 1 暗褐色シルト質土 軟質
2 黒褐色粘土質土 暗褐色粘質土混 軟質
3 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土粒混 しまる
4 暗褐色シルト質土 やや軟質
P2 133.400m
SB4−2 1 褐色シルト質土 黒褐色粘質土ブロック混 白色ポラ粒
2 暗褐色シルト質土
P9 133.700m
SB4−9 1 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土粒混
2 黄褐色シルト質土 暗褐色シルト質土
3 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土ブロック・黒褐色粘質土粒混
P5 133.500m
SB4−5 1 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土混
2 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土粒・黒褐色粘質土粒混
3 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土混 1層より軟質
P4 133.400m
SB4−4 1 暗褐色シルト質土
2 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土混
P10 133.700m
SB4−10 1 暗褐色シルト質土
2 黄褐色シルト質土 黒褐色粘質土粒混
3 暗褐色シルト質土 黒褐色粘質土ブロック・黄褐色シルト質土粒混
4 暗褐色シルト質土 黒褐色粘質土粒・黄褐色シルト質土粒混
5 3層より黄褐色が多い
P11 133.400m
SB4−11 1 暗褐色シルト質土
2 暗褐色シルト質土 黄褐色・黒褐色粘質土ブロック混
3 黄褐色粘土質土
4 暗褐色粘土質土 黒褐色・黄褐色粘質土ブロック混
5 4層より黄褐色が多い
6 黄褐色粘質土
7 黄褐色粘質土 黒褐色粘質土混
P12 133.400m
SB4−12 1 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土粒混
2 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土粒・黒褐色粘質土粒混
0
1m

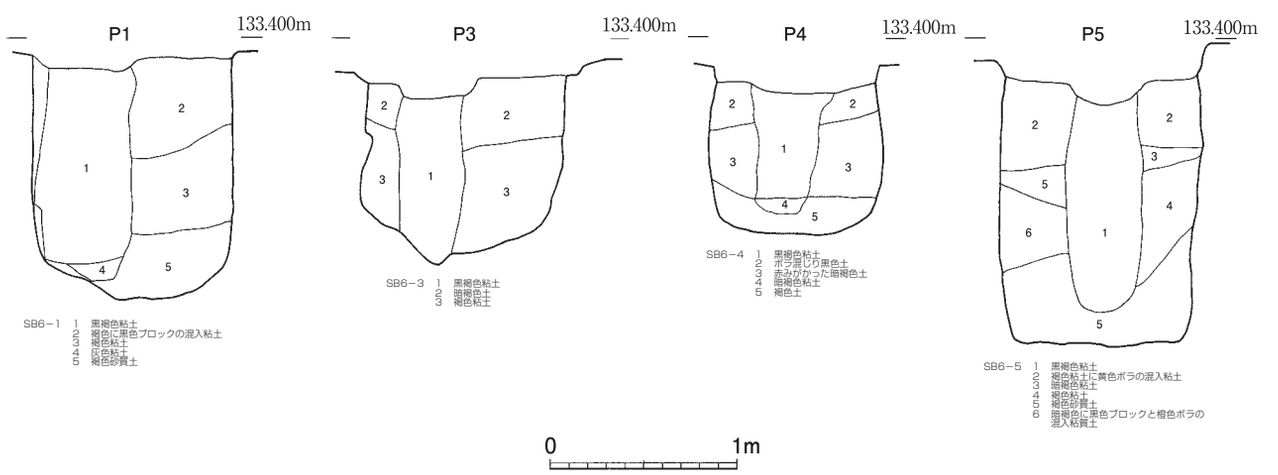
第18図　SB 4実測図

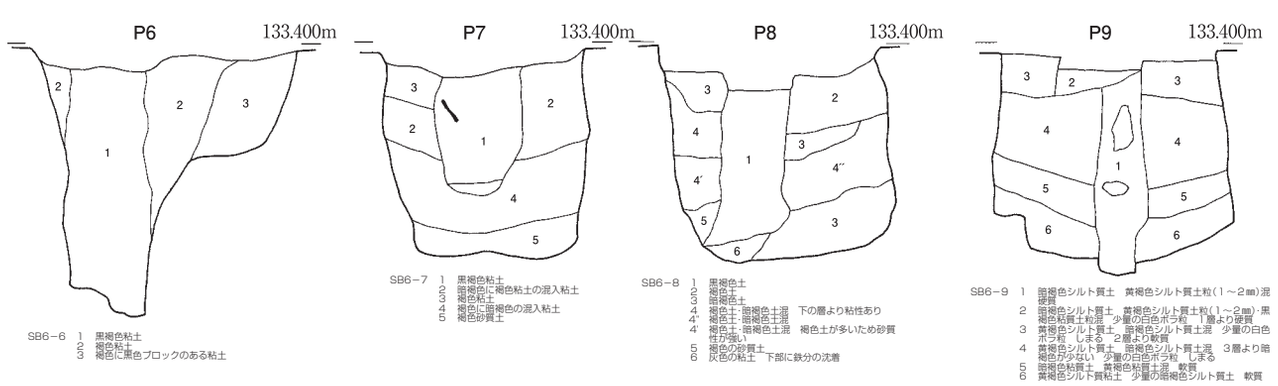

P8
P7
P6
P5
P4
P3
P2
P1
SB5
2.48
2.26
2.28
4.24
1.96
2.26
2.54
2.40
a
a'
標高は133.600m
0
3m


P1
133.300m
SB5－1 1 黒褐色粘土
2 暗褐色と褐色の混入粘土
3 褐色に極わずかに暗褐色の混入粘土
P2
133.400m
a
a'
SB5－2 1 明褐色砂質土・褐色土混 硬くしまる
2 明褐色土 砂質土
3 褐色土・暗褐色土ブロック混 硬くしまる
4 暗褐色土・明褐色砂質土混 白色粒混 きめ細か
P3
133.300m
SB5－3 1 黒褐色土 白色粒・暗褐色土ブロック混 硬くしまる
2 暗褐・黒褐色土 1層と類似 1層よりやや粘質
3 明褐・暗褐色砂質土
4 暗褐色土 黒褐色土・明褐色土粒混 硬くしまる
5 褐色土 粘質土ブロック混 しまる
P4
133.300m
SB5－4 1 暗褐色 きめ細か 微小の炭化物
2 黒褐色土 硬くしまる
3 明褐色砂質土 少量の黒褐色土ブロック
4 黒褐色土 明褐色土ブロック混 きめ細か
5 褐色土 少量のボラ粒
6 暗褐色土 やや粘性 しまる
P5
133.400m
SB5－5 1 黒褐色に褐色の混入粘土
2 灰白色粘土
3 褐色砂質土
P6
133.400m
SB5－6 1 黒褐色粘土
2 褐色粘土
3 褐色・暗褐色粘土
4 暗褐色粘土
5 褐色粘土
P8
133.400m
SB5－8 1 黒褐色粘土
2 褐色と黒褐色の混入粘土
3 褐色粘土
0
1m

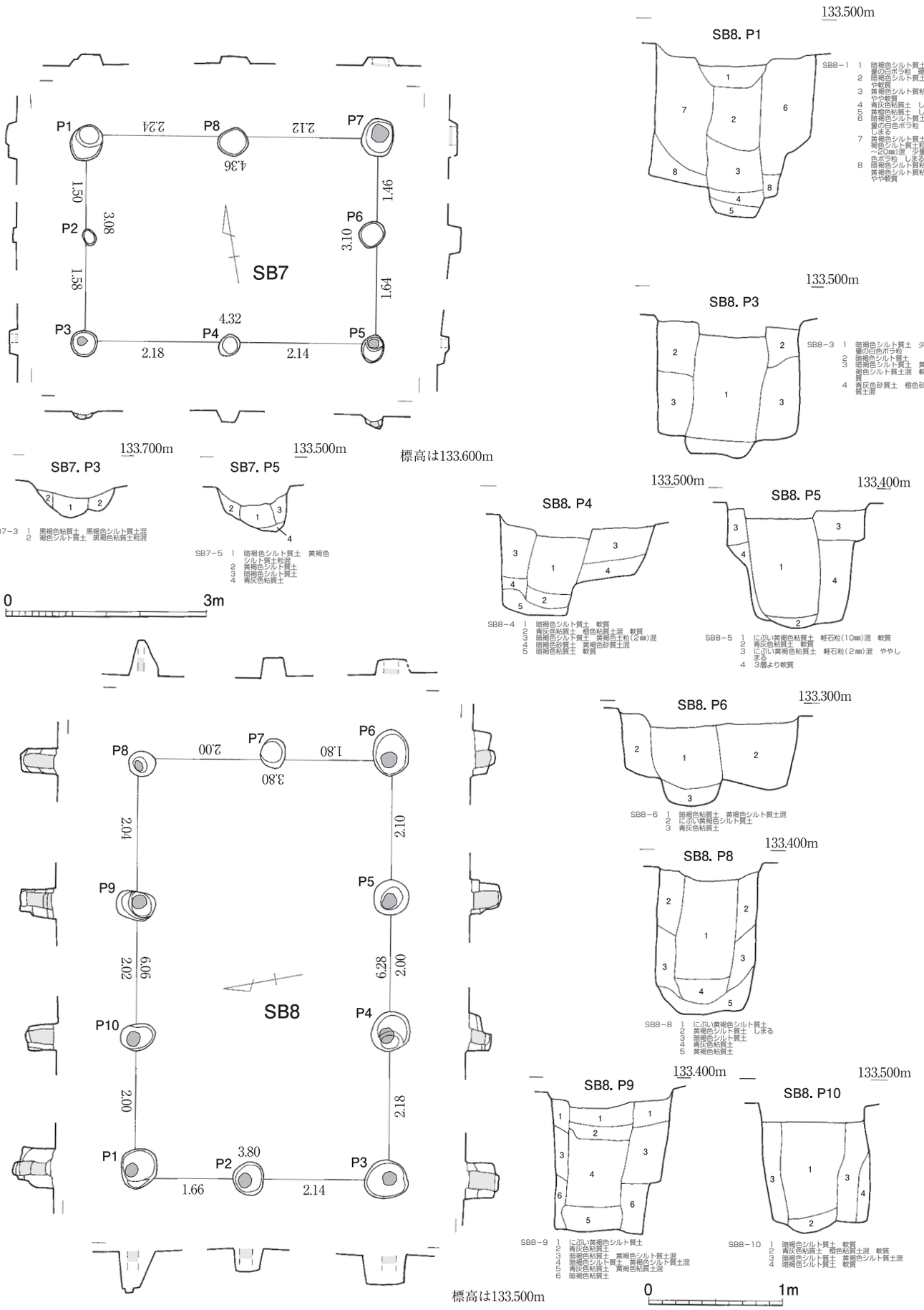
第19図　SB 5実測図


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
SB6
2.38
2.26
6.90
2.26
1.94
4.00
1.92
3.94
2.06
2.02
6.94
2.42
2.18
2.34
0
3m
標高は133.800m

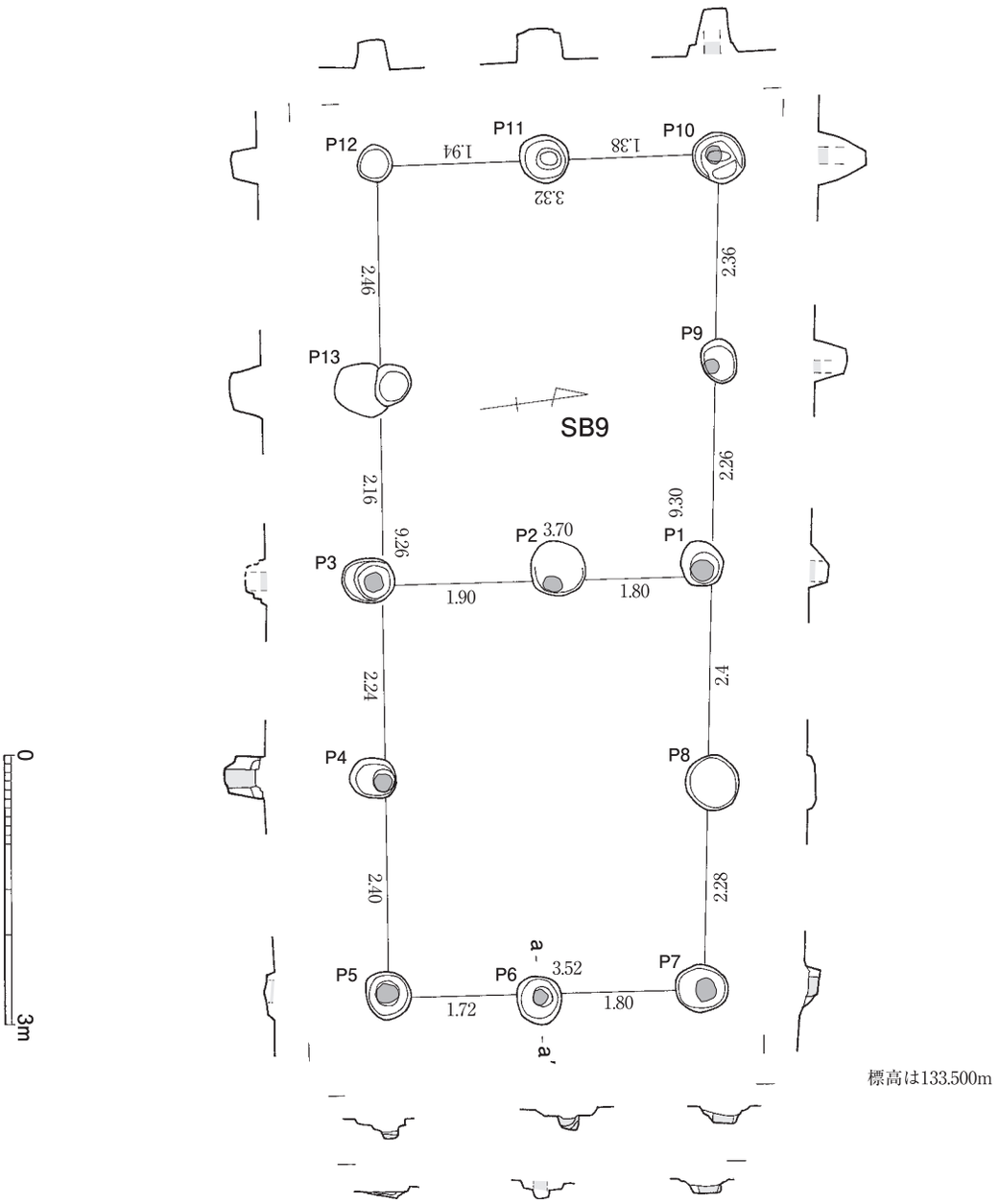

P1
133.400m
SB6－1 1 黒褐色粘土
2 褐色に黒色ブロックの混入粘土
3 褐色粘土
4 灰色粘土
5 褐色砂質土
P3
133.400m
SB6－3 1 黒褐色粘土
2 暗褐色土
3 褐色粘土
P4
133.400m
SB6－4 1 黒褐色粘土
2 ボラ混じり黒色土
3 赤みがかった暗褐色土
4 暗褐色粘土
5 褐色土
P5
133.400m
SB6－5 1 黒褐色粘土
2 褐色粘土に黄色ボラの混入粘土
3 暗褐色粘土
4 褐色粘土
5 褐色砂質土
6 暗褐色に黒色ブロックと橙色ボラの混入粘質土
0
1m

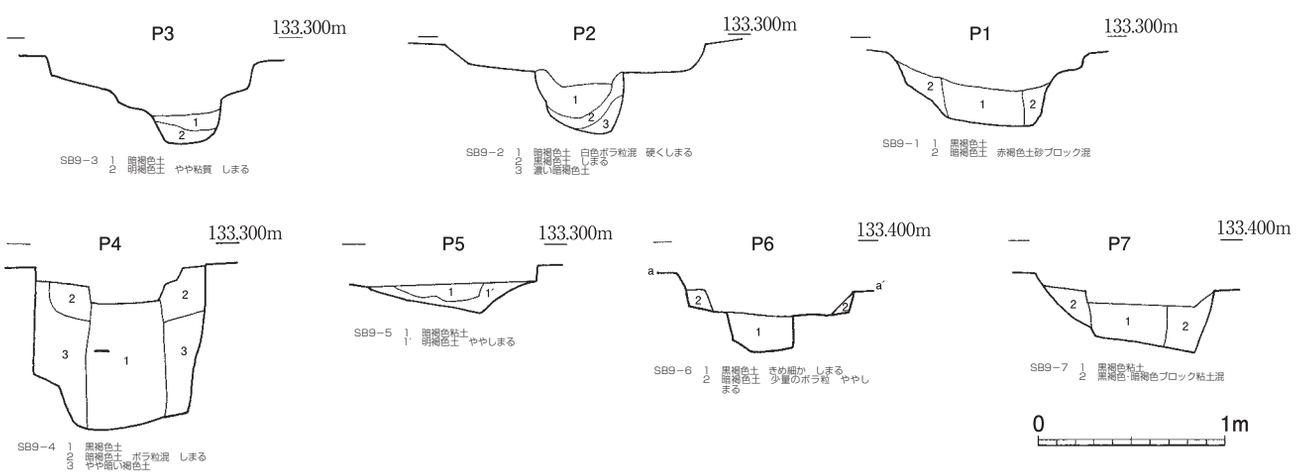

P6
133.400m
SB6－6 1 黒褐色粘土
2 褐色粘土
3 褐色に黒色ブロックのある粘土
P7
133.400m
SB6－7 1 黒褐色粘土
2 暗褐色に褐色粘土の混入粘土
3 褐色粘土
4 褐色に暗褐色の混入粘土
5 褐色砂質土
P8
133.400m
SB6－8 1 黒褐色土
2 褐色土
3 暗褐色土
4 褐色土：暗褐色土混 下の層より粘性あり
4' 褐色土：暗褐色土混
4'' 褐色土：暗褐色土混 褐色土が多いため砂質性が強い
5 褐色の砂質土
6 灰色の粘土 下部に鉄分の沈着
P9
133.400m
SB6－9 1 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土粒(1～2㎜)混 硬質
2 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土粒(1～2㎜)・黒褐色粘質土粒混 少量の白色ボラ粒 1層より硬質
3 黄褐色シルト質土 暗褐色シルト質土混 少量の白色ボラ粒 しまる 2層より軟質
4 黄褐色シルト質土 暗褐色シルト質土混 3層より暗褐色が少ない 少量の白色ボラ粒 しまる
5 暗褐色粘質土 黄褐色粘質土混 軟質
6 黄褐色シルト質粘土 少量の暗褐色シルト質土 軟質

第20図　SB 6実測図

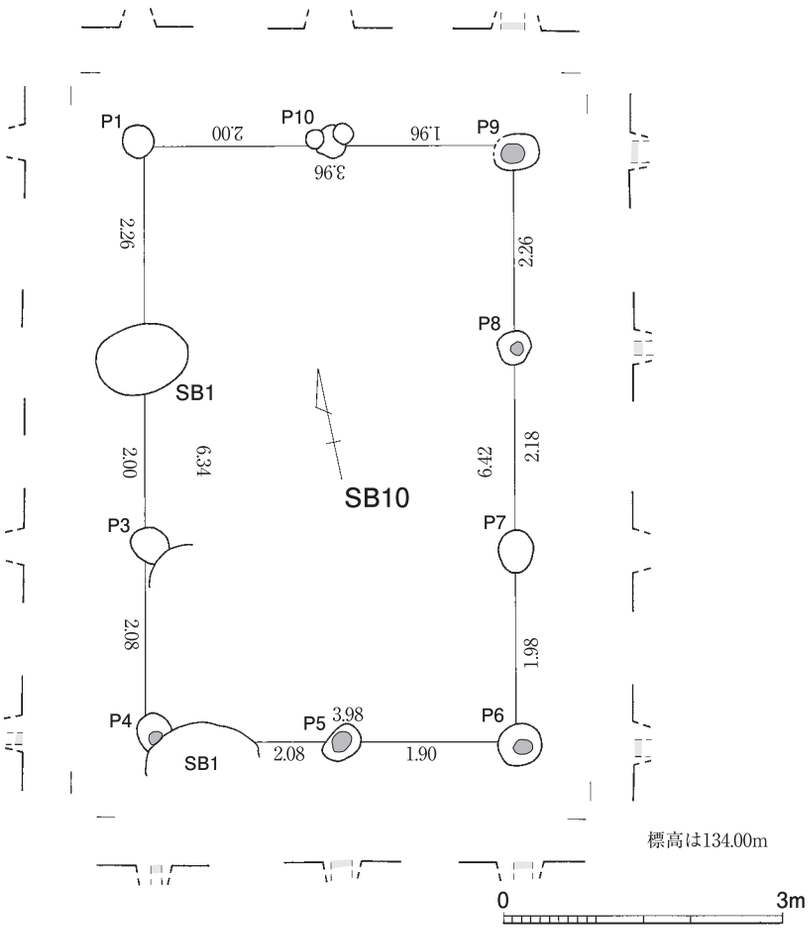


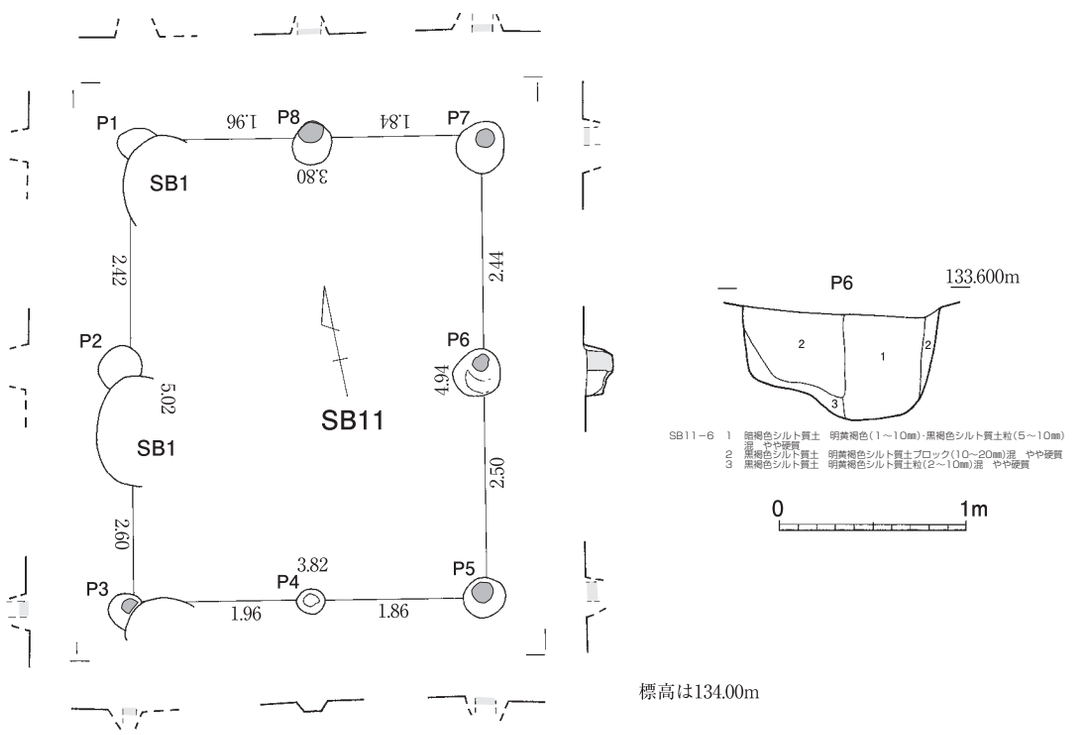
第21図　SB 7・8実測図


P12
P11
P10
P13
P9
P3
P2
P1
P4
P8
P5
P6
P7
SB9
1.94
1.38
3.32
2.46
2.36
2.16
2.26
9.26
9.30
3.70
1.90
1.80
2.24
2.4
2.40
2.28
3.52
1.72
1.80
a
a'
0
3m
標高は133.500m

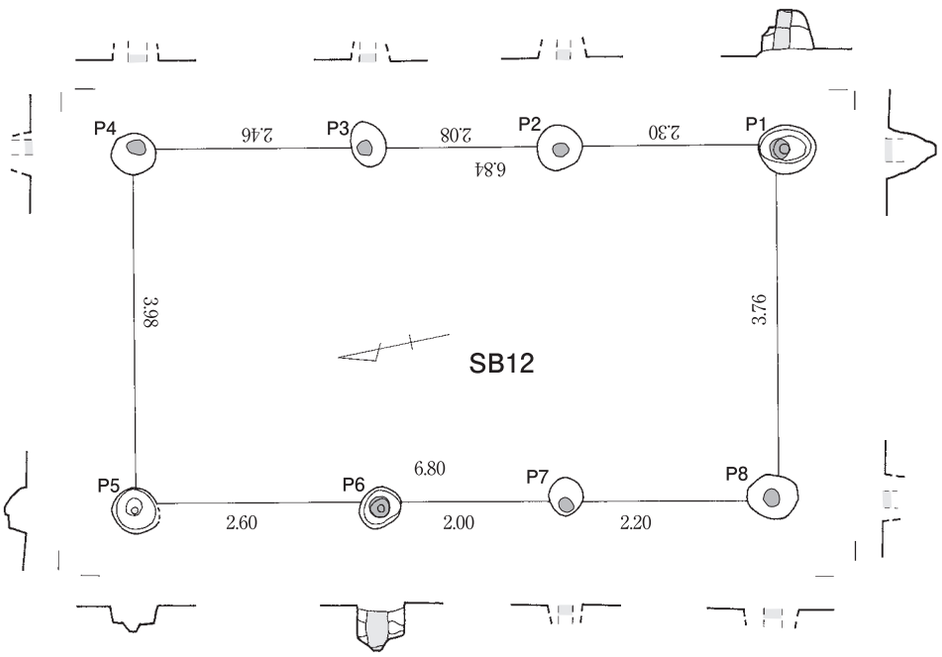

P3
133.300m
SB9－3 1 暗褐色土
2 明褐色土 やや粘質 しまる
P2
133.300m
SB9－2 1 暗褐色土 白色ボラ粒混 硬くしまる
2 暗褐色土 しまる
3 濃い暗褐色土
P1
133.300m
SB9－1 1 黒褐色土
2 暗褐色土 赤褐色土砂ブロック混
P4
133.300m
SB9－4 1 黒褐色土
2 暗褐色土 ボラ粒混 しまる
3 やや薄い褐色土
P5
133.300m
SB9－5 1 暗褐色粘土
1' 明褐色土 ややしまる
P6
133.400m
SB9－6 1 黒褐色土 きめ細か しまる
2 暗褐色土 少量のボラ粒 ややしまる
P7
133.400m
SB9－7 1 黒褐色粘土
2 黒褐色・暗褐色ブロック粘土混
0
1m

第22図　SB 9実測図

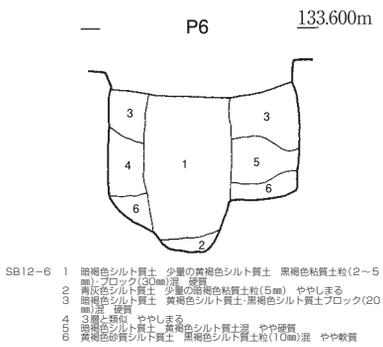




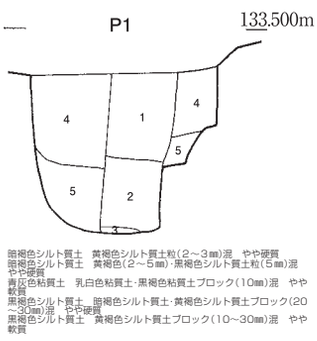
第23図　SB10・11実測図



標高は133.800m

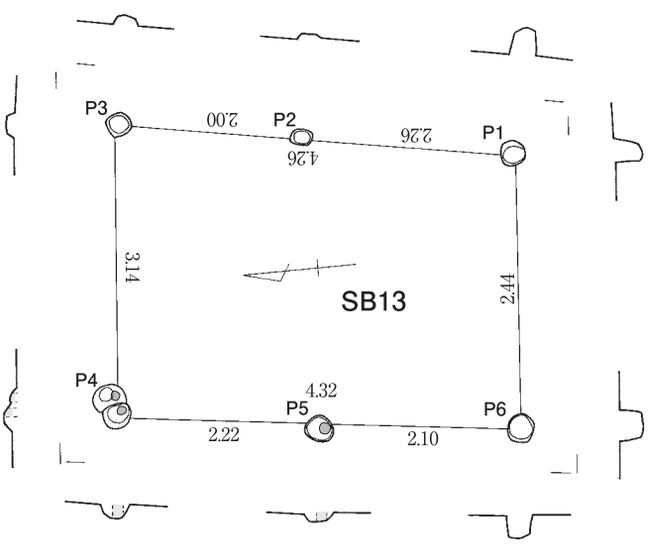


SB12−6　1　暗褐色シルト質土　少量の黄褐色シルト質土　黒褐色粘質土粒(2～5㎜)･ブロック(30㎜)混　硬質
2　青灰色シルト質土　少量の暗褐色粘質土粒(5㎜)　ややしまる
3　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土･黒褐色シルト質土ブロック(20㎜)混　硬質
4　3層と類似　ややしまる
5　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土混　やや硬質
6　黄褐色砂質シルト質土　黒褐色シルト質土粒(10㎜)混　やや軟質



SB12−1　1　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒(2～3㎜)混　やや硬質
2　暗褐色シルト質土　黄褐色(2～5㎜)･黒褐色シルト質土粒(5㎜)混　やや硬質
3　青灰色粘質土　乳白色粘質土･黒褐色粘質土ブロック(10㎜)混　やや軟質
4　黒褐色シルト質土　暗褐色シルト質土･黄褐色シルト質土ブロック(20～30㎜)混　やや硬質
5　黒褐色シルト質土　黄褐色シルト質土ブロック(10～30㎜)混　やや軟質

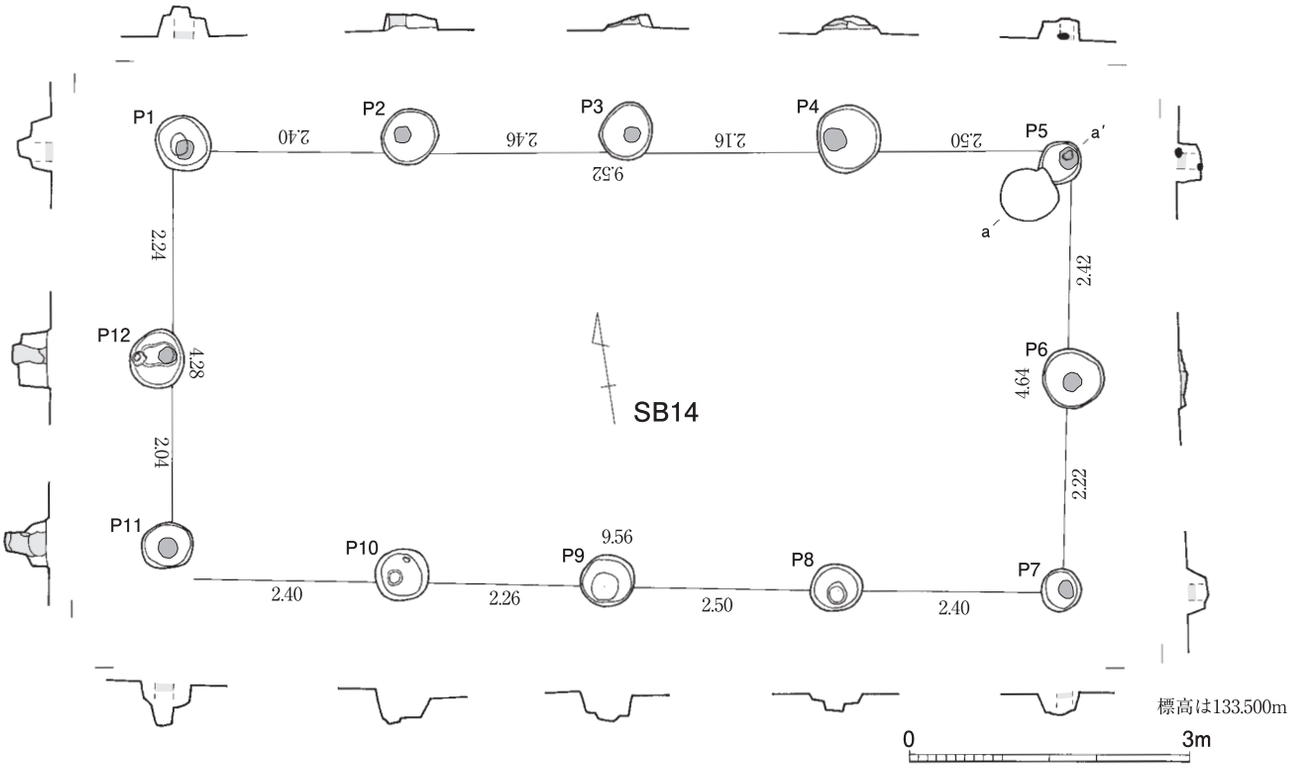
0　1m

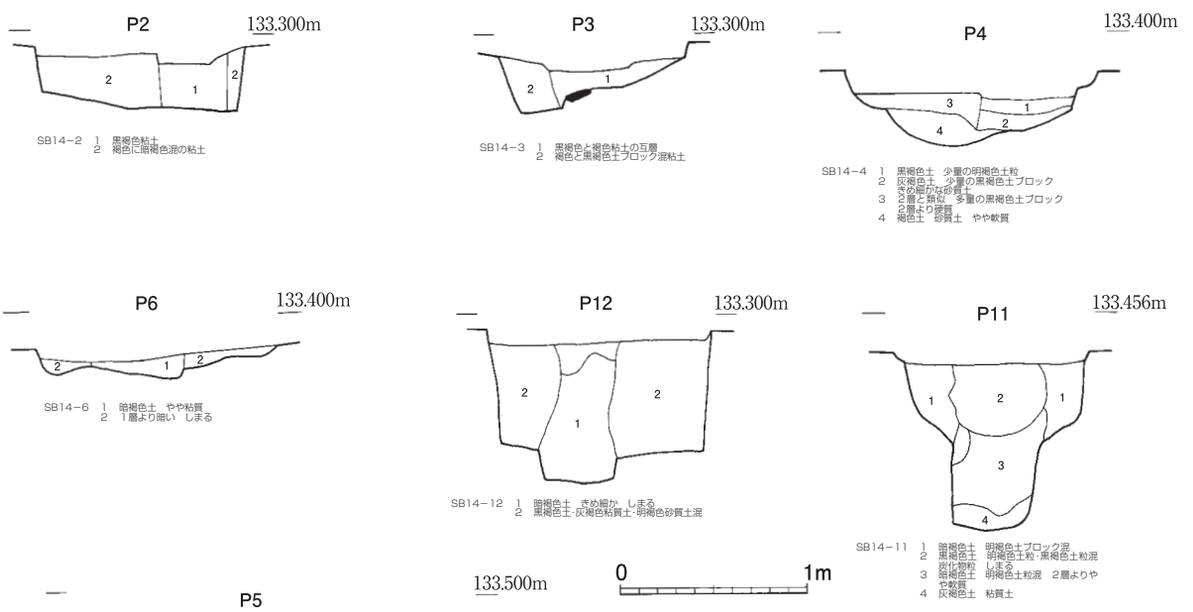


標高は133.820m

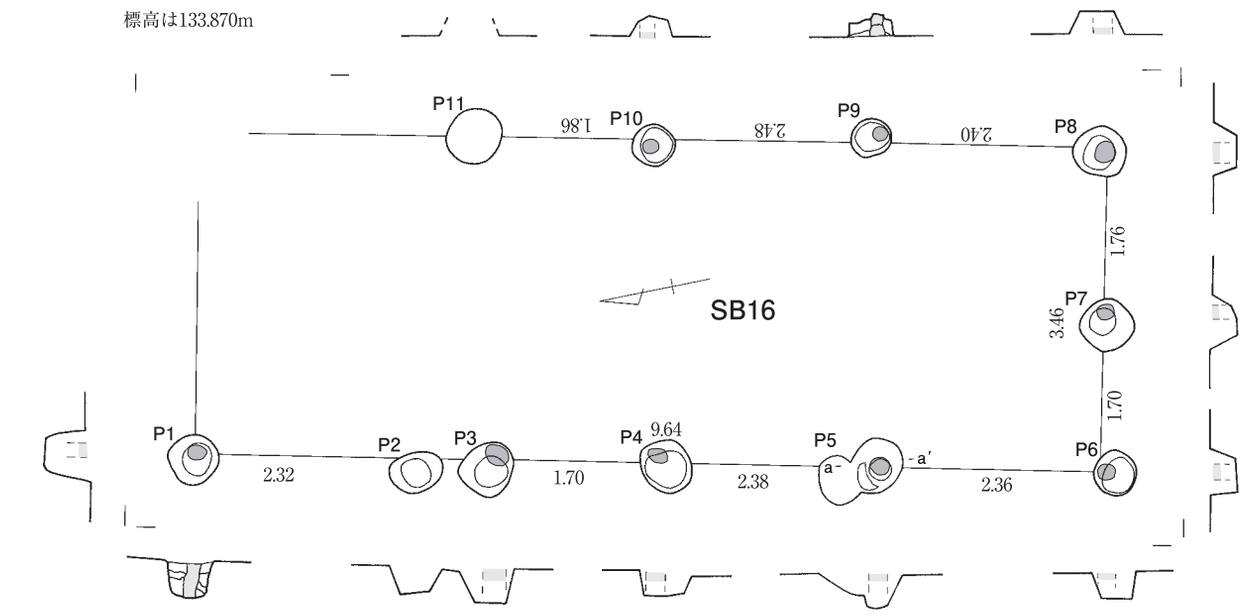
0　3m

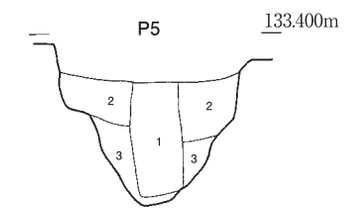
第24図　SB12・13実測図



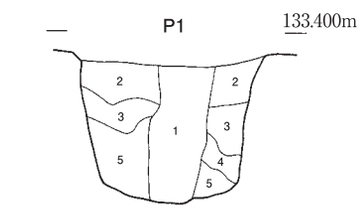


第25図　SB14実測図

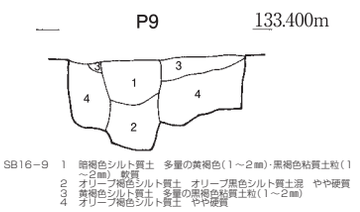




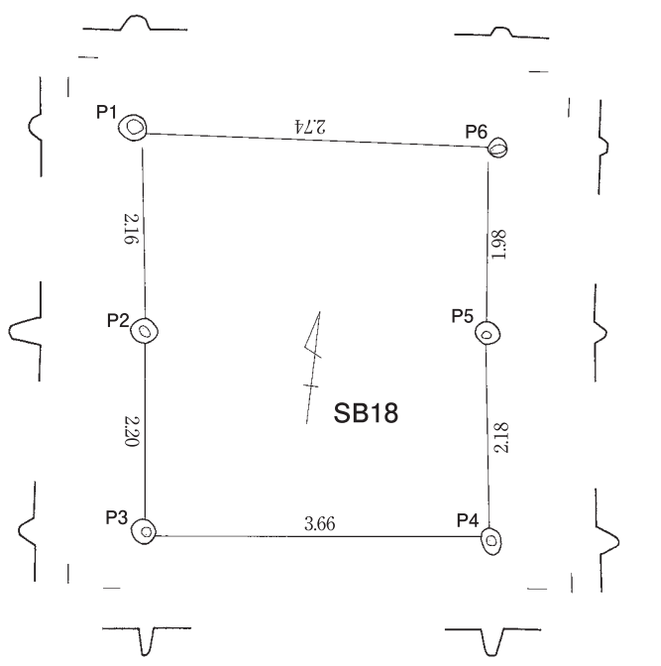
SB16−5　1　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土・黒褐色粘質土ブロック混　軟質
2　黄褐色シルト質土　ややしまる
3　1層より黒褐色が多い　少し軟質



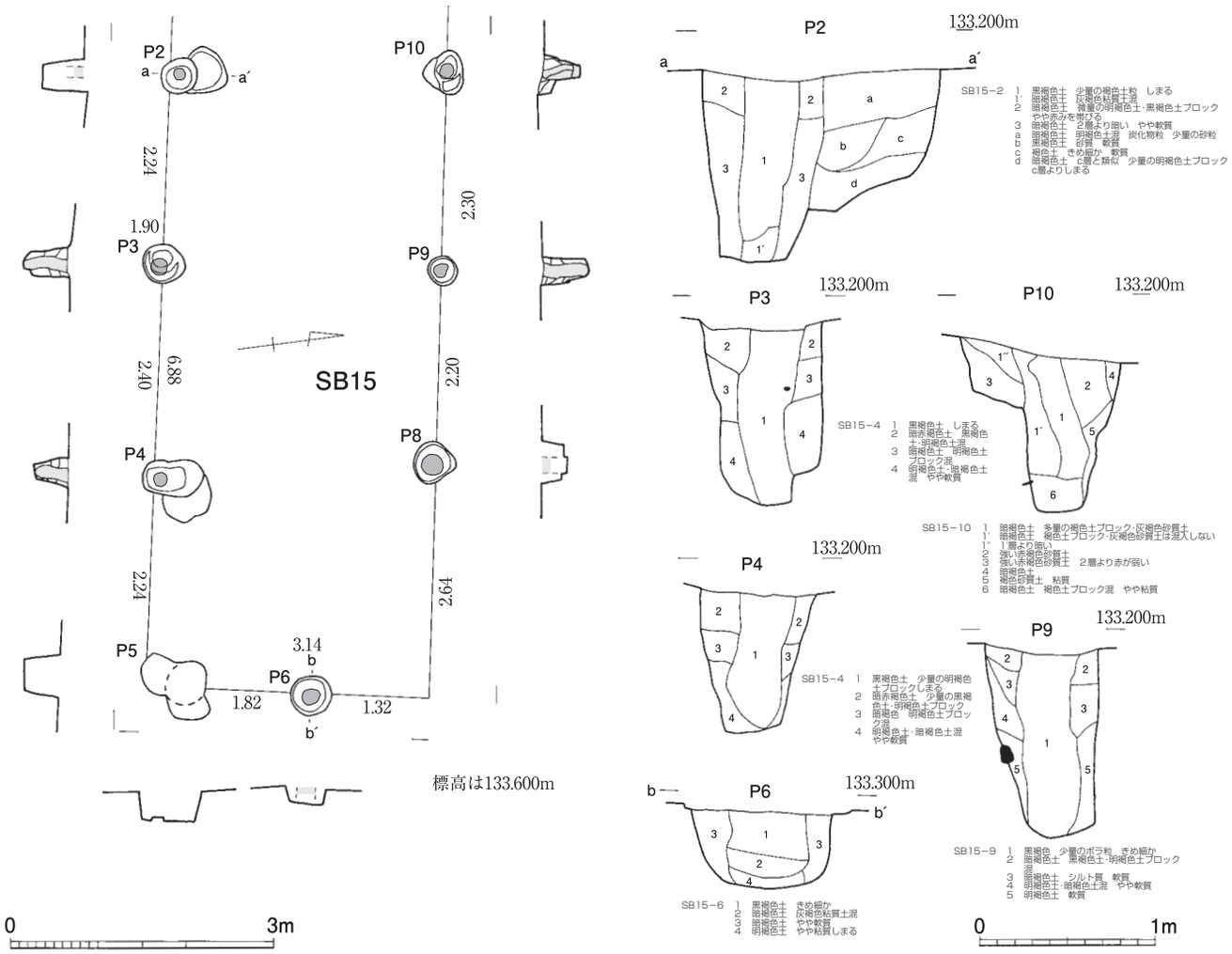
SB16−1　1　明褐色シルト質土　暗褐色シルト質土・黒褐色粘質土ブロック混　ややしまる
2　黄褐色シルト質土　黒褐色粘質土ブロック混　しまる
3　黒褐色粘質土　少量の黄褐色シルト質土ブロック　ややしまる
4　黄褐色シルト質土
5　黄褐色シルト質土　黒褐色粘質土粒(2〜5㎜)混　軟質

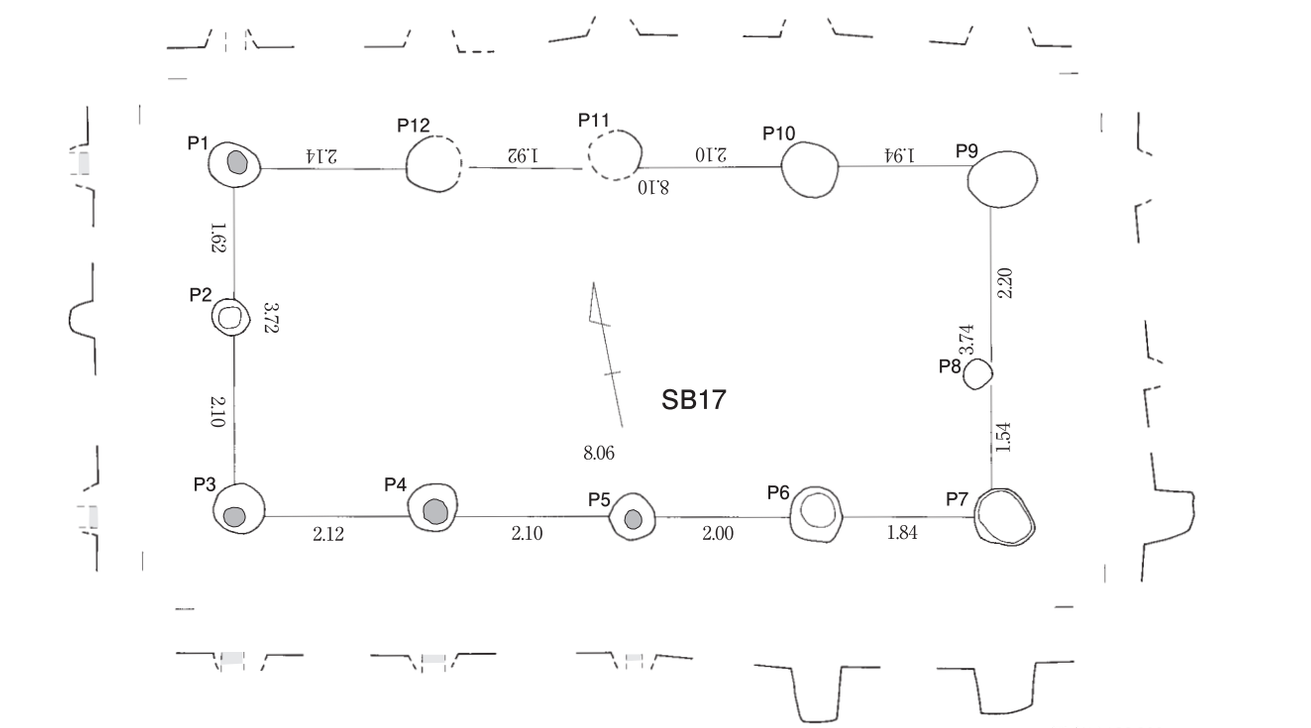


SB16−9　1　暗褐色シルト質土　多量の黄褐色(1〜2㎜)・黒褐色粘質土粒(1〜2㎜)　軟質
2　オリーブ褐色シルト質土　オリーブ黒色シルト質土混　やや硬質
3　黄褐色シルト質土　多量の黒褐色粘質土粒(1〜2㎜)
4　オリーブ褐色シルト質土　やや硬質

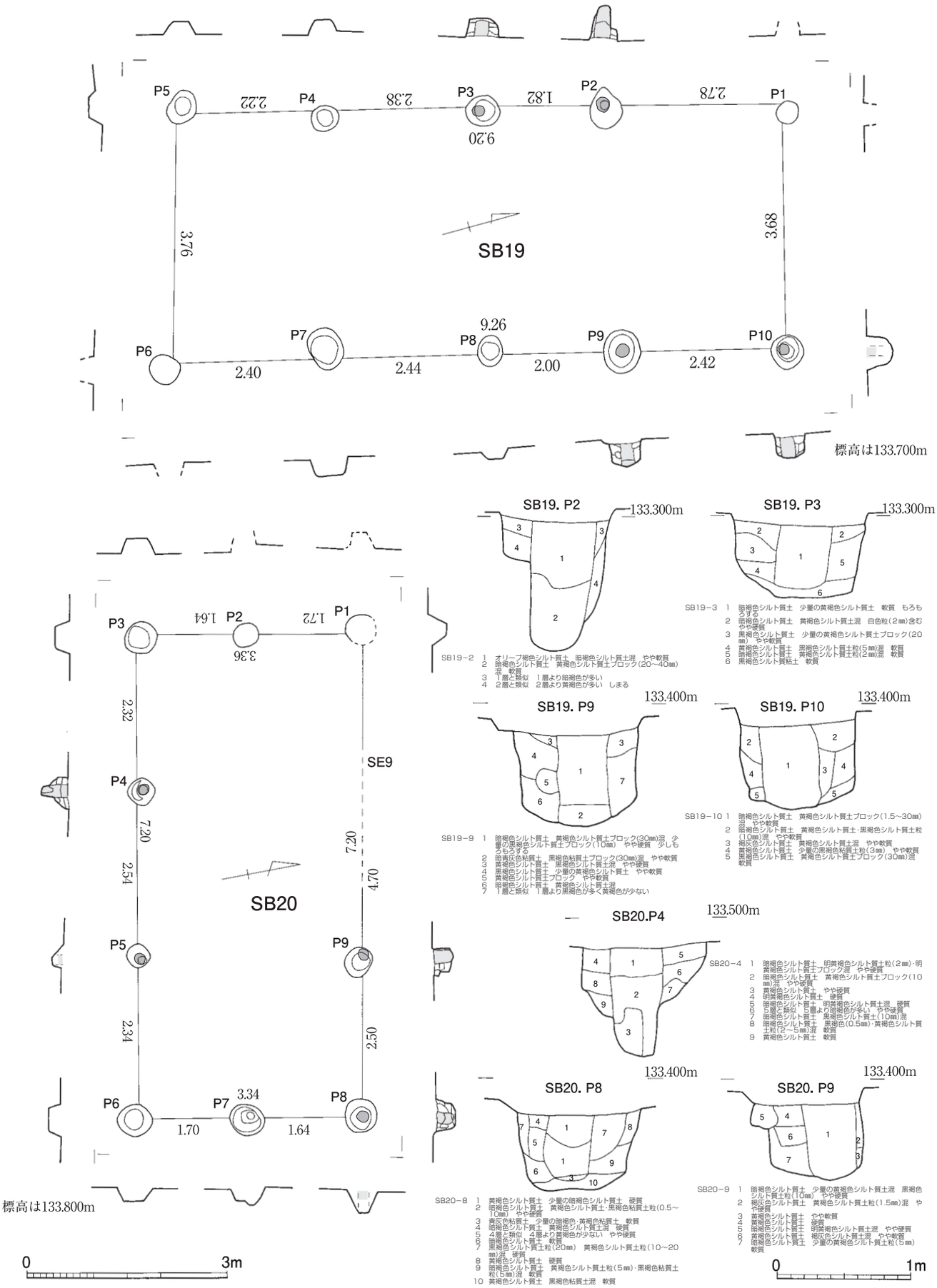


第26図　SB16・18実測図

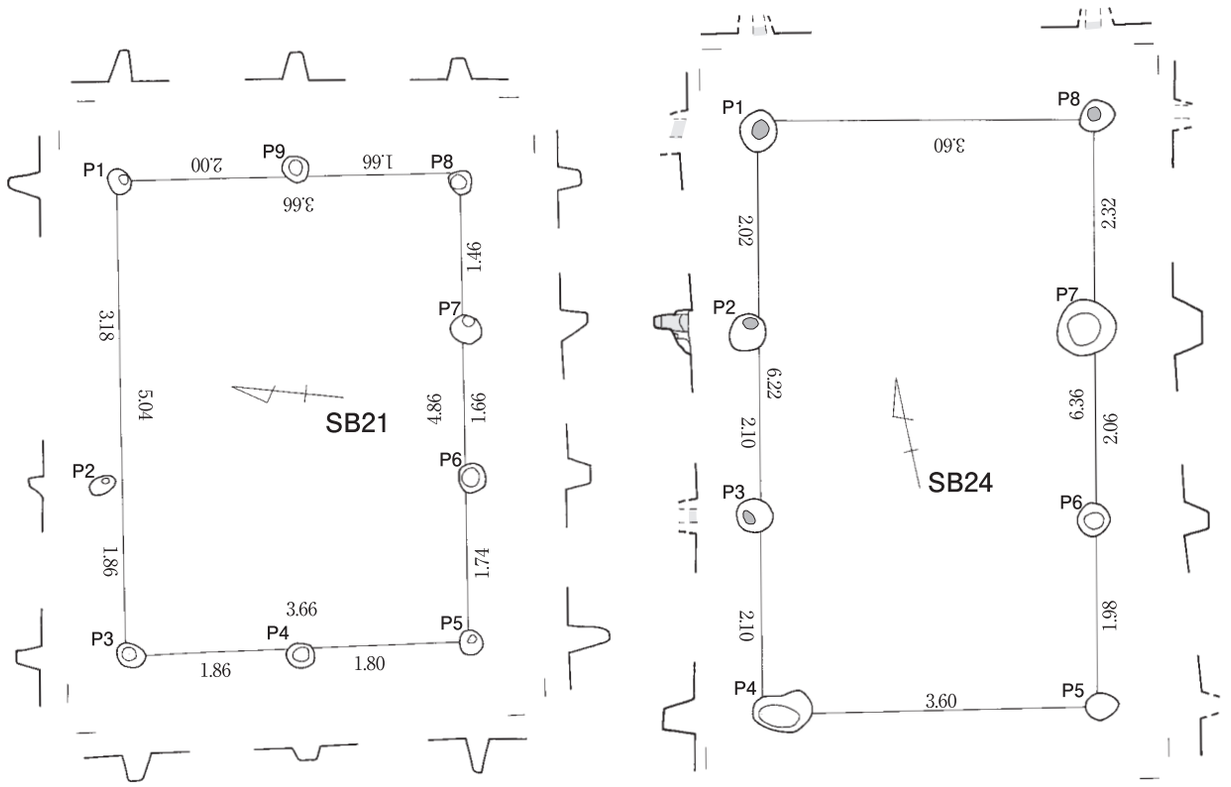


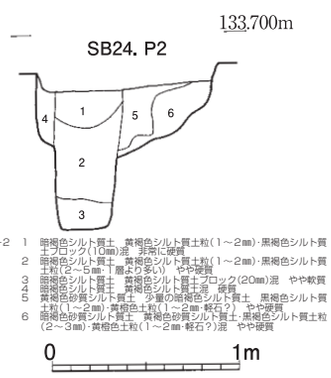


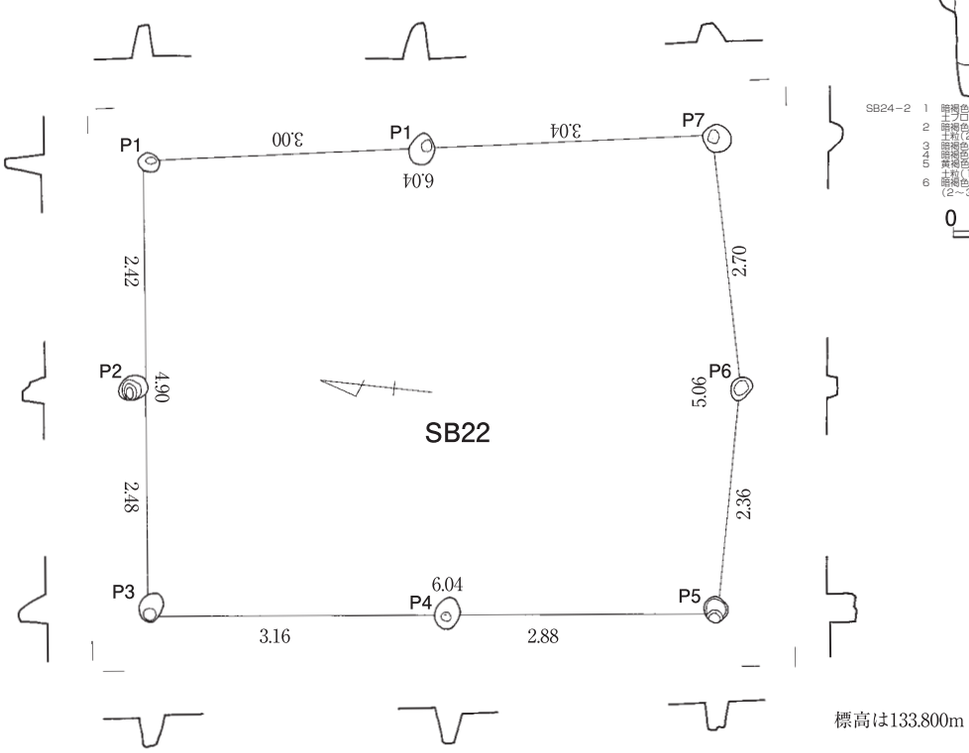
第27図　SB15・17実測図



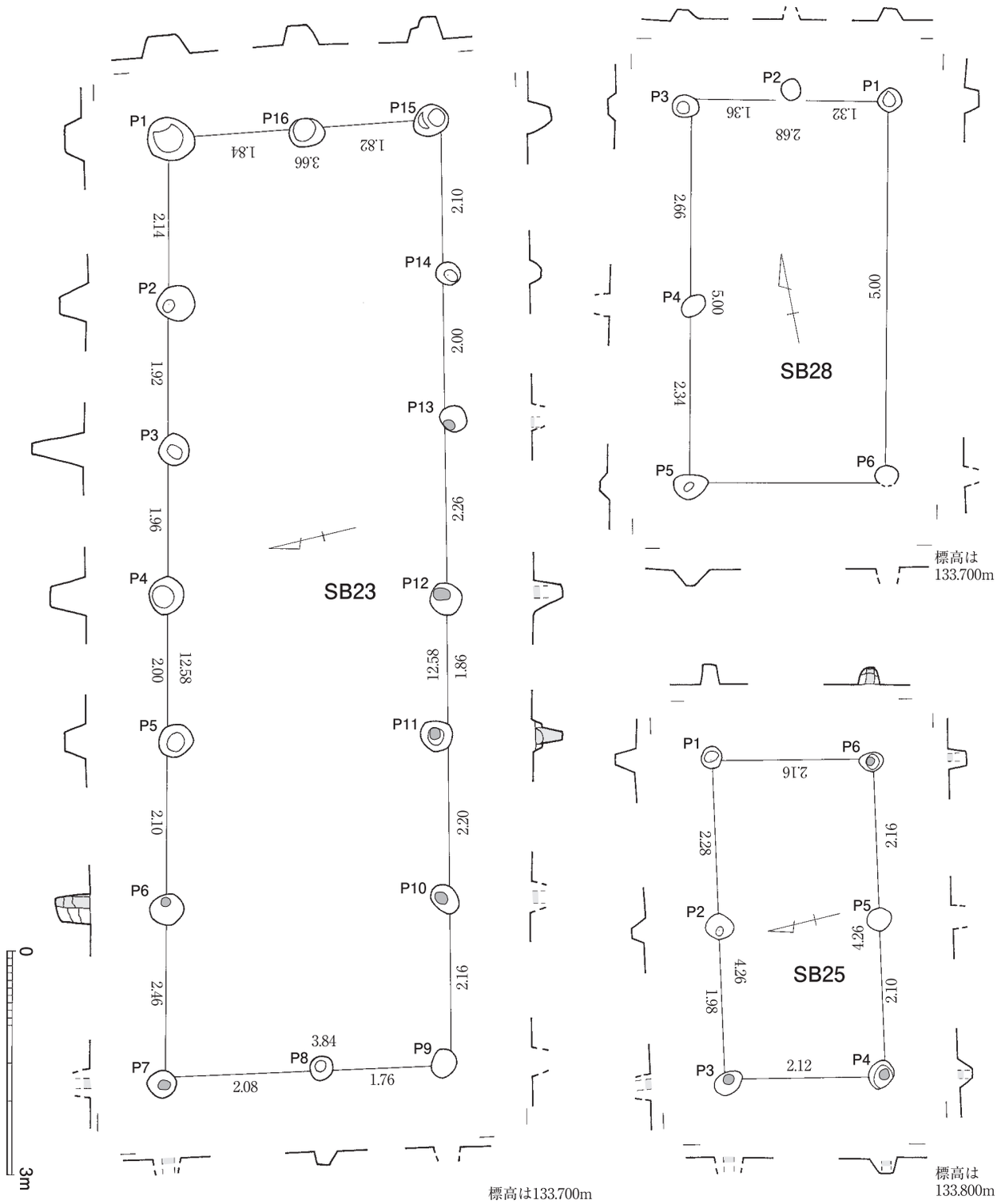
第28図　SB19・20実測図

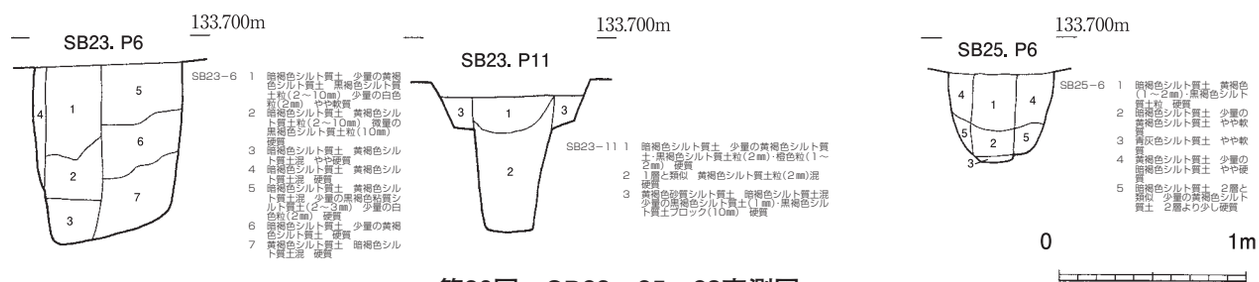




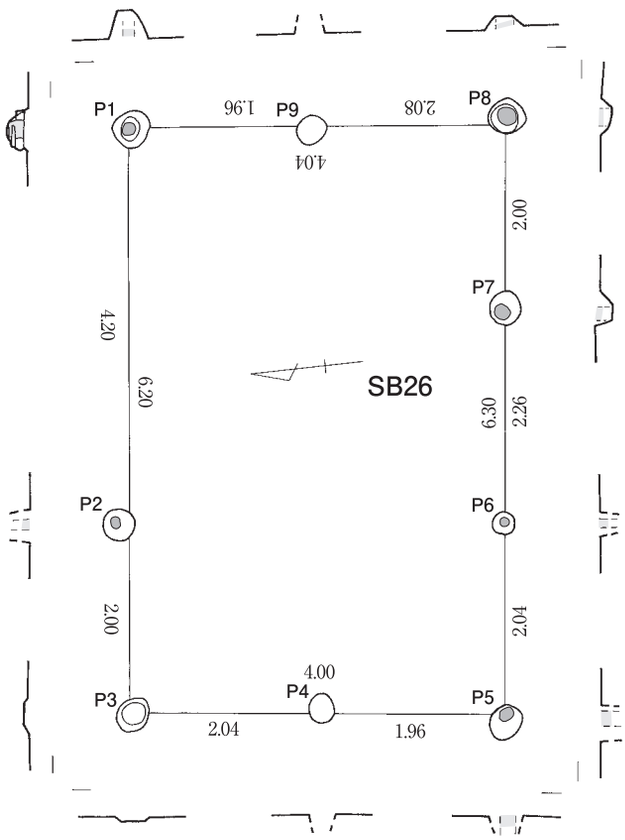


第29図　SB21・22・24実測図

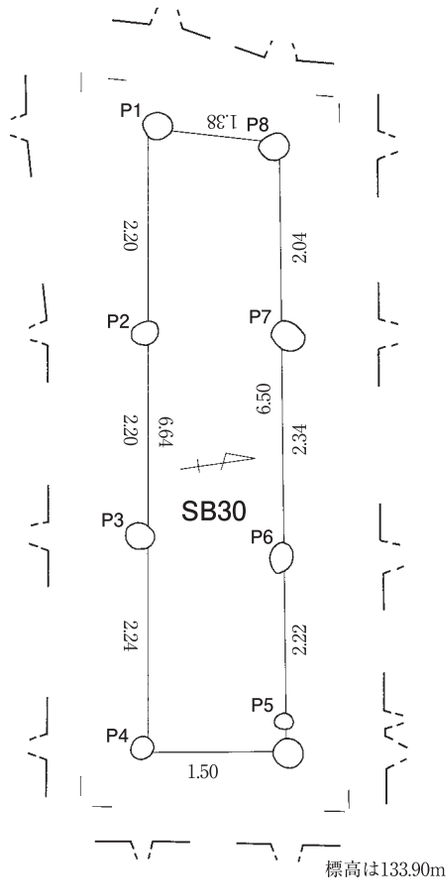




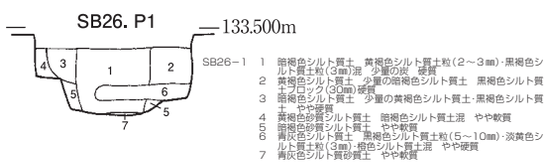
第30図　SB23・25・28実測図

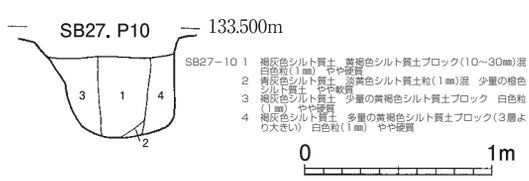


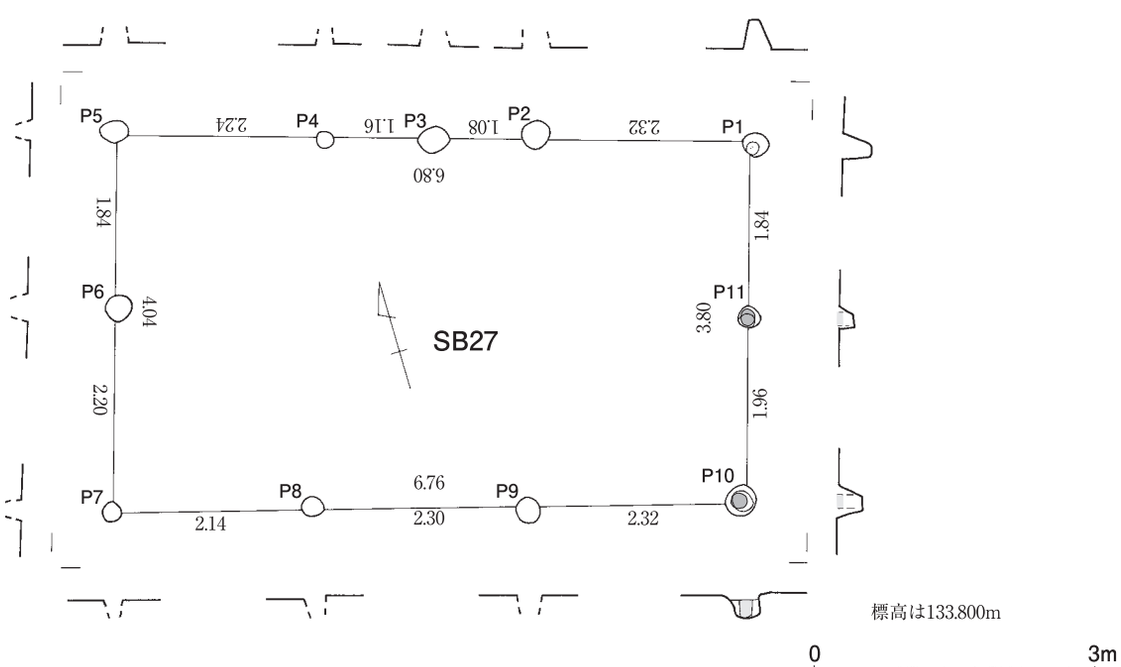
標高は133.700m



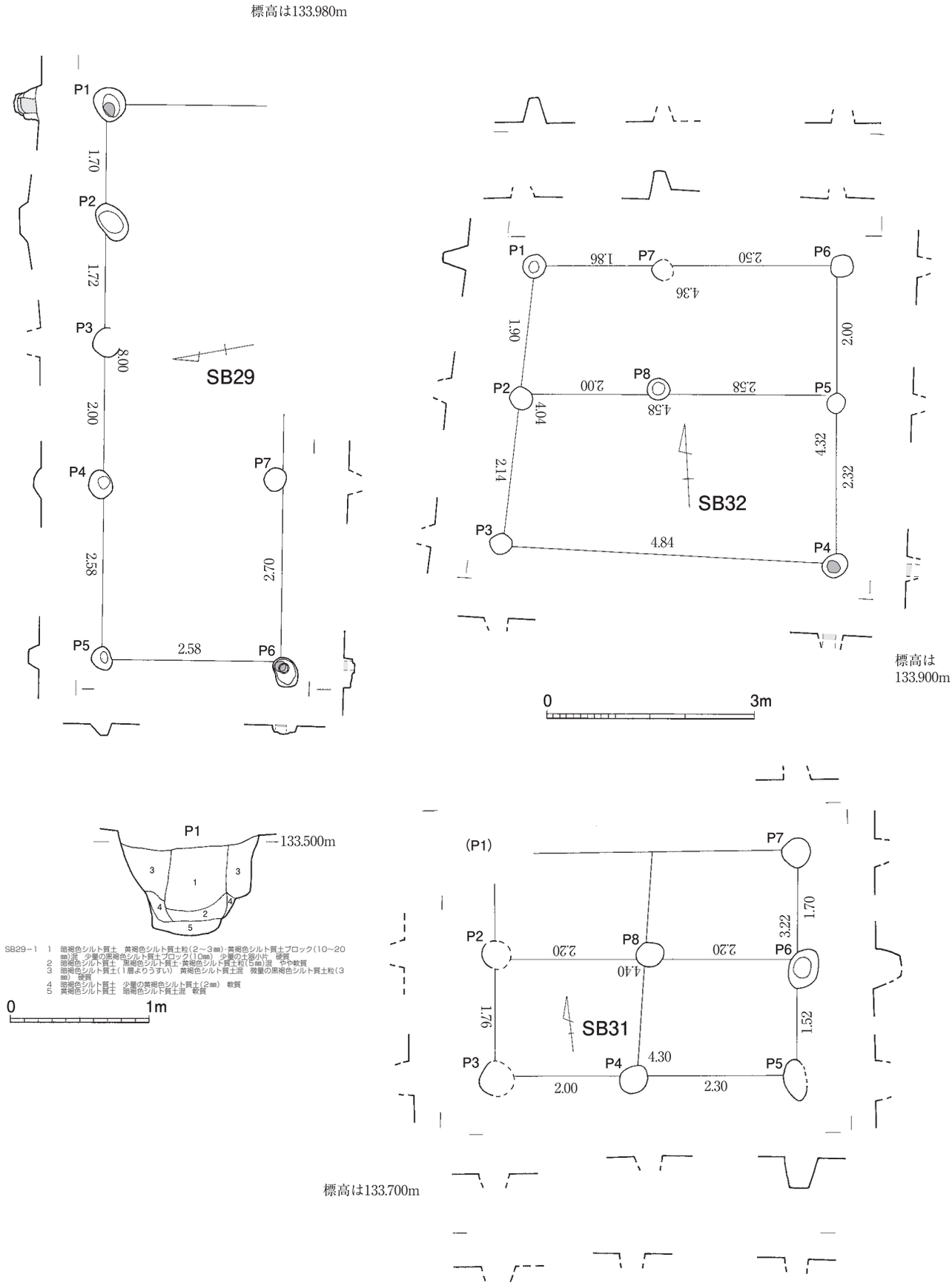
標高は133.90m



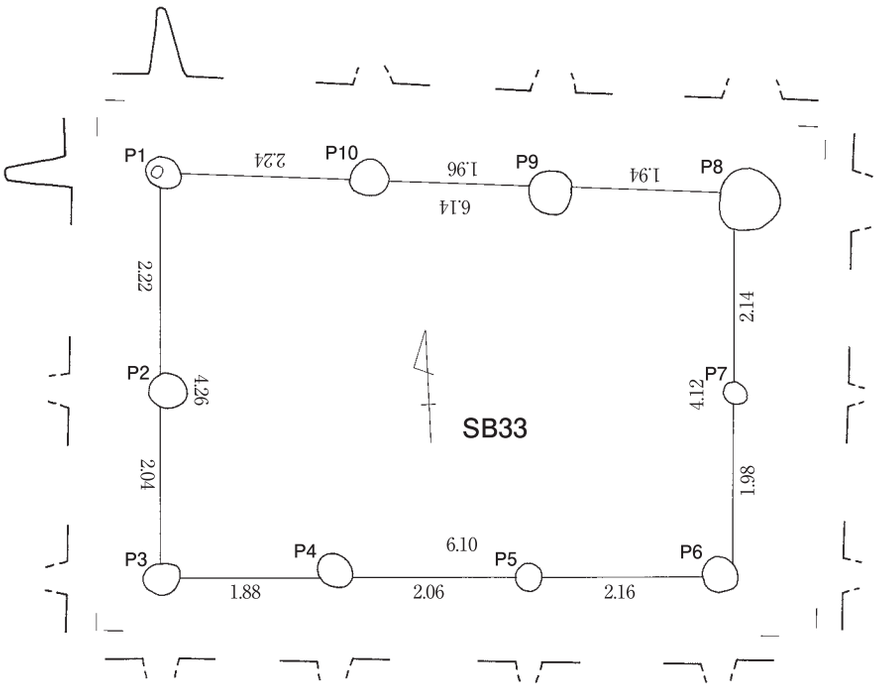




第31図　SB26・27・30実測図

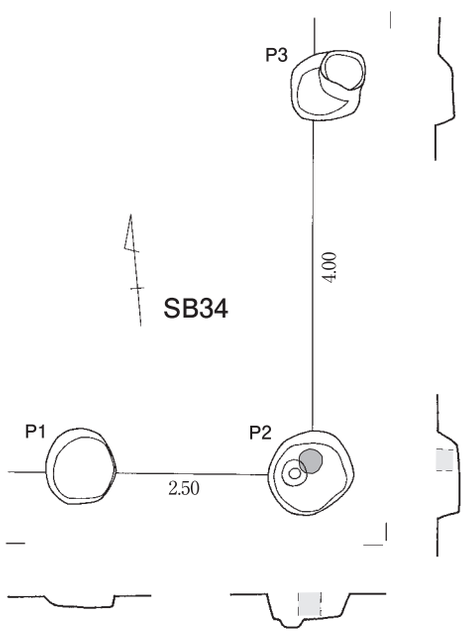


第32図　SB29・31・32実測図



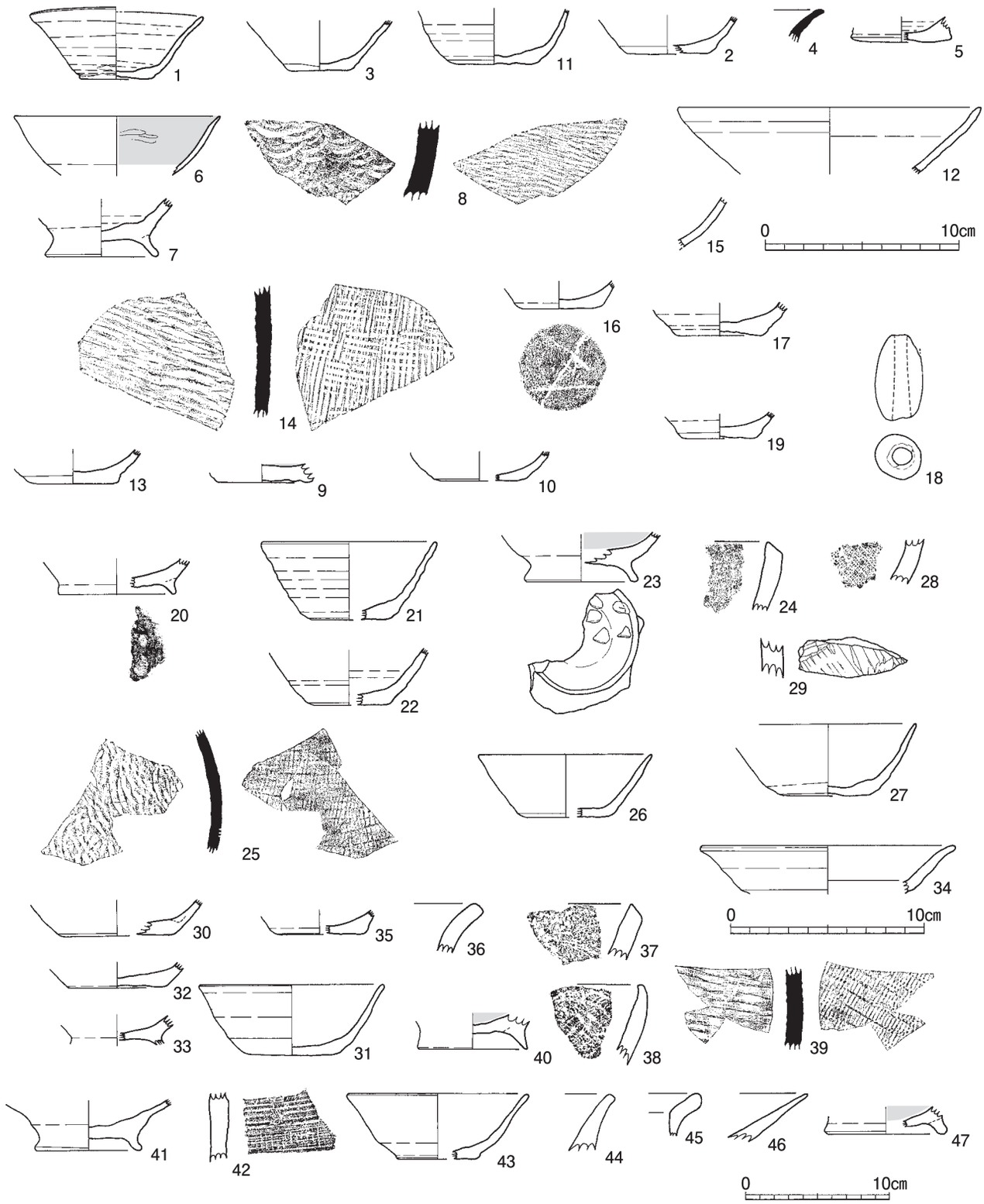
標高は133.600m

0 3m



標高は133.900m

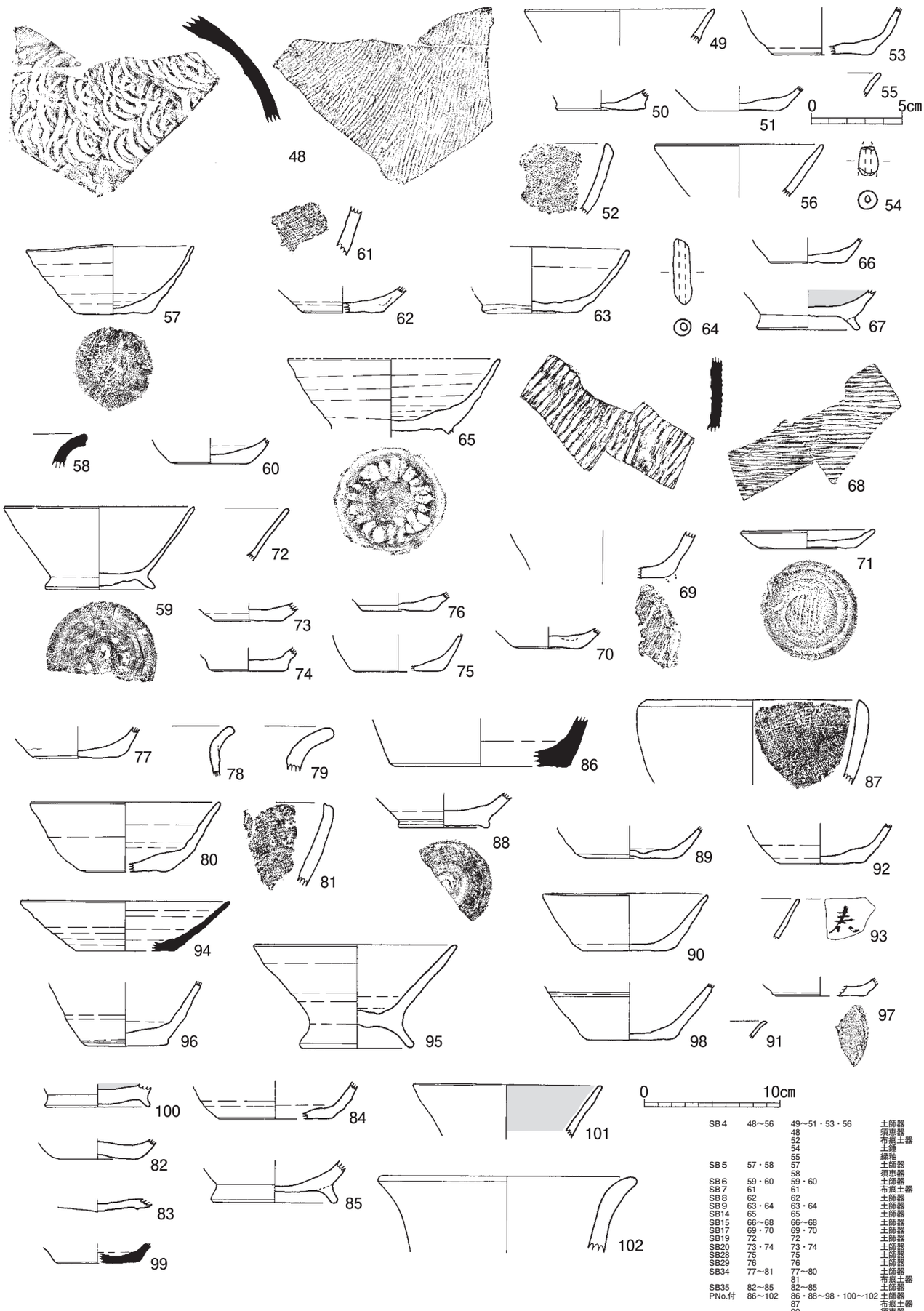
第33図　SB33・34実測図



SB1	1～19	1～3・5～7・9～11・13・16・17・19 4・8・14 12 15 18	土師器 須恵器 越州 緑釉 土錘	SB3	30～40	30～36・40 37・38 39
SB2	20～29	20～23・26・27 24・28 25 29	土師器 布痕土器 須恵器 滑石	SB4	41～47	41～47

土師器
布痕土器
須恵器
土師器

第34図　柱穴出土遺物（1）



SB4	48～56	49～51・53・56	土師器
		48	須恵器
		52	布痕土器
		54	土錘
		55	緑釉
SB5	57・58	57	土師器
		58	須恵器
SB6	59・60	59・60	土師器
SB7	61	61	布痕土器
SB8	62	62	土師器
SB9	63・64	63・64	土師器
SB14	65	65	土師器
SB15	66～68	66～68	土師器
SB17	69・70	69・70	土師器
SB19	72	72	土師器
SB20	73・74	73・74	土師器
SB28	75	75	土師器
SB29	76	76	土師器
SB34	77～81	77～80	土師器
		81	布痕土器
SB35	82～85	82～85	土師器
PNo.付	86～102	86・88～98・100～102	土師器
		87	布痕土器
		99	須恵器

第35図　柱穴出土遺物（2）

柱掘り方は円形で、径0.25 ～ 0.37m、深さは未掘のため不明。面積は9.40㎡。遺物は出土していない。

SB31（第32図）

池状遺構の南端およびSE 6 ・ 8 と重複する。建物は南北２間、東西２間の総柱である。桁行（東西）全長は約4.3mと想定され、桁行柱間は2.00 ～ 2.30m、梁行(南北)全長3.22m、梁行柱間は1.52 ～ 1.76mを測る。柱掘り方は円形で、径0.41 ～ 0.62m、深さ0.44 ～ 0.45m、柱痕跡は確認されていない。遺物は出土していない。

SB32（第32図）

池状遺構の南、SE ２のすぐ北にあり、SE ３と重複する。建物は南北２間、東西２間の総柱であると想定される。桁行（東西）全長は約4.84mと想定され、桁行柱間は1.86 ～ 2.52m、梁行（南北）全長4.32m、梁行柱間は1.90 ～ 2.32mを測る。柱掘り方は円形で、径0.34 ～ 0.35m、深さ0.30 ～ 0.45m、柱痕跡は確認されていない。遺物は出土していない。

SB33（第33図）

調査区の南端、SE １のすぐ南に位置する東西棟である。建物は東西３間、南北２間で、桁行（東西）全長は6.14m、桁行柱間は1.88 ～ 2.24m、梁行（南北）全長4.26m、梁行柱間は1.98 ～ 2.22mを測る。柱掘り方は円形で、径0.28 ～ 0.68m、深さは0.71mだが、ほとんどは未掘である。面積は25.68㎡。遺物は出土していない。

SB34（第33図）

調査区の西端、池状遺構の西に位置する東西棟で、SB ３ ・ ４ ・13と重複する。建物の規模は、削平をうけている西側に延びるため、規模については不明である。柱掘り方は円形で、径0.83 ～ 0.94mと比較的大きく、深さは0.27m。Ｐ６から土師器甕（78・79）・坏（77）や布痕土器（81）が出土している。

そのほか、掘立柱建物跡に復元できなかったピットも屋敷地とする区域で多数存在する。それらは埋土中より土師器坏や須恵器坏、灰釉陶器など古代に含まれるもののほか、糸切り底の土師器皿を出土するピットもあり、時期的に幅広く確定はできない。

２　土坑（第36 ～ 44図　表４）

土坑は25基について調査を行ったが、それ以外にも未掘のものが多数確認されている。

SC １は調査区の北東隅に検出され、径約0.95mの円形をなし深さ0.16mを測る。遺構埋土は暗褐色土で炭化物を含む。出土遺物なし。SC ２はSC １の西にあり、SE ５を切る。平面形は長楕円形を呈し、長径約1.28m、短径0.45m、深さ0.05m。東側床面は径0.30mの円形にやや深く掘り込まれる。また、検出面からの遺構は浅いものの近世の擂り鉢や敲石や軽石、炭化材などが出土した。同様な形態の土坑がSC ２の南西約７mにSE ４に沿って作られている。SC ３は不定の楕円形をなし、長径約1.25m、短径約0.95m、深さ約0.07mで、断面が浅い皿状を呈す。床面の南端は径約0.2mの円形の範囲が浅く掘りくぼむ。土師器片が数点出土したが、小片のため図示していない。SC ４はSC ２の西約12mに位置し、平面形は円形プランとなり、径約0.74m、床面より約10㎝の高さで２段掘りされ深さ0.33mとなる。さらに、床面から壁面に扁平な礫５個が配石される。土師器坏（103）が出土している。SC ５やSC24出土のものと接合している。

SC ５は柵列１の東端の南にあり、長径約3.2m、短径約2.15m、深さ約0.09mの楕円形をなすが西側が一部

削平されている。遺物としては土師器坏（104・105）・高台付埦（106）、鉢（108）、黒色土器（107）が出土している。108は大型の鉢と考えられ、体部外面上半部に凹凸がみられる。口径23.0㎝。SC 6・7隣接しSC 5のすぐ南で検出された。SC 6は径約1.11m、深さ0.27m、SC 7は径0.82m、深さ約0.10mのそれぞれ円形を呈す。SC 7からは上層より高台付埦（110）が出土している。高台内に放射状の圧痕がみられる。SC 7、SC12やSC24出土のものと接合している。SC 8はSE 2のすぐ南にあり、円形の二つの土坑が隣接して作られる。SC 8－1は径約1.00m、深さ約0.09m、土師器坏（112・113）や須恵器壺（115）が出土。SC 8－2は長径1.13m、短径約0.88m、深さ約0.07m、遺物としては土師器坏（114）が出土している。さらに周辺から土師器高台付埦（116）や土師器甕（117）も出土している。SC 9はSE 1のすぐ北、SE 7に切られる。不定な楕円形で、長径約3.3m、短径約2.6m、深さ0.17m、埋土は黒褐色土および暗褐色土。床面より上層で遺物が出土しており、土師器坏（118～122）、高台付埦（123・124）がある。124は内面に多数のヘラ状の工具による線刻が施される。

SC10は調査区中央南端部にあり、径約1.0m、深さ約0.18mの円形プランを呈す。出土遺物なし。SC11は調査区の南、SC10の北に位置し、径約1mの円形を呈し、深さ約0.10m。SC12は調査区南、中央付近のSE 1の北側に位置する。平面形は隅丸の長方形をなし、長軸1.45m、短軸0.82m、深さ約0.6mを測る。埋土は上～中位では暗褐色土および黒褐色土が堆積し、白色の軽石を含む層も観察され、下層では黒色土となる。北側床面は約20㎝ほどのテラス状をなし、床面中央には軽石が検出された。また、遺物の多くは上～中位で検出され、南端で土錘が6個（127～132）まとまって出土したほか、土師器甕（126）などもみられる。長軸側1/2については未掘。SC13はSE 1とSE15の間にあり、長径約1.2m、短径約1.0m、深さ0.41mの楕円形を呈す。SC14はSE 1に切られる。径約3m、深さ約0.14mと大きく、円形あるいは楕円形を呈すると考えられる。土師器高台付埦（133・134）、須恵器壺（136）・坏（135）が出土。136は無頸壷で口径10.8㎝。SC15はSB17およびSE 1の東に位置し、楕円形を呈し、長径1.35m、短径約0.95m、深さ約0.12mを測る。出土遺物なし。

SC16･17･20～23はSE30が屈曲する区域に集中して分布する。SC16は径約0.8mの円形をなし、深さ約0.16m。ピットと重複している。SC17は楕円形をなし、長径約0.17m、短径約0.91m、深さ0.14mで立ち上がりは緩い。北壁中央には径0.35mの柱穴が付され、直に約0.55m掘られている。SC20は、長径約1.02m、短径約0.51m、深さ0.12m、北西壁に接して深さ約0.22mのピットが作られる。出土遺物はなし。SC21は不定形をなすが、床面が南に偏っており深さ約0.52mを測る。壁は南はほぼ直立気味で、北は丸みをもって立ち上がる。SC22は複数の土坑やピットが重複している。径約0.88m、深さ約0.12mの円形の土坑と、径約0.65m、深さ約0.63mの円形土坑およびその北側にさらに4基のピットが作られる。出土遺物はない。SC23は楕円形をなし、長径約1.0m、短径約0.56m、深さ0.47mを測る。床面の南側には長径0.32m、短径0.25m、深さ0.16mのピットが掘られる。

SC18はSB21に平行に重複する。長方形をなし、長軸0.13m、短軸0.63m、深さ約0.16mを測る。埋土は黒褐色土および暗褐色土で、西側を中心に20～5㎝の礫が床面より上層で検出された。出土遺物としては土師器甕（137）が出土している。口径28.6㎝、器高20.1㎝と鉢状をなし、底部は丸底をなす。SC19はSB21の北に位置し長軸0.90m、短軸約0.70m、深さ0.47mの方形を呈す。断面では南側が袋状をなし、床面では北側が10㎝ほど高くなる。遺構内には褐色土および黒褐色土が堆積している。1/2については未掘。SC24はSB17の北東隅柱穴のすぐ北に位置する。長軸0.85m、短軸0.55mの長方形の平面形をなし、深さは遺構検出面から0.25mとなる。遺構内中央、床面より約12㎝ほど上層で土師器坏が4点（141～144）が重ねられて検出されている。床面の南東隅には径0.35m、深さ0.30mのピットが掘られている。遺構内には黒褐色土が堆積し、白色の軽石を含む。

SC25は当初SD 1としていたものでSB 1の北西隅に位置し重複する。一辺約1.1mの正方形の平面形で、深さ0.42mを測る。遺構内には黒褐色土が堆積し、炭化材・炭化物や焼土が含まれる。また、遺構中央付近では白色の粘土の堆積も認められた。遺物としては土師器甕（139・140）や礫が床面より上位で出土した。さらに床面から検出された炭化材について自然科学分析を行い、コナラ属アカガシ亜属と同定され、放射性炭素年代測定により補正C^{14}年代（BP）で1270±40という結果を得ている。また、埋土の植物珪酸体分析の結果、上層から下層までイネのプラントオパールが検出された。上層については、現在の水田の影響が想定されるものの、床面におけるプラントオパールの存在は、イネワラが敷かれていたか、穴蔵として米の貯蔵庫であった可能性もある。遺構は1/2程度未掘である。

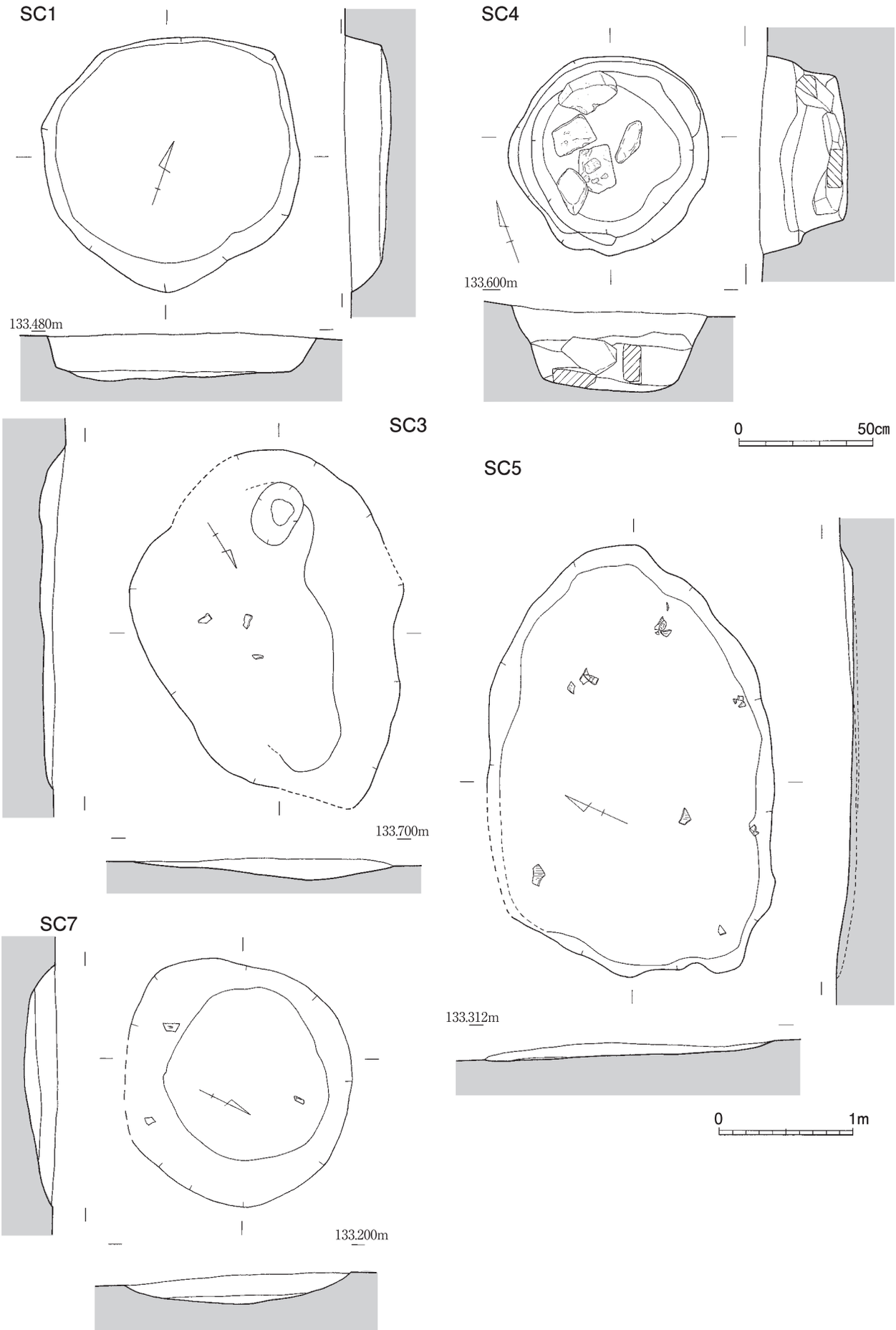
そのほか土坑より大きく、形態も不定なものを不明遺構（SZ）とした。SZ 1は、SE 2とSE 1の間の標高が低くやや凹み黒色土が堆積している箇所に検出された遺構で、形態も不定形で検出面からの掘り込みも浅い。短辺約5m、長辺約7m、深さ0.10～0.20mで長方形を呈し、SE12に切られ（第47図断面A－A′）、SE 3・SE11より新しいと考えられる。埋土は黒褐色土で堆積状況も平坦である。土師器坏（145～147）・皿（148）・高台付埦（150～152）、黒色土器（149）、須恵器壺（153）・甕（154）、越州窯系青磁（155・156）が出土している。須恵器壺（153）はⅠ4およびJ4グリッド出土とそれぞれ接合関係にある。

SZ 2はSZ 1の南に位置し、SZ 1やSE 1と一部重複するが前後関係は不明。短辺約1.8m、長辺約3.5m（現存長）、深さ0.04～0.10mを測る。遺物としては土師器坏（157）・高台付埦（158）が出土している。

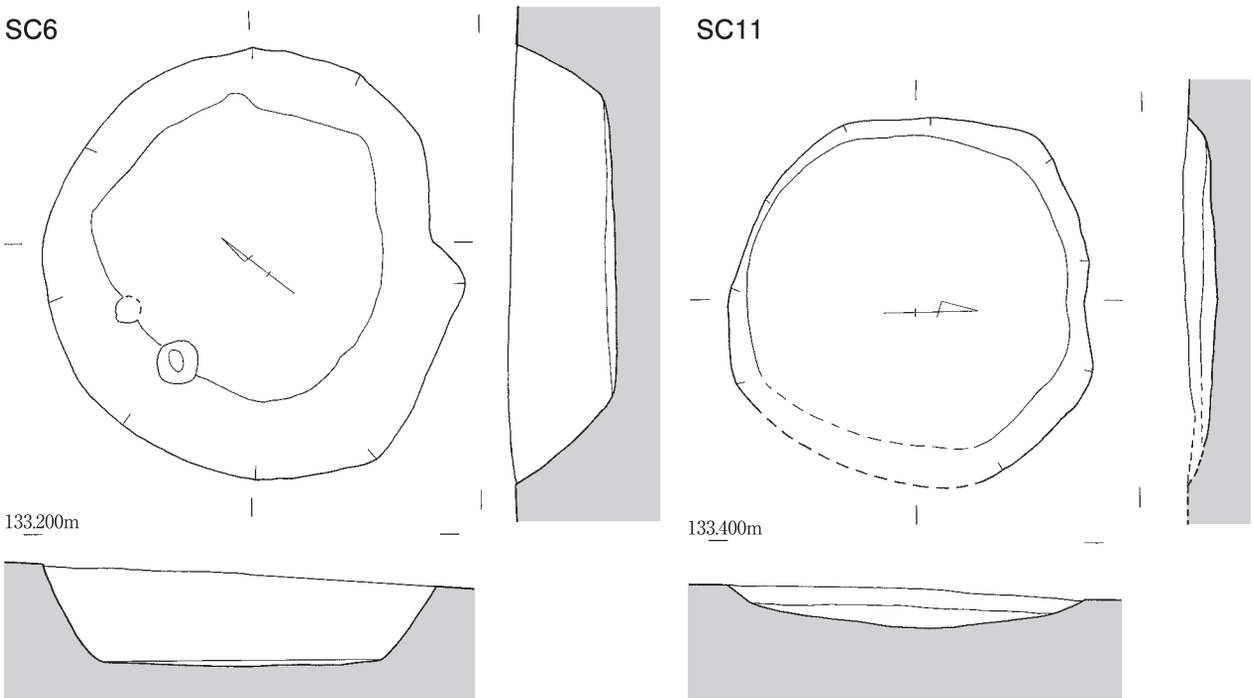
SZ 3・4は門跡のSE 7を挟んだ東に位置し、重複している。SZ 3は短辺約2.9～3.4m、長辺約8.8m、深さ0.10～0.20mで隅丸方形を呈す。SE12と重複する。深さはトレンチのみでの確認で、約0.65m。埋土は自然堆積で、黒褐色土や暗褐色土を呈し、炭化物を含む。遺構の立ち上がりは、ゆるやかな傾斜をなすが、床面は一段深く箱形に約10㎝ほど掘られる。SZ 4との関係は確定できないが、SZ 3が後出と想定される。これ以外にも複数土坑などの掘り込みを検出したが、時間の都合上未掘である。

遺構番号	土坑の掘り方(m)			出　土　遺　物
	長軸径	短軸径	深　さ	
SC1	0.95	0.95	0.16	
SC2	1.28	0.45	0.30	敲石1708、土瓶1711・1712・1713、すり鉢1715・1739
SC3	1.25	0.95	0.07	
SC4	0.74	0.74	0.33	坏103
SC5	3.20	2.15	0.09	坏104・105、高台付埦106・107、鉢108
SC6	1.11	1.11	0.27	坏109
SC7	0.82	0.82	0.10	高台付埦110
SC8－1	1.00	1.00	0.09	壺（須恵器）115
SC8－2	1.13	0.88	0.07	坏112・113
SC9	3.30	2.60	0.17	坏118・119・120・121・122、高台付埦123・124、甕125
SC10	1.00	1.00	0.52	
SC11	1.00	1.00	0.10	
SC12	1.45	0.82	0.60	甕126、土錘127・128・129・130・131・132
SC13	1.20	1.00	0.41	
SC14	3.00	3.00	0.14	高台付埦133・134、須恵器135、甕（須恵器）136
SC15	1.35	0.95	0.12	
SC16	0.80	0.80	0.16	
SC17	0.17	0.91	0.14	
SC18	1.30	0.63	0.16	甕137
SC19	0.90	0.70	0.47	
SC20	1.02	0.51	0.12	
SC21			0.52	坏138
SC22	0.88	0.88	0.12	
SC23	1.00	0.56	0.47	
SC24	0.85	0.55	0.25	坏141・142・143・144
SC25	1.10	1.10	0.42	甕139・140

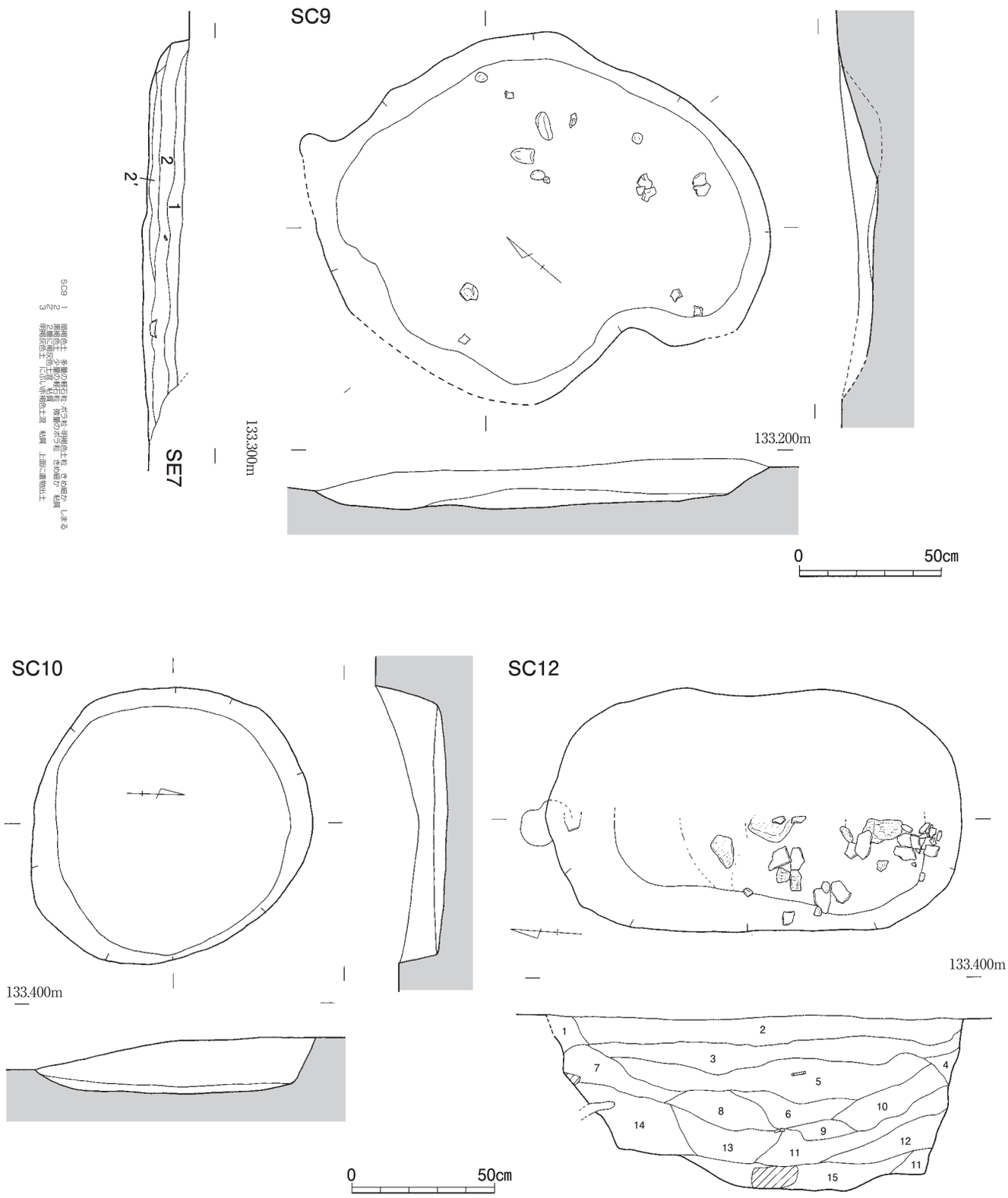
表4　土坑計測表



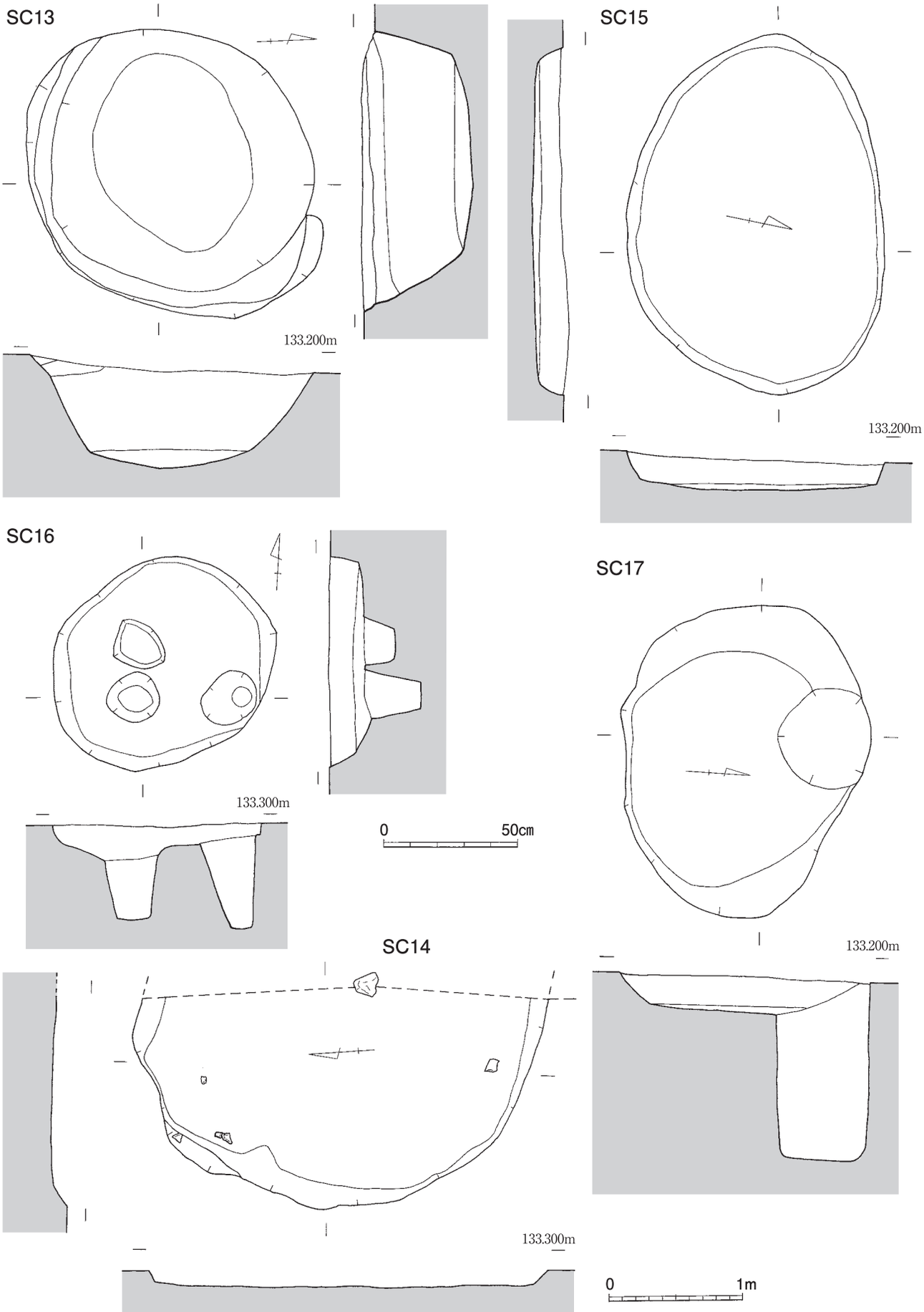
第36図　SC 1・3・4・5・7実測図



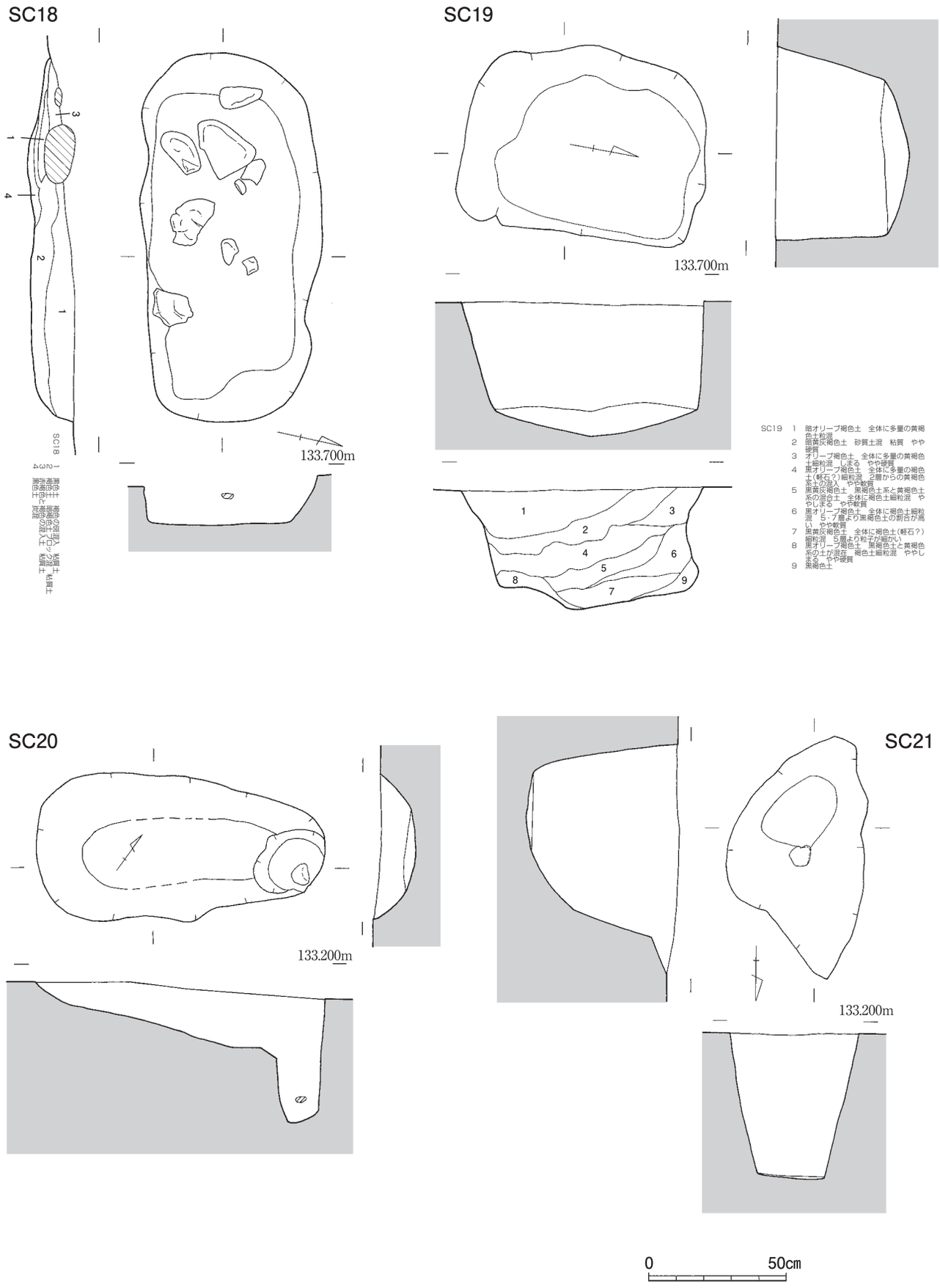
第37図　SC ６・８・11実測図



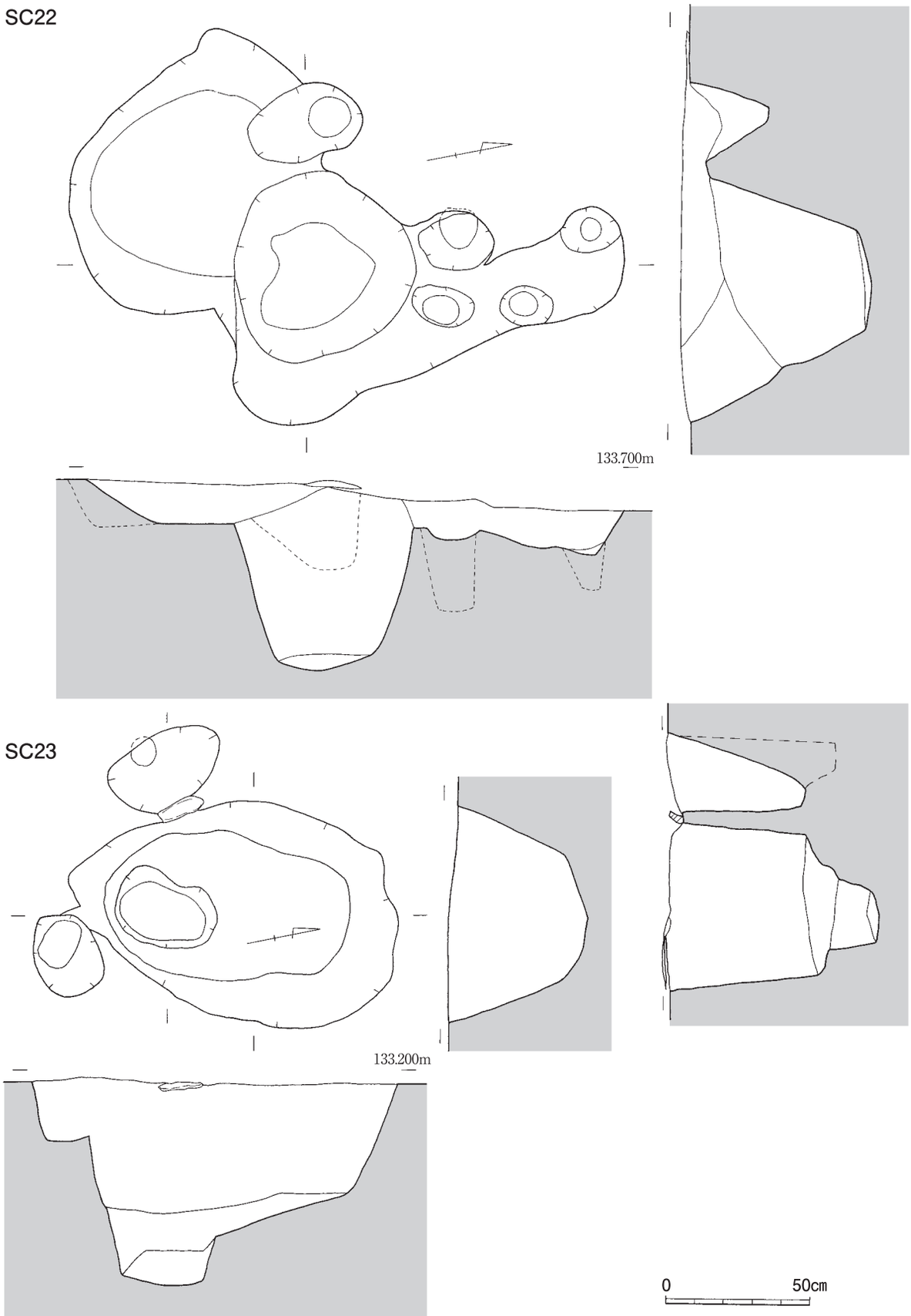
第38図　SC 9・10・12実測図



第39図　SC13～17実測図

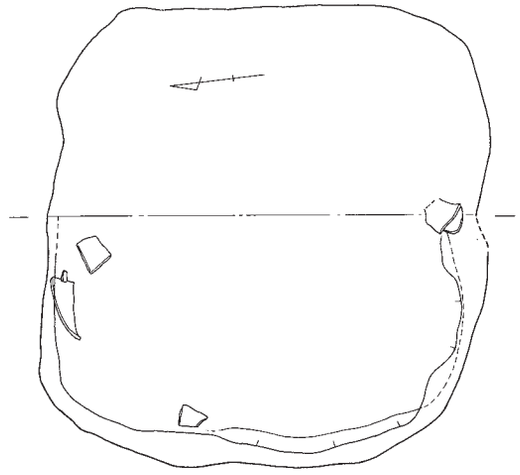


第40図　SC18～21実測図

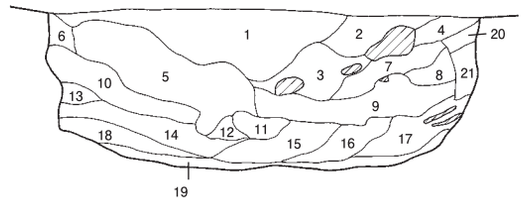


第41図　SC22・23実測図

SC25

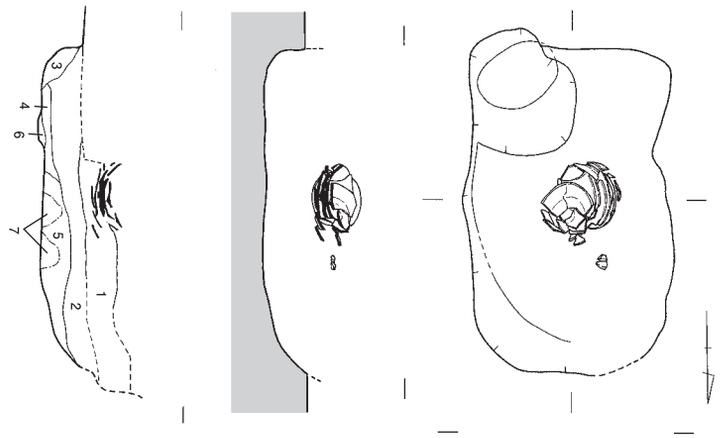


133.600m



SC25　1　黒褐色土　多量の褐色土粒(2～5㎜)　少量の黒色土粒(3～5㎜)　少量の炭化物　円礫　硬質　しまる
2　黒褐色土　褐色(2㎜)・黒色粒(2～3㎜)混　炭化物　硬質　しまる
3　黒褐色土　多量の褐色土粒(1～10㎜)　黒色土粒(2～5㎜)混　炭化物　硬質　しまる
4　褐色砂質土　少量の褐色・黒色粒(1㎜)　硬質　しまる
5　黒褐色土　少量の褐色土粒(1～5㎜)　微量の黒色土粒(2㎜)　少量の炭化物　硬質　しまる
6　黒褐色土　褐色砂質土ブロック混　硬質　しまる
7　黒褐色土　褐色土粒(1～3㎜)・黒色土粒(2㎜)混　硬質　しまる
8　黒褐色土　褐色砂質土ブロック混　硬質　しまる
9　黒褐色土　少量の褐色土粒(1～3㎜)・黒色土粒　少量の炭化物　硬質　しまる
10　黒色土　多量の炭化物　少量の焼土粒(2㎜)　土器片　やや硬質　ややしまる
11　褐褐色土　少量の炭化物・焼土粒(2～3㎜)　やや軟質
12　黒褐色土　少量の炭化物(2～5㎜)・焼土粒(2～3㎜)　やや軟質
13　褐褐色土　炭化物(3～5㎜)・焼土粒(2～10㎜)混　やや軟質
14　褐褐色土　少量の炭化物(2～10㎜)・焼土粒(2～10㎜)　やや軟質
15　黒褐色土　少量の褐色土粒(2～4㎜)　少量の炭化物(2～10㎜)　多量の焼土粒(2～4㎜)　やや軟質
16　黒色土　褐褐色砂質土・黒色土ブロック混　炭化物　微量の焼土粒　やや軟質
17　黒色土　多量の炭化物　褐色砂質土が部分的に筋状に混入　硬質　しまる
18　褐褐色土　炭化物混　微量の焼土粒(1㎜)　やや軟質　しまる
19　黒褐色土　炭化物混　やや硬質　しまる
20　褐色砂質土　黒色土粒(4層より少)混　やや粘質　粒子が細かい　硬質　しまる
21　褐色砂質土　微量の黒褐色土粒　粒子が粗い　硬質　しまる

SC24

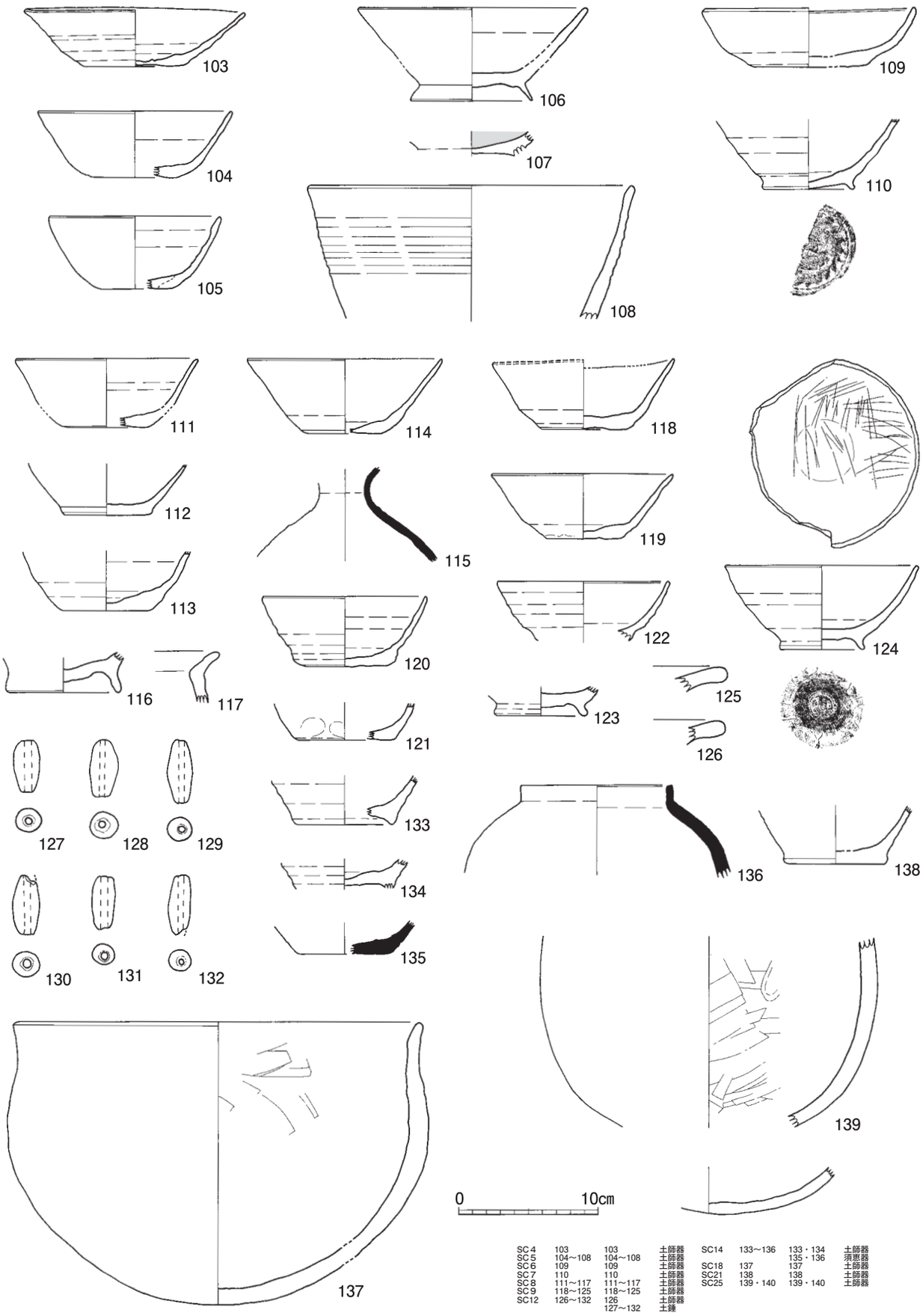


133.200m

SC24　1　黒褐色土　少量の白色軽石(1㎜)・炭化物・褐色土粒　硬質　しまる
2　黒褐色土　少量の黒褐色土粒(5～7㎜)　褐色土粒・ブロック(2～25㎜)混　硬質　しまる
3　黒褐色土　少量の黒褐色土粒(2㎜)　にぶい黄褐色土ブロック混　硬質　しまる
4　黒褐色土　少量の黒褐色土粒　にぶい黄褐色土粒(1～5㎜)混　硬質　しまる
5　褐色土　黒褐色土粒・ブロック(2～10㎜)　硬質　しまる
6　黒褐色土　白色土粒・にぶい黄褐色土粒(0.5㎜)混　硬質　しまる
7　黒褐色ブロック

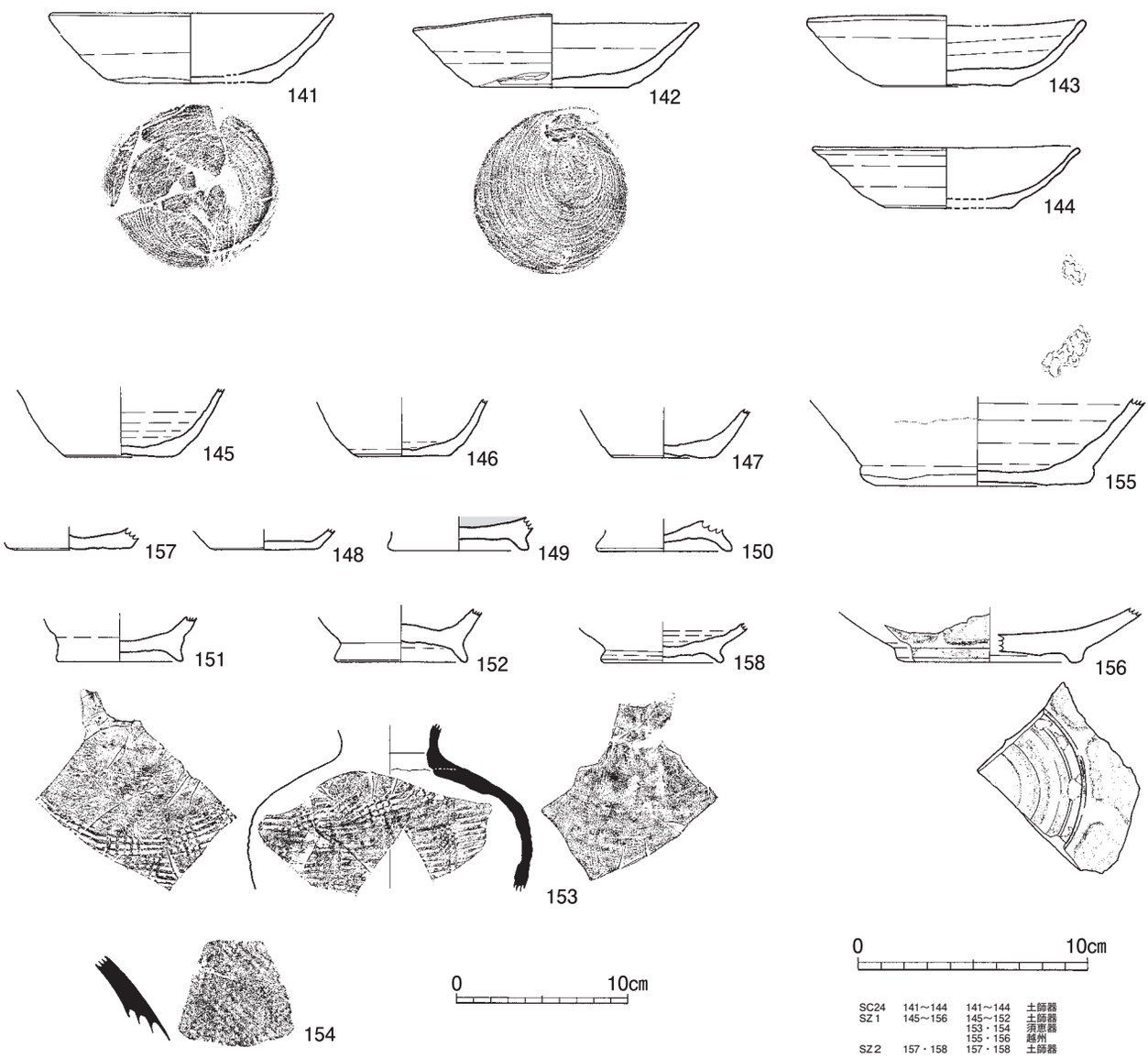
0　1m

第42図　SC24・25実測図



SC4	103	103	土師器	SC14	133～136	133・134	土師器
SC5	104～108	104～108	土師器			135・136	須恵器
SC6	109	109	土師器	SC18	137	137	土師器
SC7	110	110	土師器	SC21	138	138	土師器
SC8	111～117	111～117	土師器	SC25	139・140	139・140	土師器
SC9	118～125	118～125	土師器				
SC12	126～132	126	土師器				
		127～132	土錘				

第43図　土坑出土遺物実測図（1）



第44図　土坑出土遺物実測図（2）

３　溝状遺構

溝状遺構は39条程度検出され、多くは南北あるいはくぼ地に平行して作られるが、くぼ地を横断して作られているものはみられない。また、溝状遺構はほとんどが完結せず遺構に切られたり、途中で消失したりして、その性格などを把握するにいたっておらず、いくつかは同一の溝状遺構である可能性もある。さらに、溝の断面を観察すると、数回にわたり使用されていた可能性があるものも見られた。

SE ３（第47図）

池状遺構の南西端、SE ６と平行して南に延び、SE ２のすぐ南で南西方向に屈曲し、SE11手前で消失する。検出長は約30m、幅0.70 ～ 1.20m、深さ0.07 ～ 0.35mを測る。溝底は北端が0.10m程度低くなる。土層の堆積状況をみるとＡ～Ｃ地点の区間において１層の堆積状況が他の地点と相違が認められることから、溝埋没後再び掘削し何らかの用途で再利用された可能性がある。SE ２・８に切られ、柵列１と重複する。出土遺物は土師器甕（280・282）・坏（283 ～ 298）や高台付埦（299 ～ 303）や黒色土器（304 ～ 307）が見られる。326は墨書土器であるが文字の判読は難しい。294は底部内面に線刻が施される。出土遺物は、溝床面から出土するものや検出面に近い上層から出土し、例えば299・286・292はほぼ同一地点で出土したが、299が他の２点に比べ約20㎝のレベル差を有し、時期差があると考えたが、ほぼ同一地点（50㎝の範囲）でレベル差約15㎝の遺物２点が307と接合した事例もあり、一概に出土レベルの差が遺物の時期差に結びつけることは危険である。また、308はE ５・６グリッド出土の遺物と接合している。そのほか次のような石器類が出土した。249は軽石製の自然石である。一条の線状痕が認められるが繰り返し使用した痕跡はない。250は扁平な自然石である。周縁に部分的に打ち欠きの跡が見られる。研磨痕や擦痕は認められない。251は磨石である。やや不整形であるが溶結凝灰岩の円礫である。ほぼ全面を使用している。（第52図）

SE ４・５・27（第45図）

三つの溝は重複しながら、調査区の東北部、Ｎ－50°－Ｅ方向に延び、池状遺構を切りながら南に向きを変えるが、池状遺構の途中で消失する。SE ４・５は深さ約10㎝、幅50 ～ 80㎝を測る。SE27はSE ５に重なり合いながらのびるが、５㎝程度と非常に浅く、埋土となる桜島文明軽石の残存状から遺構と判断できた。断面は３本ともレンズ状を呈し、溝底は東北部に比べ、池状遺構付近で約20㎝ほど低くなる。土層断面によりSE ５→SE ４→SE37が確認された。SE ４からは土師器小皿（309）が、SE ５からは土師器甕（310・311）、土師器坏（312）、高台付埦（313）、黒色土器（314）や白磁碗Ⅳ類（315・316）が出土している。SC １を切り、SB20・23・24、SE ９・29、池状遺構より新しい。（第52・53図）

SE ６（第47図）

池状遺構の南西端から南に延び、SE ２のすぐ南で消失している。検出長は約22m、幅0.50 ～ 1.00m、深さ約0.13mを測る。埋土は黒褐色土で、断面形は箱形をなす。溝底は東端が0.20m程度高くなっている。SB31および柵列１と重複し、SE ２に切られる。土師器甕（317・318）、土師器坏（319 ～ 332）、白磁碗Ⅰ類（333）、布痕土器（334）、須恵器甕（335 ～ 338）が出土した。320では、同一溝内の約５m離れた遺物３点が接合し、北に位置する遺物が10㎝ほど低い。338はC ９・D ９グリッド出土と接合している。（第53図）

SE ７（第46図）

調査区の中央に北から南へ数回鍵型に屈曲しながらのびるが、北端・南端についてははっきりしない。溝は池状遺構を切り、門跡のすぐ東を走りながら約43mほど南にのび、そこで西にほぼ直角に屈曲し５mほどして再び南に屈曲し７mのところでSE １と重複する。SE １の土層断面から、SE ７はSE １と重複しながら南西に延びていたと考えられる。北端は池状遺構と重複した箇所から東に屈曲しくぼ地に向かうが、途中で浅くなり消失する。溝の断面はＵ字状をなし、北端では幅1.3m、深さ0.15m、池状遺構と重複する東側付近

では、幅約２m、深さ0.55m、SE ８と重複する付近では幅1.55m、深さ0.55m、門跡付近では幅約２m、深さ0.45m、SE １との重複する付近では幅1.2m、深さ約0.15mを測る。溝底はSE ８との重複部分の南で段が設けられ北側が約７㎝ほど低くなるが、溝底レベルは北端と南端の差は５㎝程度とほとんどない。SE27・SE ８・SE12・SC ９と重複し、SE28に切られる。

出土遺物として土師器甕（339 ～ 344）・坏（346 ～ 356・506）、高台付埦（357 ～ 367）、布痕土器（368）、須恵器甕（369 ～ 378）・坏（379・380・383）・埦（381・382）、白磁碗Ⅳ類（385）、越州窯系青磁（386・387）、土錘（384）が出土している。黒色土器は出土していない。なお、339の土師器甕の外面には線刻が施される。354は、D10グリッド出土遺物と、379はSZ ３やE10グリッド出土と接合している。また、381はSE２出土の276と、382はSE11出土の440とそれぞれ胎土・調整が類似している。（第54図）

SE ８（第47図）

池状遺構の南西端から延び、東に向けＬ字に屈曲しSE ７と重複する。検出長は約26m、幅0.50 ～ 0.80m、深さ約0.20 ～ 0.30mを測り、溝底は北端が0.10m程度低くなっている。SE ７の東側には確認できなかったことからSE ７と交わったところで終結しているか、SE ７に沿って北あるいは南に延びていた可能性が考えられる。SE ３・６を切る。また、SB ７・31と重複し、SB30がすぐ北に平行して作られる。埋土は黒褐色土で、断面形は台形を呈す。出土遺物としては、弥生土器（388）、土師器坏（389 ～ 391）、高台付埦（392 ～ 394）、黒色土器（395）、布痕土器（396・397）、白磁碗Ⅴ類（399）がある。（第55図）

SE ９（第45図）

調査区の中央やや北より、池状遺構の北に位置する。東西に延びる溝で、検出長は約43m、幅約0.60 ～ 0.80m、深さ約0.10 ～ 0.25mを測り、溝底は西端から約0.12mほど東端が低くなる。SE4・5・28・29に切られ、SB2を切る。さらにSB12・19・20・29と重複する。須恵器甕（400）が出土する。（第55図）

SE10（第47図）

調査区の西、SE ２の北側に位置する。東西に蛇行しながら延びる溝で、検出長は約20m、幅0.50 ～ 1.00m、深さ約0.13mを測る。溝底は東端が0.20m程度高くなっている。埋土は褐色土で、断面形はＵ字形をなす。大型鉢（401）の底部が出土している。（第55図）

SE11（第47図）

SE １とSE ２の間に位置し、北に延び、途中より東に屈曲し、SZ １と重複しさらに東に延びたところで消失する。検出長は約35m、幅0.50 ～ 0.80m、深さ約0.10mを測る。断面形は浅くレンズ状をなし、SE12を切る。溝底は南端が0.08m程度低くなる。遺物は検出面からの深さは浅いが、まとまって出土している。土師器甕（402 ～ 406）・坏（407 ～ 414・416 ～ 425）・高台付埦（415・427 ～ 429）、黒色土器（431 ～ 435）、布痕土器（436）、須恵器甕（437 ～ 439）・高台付埦（440）、緑釉陶器（442）がある（402 ～ 442）。このうち431 ～ 442はSE12との重複部分出土である。（第55・56図）

SE12（第47図）

SE11と重複しながら東に延び、SE ７の手前で北東に屈曲する。検出長は約55m、幅0.30 ～ 0.40m、深さ約0.10mを測る。断面形は浅くレンズ状をなし、SE11・７に切られる。土師器甕（441）・坏（443）・高台付埦（444）、布痕土器（445）、須恵器甕（446・447）・坏（452）・皿（450）・坏蓋（451）、土錘（449）、墨書土器（408）、滑石製石鍋（448）が出土している。滑石製石鍋の胴部から底部への変化点付近を利用した二次加工品は、穿孔と切断痕が認められる。未製品と考えられる。（第55・56図）

SE13

SZ ２の東側に位置し、北東に延びると考え溝状遺構としたが、長さ3.5m、幅約0.8m、深さ約0.07mの浅い落ち込みとなる。そのすぐ東に連続している波板状の落ち込みと関連があるかもしれない。出土遺物な

し。

SE14

調査区の南、中央付近から東に蛇行しながら延びる。検出長は、断続的に確認され約42m、幅0.40 ～ 0.80m、深さ約0.10mを測る。断面形は浅いものの北側がなだらかで、南が急角度で立ち上がる。SE25・30を切り、溝底は西端が0.30mほど低い。出土遺物なし。

SE15（第48図）

SE14の北側約５mの位置で同遺構と平行して延び、東端は北側に屈曲しSE30の手前で消失している。検出長は、断続的に確認され約31m、幅0.60 ～ 0.90m、深さ約0.10 ～ 0.18mを測る。埋土は褐色土および黒褐色土で、断面は西側が浅いレンズ状をなし、東側は台形状を呈す。土錘（453）が１点出土。（第56図）

SE16・17（第48図）

調査区の南中央付近を南北に平行して延びる溝で、SE １･18に切られる。SE16は検出長は約10m、幅0.40 ～ 0.80m、深さ約0.20mを測る。埋土は褐色砂質土で、断面形は台形状を呈す。SE17は検出長は約12m、幅0.40 ～ 0.60m、深さ約0.12mを測る。SE17より土師器坏（454）が出土。（第56図）

SE18

SE18はSE １の南側に蛇行しながら延び、SE17・18を切るが、SE １との前後関係は不明である。検出長は約10m、幅0.20 ～ 0.40m、深さ約0.10mを測る。出土遺物なし。

SE19

SE15と平行して延びるが、やや曲線を呈す。検出長は約9m、幅0.60 ～ 0.70m、深さ約0.05mを測る。出土遺物なし。

SE20 ～ 22

調査区の東端に検出された。SE20が３本の溝状遺構では最も北に位置し、調査区外まで延びる。検出長は約12m、幅0.20 ～ 0.40m、深さ約0.05mを測る。SE21はSE20と平行するが緩やかな曲線を呈す。検出長は約９m、幅0.60 ～ 0.80m、深さ約0.10m。SE22は南北に延びる溝でSE21の南約８mに位置するが、削平によりわずかにその痕跡を確認した。検出長は約12m、幅0.50m。出土遺物なし。

SE23

調査区の南端中央付近に検出され、弧を描きながら東西に延びる。SB18と重複するが、溝の残りが良好でなかったため前後関係は不明。検出長は約16m、幅0.60m、深さ約0.07mを測る。出土遺物なし。

SE24（第48図）

調査区南東隅に位置しSE30と平行して南北に延びる溝で、北端は消失し、南端は調査区外にのびる。黒褐色土の埋土で、断面は浅いレンズ状をなす。検出長は約10m、幅0.80 ～ 1.00m、深さ約0.12mを測る。布痕土器（455）、灰釉陶器（456）が出土。（第56図）

SE25（第48・49図）

調査区の南東隅に検出された南北に延びる溝で、検出長約37m。北端はくぼ地に重なる部分では東にカーブしながら不明となり、南端は調査区外に延びる。SE14に切られ、SE30を切る。調査区南端では幅約2.9m。深さ約0.8m、Ｄ土層断面では幅約1.5m、深さ0.64m、くぼ地付近では幅約0.40mを測る。溝底がＦ土層断面付近まで２段掘りで、それより北は幅の狭い溝底となる。溝底レベルは北端が約30㎝ほど低い。各地点の土層の堆積状況をみると黒褐色土および暗褐色土系の埋土であるが、Ｄ断面の１～７層、Ｆ断面の25・26・30・33層、Ｅ断面の４～８層、Ｇ断面の９～15層において、溝埋没後再び溝を構築したと想定される。遺物として土師器甕（457・458）・坏（459 ～ 471・478）・高台付埦（472 ～ 477）、黒色土器（479 ～ 480）、布痕土器（481）、須恵器壺（482・483・491・492）・甕（484 ～ 488）、越州窯系青磁（501）のほか、Ｉ層より

龍泉窯系青磁（502・503）など多くの遺物が出土している。特に溝の上端付近に掘り込まれた浅い窪み（第48図下左）に土師器坏（459・461・462）が、溝の南端の床面（第48図下右）から（463・479・482）がまとまって出土した。482は壺の口唇部にヘラ状の工具による刻目が施される。477・478はSE30との重複箇所から出土している。（第56・57図）

SE26（第48図）

SE25の東側で検出され、SE30を切る。暗灰褐色土の埋土で、文明の軽石と思われる軽石を含む。断面はU字状を呈す。検出長は約３m、幅約0.50m、深さ約0.05mを測る。

SE28

SE ４・５に平行して走る溝で、SE ７・９を切り、SB19・20と重複する。両端とも途中で消失するが、検出長約37m、幅0.35 ～ 0.55m、深さ約0.13m。溝底は南が約20㎝低くなる。

SE29

調査区の中央、SB １の東を南北に走る溝で、断続的に確認され、南端は池状遺構の東まで延びる。検出長は約39m、幅約0.30 ～ 0.60m、深さ約0.05mを測る。SE ４・５に切られ、SE ９・７を切る。また、SB20と重複する。黒色土器（493）が出土。（第57図）

SE30（第48図）

調査区南東隅に位置しSE24と平行して南北に延びる溝で、南端は調査区外にのびる。北端はSE15が終結している箇所と向き合うように止まり、陸橋状を呈していることから、同一の溝の可能性もある。SE ７・14・26・31に切られる。検出長は約30m、幅0.30 ～ 0.70m、深さ0.10 ～ 0.22mを測る。溝底は北端が約30㎝ほど低い。土師器甕（497）・高台付埦（494）、黒色土器（495・496）、須恵器甕（498・499）・壺（500）、越州窯系青磁碗（501・504）が出土している。（第57図）

SE31

調査区南東部に位置し、SE31を切り、SE ７と重複する。検出長は約８m、幅0.80m、深さ約0.10mを測る。溝底は若干南端が低い。出土遺物なし。

SE32

SE28の東に位置し、SE ４・５やくぼ地の傾斜に平行して延びる。検出長は約９m、幅0.60 ～ 0.80mを測る。未掘である。出土遺物なし。

SE33

SE32のすぐ西に位置し、検出長は約４m、幅約0.40mを測る。未掘である。出土遺物なし。

SE34

SE ７に切られながら東西にのびる溝で、SE ７が池状遺構付近で屈曲し東に延びる際の北側上端付近および窪地付近で消失するまでのわずか0.30mを確認できる。幅約0.80mを測る。なお、池状遺構の中島北辺を切っている溝がこれに繋がる可能性がある。出土遺物なし。

SE35

SE33と重複し、両端とも遺構に切られておりわずかしか確認できず、検出長は約７m、幅約0.50m、深さ約0.50mを測る。出土遺物なし。

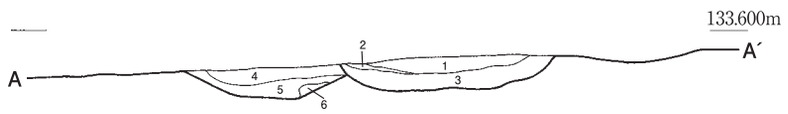
SE36 ～ 39

調査区の北東隅にまとまって検出され、いずれも北東～南東へ延びる溝である。SE36はSE ４とSE37の間および調査区の北東端で同一と推定される溝を確認している。検出長は途中消失しているが約22m、深さ約0.07m。SE37は検出長さ約20m、幅0.8 ～ 1.2m、深さ0.10m。中央付近で北側に蛇行している。なお、蛇行してできた区域に、同時期かどうかは不明であるが、長径1.5 ～ 1.8m、短径約0.3mの楕円形掘り込み４基

が溝に直交する状況で検出されており、道路状遺構にみられる波板状の掘り込みとも想定され、くぼ地を道として利用し、その上がり口であった可能性もある。SE38はその楕円形掘り込み部分に検出され、緩やかな曲線を描きながら約５ｍ延びるが､SE37に切られる｡SE39はSE37と平行して延び、検出長さ約17ｍ、幅0.4～0.6ｍを測る。SE38・39はSE33と同一の可能性がある。出土遺物なし。

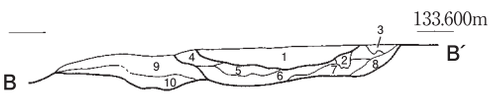
図版10　遺跡より霧島を望む

SE4・5

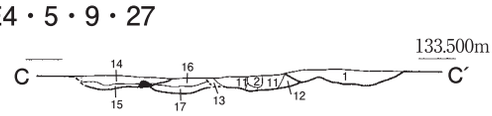


SE4・5　1　細かい白ボラの層
2　黒灰色粘質土　微量の白色ボラ粒混
3　黒灰色粘質土　白色ボラ粒(4～5mm)混
4　暗灰色粘質土　黄色ボラ粒(1～2mm)混
5　暗褐色土　ボラ粒(1～2mm)混
6　暗褐色・黒褐色粘質土混

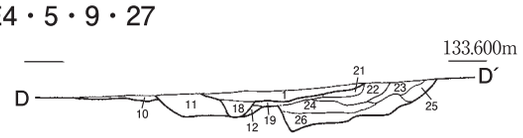
SE4・5・27



SE4・5・9・27

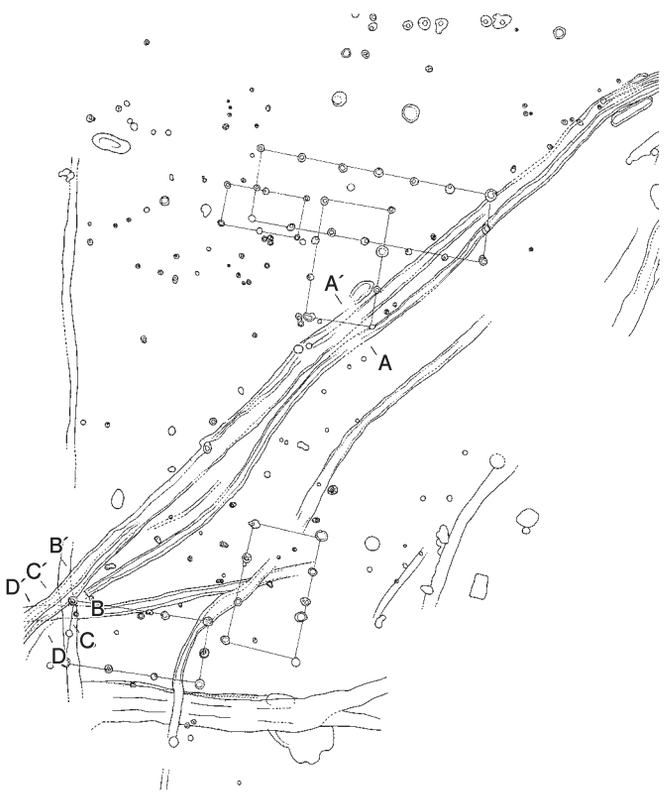


SE4・5・9・27



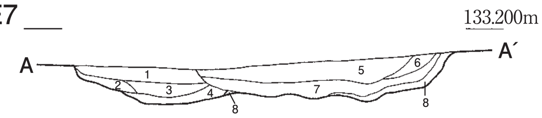
SE4･SE5･SE27の切り合い

SE27	1	黒褐色土　白色軽石(0.5～8mm)平均に多量　かなり硬質
	2･3	暗褐色土　白色軽石(0.5～2mm)　虫穴か？硬質
	18	黒褐色土　1層と類似　白色軽石(1層より少量)
SE5	4	暗褐色土　斑点状に多量の鉄分　少量のマンガン斑　微量の白色･褐色粒(0.5mm)硬質
	5	黒褐色土　鉄分斑･マンガン斑　微量の白色･褐色粒(0.5mm)　硬質
	6	黒褐色土　鉄分斑･マンガン斑　微量の白色･褐色粒(1～8mm)　硬質
	7	暗褐色土　鉄分斑　多量のマンガン斑　微量の白色(0.5mm)･褐色粒(2mm)　硬質
	8	暗褐色土　少量の鉄分･マンガン斑　褐色粒･ブロック(20～30mm)　硬質
	11	灰黄褐色土　鉄分斑･マンガン斑　少量の褐色粒(2～5mm)　硬質
	12	灰黄褐色土　少量の鉄分斑･マンガン斑　多量の褐色粒･ブロック(2～15mm)　硬質
	13	灰黄褐色土　やや多量の鉄分斑･マンガン斑　多量の褐色粒(1～8mm)　硬質
	19	灰黄褐色土
SE4	9	黒褐色土　鉄分斑･マンガン斑　少量の白色軽石粒(0.5～2mm)･褐色粒(1～3mm)　硬質
	10	黒褐色土　少量の鉄分斑･マンガン斑　少量の黄褐色軽石(2mm)　褐色粒･ブロック(1～40mm)　硬質
SE9	16	灰黄褐色　鉄分斑･マンガン斑　多量の褐色粒(2～10mm)　硬質
	17	黒褐色土　鉄分斑･マンガン斑　少量の褐色粒(2～10mm)　硬質
	21	暗褐色土　少量の鉄分斑･マンガン斑　少量の白色軽石　硬質
	22	黒褐色土　少量の鉄分斑･マンガン斑　やや多量の褐色粒･ブロック(2～20mm)　硬質
	23	暗褐色土　鉄分斑･マンガン斑　褐色粒(1～3mm)　硬質
	24	黒褐色土　鉄分斑･マンガン斑　少量の褐色粒(2～3mm)　硬質
	25	暗褐色土　鉄分斑･マンガン斑　少量の褐色粒(2mm)　やや軟質
	26	黒褐色土　少量の鉄分斑･マンガン斑　多量の褐色粒･ブロック(2～40mm)　黒色粒　硬質



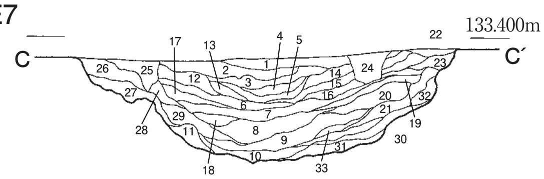
第45図　溝状遺構土層断面図（1）

SE7



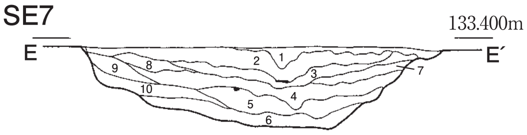
SE7－A　1　黒褐色土　褐色粒（2～3㎜）　細かい白斑　炭化物　しまる
2　黒褐色土　多量の褐色土　白斑　しまる
3　黒褐色土　1層に類似　少量の褐色土　白斑　しまる
4　黒褐色土　3層に類似　明褐色土　白斑　やや軟質
5　黒褐色土　赤み（鉄分）帯びる　白斑（1層より少量）　1層より硬質
6　黒褐色土　5層に類似　褐色土の割合が多い　硬くしまる
7　黒褐色土　4層に類似　明褐色土　やや赤み（鉄分）帯びる　少量の白斑

SE7



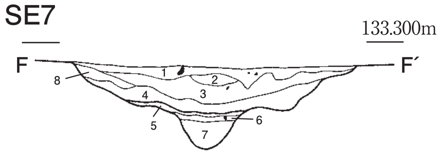
SE7－C　1　灰色系褐色土　少量の白色軽石（5～10㎜）　下部に黒色砂の帯を持つ（部分的に）　やや軟質
2　灰色土　多量の黄褐色ブロック（1～10㎜）　ややしまる　南からの流れ込み？
3　明灰色系褐色土　明灰色の砂質土　やや軟質　北からの流れ込み？
4　暗灰色土　2層に類似　黄褐色ブロック（1～10㎜）砂質的に混　やや軟質
5　灰色系明褐色土　3層に類似　微量の明灰色砂質土　黄褐色土　やや軟質
6　暗青灰色土　含有物ほとんどなし　粘性少し　硬くしまる　切られているか南からの流れ込み
7　灰色系暗褐色土　含有物ほとんどなし　酸化による赤褐色の斑文
8　灰色系暗褐色土　7層に類似　暗灰色砂質　やや軟質
9　オリーブ褐色土　黄褐色・明灰色砂質土ブロック　やや軟質
10　暗オリーブ褐色土　主構成は砂質土　粘性　硬くしまる
11　黒オリーブ褐色土　黒褐色砂質土・暗灰褐色土・黄褐色土（撹乱した層）　やや軟質
12　暗青灰褐色土　6層に類似　明灰色砂質土混　やや軟質
13　灰色系黄褐色土　微量の黄褐色ブロック　南からの流れ込み
14　灰色系黒褐色土　微量の黒色土（1～2㎜）混　硬くしまる
15　灰色系黒褐色土　14層に類似　黒色土粒を含まない　硬くしまる
16　灰色系黒褐色土　多量の黄褐色ブロック（1～2㎜）　やや硬質
17　オリーブ褐色土　多量の黄褐色ブロック（1～2㎜）
18　暗黄灰褐色　黒褐色土（灰色系）・黄褐色土混
19　灰色系暗褐色土　7層に類似　赤変なし　灰色砂質土
20　灰色系暗褐色土　7・8層に類似　多量の乳白色軽石・黒色土粒
21　暗褐色土　多量の黄褐色土ブロック（2～3㎜）　少量の黒色土粒（1～2㎜）
22　褐色土　乳白色・黄褐色・黒色土ブロック（2～3㎜）混（撹乱）　やや硬質
23　暗青灰土　22層に類似　黄褐色・黒色土ブロック主体　少量の乳白色土ブロック　硬くしまる
24　赤褐色変黒褐色土　微量の軽石　酸化の赤変　硬くしまる
25　青灰砂質土　酸化による赤変・斑文　砂質性高くぼろぼろしている　軟質
26　明褐色土　黄褐色土・黒褐色土（撹乱）　やや軟質
27　暗褐色土　黒色土混　黄褐色土・青灰色砂質土（撹乱）　やや軟質
28　オリーブ褐色土　26層に類似　黒色土ブロックやや多い　色調やや暗い　やや軟質
29　暗オリーブ褐色土　32層や11層の影響か？下部に多量の黄褐色ブロック（1～30㎜）
30　暗褐色土　多量の黄褐色ブロック　微量の黒色土ブロック　やや軟質
31　黒褐色土　黄褐色土・黒色土・暗褐色土（撹乱）　やや軟質
32　暗褐色土　暗褐色土主体　黄褐色ブロック（1～2㎜）・黒色土ブロック
33　暗褐色土　微量の乳白色軽石・黒色土粒

SE7



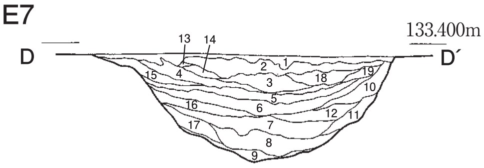
1～10層は溝の埋土と思われる
SE7－E　1　灰色土　多量の白色軽石（1㎜）　硬い
2　灰色系褐色土　多量の灰色シルト砂　少量の白色軽石　多量の黒色（3㎜）豆石or砂
3　灰色系褐色土　2層と類似　微量の白色軽石・黒色豆石・灰色シルト　土器片
4　灰色系褐色土　2・3層と類似　多量の灰色シルト　極微量の白色軽石　やや軟質
5　灰色系褐色土　2・3・4層と類似　多量の灰色シルト　極微量の乳白色軽石（2㎜）　僅かに粘性　やや軟質
6　灰色系暗褐色土　全体的に黒色　黄褐色ブロック　僅かに粘性　やや軟質
7　灰色系黒褐色土　灰色系褐色土に黒色砂質土・黄褐色土混入　やや硬い
8　灰色系黄褐色土　攪拌された灰色系褐色土・黄褐色土　微量の白色軽石　やや硬い
9　灰色系黒褐色土　3層と類似　多量の黄褐色土・灰色シルト質土　少し粘性　やや軟質
10　灰色系黄褐色土　ブロック状に混入した黄褐色土・灰色シルト質土

SE7



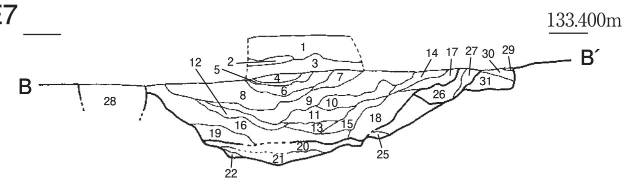
SE７－F　1　暗灰褐色土　微量の乳白色軽石（1～2㎜）・礫（50㎜）　やや軟質
2　暗褐色土　黄褐色土ブロック（50㎜）・黒褐色砂質土　微量の乳白色軽石
3　灰色系暗褐色土　灰色シルト質土　微量の橙色軽石（2㎜）　土器片　やや軟質
4　灰色系暗褐色土　3層と類似　黄褐色土（9層より）混入　やや粘性　やや軟質
5　暗黄暗褐色土　4層と類似　黄褐色の色調　粘性　やや軟質　9層からの流れ込みか？
6　暗黄褐色土　5層に類似　砂質性が強い土器片　やや軟質
7　黒褐色土　微量の黒色土ブロック　少量の橙色土ブロック（2～3㎜）・黄褐色土ブロック（2㎜）　やや粘性
8　暗褐色土　2層と類似　黄褐色土ブロック

SE7

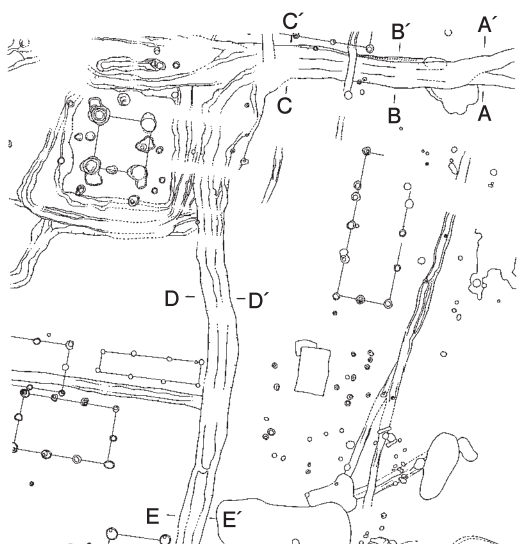


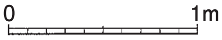
SE7－D　1　暗灰褐色土　多量の褐色土ブロック（10㎜以下）・灰色シルト　上部に斑文（赤褐色）　硬くしまる
2　灰色系褐色土　多量の褐色土ブロック（3㎜以下）　微量の白色軽石粒　ややしまる
3　暗灰褐色土　2層に類似　微量の褐色土ブロック・黒色砂質土　ややしまる
4　暗褐色土　上部ベルト状に黒色砂質土（厚さ3～4㎜）　微量の褐色土ブロック（3㎜）　ややしまる
5　暗褐色土　褐色土ブロック（5㎜）を主体に多量の黒色砂質土ブロック・灰色シルト質土ブロック　一部酸化の赤褐色　ややしまる
6　暗褐色土　5層に類似　褐色土ブロック（5～30㎜）　微量の灰色シルト質土　酸化なし　やや粘性　ややしまる
7　暗褐色土　6層に類似　多量の明るい褐色土ブロック（10㎜）　やや粘性　ややしまる
8　黒褐色土　褐色土ブロック（50㎜）　やや粘性　ややしまる
9　黒褐色土シルト質土　粘性　第一次埋土か？　硬くしまる
10　暗黒灰褐色土　灰色シルト質土　微量の褐色土ブロック（10㎜）　ややしまる
11　暗黒灰褐色土　10層に類似　灰色シルト質土　微量の褐色土ブロック　下部にブロック集中　粘性　ややしまる
12　暗黒灰褐色土　10・11層に類似　褐色土ブロックほとんど含まない　粘性　ややしまる
13　褐色軽石土　軽石主体　1層からの落ち込みか？　ボロボロしている　軟質
14　暗灰褐色土　3層に類似　多量の褐色土ブロック（3㎜）　ややしまる
15　暗褐色土　4層と同質　少量の褐色土ブロック　ややしまる
16　暗褐色土　5層に類似　褐色土ブロックをほとんど含まない　ややしまる
17　褐色土　下部に少量の褐色土ブロック　ややしまる
18　黒灰褐色土　黒色砂質土　色調暗い　ややしまる　（別の溝の可能性あり）
19　暗灰褐色土　3層と同質

SE7

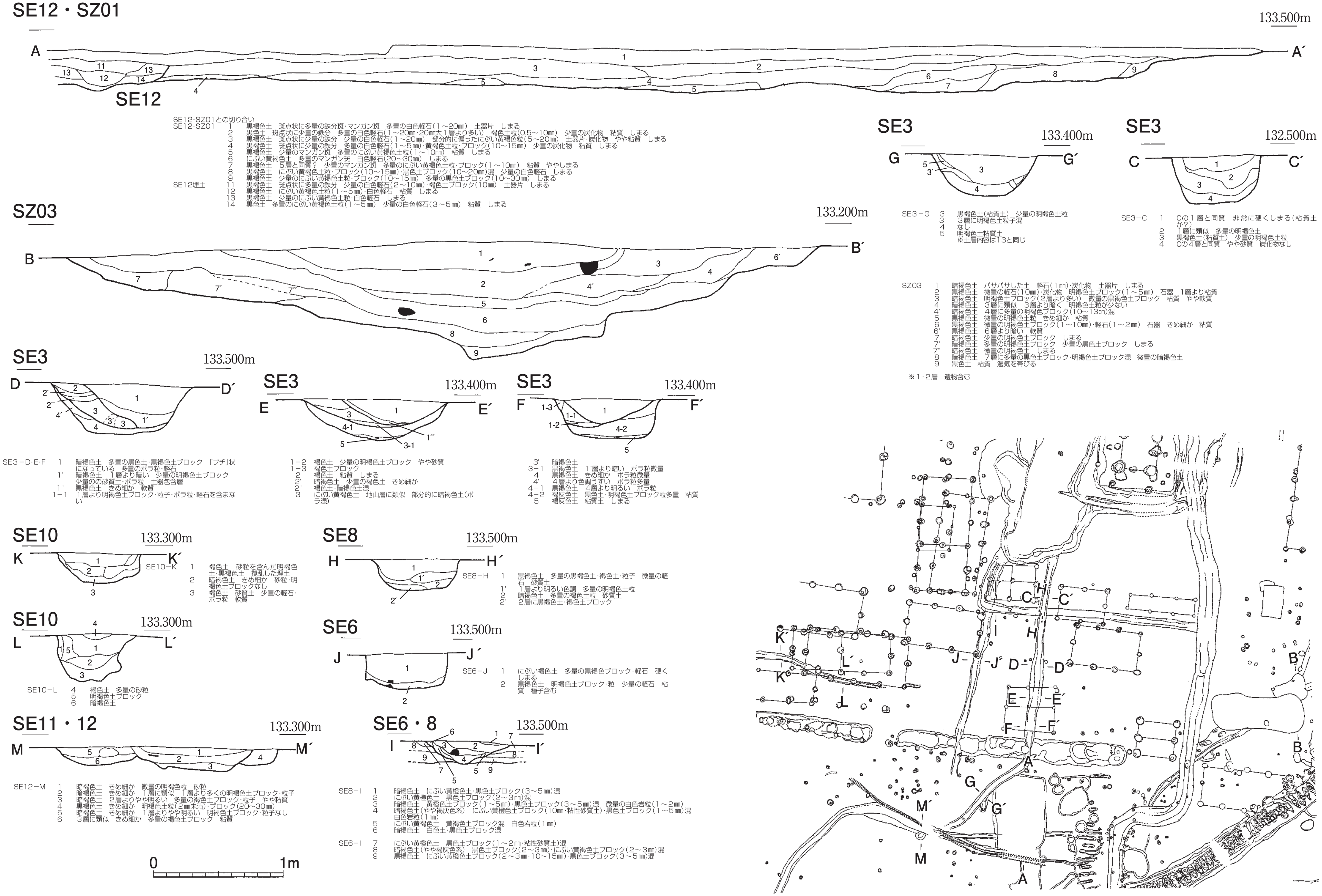


SE7－B　1　褐灰色土　多量の鉄分斑　微量のマンガン斑　褐色土粒・ブロック（1～40㎜）　少量の白色軽石　砂質　しまる
2　褐色土　多量の鉄分斑　微量のマンガン斑　多量の褐色土粒（2～10㎜）　しまる
3　黒褐色土　多量の鉄分斑・マンガン斑　多量の褐色土粒（2～10㎜）　しまる
4　褐灰色土　鉄分斑・マンガン斑　少量の灰黄褐色土粒（2～3㎜）・褐色土粒（2㎜）　しまる
5　黒褐色土　少量の鉄分斑・マンガン斑　微量の褐色土粒（0.5㎜）　しまる
6　暗褐色土　少量の鉄分斑・マンガン斑　多量の褐色土粒・ブロック（3～40㎜）　やや砂質　しまる
7　黒褐色土　少量の鉄分斑・マンガン斑　微量の褐色土粒（2～3㎜）　しまる
8　暗褐色土　少量の鉄分斑・マンガン斑　褐色土粒（1～5㎜）　やや砂質　やや軟質
9　褐色土　鉄分斑　微量の褐色土粒（1～3㎜）　しまる
10　暗褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　しまる
11　暗褐色土　微量のやや軟質　多量の褐色土粒（1～8㎜）　少量の白色軽石　しまる
12　黒褐色土　鉄分斑・マンガン斑（鉄分・マンガンが棒状に沈着）　褐色土粒（2～3㎜）　しまる
13　暗褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　褐色土粒（1～3㎜）　やや軟質
14　暗褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　多量の褐色土粒（0.5～1㎜）やや念質　やや軟質
15　暗褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　微量の褐色土粒（0.5～1㎜）・黒色土粒　微量の炭化物　しまる
16　暗褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　多量の褐色土粒（5～10㎜）　少量の黒色粒　しまる
17　暗褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　多量の褐色土粒（10～20㎜）　やや軟質
18　暗褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　褐色土粒（2～3㎜）　しまる
19　暗褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　微量の褐色土粒（2～10㎜）　しまる
20　黒褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　褐色土粒・ブロック（2～40㎜）　しまる
21　黒褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑（20層より少ない）　多量の褐色土粒・ブロック（3～50㎜）　しまる
22　黒褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑（20層より少ない）微量の褐色土粒（3㎜）　やや軟質
23　暗褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　多量の褐色土ブロック（10cm）　しまる
24　暗褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　多量の褐色土粒・ブロック（2～20㎜）　しまる
25　黒褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　微量の黒色土粒（1㎜）　やや軟質
26　にぶい黄褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　多量の褐色土粒（2～50㎜）・ブロック　しまる
27　黒褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　やや砂質　やや軟質
28　暗褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　微量の褐色土粒（1～20㎜）　やや砂質　やや軟質
29　暗褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　微量の褐色土粒（2㎜）　しまる
30　にぶい黄褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　多量の褐色土粒（2～20㎜）・ブロック　しまる
31　黒褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　微量の褐色土粒（1～2㎜）　しまる





第46図　溝状遺構土層断面図（2）

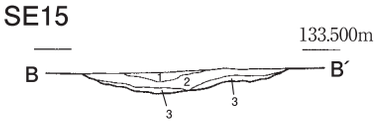


第47図　溝状遺構土層断面図（3）

SE14

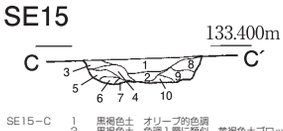
SE14−A　1　明灰褐色土　上部に多量の淡黄灰褐色砂質土　微量の橙色軽石　やや軟質

SE15

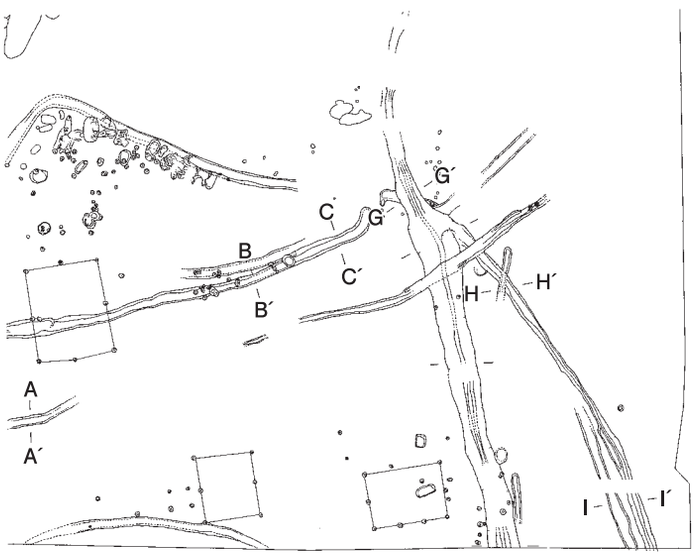


SE15−B　1　オリーブ褐色土　微量の黄褐色土ブロック(3㎜)　やや軟質
2　オリーブ褐色土　1層に黒褐色土(20㎜)・黄褐色土ブロック(3㎜)混　やや硬質
3　暗黄灰褐色土　部分的に少量の黒褐色土ブロック　下部に黄褐色土ブロック(10㎜)　やや軟質

SE15



SE15−C　1　黒褐色土　オリーブ的色調
2　黒褐色土　色調1層に類似　黄褐色土ブロック(3㎜)混
3　黒黄灰褐色土　黄褐色土の混入顕著　ややしまる
4　黒褐色土　微量の黄褐色土　しまる
5　黒褐色土　4層と類似　黄褐色土ブロック(10㎜)　しまる
6　黒黄灰褐色土　黄褐色化　やや軟質
7　黒褐色土　6層と類似　黒褐色土にブロック(1～2㎜)混　やや軟質
8　黒褐色土　1･9層の中間的色調　ややしまる
9　黒黄灰褐色土　黒褐色にオリーブ褐色的色調　やや軟質
10　暗黄灰褐色砂質土　微量の黒褐色土

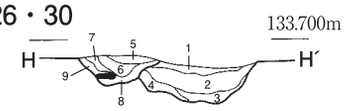


SE24・30

SE24−I　1　黒褐色土　淡黄灰褐色土ブロック･黒色土粒混　少量の土器片　やや硬質
2　暗褐色土　1層と類似　やや硬質

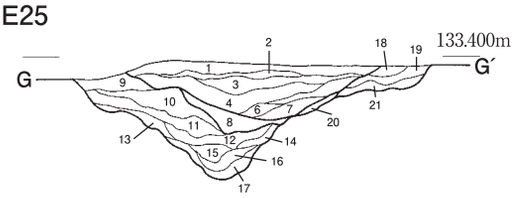
SE30−I　1　黒褐色土　淡黄灰褐色土ブロック･淡黄色系軽石(1㎜)混　やや硬質
2　暗褐色土　淡黄色系軽石粒(1㎜)混　やや硬質
3　黒褐色土　粒状の褐色土　褐色土と黒褐色土(1：5)
4　黒褐色土　淡黄灰褐色土との混成　ブロック状褐色土と黒褐色土(1：3)　中位に多量の土器片

SE26・30



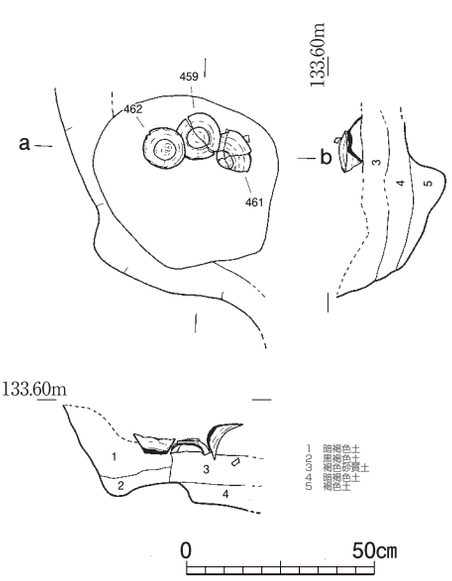
SE26･30−H　1　褐色系黒灰褐色土　砂質性黒灰褐色土に褐色土混　部分的に酸化による褐色化　ややしまる
2　灰色系暗褐色土　微量の黄灰褐色ブロック･乳白色軽石　全体に極うすく酸化による褐色化　しまる
3　褐色土　ブロック状の暗黄灰褐色砂質土(撹乱)　ややしまる
4　黒黄灰褐色土　3層に類似　灰色系褐色土と暗黄灰褐色土の撹乱　砂質
5　褐色系灰褐色土　1層と類似　主構成は灰褐色土　やや明るい色調　やや硬質
6　暗灰褐色土　微量の乳白色軽石(1㎜)
7　灰色系褐色土　6層と類似　乳白色軽石混　やや硬質
8　暗褐色土　3層と類似　ブロック状の暗黄灰褐色砂質土
9　黒灰褐色土　9層と類似　構成土の粒子が細かい

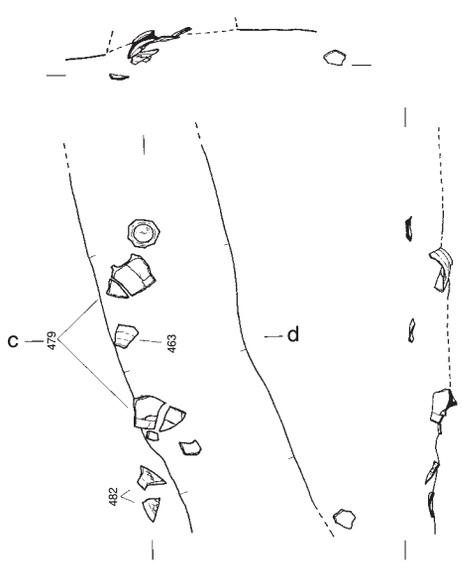
SE25

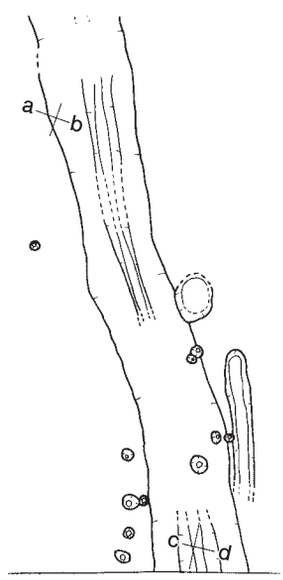


SE25−G　1　灰色土　褐色土混　微量の白色軽石(1㎜)　僅かに酸化による褐色化　硬質
2　褐色砂質土　1層と類似　灰色砂質土混　水成的堆積　やや硬質
3　褐色系灰色土　下部に黄灰褐色土ブロック(1～5㎜)　ややしまる
4　暗灰色土　微量の黄褐色土ブロック(3㎜)
5　褐色系灰色土　全体に多量の黄褐色土小ブロック(1㎜以下)
6　暗灰色土　灰色砂質土ブロック(大きさ不定)混　周囲と含有物に違いがある　やや軟質
7　黒灰色土　全体に多量の黄･橙色軽石
8　黒灰褐色土　多量の黄灰褐色土ブロック　人為的な埋土か？　やや軟質
9　灰色系褐色土　多量の黒褐色土･軽石　やや硬質
10　暗黄灰褐色土　ブロック状の黒灰褐色土と黄灰褐色土(1：5)　人為的な撹乱か？　やや軟質
11　黒灰色土　軟質
12　灰オリーブ褐色土　全体に多量の黄灰褐色土ブロック(3㎜以下)　やや軟質
13　暗オリーブ褐色土　12層と類似　暗黄灰褐色砂質土と黒灰色土の混合
14　褐色系暗灰褐色土　全体に微量の黄灰褐色土ブロック(3㎜以下)　ややしまる
15　暗灰褐色土　黄褐色土ブロック混　微量の黄褐色土粒　やや砂質
16　暗灰褐色土　全体に多量の黄褐色土ブロック(2㎜)　やや砂質　やや軟質
17　灰褐色土　多量の灰色系砂質土･黄褐色土ブロック　砂質
18　暗オリーブ褐色土　オリーブ褐色と黄褐色土の混合　(溝dの埋土？)
19　暗オリーブ褐色土　全体に白色軽石(1㎜以下)　(溝dの埋土？)
20　黒褐色土　黄色軽石混　微量の白色軽石(1㎜)黄褐色ブロック(3㎜)　やや軟質
21　暗褐色土　黄色軽石混　多量の白色軽石(3㎜)　やや軟質

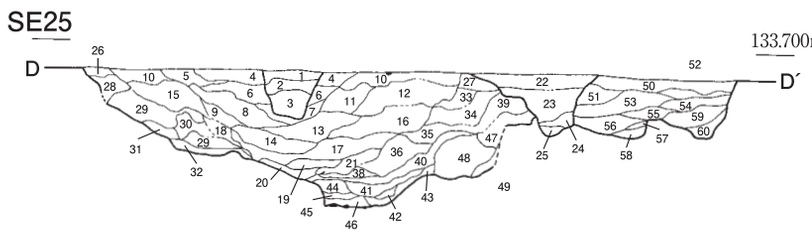
0　1m



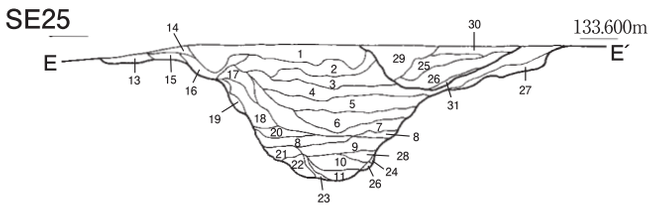




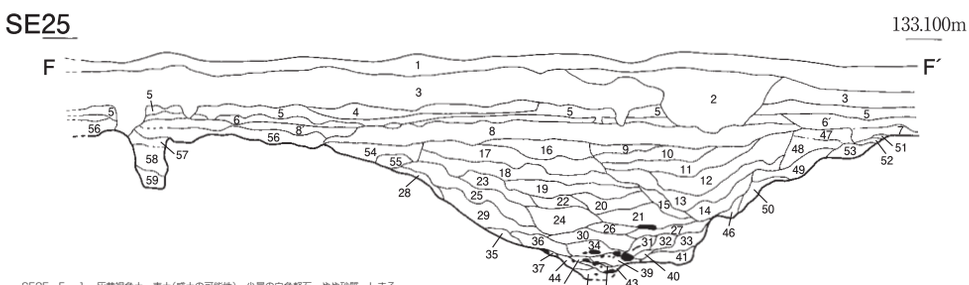
第48図　溝状遺構土層断面図（4）



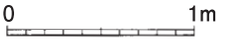
SE25－D
1 暗オリーブ褐色土　多量のマンガン斑・鉄分斑　しまる
2 黒褐色土　多量の鉄分斑　少量のマンガン斑　少量の黄褐色軽石(2～3㎜)　しまる
3 黒褐色土　鉄分斑　少量の炭化物粒(1～2㎜)・黄褐色軽石(2～3㎜)　ややしまる
4 暗褐色土　鉄分斑　少量のマンガン斑　少量の黄褐色軽石　やや砂質　しまる
5 黒褐色土　鉄分斑・マンガン斑　少量の黄褐色軽石　しまる
6 黒褐色土　鉄分斑　少量のマンガン斑　少量の黄褐色軽石　しまる
7 黒褐色土　鉄分斑　しまる
8 黒褐色土　少量の鉄分斑　少量の白色(2㎜)・黄褐色軽石(1～10㎜)　褐色土粒(1～2㎜)・黄褐色土粒　しまる
9 黒褐色土　少量の褐色土粒　やや軟質
10 黒褐色土　鉄分斑　多量のマンガン斑　やや砂質　しまる
11 暗褐色土　鉄分斑　少量の白色・黄褐色軽石　しまる
12 黒褐色土　鉄分斑　多量の白色・黄褐色軽石(11層より多い)　少量の褐色土粒　しまる
13 黒褐色土　鉄分斑・マンガン斑　白色軽石・黄褐色軽石・褐色土粒　やや硬質
14 黒褐色土　鉄分斑　黄褐色軽石　少量の褐色土粒　やや硬質
15 黒褐色土　少量の鉄分斑・黄褐色軽石　多量の褐色土粒(1～10㎜未満)　黒色土粒(20～30㎜)　やや砂質　やや硬質
16 黒褐色土　少量の鉄分斑・黄褐色軽石　多量の褐色土粒(2～3㎜)　やや硬質
17 黒褐色土　少量の鉄分斑・黄褐色軽石　多量の褐色土粒(3～7㎜)　やや硬質
18 黒褐色土　少量の鉄分斑　少量の褐色土粒　やや砂質　やや硬質
19 黒褐色土　少量の鉄分斑　多量の褐色土粒・ブロック(2～15㎜)　やや硬質
20 黒褐色土　少量の鉄分斑　褐色・黒色土粒(3～10㎜未満)　やや軟質
21 黒褐色土　少量の鉄分斑・褐色土粒(1㎜)　やや軟質
22 灰黄褐色土　鉄分斑・マンガン斑　下部に凝集した黄褐色土粒　やや砂質　しまる
23 黒褐色土　鉄分斑　少量のマンガン斑　少量の白色軽石・白色粒　しまる
24 黒褐色土　鉄分斑　褐色土粒(2～8㎜)　しまる
25 暗褐色砂質土　鉄分斑　褐色土粒(2～8㎜)　やや粘質　しまる
26 暗褐色砂質土　少量のマンガン斑　多量の黄褐色軽石　しまる
27 黒褐色土　鉄分斑・マンガン斑　やや砂質　しまりあり
28 黒褐色土　黒色粒(2～3㎜)　しまる
29 褐色土　黄褐色軽石　部分的に鉄質が強い　しまる
30 黒褐色土　褐色・黒色土粒(1～2㎜)　少量の褐色土ブロック　ややしまる
31 黒褐色砂質土　少量の黄褐色軽石・黒色土粒　ややしまる
32 黒褐色土　31層に類似　やや軟質
33 暗褐色土　少量の鉄分斑　しまる
34 暗褐色土　少量の鉄分斑　褐色土粒(1～2㎜)　少量の黒色土粒(1～2㎜)　しまる
35 暗褐色土　少量の鉄分斑　多量の褐色土粒・ブロック(1～12㎜)　少量の黒色土粒(2～5㎜)　砂質が強い　しまる
36 暗褐色土　多量の褐色・黒色土粒　少量の白色軽石　やや砂質　しまる
37 暗褐色土　部分的に集った褐色土粒(2～8㎜)　筋状に多量の黒色土粒(2～3㎜)　しまる
38 暗褐色土　多量の褐色土粒(2～8㎜)　少量の黒色土粒　粘質が強い　しまる
39 暗褐色土　褐色土ブロック(10㎝)・粒(5～8㎜)・黒色土粒(2～4㎜)　しまる
40 暗褐色土　褐色・黒色土粒　少量の黄褐色軽石　ややしまる
41 黒褐色土　少量の褐色・黒色土粒　やや軟質
42 黒褐色土　やや軟質
43 黒褐色砂質土　少量の鉄分斑　黄褐色土ブロック(10㎜)　やや粘質　やや軟質
44 黒褐色土　少量の鉄分斑　多量の褐色土粒(2～5㎜)　少量の黒色土粒　やや粘質　やや軟質
45 黒褐色土　45層に類似　褐色・黒色土粒(45層より少ない)　やや軟質
46 暗褐色土　少量の鉄分・褐色土粒　やや砂質　やや軟質
47 黒褐色土　31層に類似
48 褐色土　粘質が強い　しまる
49 黒褐色土　少量の褐色土粒　やや軟質
50 暗褐色土　多量の鉄分斑　少量のマンガン斑　しまる
51 暗褐色土　少量の鉄分斑　しまる
52 黒褐色土　少量の鉄分斑　少量の黄褐色軽石・黄褐色土粒　やや硬質
53 黒褐色土　少量の鉄分斑　多量の黄褐色軽石　やや硬質
54 黒褐色土　少量の鉄分斑　少量の黄褐色軽石　やや硬質
55 黒褐色土　少量の鉄分斑　少量の黄褐色軽石・褐色土粒　しまる
56 黒褐色土　多量の褐色土粒(2～10㎜)少量の黄褐色軽石　しまる
57 暗褐色砂質土　やや軟質
58 暗褐色土　少量の白色軽石　やや硬質　やや硬質
59 暗褐色土　黄褐色軽石・褐色土粒　少量の黒色土粒　やや砂質　しまる
60 暗褐色土　少量の黄褐色軽石　やや砂質　しまる



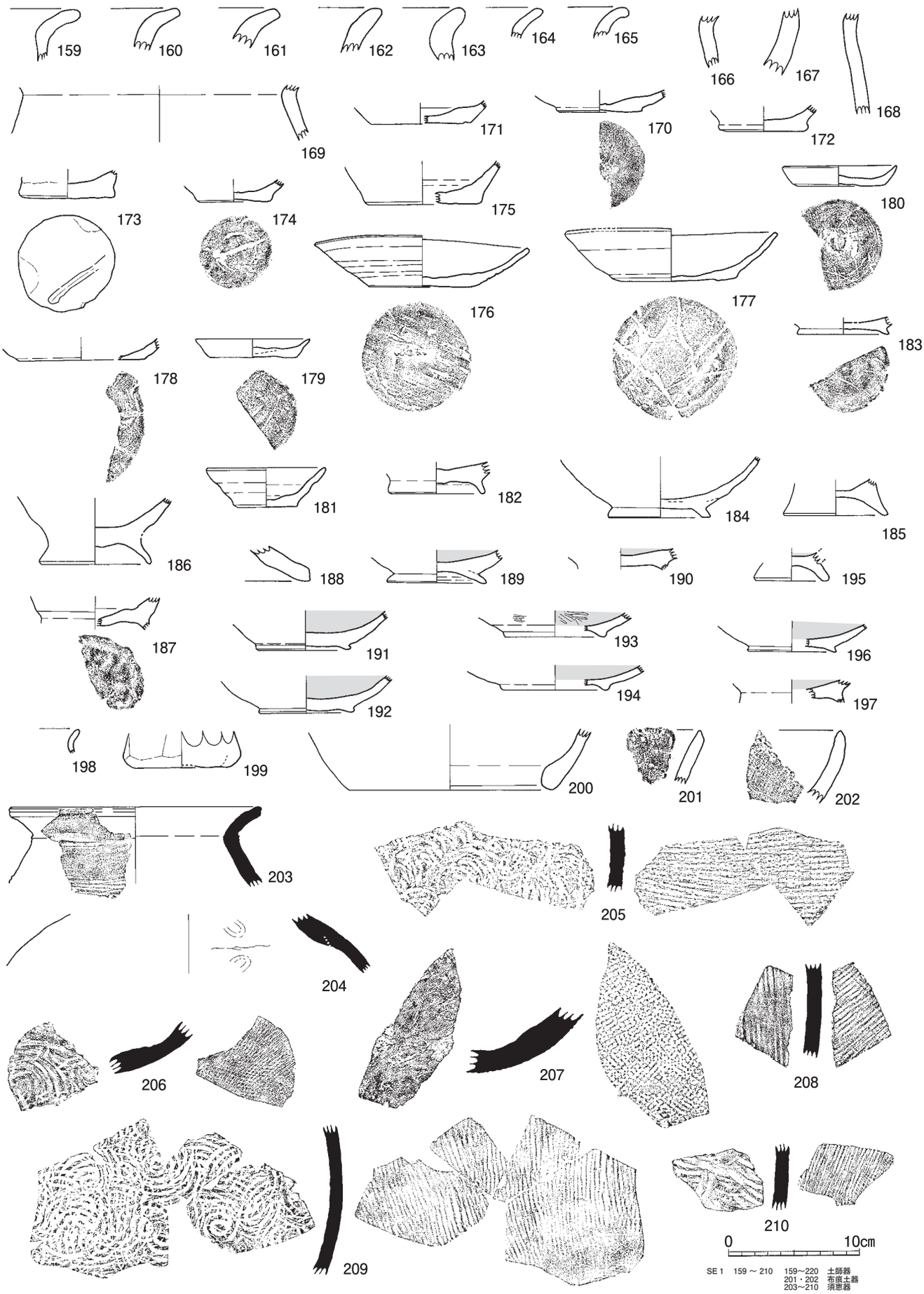
SE25－E
1 暗灰色土　微量の明褐色・灰色土ブロック・橙色軽石　やや硬質
2 暗黄灰褐色土
3 灰色系オリーブ褐色土
4 暗オリーブ褐色土　砂質性灰色系土混　やや軟質
5 オリーブ褐色土　極微量の橙色軽石(3㎜以下)
6 暗オリーブ褐色土　微量の黒褐色土ブロック
7 オリーブ褐色土　部分的に小円礫(30㎜)混
8 黒オリーブ褐色土　下部に小円礫(30㎜)混
9 黒灰土　軽石・円礫(70～80㎜)混　14層からの流れ込み　軟質　ボロボロしている
10 黒オリーブ褐色土　黒褐色土ブロック・砂質土・粘質土等から構成　水成的堆積　やや軟質
11 黒灰色土　やや砂質性があるが粘質も持つ　細互層的　水成堆積　やや軟質
12 暗黄灰褐色砂質土　砂質土　当遺構はこの層を掘り込んでいる　ややしまる
13 灰色系砂質土　黄褐色土混　ややしまる
14 暗灰色系砂質土　主構成は暗灰色砂質土　微量の黄褐色砂質土　ややしまる
15 暗灰色砂質土　黄褐色砂質土ブロック(10㎜)混　ややしまる
16 黒灰色砂質土　灰色系砂質土と黒褐色土の混入層　(SE中の遺物の包含層の1つ)　ややしまる
17 灰色系黒オリーブ褐色土　やや砂質
18 灰色系暗オリーブ褐色土　全体に多量の黄色軽石粒(1㎜)　19層よりやや明るい色調
19 黒黄灰褐色砂質土　13層と類似　やや色調が暗い　しまる
20 黒オリーブ褐色土　暗褐色軽石混　やや軟質　ボロボロしている
21 黒褐色土　9層と類似　礫混　軟質　ボロボロしている
22 暗黄褐色土　9・22層と類似　礫混　黄褐色砂質土混　地山からの流れ込みか？　軟質　ボロボロしている
23 黒灰色土　黄褐色砂質土混　微量の小円礫　やや軟質
24 黄褐色砂質土　25層と類似　主構成は　黄褐色砂質土と小円礫(10㎜)　やや軟質
25 灰色系暗オリーブ褐色土　ややしまる
26 灰色系黒オリーブ褐色土　27層と類似　27層より色調やや暗い　やや砂質　遺物包含層
27 灰色土　黄灰褐色砂質土混　やや軟質
28 黄オリーブ褐色土　主構成は9・14層よりやや小さい小円礫　軟質　ボロボロしている
29 黒灰褐色土　別の溝の可能性　崩落のため不明　軟質　ボロボロしている
30 黒オリーブ褐色土　1層と類似　ややオリーブがかった色調　　含有物少ない　やや硬質
31 黒オリーブ褐色土　砂質　流れ込みか？　やや軟質



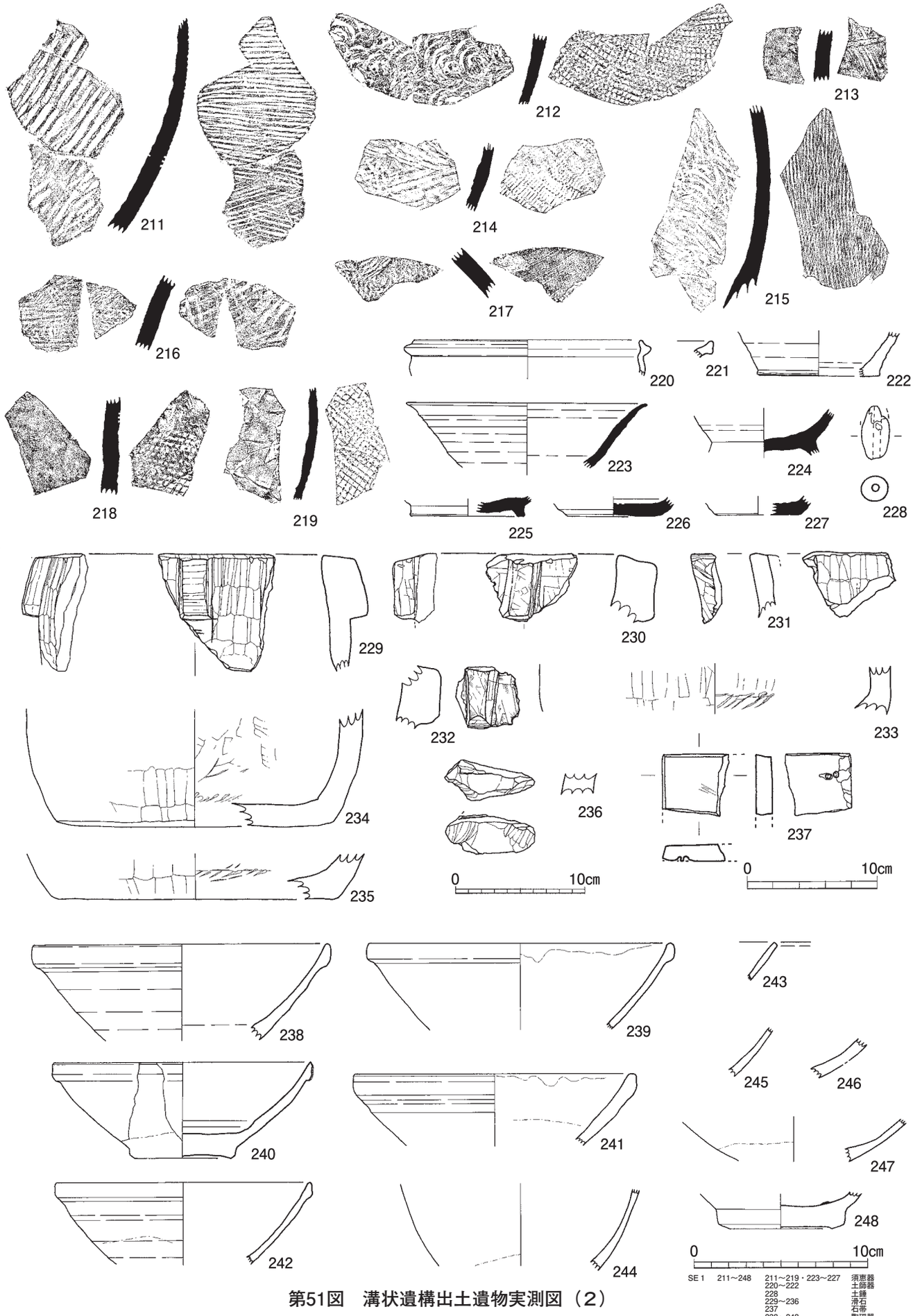
SE25－F
1 灰黄褐色土　表土(盛土の可能性)　少量の白色軽石　やや砂質　しまる
2 灰黄褐色土　少量の鉄分斑　白色軽石・小石　やや砂質　しまる
3 灰黄褐色土　少量の鉄分斑　白色軽石・小石　やや砂質　最下部に褐灰色土ブロック(10㎜)　しまる
4 黒褐色土　少量の鉄分斑　白色軽石・黄褐色土粒・砂岩　やや砂質　しまる
5 にぶい黄褐色土　少量の鉄分斑　多量の白色軽石　褐色土粒　やや砂質　しまる
6 黒褐色土　鉄分かなり沈着(明褐色)　少量の白色軽石・土器片等　しまる
7 黒褐色土　6層に類似　多量の白色軽石(1～3㎜)　しまる
8 黒褐色土　多量の鉄分斑　白色軽石　しまる
9 黒褐色土　多量の鉄分斑・マンガン斑　白色軽石(2～15㎜)・炭化物　やや硬質
10 黒褐色土　多量の鉄分斑・マンガン斑(8層より多い)　褐色土粒　やや硬質
11 黒褐色土　多量の鉄分斑・マンガン斑　少量の炭化物　やや硬質
12 黒色土　少量の鉄分斑・マンガン斑　多量の炭化物　やや硬質
13 黒褐色土　少量の鉄分斑・マンガン斑　多量の褐色土粒・炭化物　やや硬質
14 黒褐色土　少量の鉄分斑・マンガン斑　褐色土粒ブロック(2～15㎜)　少量の炭化物　やや硬質
15 黒褐色土　少量の鉄分斑・マンガン斑　少量の白色軽石・褐色土粒・炭化物　やや軟質
16 黒褐色土　少量の鉄分斑・マンガン斑　多量の褐色・黒色土粒　やや軟質
17 黒褐色土　少量の鉄分斑　微量の褐色土粒　やや軟質
18 黒褐色土　9層より鉄分斑が多く　炭化物が少ない　しまる
19 暗褐色土　少量の鉄分斑・マンガン斑　微量の白色土粒　少量の土器片・炭化物粒　しまる
20 暗褐色土　多量の鉄分斑・マンガン斑　少量の褐色土粒　しまる
21 黒褐色土　多量の鉄分斑・マンガン斑　少量の褐色土粒(1～2㎜)・小石・炭化物　やや硬質
22 暗褐色土　少量の鉄分斑・マンガン斑　褐色粒(1～2㎜)　微量の灰黄褐色土粒　少量の石・土器片　やや軟質
23 暗褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　微量の褐色・白色土粒　やや硬質
24 暗褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　褐色土粒　微量の黒色土粒　やや硬質
25 暗褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　多量の褐色土粒　暗褐色・黒色土粒　やや軟質
26 にぶい黄褐色土　微量の鉄分斑・マンガン斑　褐色・暗褐色土粒　やや軟質
27 黒褐色土　微量の褐色土粒・炭化物　やや硬質
28 黒褐色土　多量の褐色土粒(2～3㎜)　微量の炭化物　やや硬質
29 にぶい黄褐色土　多量の褐色土粒・ブロック(2～12㎜)　少量の黒色土粒　やや硬質
30 黒褐色土　鉄分斑・マンガン斑　褐色土粒(2～3㎜)　微量の白色軽石　やや硬質
31 黒褐色土　26層と類似　多量の褐色土粒　明褐色土粒・炭化物
32 黒褐色土　少量の褐色土粒(1㎜)　土器片　やや軟質
33 黒褐色土　少量の褐色土粒(1～2㎜)　やや軟質
34 黒褐色土　多量の褐色土粒(2～3㎜)　微量の黒色土粒　やや硬質
35 黒褐色土　鉄分斑(やや多め)・マンガン斑　少量の褐色土粒(2～3㎜)　やや硬質
36 にぶい黄褐色土　微量の黒色土粒　やや砂質　しまる
37 暗褐色土　微量の褐色土粒　やや砂質　やや硬質
38 褐色砂質土　微量の褐色土粒　小石　やや粘質　やや硬質
39 褐色土　小石　やや硬質
40 暗褐色土　砂質が強い　多量の小石　やや軟質
41 褐色土　38層と類似　小石を含まない　しまる
42 黒褐色土　褐色土粒(2～3㎜)　少量の明褐色土粒　やや砂質　やや軟質
43 暗褐色土　39層と類似　褐色土粒を含む
44 暗褐色土　褐色土粒　小石　やや軟質
45 暗褐色土　褐色土粒(2㎜)　小石　やや砂質　やや軟質
46 暗褐色砂質土　少量の小石　やや粘質　やや軟質
47 黒褐色土　33層と類似　褐色土粒(33層より少ない)
48 黒褐色土　鉄分斑・マンガン斑(マンガン斑の割合が多い)　少量の白色軽石・炭化物　しまる
49 黒褐色土　鉄分斑・マンガン斑　白色軽石(2～3㎜)　褐色土粒　しまる
50 黒褐色土　少量の鉄分斑・マンガン斑　褐色土粒　やや硬質
51 黒褐色土　27層に類似　褐色土粒(27層より少ない)
52 黒褐色土　少量の鉄分斑・マンガン斑　少量の白色軽石　しまる
53 黒褐色土　少量の鉄分斑・マンガン斑　褐色土粒　しまる
54 暗褐色土　少量の鉄分斑・マンガン斑　多量の褐色土粒　しまる
55 暗褐色土　少量の鉄分斑・マンガン斑　多量の褐色土粒　少量の炭化物　しまる
56 暗褐色土　多量の鉄分斑・マンガン斑　多量の褐色土粒・ブロック(2～12㎜)　しまる
57 暗褐色土　鉄分斑・マンガン斑(マンガン斑の割合が多い)　多量の褐色土粒(1～2㎜)　しまる
58 黒褐色土　鉄分斑・マンガン斑　多量の褐色土粒・ブロック(2～20㎜)　やや硬質
59 暗褐色土　鉄分斑・マンガン斑　褐色土粒　やや硬質



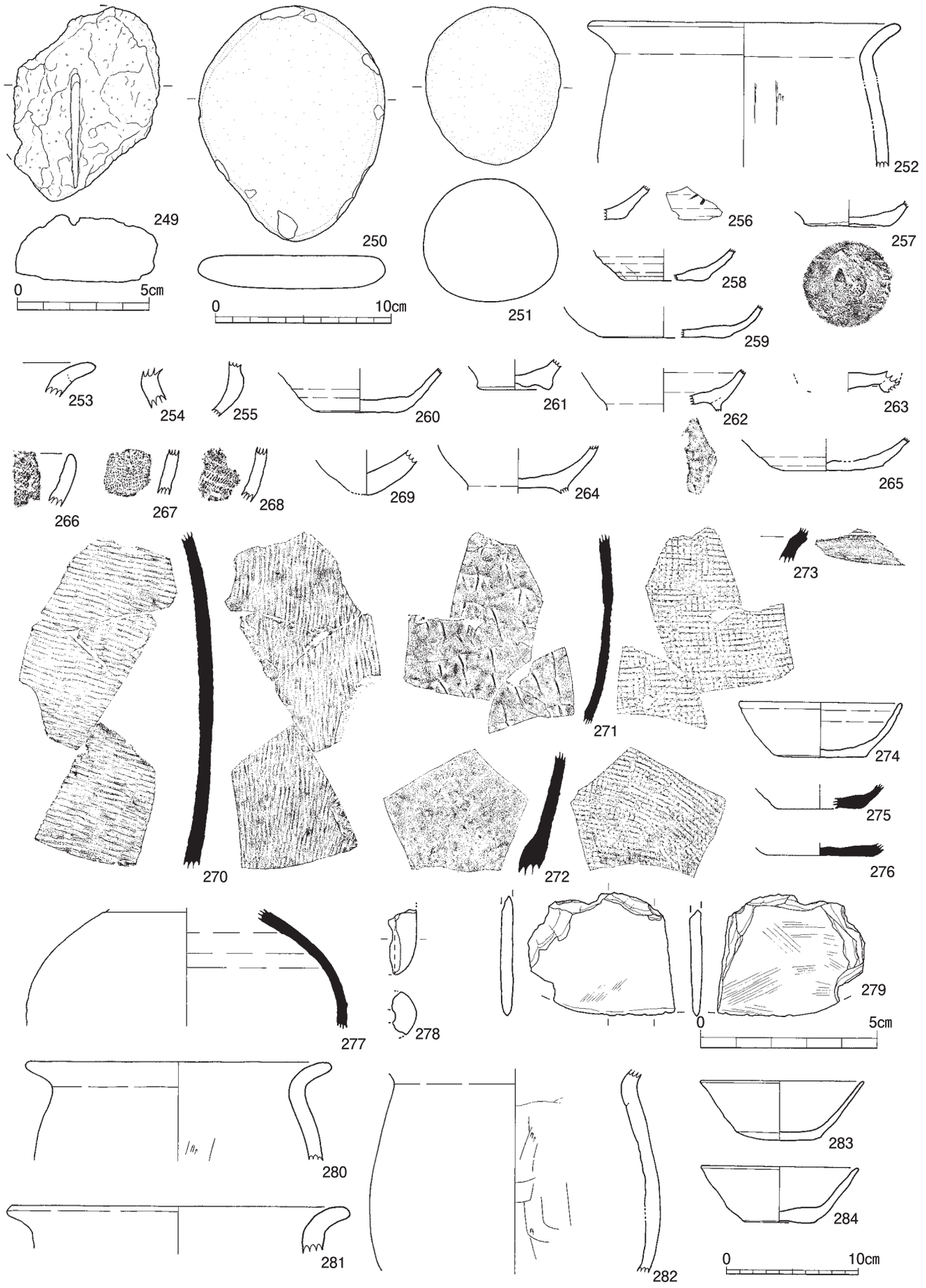
第49図　溝状遺構土層断面図（5）



第50図　溝状遺構出土遺物実測図（1）

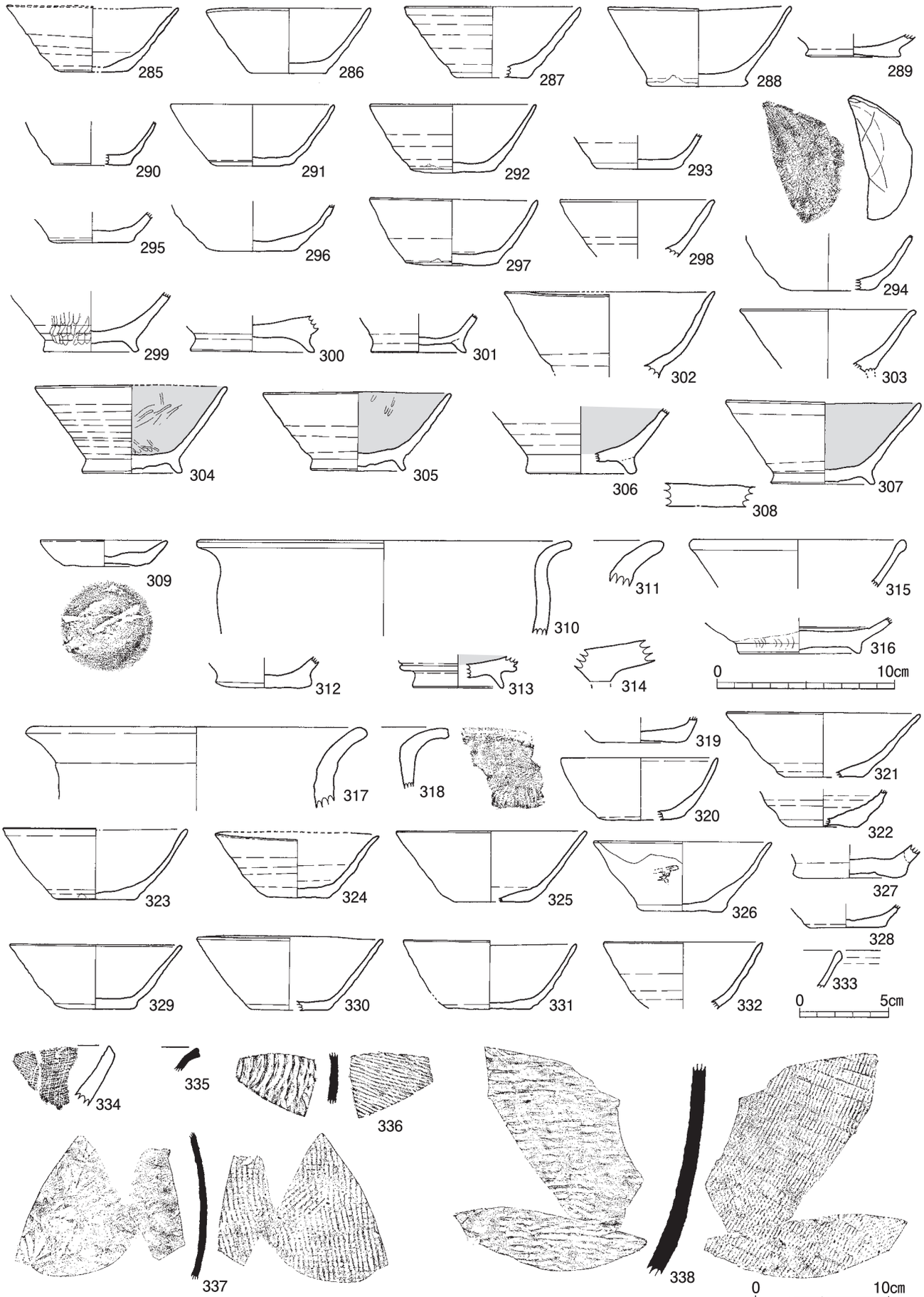


第51図　溝状遺構出土遺物実測図（2）

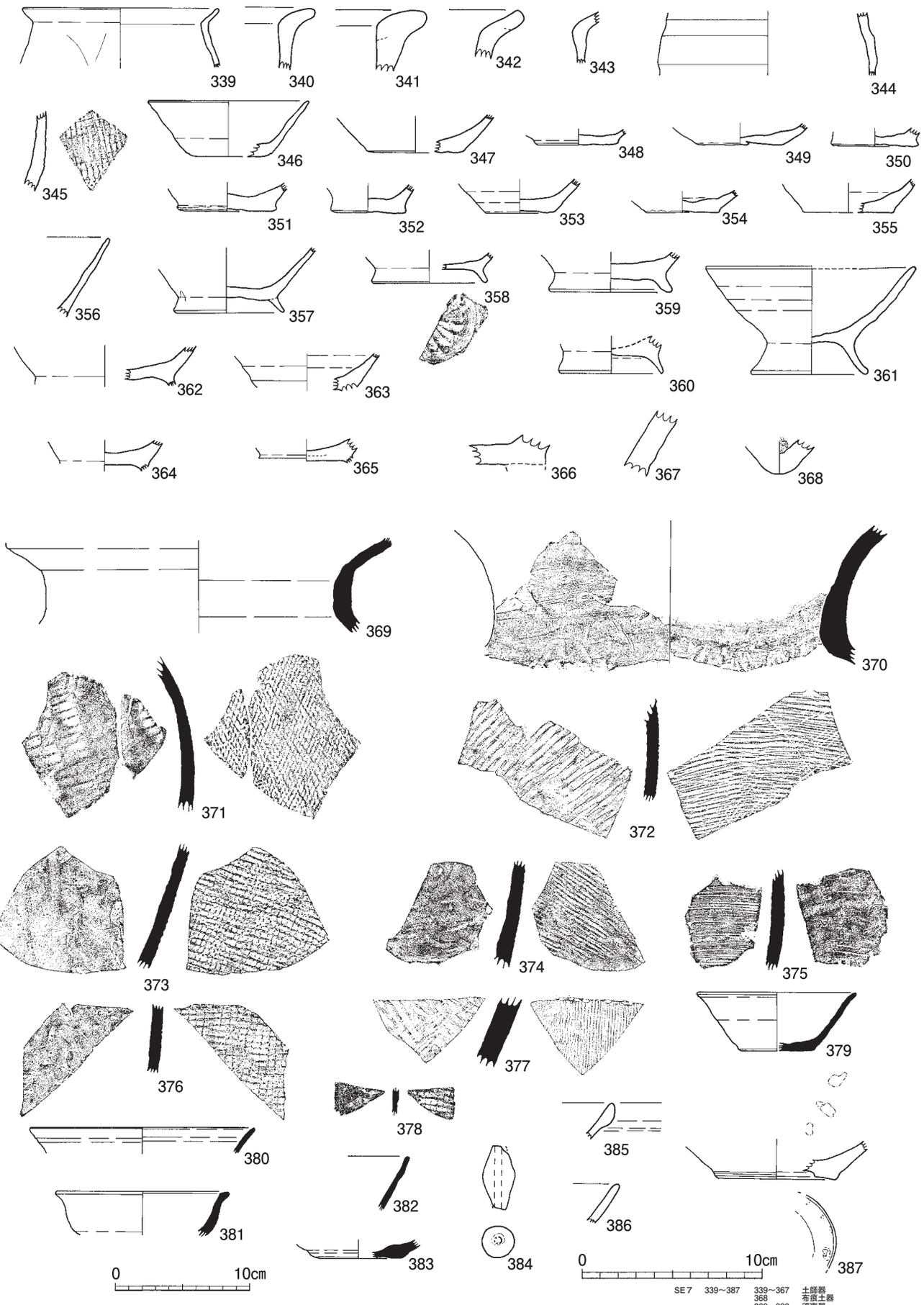


SE 1	249～251	249～251	石器
SE 2	252～279	252～265	土師器
		266～269	布痕土器
		270～278	須恵器
		279	石器
SE 3	280～284	280～284	土師器

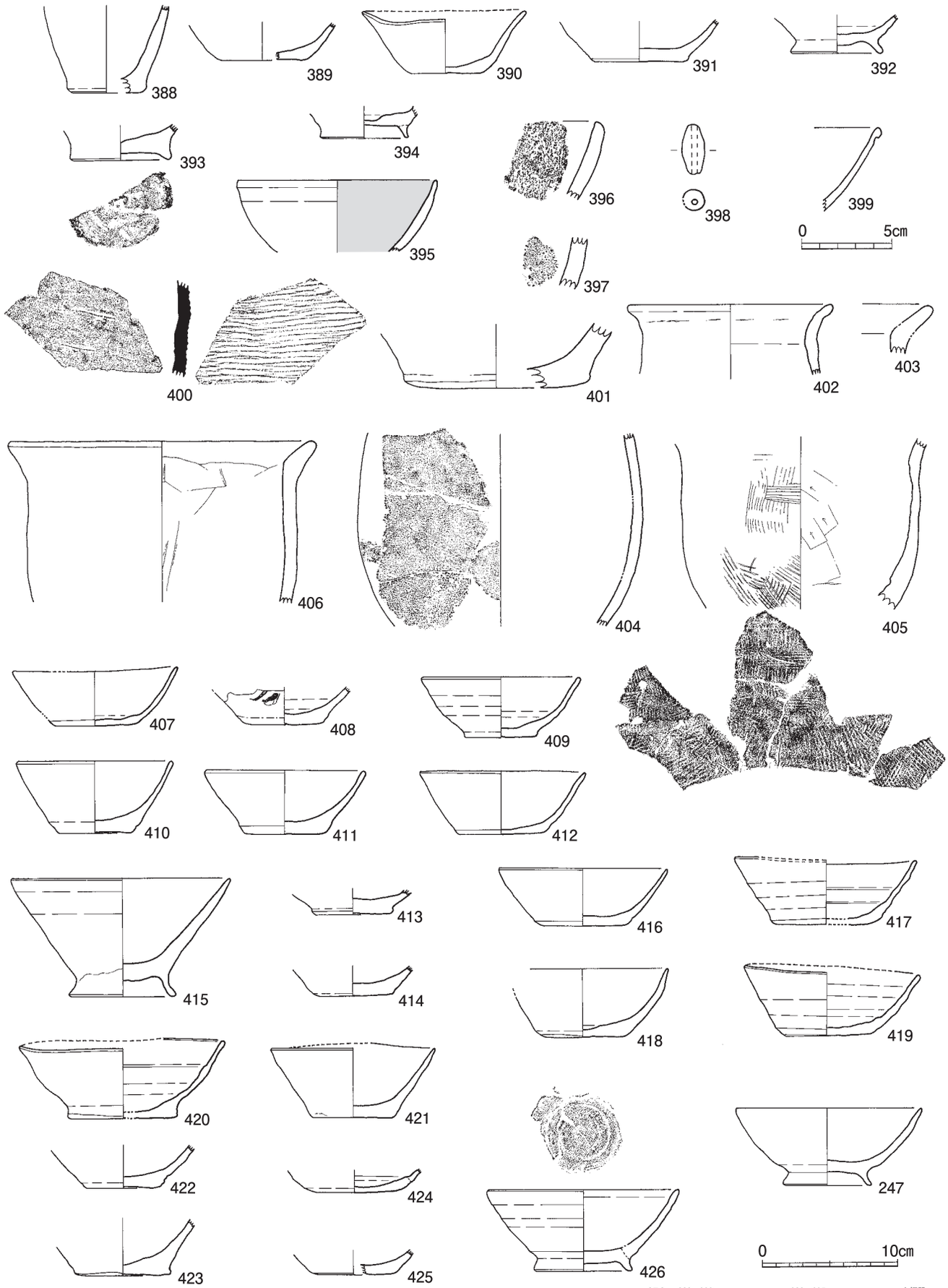
第52図　溝状遺構出土遺物実測図（3）



第53図　溝状遺構出土遺物実測図（4）

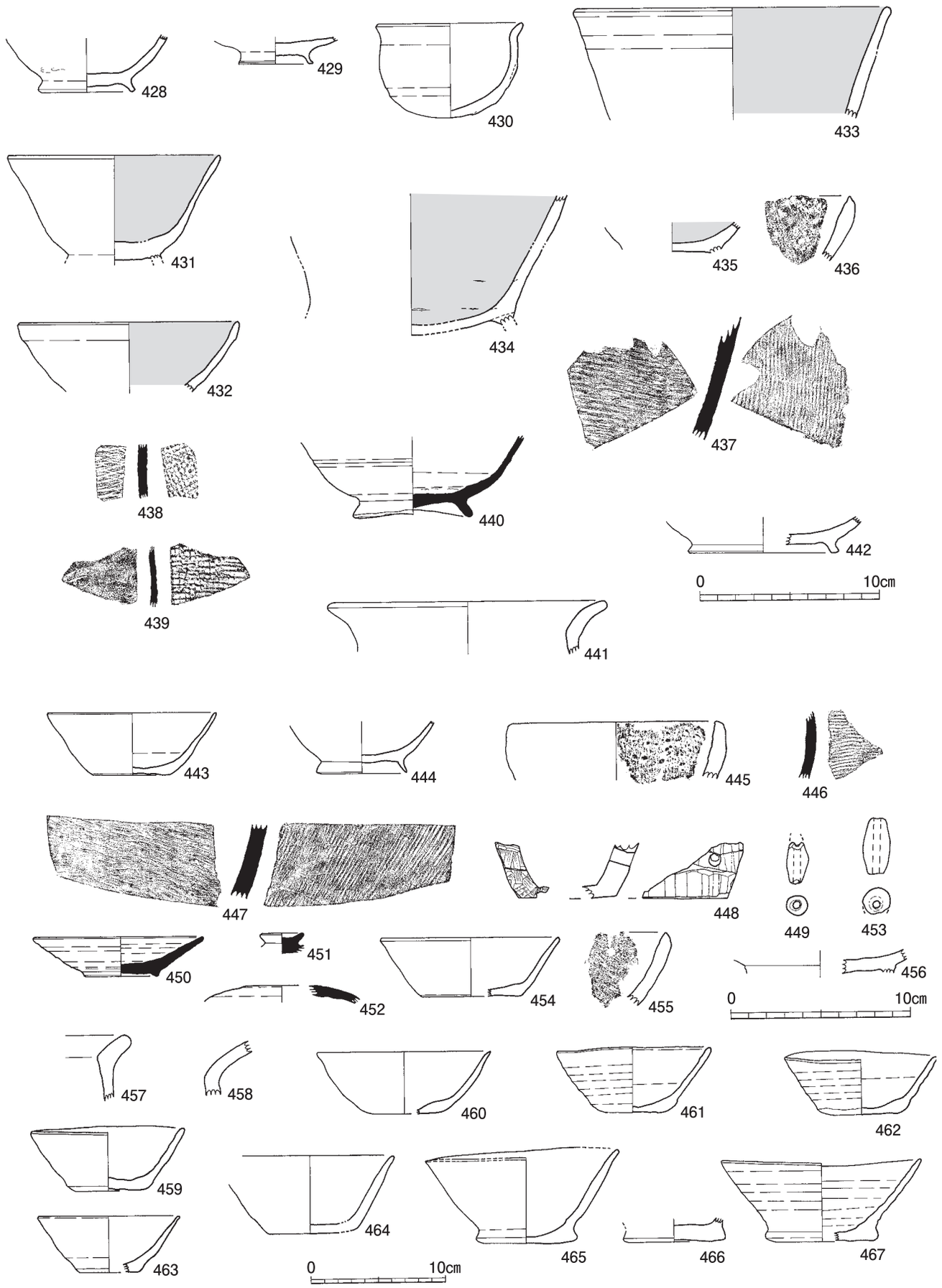


第54図　溝状遺構出土遺物実測図（5）



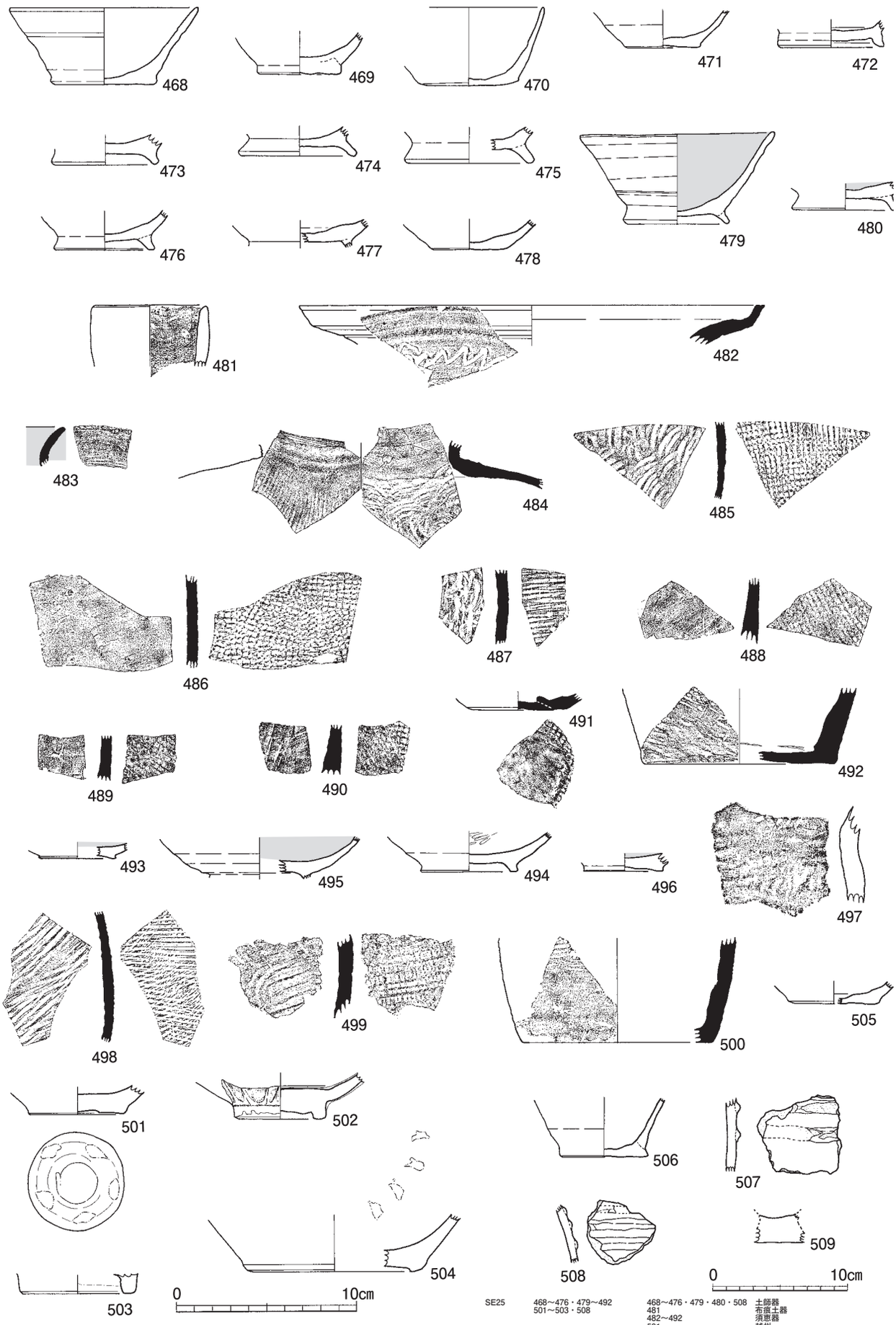
SE8	388～399	388～395	土師器
		396・397	布痕土器
		398	土錘
		399	白磁
SE9	400	400	須恵器
SE10	401	401	土師器
SE11	402・405・407～415	402・405・407～415	土師器
SE12	403・404・406・416～427	403・404・406・416～427	土師器

第55図　溝状遺構出土遺物実測図（6）



SE11	428～430・436	428・430	土師器	SE15	453	448	滑石
		429	陶磁器			449	土錘
		436	布痕	SE17	454	453	土錘
SE11・12	431～435	431～435	土師器			454	土師器
SE12	441～452	441・443～444	土師器	SE24	455～456	455	布痕土器
		442	緑釉			456	灰釉
		445	布痕	SE25	457～467	457～467	土師器
		446～447・450～452	須恵器				

第56図　溝状遺構出土遺物実測図（7）



SE25	468～476・479～492 501～503・508	468～476・479・480・508	土師器 布留土器
		481	須恵器
		482～492	越州
		501	青磁
		502・503	土師器
SE25・30	477～478	477・478	土師器
SE29	493	493	土師器
SE30	494～497・498～500・504	494～497	須恵器
		498～500	越州
		504	土師器
SE35	505	505	土師器（弥生）
SE3	507	507	土師器
SE7	506・509	506・509	

第57図　溝状遺構出土遺物実測図（8）

４　区画施設（第58 ～ 60図）

調査区の南西部、大型建物SB １から広がる緩斜面の南端、東から延びてきた浅いくぼ地のすぐ北側に溝や柵列、門など屋敷地の南を区画する遺構が作られている。

SE ２は、東西に延びる溝状遺構で、SE ３・６を切る。現存長約40ｍで西端は削平によって不明である。東から約22ｍのところで約2.5ｍの陸橋部を設け、西に延びる。検出面での溝幅約２ｍ前後、深さ約0.3ｍ前後を測るが、溝の平面形や深さは、一定ではなく凹凸がみられる状況から長径約２～３ｍの不定な楕円形の土坑を連続させるような掘削方法が用いられていると想定される。遺構内堆積土は黒褐色土でマンガン斑や鉄分がみられ硬質である。堆積の状況からは自然堆積の可能性が高い。断面形はレンズ状をなすが、溝立ち上がりにおいて北側（屋敷地側）が急角度であるのに対し、南側ではなだらかな状況を呈す。遺物（252 ～ 278）は土師器甕（252 ～ 255）・坏（256 ～ 260・265）・高台付埦（261 ～ 264）、布痕土器（266 ～ 269）、須恵器甕（270 ～ 273）・坏（274 ～ 276）・壺（277）、土錘（278）のほか墨書土器（256）が出土している。接合関係をみると270がＣ９およびＤ９グリッド出土と、274がSE12・SZ １・Ｂ９およびＤ９グリッドと、277がＢ９グリッド出土とそれぞれ接合しており、それらは流れ込みの可能性が高い。

柵列１は東西に連なる16基の柱穴からなり現存長約37ｍで、東端は門の南から始まり、調査区外の西側に延びると考えられる。

柱間は2.54 ～ 2.88ｍ、柱掘り方は円形で、径0.37 ～ 0.64ｍ、深さ0.10 ～ 0.63ｍ、柱痕跡が確認でき、径0.18ｍを測る。SE ２・３・６より新しいと考えられる。

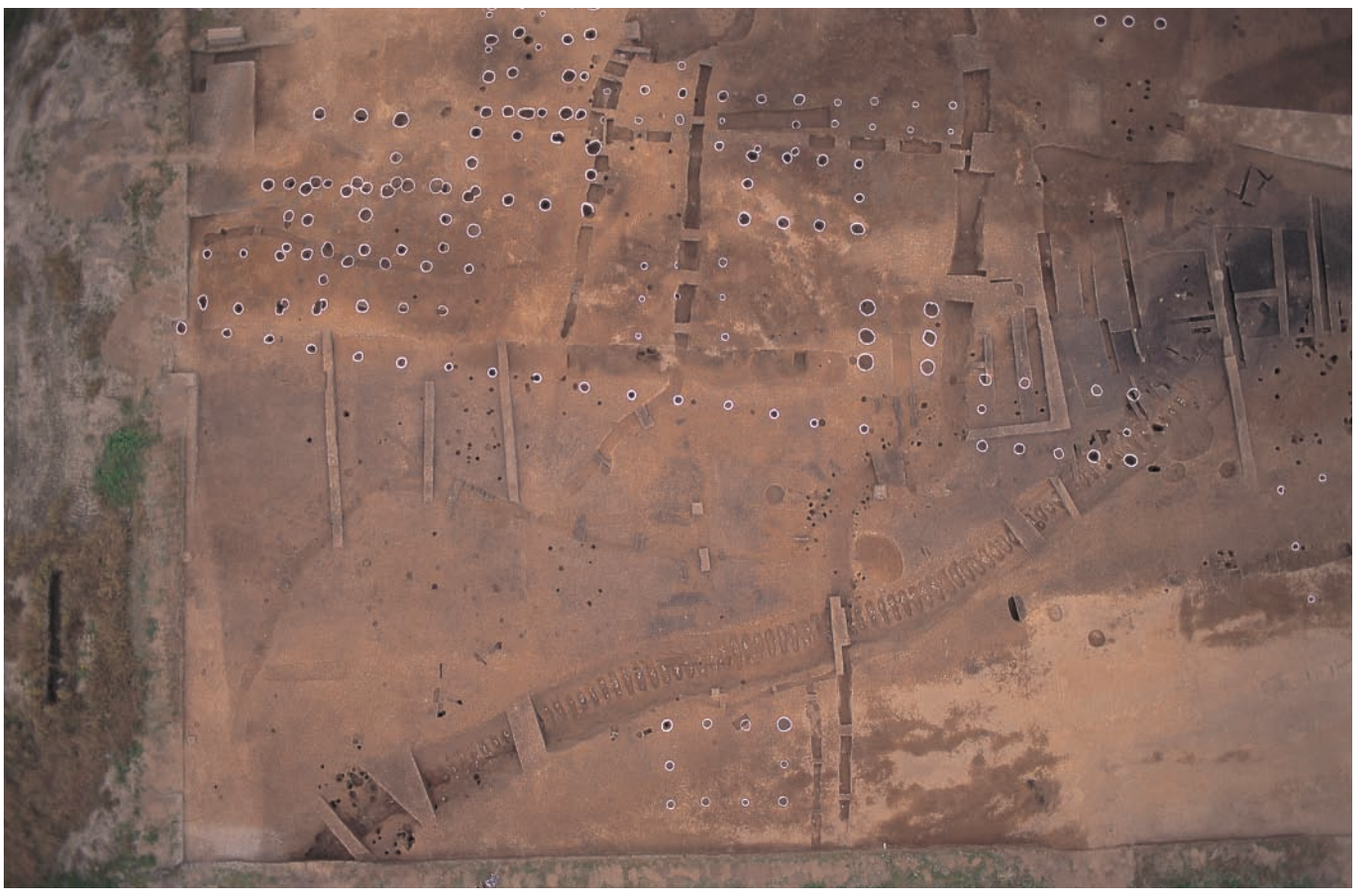
柵列２は陸橋部の北側に位置し、東西に連なる５基の柱穴からなり、現存長約9.32ｍ。柱間は2.28 ～ 2.40ｍ、柱掘り方は円形で、径0.47 ～ 0.96ｍ、深さ0.22 ～ 0.58ｍを測る。柱穴埋土は暗褐色シルト質土で、SE ２とは違いが認められる。SB15と重複する。SE ２の陸橋部における遮蔽物として設けられた可能性がある。

門跡はSE ２のすぐ東に位置し、主軸もSE ２と直交する。正門１間の柱の南北に２本ずつ計４本の控え柱を建てたもので四脚門と考えられる。柱掘り方および柱痕跡とも円形で、正門柱掘り方径0.63・0.87ｍ、深さ0.27・0.36ｍ、柱痕跡0.20・0.24ｍ、門幅3.64ｍを測る。控え柱の柱掘り方径0.73 ～ 0.84ｍ、深さ0.22 ～ 0.47ｍ、柱痕跡0.17 ～ 0.25ｍ、正門と控え柱の距離は1.70 ～ 1.80ｍとなる。また、柱掘り方埋土は暗褐色系のシルト質土に粘質土ブロックなどを含んだもので、柱部分には大型建物などにみられたような柱掘り方の床面に青灰色の粘土が敷かれたものが４基認められた。遺物としては内外面に平行タタキが施された須恵器甕片（1069）が１点出土している。

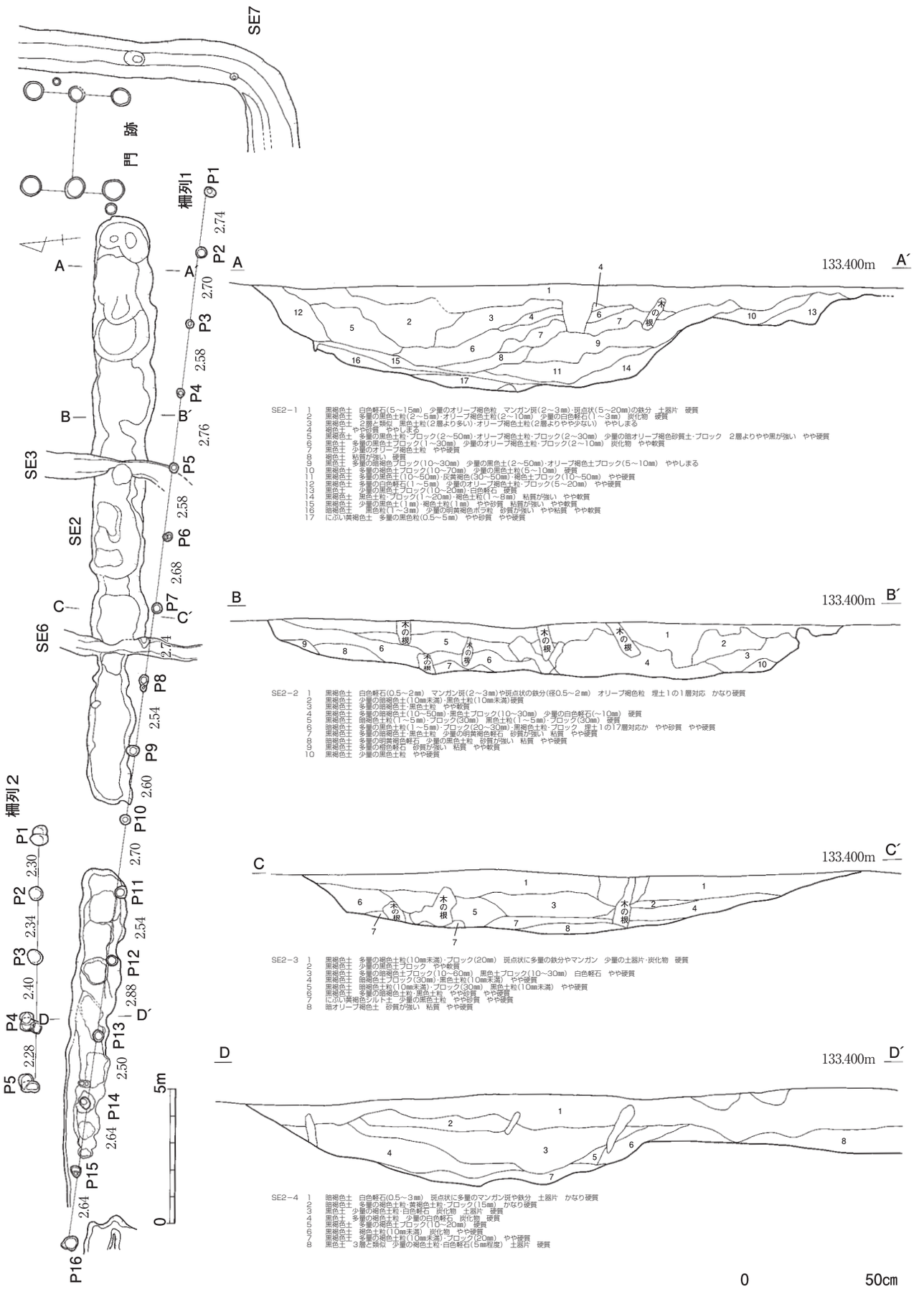
SE ２と柵列２、門はそれぞれの位置関係から同時期に作られたものと想定されるが、門のさらに東側にはSE ２と同様な溝などの区画施設は確認できなかった。しかし門のすぐ東を南北に延びるSE ７については、門の南側で鍵状に屈曲しながら南下し、いわゆる虎口状の空間を作っている。さらに屈曲し再び南にのびるSE ７に平行して長さ約１～２ｍ、幅0.3 ～ 0.4ｍ、深さ0.05ｍの長楕円形の掘り込みが８基ならび階段あるいは道状遺構の可能性も指摘できる。このように時期がはっきりしないものの、SE ７が門の東側（屋敷地の東側含めた）を区画する施設である可能性も考えられる。柵列１についてはそれらより後出するものと考えられる。

四脚門は全国で十数例知られ、九州では群衙と推定される福岡県大ノ瀬下大坪遺跡がある。時期および規模・形態が類似するのは斎宮跡北門で桁梁行きとも本遺跡のものが大きく、そのほか埼玉県北島遺跡などで関東地方でも類似遺構が検出されている。県内では、古代ではみられないが、中世において都城市筆無遺跡や同上ノ園第２遺跡で確認されている。

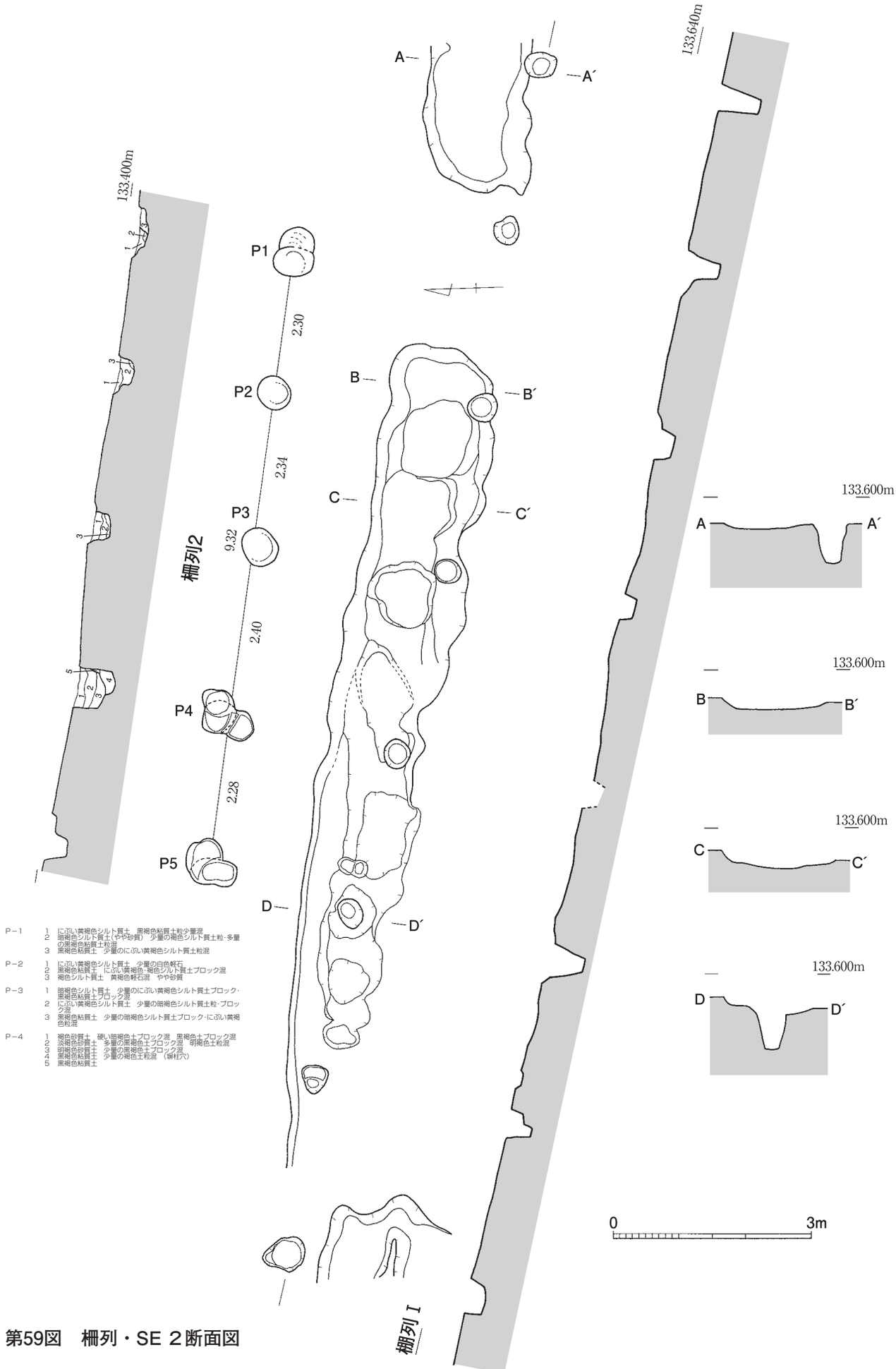
図版11　区画施設等検出状況



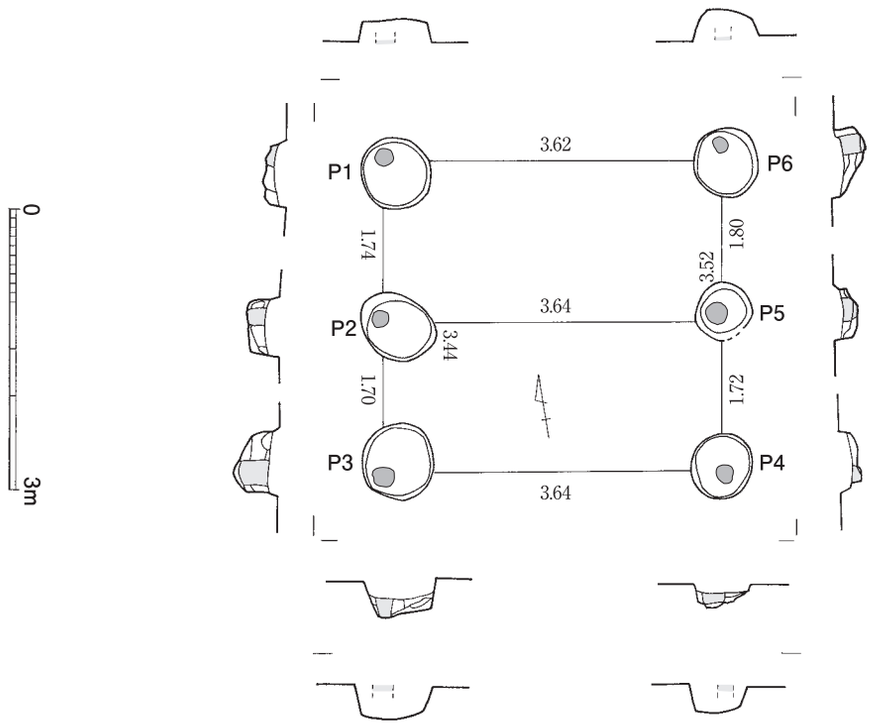
図版12　区画施設等調査状況



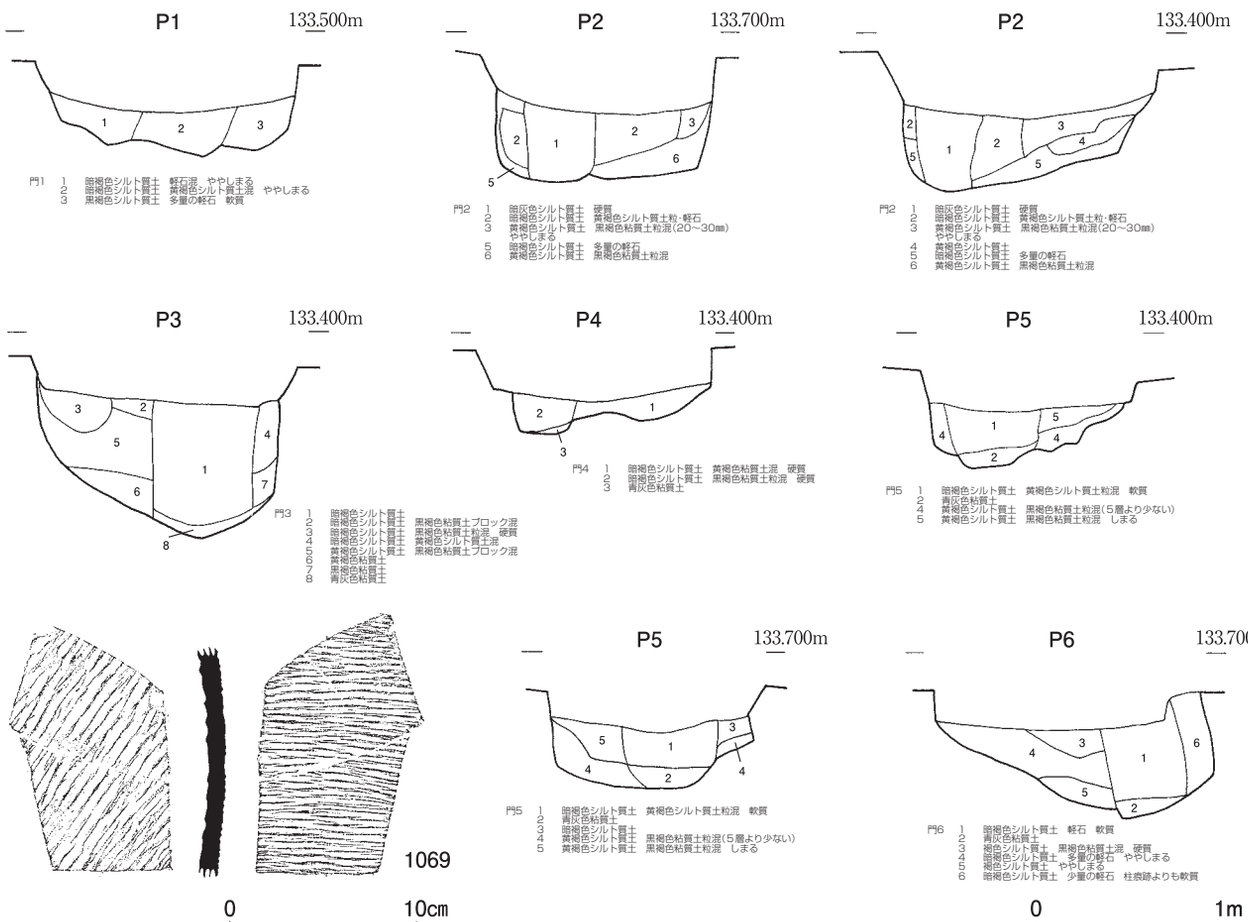
第58図　区画施設遺構実測図および土層断面図



第59図　柵列・SE ２断面図



標高は133.700m



門1
1 暗褐色シルト質土 軽石混 ややしまる
2 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土混 ややしまる
3 黒褐色シルト質土 多量の軽石 軟質

門2
1 暗灰色シルト質土 硬質
2 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土粒・軽石
3 黄褐色シルト質土 黒褐色粘質土粒混(20～30㎜)
ややしまる
5 暗褐色シルト質土 多量の軽石
6 黄褐色シルト質土 黒褐色粘質土粒混

門2
1 暗灰色シルト質土 硬質
2 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土粒・軽石
3 黄褐色シルト質土 黒褐色粘質土粒混(20～30㎜)
ややしまる
4 黄褐色シルト質土
5 暗褐色シルト質土 多量の軽石
6 黄褐色シルト質土 黒褐色粘質土粒混

門3
1 暗褐色シルト質土
2 暗褐色シルト質土 黒褐色粘質土ブロック混
3 暗褐色シルト質土 黒褐色粘質土粒混 硬質
4 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土混
5 黄褐色シルト質土 黒褐色粘質土ブロック混
6 黄褐色粘質土
7 黒褐色粘質土
8 青灰色粘質土

門4
1 暗褐色シルト質土 黄褐色粘質土混 硬質
2 暗褐色シルト質土 黒褐色粘質土粒混 硬質
3 青灰色粘質土

門5
1 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土粒混 軟質
2 青灰色粘質土
4 黄褐色シルト質土 黒褐色粘質土粒混(5層より少ない)
5 黄褐色シルト質土 黒褐色粘質土粒混 しまる

門5
1 暗褐色シルト質土 黄褐色シルト質土粒混 軟質
2 青灰色粘質土
3 暗褐色シルト質土
4 黄褐色シルト質土 黒褐色シルト質土粒混
5 黄褐色シルト質土 黒褐色粘質土粒混(5層より少ない)

門6
1 暗褐色シルト質土 軽石 軟質
2 青灰色粘質土
3 褐色シルト質土 黒褐色粘質土混 硬質
4 暗褐色シルト質土 多量の軽石 ややしまる
5 褐色シルト質土 ややしまる
6 暗褐色シルト質土 少量の軽石 柱痕跡よりも軟質

第60図　門跡実測図および出土遺物実測図

５　池状遺構（第61図～第84図）

大型建物（SB １）の南側約８ｍに位置し、東側をSE ７に切られ、そのほかSE ３・６・８など複数の溝と重複している。池として考えているが明確な証拠は得られていないことから名称を池状遺構としている。平面形は最大長で東西約19m、南北約21ｍの不正方形をなし、中央には地山を掘り残した中島が設けられている。池の掘り込みは、検出面から北（幅約４ｍ、深さ0.35m）、東（推定約３ｍ、深さ約0.5m）、南（約2.5ｍ、深さ約0.4m）で、北・東・南部は概ね方形状にめぐると推定され、それに対し西側は広く掘られ、汀線が複雑に出入りする。池は素掘りで、深さ0.3 ～ 0.7ｍを測り、池底や汀周辺には平安京などでみられる州浜状の敷石はみられなかったが、発掘中、埋土中から多量の河原石（10 ～ 30㎝大）が検出されていることから、中島に石が敷かれていた可能性がある。遺構の床面には幅30 ～ 70㎝の溝の痕跡が複数みられるが、重複関係・用途など確定しえないが、多くの溝が中島に平行して検出されていることや遺構外に延びるものがないことから、池状遺構に関連するものと想定される。

また、橋については、確認できなかった。導水溝についても窪地からのびる溝（SE ３・６・８）がその役割を果たしていた可能性もあるが、自然科学分析から常時水が満たされていた状態ではないようである。自然湧水あるいは雨水等を利用していた可能性もある。

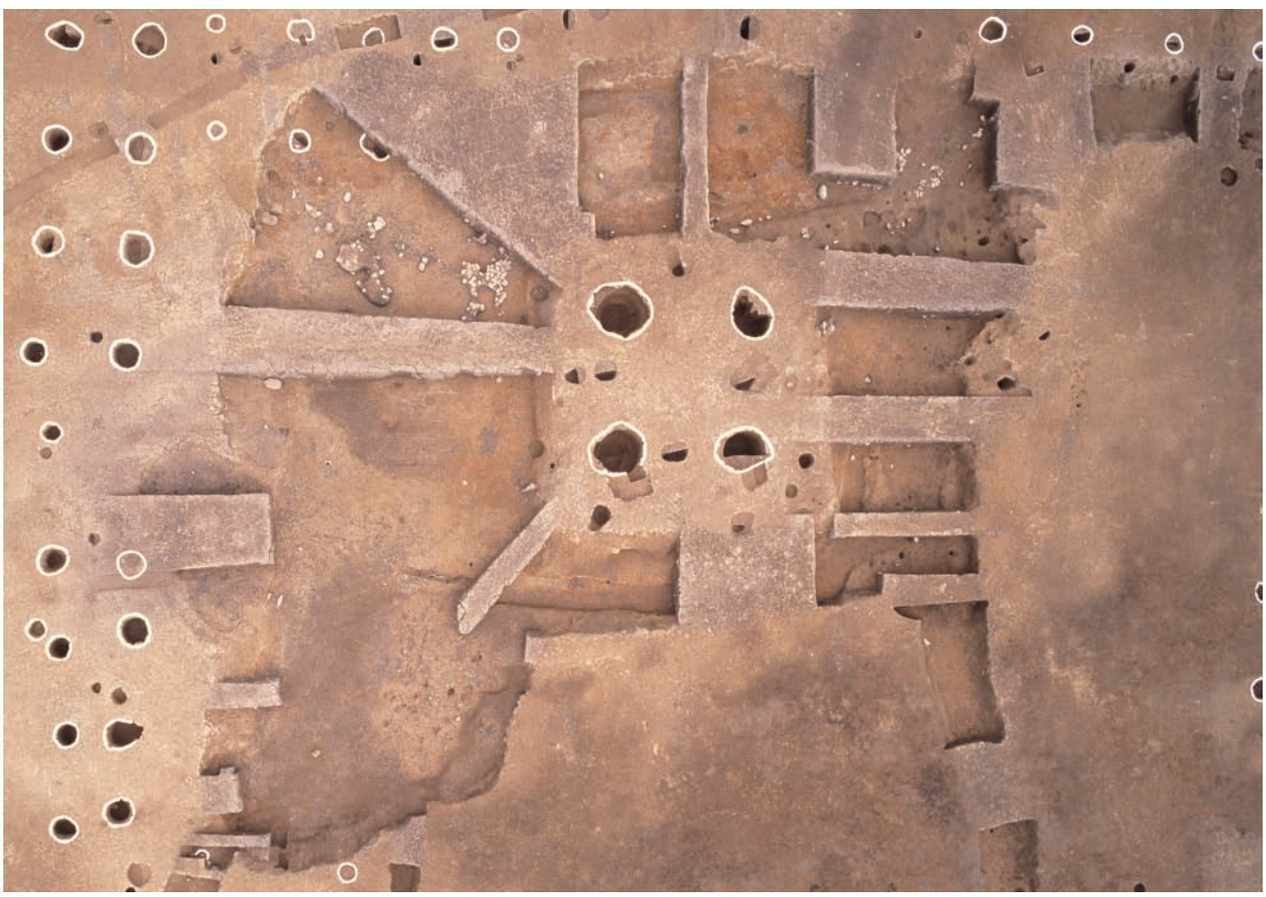
さらに、池埋没後、中島状に掘り残された箇所を再利用して、大型建物に面する北側が開いた「コ」の字状の区画溝が設けられる。この区画溝は、発掘当初は明瞭であったが、乾燥するにしたがい肉眼で確認が困難になってしまい土層断面のみで判断し、一辺約10m、幅約2.5m、深さ約0.4m。中島には、SB １の身舎と同規模の大型柱穴をもつ１間×１間の建物SB35が作られている。それ以外にもいくつか柱穴は検出されているが、浅いものが多く、池状遺構前後のものと考えられる。

次に中島をめぐる掘り込みについて東西南北それぞれについてみていく。北側部は土層断面により中島北辺が東西に延びる溝状遺構で切られる。溝は幅1.1m、深さ約0.6ｍを測り、断面はＵ字形をなし、Ｈの土層断面では14 ～ 19層がこれにあたる。このことより中島は北側が約1.1ｍほど削平を受けていることが判明した。また、池底はほぼ平坦で深さ0.4ｍを測るが、一部長さ2.2m、幅0.45m、深さ約0.20ｍの掘り込みがみられる。さらに北側下端に平行して幅約0.5ｍの溝も検出されたが途中で消滅している。東側は複雑で文明のボラを含んだ溝やSE ７に切られ、さらに池状遺構の掘り込みと方形状区画の埋土が交錯する。切り合い関係は池状遺構→「コ」の字状の区画→SE ７→SE27（SE ４・５？）となる。Ｄ・Ｊの土層断面をみると１～ 11層がSE ７の堆積土、18 ～ 24・②～⑤層が池状遺構の堆積土、14 ～ 16層が「コ」の字状の区画の堆積土と考えられる。さらに17層は池状遺構床面に掘り込まれた溝の堆積土と想定され、この溝はさらに南・西と「コ」の字状に回っている。東側での池底は東端が約0.6ｍと深く、中島に向かって次第に浅くなる傾向にある。

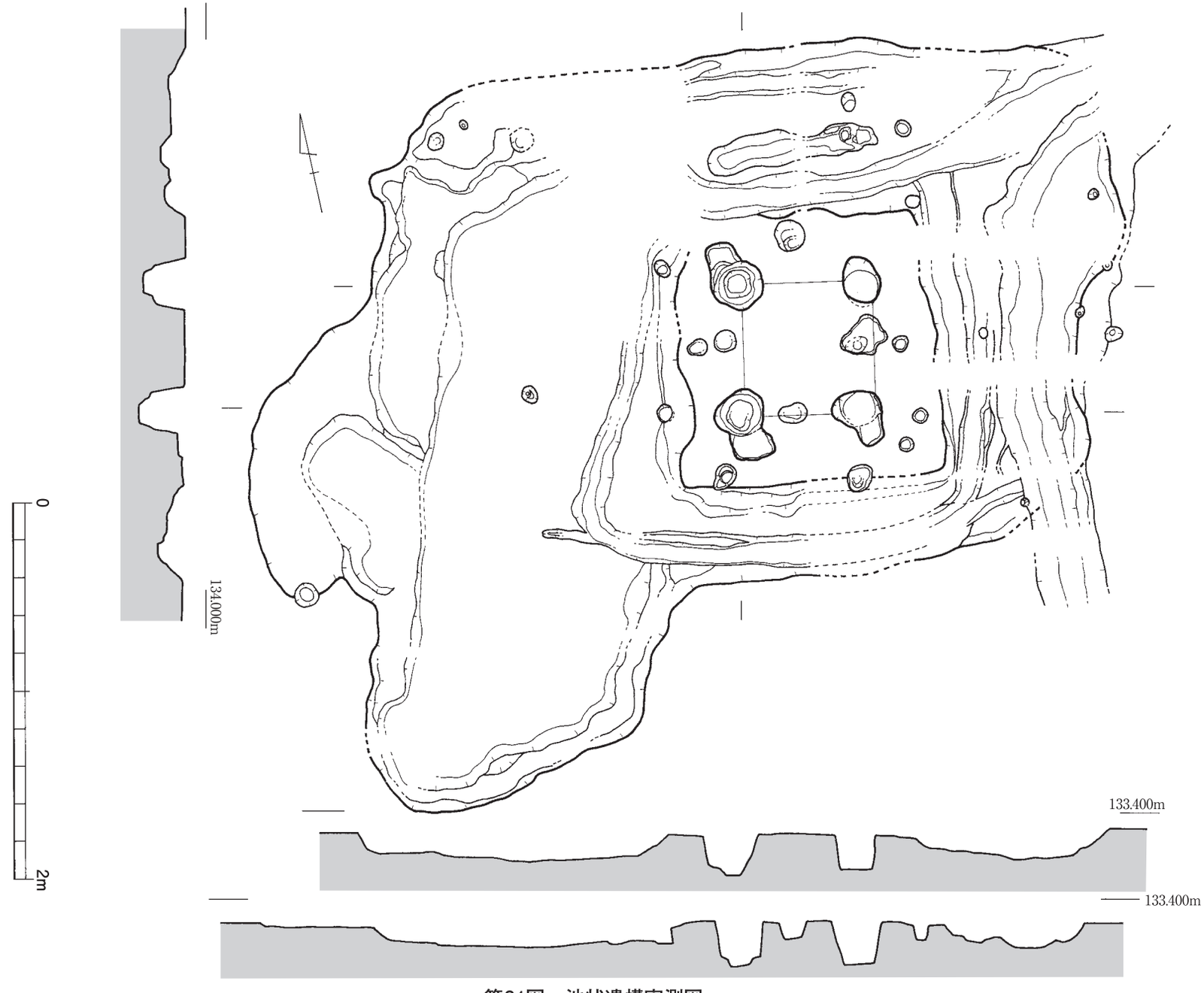
南側はＣ断面では１～ 12・14層「コ」の字状の区画の堆積土、それ以外が池状遺構の堆積土となる。池底は南端が0.5 ～ 0.6ｍと深く北側、中島に向かってなだらかに浅くなっている。西側は広く掘り広げられ、西端は複雑に入り組んでおり、南北約18m、東西約10ｍを測る。中島からは約25°の傾斜で掘り込まれ、溝底は若干凹凸はあるもののほぼ平坦となり、西端でいくつもの平坦面を設けながら緩やかに立ち上がる。明確な給水施設や排水施設は不明だが、SE ３・６の溝底の高さが南よりやや北側の方が低いことからその役割を果たしていた可能性がある。また、湧水を水源としていた可能性を示す資料として「泉」や「井」の墨書土器も出土している。

池状遺構当初の中島の規模・形態ははっきり確定できないが、土層断面から検出された状況（一辺7.2m前後の方形）より若干広かったと想定される。中島に位置するSB35は、１間×１間の建物で梁行3.43m、桁行3.43m、柱掘り方は円形で、径0.63 ～ 0.87m、深さ0.97 ～ 1.16ｍ柱痕跡は径0.32 ～ 0.38ｍを測る。面積

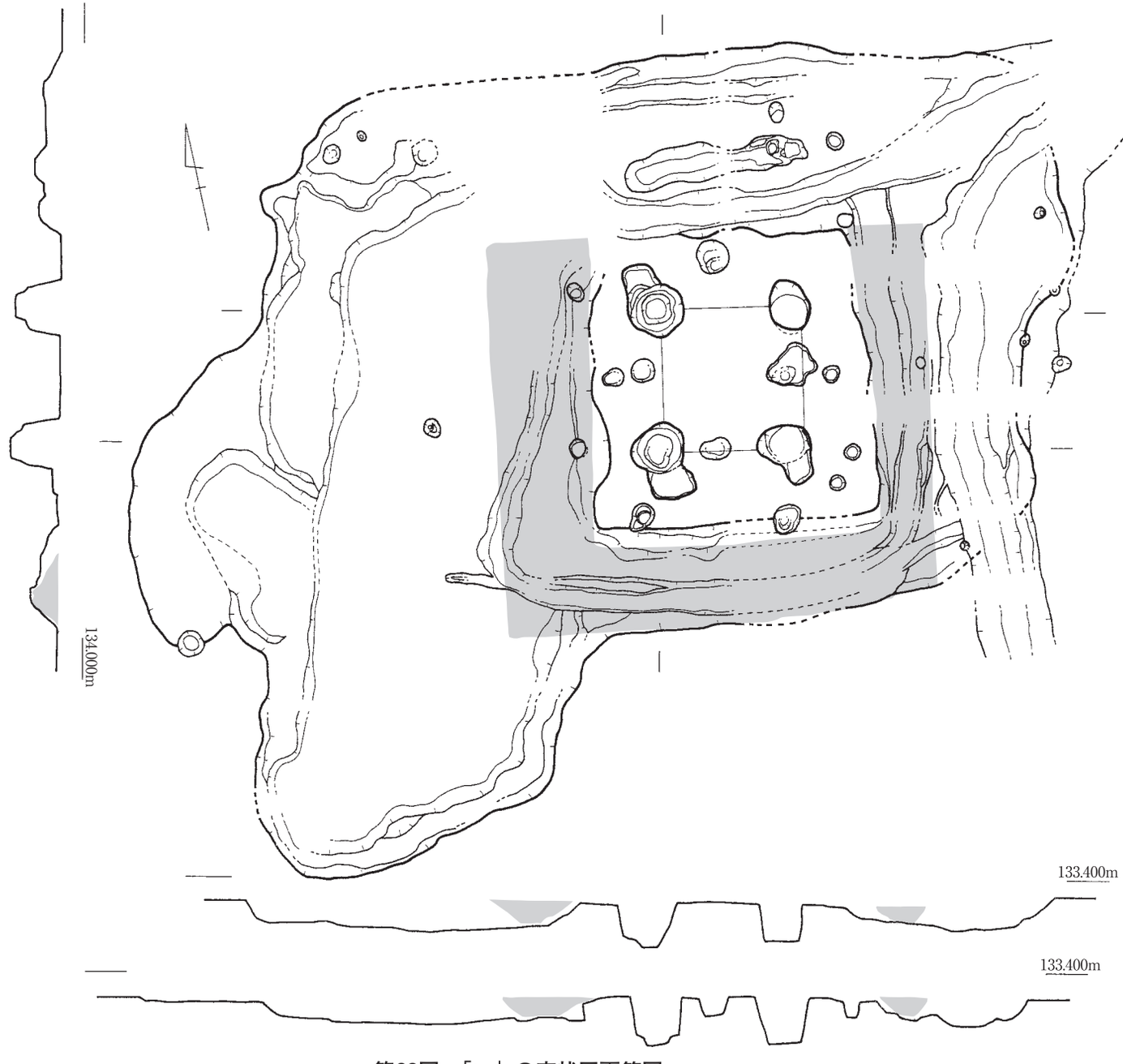
図版13　池状遺構検出状況



図版14　池状遺構調査状況

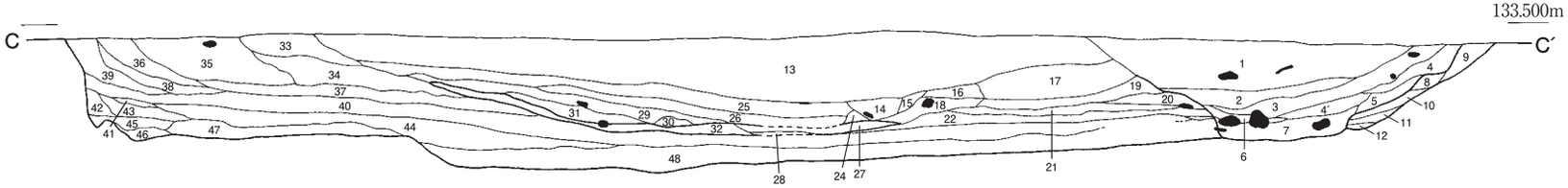


第61図　池状遺構実測図



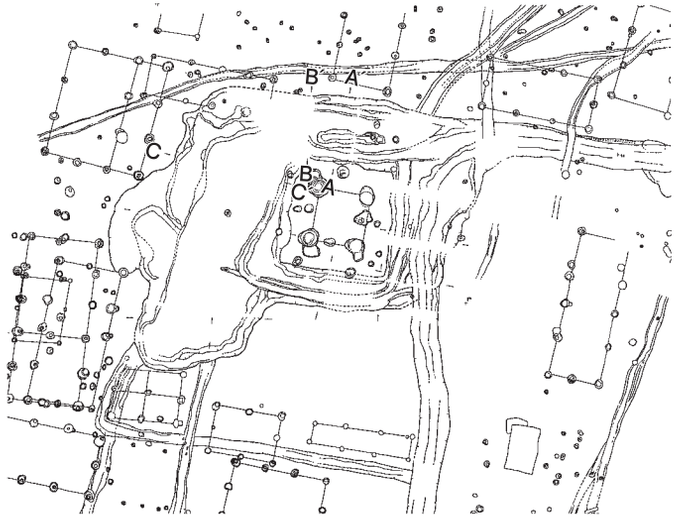
第62図　「コ」の字状区画範囲

SL1

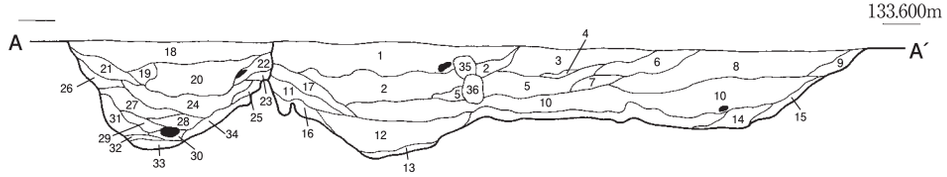


SL1－10
1 黒褐色土　軽石・明褐色土粒・炭化物　きめ細か　しまる　※13・17・19層との境界は明確ではない
2 黒褐色土　1層と類似　1層より少量の明褐色土粒・軽石
3 黒褐色土　多量の炭化物
4 黒褐色土　明褐色土粒　ポラ粒　炭化物
5 暗褐色土　4層より多量の明褐色土粒　少量の炭化物・軽石
6 暗褐色土　微量のポラ粒・炭化物
7 暗褐色土　微量の明褐色土粒・ポラ粒・炭化物　粘質
8 黒褐色土　多量の褐色土ブロック・粒子　微量の炭化物　やや砂質　粘質
9 黒褐色土　少量のポラ粒　砂質
10 暗褐色土　多量のポラ粒　砂質
11 黒褐色土　多量のポラ粒　やや粘質
12 黒褐色土　少量の暗褐色粒　やや粘質
13 黒褐色土　少量の黒色土・褐色土粒　粘質
14 暗褐色土　1層と類似　1層より多量の軽石　しまる
15 黒褐色土
16 暗褐色土　多量の明褐色土
17 黒褐色土
18 黒褐色土
19 黒褐色土
20 黒褐色土
21 黒褐色土
22 黒褐色土　斑点状の灰褐色土　少量の炭化物
23 黒褐色土
24 黒褐色土
25 黒褐色土
26 黒褐色土
27 黒褐色土　32層と同質　32層より多量の炭化物　やや粘質
28 黒褐色土　32層と同質　32層より多量の炭化物　やや粘質
29 黒褐色土
30 暗褐色土　多量の明褐色ブロック・炭化物
31 黒褐色土　少量の明褐色ブロック・粒子
32 黒褐色土　少量の炭化物　きめ細か　しまる
33 黒褐色土
34 黒褐色土
35 暗褐色土
36 黒褐色土
37 暗褐色土
38 黒褐色土
39 黒褐色土
40 黒褐色土　灰褐色土混　粘質土
41 黒褐色土
42 黒褐色土
43 黒褐色土
44 黒褐色土　40層と類似　40層より多量の褐色土ブロック・炭化物
45 黒褐色土　48層と類似　褐色土ブロック混　48層より明るい　砂質　軟質
46 黒褐色土　48層と類似　褐色土ブロック混　48層より明るい　砂質　軟質
47 黒褐色土　灰褐色土粘質土混
48 黒褐色土　灰褐色土粘質土混　粘質土　※2層に分かれる可能性あり

※□の字状は4～6層の可能性あり
7層は古い溝の埋土の可能性あり
32層が明瞭に見える　32層面近くで　焼土の面あり　下層に行くにつれて軽石・明褐色土ブロック・粒は少なくなる
全体に軽石・明褐色土・褐色土・炭化物が混入　砂質っぽく　硬くしまっている
47・48層は同一層か？

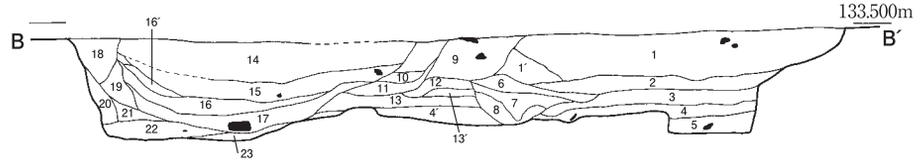


SL1



SL1－1
1 暗褐色シルト質土　微量の黒色シルト質土小ブロック　円礫・土器片　ややしまる
2 褐色シルト質土　暗褐色シルト質土混　しまる
3 暗褐色シルト質土　少量の褐色シルト質土小塊　しまる
4 暗褐色粘質土　灰白色シルト質土小塊　しまる
5 灰褐色シルト質土　少量の黄褐色ポラ粒・灰白色シルト質土小塊　粘性が強い　しまる
6 暗褐色粘質土　多量の乳白色ポラ粒　茶色粒・黒灰色シルト質土混　しまる
7 灰褐色シルト質土　褐色シルト質土小ブロック混　しまる
8 灰褐色シルト質土　黄白色ポラ(20㎜)・褐色シルト質土小ブロック　炭化物小片・粒(植物遺体？)　しまる
9 暗褐色シルト質土　褐色シルト質土混　しまる
10 灰色粘質土　全体に鉄分粒　褐色シルト質土小ブロック・円礫　土器粒・炭化物粒(植物遺体？)　やや軟質
11 灰褐色シルト質土　褐色シルト質土小ブロック　土器小片　しまる
12 灰褐色粘質土　褐色シルト質土混　土器小片・炭化物粒　ややしまる
13 灰白色シルト質土　全体に鉄分粒　暗褐色シルト質土混　砂質性が強い　しまる　(池の床面)
14 暗灰白色シルト質土　斑点状の鉄分　13層より粘性あり　しまる　(池の床面)
15 灰白色シルト質土　粒状に鉄分　褐色シルト質土混　砂質性が強い　しまる　(池の床面)
16 灰黄色シルト質土　地山の褐色シルト質土混　しまる
17 暗褐色シルト質土　褐色シルト質土小ブロック　土器小片　やや粘性　しまる
18 暗褐色シルト質土　微量の土器粒・白色ポラ粒(3～5㎜)
19 暗褐色シルト質土　粒状に褐色シルト質土　微量の白色ポラ粒(8㎜)　しまる
20 暗褐色シルト質土　白色ポラ粒(2～3㎜)・黄褐色ポラ粒(10㎜)・炭化物混　土器小片　やや軟質
21 暗褐色シルト質土　粒状に褐色シルト質土　炭化物粒　しまる
22 暗灰色シルト質土　土器・炭化物　やや粘性が強い　しまる
23 暗灰色シルト質土　22層より粘性が強い　ややしまる
24 暗灰色粘質土　褐色シルト質土混　土器片　炭化物粒　白色ポラ粒　しまる
25 暗褐色シルト質土　褐色シルト質土混　やや粘性が強い　しまる
26 暗褐色シルト質土　褐色シルト質土混　白色ポラ粒(5㎜)　しまる
27 暗褐色粘質土　粒状に褐色シルト質土　土器小片　炭化物粒　やや軟質
28 暗灰色シルト質土　全体に粒子状の鉄分　粒状に褐色シルト質土　ややしまる
29 暗褐色粘質土　褐色シルト質土混　ややしまる
30 暗灰色シルト質土　黄白色ポラ粒(5㎜)　やや軟質
31 暗褐色シルト質土　褐色シルト質土混　炭化物　やや粘性が強い
32 暗灰色シルト質土　粘性が強い　しまる
33 暗褐色シルト質土　微量の白色ポラ粒(3㎜)　ややしまる
34 灰色シルト質土　暗色シルト質土混　やや軟質
35 暗褐色シルト質土　少量の褐色シルト質土混　しまる
36 暗褐色粘質土　少量の褐色シルト質土　しまる

SL1



SL1－9
1 暗褐色土　褐色土・明褐色土粒　微量の軽石(10㎜)・砂礫　バサバサ　きめ細か　しまる
1´ 暗褐色土　1層よりやや暗い　しまる
2 黒褐色土　少量の軽石粒　炭化物(1～5㎜)
3 黒褐色土　明褐色土ブロック混　軽石粒(2層より多い)　炭化物
4 暗褐色土・灰褐色土混　砂質　しまる　※当時面の埋土と推定
4´ 暗褐色土　砂質　しまる
5 黒褐色土　明褐色土ブロック混　粘質　きめ細か
6 暗褐色土・明褐色土ブロック混　微量の軽石
7 暗褐色土　微量の明褐色土ブロック・軽石　やや砂質　しまる
8 7層と明褐色土ブロック混　砂質　8層よりしまる
9 暗褐色土　1・1´層より明褐色土粒・軽石が少ない
10 灰褐色土・暗褐色土混　やや砂質　しまる
11 灰褐色土　10層より少量の暗褐色土　褐色土粒・軽石・炭化物
12 10層と類似　灰褐色土・暗褐色土混
13 暗褐色土　少量の灰褐色土ブロック・軽石・褐色土ブロック　部分的に赤褐色土
13´ 13層と同質　13層より色調が明るい
14 暗褐色土　1層と酷似
15 黒褐色土　少量の軽石・明褐色土粒　14層よりきめ細か　粘質
16 黒褐色土　明褐色土ブロック・粒混　軽石　炭化物　きめ細か　しまる
16´ 暗褐色土・灰褐色砂質土混
17 黒褐色土　16層より色調が暗い　多量の明褐色ブロック・粒子　粘質
18 褐色土　暗褐色土混　炭化物粒
19 暗褐色土　褐色土混　少量の白色ポラ粒　やや軟質
20 暗褐色土　多量の白色ポラ粒　軟質
21 暗褐色土　少量の褐色土ブロック・ポラ粒　軟質(20層よりしまる)
22 黒褐色土・暗褐色土・褐色土混　白色ポラ粒　微量の炭化物
23 灰褐色土　砂質土

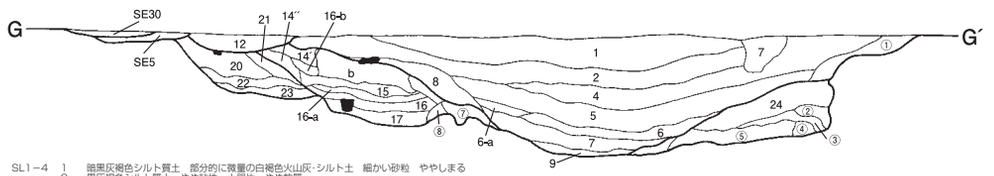
※6～8層　乱れた層　後の掘り込みか？
10～19層　同一系統の層
14～19層　池以後の掘り込みか？(北側の面に見られる溝の埋土)

0　1m

第63図　池状遺構土層断面図（1）

SL1

133.600m

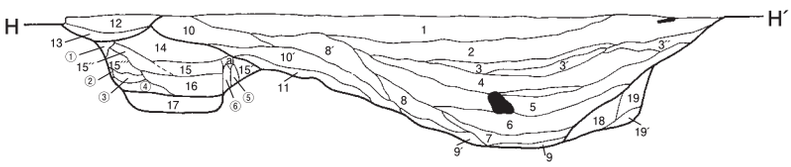


SL1−4
1 暗黒灰褐色シルト質土 部分的に微量の白褐色火山灰・シルト土 細かい砂粒 ややしまる
2 黒灰褐色シルト質土 やや粘性 土器片 やや軟質
3 暗黒灰褐色シルト質土 2層と類似 やや粘性(2層より強い) 褐色土(4層から混入?) 明るい色調 やや軟質
4 暗黒灰褐色シルト質土 微量の褐色土ブロック(10㎜) 3層より明るい色調 やや軟質
5 暗黒灰褐色シルト質土 4層に類似 黄褐色土ブロック(6層より)混 少し明るい色調 ややしまる
6 黄褐色土 微量の暗黒灰褐色土 組織粗は細かく 僅かに粘性 しまる
7 褐色土 白色ボラ粒・褐色砂から構成 ボロボロしている ややしまる 後世のもの
8 暗灰褐色土 4層に6層のブロックが混入 やや粘性 撹乱 ややしまる
9 説明なし
10 黄褐色土 8層と類似 黄褐色土に暗黒灰褐色土が混入 ベルト状に黒色砂質土 やや粘性 ややしまる
11 暗灰褐色土 5層と類似 黄褐色土ブロック(5層より多い)混 ややしまる
12 黄褐色土 6層と同質 部分的に酸化による変変 シルト質 (土壌か?)
13 暗灰褐色土 8層と類似 黄褐色ブロック(密度が高い) しまる
14 暗灰褐色土 暗灰褐色土主体で微量の黄褐色土ブロック やや粘性 微量の橙色軽石粒(1㎜) ややしまる
15 暗黒灰褐色土 13・16層間にブロック状で混入 微量の黄褐色土ブロック しまる
16 暗灰褐色土 13層と同質
17 暗黒灰褐色土 乳白色軽石粒(1～3㎜)・微量の褐色土ブロック(1～2㎜)混 ややしまる
18 暗黒灰褐色土 17層と類似 多量の乳白色軽石粒(3㎜) ややしまる
19 暗黒灰褐色土 1層と6層の撹乱か? ややしまる

SL1−4´
20 黒色土 多量の軽石(1～20㎜) やや粘質 しまる
21 黒褐色土 軽石(20層より少ない) 微量の炭化物
22 灰褐色粘質土 黒色土混 少量の砂粒(0.5～1㎜)
23 灰褐色粘質土 砂粒・褐色土(地山から)
24 褐色土 多量の明褐色土ブロック 微量の炭化物
① 褐色土 微量の明褐色土粒 しまる
② 明褐色土・暗褐色土混
③ 22層と類似
④ に近い黄褐色土
⑥ 23層と類似
6−a 6層より明るい 明褐色土粒がやや多い
⑦ 暗褐色土 多量の明褐色土 7層より明るい やや粘質
⑧ 17層より明るい
14´ 14層ほど軽石を含まない 微量の炭化物
14´´ 明褐色土粒が少ない
16−a 16層より明るい 粘質 しまる
16−b 16層ほど明褐色粒を含まない
b 褐色土 暗褐色土混 微量の軽石

SL1

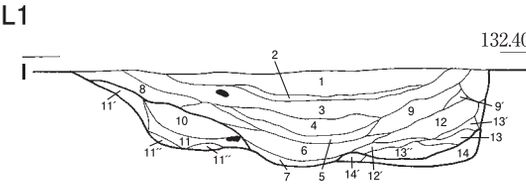
133.600m



SL1−7
1 暗褐色土 少量の軽石(0.5～3㎜) 微量の炭化物 パサパサしてしまる
2 暗褐色土 1層と類似 炭化物(1～2㎜・1層より多い) 微量のボラ粒
3 暗褐色土 2層に少量の明褐色土ブロック・粒混 ややしまる
3´ 3層より多量の明褐色土混 軟質
3´´ 3層より多量の明褐色土 軟質
4 黒褐色土 微量の明褐色土粒・軽石粒・炭化物粒 きめ細か しまる
4´ 3層に類似 多量の明褐色土ブロック混
5 黒褐色土 4層と類似 4層より色調暗く しまる
6 黒褐色土 5層と類似 5層より軟質
7 黒褐色土 少量の明褐色土粒 粘質
8 暗褐色土 微量の明褐色土粒・炭化物粒 きめ細か ややしまる
8 8層よりやや暗い 少量の軽石
9 灰褐色粘質土
9´ 8層に暗褐色土混 やや軟質
10 暗褐色土 少量の軽石(5～20㎜) パサパサしてしまる
10´ 10層より暗い 微量の軽石
11 なし
12 暗褐色土 軽石(5～10㎜) パサパサしている
13 12層に明褐色土粒・ブロック混 軽石
14 暗褐色土 10層よりやや暗い 軽石 微量の炭化物
15 黒褐色土 微量の軽石(1～20㎜) きめ細か しまる
15´ 15層より暗い しまる
a 15層に多量の明褐色土粒 しまる
15´ 黒褐色土 多量の明褐色土粒 きめ細か しまる
15´´ 15層より多量の明褐色土粒(15´層より少ない)
16 黒褐色土 少量の明褐色土粒・黒色土粒・軽石粒 やや粘質
17 黒褐色土 10層よりやや明るい 多量の明褐色土ブロック・粒子 粘質
18 暗褐色土 全体に明るい 微量の明褐色土粒 きめ細か 軟質
19 褐色土 軟質
19´ 19層に黒色土・黄褐色土粒混 下層がやや粘質
① 明褐色土に暗褐色土混
② 暗褐色土
③ 暗褐色土に褐色土混 やや軟質
④ 明褐色土ブロック
⑤ 暗褐色土・明褐色土混
⑥ 黒褐色土 明褐色土粒混 硬くしまる

SL1

132.400m

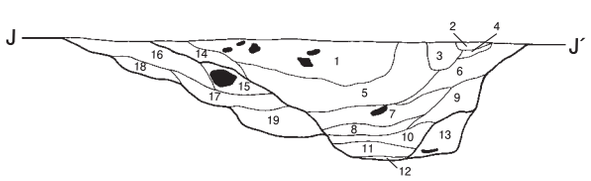


SL1−8
1 暗褐色土 軽石(1～10㎜) 微量の炭化物 パサパサしてしまる
2 暗褐色土 1層に明褐色土粒・ブロック混
3 暗褐色土 1層より少量の軽石 少量の明褐色土ブロック
4 暗褐色土 3層に明褐色土・褐色土ブロック混 炭化物(1～10㎜)
5 黒褐色土 微量の炭化物粒 しまる
6 暗褐色土 灰褐色粘質土混 明褐色土 褐色土 炭化物粒
6´ 暗褐色土 明褐色土・褐色土混 炭化物粒
7 灰褐色粘質土 多量の明褐色土・褐色土ブロック 赤褐色土の帯(鉄分)
8 暗褐色土 多量の軽石・明褐色土粒 しまる
9 暗褐色土 3層より暗く 軽石もless
9´ 暗褐色土 9層より明るい 多量の明褐色土粒
10 黒褐色土 多量の軽石・明褐色土粒 しまる
11 黒褐色土 10層よりやや暗く 明褐色土・軽石は少ない
11´ 明褐色土が少ない
11´´ 11層より明褐色土が少ない
12 黒褐色土 明褐色土・褐色土・軽石混 粘質
12 黒褐色土 灰褐色粘質土混
13 灰褐色粘質土
13´ 灰褐色粘質土 多量の褐色土粒
13´´ 灰褐色粘質土 多量の褐色土ブロック
14 黒褐色土 全体に青味を帯びる ボラ粒・明褐色土粒 全体に鉄分(黄褐色土) 粘質 ※SL1−2 の17層と類似
14´ 明褐色土ブロック・暗褐色土混

※1～9層までがこの字状と見ているが、10～11層まで含む可能性あり(池の床にある粘質土が見られないため)
12～13層が池の埋土の可能性あり 14層が溝の埋土

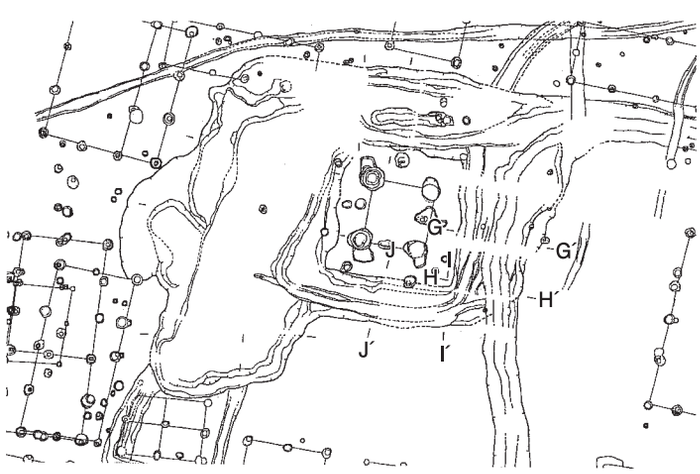
SL1

133.600m



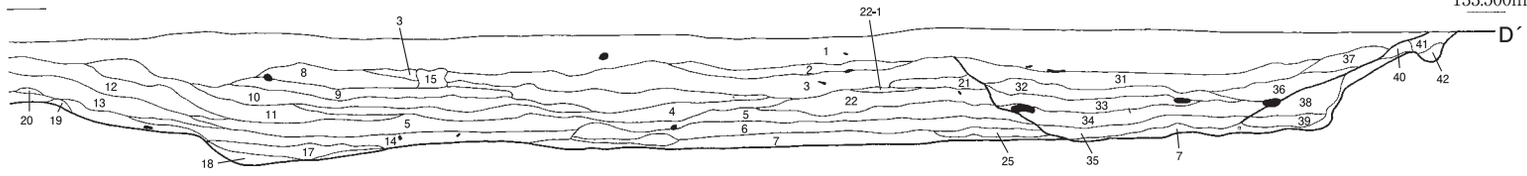
SL1−3
1 暗褐色シルト質土 微量の白色ボラ粒(3～5㎜)・土器小片 多量の円礫 粘性が強い しまる
2 灰白色シルト質土 多量の白色粒 しまる
3 暗灰色シルト質土 褐色シルトブロック(10㎜角)混 しまる
4 暗灰色シルト質土 褐色シルト質土粒混 しまる
5 暗褐色シルト質土 微量の褐色シルト質土ブロック(10㎜角) 土器小片 黄褐色ボラ 粘性(1層より強い) やや軟質
6 暗褐色シルト質土 褐色シルト質土・土器粒混 しまる
7 暗褐色シルト質土 褐色シルト質土ボブロック・炭化物混 斑点状に鉄分 しまる
8 暗灰色シルト質土 褐色シルト質土・土器小片・炭化物粒混 やや粘性 やや軟質
9 暗褐色シルト質土 褐色シルト質土・白色ボラ(30～40㎜角)混 やや軟質
10 暗灰色シルト質土 小ブロック状の褐色シルト質土 やや粘性 やや軟質
11 暗灰色シルト質土 ややしまる
12 乳白色シルト質土 やや強い粘性 鉄分の沈着 しまる
13 黒褐色粘質土 斑点状の褐色シルト質土 土器(軟質)
14 暗褐色シルト質土 全体に褐色シルト質土小粒(10㎜角) しまる
15 暗褐色シルト質土 ブロック状に褐色シルト質土 ややしまる
16 暗褐色シルト質土 少量の褐色シルト質土ブロック 15層よりやや粘性 軟質
17 暗褐色シルト質土 やや軟質
18 暗褐色シルト質土 黄褐色ボラ混 やや軟質
19 灰色シルト質土 多量の褐色シルト質土ブロック(50㎜) 炭化物 全体に粒子状の鉄分

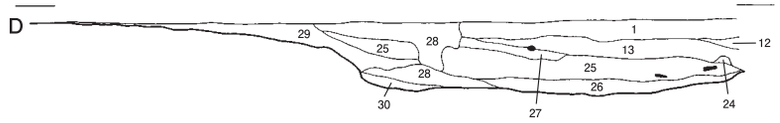
0 1m



第64図　池状遺構土層断面図（2）

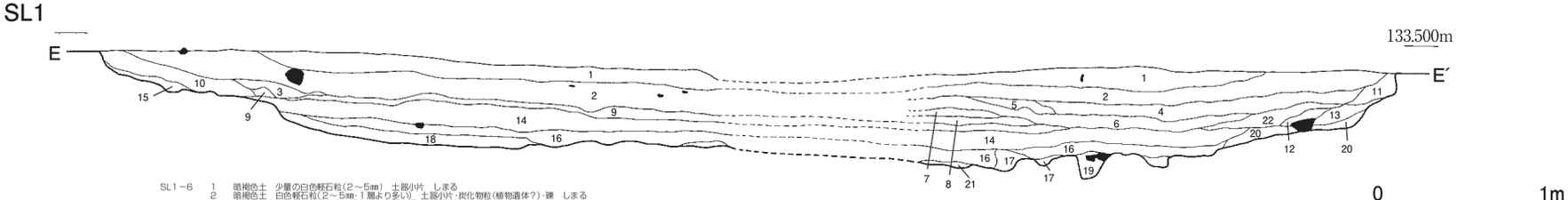
SL1





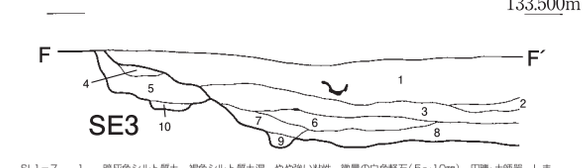
SL1－2　1　灰褐色土　全体に灰白色軽石粒　やや しまる
2　灰色系褐色土　微量の灰白色軽石粒　多量の灰色砂質土　水成的な堆積　やや しまる
3　灰色系褐色土　極微量の灰白色軽石粒　ブロック状に少量の黄褐色土　微量の黒色土(豆石？2～3㎜)　土器　やや しまる
4　灰色系黄褐色土　21層と酷似　微量の白色軽石(20㎜)・灰白色軽石粒　多量の黄褐色土ブロック(3層より多い)　やや しまる
5　暗灰色シルト質土　極微量の乳白色軽石粒　やや粘性　下部に酸化鉄の斑文　やや粘性　しまる
6　黒灰色シルト質土　酸化による褐色化　ブロック状の淡黄褐色土(7層より)　粘性(5層より強い)　水成的堆積　やや しまる
7　淡黄褐色土　淡黄褐色土と乳白色軽石粒が主体　軟質　ボロボロしている
8　灰色系褐色土　3層と酷似　多量の黒色砂質土　やや強い　やや しまる
9　灰色系黒褐色土　3・5層と類似　多量の黒色砂質土(3・5層より多い)　全体に灰色・橙色・黒色粒(1㎜)　やや しまる
10　灰色系褐黄褐色土　4層と類似　黒褐色土ブロック混　強い色調　やや しまる
11　灰色系褐色土　黒色土粒・灰白色軽石粒層　黄褐色土ブロック混
12　灰色系褐色土　13層と類似　微量の黄褐色土ブロック(2～3㎜)・黒色土ブロック　やや硬質
13　灰色系褐黄褐色土　灰色系褐色土に多量の黄褐色土ブロック(2～3㎜)　微量の黒色土ブロック　硬質
14　暗灰色シルト質土　微量の黄褐色土　やや軟質
15　灰褐色土　1層と同質　黄褐色土ブロック(3層と同質)混　やや しまる
16　黒褐色土　シルト質の黒褐色土が主構成　黒色土と黄褐色土(撹乱)　やや しまる
17　暗褐色土　多量の黄褐色土ブロック　砂質　やや軟質
18　黄褐色砂質土　砂質土　やや軟質　地山？
19　黒褐色土　黄褐色土ブロック(1～30㎜)(撹乱)　暗褐色土混　やや軟質
20　灰色系褐色土　13層と類似　褐色が強い　やや しまる
21　灰色系黄褐色土　ブロック状に黄褐色土　やや しまる
22　灰色系オリーブ褐色土　3層と類似　土器片　しまる
22　暗オリーブ褐色土　3層と類似　微量の黒色土ブロック(2～3㎜)　硬質
23　暗灰色シルト質土　6層と類似　極微量に黄褐色土ブロック　やや粘性　ややしまる
24　説明なし
25　褐色土　全体に乳灰色軽石粒(1～3㎜)・黒色粒(炭化物？)
26　灰色系褐色土　全体に乳灰色軽石粒　微量に灰色砂質土　やや硬質
27　灰色系暗褐色土　全体に微量の乳灰色軽石粒(1～3㎜)・灰白色軽石(30㎜)　硬質
28　暗褐色土　全体に黄褐色土ブロック・黒色・橙色土粒　やや硬質
29　淡黄灰褐色土　少量の褐色ブロック　やや粘性
30　黒黄灰褐色土　全体に黄褐色 ブロック・黒色・橙色粒(28層より少量)　やや粘性　やや軟質
31　灰色系暗褐色土　3層と類似　ブロック状の黒色砂質土　やや粘性　ややしまる
32　灰色系褐色土　多量の黒色砂質土　下部に黄褐色土・微量の黒色土ブロック　やや粘性　ややしまる
33　灰色系暗黄褐色土　21層と類似　多量の黄褐色土ブロック　黒色砂質土混　ややしまる
34　暗灰色シルト質土　5層と類似　多量の黄褐色土・黒色土ブロック　微量の酸化の斑文　やや粘性　ややしまる
35　黒灰色シルト質土　6層と類似　微量の黄褐色土ブロック(30㎜)　やや軟質
36　灰色シルト質土　黄褐色土ブロック(10㎜)　やや粘性　ややしまる
37　灰色系褐色土　31層に類似　極微量の黒色砂質土
38　暗灰色土　多量の黄褐色土ブロック　土器片　やや軟質
39　灰色シルト質土　微量の黄褐色土ブロック　シルト質・粘性　やや軟質
40　黄褐色土　黄褐色土に灰色土(1層から)混入
41　暗灰褐色土　黄褐色土(13層から)混入
42　黄褐色土　暗灰褐色土　ブロック状の黄褐色土(撹乱か？)　硬質

SL1

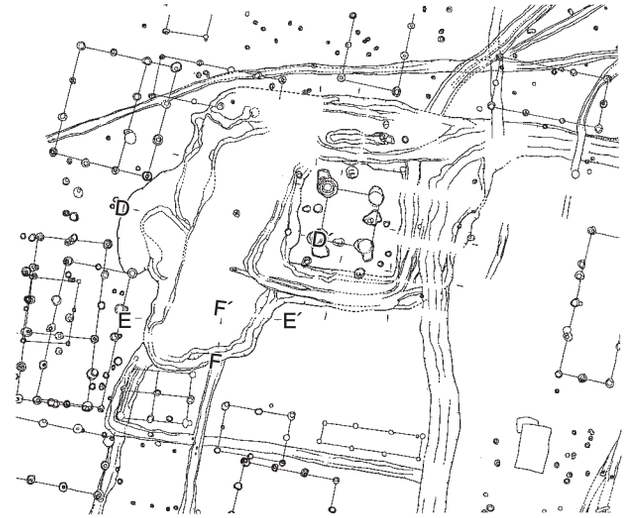


SL1－6　1　暗褐色土　少量の白色軽石粒(2～5㎜)　土器小片　しまる
2　暗褐色土　白色軽石粒(2～5㎜・1層より多い)　土器小片・炭化物粒(植物遺体？)・褪　しまる
3　2層よりやや にぶい暗褐色土　褐色シルト質土混　炭化物粒　しまる
4　暗褐色シルト質土　微量の褐色シルト質土小ブロック　多量の白色・黄褐色軽石粒　土器小片　やや軟質
5　暗灰色シルト質土　黒灰色シルト質土混　褐色シルト質土粒　やや粘性　やや軟質
6　暗灰色シルト質土　褐色シルト質土混　多量の白色軽石粒　炭化物　しまる
7　灰色シルト質土　褐色シルト質土混　炭化物粒　やや軟質
8　暗灰色シルト質土　褐色・黒灰色シルト質土混　土器小片　軟質
9　暗褐色土　灰白色土(サラサラしている)混　微量の白色軽石粒(1～5㎜)　鉄分　しまる
10　暗灰褐色シルト質土　灰褐色シルト質土混　多量の白色軽石粒　しまる
11　暗褐色シルト質土　褐色シルト質土混　しまる
12　暗灰褐色シルト質土　白色軽石　やや強い粘性　やや軟質
13　暗灰色粘質土　褐色シルト質土小ブロック混　やや軟質
14　暗灰色シルト質土　褐色シルト質土混　白色軽石粒・土器小片・炭化物粒　少量の鉄分　しまる
15　暗灰色シルト質土　褐色シルト質土ブロック混　白色軽石　やや粘性　しまる
16　暗灰色粘質土　白色軽石　土器小片　多量の鉄分　しまる
17　暗灰色粘質土　褐色粘質土混　鉄分　やや軟質
18　暗灰色粘質土　褐色シルト質土混　多量の鉄分　やや軟質
19　暗灰褐色シルト質土　褪　しまる
20　暗灰色シルト質土　褐色シルト質土混　炭化物粒　やや軟質
21　暗灰色粘質土　褐色粘質土混　多量の鉄分　しまる
22　暗灰褐色シルト質土　白色軽石　土器小片　やや軟質

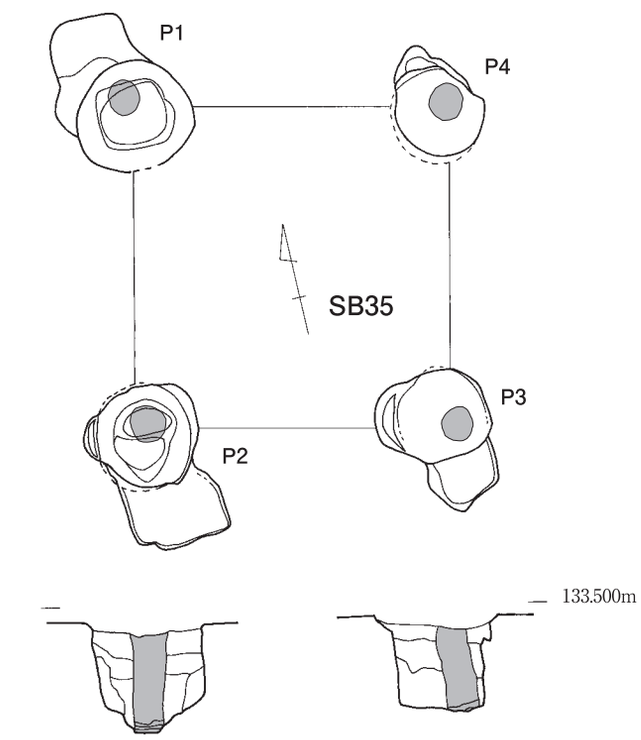
SL1

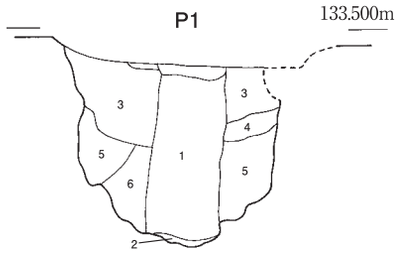


SL1－7　1　暗灰色シルト質土　褐色シルト質土混　やや強い粘性　微量の白色軽石(5～10㎜)　円礫・土師器　しまる
2　暗灰色シルト質土　黒灰色シルト質土混　褐色シルト質土粒　やや粘性　しまる
3　暗灰色シルト質土　褐色シルト質土小ブロック混　強い粘性　土器小片　斑点状に多量の鉄分　やや軟質
4　暗灰色シルト質土　褐色シルト質土混　やや強い粘性　ややしまる
5　暗灰色シルト質土　強い砂質性　多量の白色軽石粒・炭化物粒　やや軟質
6　暗灰色粘質土　褐色シルト質土小ブロック混　斑点状に多量の鉄分　ややしまる
7　灰色粘質土　褐色シルト質土粒　土器小片　白色軽石粒(3㎜)　炭化物(植物遺体？)　斑点状に多量の鉄分　やや軟質
8　暗灰色粘質土　褐色シルト質土小ブロック混　土器小片　斑点状に多量の鉄分　ややしまる
9　灰褐色粘質土　ややしまる
10　暗灰色シルト質土　強い砂質性　白色軽石粒　土器小片　炭化物(植物遺体？)　ややしまる

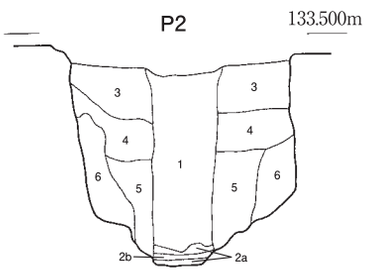


第65図　池状遺構土層断面図（3）

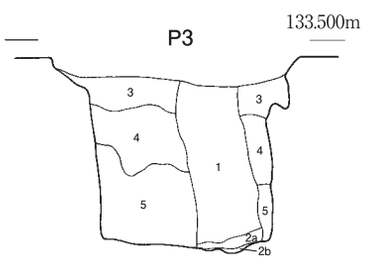




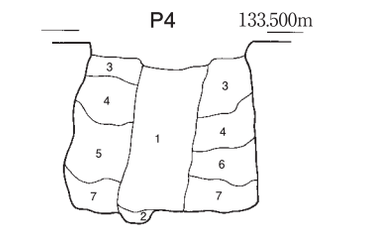
SB35－1
1　暗褐色シルト質土　しまる
2　暗褐色シルト質土　青灰色粘質土粒・黒褐色粘質土粒混
3　暗褐色シルト質土　1層よりやや明るい　黄・白色のボラ粒混
4　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土ブロック混
5　黄褐色シルト質土　暗褐色粘土質土・黒褐色粘質土ブロック混　ややしまる
6　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土混　黒褐色粘質土粒



SB35－2
1　暗褐色シルト質土　しまる
2－a　乳白色シルト質土　しまる
2－b　青灰色シルト質土　乳白色シルト質土粒混　しまる
3　暗褐色シルト質土(やや明い)　少量の黄褐色シルト質土混　しまる
4　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土混　少量の黒褐色粘質土粒　しまる
5　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土粒・黒褐色粘質土粒(3～4cm)混　ややしまる
6　黄褐色シルト質土　黒褐色粘質土ブロック混　ややしまる



SB35－3
1　暗褐色シルト質土　少量の黄褐色シルト質土粒
2－a　黒褐色粘質土　乳白色粘質土混　やや軟質
2－b　橙色シルト質土　やや軟質
3　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土混　しまる
4　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土混　黒褐色粘質土粒(20～40mm)
3層より黄褐色が少ない　しまる
5　黄褐色シルト質土　黒褐色粘質土・粒混



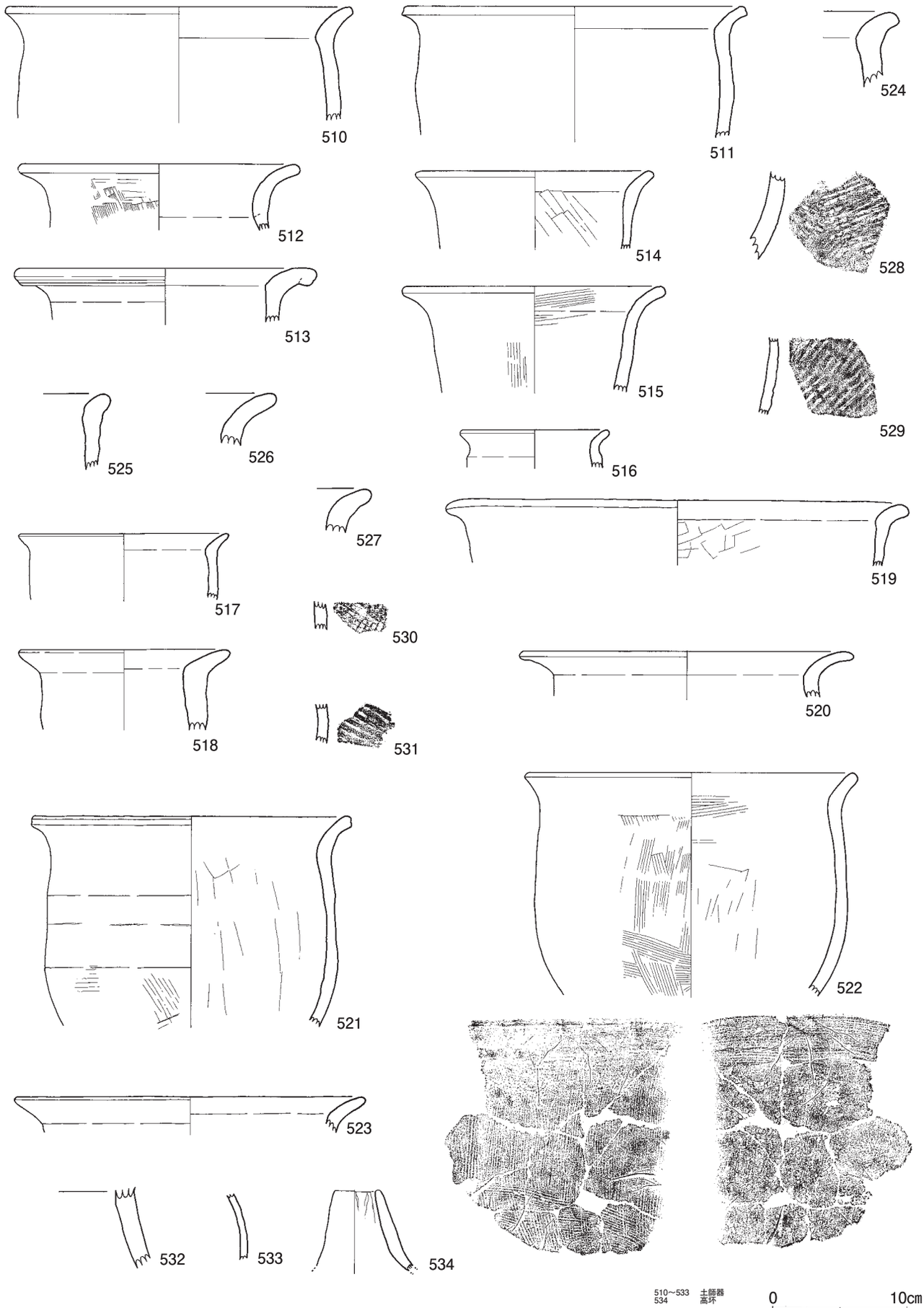
SB35－4
1　暗褐色シルト質土　少量の黄褐色シルト質土混　ややしまる
2　青灰色粘質土
3　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土混　少量の黄褐色シルト質土粒・黒褐色粘質土粒　しまる
4　暗褐色シルト質土　黄褐色シルト質土混　黒褐色粘質土粒(3層より多い)　ややしまる
5　暗褐色粘質土　黄褐色シルト質土混　黒褐色粘質土粒　ややしまる
6　黄褐色シルト質土　少量の黒褐色粘質土ブロック混
7　褐色シルト質土　少量の黒褐色粘質土粒

第66図　SB35実測図

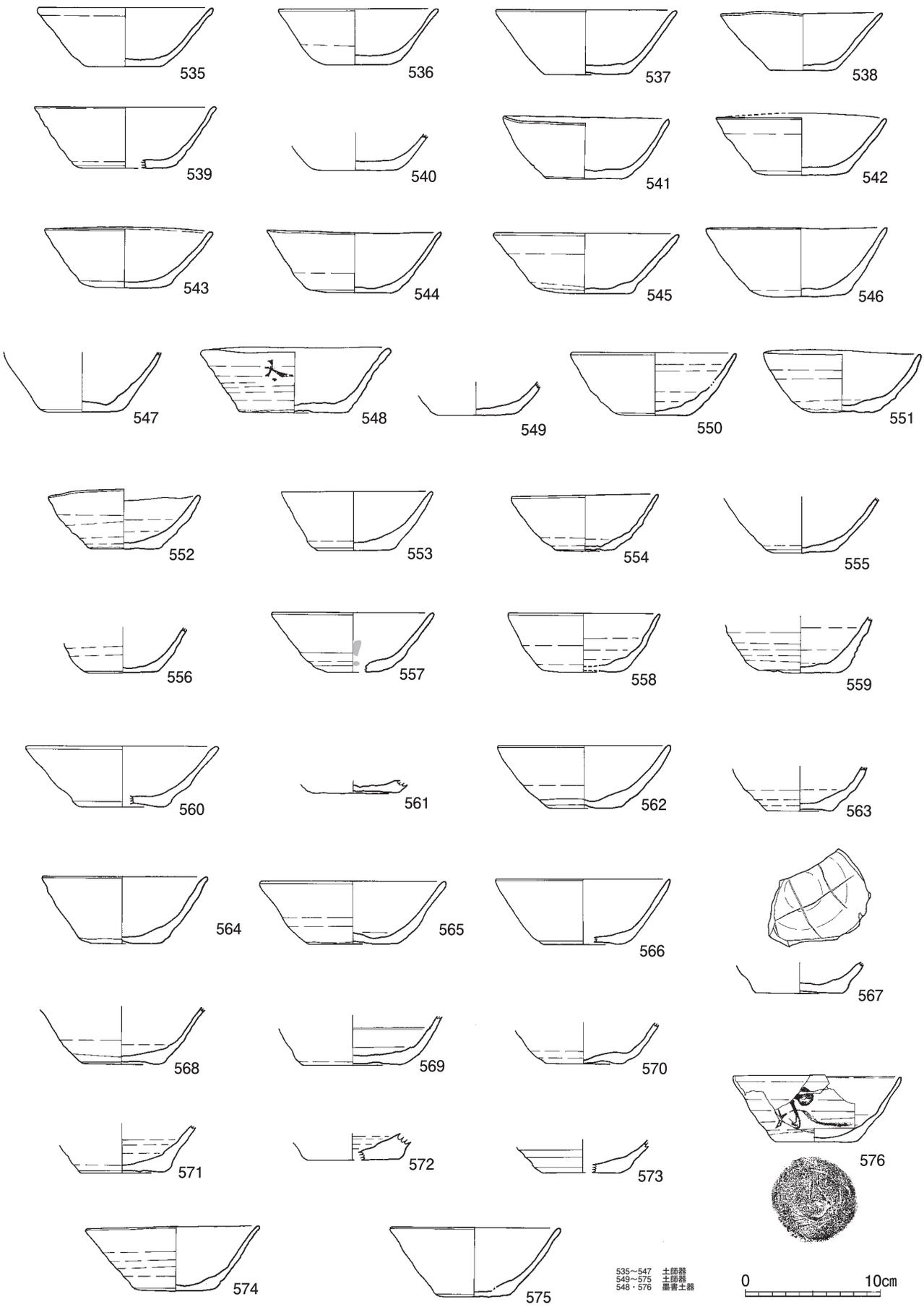
11.59㎡。穴の掘り方の大きさや深さおよび柱の太さは大型建物の身舎部のそれと非常に類似している。出土遺物は上層より土師器坏（82）が１点出土したのみである。なお、SB35と重複する浅い掘り込みより土師器坏（83・84）や高台付埦（85）が出土する。

遺物は、土師器甕（510 ～ 533）･坏（535 ～ 690）、高台付埦（691 ～ 706･711 ～ 742･749 ～ 751）、埦（707 ～ 710）・鉢（743）・皿（744 ～ 746）・耳坏（747・748）、大型の鉢や脚付鉢（752 ～ 774）、黒色土器（775 ～ 822）・甑（1057）、須恵器甕（850 ～ 902）・壺（903 ～ 914）・坏（915 ～ 916・918・922・925・930）・高台付埦（924・927 ～ 929・931）・蓋（932）、布痕土器（823 ～ 849）、緑釉陶器（936 ～ 959）、灰釉陶器皿・坏（960 ～ 972）・壺（973）、白磁（974 ～ 984）、越州窯系青磁（985 ～ 1001）、鞴の羽口（1058 ～ 1063）・鉄滓、土錘（1003 ～ 1056）、紡錘車（1002）、石製品（1064・1065）、軽石製製品（1066）、砥石（1068）、須恵器利用の坩堝（933 ～ 935）、墨書土器（548・576・580・584・683・694）など多種に及ぶが、すべて古代に限られる。なお、木簡や仏具など祭祀的遺物は見つかっていない。接合関係をみると須恵器で包含層や土坑および溝状遺構出土のものなど広範囲におよぶ接合関係が認められた。代表的なものをあげると須恵器甕では851がSC ５・Ｇ８およびＨ６グリッド、852がSB ２柱穴出土と、858がSC14・Ｆ10グリッドと、872がSC10とそれぞれ接合している。また土師器坏においても611がＢ９・Ｃ９グリッドと、612がSE ８と、さらに大型鉢ではSB ４出土と接合している。また、遺構内では20㎝前後の高低差で接合している例がみられる。特徴的な遺物について記すと、土師器甕は基本的には外面ナデ、外面ヘラケズリおよびナデ調整となるが、528 ～ 531では外面に格子目や平行タタキが施される。土師器坏では557・562・579・588・639の内外面に黒色の付着物があり、自然科学分析の結果、その一部は漆の可能性が指摘されている。黒色土器775・779においても同様な痕跡が認められる。567は内面に格子状に線刻が施され、681および黒色土器（756）でも体部内面にみられる。565内面にモミと思われる圧痕が観察できる。墨書土器の548は「太」？､576は「泉」､580も「泉」の可能性がある。584・683・694は判読不能である。782は黒色土器外面に「井」と読める文字が書かれている。須恵器は甕が個体の大きさからか破片として多く出土するが、外面は平行タタキや格子目タタキが、内面は部位によって同心円文と平行タタキが使い分けられ、他に車輪文（871 ～ 873・875 ～ 877）や羽状のタタキ（869）がみられる。また884は内面に磨痕が認められ、転用硯の可能性もある。緑釉陶器は軟質（936 ～ 942）と硬質（943 ～ 959）に分かれ、後者が破片としては多い。土錘は55点出土し、重さが50ｇを超えるもの（1005 ～ 1010）と10ｇ以下（1014 ～ 1029）に大まかには分かれる。鞴の羽口は６点出土し、すべて破片である。紡錘車（1002）は土師器坏底部を利用したもので、最大径6.7㎝、最大厚1.05㎝、孔径0.9㎝、重量51ｇを測る。石器としては次のようなものがある。1064は砂岩製の扁平な石製品で、片面に平滑になった顕著な磨り面が認められる。1065は敲石である。敲打痕が両極のみに集中せず部分的に数箇所に分かれそれほど顕著ではない。一時的に使用されたと考えられる。1066は軽石製品で、器表面に押圧しながら対象物を研磨したと考えられる方向が不揃いな線状痕が残る。磨石的な性格の遺物かもしれない。1067は蛇紋岩製の碁石状の製品である。やや不明瞭であるがほぼ全面に研磨痕が認められる。1068は砥石である。薄い扁平な石を利用している。全体像が不明であることから、石庖丁の破砕片の可能性も残る。

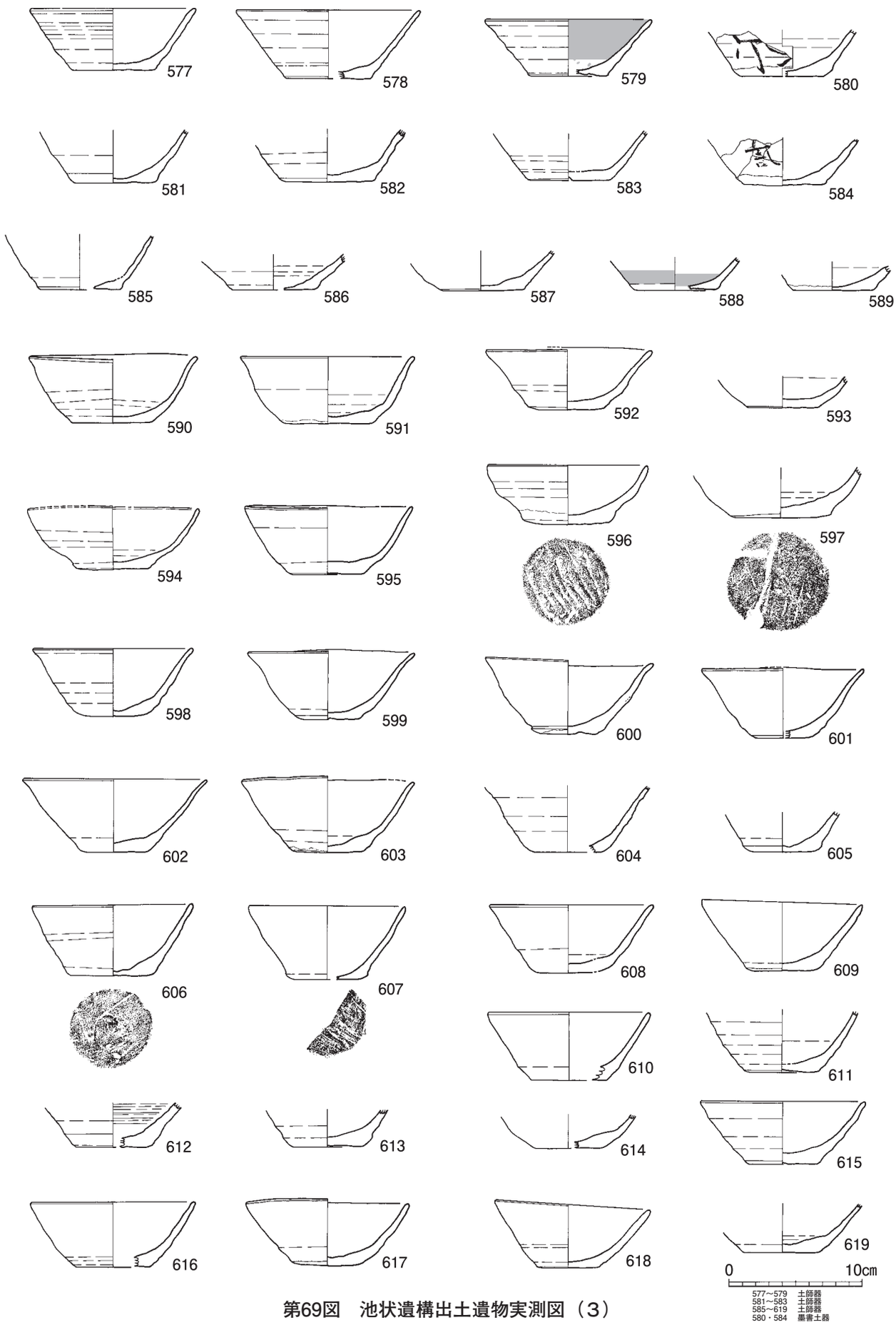
そのほか、池状遺構の性格や時期について解明するためにいくつかの自然科学分析を行った。池状遺構の土層断面中央付近の深さ約80㎝の下層から床面も土層サンプリングを行い花粉分析や珪藻分析、種実同定について試みた。種実同定については良好な結果は得られなかったが、珪藻分析では、水が常時滞水するような状態ではなく、流水の影響のある池沼や湿地といった土壌環境が推定され、時期や季節によって短期間滞水する程度であった可能性が指摘されている。花粉分析では、下層から草本花粉が少量検出されたのみで、比較的乾燥した人為環境であったと推定されている。また、同様の土層断面において上層から下層の植物珪酸体分析結果、全層でイネのプラントオパールが、下層においてヒエ属が検出された。報告では調査地



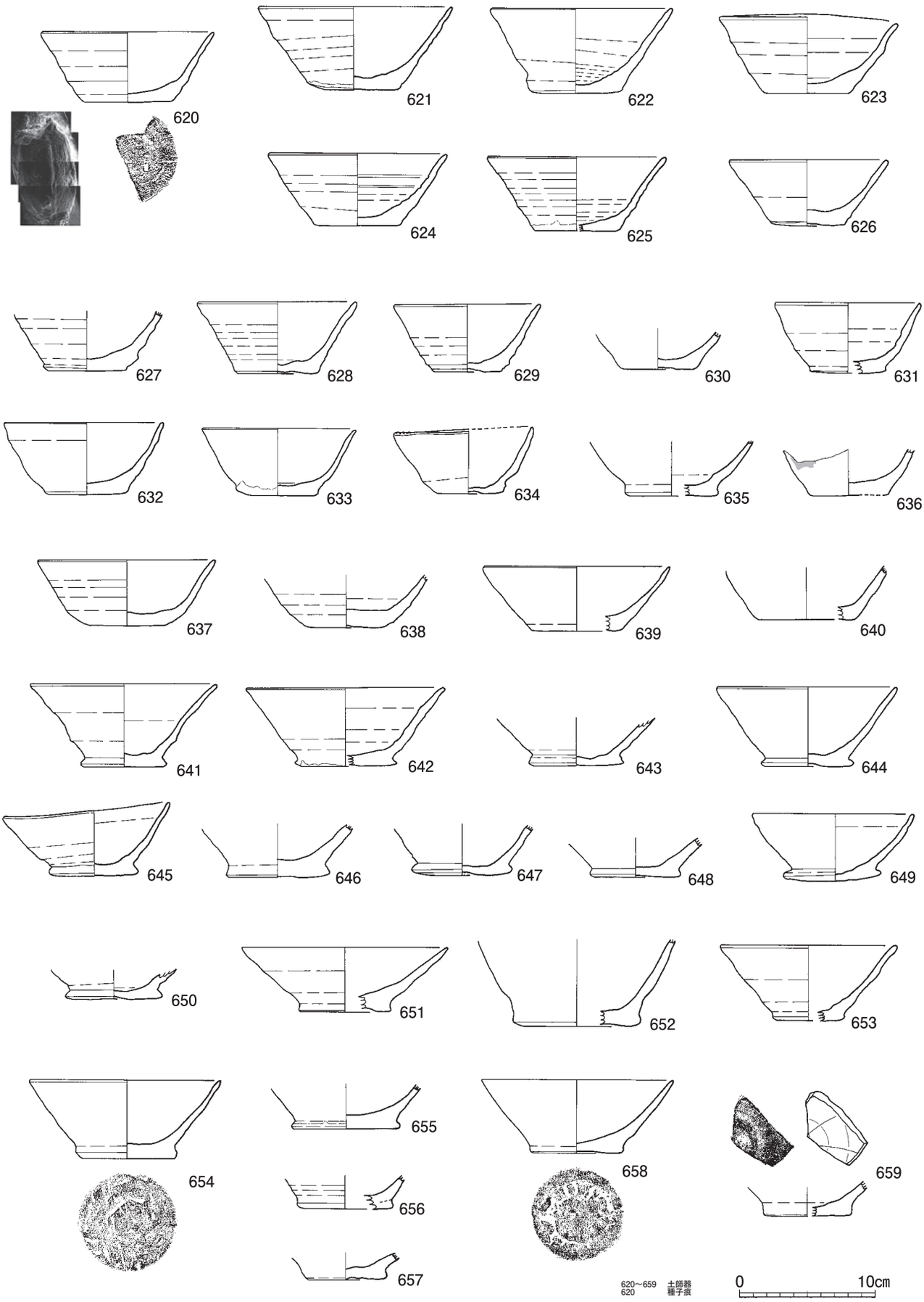
第67図　池状遺構出土遺物実測図（1）



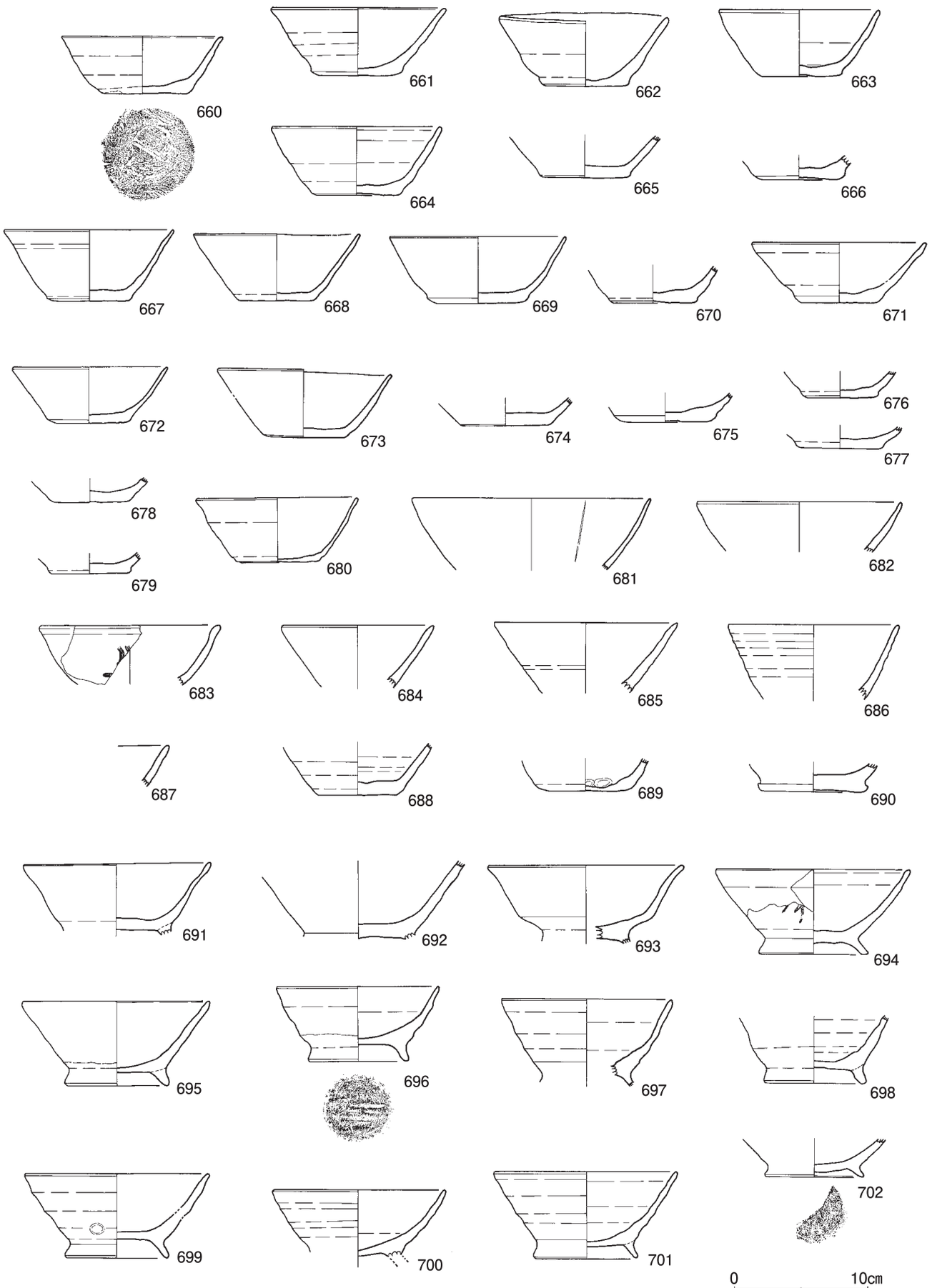
第68図　池状遺構出土遺物実測図（2）



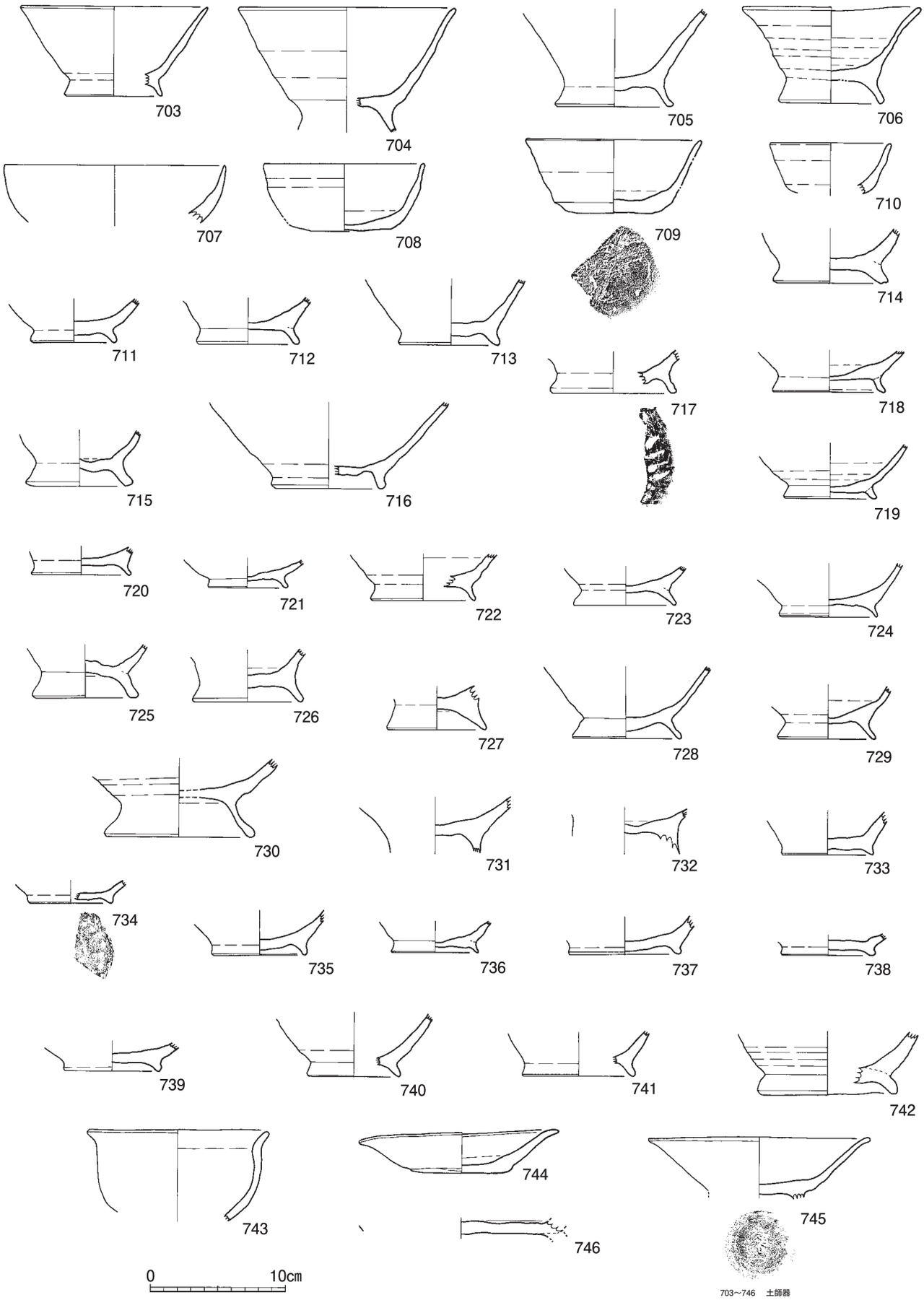
第69図　池状遺構出土遺物実測図（3）



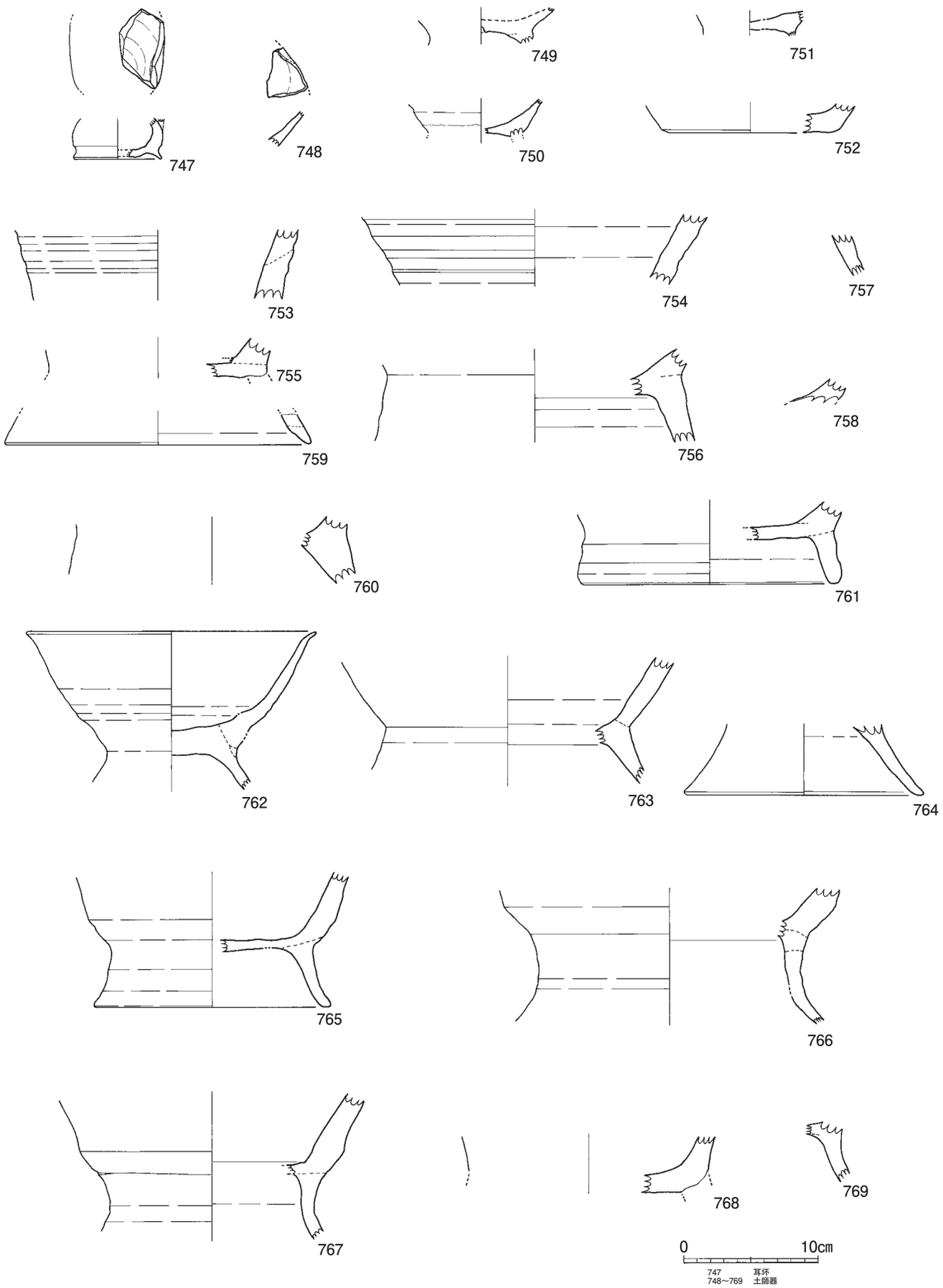
第70図　池状遺構出土遺物実測図（4）



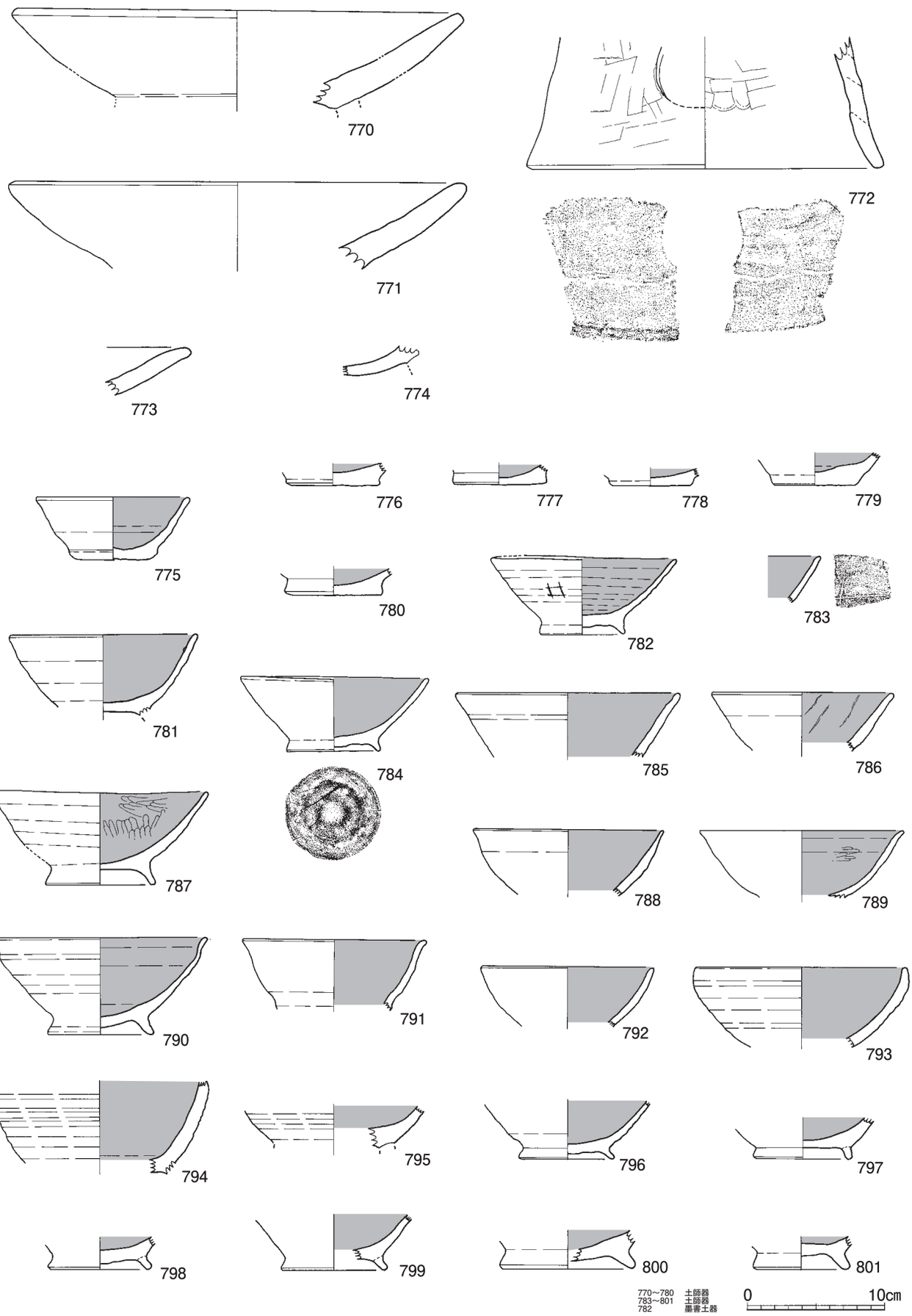
第71図　池状遺構出土遺物実測図（５）



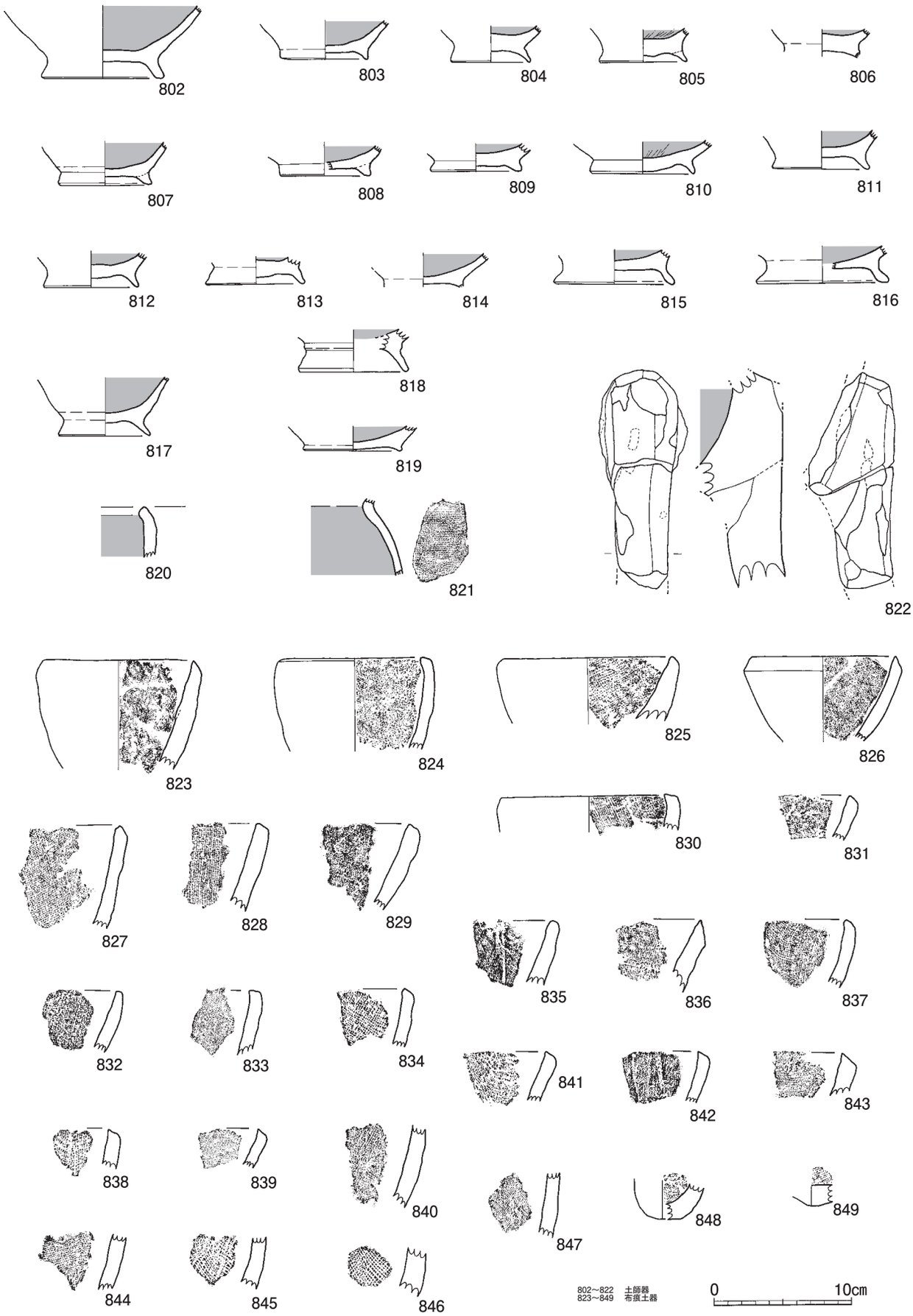
第72図　池状遺構出土遺物実測図（6）



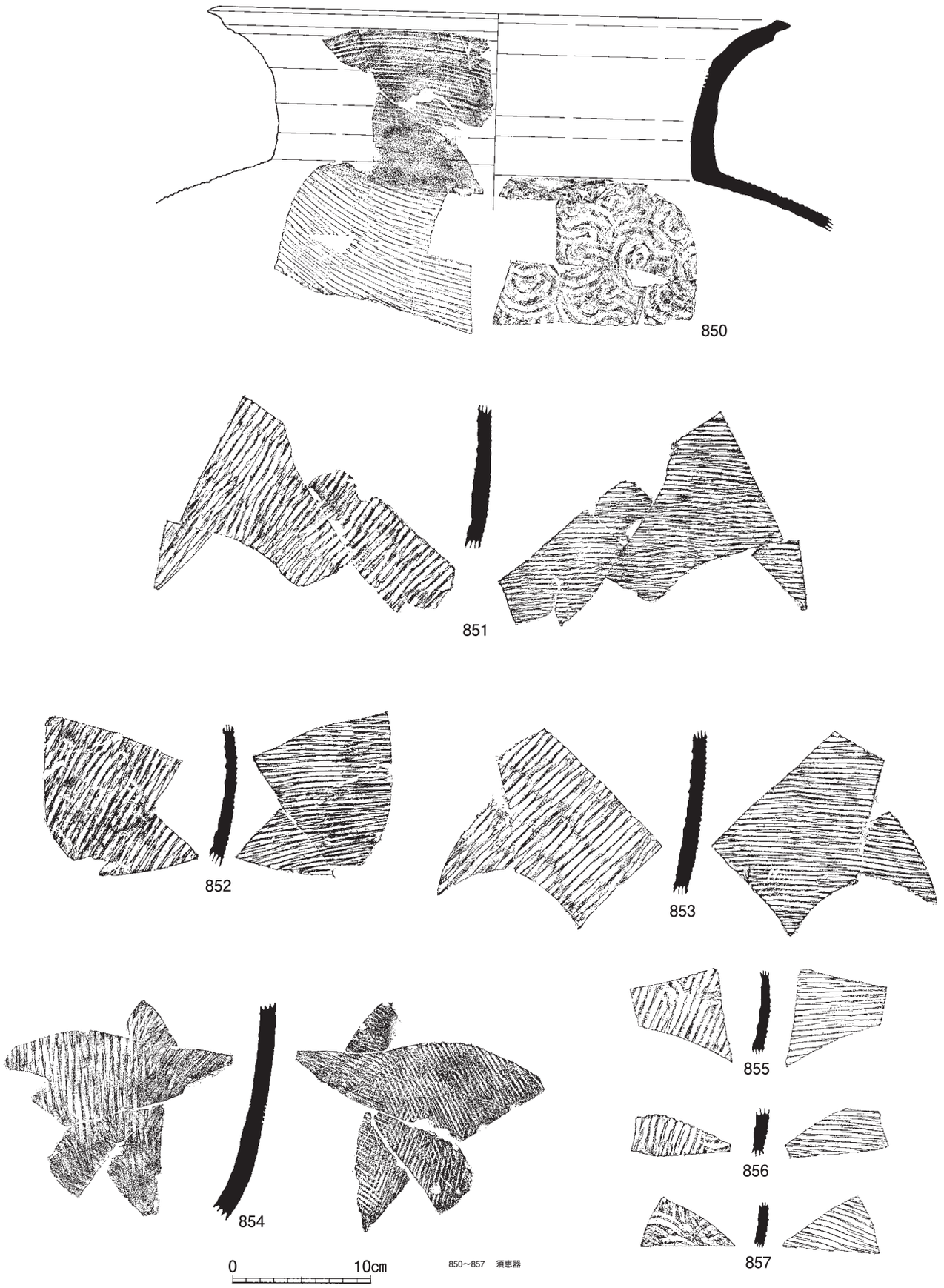
第73図　池状遺構出土遺物実測図（7）



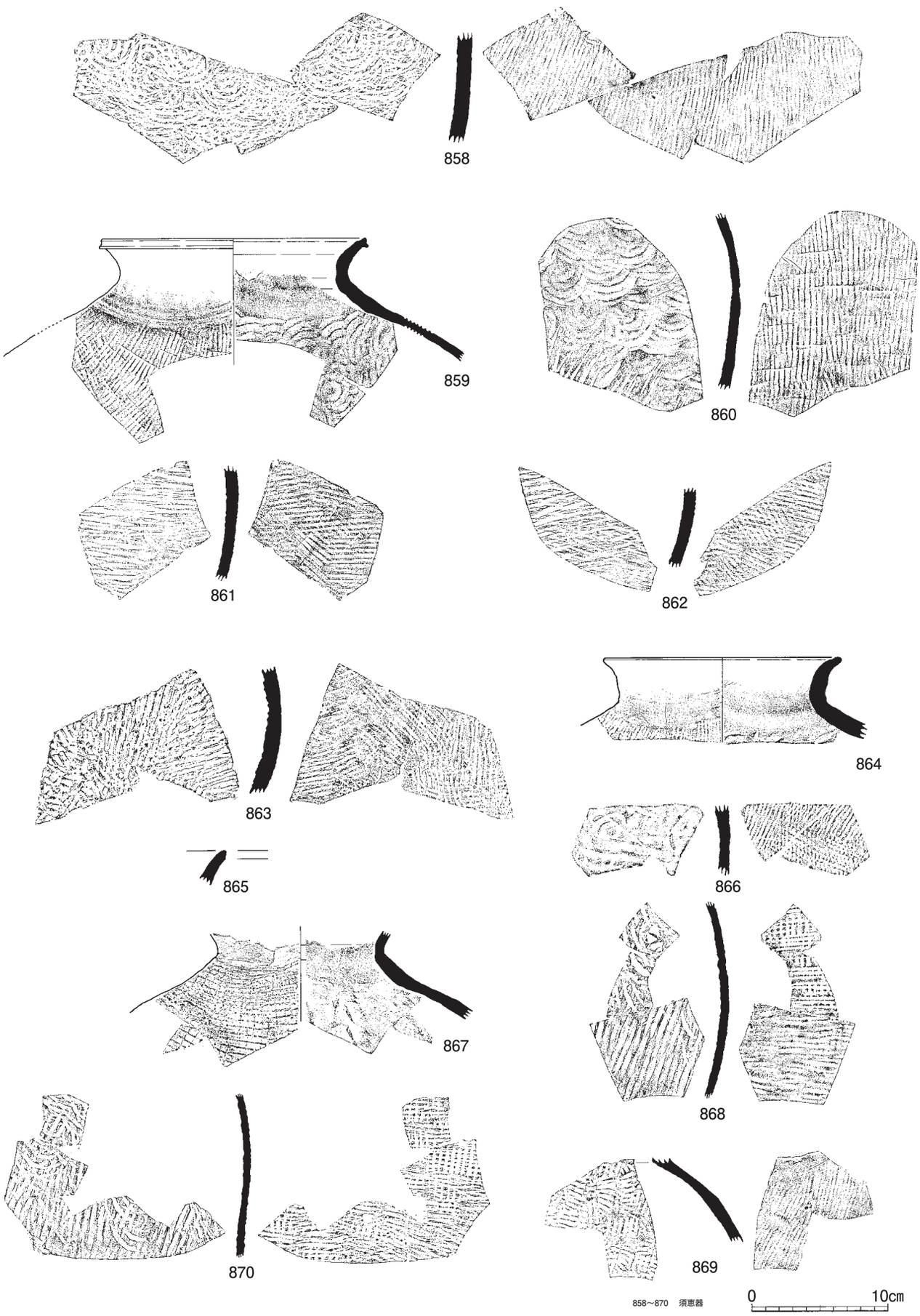
第74図　池状遺構出土遺物実測図（8）



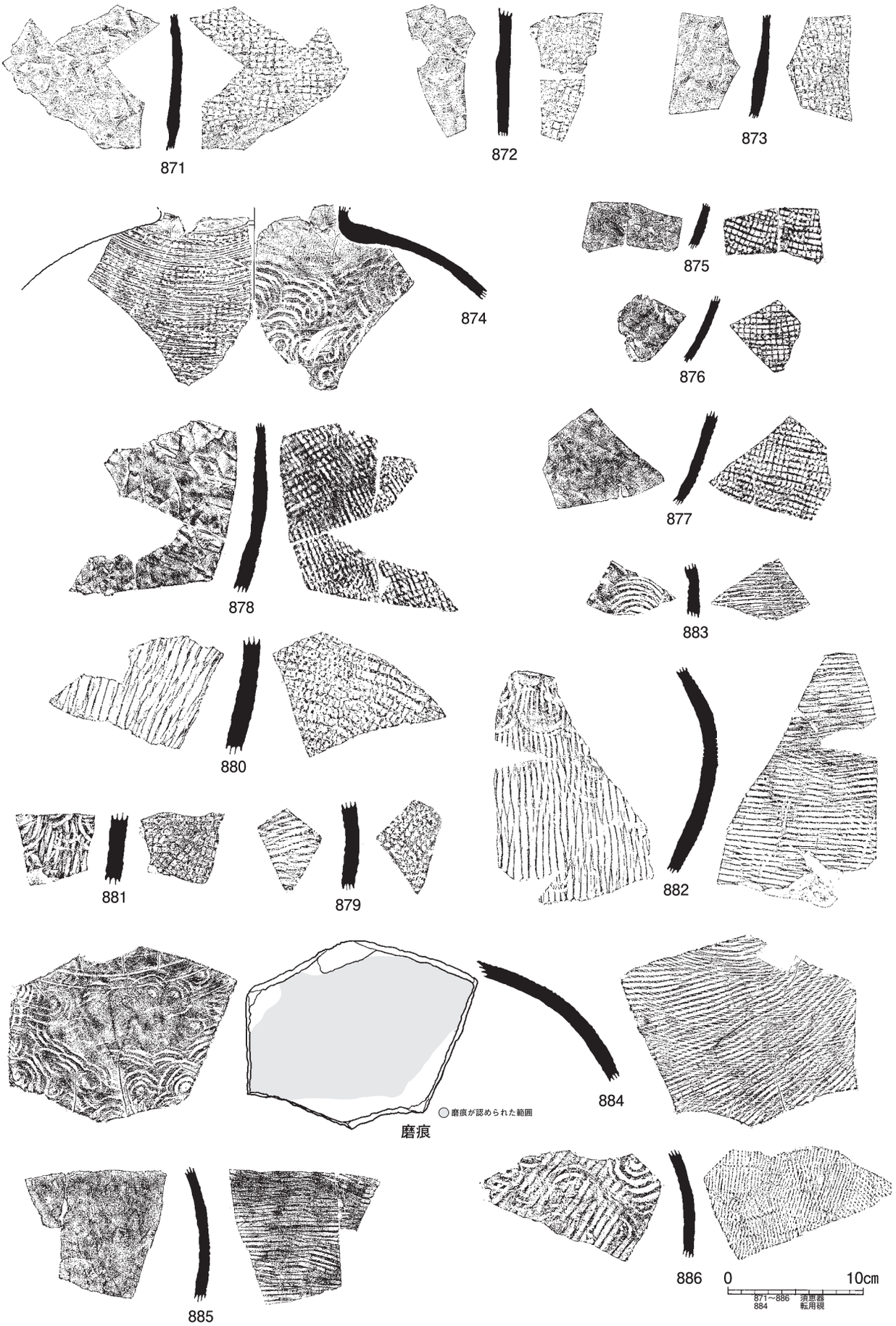
第75図　池状遺構出土遺物実測図（9）



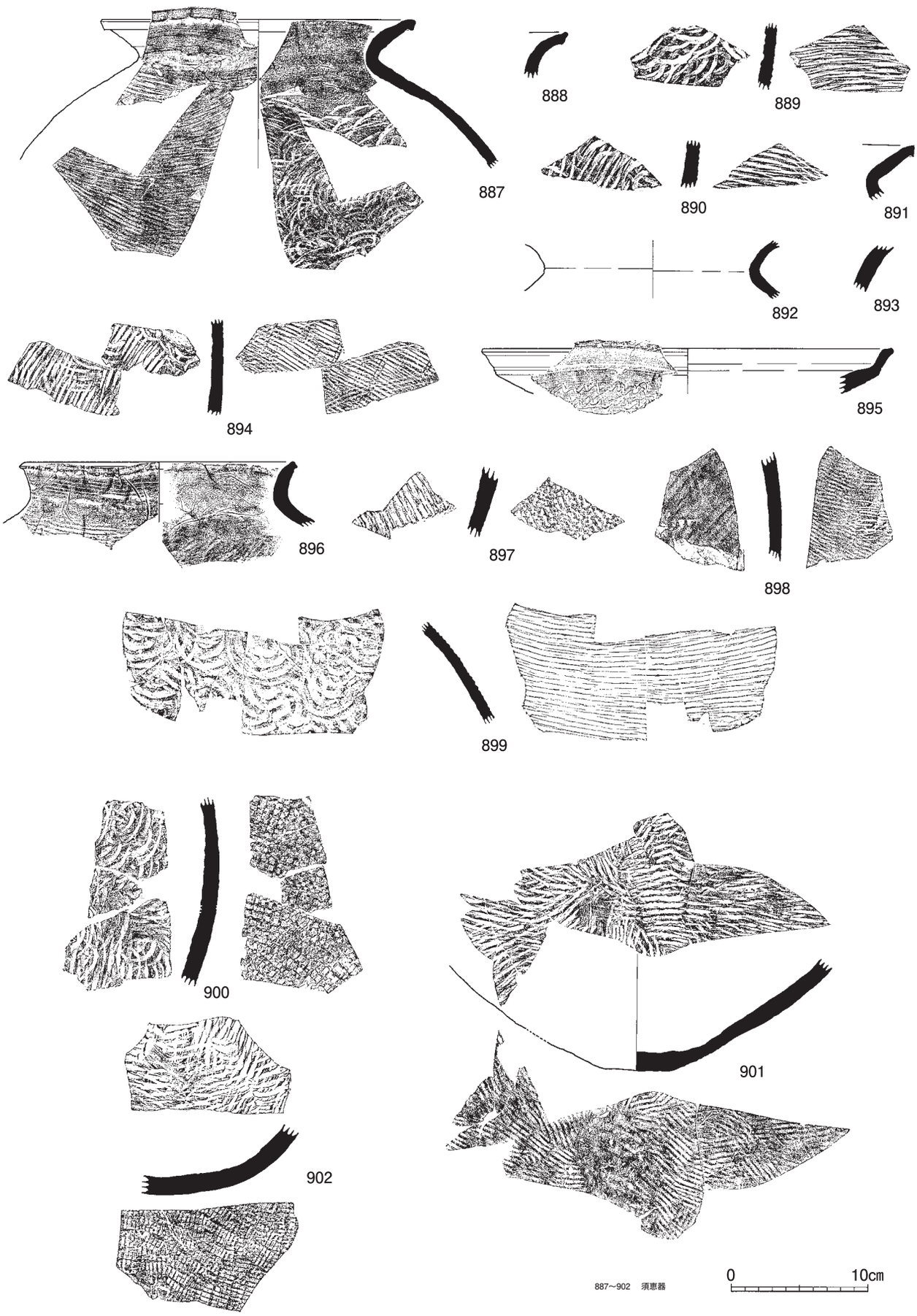
第76図　池状遺構出土遺物実測図（10）



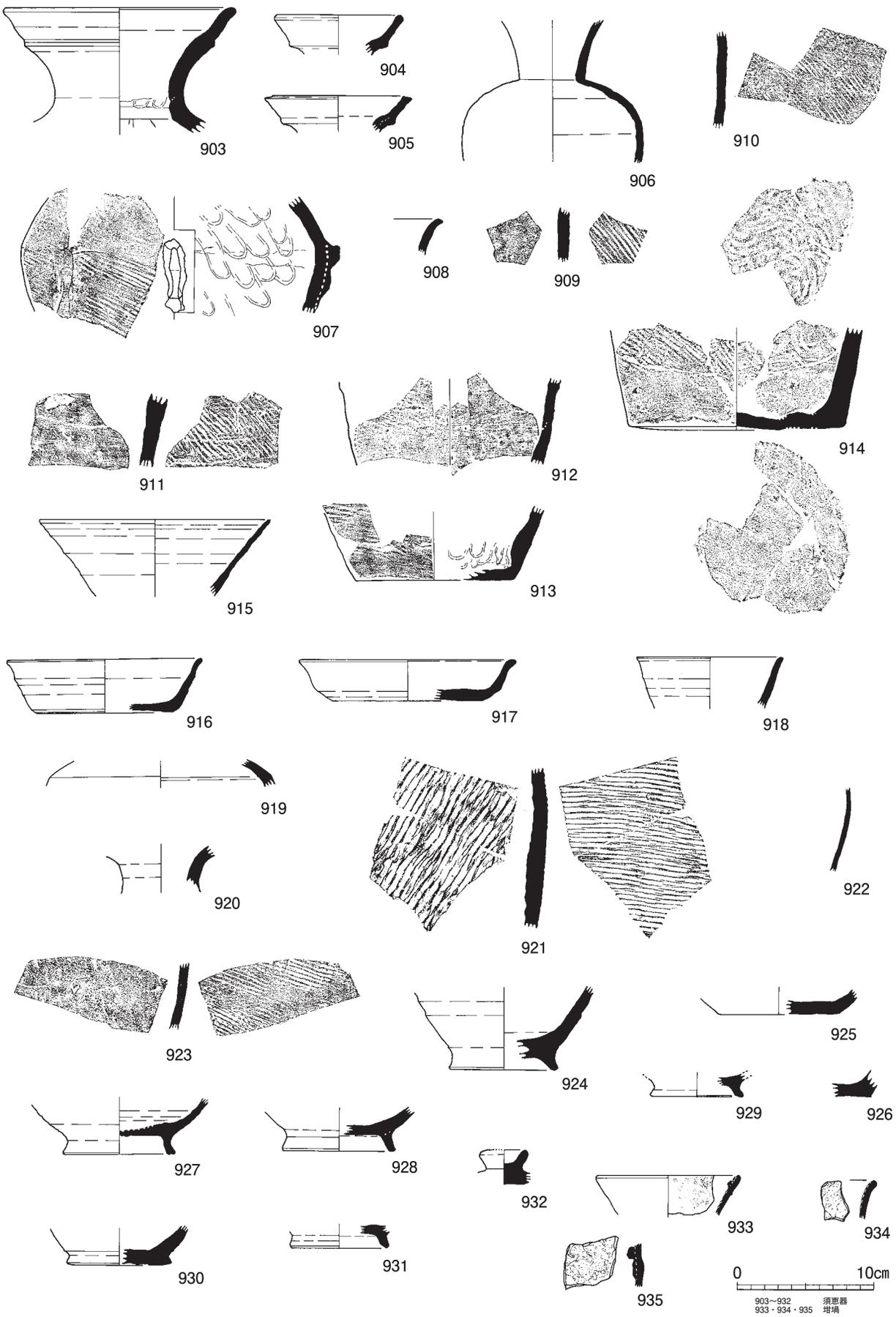
第77図　池状遺構出土遺物実測図（11）



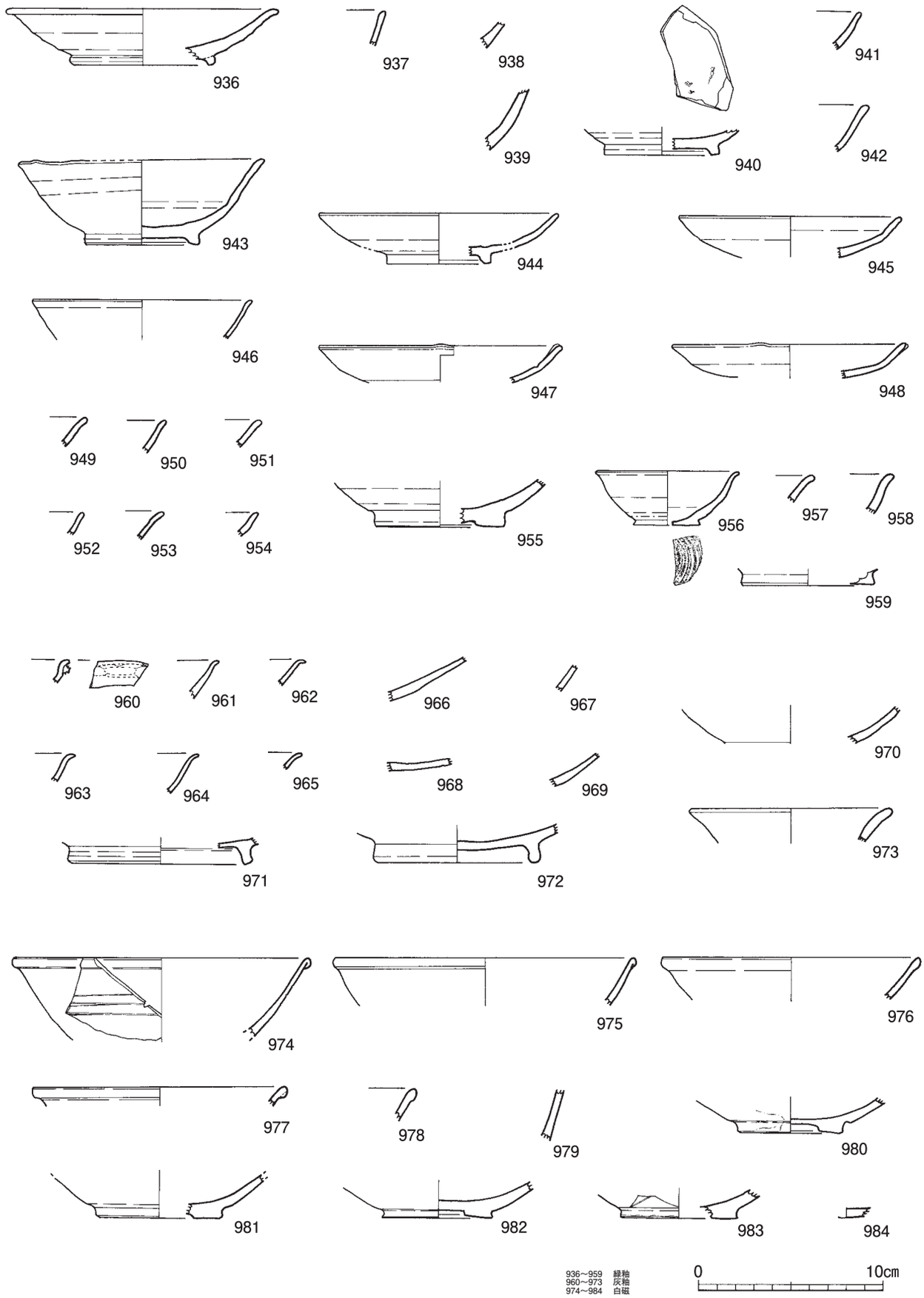
第78図　池状遺構出土遺物実測図（12）



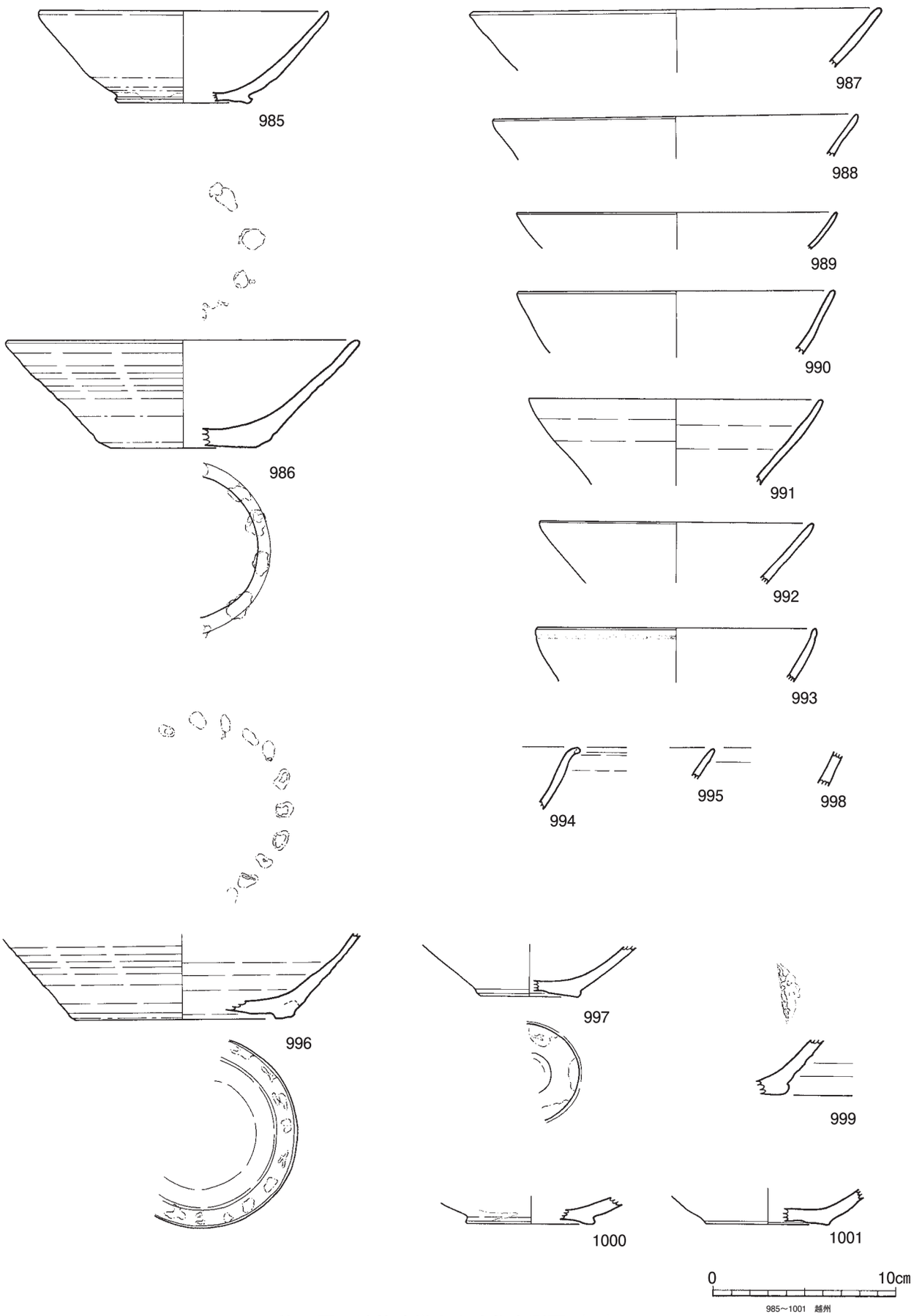
第79図　池状遺構出土遺物実測図（13）



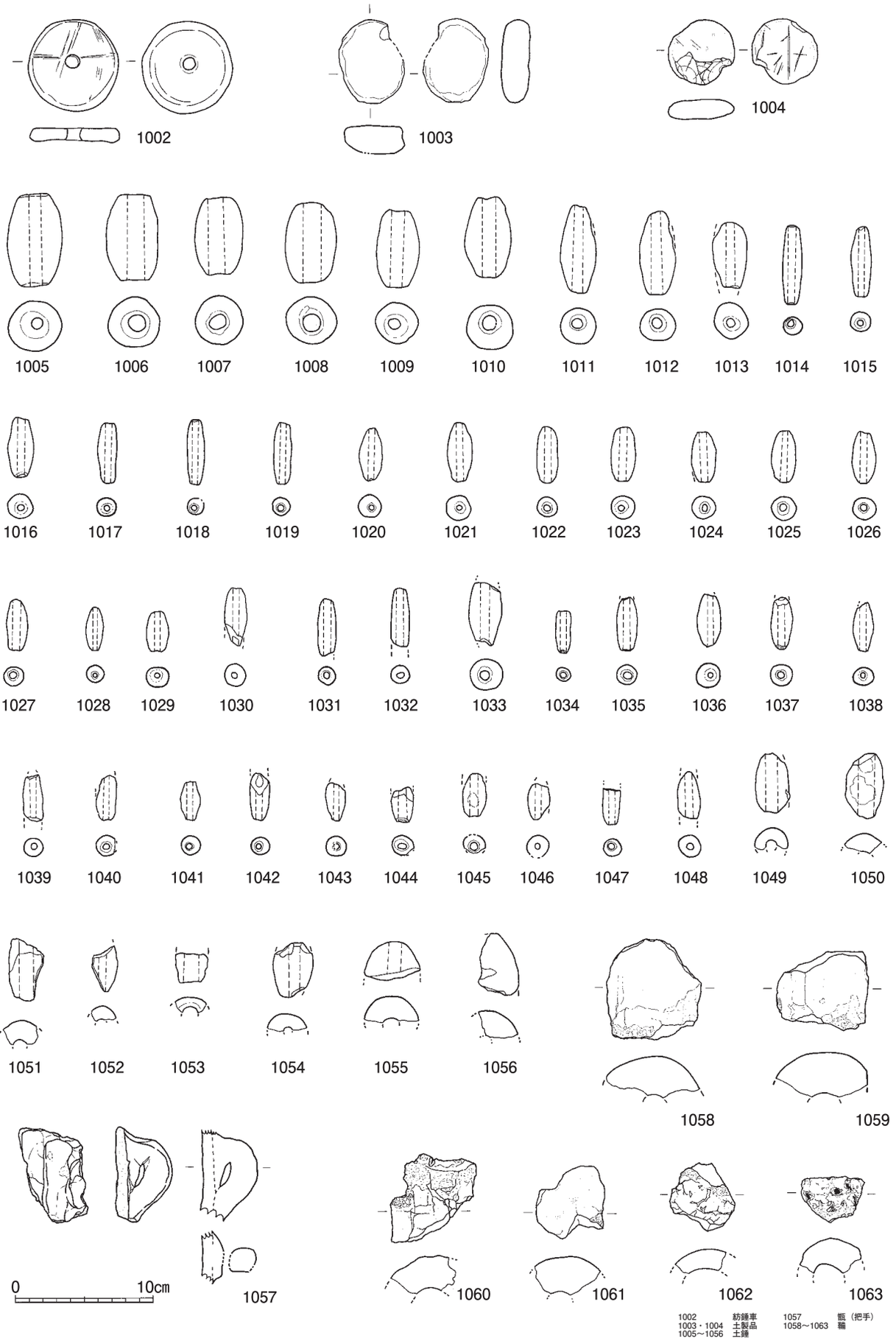
第80図　池状遺構出土遺物実測図（14）



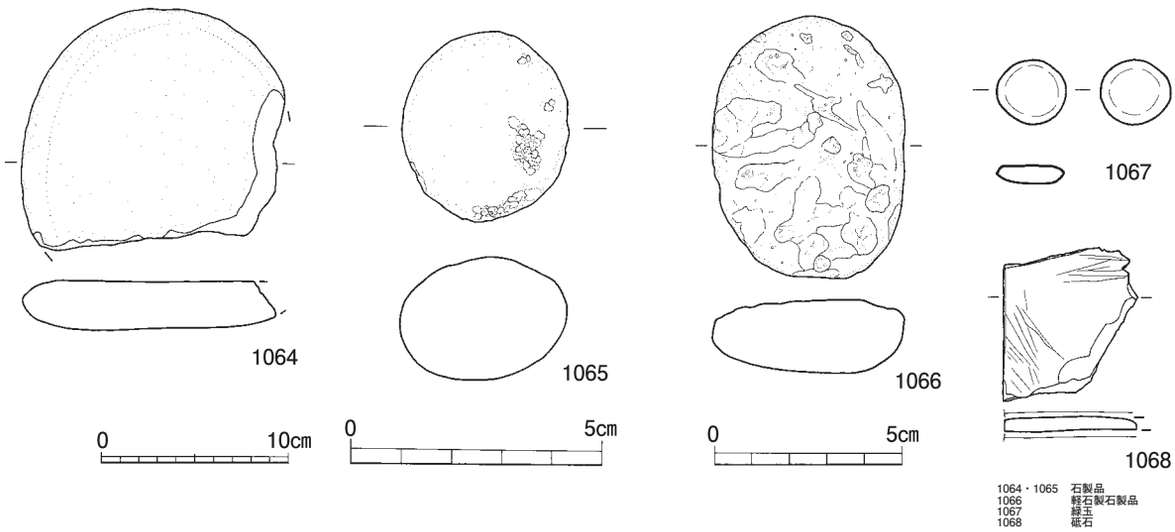
第81図　池状遺構出土遺物実測図（15）



第82図　池状遺構出土遺物実測図（16）



第83図　池状遺構出土遺物実測図（17）



第84図　池状遺構出土遺物実測図（18）

点もしくはその近辺で稲作が行われていたと考えられているが、上層においては、表土下すぐに遺構検出面であったため現在の水田の影響が考慮されるものの、下層におけるイネの存在は、上層からの影響というより、別の理由の可能性が高く、遺構の用途・性格を考察する上で興味深いものである。そのほか、出土した炭化材３点の樹種同定を行い、何れも落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属クヌギ節で、最外面の板目の状況から直径4.0 ～ 5.6㎝と細い枝部分が炭化したものと考えられ、用途については不明である。さらにその内の１点について放射性炭素年代を測定し、1,280 ± 40BP（暦年較正calAD678－771）という結果を得た。

本遺跡の場合、池状遺構の考え方は、国衙やいわゆる貴族の邸宅にみられる「苑池」とは違うものの、大型建物の南に位置し、くぼ地や区画施設に囲まれた空間の中に作られていることから、庭園の印象を受け、西側が大きく広がることから霧島山を借景に年中行事などの祭祀や饗宴、また農園としても利用されていたかもしれない。

６　道状遺構

SE １（第85・86図）

SE １は調査区の南西隅から北東に向かって蛇行しながら延び、くぼ地に接する付近で消失しており、隣接するSE30および長楕円形の土坑には連続しないものと考えられる。また、SE ７・SC14を切り、SE16・17・18と重複し、土層断面においても道状遺構との新旧関係を示す遺構も認められるが、その内容ははっきりしない。当初、溝状遺構と考えていたが、床面が一部硬化していることや波板状遺構がみられることから道状遺構と判断した。道状遺構は直線距離で約57ｍ、検出面での規模は、溝の幅2.5 ～ 3.5ｍ、深さ0.08 ～ 0.58ｍ、南西端と北東端部の床面の比高差は約0.42ｍと、北東部へ向かって高くなる。溝の断面形は幅広の台形状を呈し、主に黒褐色土や灰褐色土が堆積する（断面図85）。床面には、溝の走行と直交して不定形の楕円形を呈したいわゆる波板状の凹凸がほぼ全面に連続して80カ所以上掘られ、それに沿って両側に約12ｍの長さに幅0.2 ～ 0.5ｍ、深さ約0.10ｍの側溝が設けられている。この波板状遺構は長さ1.0 ～ 1.5ｍ、幅0.4 ～ 0.6ｍ、深さ0.05 ～ 0.20ｍを測り、長辺部がほぼ直立気味になり、短辺側はなだらかな立ち上がりを呈している。断面は台形状をなす。そして、波板状遺構間は接するもの、30㎝前後の間隔をもつものなど一定ではなく、北東部分では一部波板状遺構が重複していることから、数回に及ぶ道の改修が行われていた可能性がある。また、溝床面全体に明確な硬化面は確認できなかったが、波板状の覆土やその間のわずかな平坦部分に硬化した層が認められた。波板状遺構の床面には５～ 15㎝の礫や軽石、磨耗した土師器小片、白磁碗Ⅳ類、外面に縦方向の把手が付く石鍋片などがみられ、流れ込みというよりは、掘削時に何らかの目的で置かれた可能性がある。

遺構の南端部については、新しい遺構に一部切られるが、遺構自体が深くなるにつれて溝底の幅も狭くなってしまい波板状遺構はみられず、変わりに不定形の掘り込みがいくつかみられる。北端についても波板状遺構や硬化面が消え、明確な遺構の掘り込みも確認されずどのように延びるのかは不明である。

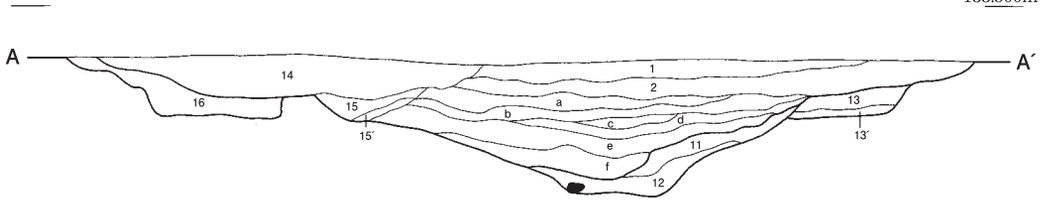
そのほか、調査区内において確定しえないが、SE ７に平行してSE １と柵列１の間に10基程度の幅の狭い波板状の遺構が並ぶものや、調査区北東部に位置するSE31が屈曲する箇所に波板状の長楕円形の掘り込みを確認しており、これらは「道」と何らかの関連がある可能性も指摘できる。

遺物は池状遺構に次ぐ量が出土している。土師器甕（159 ～ 169）・坏（170 ～ 178）・小皿（179・180）・高台付埦（182 ～ 187）、大型鉢（188）、黒色土器（189 ～ 197）、甑（200）、布痕土器（201・202）、須恵器甕（203 ～ 219）・坏（233・226・227）・高台付埦（224・225）、鉢（220 ～ 222）、土錘（228）、滑石製石鍋（229 ～ 236）、石帯（237）、白磁Ⅳ類（238 ～ 243・247・248）、緑釉陶器（246）、灰釉陶器（245）、軽石製石製品（249）、石製品（250）、磨石（251）がみられるが、白磁碗Ⅳ類や緑釉陶器などが出土していることからSE ７の遺物も含まれるものと考えられる。土師器坏底部の外面（173・174）に線刻がなされている。坏（178）の底部は糸切り底。237は石製鋳具で、２方向からの対峙する穿孔が残り、丁寧な面取がなされている。穿孔の位置から考えると丸鞆の可能性は低く、巡方もしくは鉈尾と考えられる。長さ2.55×2.4㎝、厚さ0.55、重さ7.8ｇ、蛇紋岩製である。滑石製石鍋が最も多く出土している（229 ～ 236）。229・230・231・232は縦方向の把手を有し、いずれもやや内湾気味の器形を有する。233・234・235は胴部から底部にかけての破片で、切断痕等の転用を指摘できる痕跡は認められない。口径または底径が復元できる４点（229・230・234・235）のうち230のみがやや形が小さく小型であるが、残る３点は法量的に近似すると考えられる。236は胴部片を用いた二次加工品であるが、未製品であると考えられる。

また、特異な例として埋土中のSC14と重複している付近の道状遺構床面より約12㎝上層において、土師器坏（176・177）を上下に重ねた中に、白磁碗Ⅳ類の口縁部（239）や胴部片など９片が納められた状態で出土した（第86図）。なお、白磁以外の遺物は検出されなかった。

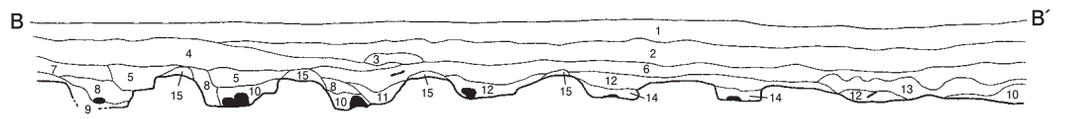
図版15　SE 1 （道状遺構）調査状況（東より）

SE1



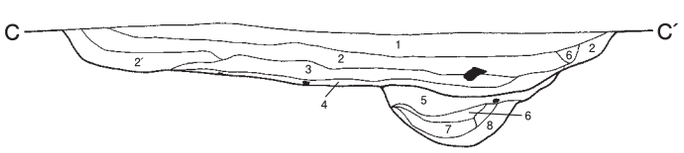
SE1−A
11 暗褐色土 少量の軽石･明褐色土粒 やや粘質
12 灰褐色土 多量の暗赤褐色土粒 少量のボラ･軽石 粘質
12´ 暗褐色土 12層より暗い (〃) きめ細か しまる
13 褐色土 微量の軽石 パサパサ
13´ 褐色土 13層に多量の明褐色土混
14 にぶい黄褐色土 少量のボラ粒･軽石 全体に強い赤み しまる
15 暗褐色土 明褐色土混
15´ 暗褐色土 15層より多くの明褐色土混
16 暗褐色土 多量の明褐色土粒 少量の黒色土粒 硬くしまる
a 暗褐色土 多量の明褐色土 2層に明褐色土粒を含む 硬くしまる
b 暗褐色土 黒褐色土混 硬くしまる
c 暗褐色土 多量の明褐色土 少量の黒褐色土粒子 硬くしまる
d 暗褐色土 暗赤褐色土混 硬くしまる
e 暗褐色土 部分的に多量の明褐色土 硬くしまる
f 暗褐色土 多量の灰褐色土 9層に類似
1 暗赤褐色土 少量の軽石(10〜20㎜) 全体に赤色(鉄分?)を帯びる パサパサ 硬くしまる
2 暗褐色土 多量の軽石･明褐色土粒(1層より多い) きめ細か 赤みを帯びる しまる

SE1



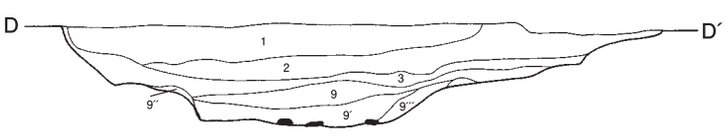
SE1−B
1 黒褐色土 少量の黄褐色･にぶい黄褐色土粒(10〜20㎜)･白色軽石(1〜5㎜) 斑点状にマンガンや鉄分 硬くしまる
2 暗褐色土 にぶい黄褐色土粒･白色軽石(1〜20㎜) 少量の炭化物 斑点状に多量のマンガンや鉄分 硬くしまる
3 灰黄褐色土 暗褐色･にぶい黄褐色土粒 砂質 硬くしまる
4 黒褐色土 少量の白色軽石･にぶい黄褐色土粒 斑点状に少量のマンガンや鉄分(1･2層よりややうすい) 硬くしまる
5 暗褐色土 少量の白色軽石･褐色土粒 斑点状に少量のマンガンや鉄分(3層より更にうすい) やや砂質 硬くしまる
6 暗褐色土 少量の白色軽石･褐色土粒 斑点状に少量のマンガンや鉄分(5層よりやや濃い) ややしまる
7 暗褐色土 6層と同じ 少量の白色軽石･褐色土粒 斑点状にマンガンや鉄分 やや砂質 ややしまる
8 暗褐色土 少量の白色軽石･にぶい褐色土粒 斑点状に多量のマンガンや鉄分 やや砂質 ややしまる
9 灰黄褐色土 斑点状にマンガンや鉄分 砂質が強い 硬くしまる
10 灰黄褐色土 多量のマンガン斑と少量の鉄分 やや砂質 硬くしまる
11 暗褐色土 やや砂質 ややしまる
12 暗褐色土 少量のにぶい黄褐色土粒 斑点状に鉄分 硬くしまる
13 暗褐色土 多量のにぶい黄褐色土粒･ブロック(10〜30㎜) 硬くしまる
14 黒褐色土 マンガン斑 やや砂質 硬くしまる
15 褐灰色土 斑点状に鉄分やマンガン やや砂質 硬くしまる
15 褐灰色土 多量のにぶい黄褐色土ブロック 斑点状に鉄分やマンガン やや砂質 硬くしまる

SE1



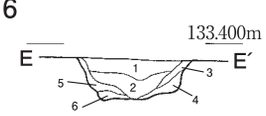
SE1−C
1 暗赤褐色土 少量の軽石(10〜20㎜) 全体に赤色(鉄分?)を帯びる パサパサ 硬くしまる
2 暗褐色土 多量の軽石･明褐色土粒(1層より多い) きめ細か 赤みを帯びる しまる
2´ 2層より混入物が少なく 赤みを帯びる 硬くしまる
3 暗褐色土 微量の軽石
4 暗褐色土 多量の褐色土 しまる
5 暗褐色土 微量の軽石やボラ粒 下層に多量の明褐色土粒 やや粘質 しまる
6 暗褐色土 多量の明褐色土粒(5層より多い) しまる
7 褐色土 明褐色土が多い 砂質強度 軟質
8 褐色土 部分的に暗褐色土混 遺物床面から出土 砂質気味 軟質

SE1



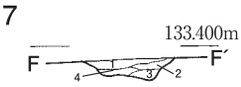
SE1−D
1 暗赤褐色土 少量の軽石(10〜20㎜) 全体に赤色(鉄分?)を帯びる パサパサ 硬くしまる
2 暗褐色土 多量の軽石･明褐色土粒(1層より多い) きめ細か 赤みを帯びる しまる
3 暗褐色土 微量の軽石
9 暗褐色土 多量の灰褐色土 少量の砂質土･軽石(1〜3㎜)
9´ 9層より灰褐色土が多い
9˝ 暗赤褐色土 粘質 しまる
9˝ 9層の中では最も赤みが強い やや粘質 しまる
10 暗赤褐色土 (道より古い溝の埋土) 少量の明褐色土粒 微量の軽石 粘質 しまる

SE16

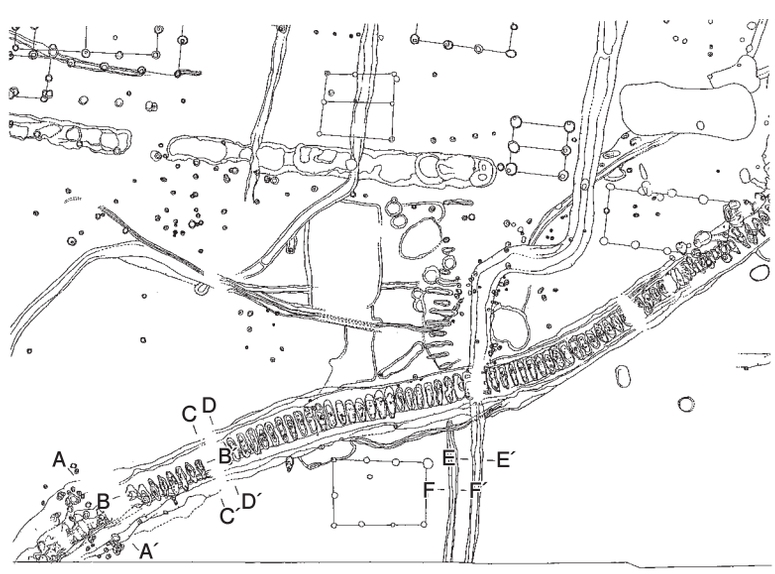


SE16−E
1 暗オリーブ褐色砂質土 砂質性 やや軟質
2 暗オリーブ褐色砂質土 1層と類似 ややオリーブ色強い やや軟質
3 オリーブ褐色砂質土 下部に微量の橙色軽石 やや軟質
4 オリーブ褐色砂質土 全体に多量の橙色軽石
5 オリーブ褐色砂質土 3層に類似 橙色軽石を含まない やや軟質
6 オリーブ褐色砂質土 4層に類似 橙色軽石は4層より少ない

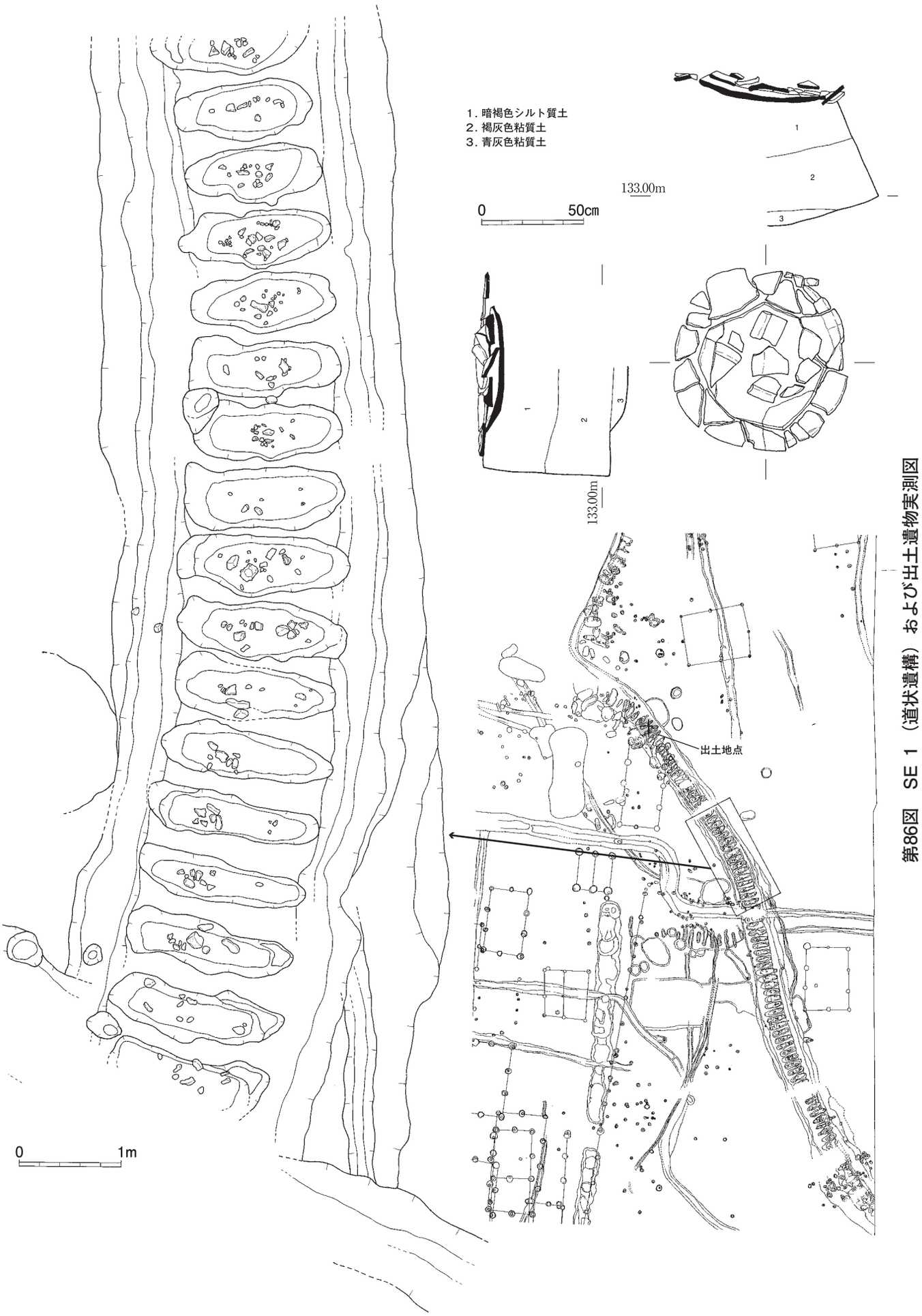
SE17



SE17−F
1 暗オリーブ褐色砂質土 砂質性
2 オリーブ褐色砂質土 微量の黄褐色土ブロック 砂質性 ややしまる
3 オリーブ褐色砂質土 多量の橙色軽石(3㎜以下) ややしまる
4 オリーブ褐色砂質土 2層と類似 色調明るい ややしまる



第85図　SE 1 （道状遺構）土層断面図



第86図　SE 1（道状遺構）および出土遺物実測図

図版16　SE 1 （道状遺構）調査状況

検出状況

土師器坏が被った状況

白磁片検出状況

土師器坏除去後

図版17　白磁片埋納状況

第２節　遺物の概要

遺物には、弥生時代、古代、中世、近世の遺物が出土した。ここでは古代・中世の土器類を中心に記述するが、遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁・白磁、青花、こね鉢、近世陶磁器磨石、砥石、敲石、石鎌、磨製石鏃、石庖丁、軽石製石製品、石製品、火打石、滑石製石鍋、鉄製品、鞴羽口、鉄滓、坩堝、紡錘車、土錘、石帯、硯、墨書土器がある。それぞれの遺物および接合状況については観察表を参照していただきたい。

１　土師器

土師器には甕・坏・高台付埦・鉢・皿・小皿・耳坏・大型土器（鉢・埦・皿）・黒色土器・甑が出土している。

甕形土器

甕形土器は、出土総重量165.4kgで、１個体約2.0kgとして仮定した場合、82個体分となり坏類など供膳形態に比べ少ない。

形態としては、口縁部が外に開き、胴部があまり張らず底部に至るものや下半部が張るものがみられ、底部は丸底を呈す。口縁部ではくの字状、短く外反するもの（厚手と薄手がある）、稜をもたず外方に開くものなどがある。そのほか口縁部が短く外反し、頸部下がやや張り下半部へ続く、口径に対し器高が低い鉢状になる形態の甕もみられる。

内外面の調整は、多くは外面ていねいなナデ、内面ヘラケズリを基本とするが、外面では工具による沈線状の横ナデのあと、縦方向あるいは斜め方向のナデが加えられ格子目状を呈す（42・1127・1129）やハケメ調整のもの（515・522・1109・1123・1128など）、格子目タタキ（345・528・529・1122・1130・1131など）、平行タタキ（531・1112など）がある。内面はナデ調整、ヘラミガキ、ヘラケズリの後にていねいなナデ調整がみられる。

さらに外面の調整においては、胴部上半部と下半部で調整の相違がみられるものがあり、特に前述した鉢状の甕では意識的に下半部にていねいなナデやタタキが施されている。

胎土では、ほとんどは土師器坏での淡橙色系（ＤＴ）をなすものが多く、ついで橙色系（Ｄ）（188・200・282・553など）、白色系（Ｗ）（253・341・518など）となり淡橙色系の白色粒を特徴とするＤ３と同じ胎土の甕（522・766・1109など）も出土している。

特徴的な遺物について記すと、137は鉢状をなし、外面上半部はナデ、下半部は丁寧なナデ調整がなされ上下に相違がみられる。内面はヘラケズリの後、ていねいなナデ調整。255は小型の鉢状をなし、胴部下半には細かなハケ目が施される。42・1127・1129は外面に工具による沈線状の横ナデのあと、縦方向あるいは斜め方向のナデが加えられ格子目状を呈す。522は外面上半部縦方向のハケ目、下半部では横あるいは斜め方向のハケメ調整。内面ていねいなナデ調整。1128は外面ハケ目、内面ヘラケズリ。345・528・529・1130・1131は外面格子目タタキで、胎土も大粒の砂粒は少なく、硬質である。310は内面がナデ調整。522は外面はハケメ、内面はヘラケズリのあとナデ。1122は胴部下半に格子目タタキが施される。531・1112は外面平行タタキ、内面ナデ調整。405は外面に縦方向の平行タタキで部分的に横方向の平行タタキが施される。1121・1123・1127・1140は硬質で、浅橙色をなし、薄手である。1123は外面は縦方向の後横方向のハケメ調整。1126は外面横ナデ、内面はヘラミガキの可能性がある。そのほか、308は厚手の平底で器形は洗面器上の深鉢の可能性がある。内外面ともナデ調整で、底部外面周辺部にヘラ状工具による刺突が施される。78・343・344は薄手で小型の形態となるもので、344には外面にススが付着。533は薄手で、外面に施された深めのナデ調整により複数の突帯状を呈す。大粒の砂粒は含まない。

坏

土師器の坏が、本遺跡では最も多く出土し、総重量271.65kgを測る。なお、体部片については、埦・鉢なども含まれるかもしれないが、ここでは坏として計測を行った。古代に含まれるものは、ほとんどが池状遺構や包含層から出土し、土坑やピットからの出土は少ない。坏の底部切り離しはヘラ切りで、その後ナデ調整や板目が残るものなどある。また、体部は回転ナデによる調整だが、ミガキ（1161・1205）や体部下半部にヘラケズリ状に面取りされるものもある。さらに、墨書土器・線刻土器、内面にモミ圧痕が残るもの（1215）や坏の内外面（557・588）に黒色の付着物が観察できるものがあり、分析結果により漆の可能性のあることが判明している。

坏については、出土量が多いことから形態を中心に分類を行い、XⅢ類に大別し、底部の形態や体部の開き具合などによってさらに細分した。なお、遺物については主なものについて番号を記載した。

坏類（第87図）

Ⅰ類：底部と体部の境があまりシャープでなく体部が外方に開くもので、底部は平底を呈し、底部内面もあまり凹凸がない（口径11.5 ～ 13.7㎝、底径5.0 ～ 8.7㎝、器高4.1 ～ 5.7㎝）

a 類：体部が外方に直線的に延び、やや外反気味に開く（26・90・346・454・459・535 ～ 539・1141 ～ 1143）

b 類：直線的に開く（283・407・416・541 ～ 543）

c 類：口径がやや大きく底部内面が凹凸をなす（544 ～ 547）

d 類：外面に成形時の凹凸を残すもの（63・417・548・1144・1145）

e 類：厚手のもの（637・638）

Ⅱ類：底部が平底を呈し、体部が内湾しながら延び、底部内面が中央に向かってやや薄手となるもの（口径10.7 ～ 17.5㎝、底径4.4 ～ 8.1㎝、器高4.3 ～ 5.4㎝）

a 類：やや厚手なもの（550 ～ 553・617）

b 類：薄手のもの（170・554 ～ 556・1150）

c 類：底部と体部の境が丸みをおびる（557・558・1151）

Ⅲ類：底部と体部の境部分がやや厚手で、底部中央部分が上げ底状をなし薄くなるもの（口径11.8 ～ 14.4㎝、底径5.0 ～ 8.2㎝、器高4.1 ～ 5.1㎝）

a 類：体部が大きく外方に開くもの（17・114・285・321・325・560）

b 類：厚手の体部が内湾気味に開くもの（562・563）

c 類：体部が直線的に開くもの（27・104・284・390・443・479・564・566・639・1071・1177）

Ⅳ類：底部と体部の境がシャープで直線的に体部が延び、外面に凹凸を残す（口径11.4 ～ 13.8㎝、底径4.2 ～ 7.4㎝、器高4.3 ～ 5.4㎝）

a 類：Ⅲ類より体部が薄手（３・43・119・324・574 ～ 576）

b 類：側面が台形状をなし、底部中央が薄くなるもの（577 ～ 579・589・1156）

Ⅴ類：平底の底部で、体部下半が膨らみを有しながら外方にのびる（口径11.7 ～ 15.1㎝、底径4.8 ～ 8.1㎝、器高4.0 ～ 6.0㎝）

a 類：口縁部が外反し、器高が高いもの（31・80・111・419・460・590 ～ 592・1158・1159・1160）

b 類：ａ類より器高が低いもの（409・420・594 ～ 596・1162・1161）

Ⅵ類：口径に対し底径が小さいもの（口径10.1 ～ 14.2㎝、底径3.8 ～ 6.9㎝、器高4.2 ～ 6.3㎝）

a 類：口縁部が外反するもの（１・598 ～ 603・618・1073・1163）

b 類：体部が直線的に開くもの（21・461・462・606 ～ 610）

c 類：体部が内湾気味に開くもの（57・410・411・615・616・1165・1166・1167）

d 類：境がシャープで大型のもの（421・620 ～ 625）

e 類：境がシャープで厚手の底部を有するもの（287・626・627）

f 類：底部中央が上げ底で薄くなるもの（628 ～ 630）

g 類：底部が脚台状をなすもの（631 ～ 634）

h 類：底部が厚手で、底部から丸みをおびながら立ち上がる（638・1174 ～ 1176）

Ⅶ類：底部が円盤脚台状を呈するもので、体部の状況（外反・直線・内湾）や器高によって細分される（口径11.9 ～ 15.2㎝、底径5.3 ～ 9.4㎝、器高4.7 ～ 7.0㎝）

a 類：底部が大きく外方に張り出すもの

１：体部が外反するもの（641・642・643・1181）

２：直線的にのびるもの（288・456・467・644・645）

３：内湾するもの（649・650）

４：器高が低く皿状をなすもの（651）

５：器高が高く鉢状をなすもの（652）

b 類：a 類より張らず脚台状をなすもの

１：体部が外反するもの（468・653）

２：直線的にのびるもの（655 ～ 657）

３：内湾するもの（326・658）

Ⅷ類：やや厚手の平底で体部との境に段を有する（口径11.6 ～ 14.0㎝、底径5.0 ～ 8.2㎝、器高4.2 ～ 5.8㎝）（118・120・286・297・329・459・660 ～ 664・669・671・672・1189・1190）

Ⅸ類：平底の底部で外方に体部が開く（口径12.0 ～ 12.6㎝、底径5.5 ～ 6.3㎝、器高4.5 ～ 5.4㎝）（291・292・330・412・667・668・673・1195）

Ⅹ類：薄手のもの（口径12.0 ～ 12.6㎝、底径5.5 ～ 6.3㎝、器高4.2 ～ 5.8㎝）（331・680）

Ⅺ類：底部が丸底気味で椀に近い（口径11.5 ～ 12.2㎝、底径5.0 ～ 7.4㎝、器高5.0 ～ 7.4㎝）（105・1198）

Ⅻ類：体部が外方に開き、器高が高く鉢に近い（口径12.2 ～ 12.7㎝、底径4.1 ～ 4.3㎝、器高4.1 ～ 4.3㎝）（686・1074）

ⅩⅢ類：口縁部が大きく開くが、底径に比べ器高が低いもの

a 類：底部がヘラによる切り離しのもの（口径16.5 ～ 16.6㎝、底径7.1 ～ 10.1㎝、器高4.7 ～ 5.4㎝）（103・109・143・144・176・177・1225・1226・1231）

b 類：底部が糸による切り離しのもの（口径14.9 ～ 15.9㎝、底径7.1 ～ 10.8㎝、器高3.6 ～ 4.4㎝）（141・142・178・1230・1232 ～ 1235・1237）

Ⅰ類では、a 類が口径が12㎝前後と13㎝前後に、b 類は12㎝、c 類は13㎝、d 類は12㎝と13㎝、e 類は13㎝にそれぞれ分かれる。器高は4.1 ～ 5.0㎝に収まるが、e 類は６㎝まで高くなるものもある。底径では d 類が5.7 ～ 8.2㎝と幅広い。Ⅱ類は内湾しながら延びる形態で、a 類は口径11.2 ～ 12.0㎝、底径5.4 ～ 6.4㎝、器高4.4 ～ 5.0㎝、b 類が口径10.7㎝、底径4.4㎝、器高4.25㎝、c 類が口径11.2 ～ 12.0㎝、底径5.9 ～ 6.1㎝、器高4.4㎝を測り、b・c 類に比べ a 類がやや大きくなる。Ⅲ類は口径でみると a 類が13㎝・14㎝、b 類が13㎝前後、c 類が12㎝・13㎝・14㎝に分かれる。Ⅳ類は底部と体部との境が明瞭で、b 類は特にシャープである。a 類が口径12.4 ～ 12.8㎝、底径5.5 ～ 6.3㎝、器高4.5 ～ 5.1㎝、b 類は口径12.2 ～ 13.8㎝、底径6.1 ～ 6.6㎝、器高4.2 ～ 5.3㎝で b 類がやや大きくなる。Ⅴ類は体部下半が外反し、上半部が内湾しながら体部が延び

る形態で、口径11.9～13.7cm、底径5.4～6.7cm、器高4.5～5.9cm、ｂ類は口径11.7～15.1cm、底径5.2～8.1cm、器高3.9～5.9cmと幅広い。Ⅵａ～ｇ類は、口径が10～11cmと小さくなるが、Ⅵａ類については、13～14cm、ｄ類では14cm代も存在する。Ⅶ類は円盤状高台を有するもので、形態上底径は6.3cm～9.35cmと大きい。器高は、4.7～7.0cmと幅広く５cm前後、６cm代、７cm前後に分かれ、口径11.8～15.2cmと幅広く、Ⅶａ－３類とした649は11.8cmと小さく、それ以外は14～15cm代のものが多い。ｂ類は口径13.0～14.0cm、器高5.2～5.8cmに収まる。Ⅷ類は口径において11cm・12cm・13cmに分かれ、口径が大きくなるにつれて底径も広くなる。Ⅸ類は口径において12cm・13cm・14cmに分かれるが、器高・底径に大きな変化はみられない。Ｘ類は口径12cmと13cmがあり、ＸⅠ類は口径11cm・12cmで底径がⅨ類と比較し5.5～5.8cmと小さくなる。ＸⅡ類は完形に復元できるものはないが他の坏より器高が高い。ＸⅢ類は口径14.9～16.5cm、底径7.1～9.9cm、器高3.6～4.4cmと他の坏類とは法量に大きな相違がみられる。

埦（第88図）

埦は、完形に復元できるものが少なく、高台が付くもの（Ⅰ類～Ⅵ類）とそうでないもの（Ⅶ類・Ⅷ類）とに分かれ、出土した多くは前者が占めていると想定される。出土総重量は37.81kgだが、体部については坏類として計測したことから、実際はもう少し増加する。170点を図示した。調整は体部、高台ともナデだが、ミガキが施されるものや高台内に放射状の圧痕を残すもの19点（20・59・110・393など）や、見込みや高台内に線刻があるもの（183・1264・1278・1301・1303・1304）、少量ではあるが板目（69・696）やワラなどの植物の痕跡が残るもの（709）が出土している。また、見込みに布痕を有するものが５点（426・1249・1253・1285・1296）出土し、その中の426を観察すると、布痕は一部内面体部の立ち上がりまで認められる。体部および見込み周辺部においては強くナデ調整が行われ布痕は消えるが、見込み中心部付近はそれほどしっかりしたナデが行われなかったことにより布痕が残ったと考えられる。見込み部分のみ残り、体部内面までは広がらない。布痕によって高台付埦の型作りも併用されていたことも想定される。そのほか墨書土器が１点（694）ある。

Ⅰ類：側面が台形状をなす。坏Ⅰ類に類似する（口径14.0cm）

ａ類：体部がやや薄手（691）

ｂ類：体部が厚手となる（692・1238）

Ⅱ類：体部下半が屈曲し外方にのびる。坏Ⅴ類に類似する（693）（口径14.4cm）

Ⅲ類：Ⅰ類に比べ、底径が小さく、体部が長い。坏Ⅳ類に類似（口径13.8～15.5cm、底径7.2～8.2cm、器高6.0～7.7cm）

ａ類：体部が内湾しながらのびる（65・426・694）

ｂ類：直線的に開く（695）

ｃ類：底部・体部とも厚手である（299・1239）

Ⅳ類：体部外面に調整の凹凸を残し、体部が内湾する。坏Ⅵｄ～ｆ類に類似する（口径12.0～13.7cm、底径6.6～7.8cm、器高5.6～6.3cm）

ａ類：器高が低く、口縁端部が細い（696）

ｂ類：器高が高く、やや厚手（697・698・1240）

ｃ類：口径が大きいもの（444）

Ⅴ類：器高が高く、外方に大きく開く（口径13.0～16.1cm、底径7.1～8.7cm、器高6.6～8.7cm）坏Ⅶ類に類似する

ａ類：直線的に開く（106・186・300・415・703・1241）

b類：大型のもの（704）

c類：体部が外反するもの（95・705・706）

Ⅵ類：体部が内湾し、湾状をなすもの（口径13.6 ～ 16.2㎝、底径6.0 ～ 7.8㎝、器高5.7 ～ 6.2㎝）

a類：口縁部が内湾しながら垂直気味に立ち上がるもの（707・1242）

b類：体部が外方にのびるもの（124・427）

Ⅶ類:口径と底径の差がなく、体部が垂直気味に立ち上がるもの（708）（口径11.8㎝、底径8.0㎝、器高5.0㎝）

Ⅷ類：坏に似るが、大きさや底部の厚さ、体部調整などにより鉢に分類した。

a類：厚手の底部でやや大型である（709）（口径12.9㎝、底径7.2㎝、器高5.45㎝）

b類：a類より小型である（710）（口径8.9㎝）

c類：器高が低く。体部が外方に開く（1243）（口径.9.7㎝、底径4.9㎝、器高3.3㎝）

高台付埦の高台部分が多く出土しているが、前に述べた埦の分類には取り上げられないものが多いため、ここで高台についての分類を行っておきたい。大きくは13に分類できた。１類は底部と体部との境より内側に高台がつき、高台は低く外方に張る。２類は短く外方に開くタイプで先端が丸いもの（ａ）、先が細くなるもの（ｂ）、やや長めになるもの（ｃ）、厚手のもの（ｄ）、３類はしっかりとした高台で長めのもの（ａ）、短くなるもの（ｂ）、４類は高台内が調整によって大きく窪むもの、５類は薄手で端部が外方に開くもの（ａ）、先が細くなりやや内湾気味のもの（ｂ）、６類は高台内が丸く仕上げられるタイプで長くのびるもの（ａ）、高台からそのまま三角形状をなすもの（ｂ）、７類は底部と体部の境が不明瞭な部分に高台が貼り付けられるもの、８類は大型で長くのびるもの、９類は体部からそのまま下方に高台がのびるもので底径が小さい、10類・11類は高台が小さく三角形を呈する（10類）、丸みをもつもの（11類）、12類はわずかな高さをなすもの、13類は内湾気味にのびるものがある。高台付埦Ⅰ～Ⅵ類についてみてみると、Ⅲ類には③ａ・②ａ・②ｄ、Ⅳ類には③ａ②ａ・②ｃ・⑤ａ、Ⅴ類には②ａ・⑥ａ・⑦・⑧、Ⅵ類には②ｂ・⑤ａという関係がみられるが、高台として分類したものの多くは体部形態との相関関係を捉えることはできなかった。

鉢・皿・小皿・耳坏（第87・88図）

鉢や皿の出土量は破片では認定できないこともあり少ない。鉢は口縁部が外反し体部がやや張る甕に類似したもの（430・743）や直行する口縁部を有する深鉢状のもの（108・1201）がみられる。そのほか土師器坏Ⅻ類にしたものも鉢に近い。皿は平底で口縁部が大きく開くもの（744）や高台が付くもの（745など）がある。小皿は、底部切り離しにヘラ切りと糸切りがある。ヘラ切りは口径7.2 ～ 9.8㎝、底径5.8 ～ 7.4㎝、器高1.2 ～ 2.0㎝を測る。体部がやや厚手で外方にのびるもの（71・309・1222）、薄手で内湾するもの（179・180・1216・1219・1223）があり、1222は底部がやや凸レンズ状をなす。ＳＥ１・４やＳＢ18の柱穴から出土している。糸切りは口径7.2 ～ 8.8㎝、底径5.6 ～ 7.15㎝、器高1.25 ～ 1.8㎝を測り、厚手の体部のもの（1217・1220）や、薄手で内湾するもの（1221・1227）がある。すべて包含層からの出土である。そのほか耳皿も出土している。高台付耳坏は747・748の２点が池状遺構から出土したが、同一個体の可能性もある。

大型鉢（第88図）

出土総重量は10.69㎏大型鉢は五つに分類できる。Ⅰ類は平底をなしそのまま上方にのびる体部をもつもの（401・752・1312）、Ⅱ類は脚が付き、鉢状をなすと想定され、体部外面に横ナデ調整の凹凸が残り厚手である（753 ～ 759など）。753・755・759は同一個体と考えられる。314は脚部に透かしを有する。Ⅲ類は坏部が内湾しながら外方にのび、口縁部が短く外反し、脚は外方にのびる（762・764）。Ⅳ類は底部の径は大

きく、薄手となり、脚は長く外反する（765 ～ 768）。Ｖ類は坏部が皿状をなす（770 ～ 774など）。そのほか、透かしを有するものもある（Ⅵ類）。314は大きさは不明だが脚部に透かしを有し、772は長い脚に円形の透かしが施される。多くが池状遺構から出土し、溝状遺構（ＳＥ３・５・７・10）や包含層からも出土しているが非常に少ないが、溝状遺構と包含層出土が接合した例もみられる。胎土は土師器坏の淡橙色系に近いものや、砂粒を多く含むものがある。

黒色土器（第89図）

黒色土器には坏・高台付埦・鉢・甕が出土しているが、ほとんどは破片で完形に復元できるものは少ない。出土総重量は坏類・高台付埦合わせて22.44kg。高台付埦の多くは内面のみ黒色となるＡ類で、内外面とも黒色となるＢ類は坏・高台付埦に少量確認される。出土分布状況は屋敷地内の池状遺構をはじめとする柱穴や溝状遺構のほか区画溝ＳＥ２の南側から多く出土し、くぼ地や調査区東部からも少量であるが出土している。

坏（Ｉ類）は完全な形態は不明であるが平底をなし外方に体部がのびるもので、底部と体部の境が明瞭なもの（ａ：1320 ～ 1322）、厚手のもの（ｂ：431・1323）、薄手で底部と体部の境が不明瞭なもの（ｃ：1324）、底部が円盤状をなすもの（ｄ：755 ～ 779・1325）、底部が外方に張り出すもの（ｅ：780・1326・1327）がある。資料は少ないが、口径は11.1㎝と12.7㎝の２点で、底径は5.8 ～ 7.6㎝、器高は２点で4.55㎝と6.05㎝。

高台付埦は次のように分かれる。

Ⅱ類：体部が外方にのびる（781）（口径13.3㎝）

Ⅲ類：体部外面に凹凸を残し、やや内湾気味に体部が開く（ａ：782 ～ 784口径13.4 ～ 13.6㎝、高台径6.05 ～ 6.75㎝、器高5.5 ～ 5.7㎝）もの、厚手で大きく開く（ｂ：785・786口径13.0 ～ 16.0㎝）、やや内湾気味に開き深くなる（ｃ：787口径15.5㎝、高台径7.9㎝、器高6.9㎝）

Ⅳ類：厚手で、直線的に開く（304 ～ 307･479･1327）（口径13.9 ～ 14.5㎝、高台径7.1 ～ 8.2㎝、器高5.9 ～ 6.8㎝）

Ⅴ類：体部は内湾しながらのび、口縁部がやや薄手となる（788・1329）、口径13.8㎝と16.0㎝の二つに分かれる

Ⅵ類：体部は内湾するが口縁端部が外反する（789）（口径14.8㎝、底径7.9㎝）

Ⅶ類：口縁部が外反する（790・791）（口径13.0㎝と15.3㎝、器高7.05㎝）

Ⅷ類：埦状に内湾しながらのびる（792・1330）（口径12.4㎝）

Ⅸ類：厚手で凹凸のある調整が施され口縁部は直立気味にのびる（793 ～ 795）（口径15.1㎝）

Ⅹ類：器高が高く、底部は厚手（431）（口径15.1㎝）

Ⅳ類～Ⅷ類については、底部と体部との境が不明瞭で外方に大きく開く。また、Ⅸ類は他の埦に比べ形態や厚味に違いがあることから、鉢に分類した方がいいかもしれない。形態ごとの出土量では、Ｉ類に比較して埦が圧倒的に多く、遺構別では柱穴や溝状遺構からの出土は少なく、池状遺構や包含層が大部分を占める。土師器坏や埦と形態を比較すると黒色土器Ｉａと坏Ｉｃ、黒色土器Ｉｄと坏Ⅶ、黒色土器Ⅲと埦Ⅲａ、黒色土器Ⅳと埦Ⅳあるいは Ｖと類似するが、胎土については異なる。

完形に復元できない資料も多いため、出土量の多い高台を形態分類行うと下記のようになる。高①：しっかりした高台、高②：外方に長くのびるもの（長さ・厚みなどにより四つに分類可能）、高③：高台先端部が先細りとなり底径が小さい、高④：高台内が滑らかに調整されるもの、高⑤：高台が高いもの、高⑥：高台が低く、内面が扁平なレンズ状をなすもの、などがある。このなかで、高④と高⑥は池状遺構から出土せず、ＳＥ１など時期が下る遺構から出土していることから、他のものとの時期差が想定される。

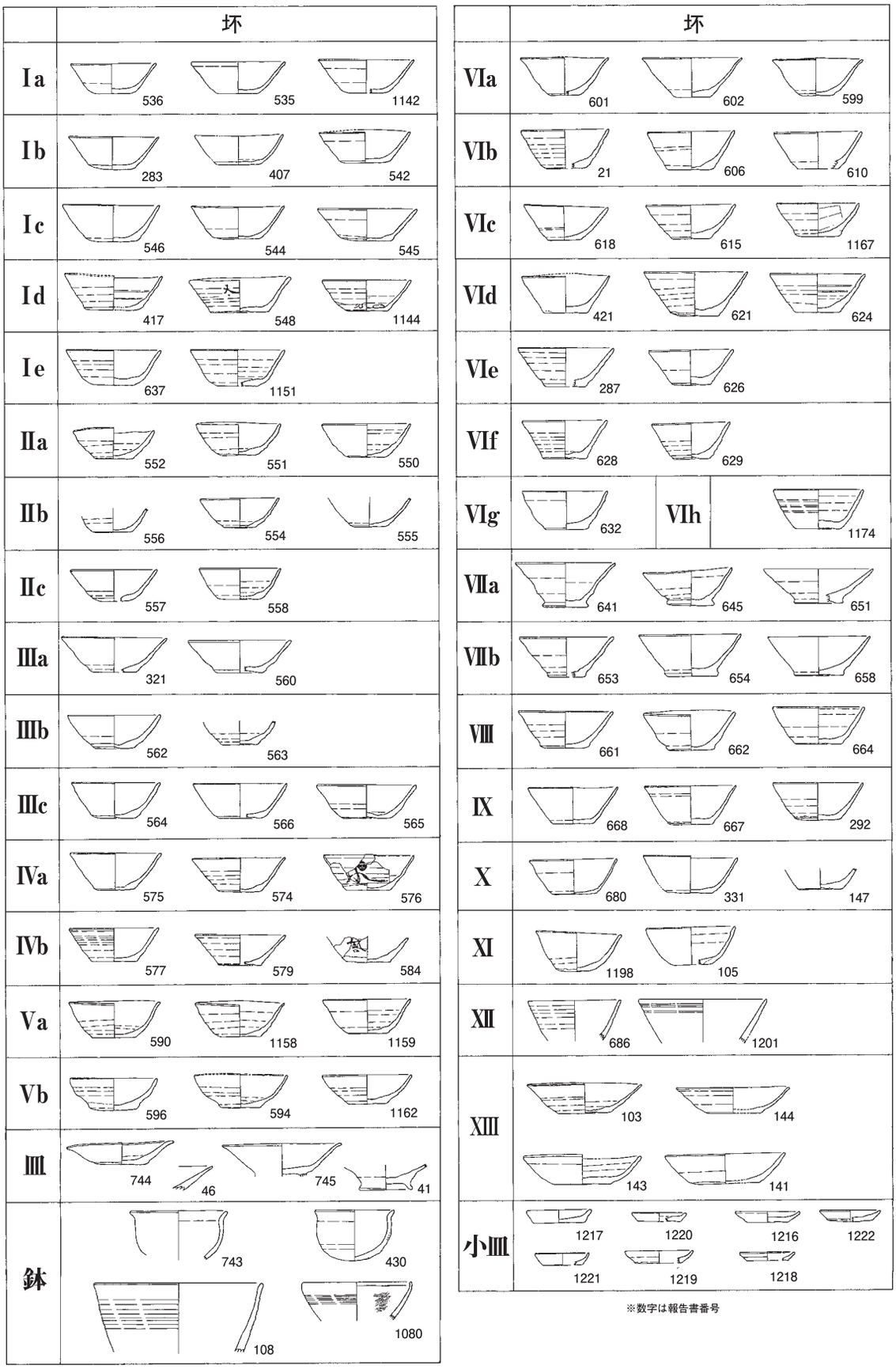
法量は、計測可能な資料が少ないものの形態分類に関係なく口径や底径では幅広い分布状況がみられる。また、高台分類では、高①は5.8㎝と8.2㎝、高②は6.8 ～ 8.2㎝と幅広くあり、高③も4.5 ～ 7.6㎝、高④は5.5㎝・7.2㎝・8.2㎝の三つに、高⑤は6.7㎝・7.8㎝・９㎝前後に、高⑥は5.8㎝・6.5㎝・７㎝代・8.0㎝に分かれる。完形品と関係はⅢ類は③ｃ、Ⅳ類は②となるが、土師器埦と同様体部形態を復元できるものは少ない。

その他、鉢は体部が直立気味にのびる深鉢の形態をなし、その他に甕や脚を有する大型の鉢もある。

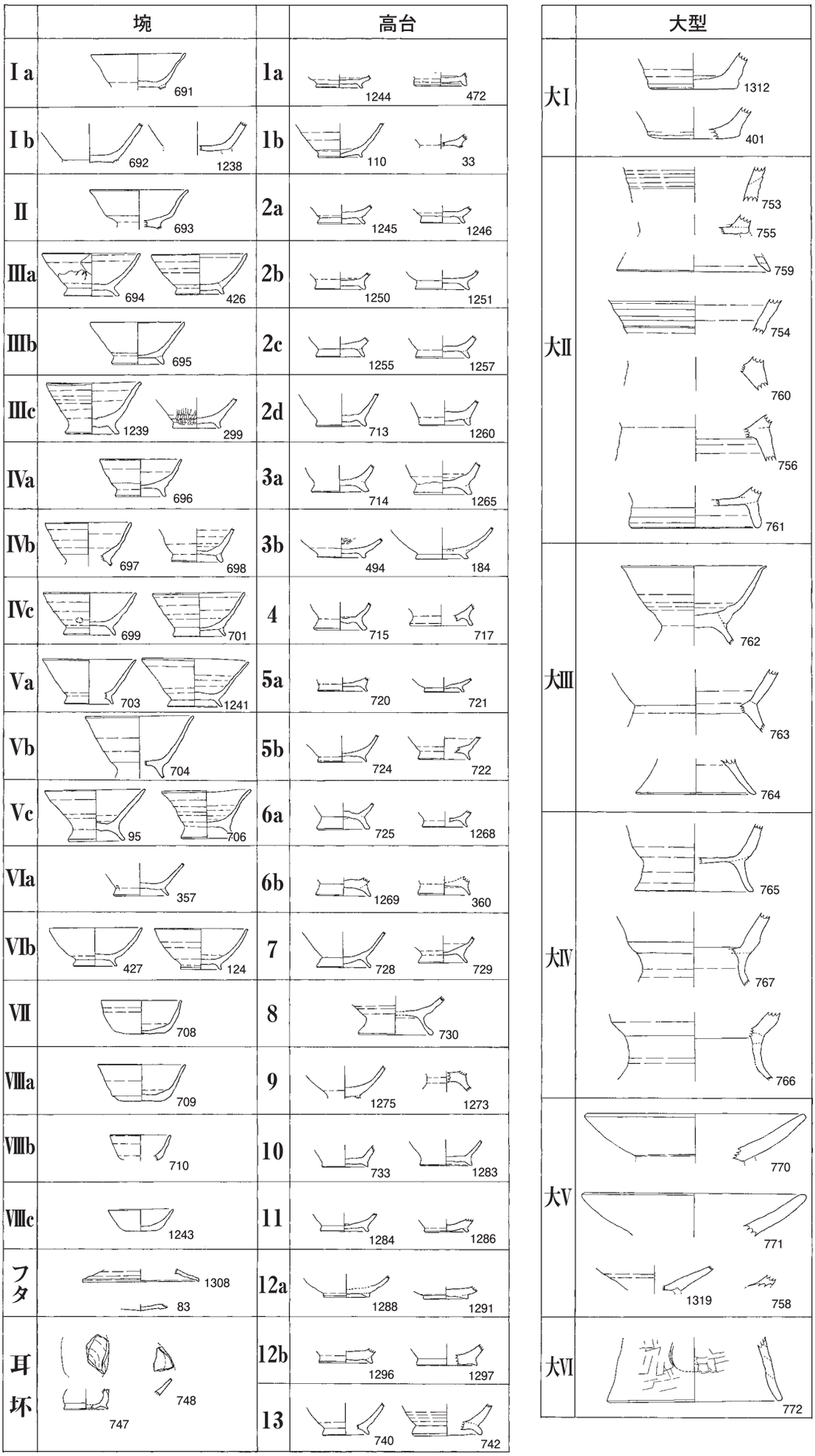
黒色土器の接合関係では須恵器のような離れた地点での接合は認められない。個別の特徴的なものについて記すと、９は硬質で須恵器に近い、304は体部外面下半にヘラ削りが残り、305ではヘラ削りの後ミガキが施される状況がみられる。また、477・796・1327・1339は高台内に坏でみられた放射状の痕跡が認められるものや1331は高台内に線刻および原体等による刺突が施される。そのほか高台内の調整で丁寧に仕上げられ平坦なものや凹凸が残るものなどある。822は、甕あるいは鉢の脚で、四角に面取りされ外方にやや開くと考えられる。現存長15.2㎝、厚さ約5.8㎝を測る。

甑

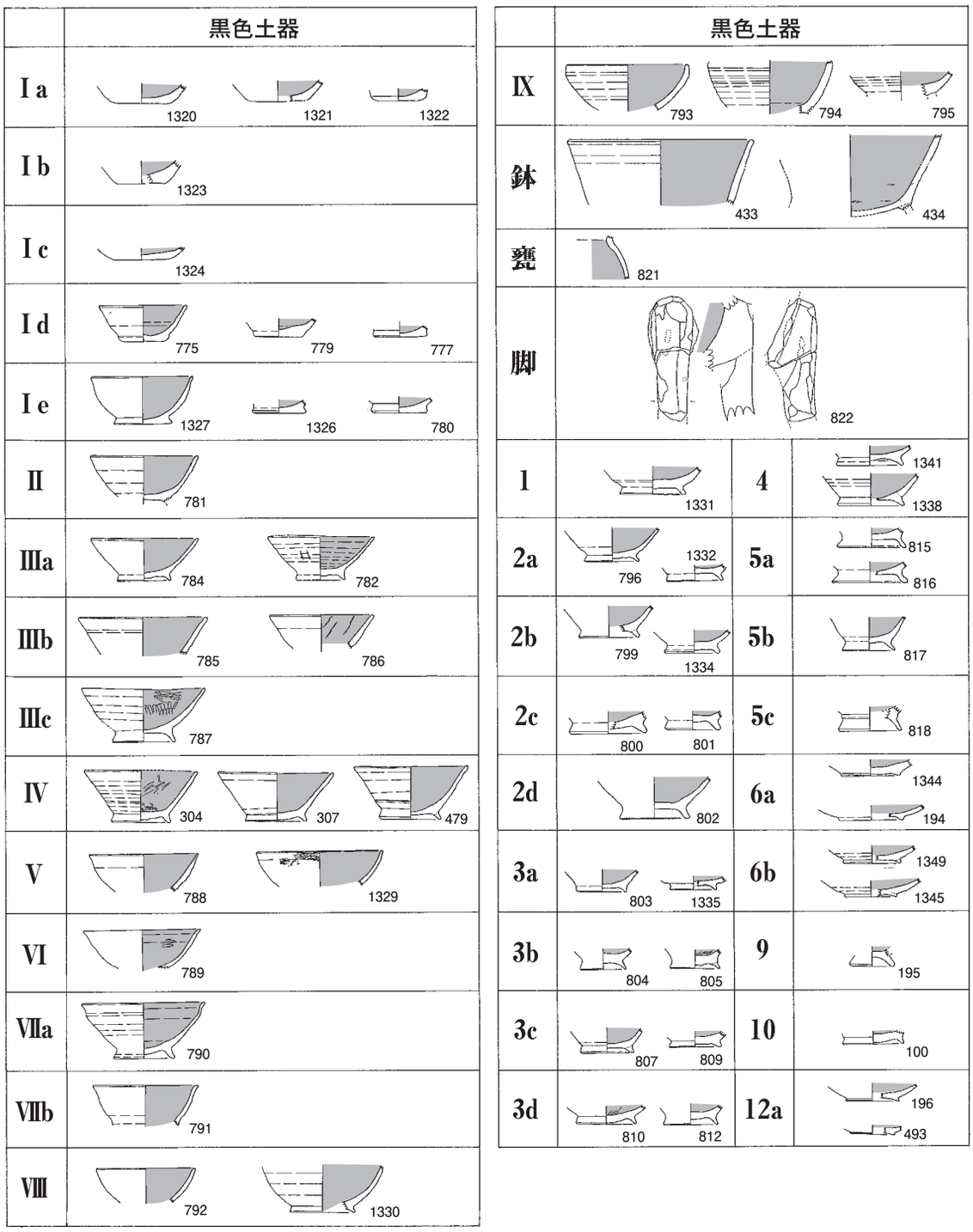
200は甑の下半部と考えられる。端部は肥厚しやや直立気味に体部へつづく。ススなどは確認できなかった。1051は甑の把手部分と考えられる。



第87図　土師器形態分類図



第88図　土師器椀および大型鉢形態分類図



第89図　黒色土器形態分類図

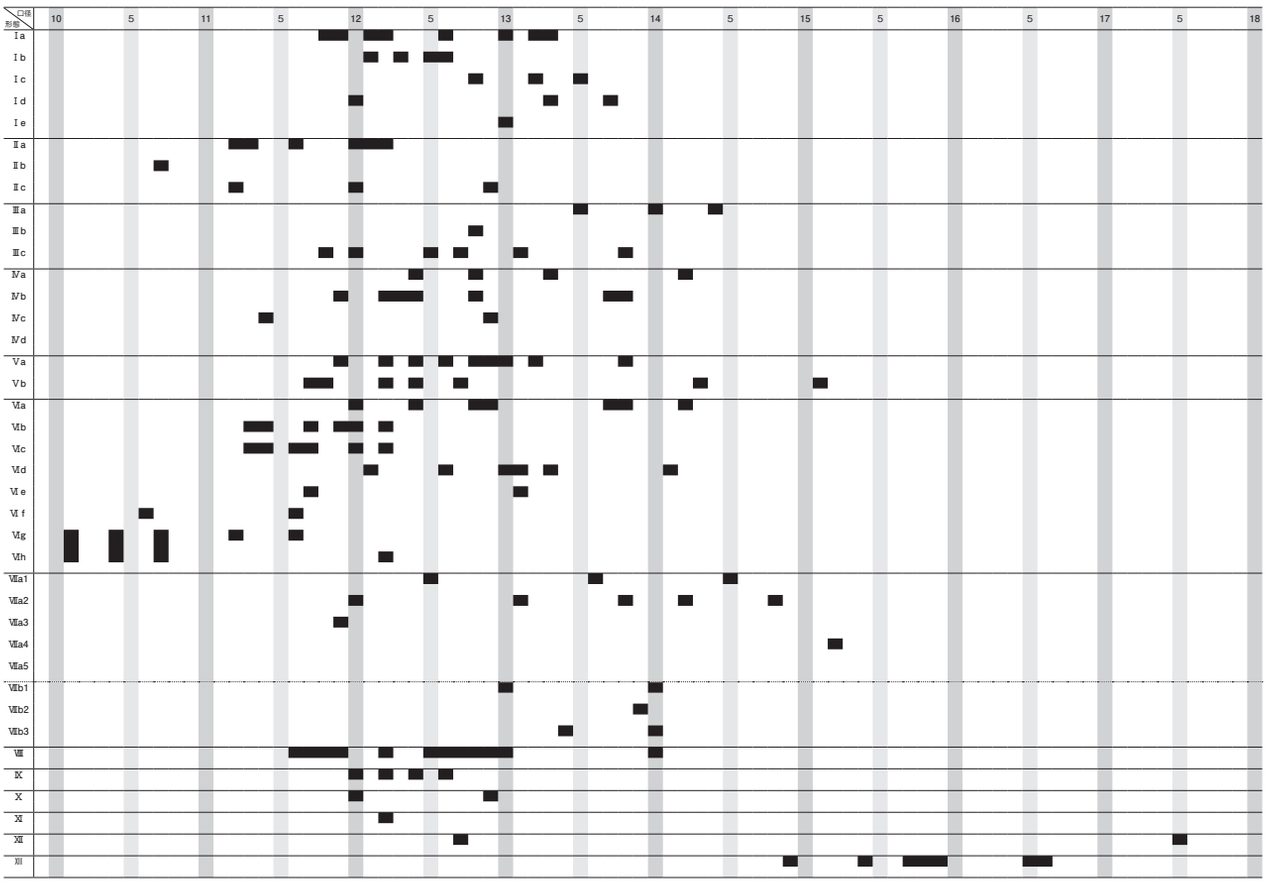


表５　土師器坏法量表（口径）

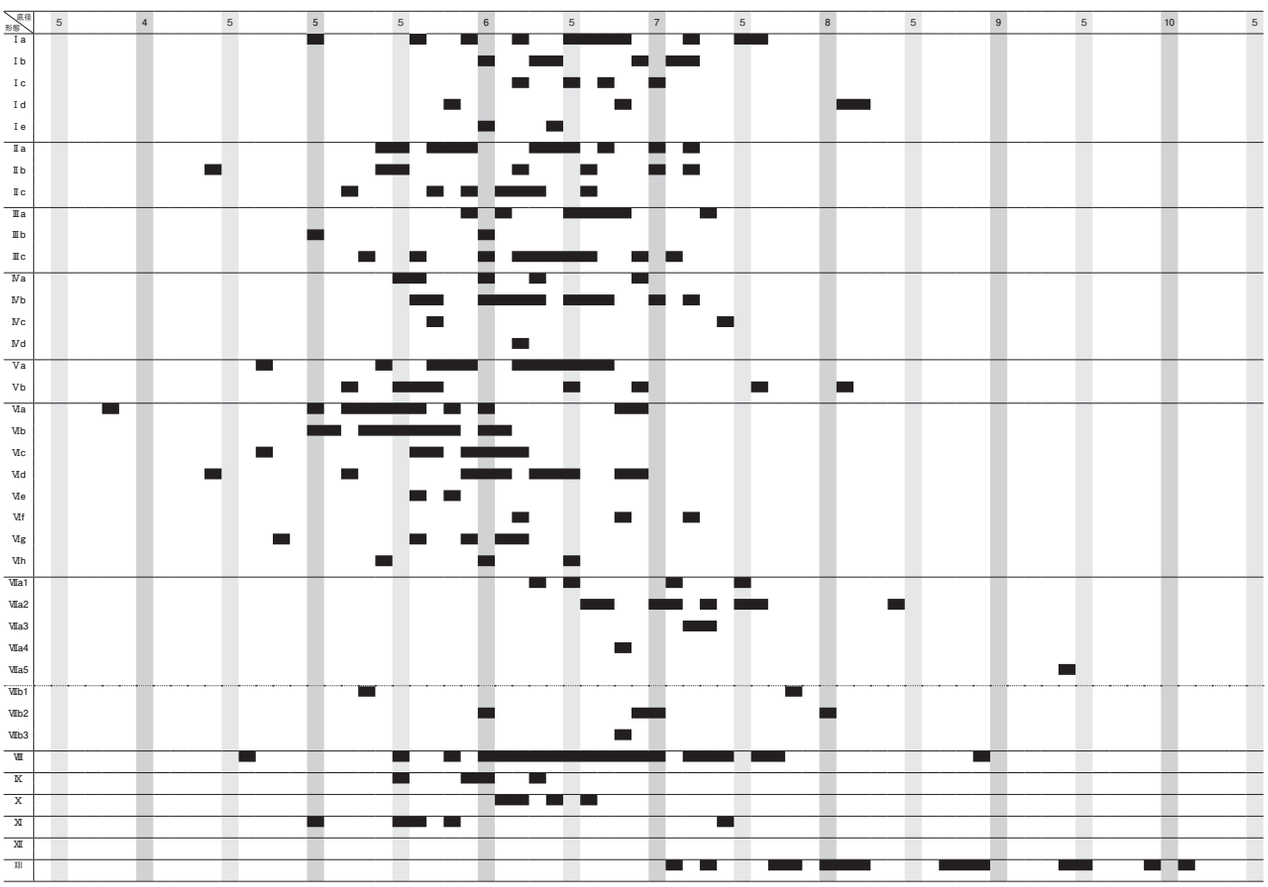


表６　土師器坏法量表（底径）

布痕土器

布痕土器は、掘立柱建物跡や溝状遺構、池状遺構、包含層から出土するが、完形に復元できるものはない。総重量7.803kgを測る。布痕土器は円錐状をなし底部は尖底となり、口縁部はヘラなどの工具により面取されているものや先細りする形態がみられる。また、内面の布痕においても目の細かなものから粗いものがある。

紡錘車

３点出土し、1002は池状遺構からで、1643・1644は包含層からである。1002は径6.7㎝、最大厚1.05㎝、孔の径は0.9㎝、重さ51ｇ、643は径6.85㎝、最大厚0.95㎝、孔の径は0.85㎝、重さ37.6ｇ、1644は約1/2が欠損し、推定径5.2㎝、現存厚1.0㎝、推定孔1.0㎝、現存重量11.8ｇを測る。すべて土師器坏の底部を再利用したと考えられる。

土　錘

土錘は83点出土した。重量と最大幅の法量をみると、重量10ｇ前後・幅１～２㎝（ａ類）と重量10～30ｇ・幅２～３㎝（ｂ類）と重量40ｇ～70ｇ・幅3～4.5㎝（ｃ類）の大きく三つに分けられるが、調整や両端の仕上げなどの状況からａ・ｂ類は大小の差のみで類似し、ｃ類と区別できる。出土量ではａ、ｃ、ｂの順となる。胎土は、土師器坏の白色系のものが多く、c類はすべてそれで、a・b類では淡橙色系のものもある。分布状況は、ｃ類は池状遺構、SB １と包含層からのみで、ａ・ｂ類は各遺構から出土している。また、池状遺構ではａ・ｂ・ｃ類すべてが出土し、SC12ではａ類のみ６点がまとまって出土している。

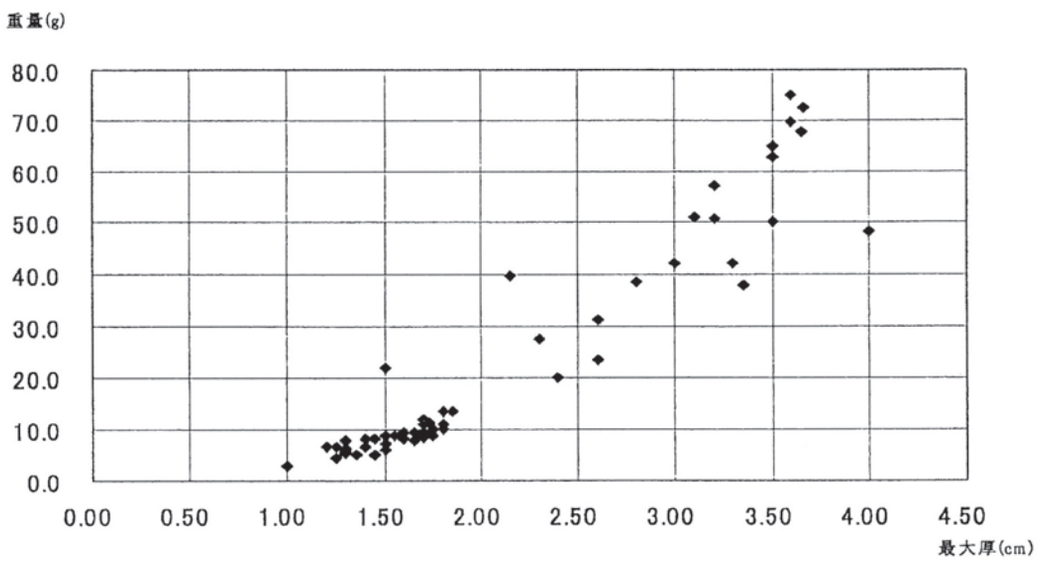


表７　土錘法量表

土師器坏・埦・黒色土器の胎土について

土師器坏を中心に胎土をみると、色調と胎土の含有物により分類可能である。色調では、一つは橙色系を呈し、粉っぽく水に溶けるような胎土で、風化等によって断面が丸くなり、調整等も判読不明なものが多い（Ｄ類）。二つ目は淡橙（淡黄）色をなし、橙色系よりは焼成は良好である（Ｔ類）。三つ目は白色系で砂粒等はあまり含まれず、三つの中ではもっとも焼成は良好なもの（W類）がある。また、胎土の含有物では、大きくは粉っぽく、砂粒はほとんど含まれないもの（Ⅰ類）、１～５㎜程度の小石を含むもの（Ⅱ類）、熱により赤褐色に変色したボラ粒を含むもの（Ⅲ類）、白い軽石（AT起源か？）を含むもの（Ⅳ類）、火山ガラスを含み表面がキラキラしているもの（Ⅴ類）に分類可能である。色調との関係では、Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ類はすべての色調でみられ、Ⅲ・Ⅳ類はＤ類とＴ類のみである。土師器坏でＴ類のものがもっとも多く出土（出土総重量143.23kg）し、Ｄ類（出土総重量74.37kg）、W類（出土総重量54.05kg）類の順に採用され、胎土ではⅠ類がもっとも多くⅡ類、Ⅲ類の順となりⅣ類は少なく、埦も坏と同様な傾向を示している。色調の違いは何を現しているのか。粘土に含まれた鉄分の違いか（粘土採取地の違い）、焼成の違いか、また、含有物の相違は、何れもATあるいは霧島御池軽石（Kr-M）など都城地域での採集可能なものであることから、偶然なのか、意識的に土器作成時に混入させたのかなど検討課題が残る。ただⅠ類とした粉っぽい胎土は粒子が確認できないほどの水簸された粘土の可能性が高く、土器粘土に手間をかけていたことからすれば、含有物については後者の可能性がある。

黒色土器ではＤ類は非常に少なく、Ｔ類とW類が大部分を占め、胎土ではⅠ類が多く、Ⅲ類とⅤ類が少量ではあるがみられる。さらに細分してみていくと、以下のようになる。

Ⅰ類：１類は胎土が精良で、砂粒はほとんど含まれない。薄手のものが多く、灰白色系で中世の土師器の胎土に類似する。２類は１類にくらべ胎土が粗い。

Ⅲ類：３類はＤ類で赤褐色粒を含み光沢ある粒子を少量含む。４類はＴ類で１～２㎜の赤褐色粒を含む。

Ⅴ類：５類は灰白色や光沢のある粒子を含む、６類は微細な灰白色や光沢のある粒子、１～２㎜の砂粒を含み、薄い黄橙色を呈す。７類は光沢ある粒子が多い。

Ⅱ類やⅣ類は出土していない。

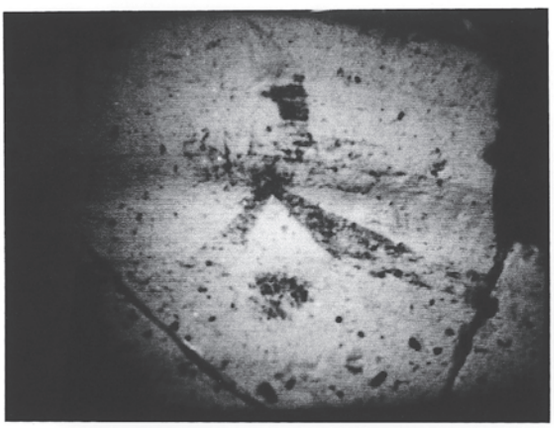
墨書土器・線刻文字（第113図）

墨書土器は判読不能なものや可能性のあるものを含め18点出土した。その内訳は「春」１点（93）、「太」？が１点（548）、「泉」１点（1077）、「泉」？が２点（580・576）、「井」？１点（782）、「万」に類似した文字の下半部３点（256･408･1144）、「貳」？に類似した文字が１点（584）、判読不能なもの８点となる。1207は、赤外線によって墨書土器であることが判明したが、画数の多い文字であることはわかるが字体は不明である。出土遺構では、933がピットより、925がSE ２、326がSE ６、池状遺構から548・576・580・584・683・694・782の７点が出土し、その他は包含層から出土している。文字の書体では、筆先で細く書かれかすれ気味になるものや明朝体に近くしっかり墨が残るもの、草書体に類似するものなどあり、文字の大きさも一様ではないが、筆先で書かれるものが小さい傾向にある。書かれた位置は土師器坏および高台付埦の体部外面で上位～下位までである。なお、墨書土器における土師器形態や胎土の選別は認められない。

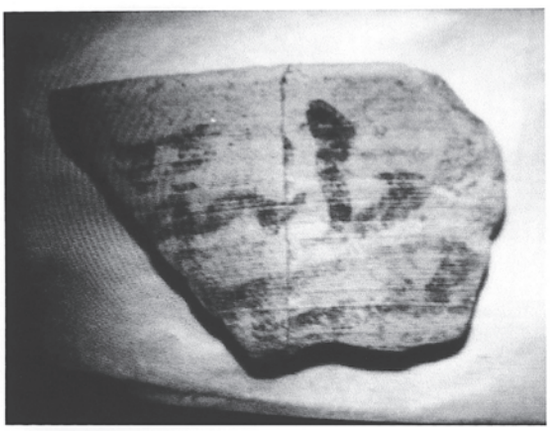
1146は土師器坏底部内面に文字が線刻されている。文字はヘラ状の工具で行われ、画順からすれば「山」ともう一文字あるいは「山」偏を有する文字の可能性がある。

93

1208



548

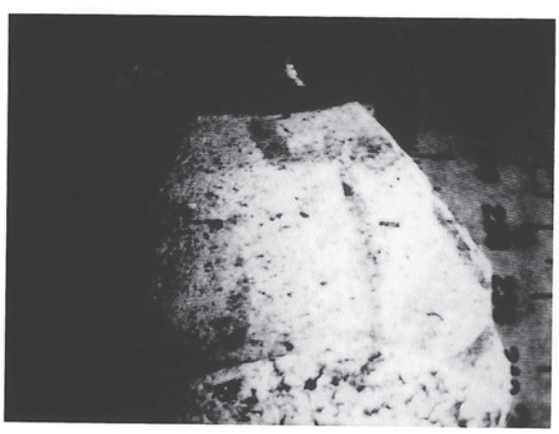


1207

584

576

1077



580

図版18　墨書土器（赤外線撮影）

２　須恵器

出土した須恵器には甕・壺・坏・高台付碗・蓋・皿・鉢がある。また、再利用として坏の転用硯や坩堝としての使用例や甕の破片内面に磨痕が認められるものもある。出土量は土師器に比べ少なく、甕の大きさなども勘案すれば、個体数としてもそれほど多くないと想定される。

甕

甕は口縁部が素口縁で頸部が強く外反する（203・335・867・887・891・892・1405・1410）、垂直に立ち上がりながら外反する（484・859・864・874・896・1374・1386・1392・1397・1421）があり、口縁端部が丸く収められるものや面取りされるもの、中央が凹むものがある。ほかには大型で大きく開くもの（369・370）、「く」の字状に屈曲するもの（273・482・850・895・1411）がある。273・482の外面には一条の、895には二条の櫛描き波状文が施される。法量では、12 ～ 15.5㎝の小型、17.2 ～ 22.8㎝の中型、30㎝を超える大型に分類できる。

甕の外面調整には平行タタキや格子目タタキ、ナデなどの調整が、内面の当て具痕には、平行タタキ、同心円文、車輪状、格子目、ナデ、弧状のほか形状がはっきりしない工具によるオサエ状のものもある。多くは外面が、平行タタキ・格子目タタキ、内面が同心円と平行タタキの組み合わせが最も多い。

外面に平行タタキが施されるものについてみてみると５㎜程度の幅広のものや１㎜前後の細かなものやタタキが深いものや浅いものが見られる。また上半部では縦方向や横方向が、胴部中央から下半部にかけては横方向の平行タタキや格子目タタキのパターンが見られる。外面平行タタキに対する内面の調整には、頸部から胴部上半部までを同心円文、それ以下を平行タタキが施されるものが多いが、弧状の（径の大きい同心円文の可能性もある）当て具痕や有軸羽状のもの、頸部から過半まで格子目タタキが施されるものなどがある。外面が格子目タタキの場合、格子目の形が方形のほか、長方形（幅広や細いものあり）、菱形、擬格子目のものなどあり、横方向や縦方向に使われている。内面調整は平行タタキの場合と同様だが、薄手でナデ調整のものもある。底部付近についてはタタキが施されるものやていねいにナデ消されるものもある。

出土した須恵器の接合関係は各遺構の項でも述べたが、柱穴と溝状遺構、池状遺構と柱穴、土坑と池状遺構など各遺構および包含層出土資料間での広範囲での接合状況が判明した。

次に須恵器の胎土別の調整や特徴を記すが、大まかに11類に分かれ、ａ類およびｂ類が甕の大半を占める。

ａ：焼成不良気味で、にぶい橙色をなし粒子がやや粗く白色系の粒子を含む

出土総重量8.53kgと、もっとも多く、池状遺構やSB １・門跡の柱穴および溝状遺構から出土している。８は黄灰色をなし、微細な白色粒を含む。68・372・850 ～ 857・889・890・898・899・921・1069・1384・1403・1429は、外面は幅広で深く鋭い平行タタキで、内面は頸部～上半部は同心円文タタキ、下半部は平行タタキ調整となる。270・858・1389・1391は外面のタタキが浅く摩耗した感じで、内面の同心円文ははっきりしたものである。同心円文の深い部分を詳細に観察すると布目状の痕跡が観察でき、原体の木質の状況を表している可能性がある。これは1385にもみられる。377・1402・1426は外面が細かな平行タタキ、内面が幅広で浅いタタキである。336は薄手で浅黄橙色を呈す。1381・1382・1385は外面原体の幅は約４㎝を測る。内面は上半を同心円文、下部が平行タタキとなる。内面同心円文が270・858・1389・1391と同様な原体が用いられている。また、211の内面幅広の平行タタキと外面格子目タタキの866・1375・1376などの内面平行タタキが非常に類似している。901は底部で平底をなすが、底部まで平行タタキ及ぶがナデ消される。内面は

深くてはっきりした平行タタキとなる。平行タタキが施された甕の内面は口縁部から頸部以外は同心円文から平行タタキとなるが1412は小型の甕で、何らかのタタキの後、ナデ調整が施される。小型の甕の場合は、このような調整になる可能性がある。

この胎土の外面格子目タタキの出土例は少ない。880・881は内面は幅広の平行タタキ、900は同心円文のあと幅広の平行タタキがなされ、889・890・898・899などに調整や色調など非常に類似している。また、886も外面の有軸の平行タタキ以外は色調やタタキなど類似している。

ｃ：やや胎土が粗く黒褐色系や白色系の粒子を含む

出土総重量7.14kg。白色粒を多く含むもの、薄手のものもある。この胎土の甕の出土地点は、ａ類同様池状遺構が多く、SE １・２・６・25・30など溝状遺構が増え、柱穴からの出土例が少ない。なお、外面の平行タタキと格子目タタキの出土比率は同じくらいでａ類ほど格差はない。内面の調整はａ類に類似するものが多いが、弧状のタタキや車輪文が加わる。

外面平行タタキがみられるものの特徴は、206・210・215・1396は細い平行タタキが施され、内面の弧状のタタキは幅広で深い。859・860は同一個体の可能性があり、外面縦方向の平行タタキで原体幅約４㎝と推定される。868・870は外面が縦方向の平行タタキで下半が横方向のタタキに変化し、内面は同心円文タタキ後、縦方向の平行タタキとなる。884は格子目タタキの後、ナデ、内面は同心円文の後、平行タタキで、内面には、この破片で据えた場合、最も窪んで底となる部分に磨痕がみられる。887・894・1380・1383は青灰色を呈し、内面は平行タタキの後、同心円文タタキとなる。外面の平行タタキの原体は下部か上部に格子目が施されている特徴があり、それから原体大きさを想定した場合、幅３㎝以上・長さ４㎝以上となる。337は薄手で外面が擬格子目タタキ、内面が車輪文の後ナデ。208は内面には平行タタキが施されるが全面に磨痕が認められ、破片として使用された部分は本来はもう少し大きかったと考えられる。869・1405は内面に有軸羽状のタタキが施され、胎土も類似することから同一個体の可能性がある。272は底部付近で内面が成形の後ていねいにナデ消される。

外面格子目の場合についてみると、39・338は同一個体と考えられ、外面縦長の格子目タタキ、内面は同心円文の後、平行タタキ。338の内面を詳細にみると同心円状のタタキの後、やや幅広の擬格子目タタキが施され、さらに下半でそれより幅の狭い平行タタキに変化している。なお、擬格子目をもつ原体は2.5㎝前後の幅を持つと想定される。882・1378は同一個体の可能性があり、内面は平行タタキのあと同心円文。219・271は薄手で、内面の調整は、原体表面を扇状に薄く削りとったものを使用し、タタキというより原体によるオサエによって扇状に粘土の溜まりが残る状況を呈している。25・214・1397・1399は同一個体の可能性があり、外面縦長の格子目タタキ、内面同心円文後幅広の平行タタキ。875 ～ 878・1388・1409は焼成不良のため土師質である。875 ～ 877は薄手で、1409は粒子が少なく精良でやや硬質。878は厚手となり内面は花びら状のタタキが施される。882・1377・1378は胎土やタタキの状況から同一個体の可能性があり、外面は格子目タタキ、内面の同心円文タタキの後平行タタキ。

ｄ：１～３㎜の砂粒を多く含む

863は１点のみだが、灰褐色を呈し、内外面の平行タタキは粗く、特徴的である。池状遺構とSE ７との重複部分から出土。出土総重量0.2kg。

ｅ：硬質で粗い胎土に白色粒を多く含む

1398･1400は黄灰色を呈し、外面には自然釉がかかる。外面は平行タタキ、内面は同心円文タタキである。包含層より出土。出土総重量0.13kg。

ｇ：灰白色をなし砂粒を少量含む

203は小型の甕で頸部下より平行タタキ、内面はナデ調整。883・1379は胴部片で外面は平行タタキの後、格子目タタキとなる。池状遺構やSE 1から出土。出土総重量0.28kg。

ｈ：気泡や砂粒による空洞があり、黒色や白色の粒を含む。焼成不良で土師質のものもみられる。

216は青灰色を呈し、幅広の平行タタキが見られる。1406・1407は同一個体で、内面は頸部付近から格子目タタキが施される。本遺跡出土須恵器で内面に格子目タタキをもつものはこの1407のみだけである。出土総重量0.45kg。

ｆ：土師質

外面が平行タタキとなるものでは446は外面横方向の平行タタキ、内面がナデ調整。371・500・864・866・1375・1376は同一個体の可能性があり、外面に平行タタキのあと菱形状の格子目タタキが施される。437・447は外面に非常に浅い平行タタキ、48は黄灰色で内面は同心円文となる。外面格子目タタキは378は薄手で内面は風化著しい。488は内面ナデ調整。897は内面同心円文の後、横方向の平行タタキがなされる。池状遺構やSB 4の柱穴、SE 1・7・9・11・12・25から出土している。出土総重量1.59kg。

ｉ：ｃに類似するが、透明なガラス質の粒子を含み表面がキラキラする

ｉ類以降は外面格子目タタキの甕のみしかなく、153・1392～1394は外面は横長の格子目タタキで、内面は径2.5㎝程度の同心円文タタキ。205・1395は格子目の幅が広く、同心円文の径も大きい。376・867・1404は濃青灰色を呈し、ガラス質の粒子が少なく白色粒子を多く含む。879は焼成があまく土師質に近く、内面は浅い平行タタキ。池状遺構、SE 1・7・25や包含層から出土。出土総重量0.79kg。

ｊ：ｃより胎土が粗く、黒色や白色粒を含む

871～874は暗青灰色をなし、内面は車輪状タタキや同心円文、499は内面に同心円文や平行タタキがなされる。池状遺構およびSE30から出土している。出土総重量0.45kg。

ｋ：胎土に褐色粒を多く含む

439・1386・1387は同一個体の可能性があり、焼成不良で灰白色を呈し、土師質となる。内面はナデ調整。1408は灰黄色をなし、やや焼成良好である。SE11および包含層から出土。出土総重量0.2kg。

ｌ：灰色を呈し、乳白色の粒子を多量に含む

1430は外面が細かな格子目タタキ、内面が同心円のあとナデ調整。出土総重量0.09kg。

そのほか、分類した以外に小片が出土し、総重量1.04kgを測る。

壺

出土総重量6.46kg。壺には球胴状の短頸壺、無頸壺、長頸壺や瓶形の長胴壺のほか、小型の長胴気味の壺があるが、長胴壺が主体的で、口縁部が「く」字に折れ、二重口縁をなす。また、1448は内面が凹凸のあるナデ調整で、胎土も高台付埦と違いがあることから高台付壺の可能性がある。球胴状の短頸壺、無頸壺、長頸壺や小型の長胴気味の壺は、内外面とも回転ナデ調整、一部、短頸壺153は、外面に格子目タタキが施される。この施文具には縦横四個の格子目と横長の方形との組み合わせが施され、長さ約3.2㎝、幅1.5㎝が確認できる。瓶形の長胴壺は外面が平行タタキか格子目タタキ、内面がナデ調整がなされる。また、胴部が1㎝前後の厚手のものと5㎜前後の薄手のものに分かれる。底部外面は基本的にはナデ調整だが、一部格子目タタキや平行タタキが確認できるものもある。

胎土をみてみると甕ｃ類系統のものがもっとも多く、短頸壺、無頸壺、長頸壺や小型の壺はすべてこの類

に含まれる。また、瓶形の長胴壺の胎土にはバリエーションが多く、ｄ・ｅ・ｇ・ｈが少量あり、甕の胎土ではみられなかった**ｍ：（ｃ類に類似するがきめ細かな胎土）、ｎ：（胎土が粗く暗灰色をなし、３㎜前後の白色の粒子を含む）やＯ：（ｅに類似するが、胎土が粗く２㎜前後の黒色粒や白色粒およびガラス質の粒を含む）**の胎土の壺が存在する。ａ・ｃ・ｆ・ｉ・ｊ・ｋ・ｌ類のものはみられなかった。

ｃ類で特徴的なものとして、910・923・926・1434・1435などは薄手でやや薄い青灰の色調で平行タタキが施され、同一個体の可能性がある。86・153・903・913・1401・1413・1414・1415は、胎土がきめ細かで砂粒も微量である。ｈ類は黒色粒や気泡痕が特徴的で483・490・912・1415がある。ｄ・ｅ・ｇ・ｈ類は少量で、ｄ類：1431は甕863の胎土と類似している。ｅ類：907・914は、硬質で粗い胎土に大きめの白色粒を多く含む。甕1400に類似する。ｇ類の1425・1433はやや焼成不良で甕883に類似する。ｍ類：86・153・903・913・1401・1417・1447で、153以外は長胴壷、ｎ類：1432・1438・1443は厚手、ｏ類：492・1424・1428・1437などは焼成不良気味で薄手となる。

坏・埦・皿・蓋・鉢

胎土はすべてｍ類である。坏は土師器に比べ出土量は非常に少なく、総重量2.96kgである。坏は体部と底部の境が明瞭で土師器Ⅰ類に類似する資料が多く（226・227・275・276など）、ほかには、Ⅴb類（274）、Ⅵ類（379・1454・1464など）、Ⅶ類（930）のほかに体部が直立気味に立ち上がるもの（916）、口径が15㎝を超える皿や鉢に分類される可能性のあるもの（94・223・380・915・1455）もある。調整は全体に回転ナデで、底部はヘラ切りやナデ調整が、底部と体部の境にはヘラ削りがなされるもの（916・1454・1464）や丸みをもち立ち上がるものなどがある。胎土は甕でみられたｃ類のきめ細かなものが多いが、焼成不良なのか橙色をなすもの（1455・1458・1461 ～ 1469など）は土師器として考えたほうがいい資料もある。また、火襷が残るものも多く存在する。

埦は高台付埦が大半で、坏より出土量はぐっと少なくなり、出土重量942ｇで18点を図示した。高台がシャープで端部が凹むもの(225・927・1469・1470)や丸みをおびるものに分かれる。調整は回転ナデであるが、一部見込み部にナデ調整が施されるもの（1476・1477など）がみられる。胎土は坏と同様で甕ｃ類が多いが、ほかに甕ｇ類（440）、ｌ類（1463）、ｏ類（924）などに類似する胎土を有するものが出土している。そのほか体部がくの字に屈曲し口縁部が外反する形態のもの（381）があり、体部下半にはヘラ削りが施される。

皿は３点出土している。450はSE12出土で小さな三角形の高台がつき、外方に大きく開く。胎土は甕ｃ類に近いがやや粒子が粗い。1460はｃ９グリッド出土で底径が10㎝と大きく、底部から丸みをもち立ち上がる。1461はＫ５グリッド出土で、1461とは対照的に底部と体部との境がシャープである。

蓋は５点出土した。452・932・1480は蓋のつまみ部分で452・932は天井部が凹む。452がSE12、932が池状遺構、1480はＣ９グリッドから出土している。1481は外面がヘラ削りされる。1482は壺の蓋と考えられ全体に厚手で指によるオサエおよびナデ調整。Ｂ９グリッド出土。

鉢は11点出土し、こね鉢やすり鉢など中世に下るものばかりで、220・221は土鍋、222・1439は開く角度が大きく壺の可能性もある。1083・1436・1439・1440・1483・1486・1487はこね鉢で内面に磨痕が認められる。1488は擂鉢で内面に条線が施される。出土地点もSE １と包含層からである。

３　陶磁器類

古代から中世の陶磁器類としては、国内産では緑釉陶器、灰釉陶器、常滑焼が、輸入陶磁器としては青磁、白磁、青花が出土している。古代としては、青磁は越州窯系、白磁はⅠ類があり、中世としては青磁では同安窯系や龍泉窯系、白磁はⅣ類、Ⅴ類や皿類のほか青花が出土するが、白磁以外は少ない。

緑釉陶器

緑釉は完形に復元できるものは少なく、そのほとんどが数㎝程度の破片で破片で、総数81点、総重量824ｇである。器形には碗、皿、耳皿があり、胎土により大別すると土師質（Ａ類）と須恵質（Ｂ類）とに分けられ、土師質出土総重量361ｇ、須恵質総重量463ｇを測る。土師質は、１類：白色系の胎土で、若草色の釉調で軟質、２類：砂粒を含んだ黄褐色系の胎土で１類より硬質で黄味が強く、体部断面では粘土が重ね合わせているような状況も観察できる。高台は低い高台と蛇ノ目高台があり、高台内まで施釉されている。３類：きめ細かな胎土で、淡黄褐色系の釉で、高台内は露胎。４類：硬質で須恵器に近く、胎土に砂粒を微量含む。淡いオリーブ釉が薄くかかるが高台内は露胎。重ね焼きの可能性がある。５類：薄手で胎土に砂粒は含まれず、淡灰白色系の釉である。１類の坏は上げ底気味の台状底部や薄手で内湾気味の高台をもつものがあり、皿は小さな高台で口縁部が外反する。Ａ類ではもっとも出土量が多い（出土重量157ｇ）。２類の坏は平底を呈し、碗はしっかりした高台がつく。口縁部はやや肥厚し外反する（出土重量141ｇ）。３類はやや丸みをもった高台を有し（出土重量41ｇ）、４類は台形状の高台で口縁部はやや外反する（出土重量21ｇ）。５類は１点のみで口縁部がやや肥厚し外反気味となる。底部については不明である。

須恵質は、１類：やや厚手で焼成やや不良。淡い緑の釉調、蛇ノ目高台で体部がやや屈曲する。２類：淡青緑色の釉がかかるが薄く、底部外面は露胎で糸切り底。薄手のものと厚手のものがある。３類：胎土にゴマシオ状の褐色の粒子を含み、釉が薄い。４類：青灰色の胎土で暗緑色の釉、５類：青灰色の胎土で白色粒を微量含む。高台外面は施釉される。

形態では１類は坏・皿とも体部中央付近が屈曲し外方にのびる。口縁部には外反するものが多く、皿には輪花を呈するものもみられる。底部は蛇ノ目高台や高台底部が内側に削られるものがある。出土量が最も多い（出土重量261ｇ）。２類は薄手で、口縁部が強く屈曲し、水平になる。体部は１類同様屈曲するものがあり、底部は蛇ノ目高台や台状をなし、糸切りものもみられる（出土重量152ｇ）。３類は、碗あるいは皿と小坏が出土している。高台は小さく、口縁部は外反する。小杯は平底で糸切りとなり、体部は内湾気味に外方にのび、口縁部が外反する（出土重量40ｇ）。４類は体部が屈曲し、口縁部はやや外反する（出土重量３ｇ）。５類は平底の底部で、口縁端部は外反する（出土重量７ｇ）。４・５類については小片のため詳細は不明。

各分類の出土状況をみると、Ａ１類・Ｂ１類は同じような出土分布を示し、池状遺構およびSE １の北側のやや窪んでいる区域に出土する。Ａ２類はいわゆる屋敷地から離れたSE １東端や調査区東のSE20付近、Ａ３類は出土量が少なくくぼ地周辺からのみ、Ａ４・５類・Ｂ５類は池状遺構からとなる。Ｂ２類はSE15周辺から、Ｂ３類はSB １や池状遺構、Ｂ４類は調査区の東、くぼ地より出土している。このように池状遺構を中心としたＡ１・４・５類、Ｂ１・３・５と屋敷地から離れて出土するＡ２・３類、Ｂ２・４類とに大きな分布状況の違いがみられる。

白　磁

白磁碗には、Ⅰ類・Ⅳ類・Ⅴ類などがみられ、それぞれⅠ類：総出土重量260ｇ、Ⅳ類：総出土重量1,150

g、Ⅴ類：総出土重量690gを測る。Ⅰ類は小さな玉縁口縁を呈するもので、胎土は灰白色や黄味をおびるものなどあり精良。高台は幅広の蛇ノ目高台で、高台底部には施釉されていない。Ⅳ類・Ⅴ類とされる白磁とは明瞭に識別可能である。出土地としては池状遺構やSE 6が屋敷地内、それ以外はSE 1周辺やくぼ地、SE21周辺などから出土している。灰釉の出土状況と類似している。

Ⅳ類は大きめの玉縁で、肉厚なものから薄手のものまでヴァリエーションが大きく、口径も12.6～18.5cmと格差が認められる。口縁部直下には明瞭な横ナデの稜が見られ、胎土には微細な黒色粒子を含み、釉は青味がかった白色をなす。釉表面に気泡が破裂したような凹凸があるものも多く、体部外面下半部は露胎。底部は高台内が浅く、厚手の底部となり、内面に沈線が施されるもの（1566）もみられる。

SE 1・7・12および凹地から出土している。Ⅴ類は、胎土がやや粗く、灰色あるいは黄味をおびる。その多くは破片のため詳細ははっきりしないが、体部下半に丸みを有し口縁部が外方に延びる1 a類、口縁部が外反する2 a類、口縁端部が小さな玉縁状をなす3 a類、口縁部が屈折し上端部が水平になる4類が出土している。SE 8から出土。それ以外は包含層出土。Ⅳ類を多く出土したSE 1からは出土していない。

このようにⅣ類・Ⅴ類は、池状遺構やSB 1周辺からはほとんど出土せず、池状遺構の北東側やSE 1周辺で出土する傾向にある。

Ⅲ類は完形に復元できるものは少なく、高台がつき体部下半が丸味をおびながら外方にのびるもの(1596)や同様に高台がつき下半部が屈曲し、口縁部が屈曲し上端が水平をなすもの（1597）があり、そのほか口縁部が内湾するものがみられる。底部は上げ底状となり底部と体部の境が明瞭で内面見込みに段を有す。すべて包含層から出土している。

包含層より青白磁の合子（1607）が1点出土している。外面には菊文が施されるが、口縁部は欠損している。底径3.6cmを測る。

灰釉陶器

灰釉は破片ではあるが51点、総重量622g出土した。坏が多く、1点のみ壺が池状遺構から出土している。坏は、体部内外面のみ釉がみられ、底部内外面には施釉されない。一部高台外面まで施されるものもある。釉調はオリーブ系の色調で、黄味をおびるものもあるが、非常に薄く、もともと施釉されていないかあるいは焼成の際、消えてしまったものなど多くみられる。胎土は精良であるものの、黒色や乳白色の粒子を含み、灰色や淡い青灰色を呈す。体部は横ナデ調整でヘラ削りは認められず、高台断面は外面が丸みをおびる。また、見込み部には直接重ね焼きした痕跡を残すものもある。出土地点としては池状遺構や包含層出土が多く、SE 1・24や柱穴からも少量出土している。出土状況をみると屋敷地内では池状遺構からのみで、溝や柱穴からも出土していない。屋敷地外では区画溝と考えるSE 2の南側や窪地周辺およびSE24などでみられる。

青　磁

青磁は越州窯系、同安窯系、龍泉窯系が出土しており、越州窯系が最も多く出土している。越州窯系は総数99点、総重量1590gを測る。緑釉や灰釉と比較すると多くみえるが、個体数で考えた場合、大碗など大型のものもあることから一概には越州窯系青磁が突出しているとは捉えられない。器形としては碗、大碗、Ⅲ、壺？、水注があり、SB 1・3、SE 7・25・30、池状遺構、包含層から出土している。碗はⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類、大碗は口径が20cm前後ものあるいは底径の状況から推定して分類を行い、碗同様Ⅰ・Ⅱ類が認め

られる。皿と分類可能なものは少なく、水注は１点のみ出土している。碗Ⅰ類は胎土は精良で白色系の粒子を微量含む。内外面に施釉され、見込み部に目跡を残す。Ⅱ類は釉がはげ落ちている場合が多く、体部下半には施釉されない。胎土は青灰色系をなし、黒色の粒子を微量含む。Ⅲ類は薄手のシャープな作りで、内外面、高台内にも灰オリーブの釉がかかる。皿には口縁部が外反するⅡ類タイプで胎土はやや黄味をおびるものや口縁部が輪花をなすもの、小片だが薄手で碗Ⅰ類の胎土で体部下半に段を有するものなどがある。壺は内外面に施釉され、胎土は碗Ⅱ類に近く白色の粒子を含む。水注は首部分で取手は屈曲部よりやや上位につく。釉は黄橙色で、胎土は精良である。同安窯系は粗い縦の櫛目文が施される。龍泉窯系は総点数20点、重量204ｇで他に比較すると少ない。碗では連弁文碗があり、鎬を有するものや連弁文が簡略化されたものがあるが少ない。

青　花

1709は青花の皿である。見込みに玉取獅子を描く。底径6.2㎝。

４　石製品

滑石製石鍋

1110はくぼ地から出土した滑石製石鍋の底部片である。顕著な加工は認められない。1664は滑石製石鍋の胴部下位の破片である。緩やかにカーブする線状痕は切断過程のものか。1666は両面研磨を施しており、断面形状は端部を丸く収めた口縁部状にも見える。ごく一部分であり全体像を把握できないが小型の器状に加工されたものか。

1667は小型の滑石製石鍋である。体部が上方に向かい垂直に立ち上がる器形を有する。おそらくは破損した石鍋片を利用して作られたと考えられる。1668は滑石製石鍋の縦方向の把手もしくは器壁の厚い胴部片から作られた二次加工品の欠損品である。突出した部分には穿孔が施され、紐や棒状の物を通したと考えられる。蓋としての用途も指摘できる。1669は円盤状に加工された滑石製品である。石鍋の痕跡を残す鑿痕や被熱痕跡は皆無である。周縁には意図的に周回させたと考えられる線状の加工痕が認められる。1670は穿孔を施しその直下に線刻を周回させる滑石製石品である。裏面に残る緩やかなカーブは石鍋の形状を反映している可能性がある。1669・1670はその形状を異にすることから温石と考えられる。

包含層から出土の石器

包含層から出土した石器については、そのほとんどが時期を確定することは困難であることから、一括して掲載する。1675は顕著な磨り面が認められる小型の磨石である。やや不規則な動きの線状痕が残る。1676は扁平な砂岩を利用した磨石である。表裏面に方向を一にしない複数の線状痕が顕著に残る。硬質の対象物を研磨したとも考えられるが、何らかの意図をもって作為的に残された線刻と見ることもできる。1677は石製の硯である。隅角の破片であり形状は不明であるが、両側が緩い角度で立ち上がる点から風字硯に近い形状の硯の一部である可能性が高い。1678はチャートの剥片である。1679は扁平な自然石を利用した砥石である。砥面の中央が緩やかに窪む。

1680は周縁を部分的に欠損する自然石である。片面には２条の顕著な線状痕と欠損により判然としない２条の線状痕が残る。これらの線状痕は研磨に際し残されたものと考えられるが、繰り返し使用されたとは考えにくく意図的な線刻である可能性が高い。1681は風化が著しいものの表裏面に擦痕が認められることから

製品の欠損した一部の可能性がある。1682は砥石（提砥）である。側面を丁寧に研磨し、隅角に穿孔を施す。一面のみを砥面として利用している。1683はサヌカイト製の製品であるが器表面は風化が著しく用途は確定できない。穿孔を有する端部は剣の切先状に鋭利に研磨されている。側面形状から判断すると提砥的な用途も考えられるが、石材から考えると舌の可能性も指摘できる。弥生時代の可能性もある。1684は撥状の平面形態を有する砥石であるが、ハの字状に開く方の端部を欠損している。ほぼ全面を使用するとともに、敲打痕が明瞭に残る。1686は断面形状が長方形を呈する砥石である。1687は断面形状が長方形を呈する砥石である。1688はやや扁平な軽石製品である。明瞭な線状痕が認められるが、中途の切断痕の可能性もある。1690は短い棒状の自然石を利用した砥石である。一面のみを砥面として使用しており、端部に敲打痕等は認められない。1691は約1/3を失う磨石である。表裏の磨り面及び残存する端部には敲打痕が顕著に残る。1692は磨石である。1693は平滑に近い一面のみを磨り面として使用した磨石である。磨り面には方向を一にしない線状痕が認められる。1694は円礫を利用した磨石である。半球状に破砕しており、本来は楕円球状の円礫でほぼ全面を使用していたと考えられる。周縁部に残る剥離痕は破砕時の痕跡もしくは敲石的な用途で一時的に使用した際に生じたものか。

1695は棒状の自然石を利用した磨石である。1696は自然石の平滑面を利用した磨石である。断面形状はやや不整形であることから、一面のみを使用したものと考えられる。1697は磨石が板状に剥離したものである。1698は自然石の平滑面を利用した磨石である。断面形状はやや不整形であることから、一面のみを使用したものと考えられる。1699は円礫を利用した磨石である。半球状に破砕しており、本来は楕円球状の円礫でほぼ全面を使用していたと考えられる。周縁部に残る剥離痕は破砕時の痕跡もしくは敲石的な用途で一時的に使用した際に生じたものか。1700は自然石を利用した砥石である。２面の砥面が認められる。1701は扁平な自然石を利用した磨石である。1702は磨石の破片である。1703・1704は凹石である。２点とも欠損した一部であり台石状の一定の大きさを有する製品の一部である可能性もある。

1705は砂岩製の製品である。表面に顕著な加工は認められない。1706は扁平な円形をした製品であり、表面の風化が著しい。明赤灰色を呈することから熱変成したと考えられる。火蓋の可能性が指摘できる。1707はチャート製の火打石である。調整により形状を成形したと考えられる。使用により一側縁の稜がよく潰れている。1708は敲石である。両極に顕著な敲打痕が残る。1663・1665は縦方向の把手を有する石鍋の破損品である。このうち1663には穿孔が認められ、二次加工時もしくは補修時の所産と考えられる。1665は把手を研磨した痕跡があり加工途中の未製品か。

５　弥生時代の遺物

弥生時代の遺構は確認されていないが、弥生土器や石器が出土している。石器や鉄器については、古代・中世に含めたものの中に当該期のものがあると思われる。

土　器

199は甕か壺の底部の可能性があるが、外面は面取され、厚手の底部と考えられるが器形については確定できない。517は「く」の字状口縁をなす小型の甕である。534は高坏の脚部と考えられる。507・508・1138・1139は甕の胴部上半部で外面に複数の突帯がつくと想定される。526は大きく外反する口縁部である。1111は大型甕の突帯で端部は凹む。1114はくの字状に長く外反し、外面はナデおよびハケの後、ヘラミガキが施される。内面はナデ調整。1132は同上半が内湾し、口縁端部に刻目突帯、口縁部下に１条の三角突帯が

貼り付けられる。1134・1136は「く」の字口縁を呈し、口縁端部は肥厚し、口唇部は凹む。1135は厚手の底部でやや上げ底となる。1137は平底をなしコップ状をなすと考えられる。砂粒を多量に含む。199・526・507・508・1111・1138・1139はいわゆる金雲母を含む。概ね中期中頃から後期前半までの遺物である。

石　器

石器で弥生時代の所産と想定されるものについて記述する。279は石庖丁の破砕片である。器表の表裏に成形時の擦痕が顕著に残る。刃部は両刃仕上げで使用痕と考えられる微細な剥離が認められる。1671は自然面を残すやや扁平な棒状の石製品である。先端部を失うが鋭角的に成型されていたと考えられる。また、一方の側縁には刃部作出のためと考えられる調整が認められる。おそらくは石鎌の欠損品であろう。1672・1673は磨製石鏃である。1672は基部に浅い抉りが認められる。刃部となる両側縁を丁寧に研磨する。1673は平基の磨製石鏃であり、1672に見られる抉りは認められない。刃部の著しい剥離は使用により生じた可能性もあるが、剥離が比較的大きいことから再度製品として使用するための再調整段階とも考えることができる。1674は石庖丁の欠損品である。粘板岩系の石材を使用しており、摂理面で剥離欠損したと考えられる。刃部には使用した際に生じた微細な剥離が顕著である。1685はⅠ５グリッドで出土のものと接合する。緑色岩系のきめの細かい石材を使用しており、ほぼ全面を研磨している。側縁の一方は緩やかカーブを描くがもう一方は直線的であり、その直線的な側縁側には１条の線状痕が認められる。形状からは石鎌と考えられるが、本来刃部となるべき側縁を平滑に研磨していることや淡緑色の石材を選択していることから通常とは異なった用途を有していた可能性も指摘しておく。1689は軽石製の男根状石製品である。

6　近世の遺物

近世の遺構は、SB 1 の北側の状況を確認するため拡張した区域に集中して検出され、土坑や溝状遺構、ピット、土壙墓などがある。特に調査区の北西隅では、御池ボラ層が残存し、数十基の円形の近世以降の墓が集中して作られている。これら近世の遺構についてはほどんど未掘である。

遺物（第100 ～ 112図）

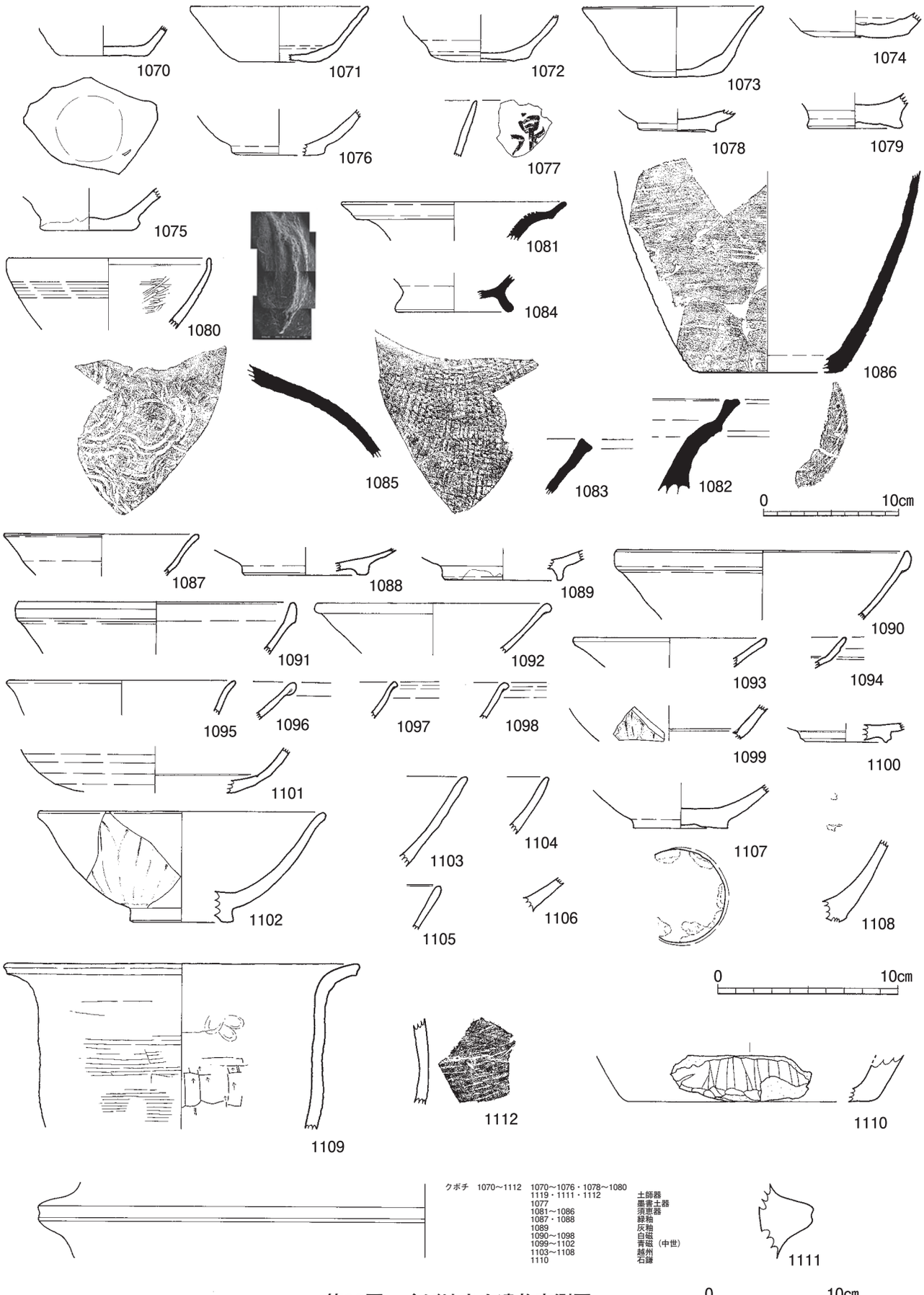
1710は柱穴から出土し、薩摩焼の土瓶の底部である。胴部下位付近まで釉が掛かる。1711 ～ 1719はSC 2 出土である。1711 ～ 1714土瓶で、1711・1712は摘みを失う蓋である。1713は底部を失う胴部上位の破片である。内面には釉の掛け流しの痕が見られる。1714は三つ足の底部片である。1715は擂鉢の胴部片である。口縁から胴部に至る変化点直下の体部片である。焼成時の釉の付着が見られる。1716は口縁部がやや内湾気味になる水注である。内面には焼成時と考えられる融着物が認められる。1717は端反りの陶器碗である。1718は白鷺を主たるモチーフとした水禽文が描かれる丸碗である。1719は皿の糸切り底の底部片である。見込みに砂目が付着している。1720 ～ 1723は北側拡張部から出土したもので、1720・1721はＬ字状に大きく外反する口縁部を有する擂鉢である。1722は端部が水平方向に突出する甕の口縁部である。口縁上面は平滑に仕上げ、焼成時の貝目が残る。1723は底部を失う鉢である。口唇状口縁を有する。1724 ～ 1751は陶器である。1724は甕の胴部片、1725 ～ 1730は碗で、いずれも薩摩焼の龍門司系の碗である。1731は片口をもつ鉢である。1732は「龍門司芳林」の落款印も見込みに残す皿である。芳林は龍門司焼の名工として数えられる。1733は球胴タイプの器形を有する土瓶と考えられる。1734 ～ 1736は鉢である。胴部中位に緩やかな膨らみを有する器形である。1737 ～ 1746は擂鉢で、1737は幅の狭い擂目を体部から底部内面にかけて密に施す。口縁部はＬ字状に外反することはほぼ共通するが、内側に突出するもの（1739・1740・1742・1743）、下垂するもの(1737)などヴァリエーションが認められる。1744は胴部片である。1720･1721に類する個体である。1746は１単位10条の擂り目を施す備前の擂鉢である。1747は土瓶の蓋、1748は上部を失う灯明皿、1749は瓶の頸部でエメラルドグリーンの釉を掛け流す。1750は鉢もしくは甕の底部、1751は甕の口縁部である。上面を平滑に仕上げ、口縁内側端部は水平方向に突出する。上面に貝目が認められる。

1752 ～ 1768は磁器である。1752 ～ 1754は染付の碗で1752は外面に唐人図を描く。口縁部内面には雷文帯。1753は笹文の一部か。1754は見込みに手描きによる五弁花、高台内に「大明年製」の文字が確認できる。1755は外面に草花文を描く。1756・1757は小型の筒丸碗である。外面には草花をモチーフとした窓絵文を描く。1758 ～ 1761は雪持笹を描く筒形碗である。1762は外方に向かい開く小坏で、口縁部を失うが端反りとなるタイプである。1763は角蓮弁を体部下位に描く猪口、1764は青磁釉を施す香炉もしくは火入れと考えられる。1765は口縁上面を平滑に仕上げやや肥厚する器形的特徴を有する。内外面ともに施釉されるが、内面については全面施釉されていない可能性もある。火入れか。1766は格子文を施す広東碗である。1767・1768は皿で、1768の内面には蛇の目釉剥ぎが認められる。

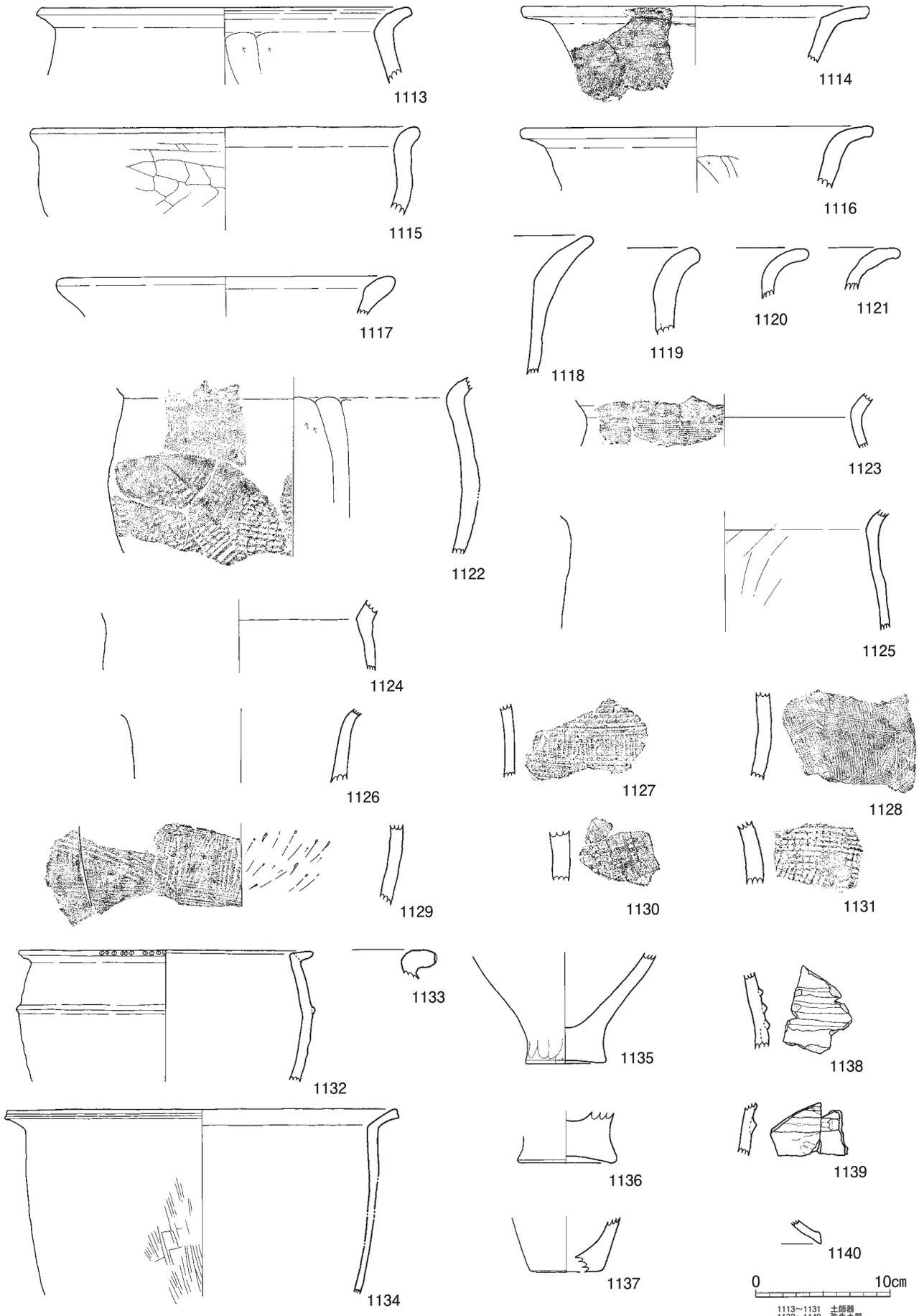
形態＼遺構	SL1	SB1	SB2	SB3	SB4	SB5	SB6	SB8	SB9	SB14	SB15	SB17	SB18	SB20	SB28	SB29	SB34	SB35	SC4	SC5	SC6	SC7	SC8	SC9	SC12	SC14	SC18	SC21	SC24	SC25	SZ1	SZ2	SE1	SE2	SE3	SE4	SE5	SE6	SE7	SE8	SE9	SE10	SE11	SE12	SE15	SE17	SE25	SE30	遺構＼形態
坏 Ⅰa	○	○	○	○								○		○																							○	○	○							○			Ⅰa
坏 Ⅰb	○	○																															○										○					Ⅰb
坏 Ⅰc	○				○																														○													Ⅰc
坏 Ⅰd	○								○																																								Ⅰd
坏 Ⅰe	○																																																Ⅰe
坏 Ⅱa	○										○				○									○							○							○											Ⅱa
坏 Ⅱb	○																															○						○										Ⅱb
坏 Ⅱc	○	○			○																																	○										Ⅱc
坏 Ⅲa	○	○						○								○														○				○			○										Ⅲa
坏 Ⅲb	○																																															Ⅲb
坏 Ⅲc	○	○	○																	○														○					○					○				Ⅲc
坏 Ⅳa	○	○			○																			○																								Ⅳa
坏 Ⅳb	○																																○																Ⅳb
坏 Va	○			○													○						○								○							○									○		Va
坏 Vb	○																																															Vb
坏 Ⅵa	○	○					○																○																									Ⅵa
坏 Ⅵb	○		○																																										○				Ⅵb
坏 Ⅵc	○		○			○																																						○				Ⅵc
坏 Ⅵd	○																																												○				Ⅵd
坏 Ⅵe	○																																		○													Ⅵe
坏 Ⅵf	○																																															Ⅵf
坏 Ⅵg	○																																		○													Ⅵg
坏 Ⅵh																																																Ⅵh
坏 Ⅶa1	○																																		○				○									Ⅶa1
坏 Ⅶa2	○																																		○											○		Ⅶa2
坏 Ⅶa3	○																																															Ⅶa3
坏 Ⅶa4	○																																															Ⅶa4
坏 Ⅶa5	○																																															Ⅶa5
坏 Ⅶb1	○	○			○																						○											○						○				Ⅶb1
坏 Ⅶb2	○																																															Ⅶb2
坏 Ⅶb3	○																																						○									Ⅶb3
坏 Ⅷ	○	○		○	○									○										○								○	○		○			○		○					○		Ⅷ
坏 Ⅸ	○																						○												○													Ⅸ
坏 Ⅹ	○																	○													○							○										Ⅹ
坏 ⅩⅠ																				○																												ⅩⅠ
坏 ⅩⅡ	○																																															ⅩⅡ
坏 ⅩⅢ																			○		○							○					○															ⅩⅢ
坏 ⅩⅣ													○																				○			○												ⅩⅣ
高台付椀 Ⅰa	○	△	△	△			△					○										△	△	△		△				△		△	△					△							△	△	Ⅰa
高台付椀 Ⅰb	○																																															Ⅰb
高台付椀 Ⅱ	○																																															Ⅱ
高台付椀 Ⅲa	○									○																																						Ⅲa
高台付椀 Ⅲb	○																																															Ⅲb
高台付椀 Ⅲc	○																																		○													Ⅲc
高台付椀 Ⅳa	○																																															Ⅳa
高台付椀 Ⅳb	○																																															Ⅳb
高台付椀 Ⅳc	○																																															Ⅳc
高台付椀 Va	○																			○														○		○				○					○				Va
高台付椀 Vb	○																																															Vb
高台付椀 Vc	○																																															Vc
高台付椀 Ⅵa	○																																															Ⅵa
高台付椀 Ⅵb																								○																									Ⅵb
高台付椀 Ⅶ	○																																															Ⅶ
高台付椀 Ⅶa	○																																○															Ⅶa
高台付椀 Ⅶb																																																Ⅶb
高台付椀 Ⅶc																																																Ⅶc
高台付椀 Ⅲ					○													○																															Ⅲ
十師器 甕	○																									○			○				○	○	○		○	○	○			○	○				○	甕
十師器 鉢	○																			○																													鉢
十師器 Ⅲ	○				○																																												Ⅲ
十師器 耳坏	○																																																耳坏
十師器 大型鉢	○																																○		○		○		○			○						大型鉢
黒色土器 Ⅰa																																																Ⅰa
黒色土器 Ⅰb																																																Ⅰb
黒色土器 Ⅰc			△		△															△											△																	Ⅰc
黒色土器 Ⅰd	○																																															Ⅰd
黒色土器 Ⅰe	○																																														○	Ⅰe
黒色土器 Ⅱ	○																																△						△									Ⅱ
黒色土器 Ⅲa	○																																															Ⅲa
黒色土器 Ⅲb	○																																															Ⅲb
黒色土器 Ⅲc	○																																													○		Ⅲc
黒色土器 Ⅳ																																			○													Ⅳ
黒色土器 Va	○																																															Va
黒色土器 Vb	○																																															Vb
黒色土器 Ⅵ	○																																															Ⅵ
黒色土器 Ⅶ	○																																															Ⅶ
黒色土器 Ⅷ	○																																															Ⅷ
黒色土器 Ⅸ	○																																															Ⅸ
黒色土器 Ⅹ																																																Ⅹ
黒色土器 鉢	○																																																鉢
甑	○																																○																甑
布痕	○																																○	○				○	○				○					布痕
須恵器 甕	○																																○	○				○	○		○		○			○	○	甕
須恵器 壺	○																						○			○					○		○					○								○	○	壺
須恵器 坏	○																									○							○						○						○			坏
須恵器 塊	○																																						○									高台付塊
須恵器 鉢																																	○															鉢
須恵器 Ⅲ																																											○				Ⅲ
白磁 Ⅰ	○																																					○	○		○							Ⅰ
白磁 Ⅳ																																	○					○									Ⅳ
白磁 Ⅴ																																	○															Ⅴ
越州窯系 碗Ⅰ	○																																					○							○	○	碗Ⅰ
越州窯系 碗Ⅱ	○	○																																														碗Ⅱ
越州窯系 大碗	○																														○															○	大碗
越州窯系 Ⅲ				○																																												Ⅲ
緑釉 A	○				○																												○															A
緑釉 B	○	○																																														B
灰釉	○																																○															灰釉
土錘	○																								○									○						○				○	○			土錘
石鍋			○																														○											○				石鍋
石製鍔具																																	○															石製鍔具
形態＼遺構	SL1	SB1	SB2	SB3	SB4	SB5	SB6	SB8	SB9	SB14	SB15	SB17	SB18	SB20	SB28	SB29	SB34	SB35	SC4	SC5	SC6	SC7	SC8	SC9	SC12	SC14	SC18	SC21	SC24	SC25	SZ1	SZ2	SE1	SE2	SE3	SE4	SE5	SE6	SE7	SE8	SE9	SE10	SE11	SE12	SE15	SE17	SE25	SE30	遺構＼形態

△は出土可能性があるもの

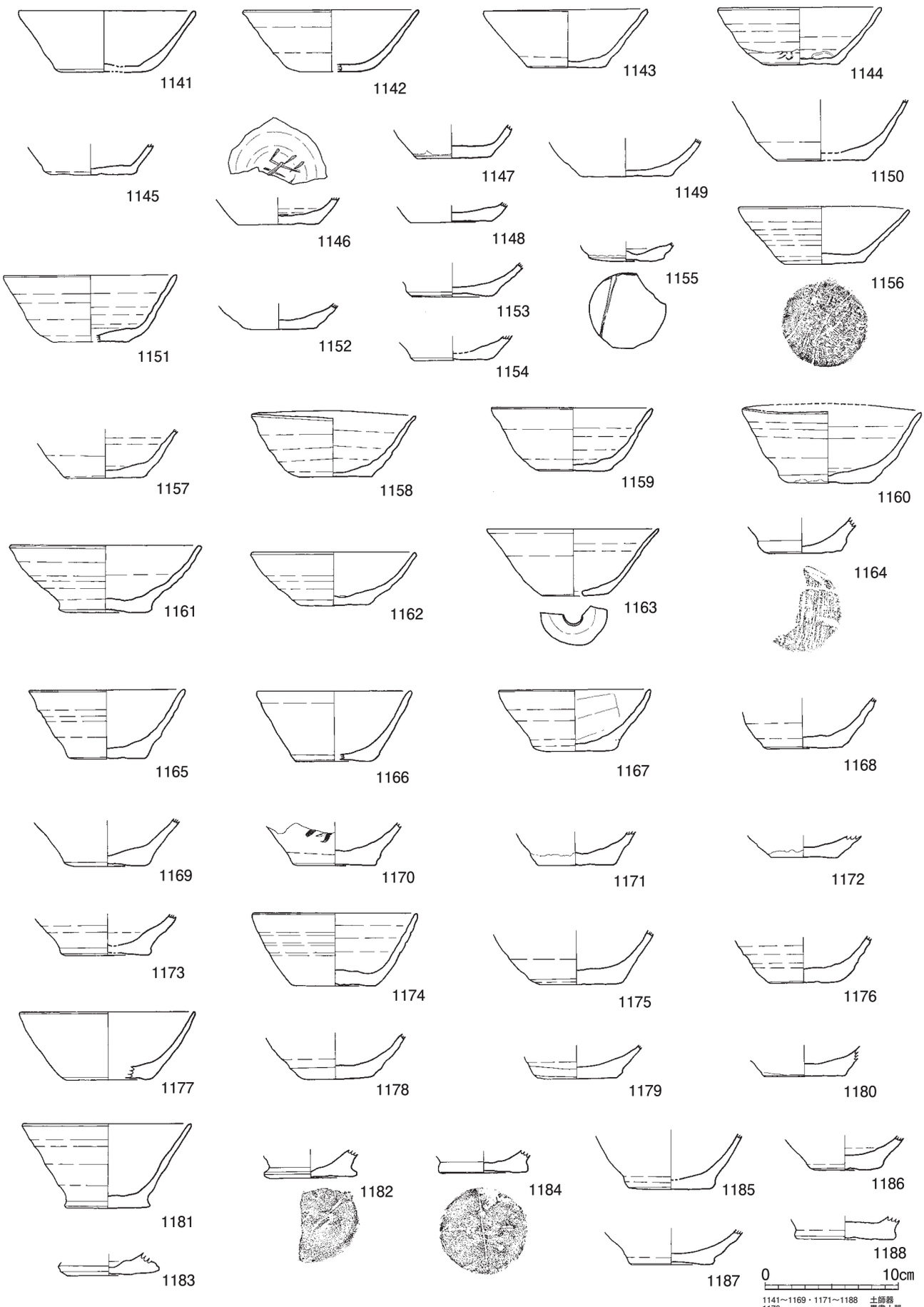
表８　遺構別出土遺物一覧



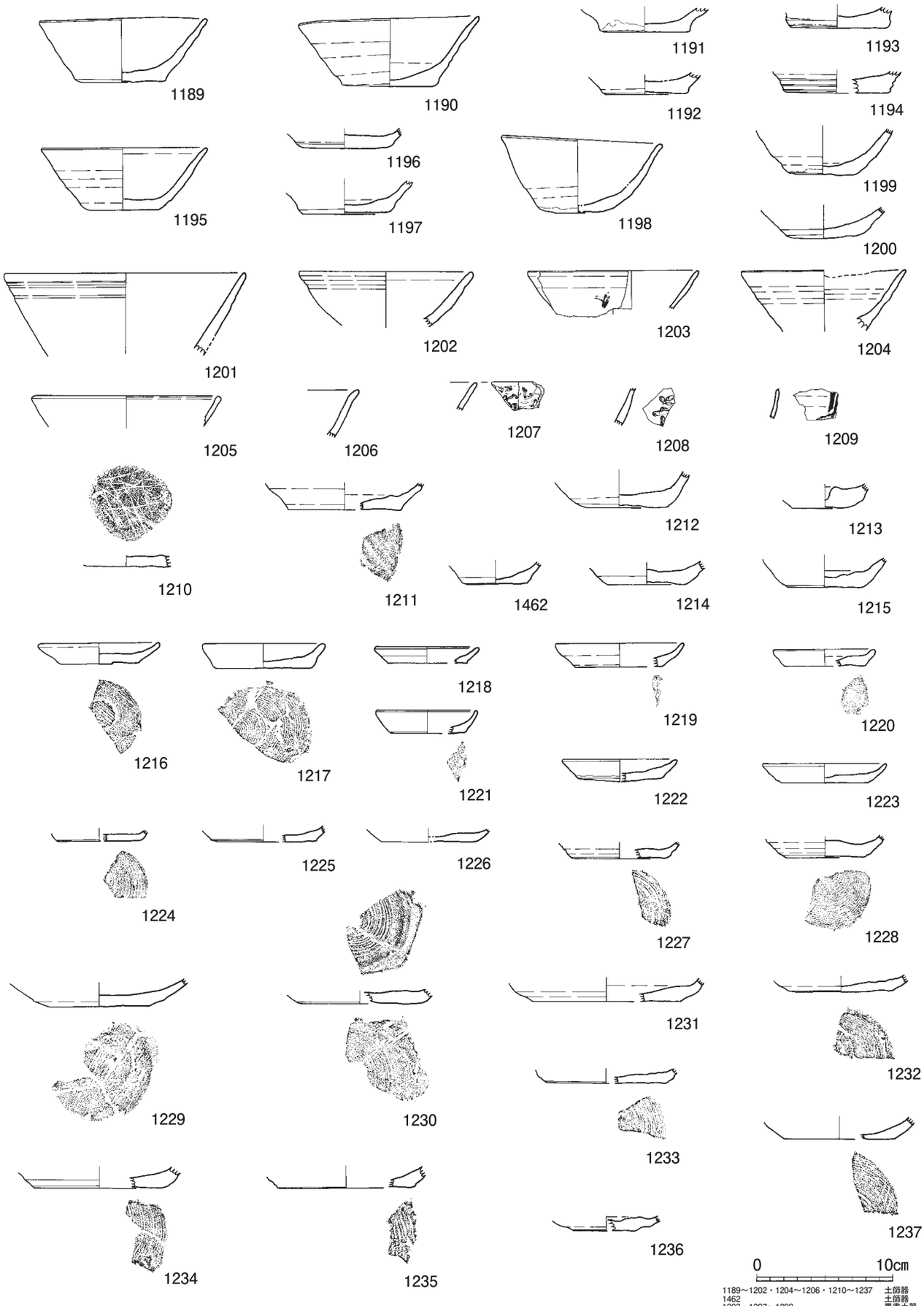
第90図　くぼ地出土遺物実測図



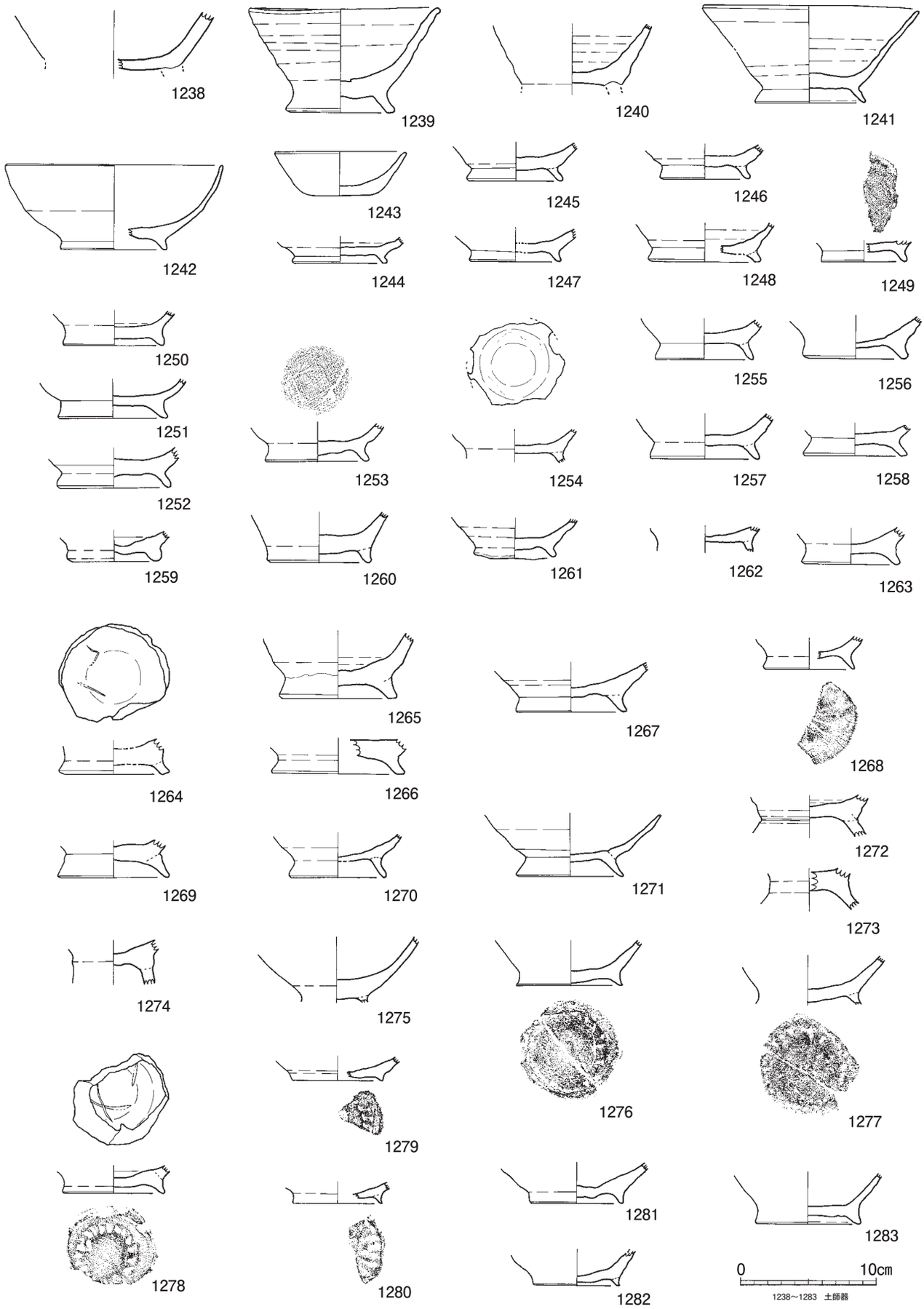
第91図　包含層出土遺物実測図（１）



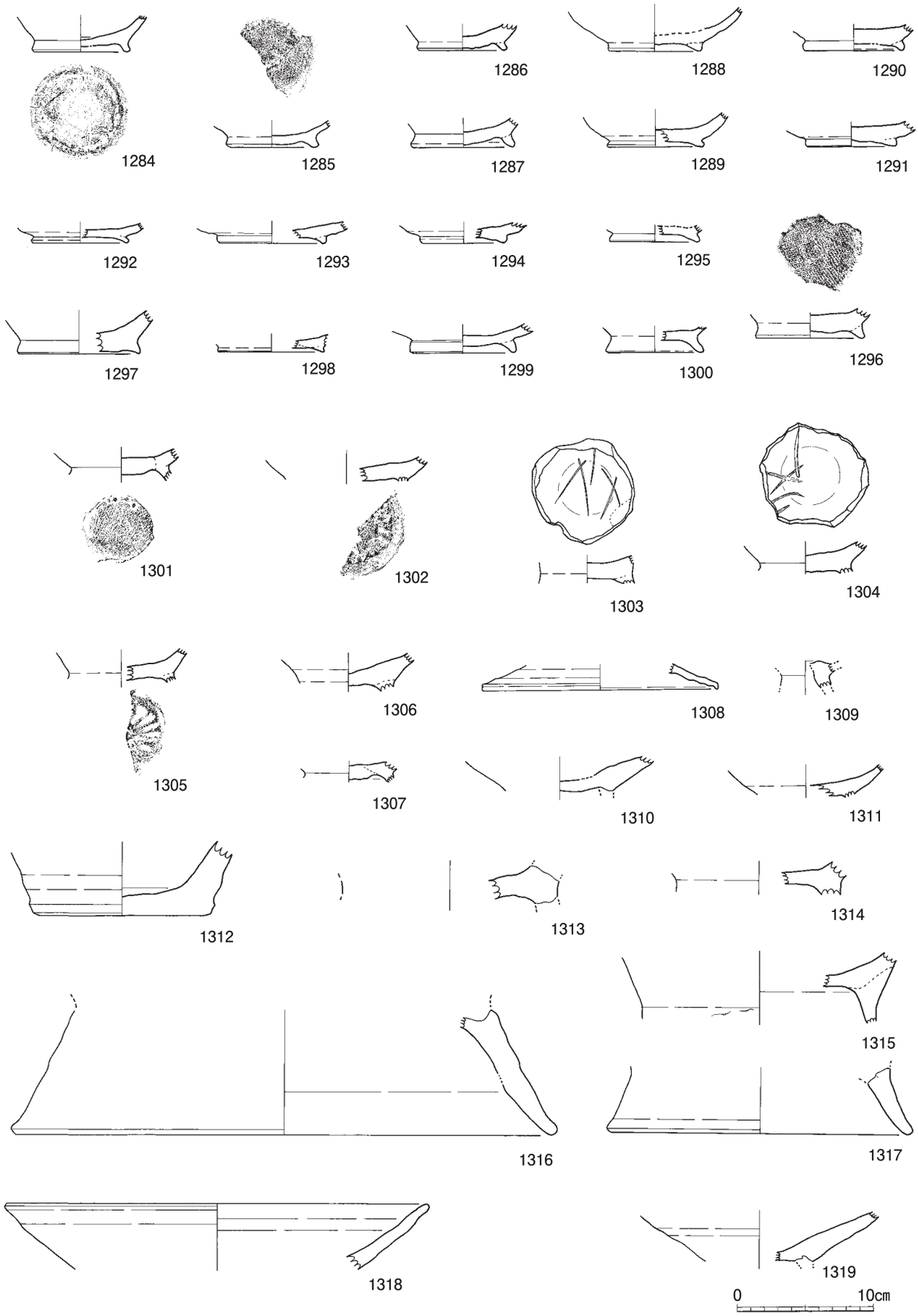
第92図　包含層出土遺物実測図（2）



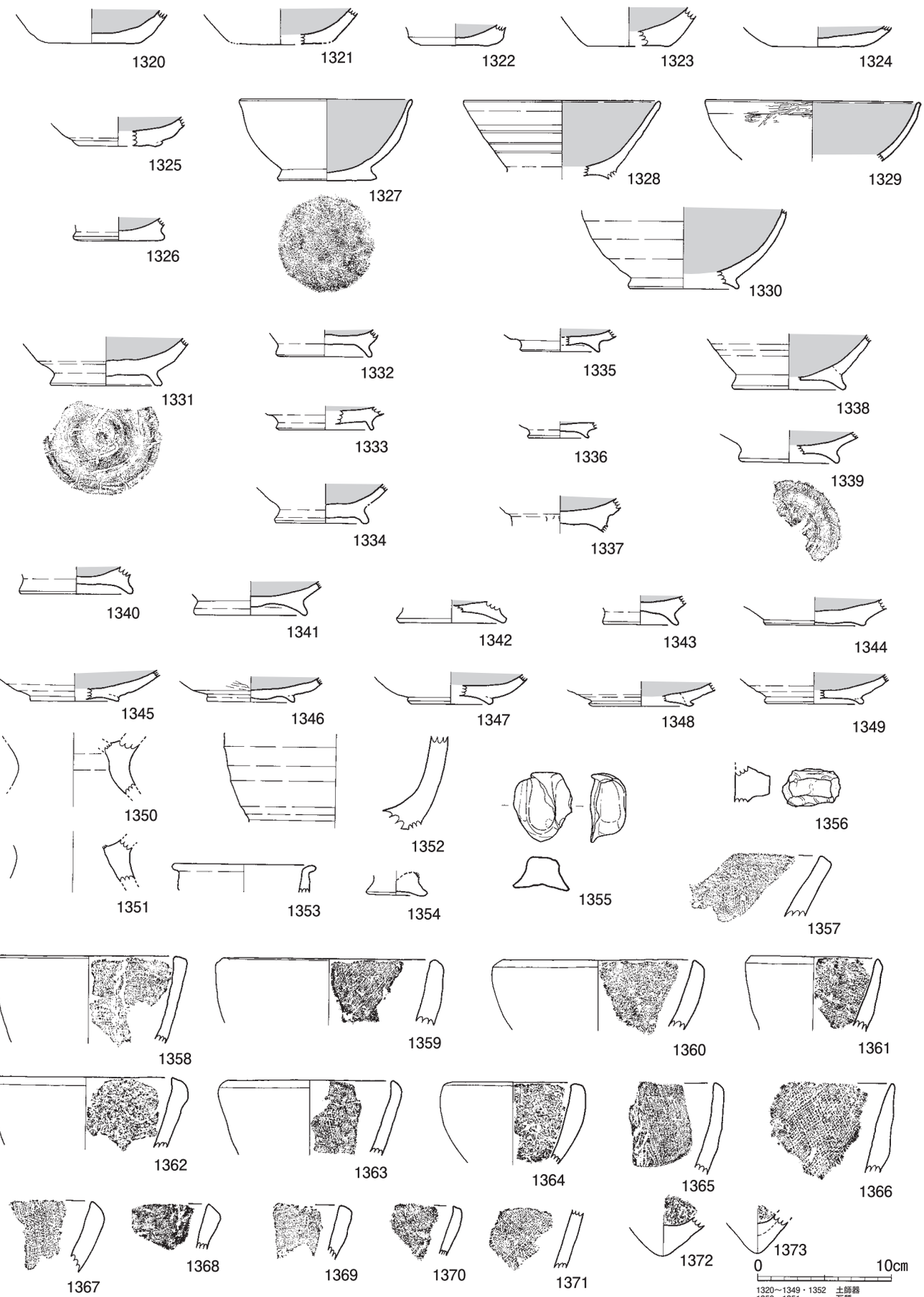
第93図　包含層出土遺物実測図（３）



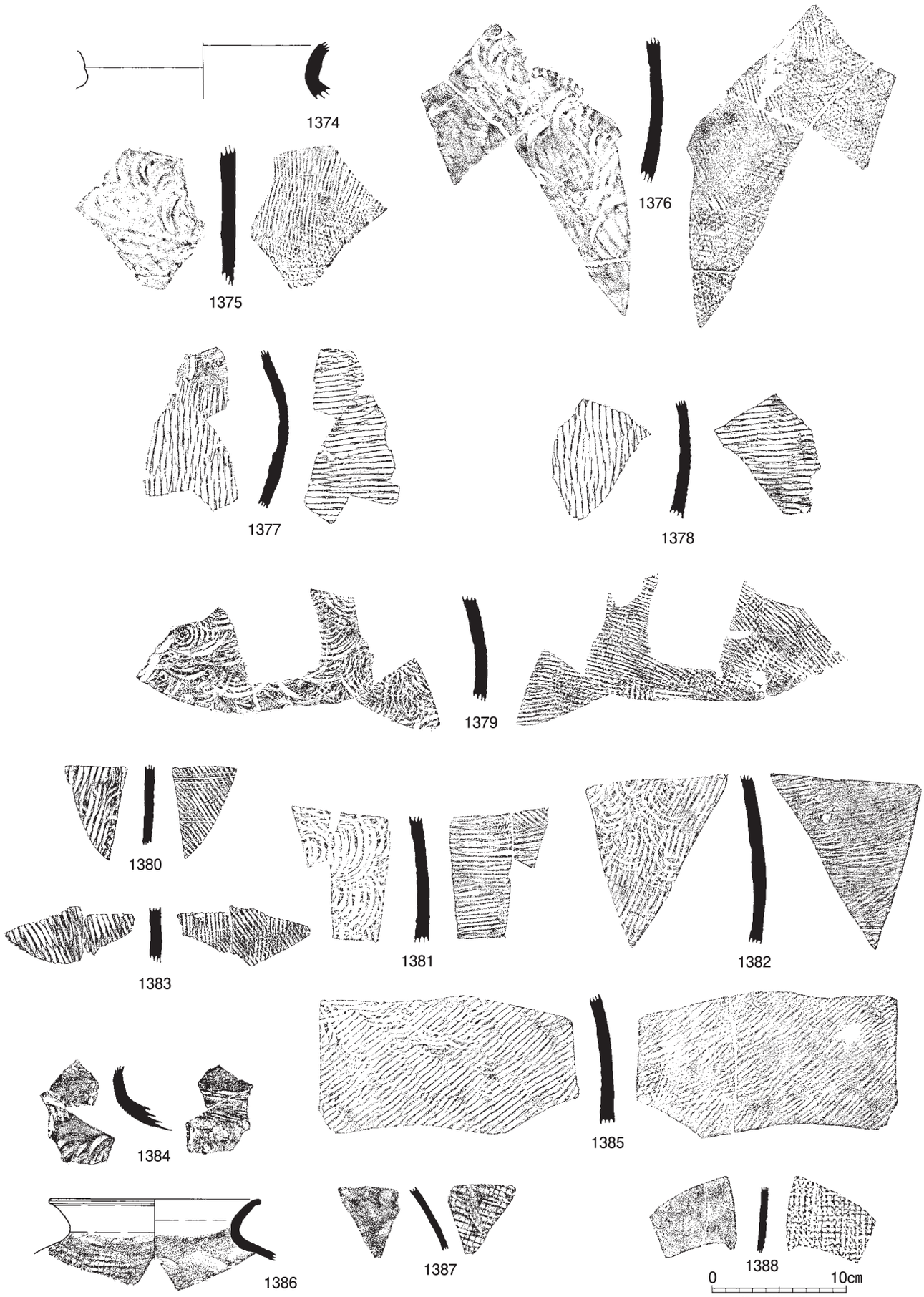
第94図　包含層出土遺物実測図（４）



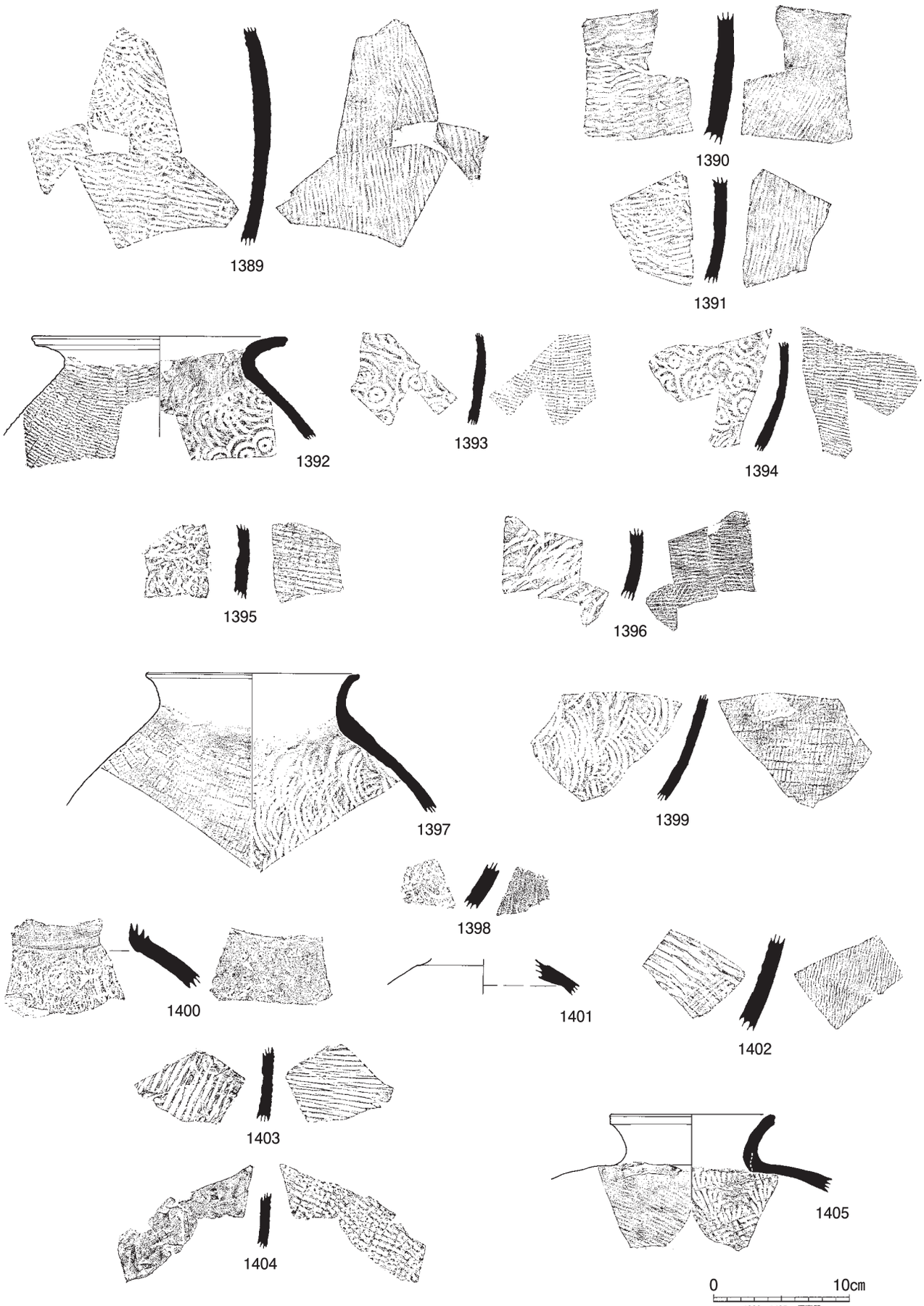
第95図　包含層出土遺物実測図（５）



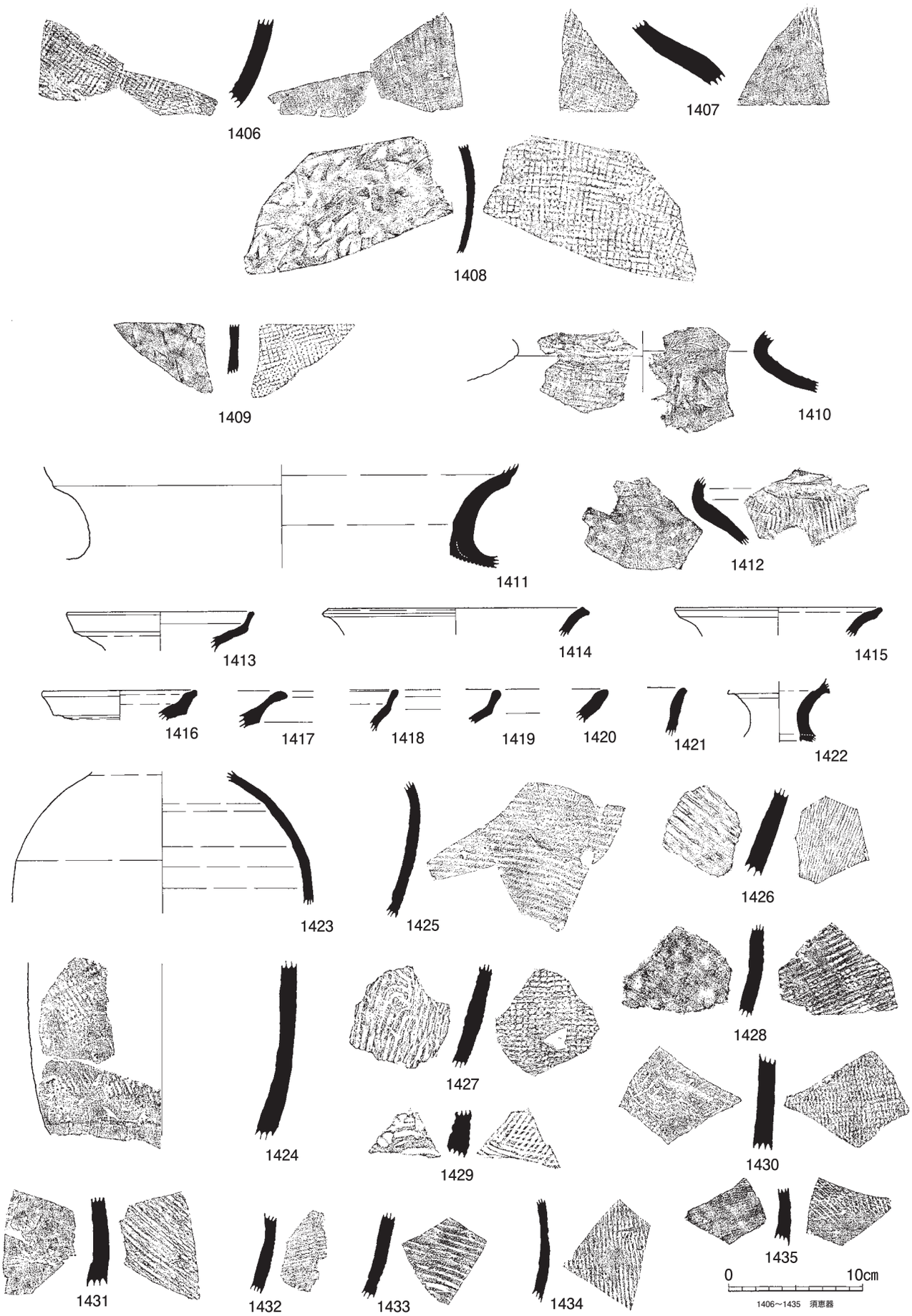
第96図　包含層出土遺物実測図（6）



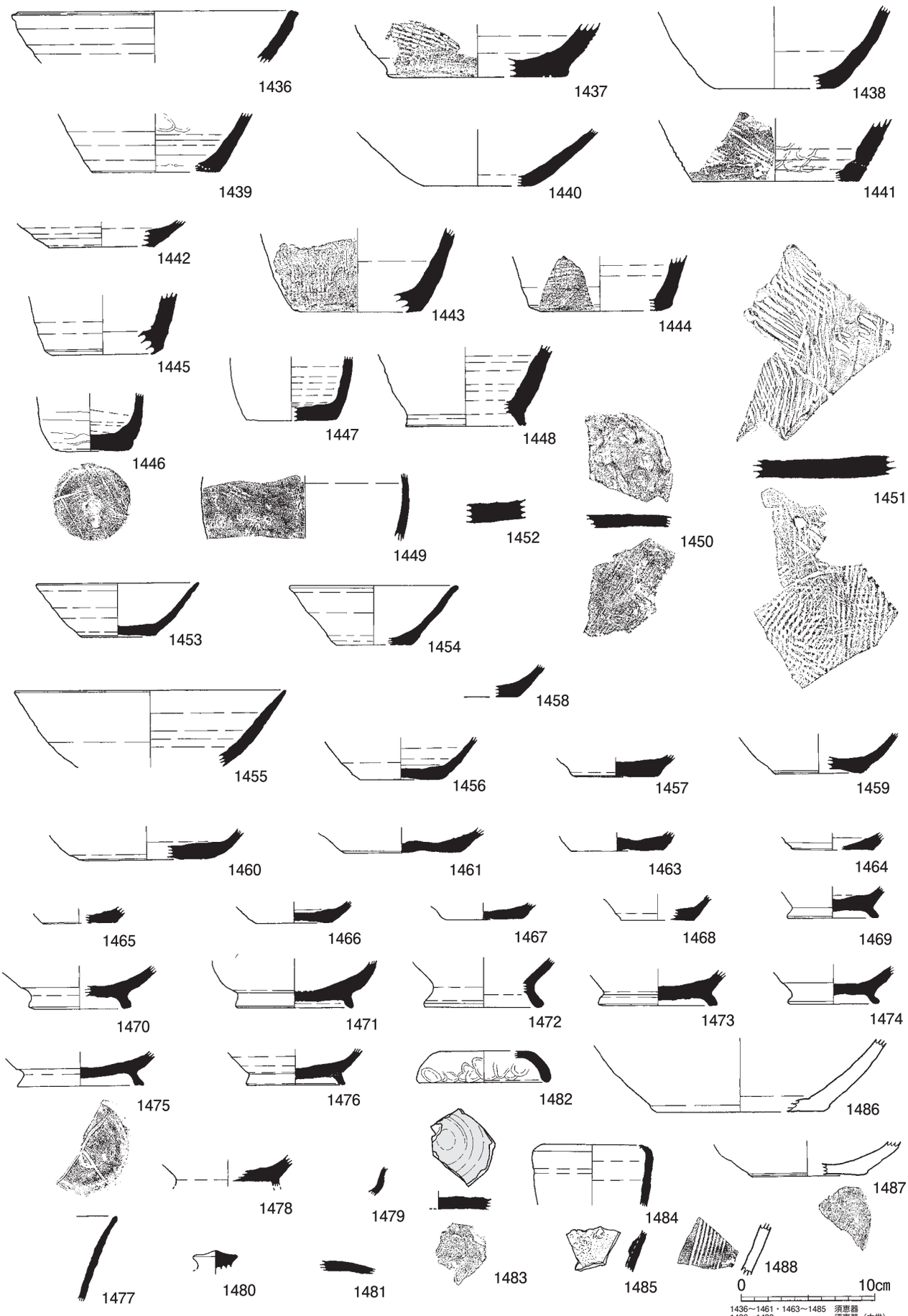
第97図　包含層出土遺物実測図（7）



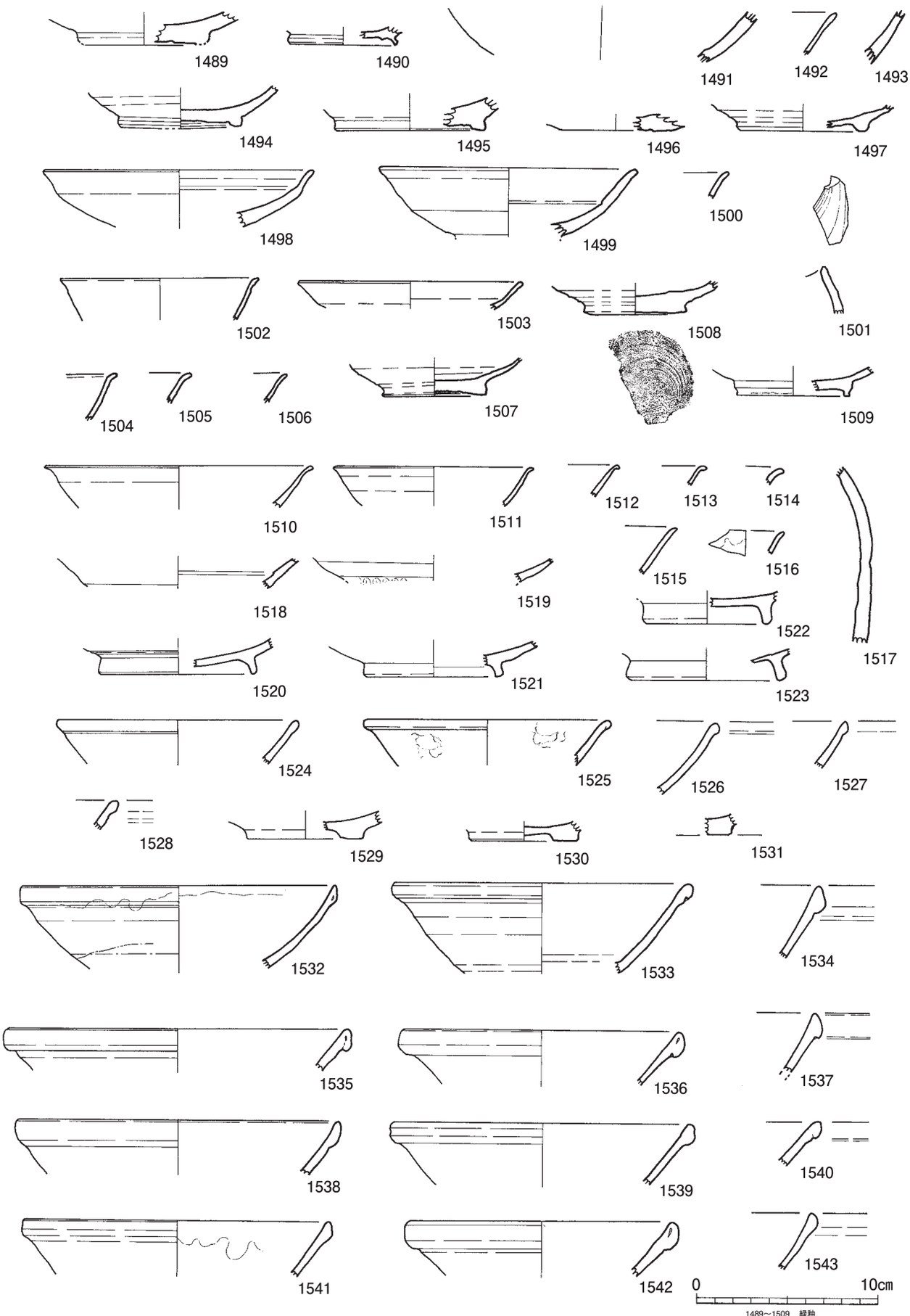
第98図　包含層出土遺物実測図（８）



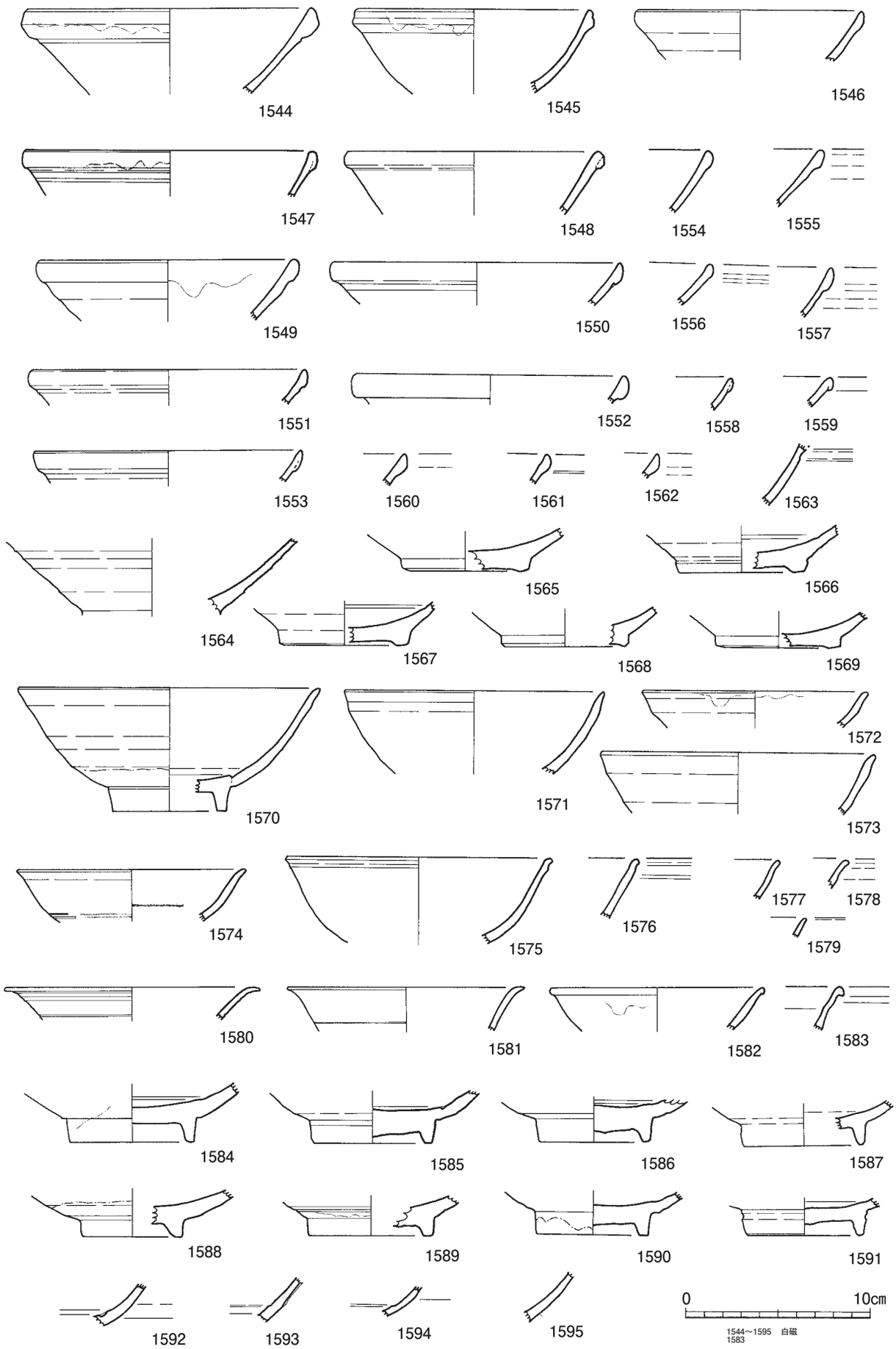
第99図　包含層出土遺物実測図（９）



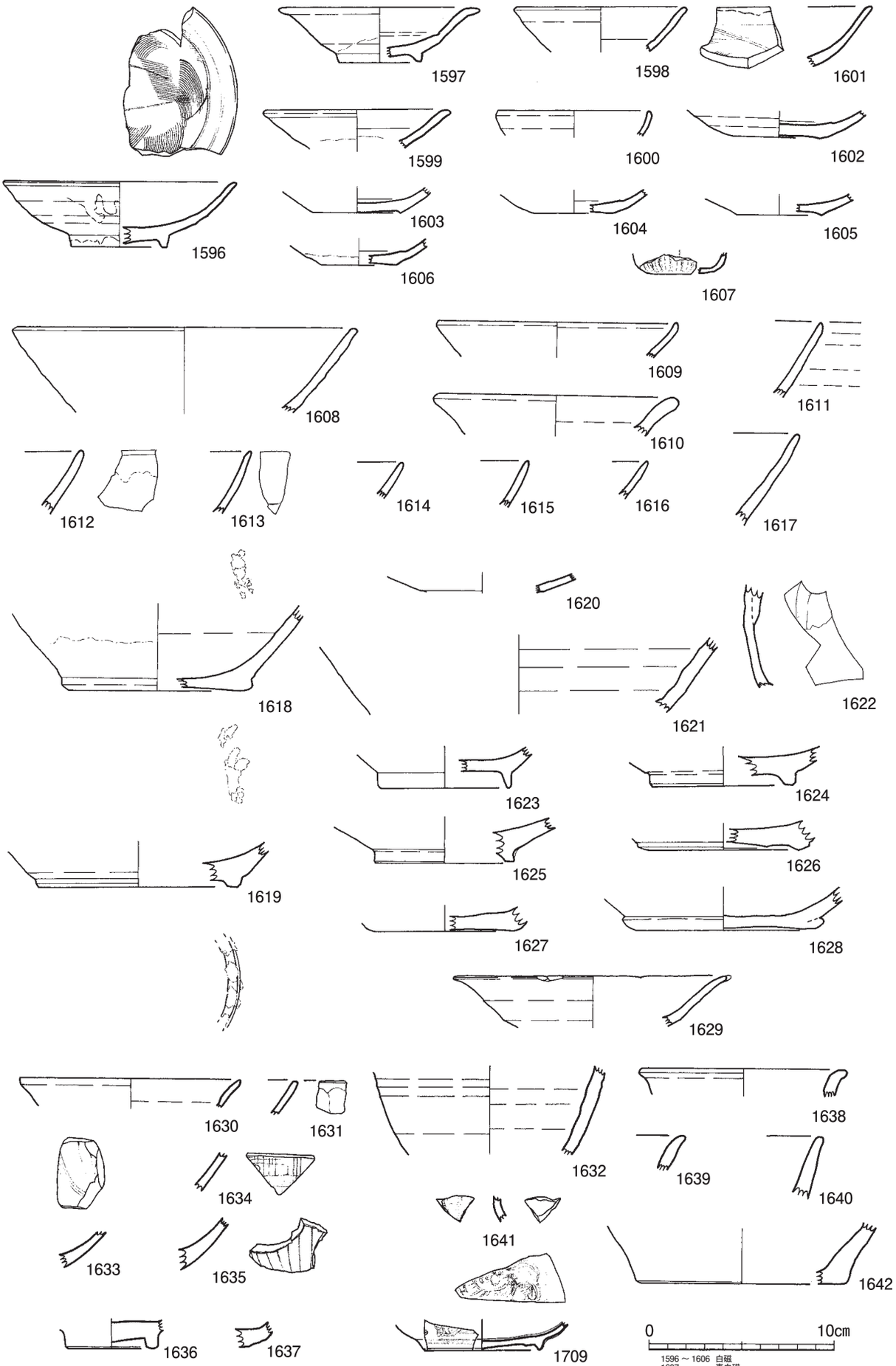
第100図　包含層出土遺物実測図（10）



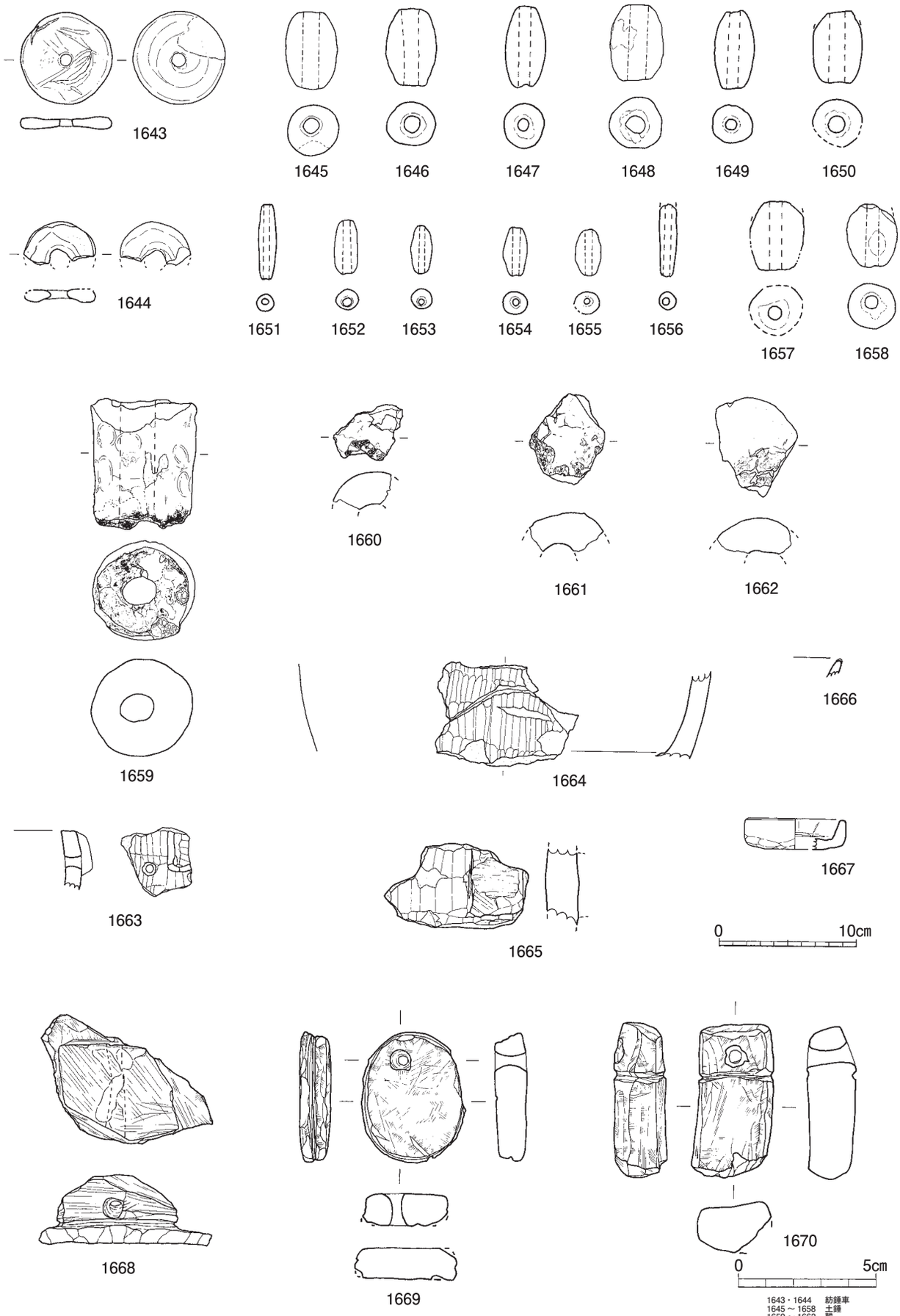
第101図　包含層出土遺物実測図（11）



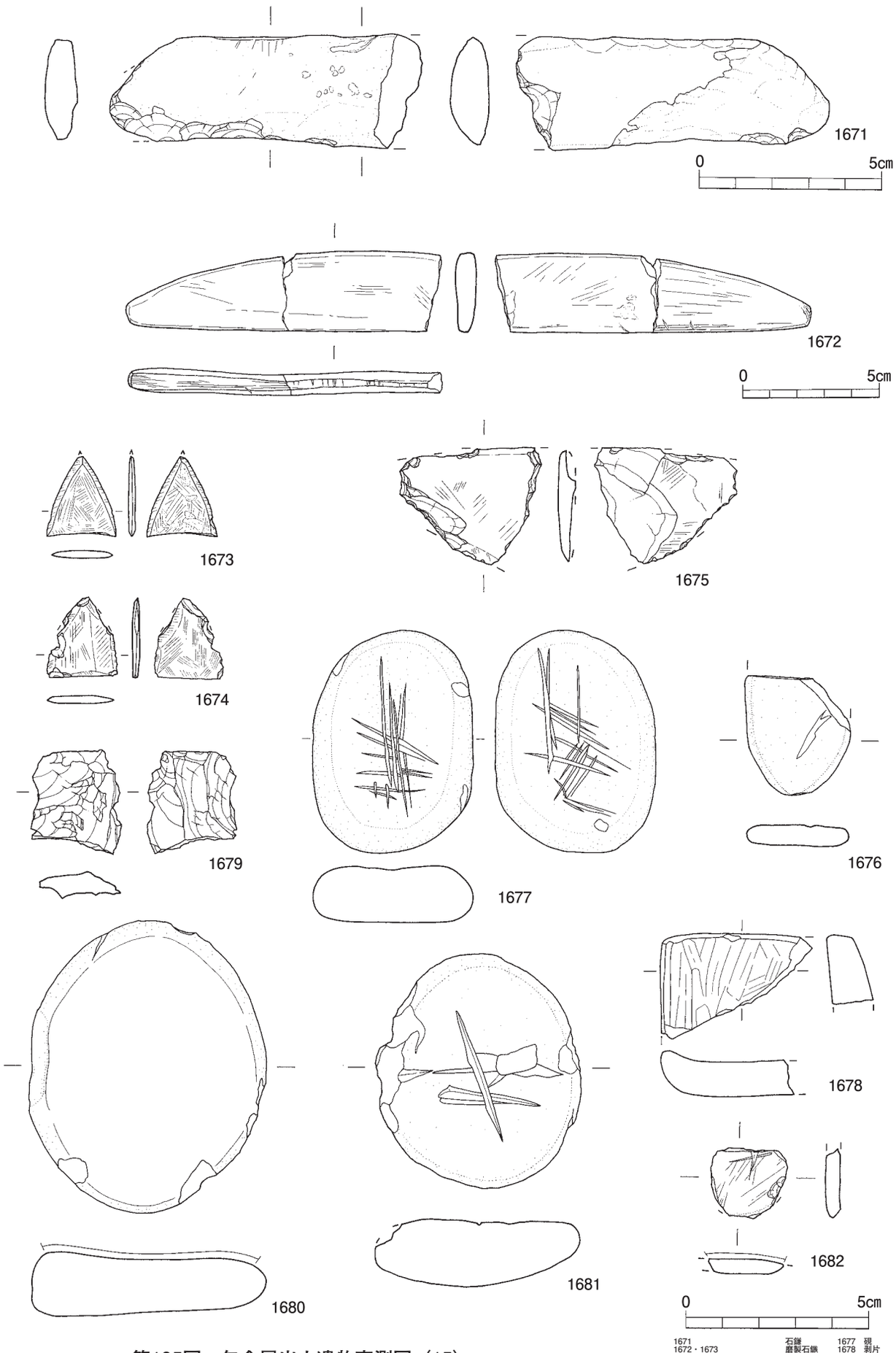
第102図　包含層出土遺物実測図（12）



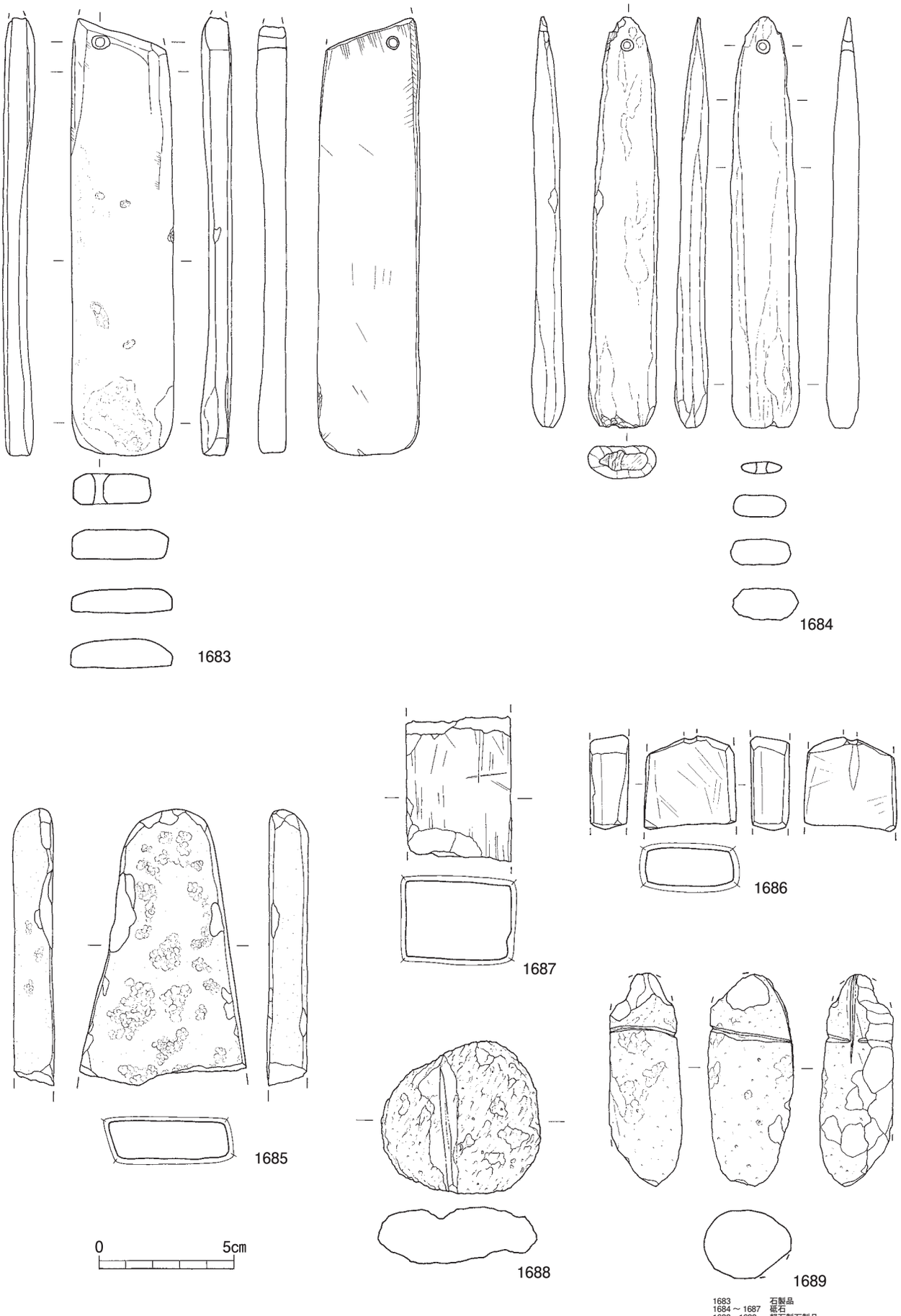
第103図　包含層出土遺物実測図（13）



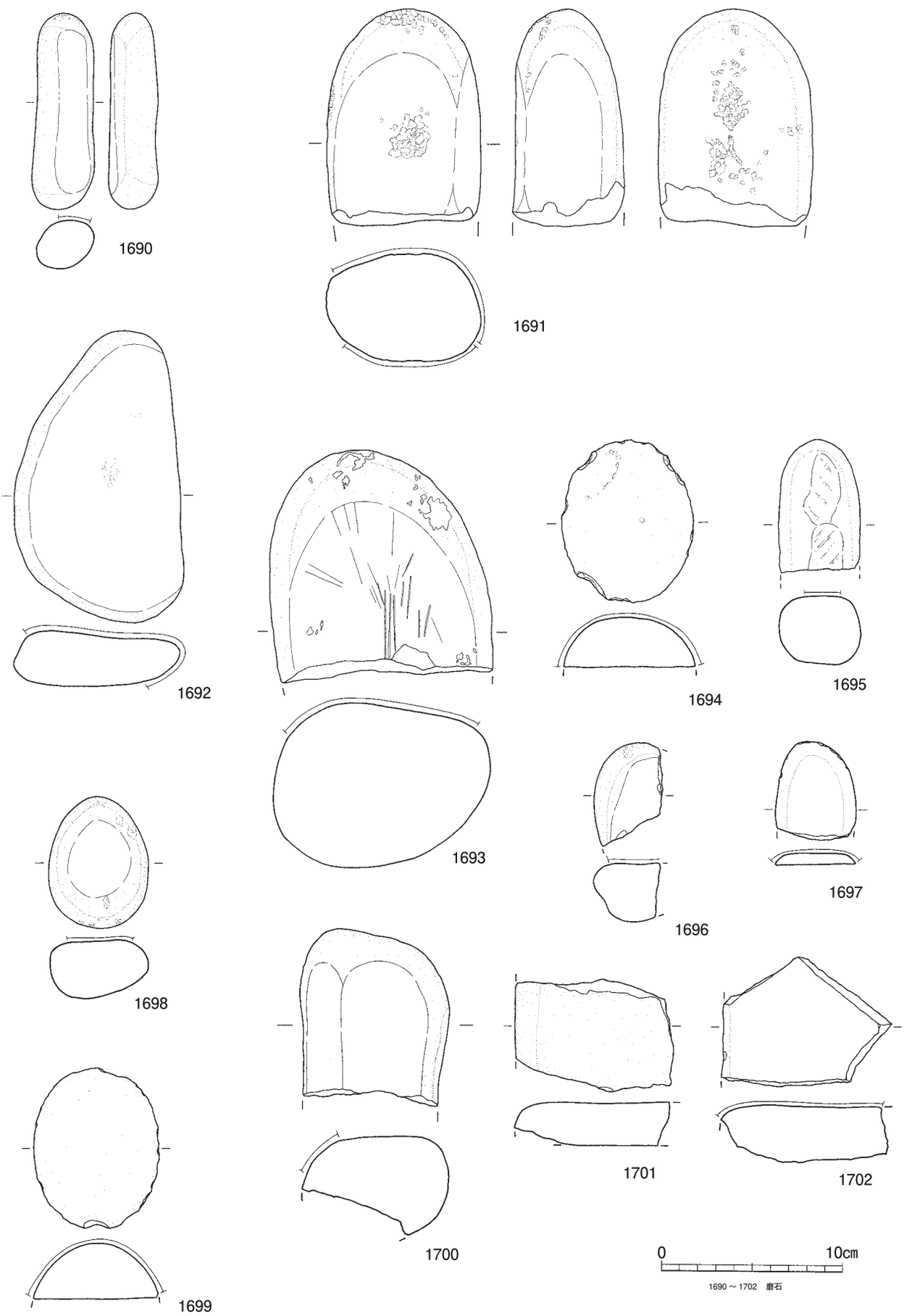
第104図　包含層出土遺物実測図（14）



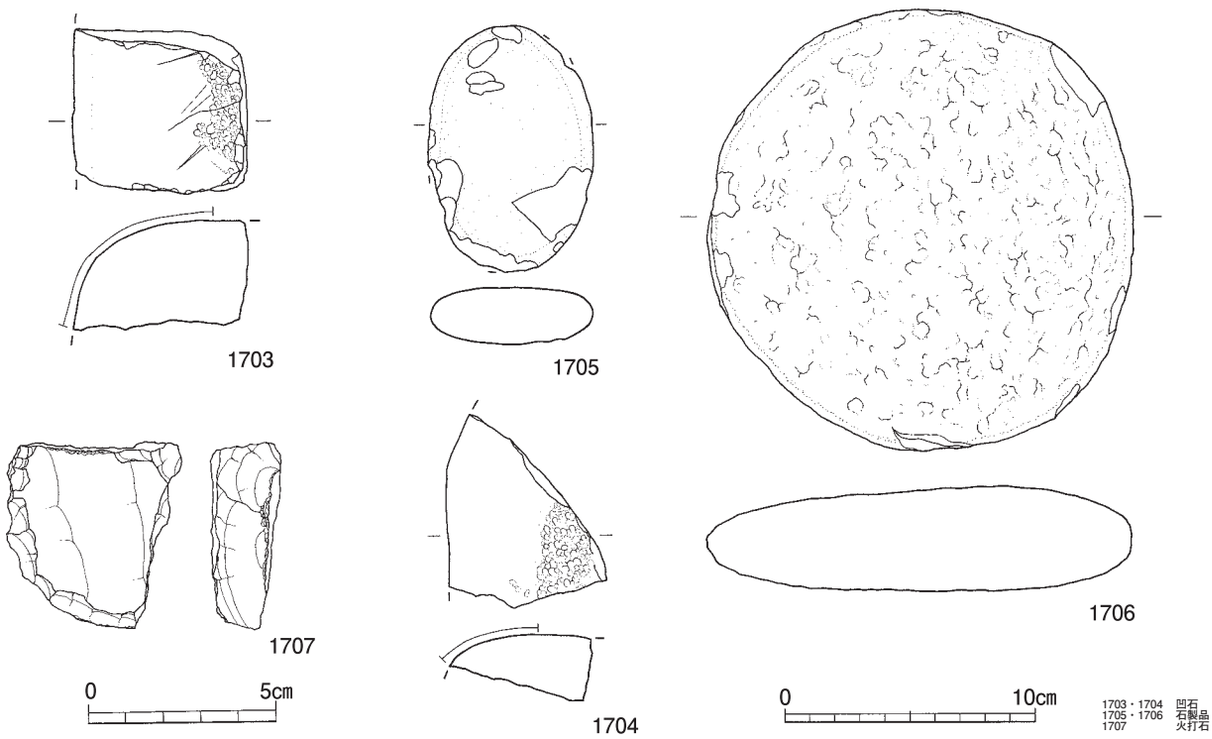
第105図　包含層出土遺物実測図（15）



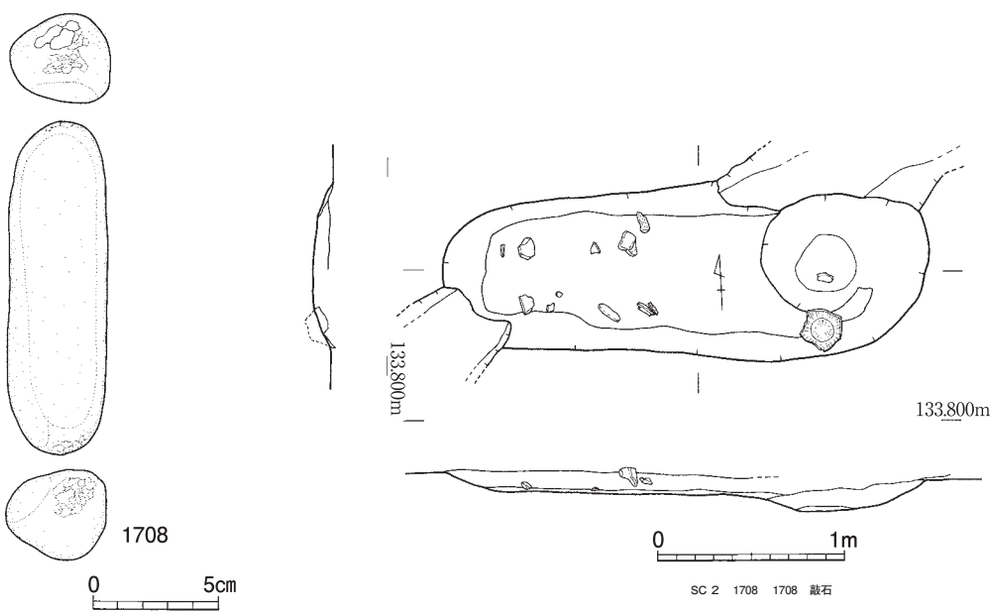
第106図　包含層出土遺物実測図（16）



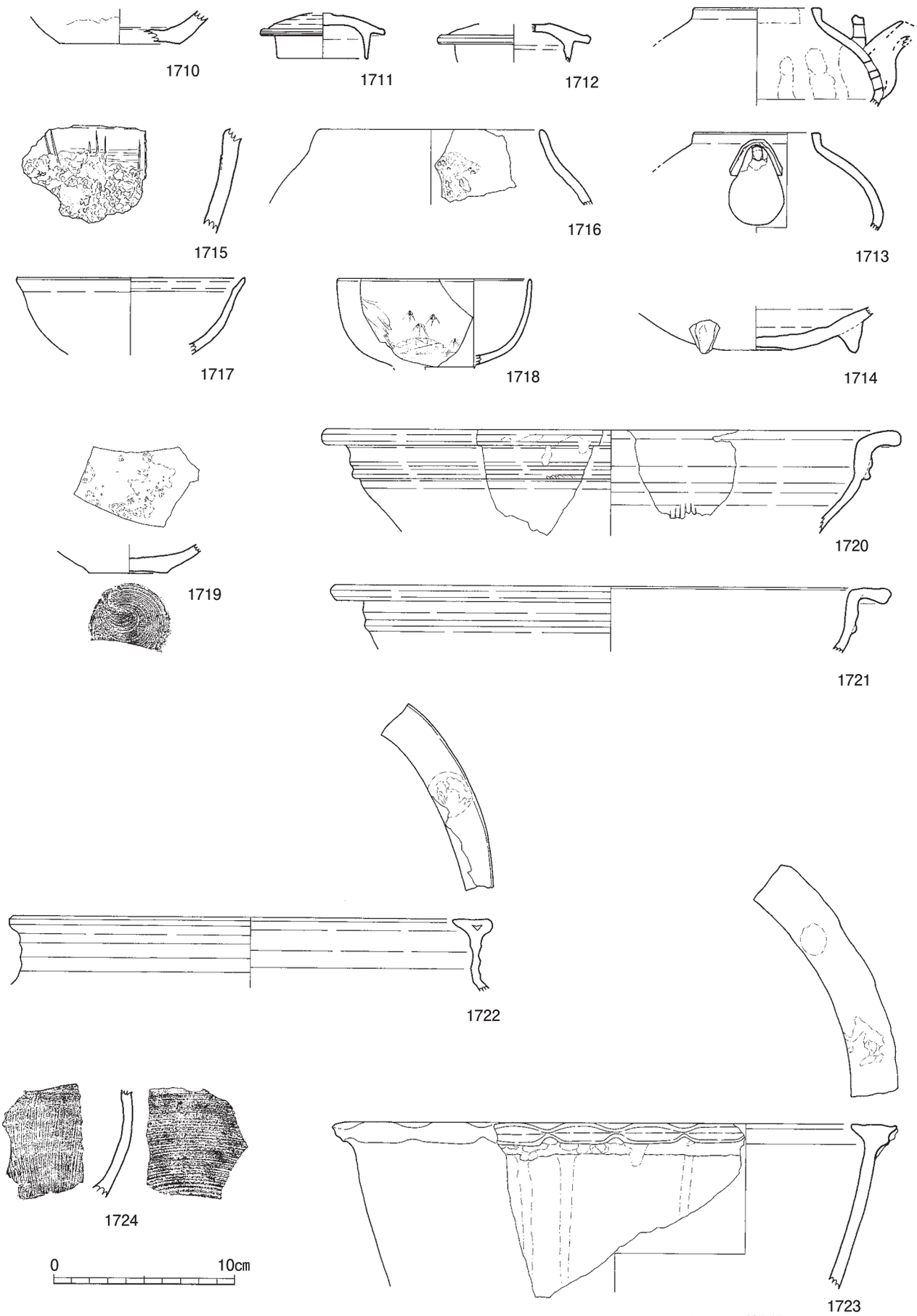
第107図　包含層出土遺物実測図（17）



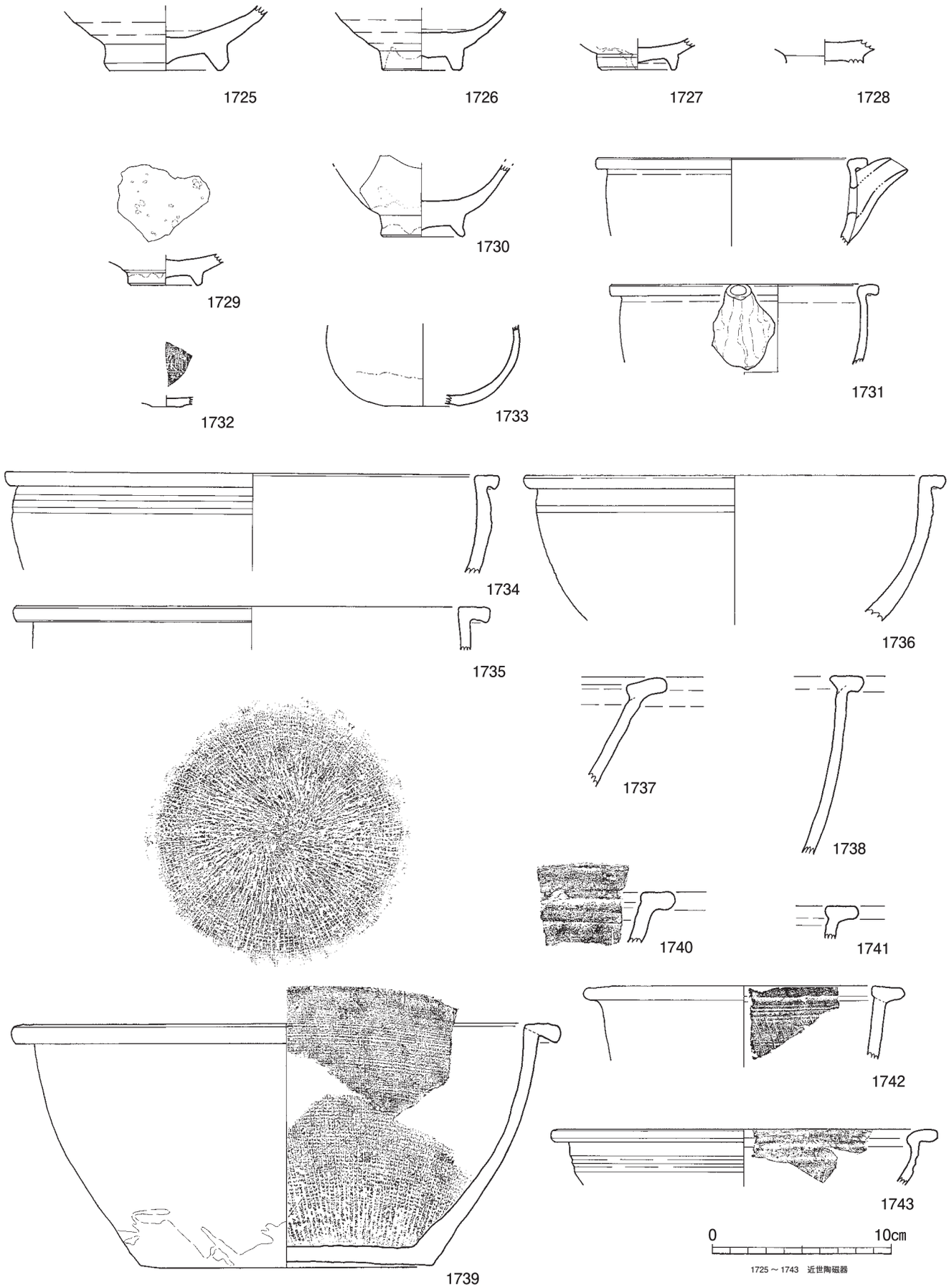
第108図　包含層出土遺物実測図（18）



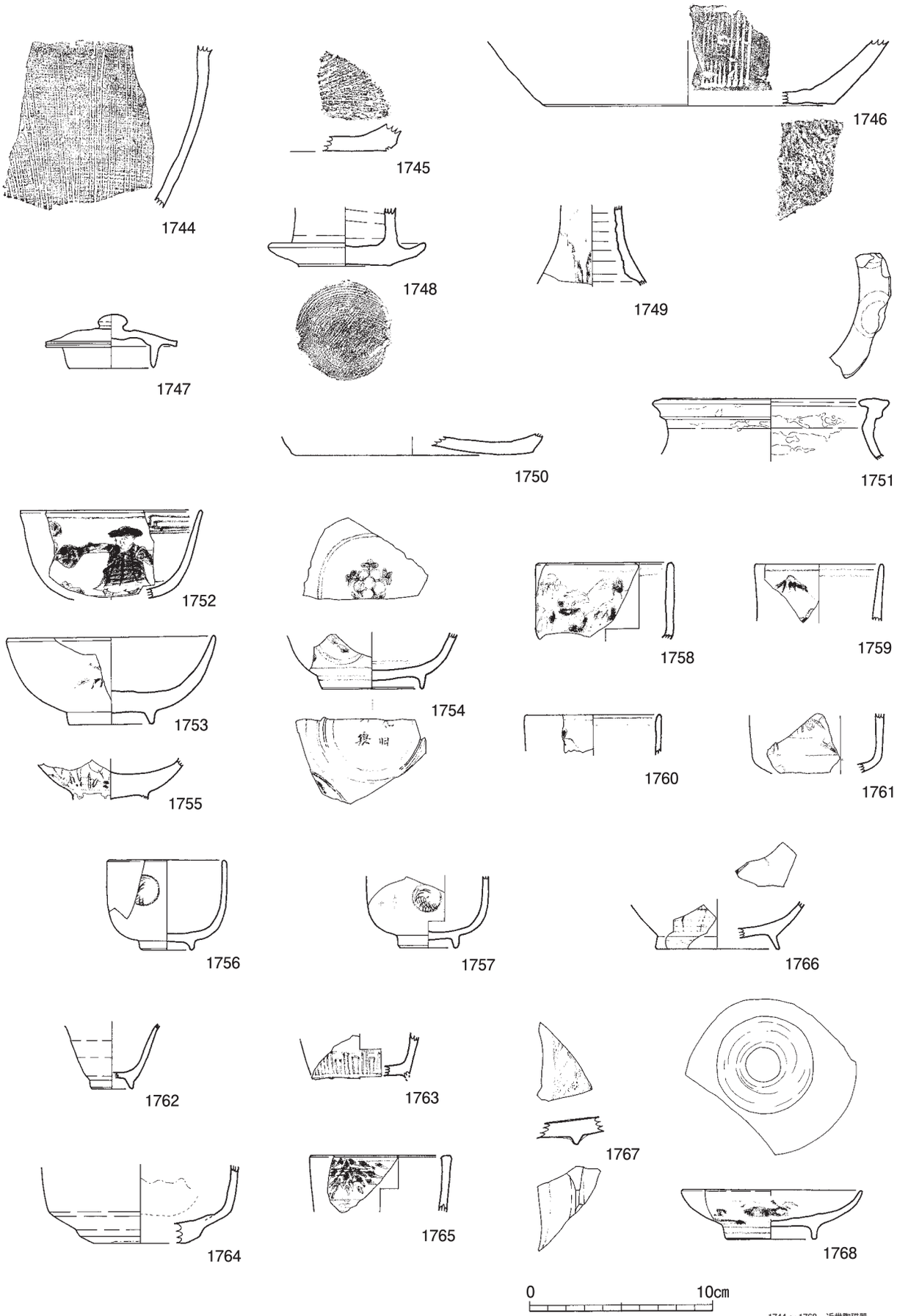
第109図　SC ２実測図



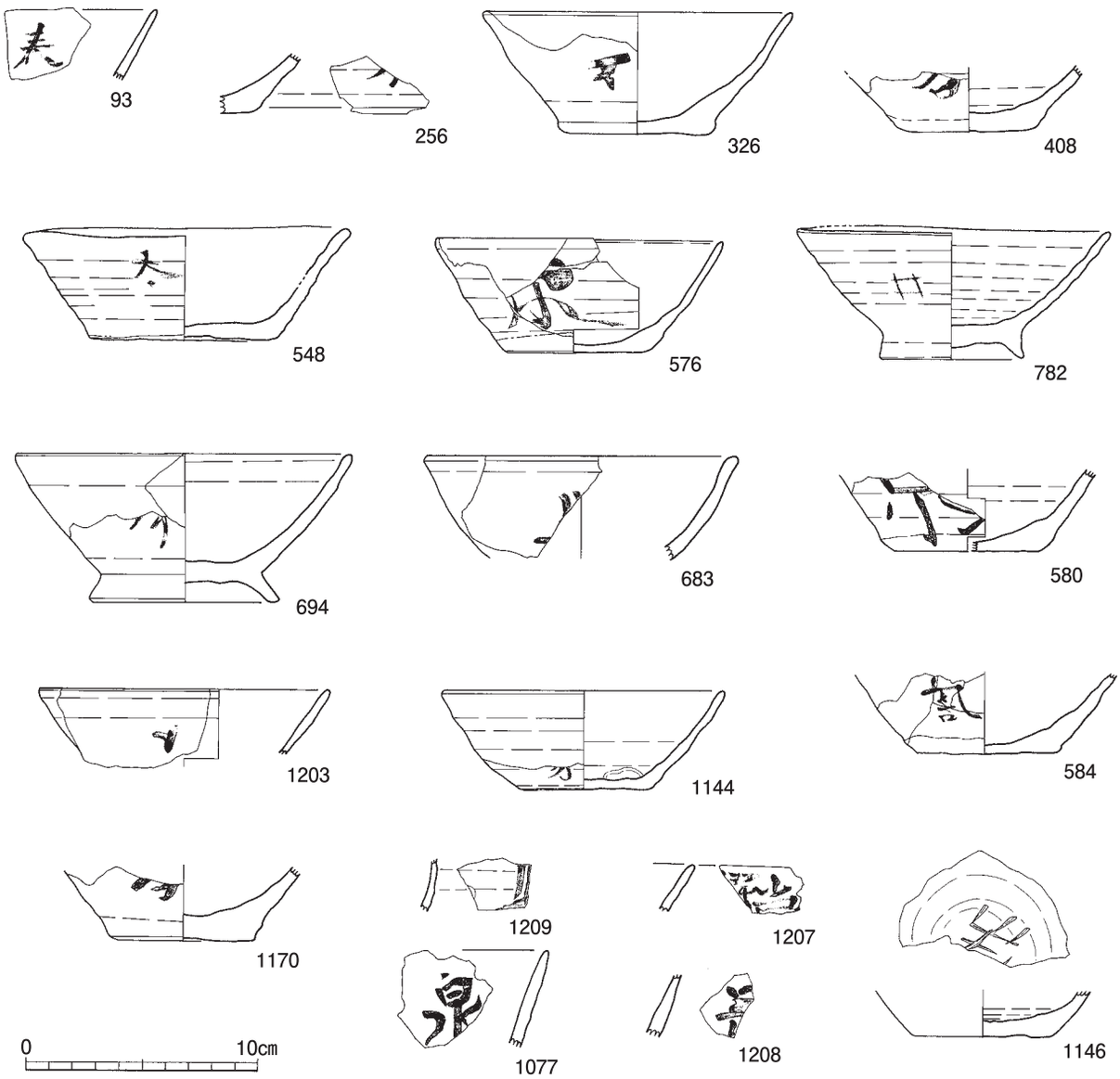
第110図　包含層出土遺物実測図（19）



第111図　包含層出土遺物実測図（20）



第112図　包含層出土遺物実測図（21）



SB	93	
SE 2	256	
SE 6	326	墨書土器
SE11	408	
SL 1	548・576・580・584・683・694・782	
くぼ地	1077	
包含層	1144・1170・1203・1207・1208・1209	
包含層	1146	線刻

第113図　墨書土器・刻書土器遺物実測図（S=1/3）

7　鉄製品

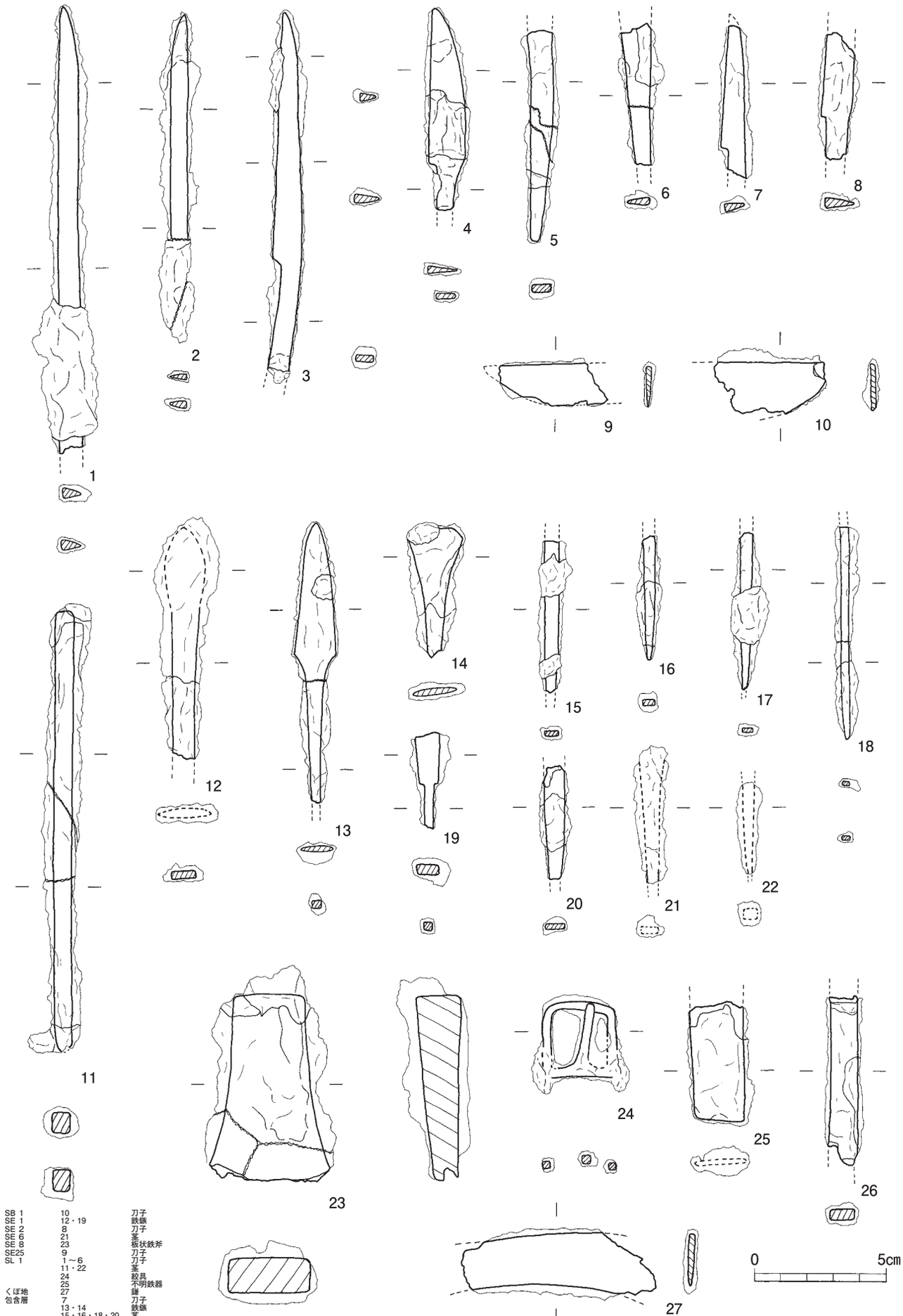
本遺跡からは数多くの鉄製品や金属滓が出土している。1～10は刀子と考えられ、特徴としては刃部側に関部があるのではなく背部側にあり、刃部側は明確な関部が認められず緩やかな曲線を呈している。1～3は15㎝前後あり、刀子であると考えられるが、4～8については小型であり古代の遺物と考えると、鉇ではないかとも推測することができる。8世紀代になると様々な工具が揃いだす時期でもあるため、単に形態だけで判断するのが困難でもある。そのため、刀子か鉇かの見分け方の一つとして、刃部が反っているかどうかであるが、出土した鉄器は錆びがひどく判断することはできないことから、鉇である可能性も指摘しておく。11は錆がひどく、先端部も欠損しており不明であるため、棒状鉄器としているが、刀子と同様に考えると、鑿や鉄鉗の一部の可能性も考えられる。9～10は刀子などの刃先部分のみであると考えられる。10は先端部が折れ曲がっている。12～14は鉄鏃として報告しているが、刀子と同様に考えると、鉇の可能性も考えられる。15～22は茎部分のみが残存しており器種については不明であるが、刀子・鉄鏃・鉇などの茎部分と考えられる。19は関部分が両関であるため鉄鏃と考えられる。23は板状鉄斧と考えられる。基部幅2.7㎝、刃部幅4.5㎝であり、基部より刃部の幅が広く、基部から外反しながら刃部となる。刃部先端は錆の進行により膨らみ割れている。刀子や鉄鏃と同様に考えると釿という可能性も考えられる。24は絞具である。25～27は不明鉄器であるが、27は緩やかな曲線であり、その内側が刃部であるため鎌ではないかと推測する。28は羽口の破片で、鉄分やガラス質が付着している。29～37は金属滓である。これらは分析を実施していなく、鉄滓か銅滓か判断がつかない。そのため、ここでは金属滓として報告する。しかし、ほとんどが鉄滓ではないかと考えられ、29～31は碗型滓であると考えられる。32は土や小石が付着し、錆が周辺の土ごと巻き込んだ形であると考えられる。37は鉄滓と考えられ、有機質物質が多く付着している。

遺構などは確認できていないが、羽口や金属滓の他に坩堝の破片（933～935）も出土しているため、金属の精錬を行っていたと考えられる。また、坩堝の932と933の内面の一部に銅の錆である緑青がみられたため、奈良文化財研究所の高妻洋成氏に932と933の坩堝と出土時に違和感があった金属滓の合計4点の蛍光X線元素分析を依頼した。分析結果については後に掲載しているとおりである。結果からみると銅についても精錬を行っていたと考えられる。しかし、残念なことに炉や鋳型などの遺構・遺物は確認されず、銅製品に関しても出土していない。

表9　鉄器計測表　　（単位：㎝）

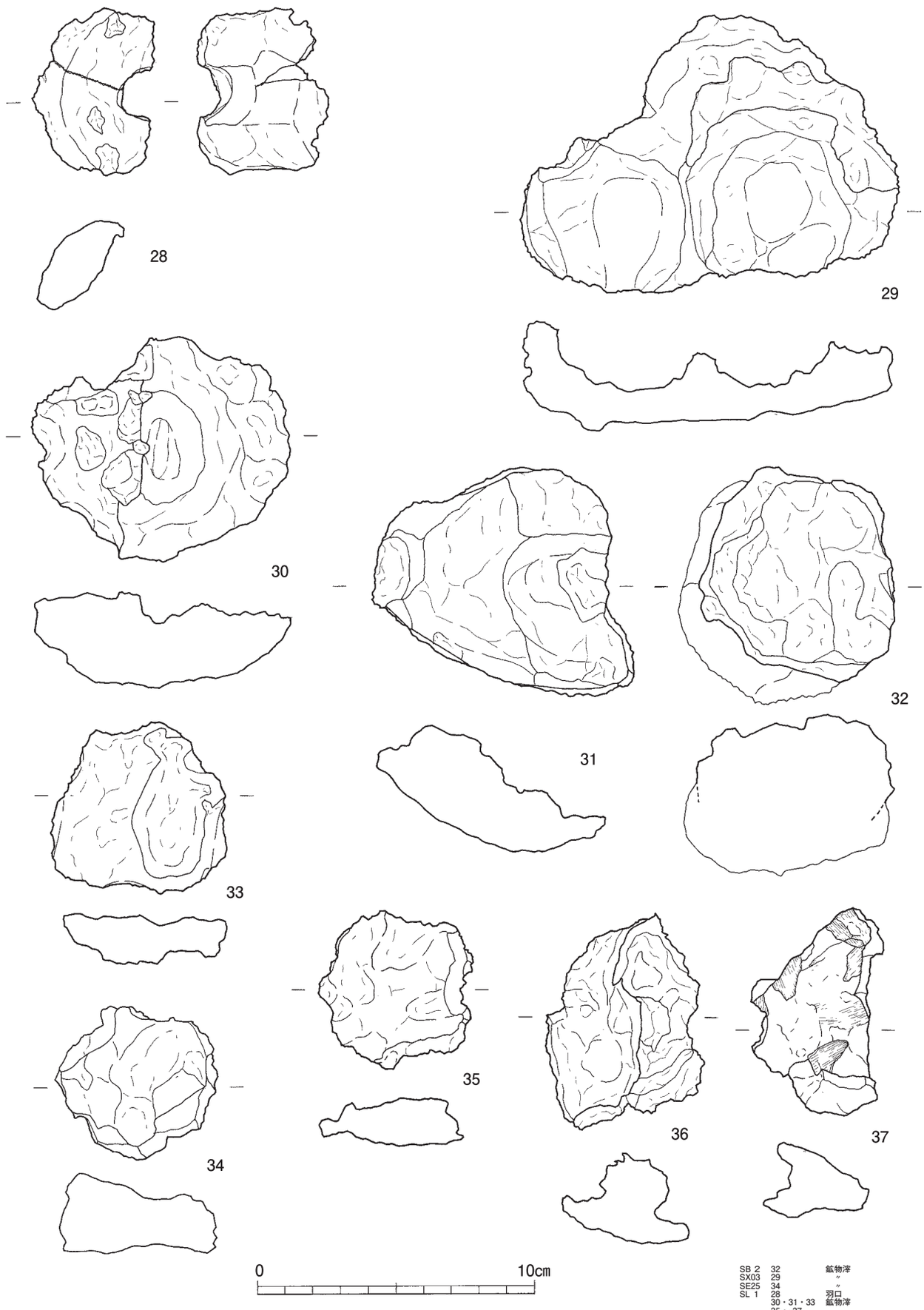
No.	遺　構	種　類	残存長	残存幅	残存厚
1	SL1	刀子	16.7	0.8	0.4
2	SL1西側（井戸前）広がり	刀子	12.3	0.6	0.3
3	SL1-1	刀子	14.5	1.1	0.3
4	SEI	刀子	7.7	1.3	0.3
5	SL1	刀子	8.0	0.8	0.3
6	SL1	刀子	5.3	1.2	0.5
7	C9	刀子	5.7	0.9	0.3
8	SE2	刀子	4.8	1.2	0.4
9	SE25	刀子	4.1	1.6	0.2
10	SB1　柱穴	刀子	(4.2)	(2.0)	(0.2)
11	SL1	棒状鉄器	16.5	0.8	0.8
12	SE1	鉄鏃	(8.7)	(2.0)	(0.3)
13	D9グリッド	鉄鏃	10.6	1.7	0.2
14	G9グリッド一括	鉄鏃	5.2	2.1	0.2
15	B9グリッド	茎	5.8	0.6	0.2
16	H5グリッド	茎	4.7	0.4	0.2
17	出土柱穴不明	茎	5.9	0.5	0.2
18	トレンチ5	茎	8.1	0.3	0.2
19	SE1	鉄鏃	(3.6)	(1.0)	(0.4)

No.	遺　構	種　類	残存長	残存幅	残存厚
20	D10	茎	4.2	0.8	0.2
21	SE6	茎	(5.2)	(1.0)	(0.2)
22	SL1	茎	3.4	0.5	0.4
23	SE8	板状鉄斧	7.0	4.5	1.8
24	SL1	絞具	3.5	2.3	0.3
25	SL1	不明鉄器	4.6	2.0	0.2
26	中央区北	不明鉄器	6.3	1.0	0.5
27	くぼ地4	鎌	7.3	2.2	0.2
28	SL1	羽口	6.0	4.8	1.8
29	拡張区　SX03内	金属滓	13.6	10.0	4.4
30	SL1	金属滓	8.1	9.2	3.3
31	SL1（SE7）	金属滓	8.3	9.5	3.0
32	SB2	金属滓	8.5	7.4	5.3
33	SL1	金属滓	6.1	6.3	1.7
34	SE25	金属滓	5.4	5.8	2.9
35	SL1	金属滓	5.7	5.5	1.7
36	SL1	金属滓	7.8	5.5	3.2
37	SL1	金属滓	7.4	4.7	2.5

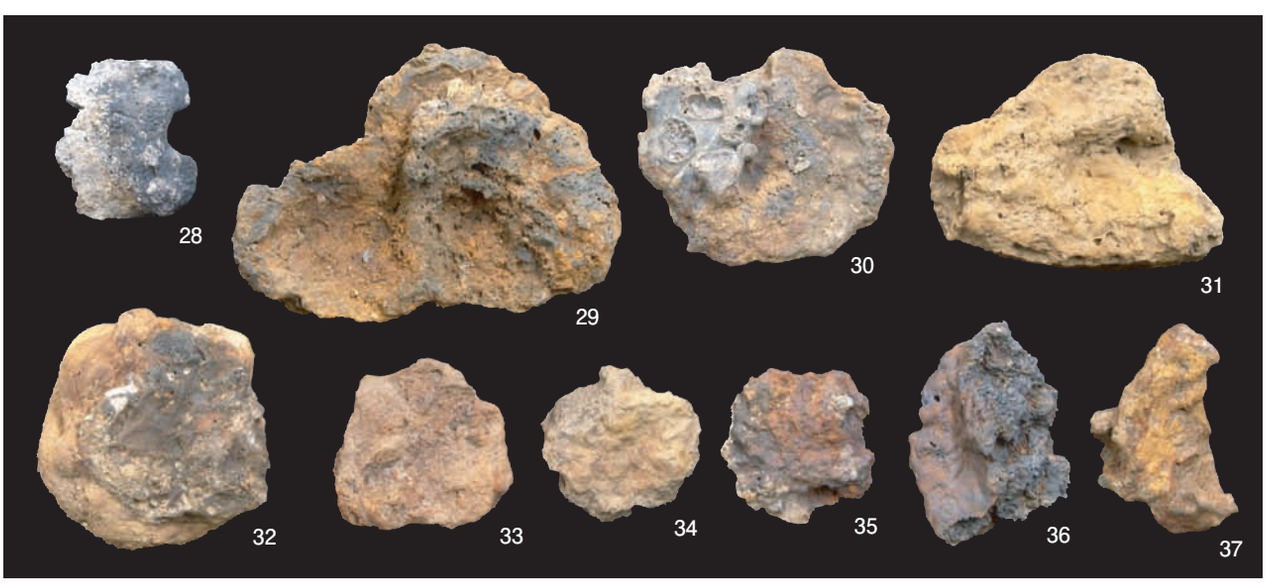


SB 1	10	刀子
SE 1	12・19	鉄鏃
SE 2	8	刀子
SE 6	21	茎
SE 8	23	板状鉄斧
SE25	9	刀子
SL 1	1～6	刀子
	11・22	茎
	24	鉸具
	25	不明鉄器
くぼ地	27	鎌
包含層	7	刀子
	13・14	鉄鏃
	15・16・18・20	茎
	26	不明鉄器
不明（柱穴）	17	茎

第114図　鉄製品実測図（S=1/2）



第115図　羽口・鉱物滓実測図（S＝1/2）



図版19　鉄製品・鞴羽口・鉄滓

小　結

数多くの金属製品が出土しているが、錆の進行が著しく不明なものが多い。８世紀代になると様々な工具が揃いだし多様化する時期でもあり、単に形態だけで判断することが困難である。本遺跡でも多様な金属製品が出土しているが、可能性も含めて本文中には器種を記している。また、鉄製品のほかに金属滓も多く出土し、羽口や坩堝も出土していることから、鉄の製錬を行っていると考えられ、金属滓（２点）と坩堝（２点）の計４点について蛍光Ｘ線元素分析を行った。金属滓からは主に鉄が検出され、坩堝に付着しているものについては、銅とスズそして微量ながら金と銀が検出された。その分析結果から、少し考察してみる。

金属滓は分析結果により鉄滓であることが判明した。その他にも分析は行っていないが多量の鉄滓と思われる金属滓や羽口も出土しているために、製錬や鍛冶を行っていたことはほぼ確実であると考えられる。しかし、鍛冶具や炉などの遺物や遺構は確認できていないため、断定することはできなかった。また、鍛冶具については、ここではあえて石器を使用していたのではないかという可能性を指摘するにとどめたい。

次に坩堝の付着物についてであるが、分析結果から銅も扱っていたことはほぼ確実であると考えられる。このことから鉄と銅を扱える技術を有した人間が存在したことは確実といえよう。しかし、銅製品がほとんど出土していないにもかかわらず、坩堝の付着物から銅やスズの他に微量ながら金と銀も検出できている。このことをどのように解釈をするかが問題である。その可能性として、①再利用（再加熱・加工）していたのではないかということである。再利用するときに鍍金や鍍銀がなされていたものが、そのまま、もしくは少し残ったまま再利用されたために銅やスズの他に微量ながら金と銀が検出できたのではないかと推測できるのではないだろうか。鉄の再利用については弥生時代から確認されているようである。②修理していたのではないかということである。繰り返し坩堝を使用していたために銅やスズの他に微量ながら金と銀が検出されたのではないだろか。ただ、修理できるだけの高い技術を要していた、いわゆる修理屋と呼べる工人が存在していたのかということである。中世以降については修理について指摘されているが、それ以前に修理技術をもった工人が存在していたのかということになる。しかし、工具などの金属器が揃いだし増加する古代に修理屋が存在していた可能性はないとはいえないと推測する。

これら二つの可能性について、①は「原料の再利用」、②は「坩堝の繰り返し利用」ということであり、どちらかという判断は非常に難しい。両方とも可能性はゼロではなく、両方とも存在していた可能性も考えられる。しかし、残念なことに炉や鋳型、鍛冶具などの遺構・遺物は確認できていなく、断定できるだけの資料を確認するに至らなかった。

これらのことから、本遺跡において鉄と銅を扱えるだけの技術を有した人間が存在したこと、鉄と銅の両方を掌握するだけの力（権力）を持っていた人物がいたことは間違いなく、遺跡の規模からも当時の勢力の大きさをうかがい知ることが出来よう。しかしながら金属製品に関しては不確定な部分も多く、今後の周辺の調査により一層解明されていくことを期待したい。

最後に、分析や原料の再利用、坩堝の繰り返し利用については奈良文化財研究所の高妻洋成氏および埋蔵文化財センターの諸氏に多大なるご助言とご教示をいただいた。

坩堝および金属滓の蛍光Ｘ線元素分析

独立行政法人　文化財研究機構　奈良文化財研究所
埋蔵文化財センター　保存修復科学研究室
高妻　洋成　　降幡　順子

１．はじめに

大島畠田遺跡より出土した土器片（報告書番号935、1485）には、金属を溶融した際にできたものと考えられる金属酸化物が付着している。付着している金属酸化物はおおむね赤褐色から黒色を呈しているが、部分的に緑色を呈する部分もある。一方、製錬あるいは鍛冶において生じたと思われる金属滓（遺物番号323、333）は全体的には黒褐色を呈している。

本稿では、坩堝と思われる土器片に付着している金属酸化物および金属滓がどのような金属に由来するものであるかについて定性分析をおこなった結果について報告する。

２．分析箇所と分析方法

分析箇所を図１～図５に示す。

元素分析はEDAX社製エネルギー分散型蛍光Ｘ線元素分析装置Eagle Ⅲを用いておこなった。分析条件は、管電圧40kV、管電流50μA、モリブデン（Mo）ターゲット、測定時間300秒、真空中であった。

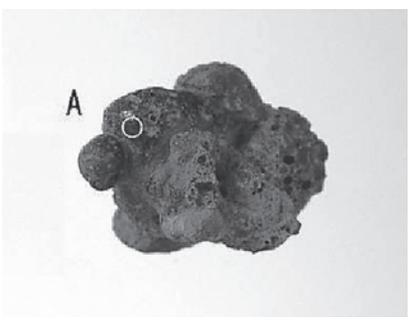


図１

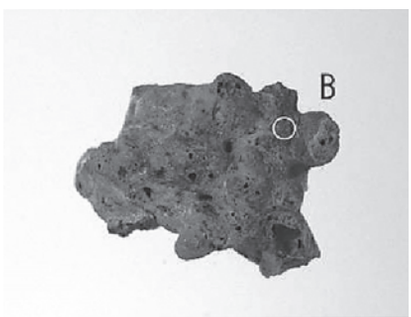


図２

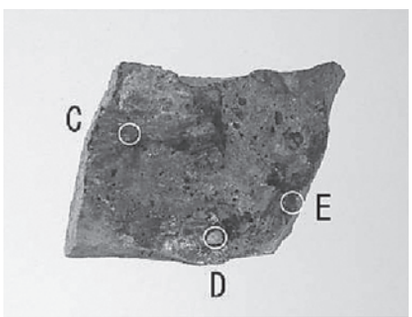


図３

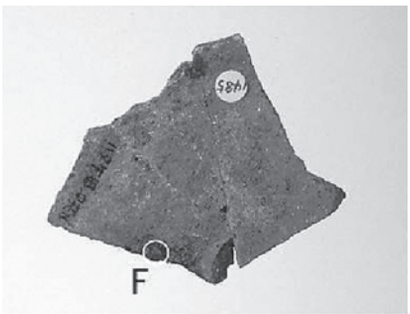


図４

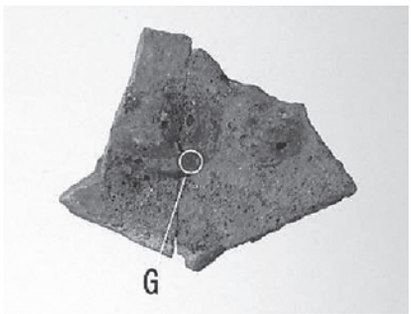


図５

分析箇所	遺　物	色　調
A	323	黒色光沢
B	333	黒色
C	935	黒色
D	935	緑色
E	935	赤色
F	1485	黒色
G	1485	赤色

３．分析結果

蛍光Ｘ線元素分析により得られたスペクトルを図６から図12に示す。また、各図の横に各分析箇所において検出された元素をまとめ、主要な元素は斜体で示した。以下に各遺物の分析結果について述べる。

323　鉄（Fe）が特徴的に検出された。この他、ケイ素（Si)、アルミニウム（Al)、カリウム（K)、カルシウム（Ca)、チタン（Ti）およびマンガン（Mn）が検出された。製錬滓か鍛冶滓かについての言及は避けるが、鉄滓といえるものである。

333　323と同様の傾向を示したことから、同様に鉄滓ということができよう。

935　黒色を呈する測定箇所Cからは主として鉄（Fe）が検出されたが、同時にわずかではあるが銅（Cu）も検出された。一方、緑色部（測定箇所Ｄ）および赤色部（測定箇所Ｅ）では主として銅（Cu）が検出され、また、微量ではあるがスズ（Sn）も検出されていることから、青銅の存在を窺わせるものといえよう。微量に検出されたヒ素は硫砒銅鉱などの鉱物由来である可能性もある。さらに、測定箇所Ｄからは微量の金（Au）と銀（Ag）が検出されたが、この微量に含まれる金および銀についてはさらに詳細な分析調査を要する。

1485　黒色を呈する測定箇所Fからは銅（Cu）が主として検出された。また、赤色を呈する測定箇所Ｇからも Fに比べて微量ではあるが、銅が検出されている。Ｇでは鉄が主として検出されているが、土器あるいは付着している土に由来するものと思われるケイ素、カリウム、カルシウムと照らし合わせると、この検出された鉄は土器ないしは付着した土に由来しているものと考えられる。935と同様にヒ素（As）が微量に検出された。

４．まとめ

大島畠田遺跡より出土した金属滓および土器片に付着した金属酸化物をエネルギー分散型蛍光Ｘ線元素分析装置により定性的に分析したところ、以下の結果を得た。

１）金属滓は鉄滓であるということができる。

２）土器片935は青銅の成分である銅とスズを検出した。また、緑色を呈する部分からは微量ではあるが金および銀も検出された。

３）土器片1485からは銅が主として検出された。

４）土器片935と1485においては、わずかではあるがヒ素が検出された。このヒ素は硫砒銅鉱などの鉱物由来である可能性もある。

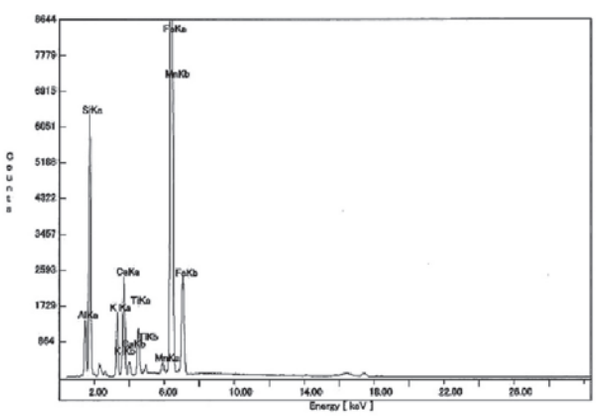


図６　遺物番号323
測定箇所Ａ：*Fe*, Al, Si, K, Ca, Ti, Mn

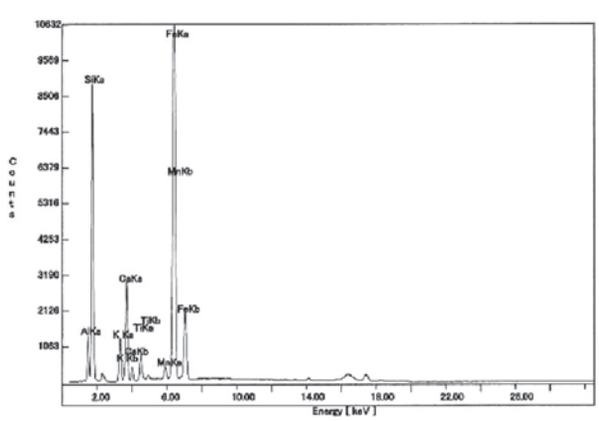


図７　遺物番号333
測定箇所Ｂ：*Fe*, Al, Si, K, Ca, Ti, Mn

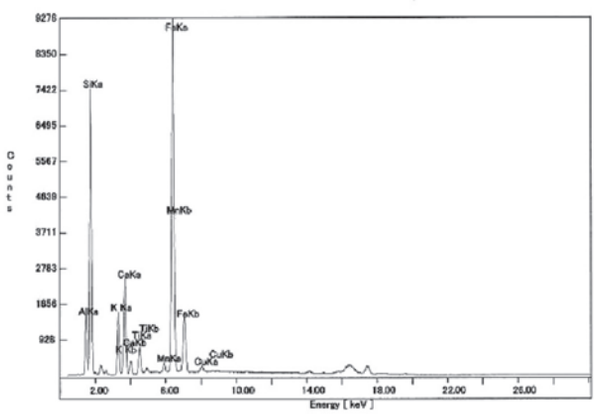


図８　報告書番号935
測定箇所Ｃ：*Fe*, Al, Si, K, Ca, Ti, Mn, Cu

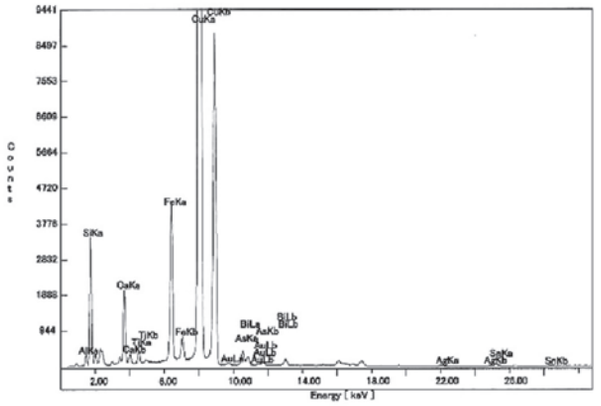


図９　報告書番号935
測定箇所Ｄ：*Cu*, Al, Si, Ca, Ti, Fe, Au, As, Bi, Ag, Sn

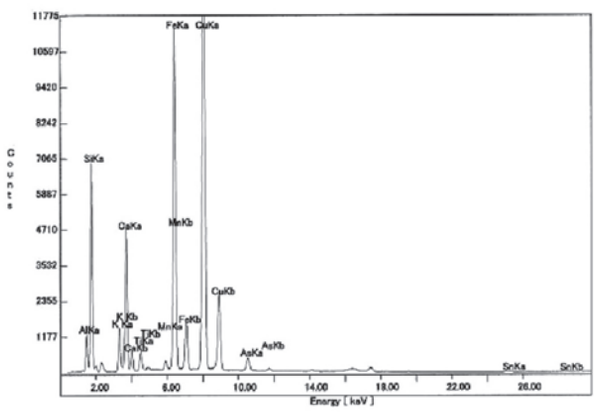


図10　報告書番号935
測定箇所Ｅ：*Cu,* Al, Si, K, Ca, Ti, Fe, As

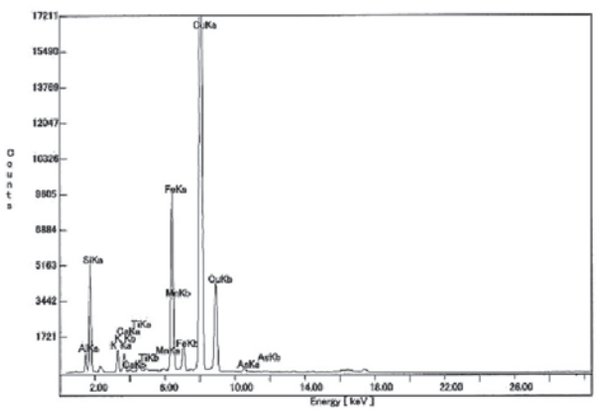


図11　報告書番号1485
測定箇所Ｆ：*Cu*, Al, Si, K, Ca, Ti, Mn, Fe, As

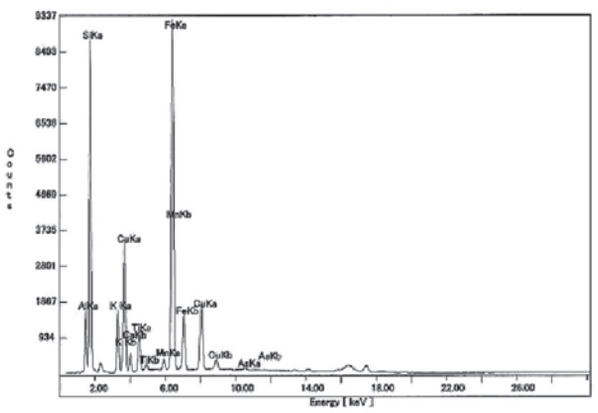


図12　報告書番号1485
測定箇所Ｇ：Al, Si, K, Ca, Ti, Mn, Fe, As

遺物番号935と1485については分析のみであり、図化していないため、遺物番号としている。

第Ⅴ章　自然科学分析

第１節　大島畠田遺跡における自然科学分析１

株式会社　古環境研究所

土層とテフラ

１　はじめに

宮崎県中南部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、姶良カルデラや鬼界カルデラなど遠方の火山、さらに桜島火山や霧島火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、年代の不明な土層や遺構が検出された大島畠田遺跡においても、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行い、示標テフラの検出同定を試みることになった。調査分析の対象となった地点は、第３トレンチおよびSE30（溝）Ｈ３グリッドの２地点である。

２　土層の層序

（１）第３トレンチ

第３トレンチでは、下位より灰色土（層厚５㎝以上）、暗褐色泥層（層厚14㎝）、黒泥層（層厚17㎝）、黒灰色土（層厚11㎝）、暗灰色土（層厚23㎝）、砂混じり暗灰色土（層厚13㎝）、褐色がかった灰色砂質土（層厚９㎝）、灰褐色砂質土（層厚21㎝）、褐灰色砂質土（層厚31㎝）が認められる（図１）。発掘調査では、これらのうち暗灰色土、砂混じり暗灰色土、褐色がかった灰色砂質土から10 ～ 12世紀の遺物が検出されている。

（２）SE27（溝）Ｈ３グリッド

Ｈ３グリッドにおけ るSE27の覆土は、下位より暗灰褐色土（層厚13㎝）、白色軽石に富む灰色土（層厚８㎝，軽石の最大径７㎜）からなる（図２）。なおSE27は、９世紀代に造られた池状遺構を切って造られている。

３　テフラ検出分析

（１）分析結果

テフラ検出分析の結果を表１に示す。第３トレンチでは、試料26と24を除くいずれの試料からも、よく発泡した白色の細粒軽石（最大径２㎜）が検出された。これらの軽石は、その特徴から約2.4 ～ 2.5万年前[*1]に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良入戸火砕流堆積物（A-Ito，荒牧, 1969，池田ほか, 1995，町田･新井, 1992）や約4,200年前[*1]に霧島火山御池火口から噴出した霧島御池テフラ（Kr-M，町田･新井, 1992，ｓ早田, 1997）などに由来すると考えられる。

また試料10以上の試料からは、比較的よく発泡した黒灰色スコリアが認められ、試料10および６にごく小規模なスコリアの出現ピークが認められるようである。試料６に含まれるスコリアの方が、試料10に含まれるそれよりも若干粗粒に見える。これらの特徴から、これらのスコリアは９～ 13世紀に霧島火山から噴出した霧島大谷テフラ群（Kr-Ot Group，早田，1997）に由来すると考えられる。そして、その少なくとも２層が本遺跡に降灰した可能性も考えられる。なお、Kr-Ot Groupのうちの最上部の２層が大規模なテフラで、11 ～ 13世紀に噴出し従来霧島高原スコリア（Kr-ThS，井ノ上，1988）と呼ばれてきたテフラに相当するようである。その規模から、このKr-ThSが本遺跡に降灰した可能性が高いと思われる。

SE27（溝）Ｈ３グリッドでは、とくに試料２に多くの灰白色軽石（最大径3.9㎜）が含まれている。産状から、この試料付近にこの軽石で特徴づけられるテフラの降灰層準があると考えられる。このテフラについては、さらに屈折率測定を行った（後述）。

４　屈折率測定

（１）測定試料と測定方法

SE27（溝）Ｈ３グリッドの試料２に含まれるテフラ粒子について、示標テフラとの同定精度を向上させるために、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）により屈折率測定を行った。

（２）測定結果

屈折率測定の結果を表２に示す。SE30（溝）Ｈ３グリッドの試料２に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は、1.510-1.515である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が含まれている。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.710－1.715である。これらの特徴から、この試料の中のテフラの多くは、1471

（文明３）年に桜島火山から噴出したと考えられている桜島３テフラ（Sz－３，小林，1986，町田・新井，1992，早田，1997）に由来すると考えられる。なお、角閃石については、Kr-Mなどほかのテフラからの混入の可能性が非常に高い。

５　考察－土層や遺構の年代について

地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定の結果、下位より霧島高原スコリア（Kr-ThS，11 ～ 13世紀）を含む霧島大谷テフラ群（Kr-Ot Group，約９～ 13世紀）や桜島３テフラ（Sz－３，1471年）などを検出できた。第３トレンチにおいて、10 ～ 12世紀の遺物はKr-ThSの可能性の高いテフラの降灰層準より下位から出土している。遺物から推定される土層の堆積年代とKr-Ot Groupの層位は矛盾しない。またSE30（溝）については、10世紀に造られた池状遺構より新しく、Sz－３降灰より前に造られていることから、その年代は10 ～ 15世紀と推定される。

６　小　結

大島畠田遺跡において、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行った。その結果、下位より霧島高原スコリア（Kr-ThS，11 ～ 13世紀）を含む霧島大谷テフラ群（Kr-Ot Group，約９～ 13世紀）や桜島３テフラ（Sz－３，1471年）などを検出できた。Kr-Ot Groupの層位は、遺物から推定される土層の堆積年代と矛盾しない。また、SE30（溝）についてはSz－３より下位にあることから、その年代は10 ～ 15世紀と推定される。

*1　放射性炭素（^{14}C）年代.

【文　献】

新井房夫（1972）斜方輝石･角閃石によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.

新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法－研究対象別分析法」，p.138-148.

荒牧重雄（1969）鹿児島県国分地域の地質と火砕流堆積物．地質雑，75，p.425-442.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・小林哲夫（1995）南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器^{14}C年代．第四紀研究，34，p.377-379.

井ノ上幸造（1988）霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史．岩鉱，83，p.26-41.

小林哲夫（1986）桜島火山の形成史と火砕流．文部省科研費自然災害特別研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流（火砕流等）の特質と災害」（研究代表者　荒牧重雄），p.137-163.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

早田　勉（1997）火山灰と土壌の形成．宮崎県史通史編，原始古代１，p.33-77.

表１　大島畠田遺跡におけるテフラ検出分析結果

地　点	試料	軽　石			スコリア		
		量	色調	最大径	量	色調	最大径
第３トレンチ	2	＋	白	1.5	＋	黒灰	0.7
	4	＋	白	1.3	＋	黒灰	0.7
	6	＋	白	1.2	＋＋	黒灰	0.9
	8	＋	白	1.3	＋	黒灰	0.7
	10	＋	白	1.0	＋＋	黒灰	0.7
	12	＋	白	2.0	－	－	－
	14	＋	白	1.1	－	－	－
	16	＋	白	1.0	－	－	－
	18	＋	白	1.1	－	－	－
	20	＋	白	1.1	－	－	－
	22	＋	白	0.7	－	－	－
	24	－	－	－	－	－	－
	26	－	－	－	－	－	－
	28	＋	白	0.8	－	－	－
SE27（溝）	2	＋＋＋	灰白	3.9	－	－	－
Ｈ３グリッド	4	＋	灰白	3.3	－	－	－

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋：中程度，＋：少ない，－：認められない．
最大径の単位は，㎜.

表２　大島畠田遺跡における屈折率測定結果

地　点	試料	gl（n）	重鉱物	opx（γ）
SE27（溝） Ｈ３グリッド	2	1.510－1.515	opx>cpx，（ho）	1.710－1.715

屈折率の測定は，温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による．gl：火山ガラス，opx：斜方輝石，ho：角閃石．重鉱物の（　）は量の少ないことを示す．

放射性炭素年代測定

1　試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
№1	SC－25底面	炭化材	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法

2　測定結果

試料名	^{14}C年代（年BP）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年BP）	暦年代（西暦）	測定№ Beta-
№1	1320±40	28.2	1270±40	交点：cal AD720, 745, 760	136470
				1σ：cal AD685～780	
				2σ：cal AD670～870	

1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,568年を用いた。

2）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。較正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、サンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された補正曲線を使用した。最新のデータベース（"INCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40（3））により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、較正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68％確率）・2σ（95％確率）は、較正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

樹種同定

1　試　料

試料は、SC－25の底面から採取された炭化材1点である。

2　方　法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3　結　果

結果を表1に示し、各断面の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表1　大島畠田遺跡から出土した炭化材の樹種同定結果

試　料	樹　種（和名/学名）
SC－25底面	コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科

横断面：中型から大型の道管が1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

4　所　見

SC－25の底面から採取された炭化材は、コナラ属アカガシ亜属と同定された。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

【文　献】
佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

花粉分析

1　はじめに

花粉分析は、一般に低湿地堆積物を対象として比較的広域な地域の植生や古環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存しないこともある。

2　試　料

試料は、くぼ地トレンチ、池トレンチ、SC－25から採取された計29点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3　方　法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

1）５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
2）水洗した後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
4）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。
5）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1,500rpm、２分間）の後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。検鏡は、生物顕微鏡によって300 ～ 1,000倍で行った。

花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4　結　果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉８、樹木・草本花粉２、草本花粉10、シダ植物胞子２形態の計22である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、コウヤマキ、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属－マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ

〔樹木・草本花粉〕

クワ科－イラクサ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（2）花粉群集の特徴

1）くぼ地トレンチ

花粉群集の構成と組成の変遷から、下位よりⅠ帯、Ⅱ帯、Ⅲ帯の花粉分帯を設定した。花粉分帯にそって特徴を記す。なお、下記以外の層準では花粉があまり検出されなかった。

Ⅰ帯（試料10）では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が極めて高い。草本花粉では、イネ科が優占し、ヨモギ属の出現率がやや高く、カヤツリグサ科、タンポポ亜科、キク亜科などが伴われる。樹木花粉は低率で、クリ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属が出現する。Ⅱ帯（試料３）では、イネ科、カヤツ

リグサ科、アブラナ科、チドメグサ亜科、タンポポ亜科が優勢であり、ヨモギ属などが伴われる。樹木花粉は低率で、シイ属－マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属などが出現する。Ⅲ帯（試料１）では、イネ科が増加し、アブラナ科、チドメグサ亜科、タンポポ亜科は減少している。

２）池トレンチ

埋土下部の試料６、７、８から草本花粉のアカザ科－ヒユ科などが少量検出された。その他の試料では、花粉がほとんど検出されなかった。

３）SC－25

埋土下部の試料３からイネ科やアブラナ科、埋土底部の試料５からタンポポ亜科やイネ科などが少量検出された。その他の試料では、花粉がほとんど検出されなかった。

５　花粉分析から推定される植生と環境

（１）くぼ地トレンチ

古墳時代～奈良時代とされる溝底部の堆積当時は、周囲にイネ科を中心としてヨモギ属、カヤツリグサ科、タンポポ亜科、キク亜科などの草本が生育していたと推定される。イネ科には路傍などに生育する人里植物や耕地雑草が多く含まれ、ヨモギ属やタンポポ亜科、キク亜科は乾燥を好む人里植物ないし耕地雑草である。樹木は少なく、クリ、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）、カシ類（コナラ属アカガシ亜属）などが孤立木として生育していたと考えられる。

中世の遺物包含層からは、花粉があまり検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で、花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

桜島文明軽石（Sz－３，1471年）混層の堆積当時は、周囲にイネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科、チドメグサ亜科、タンポポ亜科の草本が生育していたと推定される。アブラナ科とチドメグサ亜科は乾燥地を好む畑作雑草であり、アブラナ科には多くの栽培植物が含まれる。このことから、当時は周囲でアブラナ科などを栽培する畑作が営まれていたと推定される。樹木は少なく、ナラ類やカシ類などが孤立木として生育していたと考えられる。

遺構検出面の堆積当時は、イネ科を中心としてカヤツリグサ科、タンポポ亜科、ヨモギ属の草本が繁茂する人里あるいは耕地の人為環境が広がっていたと推定される。樹木は少なく、シイ属－マテバシイ属、ナラ類などが孤立木として生育していたと考えられる。

（２）池トレンチ

花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、遺構底部の堆積当時は、アカザ科－ヒユ科などが生育する比較的乾燥した人為環境であったと推定される。花粉があまり検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

（３）SC－25

花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、遺構の周囲にはアブラナ科やタンポポ亜科などが生育する乾燥した人為地が分布していたと推定される。花粉があまり検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

【文　献】

中村　純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.
中村　純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.
中村　純（1974）イネ科花粉について、特にイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.
中村　純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

種実同定

１　はじめに

植物の種子や果実には比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存している場合がある。堆積物から種実を検出し、その群集の構成や組成を調べることで、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし、古環境の推定を行うことが可能である。

２　試　料

試料は、くぼ地トレンチの溝内堆積層および池Ａトレンチの埋土底部から採取された計８点の堆積物であ

る。

３　方　法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行った。

１）試料200ccに水を加え放置し、泥化を行う。

２）攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25㎜の篩で水洗選別を行う。

３）残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

４　結　果

分析の結果、池トレンチの埋土底部（種２）からカヤツリグサ科の果実が１個検出された（表１）。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。その他の試料からは、種実が検出されなかった。

〔草本〕

カヤツリグサ科　Cyperaseae　果実

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

５　考　察

種実同定分析の結果、池トレンチの埋土底部からカヤツリグサ科が１個検出された。カヤツリグサ科は多様な環境に生育する種類を含む。種実があまり検出されない原因としては、乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境下で種実などの植物遺体が分解されたことが考えられる。

【文　献】

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276-283.

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣出版，p.131-139.

珪藻分析

１　はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域から淡水域のほぼすべての水域および湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。また、珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、固有にまたは許容範囲をもって分布している。堆積物中に含まれる珪藻遺骸の構成や組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境の復原に用いられている。

２　試　料

試料は、くぼ地トレンチおよび池トレンチから採取された計８点である。これらの試料は、花粉分析に用いられたものと同一層準から採取された。

３　方　法

試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

１）試料から乾燥重量１ｇを秤量する。

２）10％過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、１晩放置する。

３）上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を５、６回繰り返す。

４）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で600 ～ 1,000倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。計数は、同定・計数は珪藻被殻が100個体以上にまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

４　結　果

分析の結果、淡水生種80ｴ類群が検出された。計数された珪藻の学名と個数を表１に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図に示す。

（１）くぼ地トレンチ

珪藻群集の構成と組成の変遷から、下位よりⅠ帯～Ⅴ帯の珪藻分帯を設定した。珪藻分帯にそって特徴を記す。

Ⅰ帯（試料12）では、陸生珪藻の*Pinnularia borealis*などが主に出現するが、いずれも少量である。Ⅱ帯（試

料10）では、陸生珪藻の *Pinnularia borealis*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula cohnii* が優占し、他は低率である。Ⅲ帯（試料９）では、*Pinnularia borealis*、*Navicula mutica*、*Navicula cohnii*、*Hantzschia amphioxys* の陸生珪藻、*Tabellaria flocculosa* を主とする好止水性種がやや高率に出現し、*Pinnularia viridis*、*Tabellaria fenestrata* など池沼湿地付着生環境指標種が伴われる。Ⅳ帯（試料７）では、珪藻がほとんど検出されない。Ⅴ帯（試料６）では、好止水性種の *Cyclotella meneghiniana* や *Tabellaria flocculosa*、湖沼池沼湿地環境指標種群の *Aulacoseira ambigua* がやや高率に出現する。

（２）池トレンチ

試料９では、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica Pinnularia borealis*、*Amphora montana*、陸生珪藻でもあり好止水性種でもある *Pinnularia subcapitata* がやや高率に出現する。試料８では、流水性不定性種の *Gomphonema subtile*、*Navicula sp.*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、陸生珪藻でもあり好止水性種でもある *Pinnularia subcapitata*、好止水性種で湖沼池沼湿地環境指標種の *Eunotia pectinalis v.minor*、好止水性種で湖沼池沼湿地環境指標種の *Aulacoseira ambigua*、好止水性種の *Synedra ulna* が多様に出現する。試料７では、不定性種の *Navicula sp.* がやや高率であり、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、陸生珪藻でもあり好止水性種でもある *Pinnularia subcapitata*、好止水性種で湖沼池沼湿地環境指標種の*Pinnularia viridis* が出現する。

５　珪藻分析から推定される堆積環境

（１）くぼ地トレンチ

古墳時代～奈良時代とされる溝底部（Ⅰ・Ⅱ帯）では、*Pinnularia borealis* などの陸生珪藻が生育する比較的湿潤な堆積環境が示唆される。中世の遺物包含層（Ⅲ・Ⅳ帯）では、湿った土壌、湿地、止水域の堆積環境が示唆される。以上のことから、遺構内部は通常的に滞水するような環境ではなく、時期や季節によって短期間滞水する程度であったと考えられる。中世の遺物包含層上部（Ⅴ帯）では、好止水性種や湖沼池沼湿地環境指標種がやや高率なことから、池沼の環境が推定される。

（２）池トレンチ

埋土底部（Ⅰ帯）では、陸生珪藻が生育する比較的湿潤な堆積環境が示唆される。埋土下部（Ⅱ・Ⅲ帯）では、流水の影響のある池沼、湿地、湿った土壌といった多様な堆積環境が示唆される。以上のことから、遺構内部は通常的に滞水するような環境ではなく、時期や季節によって短期間滞水する程度であったと考えられる。

【文　献】

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第１号，植生史研究会，p29-44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p1-20.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p73-88.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，９，p23-45.

Asai,K.&,Watanabe,T.（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10,p35-47.

Hustedt, F.（1930）Bacillariophyta,Die Susswasser Flora Mitteleeuropas,10 Gustav Fischer, Jena, 466p.

Patrick, R.eimer, C. W.（1966）The diatom of the United States, vol.1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 644p.

Patrick, R.eimer, C. W.（1975）The diatom of the United States, vol. 2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of　Natural Siences of Philadelphia, 213p.

植物珪酸体分析

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO2）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

２．試　料

分析試料は、東トレンチ、池Ａトレンチ、SD－01から採取された計29点である。試料採取箇所を分析結

果の模式柱状図に示す。

３．分析結果

（１）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）、シバ属、Ｂタイプ

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、その他

（２）植物珪酸体の検出状況

１）東トレンチ（図１）

溝基底の褐色粘質土（試料14）では、イネ、ススキ属型、ウシクサ族Ａ、メダケ節型、ネザサ節型、ミヤコザサ節型、および樹木（照葉樹）のマンサク科（イスノキ属）などが検出されたが、いずれも比較的少量である。イネの密度は1,400個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。溝底部の黒色粘質土（試料10 ～ 13）では、メダケ節型やネザサ節型が大幅に増加し、キビ族型、ヨシ属、チマキザサ節型なども出現しているが、イネは検出されなかった。中世とされる溝の埋土（試料６～９）では、メダケ節型やネザサ節型などが減少傾向を示し、ヨシ属は見られなくなっている。また、試料６、７、９でイネが検出されたが、密度は700 ～ 1,500個/gと比較的低い値である。試料５からSz－３混層（試料２）にかけては、イネが増加しており、メダケ節型やネザサ節型も部分的に比較的多く検出された。イネの密度は試料３～５では5,100 ～ 6,700個/gと高い値であり、試料２では2,100個/gと比較的低い値である。遺構検出面（試料１）でも、おおむね同様の結果であり、イネの密度は4,700個/gと比較的高い値である。おもな分類群の推定生産量によると、溝底部ではメダケ節型やネザサ節型が優勢であり、部分的にヨシ属も多くなっている。試料５より上位層ではおおむねイネが優勢であり、部分的にメダケ節型やネザサ節型も多くなっている。

２）池Ａトレンチ（図２）

遺構基底の砂層（試料10）では、イネ、ススキ属型、ウシクサ族Ａ、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、および樹木（照葉樹）のマンサク科（イスノキ属）などが検出されたが、いずれも比較的少量である。イネの密度は700個/gと低い値である。遺構埋土下部（試料６～９）では、イネ、ネザサ節型などが大幅に増加し、キビ族型も出現している。また、試料７ではヨシ属も検出された。イネの密度は、試料６、７、９では5,800 ～ 7,300個/gと高い値であり、試料８でも3,600個/gと比較的高い値である。遺構埋土上部（試料１～５）でも、おおむね同様であり、試料２ではヒエ属型も検出された。イネの密度は、試料１～３では7,100 ～ 11,200個/gと高い値であり、試料４、５でも3,600 ～ 4,800個/gと比較的高い値である。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねイネが優勢であり、ネザサ節型も多くなっている。

３）SD－01（図３）

遺構基底の礫混層（試料５）では、ネザサ節型が比較的多く検出され、イネ、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族Ａ、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型なども検出された。イネの密度は1,900個/gと比較的低い値である。遺構埋土下部（試料３、４）では、イネが増加し、樹木（照葉樹）のクスノキ科、マンサク科（イスノキ属）なども出現している。イネの密度は、試料３では5,900個/gと高い値である。遺構埋土上部（試料１、２）でも、おおむね同様の結果であり、イネの密度は3,600 ～ 5,000個/gと比較的高い値である。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねイネが優勢であり、ネザサ節型も多くなっている。

４．植物珪酸体分析から推定される植生と環境

（１）東トレンチ

古墳時代～奈良時代とされる溝底部の堆積当時は、ヨシ属が生育するような比較的湿潤な環境であったと

考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（メダケ節やネザサ節）などの竹笹類をはじめ、ススキ属やチガヤ属、キビ族などの草本類が生育していたと推定される。また、遺跡周辺にはイスノキ属などの樹木が生育していたと考えられる。

中世の遺物包含層では、ヨシ属が見られなくなっていることから、堆積環境が乾燥化したことが示唆される。また、部分的に少量のイネが検出されることから、当時は周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形で溝内にイネの植物珪酸体が混入したと考えられる。

桜島文明軽石（Sz－３，1471年）混層およびその上下層の堆積当時は、おおむね継続して稲作が行われていたと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（メダケ節やネザサ節）などの竹笹類をはじめ、ススキ属やチガヤ属、キビ族などの草本類が生育していたと推定される。また、遺跡周辺にはイスノキ属などの樹木が生育していたと考えられる。

（２）池Ａトレンチ

10世紀後半とされる池状遺構の埋土の堆積当時は、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと考えられ、部分的にヨシ属が生育するような湿潤なところも見られたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（メダケ節やネザサ節）などの竹笹類をはじめ、ススキ属やチガヤ属、キビ族などの草本類が生育していたと考えられ、遺跡周辺にはイスノキ属などの樹木が生育していたと推定される。

（３）SD－01

遺構埋土の堆積当時は、周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと考えられる。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（メダケ節やネザサ節）などの竹笹類をはじめ、ススキ属やチガヤ属、キビ族などの草本類が生育していたと考えられ、遺跡周辺には部分的にクスノキ科やイスノキ属などの樹木が生育していたと推定される。

文　献

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－．考古学と自然科学，20，p.81-92.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志･杉山真二（1984）プラント･オパール分析法の基礎的研究（５）－プラント･オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

寄生虫卵分析

１．はじめに

人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は、花粉と同様の条件下で堆積物中に残存しており、人の居住域では寄生虫卵による汚染度が高くなる。寄生虫卵分析を用いて、トイレ遺構の確認や人糞施肥の有無の確認が可能であり、寄生虫卵の種類から、摂取された食物の種類や、そこに生息していた動物種を推定することも可能である。

２．試　料

分析試料は、東トレンチ、池Ａトレンチ、SD－01から採取された計29点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

３．方　法

寄生虫卵の分離抽出は、微化石分析法を基本にして、以下の手順で行った。

１）サンプルを採量
２）脱イオン水を加えて撹拌
３）篩別および沈澱法により大きな砂粒や木片等を除去
４）25%フッ化水素酸を加えて30分静置（２～３度混和）
５）遠心分離（1,500rpm、２分間）による水洗の後にサンプルを２分割
６）片方にアセトリシス処理を施す
７）両方のサンプルを染色後、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
８）検鏡・計数

４．結果および考察

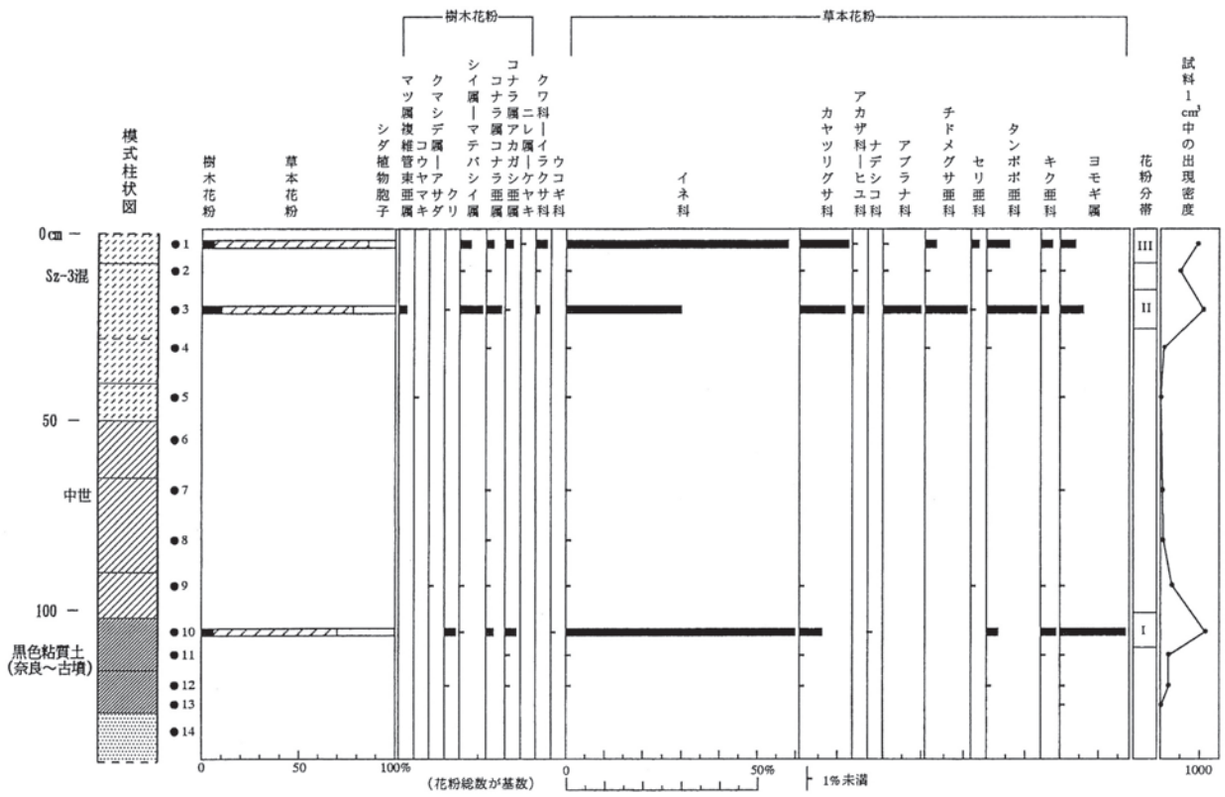
トイレ遺構の可能性が指摘されていたSD－01では、寄生虫卵や明らかな食物残渣は検出されなかった。花粉分析の結果でも、花粉があまり検出されず、乾燥を好むタンポポ亜科やヨモギ属などが認められることから、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で、花粉よりも保存性の低い寄生虫卵が分解された可能性が考えられる。東トレンチおよび池Ａトレンチについても、寄生虫卵や明らかな食物残渣は検出されなかった。

文　献

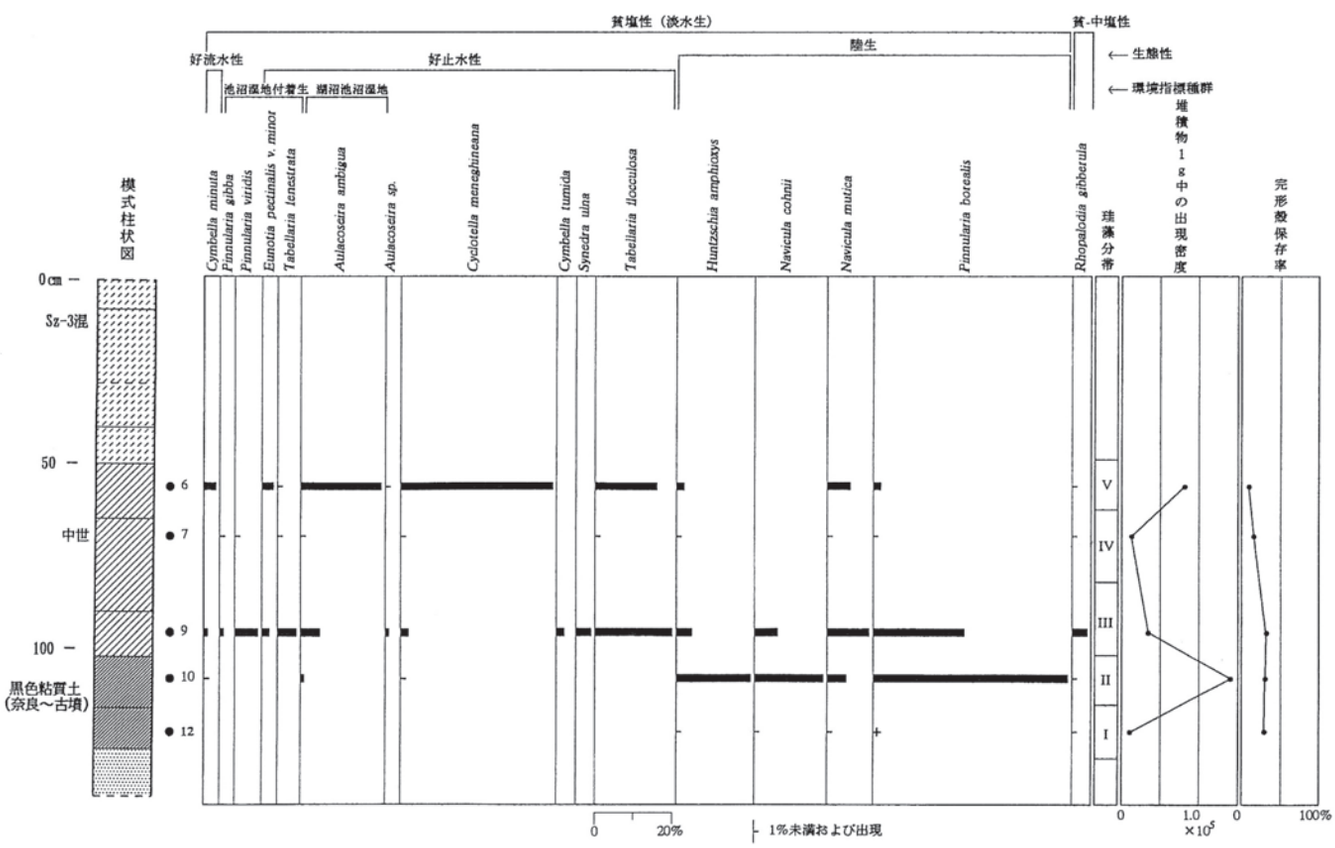
Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard（1992）Methods for Extraxting Pollen nd Parasite Eggs from Latrine Soils. Jounal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－，奈良国立文化財研究所，p.14-15.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物．医動物学，新版臨床検査講座，８，医歯薬出版，p.9-55.



第１図　大島畠田遺跡、東トレンチにおける花粉ダイアグラム



第１図　大島畠田遺跡、東トレンチにおける珪藻ダイアグラム

表１－１　大島畠田遺跡における珪藻分析結果

分類群	東トレンチ					池Aトレンチ		
	6	7	9	10	12	7	8	9
Achnanthes brevipes				2				
Achnanthes hungarica						1	1	
Achnanthes lanceolata						1	2	1
Amphora montana						11	7	14
Amphora ovalis	4							
Aulacoseira ambigua	88	8	8	2		4	15	
Aulacoseira granulata							2	
Aulacoseira sp.	4		2					
Caloneis bacillum								2
Cocconeis placentula v. euglypta						1	3	
Cyclotella meneghiniana	164	8	2	1				
Cymbella cistula		2						
Cymbella gracilis	4					1	4	2
Cymbella minuta	12		2	1		1	1	
Cymbella naviculiformis						1	1	
Cymbella tumida			4			1	9	
Diploneis ovalis						1		
Diatomella balfouriana				1				
Epithemia adnata						1		
Epithemia turgida						1		
Eunotia flexuosa						1	1	
Eunotia lunaris							3	
Eunotia pectinalis						1	4	
Eunotia pectinalis v. minor	12		4			3	30	2
Eunotia pectinalis v. undulata	4							
Fragilaria pinnata							1	
Frustulia vulgaris						1	1	1
Gomphonema acuminatum	4					3	4	
Gomphonema angustatum							1	
Gomphonema augur v. gautieri	4					2	3	
Gomphonema augur v. turris						2	1	1
Gomphonema clevei			2					
Gomphonema gracile						2	1	1
Gomphonema longiceps			2					
Gomphonema parvulum		2		1		7	18	1
Gomphonema subtile						4	30	1
Gomphonema truncatum						1	6	
Hantzschia amphioxys	8	2	6	35	8	66	32	46
Mastogloia apiculata	4	1						
Melosira ambigua								3
Navicula americana						3	1	
Navicula cohnii			10	33	6		1	
Navicula contenta							1	1
Navicula cryptotenella						4	2	8
Navicula cuspidata								1
Navicula elginensis						3	2	5
Navicula ignota								2
Navicula kotschyi								1
Navicula minima								1
Navicula mutica	24	1	18	9	8	7	3	18
Navicula mutica v. undulata						1		
Navicula radiosa							2	1
Navicula sp.		2				69	71	

表１－２　大島畠田遺跡における珪藻分析結果

分類群	東トレンチ					池Aトレンチ		
	6	7	9	10	12	7	8	9
Neidium ampliatum						1		1
Neidium dubium							1	1
Neidium iridis v. amphigomphus						1		
Nitzschia amphibia						1	2	4
Nitzschia dissipata						1	1	
Nitzschia obtusa		2					1	
Nitzschia tryblionella v. victoriae						1		
Pinnularia acrosphaeria						3	1	
Pinnularia borealis	8	2	40	92	28	6	11	12
Pinnularia brevicostata						1		
Pinnularia gibba		2	2			9	3	1
Pinnularia hemiptera								1
Pinnularia interrupta						6	1	2
Pinnularia mesolepta								1
Pinnularia microstauron			2			4		2
Pinnularia stomatophora		4						
Pinnularia subcapitata				2		20	20	63
Pinnularia viridis		4	10			14	2	3
Rhoicosphenia abbreviata						1		
Rhopalodia gibba							2	1
Rhopalodia gibberula	1	14	6	1	2			
Stauroneis smithii							1	
Surirella angusta								1
Surirella ovata						3	1	
Synedra ulna			6			3	18	
Tabellaria fenestrata	4	6	8				10	
Tabellaria flocculosa	64	5	34			1	9	
合　計	413	65	168	180	52	281	348	206
未同定	164	22	16	11	28	47	64	41
破片	5888	480	388	445	196	229	580	309
試料１ｇ中の殻数密度	8.2×10^{4}	1.3×10^{4}	3.4×10^{4}	1.4×10^{5}	1.0×10^{4}	1.8×10^{6}	2.2×10^{6}	1.6×10^{5}
完形殻保存率（%）	8.9	15.3	32.2	30.0	29.0	58.9	41.5	44.4

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables:C13/C12=-28.2:lab mult.=1)

Laboratory Number: Beta-136470

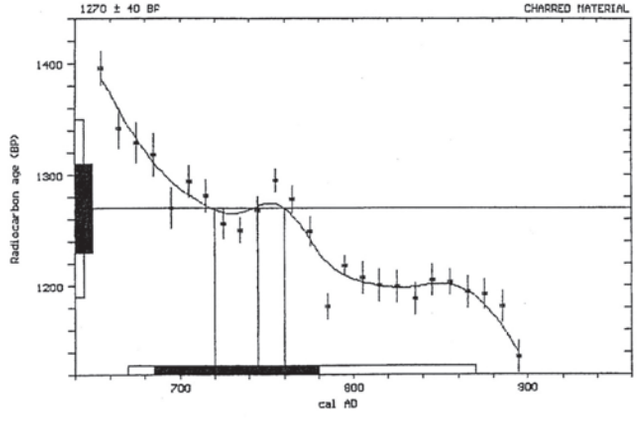
Conventional radiocarbon age: 1270 ± 40 BP

Calibrated results: (2 sigma, 95% probability) **cal AD 670 to 870 (Cal BP 1280 to 1080)**

Intercept data:

Intercepts of radiocarbon age with calibration curve: cal AD 720 (Cal BP 1230) and
cal AD 745 (Cal BP 1205) and
cal AD 760 (Cal BP 1190)

1 sigma calibrated results: (68% probability) cal AD 685 to 780 (Cal BP 1265 to 1170)



References:

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-xiii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

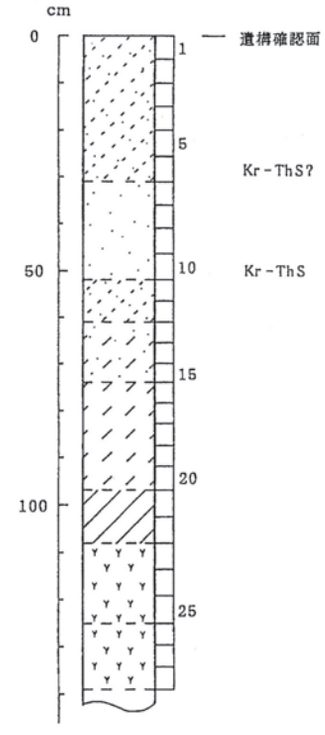
Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 ■ Tel: (305)667-5167 ■ Fax: (305)663-0964 ■ E-mail: beta@radiocarbon.com



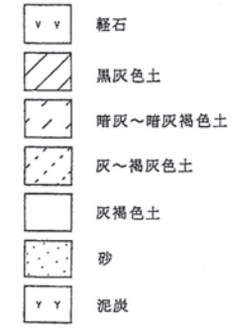


図１　第３トレンチの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

表１　大島畠田遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	東トレンチ													SD-01					池Aトレンチ									
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
イネ科	Gramineae																														
イネ	*Oryza sativa*		47	21	59	67	51	15	7		7					14	36	50	59	7	19	112	71	78	48	36	73	58	36	73	7
ヒエ属型	*Echinochloa* type																						7								
キビ族型	Paniceae type		7	7	22	15		15	35	15	7	100	83	58	7			14	15		6		21	7	7	15	15	22	14	–	
ヨシ属	*Phragmites*											14	23									7	21		14			7		
ススキ属型	*Miscanthus* type		73	70	37	30	29	15	28	15	15	22	8	7	21	7	43	14	15	14	19	74	71	64	62	44	51	36	79	80	22
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		87	63	74	45	80	30	42	131	89	108	45	22	28	61	43	14	66	21	52	37	93	99	76	73	117	65	36	80	22
シバ属	*Zoysia*																						7								
Bタイプ	B type																														15
タケ亜科	Bambusoideae																														
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus		87	49	118	171	22	37	42	102	96	143	241	144	56	41	36	86	37	50	45	52	78	35	76	36	102	94	65	51	37
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa		93	91	81	216	51	111	167	212	207	215	376	209	97	14	123	187	118	57	123	238	135	191	207	131	160	268	166	234	30
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.		13	14	22	15	22	15	42	15	30	14	45	7	7		7	22	22	7	13	15	7	35	7		7	36	7	22	22
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		7		22						15	43	8	36	7	7	36			21	6				41				7	7	22
マダケ属型	*Phyllostachys*					7																					7				
未分類等	Others		87	70	44	104	87	104	56	80	126	151	45	36	28	20	29	50	7		13	22	21	57	34	22	22	29	65	88	37
その他のイネ科	Others																														
表皮毛起源	Husk hair origin		20	14	22	45				15	22	22		7	7			7			6	45	29	28	21	7	22	7	29	7	37
棒状珪酸体	Rod-shaped		773	766	636	982	676	658	648	1021	967	1118	963	799	493	264	440	662	485	135	607	782	713	899	1056	523	1188	999	966	1138	180
未分類等	Others		760	640	621	766	604	680	627	788	760	875	941	719	563	454	541	756	544	456	582	603	606	651	731	515	904	855	793	861	352
樹木起源	Arboreal																														
ブナ科(シイ属)	*Castanopsis*			7										7																	
クスノキ科	Lauraceae			7															7												
マンサク科(イスノキ属)	*Distylium*		13	28	30	22	29	22	28		37	14		14	28	41		7	15			22	21	14	21	22	22	29	14	29	15
その他	Others		7	14	7	15	15		7	7	7	7			7	7			7		6				14		7		22	15	15
植物珪酸体総数	Total		2073	1863	1796	2500	1665	1701	1729	2400	2385	2846	2777	2065	1348	927	1335	1871	1396	770	1499	2011	1904	2160	2415	1422	2697	2513	2291	2685	816

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	*Oryza sativa*		1.37	0.62	1.74	1.97	1.50	0.43	0.20		0.22					0.40	1.06	1.48	1.73	0.21	0.57	3.29	2.10	2.29	1.42	1.07	2.14	1.70	1.06	2.15	0.22
ヒエ属型	*Echinochloa* type																						0.60								
ヨシ属	*Phragmites*											0.90	1.42									0.47	1.35		0.87			0.46			
ススキ属型	*Miscanthus* type		0.91	0.87	0.46	0.37	0.36	0.18	0.35	0.18	0.18	0.27	0.09	0.09	0.26	0.08	0.54	0.18	0.18	0.18	0.24	0.92	0.88	0.79	0.77	0.54	0.63	0.45	0.98	1.00	0.28
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalam		1.01	0.57	1.37	1.99	0.25	0.43	0.49	1.18	1.11	1.66	2.79	1.67	0.64	0.47	0.42	1.00	0.43	0.58	0.52	0.60	0.91	0.41	0.88	0.42	1.18	1.09	0.75	0.59	0.43
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa		0.45	0.44	0.39	1.04	0.24	0.53	0.80	1.02	0.99	1.03	1.81	1.00	0.47	0.06	0.59	0.90	0.56	0.27	0.59	1.14	0.65	0.92	0.99	0.63	0.77	1.29	0.80	1.12	0.14
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.		0.10	0.11	0.17	0.11	0.16	0.11	0.31	0.11	0.22	0.11	0.34	0.05	0.05		0.05	0.16	0.17	0.05	0.10	0.11	0.05	0.27	0.05		0.05	0.27	0.05	0.16	0.17
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		0.02		0.07						0.04	0.13	0.02	0.11	0.02	0.02	0.11			0.06	0.02				0.12			0.02		0.02	0.07

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalam		64	51	69	63	38	40	30	51	47	57	56	59	54	85	36	49	37	60	43	33	56	26	43	40	59	41	47	31	53
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa		28	39	20	33	37	50	50	44	42	35	36	35	39	12	50	44	49	28	48	61	40	58	48	60	38	48	50	59	18
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.		6	9	8	4	25	10	20	5	9	4	7	2	4		5	8	14	6	8	6	3	17	3		3	10	3	9	21
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		1		3						2	4	0	4	2	4	9			7	2				6			1		1	8

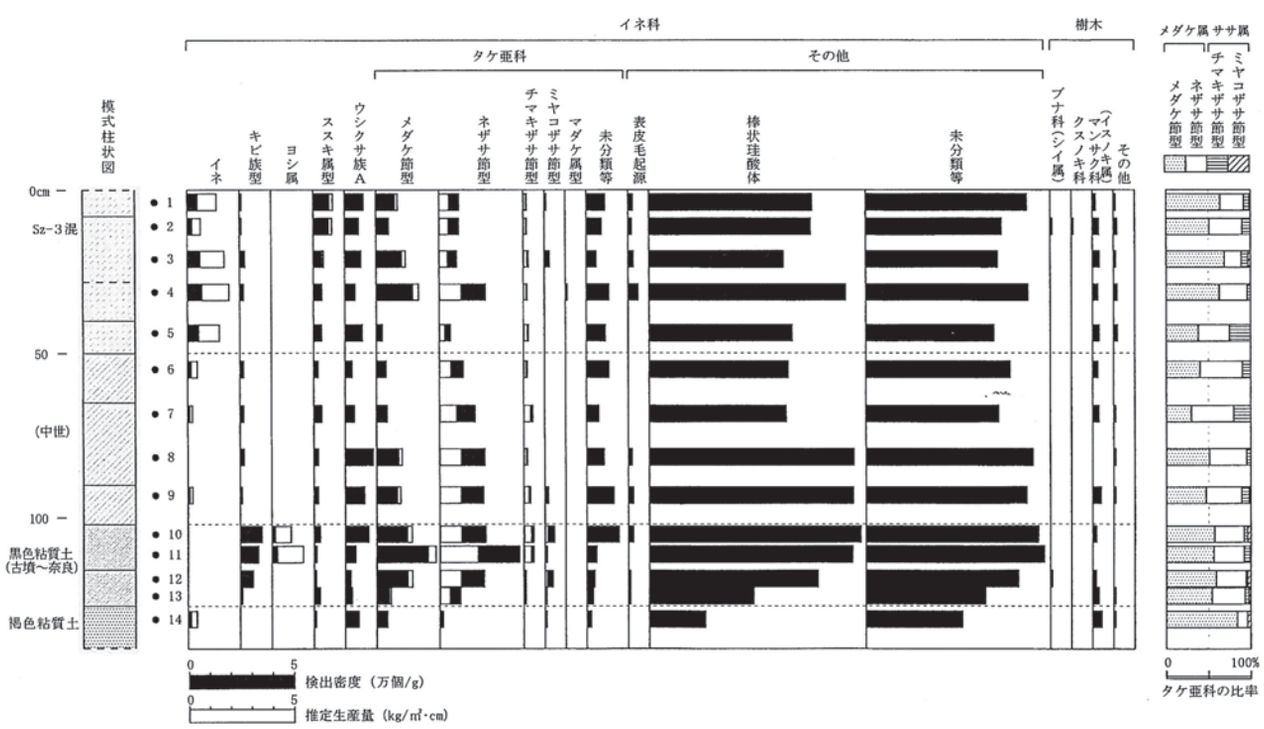


図１　大島畠田遺跡、東トレンチにおける植物珪酸体分析結果

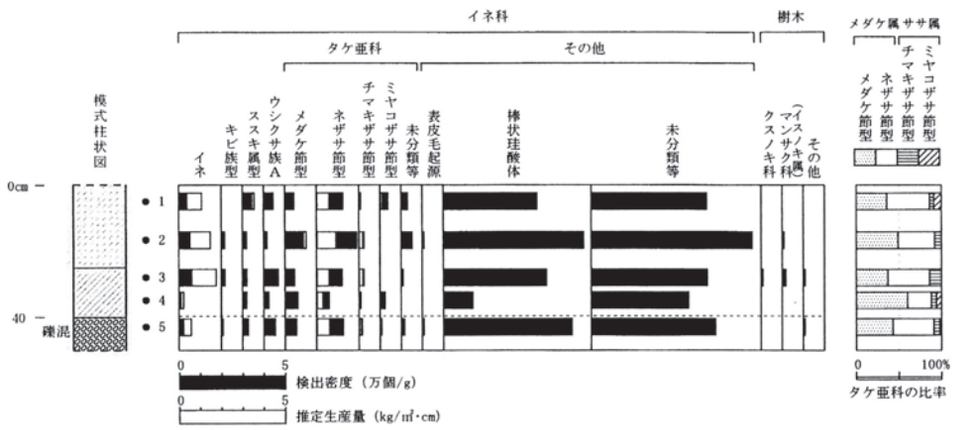


図３　大島畠田遺跡、SD－01における植物珪酸体分析結果

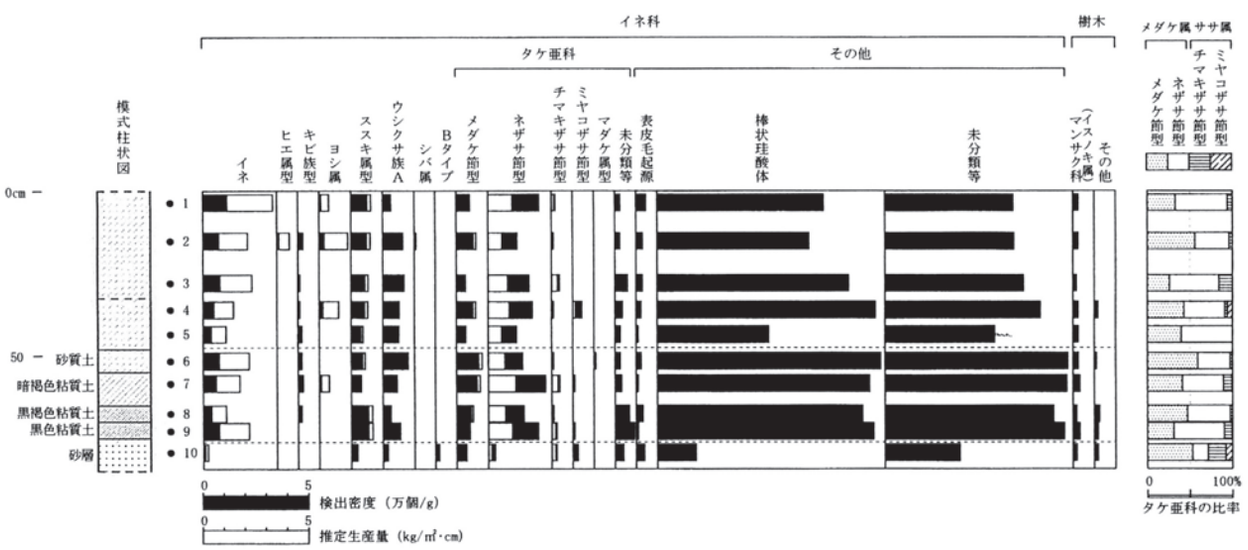


図２　大島畠田遺跡、池Ａトレンチにおける植物珪酸体分析結果

第２節　大島畠田遺跡における自然科学分析２

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大島畠田遺跡は、大淀川に庄内川が合流する付近の右岸微高地上に立地する。これまでの発掘調査により、古代～中世の掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構、池状遺構、柵列、道状遺構等の遺構が検出されている。

今回の分析調査では、池状遺構や溝状遺構から出土した炭化材を対象として、年代確認のために放射性炭素年代測定を、木材利用状況を確認するために樹種同定をそれぞれ実施する。また、池状遺構から出土した土器に付着した黒色物質の由来を確認するために、成分分析を実施する。当初仕様書中では、蛍光Ｘ線分析が指定されていたが、試料受領後当社にて黒色物質を仔細に観察したところ、有機物である可能性が高いと判断された。そこで、協議の上有機物の同定に有効な赤外分光分析（IR分析）に変更して成分分析を実施した。

炭化材の年代測定と樹種同定

１　試　料

試料は、池状遺構（SL １）から出土した炭化材３点（試料番号１－３）と６号溝状遺構（SE ６）から出土した炭化材１点（試料番号４）の合計４点である。樹種同定は全点について実施し、放射性炭素年代測定は試料番号１の１点について行う。なお、年代測定試料は、炭化材の最も外側の年輪を含む部分を採取する。

２　分析方法

（１）放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC １により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC １によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、１ｇの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１㎜の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、３MV小型タンデム加速器をベースとした14Ｃ－AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に$^{13}C/^{12}C$の測定も行うため、この値を用いて$\delta^{13}C$を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68％）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

（２）樹種同定

各試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定には、独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを活用する。また、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等は、島地･伊東（1982)、Wheeler他（1998）を参考にする。各樹種の木材組織については、林（1991)、伊東（1995，1996，1997，1998，1999）も参考にする。

３　結　果

同位体効果による補正を行った測定結果を表1、暦年較正結果を表２に示す。試料番号１の測定結果は１，280±40BPを示す。また、測定誤差をσとして計算させた暦年較正結果は、calAD678－771であった。

なお、暦年較正は、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プ

ログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位で表している。今回の試料は炭化材であることから、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68％の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を表３に示す。炭化材は、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属クヌギ節と、常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris*） ブナ科

環孔材で、孔圏部は１－２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１－20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*） ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１－15細胞高のものと複合放射組織とがある。

４ 考 察

池状遺構や溝状遺構から出土した炭化材は、遺構内から出土し炭化していることから、何らかの人間活動により炭化したことが推定されるが、用途などの詳細については不明である。常緑広葉樹のアカガシ亜属は、主に暖地で常緑広葉樹林の主体をなす分類群の一つである。一方、クヌギ節は、二次林などの落葉広葉樹林に生育し、比較的湿った土地を好む。いずれも木材は重硬で強度が高く、薪炭材としては国産材の中でも特に優良な種類である。

今回の炭化材試料のうち池状遺構から出土した３点は、いずれもミカン割状を呈する。樹皮の付着は認められないが、最外部の板目面が滑らかになり、年輪界の部分の観察でさらに外側に年輪があったような形跡もないことから、本来は外側に樹皮が付着していたものと考えられる。現存部分で計測した半径は2.0㎝～2.8㎝（直径4.0 ～ 5.6㎝）となるが、これはアカガシ亜属やクヌギ節の幹の直径としては非常に細いものであり、炭化材は枝部分が炭化したものと考えられる。一方、溝状遺構から出土した炭化材は、角材状を呈している。外側は樹皮が付着していた可能性があるが、樹芯側は明らかに欠損しており、池状遺構の炭化材よりは太い木材の一部と考えられる。

池状遺構の炭化材のうち、試料番号１は年代測定結果の暦年較正から７世紀後半～８世紀後半に該当する値が得られている。宮崎県内で行われた調査例では、アカガシ亜属やクヌギ節が弥生時代後期～古墳時代にかけての建築部材や堰の構築材に利用されていたことが確認されている（大塚，1984，株式会社古環境研究所，2001）。一方、古代については、当該期の木材利用に関する調査例が少ないこともあり、アカガシ亜属やクヌギ節の利用状況の詳細は不明である。今後、古代の木材利用に関して資料を蓄積することが望まれる。

土器付着物の赤外分光分析

１ 試 料

試料は池状遺構（SL １）から出土した土器２点（試料番号５，６）に付着した、黒色の膜状物質である。なお、試料番号５の土器の一部には粒状の付着物も認められていることから、膜状付着物、粒状付着物の両者を調査対象とした。分析試料の詳細を表４、試料採取位置を図版３に示す。

２ 分析方法

（１）赤外線分光分析の原理

有機物を構成している分子は、炭素や酸素、水素などの原子が様々な形で結合している。この結合した原子間は絶えず振動しているが、電磁波のようなエネルギーを受けることにより、その振動の振幅は増大する。この振幅の増大は、その結合の種類によって、ある特定の波長の電磁波を受けたときに突然大きくなる性質がある。この時に、電磁波のエネルギーは結合の振動に使われて（すなわち吸収されて）、その物質を透過した後の電磁波の強度は弱くなる。

有機物を構成している分子における結合の場合は、電磁波の中でも赤外線の領域に入る波長を吸収する性質を有するものが多い。そこで、赤外線の波長領域において波長を連続的に変えながら物質を透過させた場

合、さまざまな結合を有する分子では、様々な波長において、赤外線の吸収が発生し、いわゆる赤外線吸収スペクトルを得ることができる。通常、このスペクトルは、横軸に波数（波長の逆数cm^{-1}で示す)、縦軸に吸光度（ABS）を取った曲線で表されることが多い。したがって、既知の物質において、どの波長でどの程度の吸収が起こるかを調べ、その赤外線吸収スペクトルのパターンを定性的に標本化し、これと未知物質の赤外線吸収スペクトルのパターンとを定性的に比較することにより、未知物質の同定をすることもできる(山田，1986)。

（２）赤外線吸収スペクトルの測定

土器に付着した試料を微量採取し、ダイヤモンドエクスプレスにより加圧成型した後、顕微FT-IR装置(サーモエレクトロン㈱製 Nicolet Avatar 370，Nicolet Centaulus）を利用し、測定を実施した。なお、赤外線吸収スペクトルの測定は、作成した試料を鏡下で観察しながら測定位置を絞り込み、アパーチャでマスキングした後、透過法で測定した。得られたスペクトルはCO2除去、ベースライン補正などのデータ処理を施した後、吸光度（ABS）で表示している。測定条件及び各種補正処理の詳細については、FT-IRスペクトルとともに図中に併記している。

３　結　果

（１）膜状付着物（試料番号５，６）

FT-IRスペクトルを図１に示す。なお、図中には比較試料として供試した漆の実測スペクトルを併記している。

SL－１ 639、SL－１ 614の膜状付着物のFT-IRスペクトルは類似した赤外線吸収特性を示し、3400cm^{-1}付近の幅広い吸収帯のほか、2930cm^{-1}、2860cm^{-1}、1710cm^{-1}、1610cm^{-1}、1450cm^{-1}、1250cm^{-1}付近の強い吸収帯によって特徴付けられる。なお、3400cm^{-1}付近の吸収帯はＯ－Ｈ基の伸縮振動、2930cm^{-1}、2860cm^{-1}付近の吸収帯はメチル基およびメチレン基のＣ－Ｈ伸縮振動、1710cm^{-1}付近はＣ＝Ｏ伸縮振動、1610cm^{-1}付近はＣ＝Ｏ伸縮振動またはC=C伸縮振動、1450cm^{-1}、1250cm^{-1}付近はメチル基の対称変角振動やＣ－Ｏ伸縮振動あるいはＯ－Ｈ変角振動と予想される。

（２）粒状付着物（試料番号５）

FT-IRスペクトルを図２に示す。なお、図中には比較試料として供試した炭化材、炭化米の実測スペクトルを併記している。

試料番号５の粒状付着物の赤外線吸収特性は、3400cm^{-1}付近の幅広く強い吸収帯、1590cm^{-1}、1390cm^{-1}、1280cm^{-1}付近の強い吸収帯によって特徴付けられるほか、2930cm^{-1}、2860cm^{-1}付近に弱い吸収が認められている。なお、3400cm^{-1}付近の吸収帯はＯ－Ｈ基の伸縮振動、1590cm^{-1}の吸収帯はＣ＝Ｏ伸縮振動またはＣ＝Ｃ伸縮振動、1390cm^{-1}付近の吸収帯はＣ－Ｏ伸縮振動あるいはＯ－Ｈ変角振動と予想される。また、2930cm^{-1}、2860cm^{-1}の吸収帯はメチル基およびメチレン基のＣ－Ｈ伸縮振動と判断される。

４　考　察

遺跡から検出される黒色付着物の代表としては、漆、天然アスファルト、松脂、動植物油、炭化物などの調査例がある。これらは、いずれも固有の吸収帯があり、漆では3400、2930、2860、1710、1620、1450cm^{-1}、天然アスファルトでは2900、1600、1460、1380cm^{-1}と脂肪族飽和炭化水素に帰属する吸収帯に特徴がある。また、松脂は1700cm^{-1}、動植物油は1740cm^{-1}、炭化物は1140 ～ 1160cm^{-1}に特徴ある吸収帯がある。

今回の土器付着物のうち、膜状を呈する２点は、いずれもよく似たスペクトルパターンを示し、3400、2930、2860、1710、1610、1450cm^{-1}付近の脂肪族飽和炭化水素に帰属する吸収帯が認められる点に特徴がある。これらの特徴は、比較試料とした漆によく似たスペクトルパターンであるところから、膜状物質は漆の可能性が高い。また、生漆を固化させると皺のある膜状に固化するが、こうした外観上の特徴も今回の膜状物質と似ており、これらが漆である可能性を支持する。

一方、試料番号５に認められた粒状付着物は、3400cm^{-1}付近の幅広く強い吸収帯、1590cm^{-1}、1390cm^{-1}、1280cm^{-1}付近の強い吸収帯が見られ、2930cm^{-1}、2860cm^{-1}付近に弱い吸収が認められる。この特徴は、上記の漆とは明らかに異なるものであり、同じ条件で測定した既知の資料の中では、炭化材や炭化米とほぼ同じスペクトルパターンを示す。このことから、粒状物質は、何らかの炭化物に由来するものと考えられる。なお、通常の炭化物には見られないメチル基およびメチレン基のＣ－Ｈ伸縮振動に基づく2930cm^{-1}、2860cm^{-1}付近の吸収が微弱に認められていることから、炭化程度が低いことや、炭化物以外の有機化合物が混在している可能性があるが、いまのところ詳細は不明である。

【引用文献】
林　　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
伊東　隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181.
伊東　隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所，66-176.
伊東　隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201.
伊東　隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166.
伊東　隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216.
株式会社　古環境研究所，2001，町屋敷遺跡出土木材の樹種同定.「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第39集　町屋敷遺跡　東九州自動車道（西都－清武間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ」，宮崎県埋蔵文化財センター，168－172.
大塚　誠，1984，住居跡出土の木材炭化物.「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概要（Ⅳ）　宮崎学園都市住居跡出土の木材炭化物」，59－66.
島地　謙・伊東　隆夫，1982，図説木材組織.地球社，176p.
Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.（編），1998，広葉樹材の識別　ＩＡＷＡによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.［Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.
山田　富貴子，1986，赤外線吸収スペクトル法.「機器分析のてびき第１集」，化学同人，１－18.

表１．放射性炭素年代測定結果

試料名	遺構種別	種類	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.	Measurement No.
1	1号池状遺構（SL1）	炭化材	1,280±40	−29.26±0.90	1,350±30	9772−1	IAAA−71065

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表２．暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)		暦年較正年代（cal）		相対比	Code No.
1	1,280± 36	σ	cal AD, 678 − cal AD, 725	cal BP 1,272 − 1,225	0.585	9772−1
			cal AD, 738 − cal AD, 771	cal BP 1,212 − 1,179	0.415	
		2σ	cal AD, 658 − cal AD, 783	cal BP 1,292 − 1,167	0.943	
			cal AD, 788 − cal AD, 814	cal BP 1,162 − 1,136	0.041	
			cal AD, 843 − cal AD, 858	cal BP 1,107 − 1,092	0.015	

1）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.01（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
2）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3）1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4）統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
5）相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

表３．樹種同定結果

番号	遺　構	形　状	樹　種	備　考
1	1号池状遺構（SL1）	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	半径2.2㎝
2	1号池状遺構（SL1）	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	半径2.0㎝
3	1号池状遺構（SL1）	ミカン割状	コナラ属アカガシ亜属	半径2.8㎝
4	6号溝状遺構（SE6）	角材状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	

表４．赤外分光分析試料

番　号	遺物番号	分析箇所
5	ハタケ田SL1−639	膜状物質
		粒状物質
6	ハタケ田SL1−614	膜状物質

測定情報

サンプルスキャン回数: 64
バックグラウンドスキャン回数: 64
分解能: 4.000
サンプル ゲイン: 8.0
ミラー速度: 1.8988
アパーチャ: 可変

光学系の構成

検出器: MCT/A
ビームスプリッタ: KBr
光源: IR

備考

ダイヤモンドエクスプレス成型
顕微透過法
可変アパーチャ使用

CO2除去(直線化)
オートベースライン補正
スムージング処理
Y軸正規化

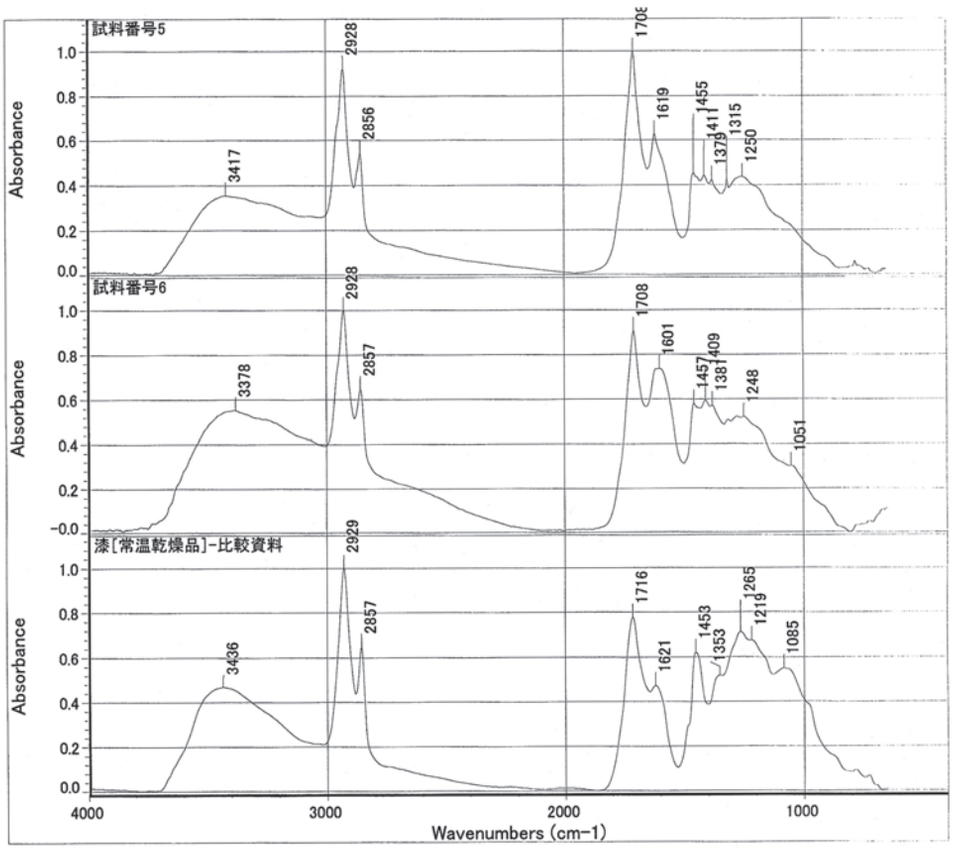


図１．膜状物質のFT-IRスペクトル

測定情報

サンプルスキャン回数: 64
バックグラウンドスキャン回数: 64
分解能: 4.000
サンプル ゲイン: 8.0
ミラー速度: 1.8988
アパーチャ: 可変

光学系の構成

検出器: MCT/A
ビームスプリッタ: KBr
光源: IR

備考

ダイヤモンドエクスプレス成型
顕微透過法
可変アパーチャ使用

CO2除去(直線化)
オートベースライン補正
スムージング処理
Y軸正規化

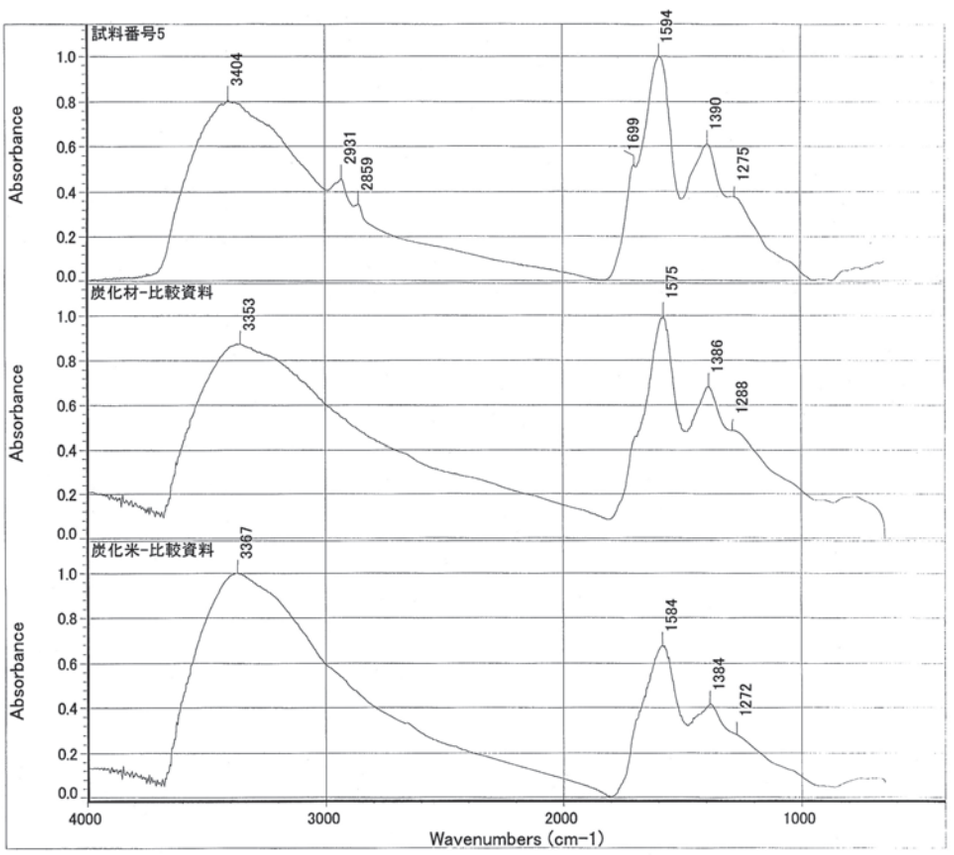
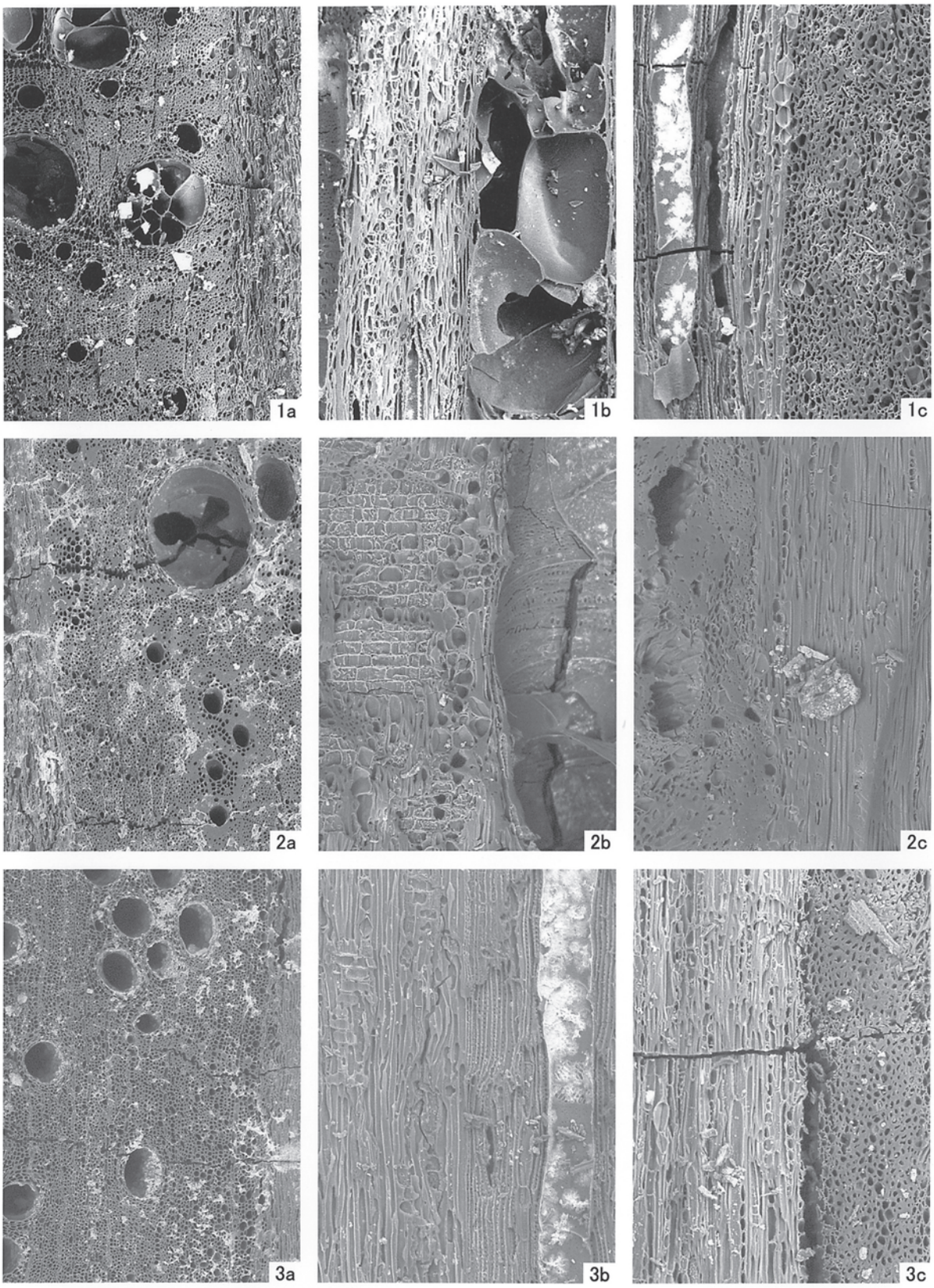


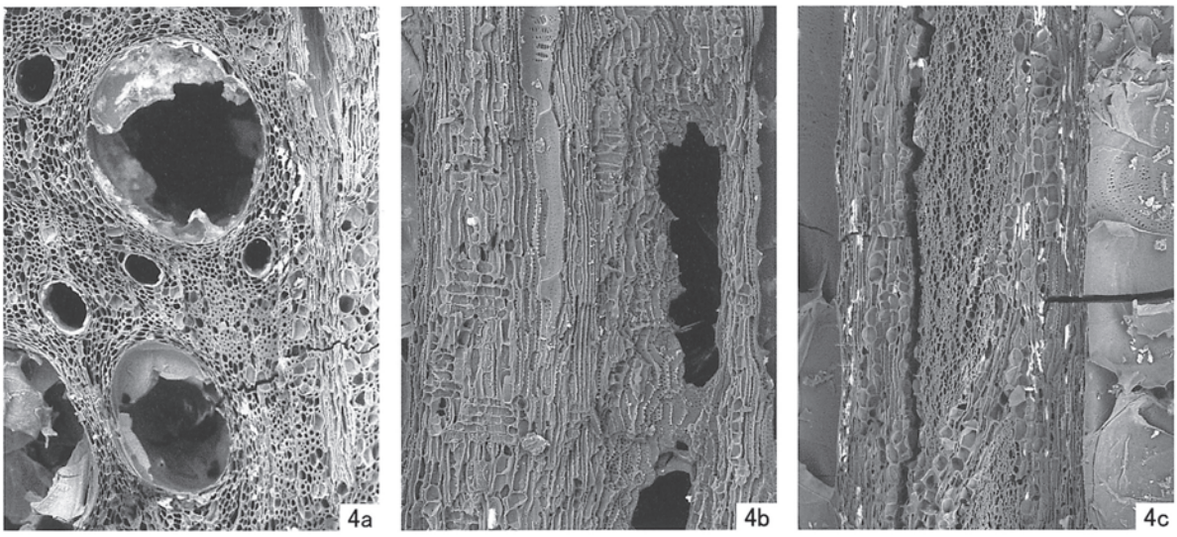
図２．粒状物質のFT-IRスペクトル

図版20　炭化材（1）



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（試料番号1）
2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（試料番号2）
3. コナラ属アカガシ亜属（試料番号3）
a:木口,b:柾目,c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c



4. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（試料番号4）
a:木口,b:柾目,c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

図版22　赤外分光分析試料の採取位置

写真１．試料番号５（SL １－639土器）

写真２．試料番号６（SL １－614土器）

第Ⅵ章　まとめ

1　遺物の様相

調査では多くの遺物が出土しており、表８に遺構別出土遺物をまとめた。遺物の大半は池状遺構および包含層から出土し、他の遺構からは土師器や須恵器が多く、黒色土器や陶磁器類の出土は少ない。時期的には、緑釉陶器や越州窯系青磁・白磁碗Ⅰ類などを中心とする10世紀前後と白磁碗Ⅳ類の12世紀代、龍泉窯系青磁碗の15 ～ 16世紀代の三つの時期に分かれる。

もっとも多く出土している土師器坏類は、多種な形態が存在し、遺構ごとあるいは形態ごとにみても明瞭な状況で土器の変遷を追うことは困難であるため、ここでは馬渡遺跡の報告書において考察された坏分類や類似資料を出土した遺跡を比較・参考して考えてみたい。なお、坏各形態によって口径の規格が11 ～ 15㎝の幅に広がり、それが時期差なのかバリエーションなのかの判断が難しく、これから述べる分類はその時期を代表する形態ではなく、その時期から継続する（始まる）ものと考えている。

本遺跡出土の坏についてみてみると口径や器高の類似性から、本遺跡Ⅲａ類が馬渡Ⅰ群にあたるが、資料数としては少ない。Ⅰａ～ｃ類、Ⅲｂ・ｃ類、Ⅳａ・ｂ類、Ⅷ類、Ⅸ類は馬渡Ⅱ群に、馬渡Ⅲ群にはⅡａ類、Ⅵａ～ｇ類が相当する。そのうちⅣｂ類の口径14㎝に近いものは馬渡Ⅰ群の時期に、Ⅵａ・ｄ類の口径が大きい13㎝代のものは馬渡Ⅱ群に遡るかもしれない。またⅦ類は、宮崎郡清武町上猪ノ原遺跡第５地区の調査で、掘立柱建物跡SB ７柱穴においてⅡａ・Ⅵｂ・Ⅶａ類が供伴し、この二つの時期にまたがると想定される。次にⅡｂ・ｃ類は江内谷SD01出土の遺物に相当するものと考えられ、Ⅴａ・ｂ類については馬渡遺跡や江内谷遺跡では類例がなく、鹿児島県鍛冶屋馬場遺跡などに類似資料がみられ、、鶴喰遺跡の土師器分類坏Ａ類に系譜がつながる可能性があり、時期が下る可能性が高い。

高台付埦は、坏Ⅰ類に類似した体部をもつものもみられるが量的には少なく、直線的にのびるタイプのものが多い。そのほか椀状を呈するⅥｂ類もある。高台は外側に開くものが大半を占めるが、やや時期の上る短くしっかりした高台（1ａ類）や反対に時期の下る高台が低く幅の狭いもの（12類）が存在する。黒色土器の高台付埦についても同様な傾向が看取される。そのほかⅠ類は坏類を模倣したものやⅨ類のような厚手で内湾するものや口径が広くて深い鉢、脚を有するものなど特殊な形態のものがみられる。煮沸形態である甕は、坏に比べ出土個体数は少なく、外面調整にはハケメ・ナデ・タタキの各調整は大きくは時期差を表していると考えられ、形態も鉢型をなすものなど時期が下るものがある。大型鉢は、太宰府編年のⅦ期に出現しており、本遺跡の出土時期と大きくずれるものではない。大型鉢の出土類例は県内ではほとんど確認されていないが、都城市肱穴遺跡よりⅢあるいはⅣ類の脚が包含層中より出土している。

まとめると、遺物は土師器坏類を基本に時期を想定すると、Ⅲａ類が大宰府ⅥＢ期（９世紀第２四半期）に、Ⅱｂ・ｃ類・Ⅴａ・ｂ類および高台付埦Ⅵｂなどは大宰府Ⅷ期よりやや時期が下る可能性もあり10世紀前半までを視野に入れておきたい。本遺跡の主体的資料であるⅠａ～ｃ類、Ⅲｂ・ｃ類、Ⅳａ・ｂ類、Ⅷ類、Ⅸ類、その次の段階のⅡａ類、Ⅵａ～ｇ類については、９世紀第２四半期から10世紀前半の間に推移するものと考えておく。胎土では坏の場合、橙色を呈すものが多いが、黒色土器など器種によっては淡橙色や灰白色系が多くをしめる。時期が下ると灰白色系が主体的となり橙色系は排除されている。粘土はＡＴ起源やボラ粒を含むなど在地系のものを使用しており、興味深いのは黒色土器（47）では坏部と高台部が別々の胎土で製作されていることで、胎土の差が必ずしも製作地の違いを現しているとは限らないようだ。

これら土師器類と供伴する陶磁器類には、緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系用青磁、白磁がある。緑釉陶器には軟陶と硬陶があり京都産および防長産であろうと推定され、それらの出土分布の違いは時期差を示して

いる可能性もある。灰釉陶器は碗や壷があり胎土に微黒色斑が入ることから猿投窯と判断され、高台内にヘラ削りが認められることから９世紀後半を想定される。越州窯系青磁にはⅠ・Ⅱ類のほか大碗や皿、水注が、白磁はⅠ類碗があり、９世紀後半から10世紀前半までの時期幅が想定され、土師器の時期と大きな矛盾は生じない。

12世紀代では同安窯系青磁（1634）、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類や内面に櫛目文を施すⅥ類をはじめ、白磁碗Ⅳ類を埋納していた坏ＸⅢ類（176・177）のほか小皿（71）、高台付埦の高台12類や黒色土器Ⅴ・Ⅵ類・高台６類・12ａ類、鉢状の形態をなす甕があり、坏の形態などから12世紀前半から中頃と考えておきたい。また、15～16世紀代では龍泉窯系青磁、青花、坏類は確定しえないが坏ＸⅢ類（109）・小皿（1220）が該当する可能性がある。

２．遺構の変遷

本遺跡の成果は、大型建物を含むいわゆる豪族居宅のほぼ全容を調査したことであるが、多くの遺構が重複しており、建物を中心とした遺構の変遷を提示する。建物群は主軸や側柱の並びの状況から五つの時期に分類可能である。

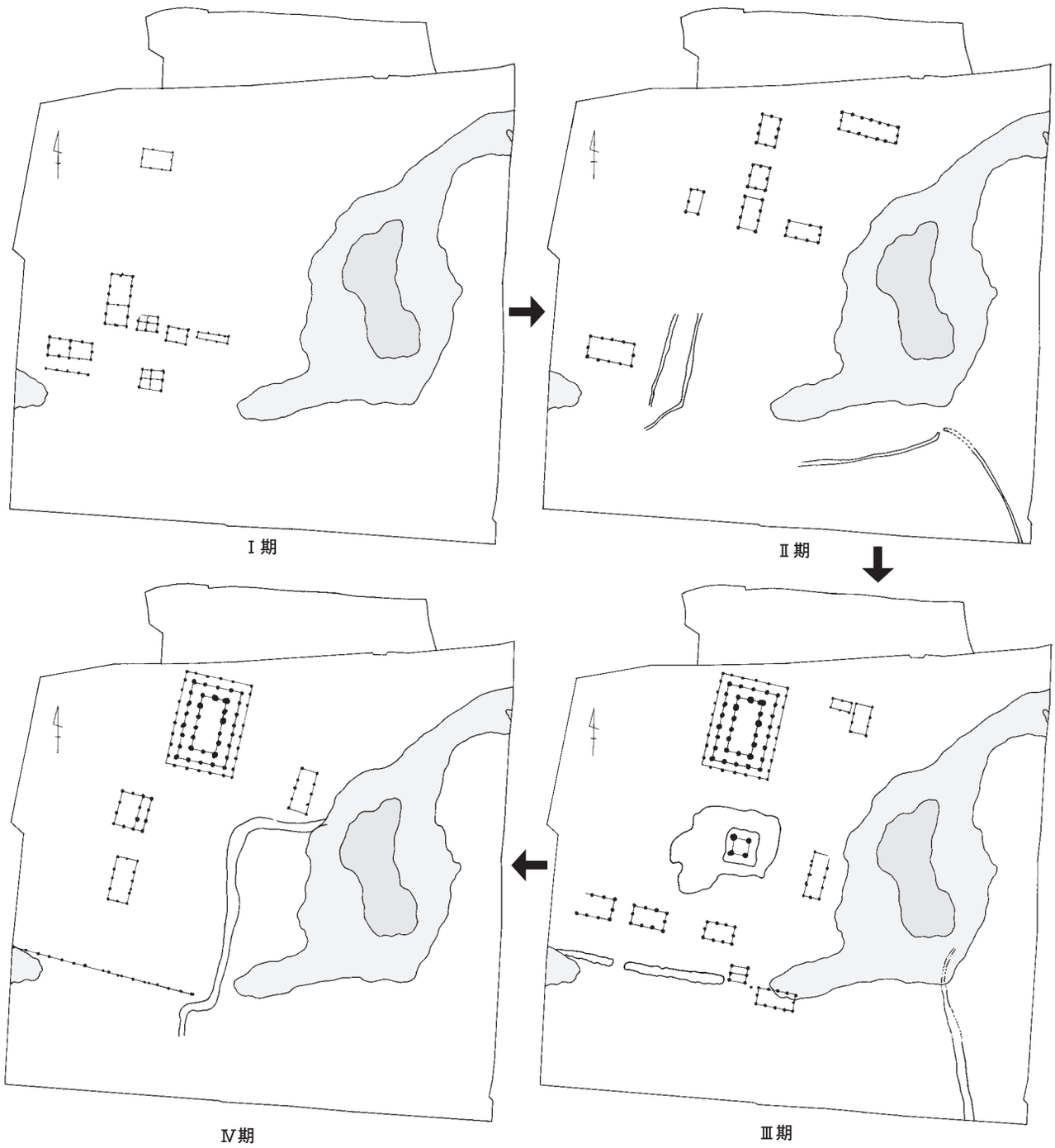
Ⅰ期は主軸が７°前後東に振れる建物で、７棟（SB ３・７・９・26・30～32）の建物と柵列１基（柵列２）からなり、SB ７はSB30の北側柱列が並ぶことから含めた。建物は後の屋敷地では南（区画溝のすぐ北側）にまとまり、30㎡を超え東柱を有する建物２棟と倉庫と想定される小規模な建物などで構成される。特に大型のSB ３の東には３軒の小型建物が並列して設けられる。出土遺物や遺構の重複関係からSE ９やSE11も含まれる可能性がある。

Ⅱ期は主軸が11°前後東に振れる建物で、７棟（SB10～12・14・20・23・28）の建物からなる。SB10～12を一辺とする「コ」の字状あるいは「ロ」の字状に建物が配置されると考えられるが、SB23の南桁側柱とSB10の北梁側柱が並ぶことからSB23を同時併存とし、SB20を含め前者の配列を想定した。さらにその南には40㎡を超えるSB14が東西に主軸をもち分布する。平行して南北にのびるSE ３・６やＬ字に区画するSE15とSE30もこの時期の可能性がある。

Ⅲ期は、屋敷地が形成される段階で、主軸が13°前後東に振れる建物、９棟（SB １・５・６・８・16・17・24・25・35）、池状遺構SE ２および門で構成される。なお、SB24・25はそれぞれ桁と梁の側柱が、SB １の孫庇北側梁側柱と並列することから、またSB ８は桁の側柱がSB ５・６の側柱やSE ２と平行することからこの時期に含めた。遺構分布は、大型建物（SB １）が最も標高の高い約133.6ｍに位置し、南に地形が下るに合わせ池状遺構、そして東西に主軸をもち並列する３棟の建物（SB ５・６・８）、くぼ地落ち際に南北にSE ２および四脚門が設置される。門の東にはSE ２同様の溝状遺構は認められず、SB17が「門」東を区画あるいは警護するための附随施設と考えたい。門が屋敷地中央から東にずれていることなど疑問も残るが、門の前方には道が当然存在しており、それは時期の下るSE １（道状遺構）と重なっていたと考えられ、北東方向へ延びる道と区画施設が最も接近する箇所に設けられたのではないだろうか。また、池状遺構後に設けられたコの字状の区画については、SE ７との重複関係よりこの時期に作り替えられたものと想定される。

Ⅳ期は主軸が14°前後東に振れる建物で、４棟（SB ２・４・19・27）の建物と柵列１基（柵列１）からなる。池状遺構は埋没するものの、SB １は、柱穴において１～２回の建て替え等が想定されⅣ期においても存続していた可能性が高い。また、東と南を区画する施設として、Ｌ字状に延びるSE ７も当期にあたる。

Ⅴ期は主軸が７°前後西に振れる建物で、３棟（SB18・21・22）の建物からなる。この主軸の建物は屋敷地内にはみられず、調査区の南東隅にのみ分布し、さらに南に広がる可能性もある。SE １（道状遺構）も当期に含まれる。



第116図　遺構変遷図

ここで各期の掘立柱建物跡の特徴をみると、大型建物を除く建物規格は１×１が１棟、２×１が３棟、２×２が６棟（総柱２棟）、３×１が３棟、３×２が８棟、４×１が１棟、４×２が５棟、５×２が２棟、６×２が１棟、不明４棟で、３×２が主体的となるが、各期ごとにみると２×２から５ないし６×２のそれぞれの規模の建物から構成されており、面積からも倉庫と想定される10㎡前後、中型の20㎡代、やや大型の30～40㎡代の建物が存在し、ある一つの規格のみが突出した状況は認められない。また、柱間の長さをみると、Ⅰ～Ⅳ期では総柱や小型建物は2.5mなどの数値を示し、３～５間建物では、桁行きはほぼ2.10m～2.50mと幅がある。時期別にみると桁・梁行きとも新しくなるにつれて長くなる傾向が看取される。

Ⅰ期の建物群は、30㎡を超える２棟の建物と倉庫群がくぼ地に沿って配置され、大淀川の交通における物資の輸送拠点であったことが想定され、Ⅱ期には何らかの公的機関が設けられた可能性がある。その後、交

通や物資の拠点だけでなく、広域の地域開発および物資流通の拠点的施設として、地域の有力層の邸宅として展開したものと考えられる。池状遺構の設置や埋土中からイネの植物珪酸体が検出されたこと、「泉」や「春」などの墨書土器、さらには周辺遺跡より群を抜く消費量の供膳具や国内外の陶磁器類は、地域経営のための祭祀や饗宴が行われた証であり、自然科学分析より「漆」や「鍛冶」、銅製品を扱った「鋳造」など手工業生産が行われていたことも想定される。このように、四脚門や池状遺構など邸宅機能の色彩が強いものの、Ⅱ期のコの字状建物群からの移行ということを考慮すれば、やはりそこには、何らかの公的役割を有した者の邸宅と考えたい。Ⅰ期建物群を坏Ⅲａ類の９世紀第２四半期、Ⅳ期を坏Ⅱｂ・ｃ類・Ⅴａ・ｂ類の時期10世紀前半と、また、Ⅴ期は空白期をおいて12世紀前半から中頃にあてはめておく。また、15～16世紀代においても龍泉窯系青磁や桜島軽石が堆積した溝状遺構もわずかであるが存在し、周辺低地では水田が確認されている。

今回発見された大島畠田遺跡のような豪族の居宅ともいえる遺構群とは別にこの時期、都城市域では「地域の有力者」あるいは「何らかの公的機関」と想定されている遺跡がいくつかあるが、それらとの相違をどう考えていくのか、例えば、横市川に面して営まれた馬渡遺跡とそのすぐ上の台地縁辺に営まれた中尾山・馬渡遺跡との関係など、遺跡の立地・性格を地域ごとに分析していく必要性を感じる。また、９世紀後半において、遺跡が増大するに伴い国内外の陶磁器類が数点出土する事例も増えてきており、拠点的施設を介在しながら流通品として各小地域の富裕層などへ需要が拡大浸透し消費されていたとも考えられ、それは流通経路もしくは交通路や地域のネットワークをも表出しているかもしれない。今後検討していくべき課題である。それ以外にも、詳細な遺構の分析や土師器編年の確立、当該期の須恵器の位置付けそして豪族居宅を生み出した背景についても検討を要する。

〈参考文献〉

『都城市史　通史編　自然・原始・古代』　都城市　1997
山本信夫「大宰府出土施釉陶器の編年について」『国立歴史民俗博物館研究報告　第82集』　国立歴史民俗博物館　1999
「大宰府条坊跡ＸⅤ」『太宰府市の文化財　第49集』太宰府市教育委員会　2000
村田和弘「発掘調査によって検出された四脚門の検討－平安京右京一条三坊九町検出の四脚門について－」『京都府埋蔵文化財情報』75　2000
「横市地区遺跡群　肱穴遺跡（1）今房遺跡 馬渡遺跡（第１次）」『都城市文化財調査報告書　第50集』都城市教育委員会　2000
田中広明「関東地方の施釉陶器の流通と古代社会（2）」『研究紀要　第16号』埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2001
「鍛冶屋馬場遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査（39）』鹿児島県埋蔵文化財センター　2002
永山修一「文献からみた平安時代の日向国」『シンポジウム日向における平安時代の様相』宮崎県埋蔵文化財センター　2000
「江内谷遺跡」『都城市文化財調査報告書　第59集』　都城市教育委員会　2003
『古代の官衙遺跡　Ⅰ遺構編』　奈良文化財研究所　2003
外山隆之・原田亜紀子「都城市における中世掘立柱建物跡の類型化」　宮崎考古第19号　宮崎考古学会　2004
「馬渡遺跡」『都城市文化財調査報告書　第62集』　都城市教育委員会　2004
桑畑光博「都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究（1）」宮崎考古学会　2004
田中広明「官衙の門、居宅の門」『研究紀要　第20号』埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2005
『古代官衙・集落研究会　古代豪族居宅の構造と機能』研究報告資料奈良文化財研究所　2006
「上猪ノ原遺跡第５地区」『清武町埋蔵文化財調査報告書　第19集』　清武町教育委員会　2006
『都城市史　資料編　考古』　都城市 2006
「鶴喰遺跡（中世編）」『都城市文化財調査報告書　第79集』　都城市教育委員会　2007
「筆無遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第166集』　宮崎県埋蔵文化財センター　2008

表10　遺物観察表（土師器（甕・坏・埦・黒色土器）・布痕土器・弥生土器）

報告書番号	遺構	器種	器形	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態	色調		調整		切り離し状況	胎土	胎土	接合関係	備考
									外面	内面	外面	内面					
1	SB1　P13	土師器	坏	完形	12.0	4.95	5.25	Ⅵa	浅黄橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	ヘラ板目	DⅡ	きめ細かい。0.5㎜以下の赤褐・灰を少し、無色透明の微粒子を多く含む		
2	SB1　P1	土師器	坏	底部			5.6	Ⅲ	にぶい橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅣ	2㎜以下の灰白色粒、1㎜以下の透明光沢粒を多く含む		外面に黒斑
3	SB1　P4	土師器	坏	体部～底部			4.2	Ⅳa	橙	橙	横ナデ	横ナデ	ヘラ	WⅠ	3.5㎜以下の赤褐・灰褐色粒、無色透明光沢粒を多く含む		
5	SB1　P9	土師器	坏	底部			7.0	Ⅶb	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	ヘラ?	WⅠ	3㎜以下の褐色粒、無色透明光沢粒を含む		
6	SB1　P9－1	黒色土器（内黒）	坏	口縁～体部	14.2			不明	橙	にぶい黄橙	回転ナデ、ミガキ？風化気味	回転ナデ、ミガキ、風化		黒9	きめ細かい灰白・赤褐色粒、1㎜以下の光沢粒を少し含む		内面に黒変
7	SB1　P9－6	土師器	高台付埦	体部～底部			7.55	高⑥a	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	3㎜以下の赤褐色粒、微細な透明光沢粒を含む		
9	SB1　P10	黒色土器（内黒）	坏	底部			6.8	Ⅰ	灰白	黒		ミガキ	ナデ、風化気味	黒1	2㎜以下の灰色粒、微細な透明光沢粒を含む		
10	SB1　P10	土師器	坏	体部～底部			6.35	Ⅰb	橙	橙	ナデ、風化著しい	ナデ	ヘラのあとナデ	DⅢ	4㎜以下の赤褐・灰褐・灰白色粒を含む		
11	SB1　P11	土師器	坏	体部～底部			5.2	Ⅱc	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ、風化気味	ヘラ	DⅣ？	2㎜以下の赤褐色粒を少し、1㎜以下の透明光沢粒を多く含む		
13	SB1　P11	土師器	坏	体部～底部			6.15	Ⅷ	橙	橙	横ナデ、風化	回転ナデ	ナデ	DⅢ	1.5㎜以下の褐灰色粒、1㎜以下の灰白色粒、黒色光沢粒、微細な光沢粒を含む		
16	SB1　P21	土師器	坏	底部			5.9	Ⅰa	にぶい橙	にぶい黄橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味	ヘラのあとナデ　線刻	DⅡ	2㎜以下の赤褐色粒、1㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を少量含む		
17	SB1　P23－2	土師器	坏	底部			6.05	Ⅲa	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DV	2.5㎜以下の柱状黒色光沢粒、2㎜以下の赤褐色粒、微細な灰白色粒を少量、微細な透明光沢粒を多く含む		
19	SB1　P？	土師器	坏	底部			5.15	Ⅵ	橙	にぶい黄橙	回転ナデ、工具痕？	回転ナデ、風化気味	ヘラ	DV	1㎜以下の灰白色粒を多く、褐色粒を少量、微細な透明光沢粒を多く含む		
20	SB2　P4	土師器	高台付埦	体部～底部			7.9	高⑩	橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	放射状の押圧	DⅡ	2.5㎜以下の橙色粒、1㎜以下の灰白色粒を少量、微細な透明光沢粒を多く含む		外面にスス付着
21	SB2　P5	土師器	坏	口縁～底部	11.95	5.3	5.75	Ⅳb	橙	橙	回転ナデ、風化著しい	ナデ、風化著しい	ヘラのあとナデ	DⅡ	2㎜以下の赤褐・灰褐・灰白色粒、微細な光沢粒を多く含む		
22	SB2　P5	土師器	坏	体部～底部			5.8	Ⅵc	橙	橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ	ヘラ	DⅡ	5㎜以下の灰白・灰褐色粒、微細な光沢粒を含む		
23	SB2　P6	黒色土器（内黒）	高台付埦	体部～底部			7.8	黒高②c	灰白　褐灰	褐灰	回転ナデ、風化気味	ミガキ、風化気味	放射状の押圧	黒1	3㎜以下の橙色粒、2㎜以下の灰白色粒を少量、1㎜以下の褐灰色粒、微細な透明光沢粒を含む		
24	SB2　P6	布痕		口縁～胴部					橙	橙	ナデ、摩耗気味	布痕、摩耗気味			2～5㎜程度の橙色粒を含む		
26	SB2　P7	土師器	坏	口縁～底部	11.8	4.35	6.75	Ⅰa	黄橙	黄橙	ナデ、風化著しい	横ナデ、風化著しい	板目	DⅠ	2㎜以下の灰白・灰褐・赤褐色粒、微細な光沢粒を含む		
27	SB2　P9	土師器	坏	口縁～底部		5.0	6.2	Ⅲc	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅡ	1㎜以下の赤褐・灰褐・灰白色粒、微細な光沢粒を多く含む		
28	SB2　P12	布痕		胴部					にぶい橙	にぶい橙	ナデ	布痕			1㎜以下の黒・白色粒、微細な光沢粒、5㎜以上の橙色粒を含む		
30	SB3　P6	土師器	坏	体部～底部			8.2	Ⅰ	橙	橙	ナデ、風化	丁寧なナデ	ヘラのあとナデ	TⅠ	2.5㎜以下の灰褐色粒、微細な光沢粒を含む		
31	SB3　P8	土師器	坏	口縁～底部	12.6	4.9	6.25	Va	浅黄橙	にぶい黄橙 浅黄橙	横ナデ	横ナデ	ヘラ	DⅢ	3㎜以下の赤褐色粒、2㎜以下の灰白色粒を含む		
32	SB3　P10	土師器	坏	底部			6.8	Ⅰa	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ（工具痕？）	DⅠ	1.5㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を少量含む		
33	SB3　P10	土師器	高台付埦	底部				高①b	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ、風化気味	ナデ	DⅡ	4㎜以下の暗褐色粒、1.5㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を少量含む		
35	SB3　P11	土師器	坏	底部			6.15	Ⅷ	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	3㎜以下の褐・乳白色粒、1㎜以下の茶・黒褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む	SL1－485	
36	SB3　P11	土師器	甕	口縁					橙	にぶい赤褐	ナデ、風化気味	横方向のハケ目、ナデ			4㎜以下の褐色粒、1㎜以下の透明・黒色光沢粒を含む		
37	SB3　P11	布痕		口縁					橙	橙	口唇部はヘラ切り後ナデか？ナデ	布痕、風化著しい			5㎜以下の赤褐色粒を含む		
38	SB3　P11	布痕		口縁					黄橙	黄橙	ナデ	布痕			1㎜以下の褐色粒を含む		
40	SB3　P14	黒色土器（内黒）	高台付埦	底部			7.6	黒高③b	橙 にぶい黄橙	暗灰	回転ナデ、風化気味	ミガキ、風化気味	ナデ、風化気味	黒9	5㎜以下の赤褐色粒、1.5㎜以下の褐灰色粒を少量、0.5㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む		
41	SB4　P1	土師器	高台付皿	体部～底部			7.2	Ⅲ	橙	橙	ナデ	ナデ	ナデ	DⅢ	4㎜以下の褐色粒、3㎜以下の灰色粒、2㎜以下の灰白・黒色粒、透明光沢粒を含む		
42	SB4　P9	土師器	甕	胴部					にぶい橙	浅黄橙	縦・横方向に工具ナデ、凹	下から上へ工具による粗いナデ			3㎜以下の褐色粒を含む		
43	SB4　P9	土師器	坏	口縁～底部	12.4	4.5	5.6	Ⅳa	にぶい橙	にぶい橙 灰黄	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	TⅠ	2㎜以下の赤褐・灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む		
44	SB4　P11	土師器	甕	口縁					橙	橙	ナデ、ハケ目か櫛描波状か	風化著しく調整不明			5㎜以下の褐色粒、3㎜以下の白色粒、1㎜以下の透明光沢粒を多く含む		
45	SB4　P11	土師器	甕	口縁～頸部					橙	にぶい赤褐	ナデ	ナデ、ケズリ			1㎜以下の白・褐色粒、金色光沢粒を多く含む		
46	SB4　P11	土師器	Ⅲ	口縁				Ⅲ	橙	橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ、風化著しい		DⅢ	3㎜以下の赤褐色粒、1㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む		

報告書番号	遺構	器種	器形	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態	色調		調整		切り離し状況	胎土	胎土	接合関係	備考
									外面	内面	外面	内面					
47	SB4 P11	黒色土器(内黒)	高台付埦	底部			8.0	黒高②b	橙 灰黄褐	黄灰	回転ナデ	ナデ、風化著しい	回転ナデ	黒7	3㎜以下の灰褐色粒、2㎜以下の灰白色粒を少量、微細な透明光沢粒を含む		高台と体部の胎土が違う
49	SB4 P11	土師器	坏	口縁	13.95			不明	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ		TⅠ	2㎜以下の赤褐・灰褐・灰白色粒を含む		
50	SB4 P11	土師器	坏	底部			6.6	Ⅶb	橙	橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ、風化著しい	ヘラ	DⅡ	2㎜以下の灰白・褐灰色粒を少量、微細な透明光沢粒を含む		
51	SB4 P11	土師器	坏	体部～底部			6.2	Ⅱc	にぶい橙	橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味	ヘラ→ナデ	DⅢ	3㎜以下の赤褐色粒、2㎜以下の灰白色粒を含む		
52	SB4 P11-8	布痕		口縁					にぶい橙	橙	ナデ	布痕			6㎜以下の灰・褐色粒を多く含む		
53	SB4 P12	土師器	坏	体部～底部			7.4	Ⅷ	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅡ	1㎜以下の明赤褐色粒を含む		
56	SB4 1910	土師器	坏	口縁～体部	12.2			不明	橙	橙	回転ナデ、口唇部は風化著しい	回転ナデ		DⅠ	1㎜以下の赤褐・灰褐色粒、微細な光沢粒を含む		やや固い
57	SB5 P3	土師器	坏	口縁～底部	12.2	5.1	5.7	Ⅵc	浅黄橙	浅黄橙	横ナデ、粘土のつなぎ目	横ナデ	ヘラ→板目	WⅠ	2㎜以下の褐色粒を少量、1㎜以下の黒・灰色粒、微細な透明光沢粒を多く含む		
59	SB6-6	土師器	高台付埦	口縁～底部	14.0	6.05	7.9	高③	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	放射状の押圧	TⅡ	2㎜以下の灰褐色粒、1㎜以下の無色透明光沢粒を含む		
60	SB6 P9	土師器	坏	底部			6.0	Ⅵ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	WⅠ	2.5㎜以下の赤褐・灰白・灰褐色粒を含む		
61	SB7 P5	布痕		胴部					橙	橙	ナデ	布痕			1㎜以下の黒色粒、1㎜以上の赤褐・明赤褐色粒を含む		
62	SB8 P9	土師器	坏	底部			6.2	Ⅲa	浅黄橙	橙	回転ナデ、粘土のつなぎ目	回転ナデ	ヘラ	WⅡ	2㎜以下の灰褐・赤褐色粒、微細な光沢粒を多く含む		
63	SB9 P9	土師器	坏	口縁～底部	12.9	4.6	7.4	Ⅰd	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DⅣ	2㎜以下の褐色粒、黒色光沢粒、微細な無色透明粒を多く含む		
65	SB14-12	土師器	高台付埦	口縁～体部	15.5			埦Ⅲa	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ、仕上げナデ?	放射状の押圧	DⅣ	4㎜程の褐色粒を1ヶ、1.5㎜以下の褐色粒、透明・黒色光沢粒を含む		
66	SB15 P2	土師器	坏	体部～底部			5.8	Ⅱ	橙	橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味	ヘラ	DⅡ	2㎜以下の褐灰色粒を含む		
67	SB15 P2	黒色土器(内黒)	高台付埦	体部～底部			7.6	黒高②a	灰黄褐	黒	回転ナデ	ミガキ、風化気味	回転ナデ	黒7	2㎜以下の灰白色粒を少量、微細な透明光沢粒を多く含む		
69	SB17 P9	土師器	高台付埦	体部～底部			10.6	埦Ⅰ	橙 褐灰	橙	粗いケズリ、ナデ	ナデ	板目(線状)	DⅡ	4.5㎜以下の赤褐・灰褐・灰白色粒、微細な光沢粒を多く含む		外面 暗褐色
70	SB17 P8	土師器	坏	底部			5.2	Ⅰ	橙	橙	ナデ、粘土のつなぎ目、風化著しい	ナデ、風化著しい	?	DⅢ	2㎜以下の赤褐・灰褐・灰白色粒を含む		
71	SB18 P2	土師器	小皿	ほぼ完形	9.5	1.4	7.4	小皿	にぶい黄橙	にぶい黄橙 褐灰	ナデ	横ナデ	ヘラ切り→板目	WⅠ	1㎜以下の灰褐色粒、微細な黒色光沢粒を少量含む		中世
72	SB19 P4	土師器	坏	口縁～体部				不明	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ		DⅠ	3㎜以下の灰白・赤褐色粒、微細な光沢粒を含む		
73	SB20 P2	土師器	坏	底部			5.35	Ⅰ	橙	橙	回転ナデ	ナデ、風化気味	ヘラのあとナデ	DⅡ	1㎜以下の灰褐・赤褐色粒、微細な光沢粒を含む		
74	SB20 P3	土師器	坏	底部			5.8	Ⅷ	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DV	2㎜以下の茶・黒褐色粒、微細な光沢粒を多く含む		
75	SB28 P4	土師器	坏	体部～底部			6.7	Ⅱ	にぶい橙	にぶい橙	ナデ、風化気味	ナデ、風化気味	ナデ、風化気味	DⅡ	3㎜以下の赤褐色粒を少量、1㎜以下の灰褐・灰白色粒を含む		
76	SB29 P7	土師器	坏	底部			5.6	Ⅲ	にぶい橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ、風化気味	ヘラ	DⅠ	1.5㎜以下の灰白・赤褐色粒を少量、微細な透明光沢粒を含む		
77	SB34 P6	土師器	坏	体部～底部			6.75	Ⅱ	浅黄橙	浅黄橙	ナデ、風化著しい	ナデ、風化著しい	ヘラ、ヒダスキの痕跡?	WⅠ	2㎜以下の赤褐・灰褐色粒を含む		
78	SB34 P6	土師器	甕	口縁					橙	にぶい橙	斜方向のナデ	横ナデ、ケズリ			3㎜以下の褐色粒を多く含む		
79	SB34 P6	土師器	甕	口縁					橙 にぶい黄橙	橙 褐灰	横ナデ、ナデ	ナデ、ケズリ?			5㎜程の黒褐色粒、微細な光沢粒、2㎜以下の褐・乳白色粒を含む		
80	SB34 P8	土師器	坏	口縁～底部	13.75	5.1	6.6	Va	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ	ヘラ	WⅠ	2㎜以下の灰褐・赤褐・灰白色粒、微細な光沢粒を多く含む		
81	SB34 P6	布痕		口縁					橙	橙	ナデ	布痕			3㎜以下の褐色粒、1㎜以下の乳白・褐色粒を多く含む		
82	SB35-4	土師器	坏	底部			6.6	X	橙	橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ、鮮明な回転痕	ヘラ	DⅢ	きめ細かい0.5㎜以下の灰白色粒を含む		
83	SB35	土師器	坏	蓋				フタ	にぶい橙	にぶい橙		ナデ	ヘラ	DⅡ	5㎜以下の灰白色粒を含む		
84	SB35	土師器	皿?	体部～底部			8.55	不明	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DⅡ	4㎜以下の灰白・灰褐・赤褐色粒、微細な光沢粒を含む		薄手
85	SB35	土師器	高台付埦	体部～底部			9.0	高⑤a	浅黄橙	橙	風化著しい	ナデ	ヨコナデ	TⅠ	2㎜以下の赤褐・灰白・灰褐色粒、微細な光沢粒を含む		
87	P10	布痕		口縁～胴部	15.6				橙	橙	ナデ	布痕			3㎜以下の褐灰・褐色粒、微細な光沢粒を少量含む		
88	P-13	土師器	高台付埦	体部～底部			6.65	高⑩	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	放射状	DⅡ	3㎜以下の灰白・乳白・赤褐・灰褐色粒、黒色・無色透明光沢粒を含む		
89	P-14	土師器	坏	体部～底部			6.6	Ⅲ	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅡ	1.5㎜以下の赤褐・灰褐色粒を含む		

報告書番号	遺構	器種	器形	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態	色調		調整		切り離し状況	胎土	胎土	接合関係	備考
									外面	内面	外面	内面					
90	P−14	土師器	坏	口縁〜底部	12.05	4.2	6.7	Ⅰa	橙	橙	回転ナデ、底部付近に面取り、風化著しい	ナデ、風化著しい	ナデ	DⅢ	4㎜以下の赤褐・灰褐・乳白色粒を含む		
92	P−18	土師器	坏	体部〜底部			6.35	Ⅱa	橙	橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ	ナデ	DⅡ	1㎜大の赤褐・灰褐色粒を含む		
93	P−30	土師器	坏	口縁				不明	浅黄橙	浅黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ		WⅡ	微細な赤褐・褐灰色粒、銀色光沢粒を含む		墨書土器
95	P−46	土師器	高台付埦	口縁〜底部	14.6	7.7	8.1	埦Vc	橙	橙	ヘラミガキ、磨耗	ヘラミガキ、磨耗	ナデ	DⅡ	7㎜以下の赤褐色粒、1㎜以下の黒色・透明光沢粒を含む		
96	P−52	土師器	坏	体部〜底部			6.4	Ⅶb	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	TⅠ	2㎜以下の赤褐色粒、1㎜以下の透明光沢粒を含む		
97	P−71	土師器	小皿	体部〜底部			7.0	小皿	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ミガキ	糸切り	TⅠ	精良		中世
98	P−74	土師器	坏	体部〜底部			6.5	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗いナデ、工具？	ミガキ	ナデ	DⅠ	2㎜以下の赤褐色粒を含む		
100	P−44	黒色土器(内黒)	高台付埦	底部			7.7	黒高⑩	にぶい橙	黒	ナデ	ミガキ	ナデ	黒3	1㎜以下の褐色粒を含む		
101	P−44	黒色土器(内黒)	？	口縁〜体部	13.7			不明	橙	黒	ナデ	ミガキ		黒3	微細粒		
102	P−71	土師器	甕	口縁	19.0				橙　黒褐	にぶい黄橙　黒褐	ナデ、工具による横・斜方向のナデ	工具による斜・横方向のナデ			2㎜以下の褐・黒褐・淡黄色粒、1㎜以下の金色光沢粒を含む		外面にスス、内面に炭化物付着
103	SC4	土師器	坏	口縁〜底部	15.8	4.1	7.1	ⅩⅢ	灰黄	灰黄	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅠ	きめ細かな灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む	SC5、SC24−2 SC24−10、SC24−17	中世
104	SC5−8	土師器	坏	口縁〜底部	13.8	4.7	6.4	Ⅲc	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅡ	2.5㎜以下の灰褐・赤褐色粒、1.5㎜以下の無色透明粒を含む		
105	SC5−6	土師器	坏	口縁〜底部	12.2	5.2	5.8	ⅩⅠ	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅠ	4㎜以下の赤褐色粒、3.5㎜以下の褐灰色粒、微細な透明光沢粒を含む		
106	SC5−2	土師器	高台付埦	口縁〜底部	16.4	6.65	8.7	埦Va	橙	橙	回転ナデ、一部風化	回転ナデ	ナデ	DⅡ	3.5㎜以下の赤褐・灰白・灰褐色粒を含む	SC5−3、SC5−4	高台端部丸い
107	SC5−9	黒色土器(内黒)	高台付埦	底部				不明	にぶい橙	黒	回転ナデ	ミガキ、風化気味	ナデ	黒6	0.5㎜以下の灰白・赤褐色粒、黒色光沢粒を含む		底部に黒変
108	SC5−7	土師器	鉢	口縁〜胴部	23.0			鉢	浅黄　灰白	灰白	回転ナデ、風化気味	ナデ		WⅠ	3㎜以下の灰白色粒、微細な光沢粒を含む		外面凹凸
109	SC6	土師器	坏	口縁〜底部	14.9	4.4	8.7	ⅩⅢ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅠ	きめ細かな赤褐・灰白色粒、黒色光沢粒を含む	SC6、SC7、SC12 SC24−17	中世
110	SC7−1	土師器	高台付埦	体部〜底部			6.65	高①b	にぶい橙 橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ、ほぼ中心部が凹	放射状	DⅡ	6㎜以下の赤褐色粒、微細な灰白色粒・透明光沢粒を含む		
111	SC8	土師器	坏	口縁〜底部	12.8	4.9	6.4	Va	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DⅡ	3㎜以下の赤褐・灰褐・灰白色粒を含む	SC8−4	
112	SC8−2	土師器	坏	体部〜底部			6.45	Ⅸ	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ、風化著しい	ヘラ→ナデ	TⅠ	2㎜以下の灰白・灰褐・赤褐色粒を含む		
113	SC8−2	土師器	坏	体部〜底部			6.7	Va	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、下部に粗いナデのあと横ナデ、風化著しい	回転ナデ	ヘラ	WⅠ	1㎜以下の灰褐色粒、微細な光沢粒を含む	SC8−6	
114	SC8−4	土師器	坏	口縁〜底部	13.8	5.3	5.8	Ⅲa	橙	橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味、ほぼ中心部が凹	ヘラのあとナデ	DⅡ	2.5㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む	SC8−7	
116	SC8　外2	土師器	高台付埦	底部			8.1	高⑥	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ、風化気味	ナデ	DⅡ	0.5㎜以下の灰白色粒を含む		
117	SC8　外1	土師器	甕	口縁					橙	橙	風化気味	風化			3〜4㎜大の淡黄・灰色粒、2㎜以下の褐・乳白・浅黄橙色粒、半透明粒を含む		
118	SC9−6	土師器	坏	口縁〜底部	12.8	5.1	6.6	Ⅷ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、工具痕?風化気味	回転ナデ	ナデ	TⅠ	3㎜以下の赤褐色粒、1.5㎜以下の褐灰色粒、柱状黒色光沢粒を含む		硬質
119	SC9−5	土師器	坏	口縁〜底部	12.85	4.6	5.55	Ⅳa	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、ほぼ中心部が凹、風化気味	ヘラのあとナデ	WⅡ	2㎜以下の灰白色粒を含む		
120	SC9−3	土師器	坏	口縁〜底部	11.7	5.0	6.4	Ⅷ	橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ（ヘラのあとか?）	WⅠ	1〜2㎜程度の褐灰色粒、微細な透明光沢粒を少量含む		外面にスス付着か
121	SC9	土師器	坏	体部〜底部			7.2	Ⅱa	橙	浅黄橙	ナデ、ナデのあと指押さえ	ナデ	ヘラ	WⅠ	2㎜以下の灰白色粒を少量含む		
122	SC9−7	土師器	坏	口縁〜体部	12.1			不明	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ		TⅠ	1㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を少量含む		
123	SC9−1	土師器	高台付埦	底部			6.65	高②a	褐	灰褐	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅣ	3㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を多く含む		一部黒変
124	SC9−9	土師器	高台付埦	口縁〜底部	13.6	6.0	6.0	埦Ⅵb	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ、斜方向に工具ナデ	ナデ	DⅣ	2㎜以下の灰白・赤褐・灰褐色粒、微細な光沢粒を多く含む		
125	SC9	土師器	甕	口縁					にぶい橙	にぶい橙	横ナデ	横ナデ			5㎜以下の赤褐色粒、1㎜以下の光沢粒・乳白色粒を含む		
126	SC12−32	土師器	甕	口縁					にぶい橙	にぶい橙	横ナデ	横ナデ			2㎜以下の赤褐色粒・透明光沢粒を含む		
133	SC14	土師器	高台付埦	体部〜底部			7.0	高⑩	橙	橙	ナデ、風化著しい	ナデ、風化著しい	ナデ	DⅡ	2㎜以下の灰白・灰褐色粒、微細な光沢粒を含む		
134	SC14−2	土師器	高台付埦	体部〜底部				高②	橙	橙	ナデ、風化著しい	ナデ、風化著しい	ナデ	DⅡ	2㎜以下の灰白・灰褐色粒、微細な光沢粒を含む		
137	SC18	土師器	甕	口縁〜底部	28.6	20.1			橙	にぶい黄橙 灰黄褐	ナデ、丁寧なナデ	ナデ、工具ナデ、丁寧なナデ			1㎜以下の乳白色粒、微細な光沢粒を含む	SC、SC18−2、H5	外面にスス付着

報告書番号	遺構	器種	器形	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態	色調		調整		切り離し状況	胎土	胎土	接合関係	備考
									外面	内面	外面	内面					
138	SC21	土師器	坏	体部～底部			7.15	Ⅶb	橙　浅黄橙	橙　浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ、風化気味	ヘラのあとナデ	TⅠ	2.5㎜以下の褐灰色粒、1.5㎜以下の赤褐色粒、微細な透明光沢粒を含む		
139	SC25	土師器	甕	胴部～底部付近					にぶい黄橙 にぶい赤褐	にぶい黄橙	縦・斜方向のナデ（工具痕）、丁寧なナデ	斜・横・縦方向のケズリ、磨耗気味			2㎜以下の暗褐・灰白色粒、1㎜以下の黒色粒・黒色光沢粒、微細な光沢粒を含む	SC25－1，SC25－3	外面に一部黒変
140	SC25	土師器	甕	底部					にぶい黄橙	浅黄 にぶい黄橙	丁寧なナデ	工具ナデ			4㎜程度のにぶい黄褐色粒、2㎜以下の褐灰・灰白色粒を含む	SC25－6	
141	SC24－8	土師器	坏	口縁～底部	16.5	4.1	9.95	ⅩⅢ	にぶい黄橙 浅黄橙	にぶい黄橙 浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	DV	1㎜以下の灰褐色粒、微細な光沢粒を多く含む	SC5，SC24－13	
142	SC24－19	土師器	坏	ほぼ完形	16.55	4.25	8.9	ⅩⅢ	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	DV	1.5㎜以下の赤褐色粒、微細な光沢粒を多く含む	SC24－14	
143	SC24－15	土師器	坏	ほぼ完形	15.9	4.1	8.0	ⅩⅢ	にぶい橙 褐灰	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅠ	5㎜以下の灰白色粒、3㎜以下の赤褐色粒、微細な透明光沢粒を含む		
144	SC24－1	土師器	坏	口縁～底部	15.4	3.6	7.8	ⅩⅢ	にぶい黄橙 黒	にぶい黄橙 黒	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	20	2.5㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む		一部黒変
145	SZ1－18	土師器	坏	体部～底部			6.4	V？	浅黄橙	浅黄橙	横ナデのあと斜方向に工具ナデ痕、回転ナデ	ナデ	ヘラ	DⅡ	微細な光沢粒をわずかに含む		
146	SZ1－3	土師器	坏	体部～底部			5.7	Ⅱ	明赤褐	橙	回転ナデ	ナデ	ナデ	DⅡ	3㎜以下の赤褐色粒、1㎜以下の乳白色粒を含む		
147	SZ1－31	土師器	坏	体部～底部			6.1	Ⅲ	橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅡ	2㎜以下の赤褐色粒、1㎜以下の半透明光沢粒を含む	F10－2125	
148	SZ1－55	土師器	Ⅲ	体部～底部			6.4	X	浅黄橙	浅黄橙	ナデ、風化	ナデ、風化	ナデ	DⅢ	1.5㎜以下の褐色粒を含む		薄手
149	SZ1－41	黒色土器（内黒）	高台付埦	底部			8.2	黒高②b	浅黄橙	黒	回転ナデ	ミガキ	回転ナデ	黒1	1㎜以下の橙色粒、微細な光沢粒を含む		
150	SZ1－47	土師器	高台付埦	底部			7.6	高②c	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	TⅠ	2㎜以下の赤褐色粒を含む		
151	SZ1－34	土師器	高台付埦	体部～底部			7.3	高⑩	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	2㎜以下の赤褐色粒、微細な光沢粒を含む		
152	SZ1－43	土師器	高台付埦	体部～底部			7.8	高⑥b	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅣ	2㎜以下の灰黄色粒を少量、微細な透明光沢粒を多く含む		
157	SZ2－7	土師器	坏	底部			7.3	Ⅷ	橙　暗黄褐	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DV	微細な黒色・透明光沢粒を含む	C10－372 C10－1441	
158	SZ2－1	土師器	高台付埦	体部～底部			7.1	高②a	橙	橙	回転ナデ、風化	回転ナデ、風化	ナデ	DⅣ	3.5㎜以下の乳白色粒、2㎜以下の赤褐色粒、透明光沢粒を含む		
159	SE1－20	土師器	甕	口縁					にぶい黄橙	にぶい黄橙	横ナデ	横ナデ			1㎜以下の褐色粒、透明・黒色光沢粒を含む		
160	SE1	土師器	甕	口縁					灰黄褐	にぶい黄褐	横ナデ	横ナデ			1㎜以下の茶・灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
161	SE1	土師器	甕	口縁					にぶい黄橙 灰黄橙	にぶい黄橙 灰黄橙	ナデ	ナデ			1㎜以下の黒褐・灰褐・乳白色を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
162	SE1	土師器	甕	口縁					にぶい橙	にぶい橙 灰褐	ナデ	ナデ			1㎜以下の黒褐・灰褐・乳白色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
163	SE1・SE7・C10	土師器	甕	口縁～頸部					にぶい橙	灰褐	横ナデ	横ナデ、ケズリ			2㎜以下の乳白色粒、1㎜以下の光沢粒を含む		外面にスス付着
164	SE1・SE7・C10	土師器	甕	口縁					にぶい橙	にぶい橙	ナデ	横方向のハケ目			5㎜以下の褐色粒を含む		
165	SE1・SE7・C10	土師器	甕	口縁					橙	橙	ナデ	ナデ			1㎜以下の褐・乳白色粒を含む		
166	SE1－30	土師器	甕	頸部					浅黄橙	黄橙	粗いナデ	粗いケズリ			6㎜以下の茶・灰褐・乳白色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
167	SE1－76	土師器	甕	胴部					橙	にぶい橙	ナデ	ナデ			1㎜以下の茶・黒褐・乳白色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む	D9－119	
168	SE1－10	土師器	甕	頸部					橙	橙	ナデ	ナデ、粗いナデ			3㎜以下の茶・灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
169	SE1－108	土師器	甕	頸部					にぶい黄橙 黒	黄橙	横ナデ、一部縦方向のナデ	ケズリのあとナデ			5㎜以下の灰・茶褐色粒を多く、かつ4㎜大の黒曜石（阿蘇火山ガラス）を含む	D9－2250	
170	SE1・SE7・C10	土師器	坏	体部～底部			6.6	Ⅱb－2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあと板目	WⅡ	4㎜以下の明褐色粒、1㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む		内面に一部黒変
171	SE1	土師器	坏	体部～底部			7.75	Ⅱ	淡黄	淡黄	回転ナデ、風化気味	回転ナデ	ヘラ、凹	WⅡ	2㎜以下の灰褐色粒を含む		
172	SE1－64	土師器	坏	体部～底部			6.7	Ⅶb	浅黄橙	浅黄橙	ナデ、風化著しい	ナデ	ヘラのあとナデ	DⅡ	3ミリ以下の赤褐・灰褐・灰白色粒を含む		
173	SE1－115①	土師器	坏	底部			7.2	Ⅶb	浅黄橙	浅黄橙	ナデ、風化著しい、粘土のつなぎ目	ナデ、風化著しい	板目?	WⅠ	3.5㎜以下の赤褐・灰褐・灰白色粒を含む		底部に線刻か?
174	SE1－5	土師器	坏	体部～底部			5.6	Ⅶb	橙	橙	ナデ、風化気味	ナデ、風化著しい	ヘラ、線刻	DⅡ	1㎜以下の灰褐・赤褐色粒、微細な光沢粒を含む		底部に線刻
175	SE1－120a	土師器	坏	体部～底部			8.9	Ⅷ	橙	浅黄橙	回転ナデ	粗いナデ	ナデ	WⅡ	微細な光沢粒を含む		
176	SE1－90	土師器	坏	完形	15.9	3.9	8.2	ⅩⅢ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあと板目	DⅠ	2㎜以下の灰褐・赤褐色粒、1㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む		
177	SE1－90	土師器	坏	完形	15.75	4.0	9.5	ⅩⅢ	にぶい橙 灰白	にぶい橙 灰白	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ、板目	DⅢ	4㎜以下の赤褐色粒、2㎜以下の灰褐色粒を含む		

報告書番号	遺構	器種	器形	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態	色調		調整		切り離し状況	胎土	胎土	接合関係	備考
									外面	内面	外面	内面					
178	SE1・SE7・C10	土師器	坏	体部～底部			9.5	XⅢ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	TⅠ	1㎜以下の茶・黒褐色粒、微細な光沢粒を多く含む		
179	SE1	土師器	小皿	口縁～底部	8.65	1.4	6.65	小皿	浅黄橙	浅黄橙 淡赤橙	回転ナデ、一部風化気味	回転ナデ	ヘラ切り、線刻あり	WⅠ	1㎜以下の灰白・灰褐色粒を含む		
180	SE1－86	土師器	小皿	口縁～底部	8.6	1.6	6.9	小皿	浅黄橙 にぶい橙	浅黄橙 にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	WⅠ	0.5㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を少量含む	SE1　一括	
181	SE1・SE7・C10	土師器	埦	口縁～底部	9.0	3.0	4.6	Ⅷ	浅黄橙	浅黄橙	ナデ、風化	ナデ、指頭痕か？風化	ヘラ	WⅠ	3㎜以下の赤褐・灰褐色粒、無色透明光沢粒を多く含む		
182	SE1－2	土師器	高台付埦	底部			7.3	高②c	赤橙 にぶい赤橙	赤橙 にぶい赤橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅡ	微細な光沢粒を多く含む		端部面取り
183	SE1－66	土師器	高台付埦	底部			7.0	高②	褐灰	褐灰	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	WⅠ	2㎜以下の褐灰・赤褐色粒、微細な透明光沢粒を含む		底部に線刻か？
184	SE1－21	土師器	高台付埦	体部～底部			7.75	高③b	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	WⅠ	2㎜以下の褐灰色粒、きめ細かな灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む		内面に一部黒変
185	SE1	土師器	高台付埦	底部			8.0	高⑥b	橙	橙	ナデ	ナデ	ナデ	TⅢ	2㎜以下の赤褐・灰褐・灰白色粒、微細な光沢粒を含む		
186	SE1　2－2	土師器	高台付埦	体部～底部			8.4	埦Va	浅黄橙 にぶい黄橙	浅黄橙 にぶい黄橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味	ナデ	WⅠ	2㎜以下の灰白・灰褐色粒、微細な光沢粒を多く含む	SE1－15，SE1－16	高台端部丸い
187	SE1	土師器	高台付埦	体部～底部				不明	浅黄橙	浅黄橙	風化著しい	風化著しい	ナデのあと放射状	TⅢ	3㎜以下の灰白・灰褐・赤褐色粒を含む		
188	SE1・SE7・C10	土師器	脚付鉢	脚部				大V	橙	橙	横ナデ、ナデによる凹線	横ナデ		DⅣ	3㎜以下の乳白色粒を含む	C10・D10	
189	SE1－27	黒色土器(内黒)	高台付埦	底部			7.6	黒高②a	にぶい黄橙 にぶい橙	灰白	回転ナデ、風化気味	ミガキ、風化気味	回転ナデ、風化気味	黒5	2㎜以下の灰白色粒を少量含む		内面に黒変
190	SE1－48	黒色土器(内黒)	高台付埦	底部				黒高②?	灰白	黒	ナデ	ミガキ、風化気味	ナデ	黒1	2㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む		
191	SE1	黒色土器(内黒)	高台付埦	体部～底部			7.2	黒高⑥a	灰黄　黄灰	黄灰	一部ミガキが見られる	一部ミガキが見られる	回転ナデ	黒1	2㎜以下の灰褐色粒、1㎜以下の灰褐・黒褐色粒を多く、黒色・透明光沢粒を多く含む	SE1－210	
192	SE1－19	黒色土器(内黒)	高台付埦	体部～底部			7.0	黒高⑥a	浅黄橙	黒褐	回転ナデ	ミガキ	回転ナデ	黒1	1㎜以下の褐・灰褐・黒褐色粒を多く、赤褐色粒を少量、白色光沢粒を多く含む	SE1－26	
193	SE1－11	黒色土器(内黒)	高台付埦	体部～底部			7.6	黒高⑥a	にぶい黄橙	黒	回転ナデ	ミガキ、一部風化気味	ナデ	黒1	3㎜以下の灰白色粒を少量含む	SE1－12	
194	SE1　2－2	黒色土器(内黒)	高台付埦	体部～底部			8.0	黒高⑥a	にぶい黄橙	褐灰	ミガキ、下部に工具によるケズリ	ミガキ	ナデ	黒1	1㎜以下の赤褐・灰白色粒、微細な光沢粒を多く含む		
195	SE1－68	黒色土器(内黒)	高台付埦	底部			5.6	黒高③b	橙	褐灰	回転ナデ	ミガキ	回転ナデ	黒9	2㎜以下の灰白・赤褐・灰褐色粒、微細な無色透明光沢粒を多く含む		
196	SE1・SE7・C10	黒色土器(内黒)	高台付埦	体部～底部			6.8	黒高⑥b	黄灰	黄灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	黒1	1㎜以下の黒褐・灰褐色粒、微細な光沢粒を多く含む	B10－1453	
197	SE1　2－1	黒色土器(内黒)	高台付埦	底部				不明	浅黄橙	黒褐	回転ナデ		回転ナデ	黒6	3㎜以下の褐色粒を少量、1㎜以下の灰褐色粒、微細な光沢粒を多く含む		
198	SE1－7	土師器	小鉢	口縁					にぶい黄	灰黄	ミガキ	ミガキ			2㎜大の灰白粒を1ヶ含む		
199	SE1	弥生	壺？	底部			7.2		橙	橙	ナデ				2㎜以下の茶・灰褐・乳白色粒、光沢粒を多く含む		
200	SE1－82	土師器	甑	底部			15.4		橙	橙	ナデ	ナデ			2～3㎜程の灰白・褐色粒、1㎜以下の黒色・透明光沢粒を含む		
201	SE1　2－2	布痕		口縁					橙	橙	風化	風化			5㎜以下の橙色粒を含む		
202	SE1－173	布痕		口縁～胴部					橙	橙	ナデ、風化著しい	布痕			1㎜以下の白色粒を含む		
252	SE2－13	土師器	甕	口縁～胴部	22.7				橙	橙	ナデ、風化著しい	横ナデ、横方向に指ナデ、下から上へケズリ			5㎜以下の白・褐色粒を多く含む	SE11・12－19 D9－2192	
253	SE2	土師器	甕	口縁					にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ、粘土のつなぎ目	ナデ			1㎜以下の乳白色粒、微細な光沢粒を含む	D10	
254	SE2	土師器	甕	頸部					橙	にぶい褐	ナデ、横方向にハケ目	ナデ、ケズリ			4㎜以下の赤褐色粒、2㎜以下の光沢粒、乳白色粒を含む		
255	SE2－9	土師器	甕	頸部					にぶい黄橙	にぶい黄橙	凹、ナデ、斜・横方向のハケ目	横ナデ			1㎜以下の褐色粒、透明光沢粒を含む		
256	SE2	土師器	坏	体部～底部				Ⅰ？	浅黄橙	浅黄橙	ナデ、風化著しい	ナデ、風化著しい	ナデ	WⅡ	1㎜以下の褐・黒褐色粒を含む		墨書土器
257	SE2－2	土師器	坏	体部～底部			6.6	Ⅲ	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅣ	2㎜大の茶褐色粒を少量、1㎜大の茶・灰褐色粒、微細な光沢粒を多く含む		底部にスス付着
258	SE2	土師器	坏	体部～底部			6.0	Ⅲ	橙	橙	回転ナデ、工具痕?	回転ナデ	ヘラ	DⅡ	1.5㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む		
259	SE2－6	土師器	坏	体部～底部			9.6	不明	浅黄	浅黄	ナデ、風化著しい	ナデ、風化著しい	ヘラ	DⅡ	1㎜以下の灰白・灰褐色粒を含む		
260	SE2－10	土師器	坏	体部～底部			6.95	Ⅷ	橙	橙	ナデ、風化著しい	ナデ、風化著しい	ナデ	DⅡ	1.5㎜以下の灰白・赤褐色粒を含む		
261	SE2	土師器	高台付埦	体部～底部			5.6	高⑫b	にぶい褐	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	TⅠ	1㎜大の茶・灰褐色粒を多く、微細な光沢粒を少量含む		
262	SE2	土師器	高台付埦	体部～底部				不明	にぶい橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	放射状	DⅡ	2㎜以下の黄褐色粒、1㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む		

報告書番号	遺構	器種	器形	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態	色調		調整		切り離し状況	胎土	胎土	接合関係	備考
									外面	内面	外面	内面					
263	SE2	土師器	高台付埦	底部			6.2	不明	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅡ	2㎜以下の赤褐色粒、1.5㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む		
264	SE2	土師器	高台付埦	体部～底部				不明	橙	橙	ナデ、風化著しい	ナデ、風化著しい	ナデ	DⅢ	2㎜以下の赤褐色粒、0.5㎜以下の灰白色粒を含む		
265	SE2	土師器	坏	体部～底部			8.6	不明	にぶい黄橙 暗灰	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ、指押さえ、風化気味	ヘラ（板目）	DⅠ	きめ細かい、微細な透明光沢粒を含む		底部の中心部が黒変
266	SE2	布痕		口縁～胴部					橙	橙	ナデ	布痕			4㎜以下の橙色粒、微細な乳白色粒を含む		
267	SE2	布痕		胴部					橙	橙	ナデ	布痕			精良		
268	SE2	布痕		胴部					橙	にぶい黄橙	ナデ	布痕			5㎜以下の橙・灰色粒を含む		
269	SE2－15	布痕		胴部～底部					橙	橙	ナデ	布痕			8m大の橙色の小石、5m以下の橙色粒、3m以下の乳白色粒、微細な光沢粒をわずかに含む		
280	SE3－11	土師器	甕	口縁～胴部	22.4				橙	橙	横ナデ、縦方向の工具ナデのあと横ナデ	横ナデ、ケズリ			5㎜以下の褐・黒色粒を含む		
281	SE3	土師器	甕	口縁	26.0				橙	橙	ナデ	ナデ			3㎜以下の茶・灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
282	SE3－44	土師器	甕	頸部～胴部					橙	橙	横ナデ、ナデ、横方向の工具ナデのあと横ナデ、縦方向の工具ナデ	ナデ、粘土のつなぎ目、下から上へケズリ			6㎜以下の褐色粒を多く含む		外面に一部スス付着
283	SE3	土師器	坏	口縁～底部	12.3	4.55	6.4	Ⅰb	橙 にぶい橙	橙 にぶい橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ	ナデ	TⅠ	1㎜大の茶・灰褐色粒、微細な光沢粒を多く含む		
284	SE3	土師器	坏	口縁～底部	11.8	4.2	5.6	Ⅲc	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅡ	3㎜以下の赤褐色粒を含む	SE3－25 SE3－26，SE3－30	
285	SE3	土師器	坏	口縁～底部	12.9	4.9	5.6	Ⅲa	橙	橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味	ヘラのあとナデ	TⅠ	1㎜以下の赤褐色粒、柱状黒色光沢粒を少量含む	SE3－23	
286	SE3－20	土師器	坏	ほぼ完形	12.3	4.9	6.0	Ⅷ	橙 浅黄橙	橙 浅黄橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ、風化著しい	ヘラのあとナデ	DⅡ	2.5㎜以下の灰白・灰褐・赤褐色粒、微細な光沢粒を多く含む		
287	SE3	土師器	坏	口縁～底部	13.05	5.3	5.6	Ⅵe	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	4㎜以下の灰白・赤褐色粒を含む	SE3－17	
288	SE3－1	土師器	坏	ほぼ完形	13.8	6.0	7.6	Ⅶa－2	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ、一部風化気味	ヘラ	TⅠ	2㎜以下の赤褐・灰白・灰褐色粒、黒色鉱光沢で角柱状の鉱物粒、かつ微細な無色透明光沢粒を多く含む		
289	SE3－14	土師器	坏	体部～底部			7.2	Ⅶa	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DⅡ	4㎜以下の橙色粒、2㎜以下の赤褐色粒、微細な透明光沢粒を少量含む		
290	SE3－6	土師器	坏	体部～底部			6.0	Ⅷ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味	ヘラ	TⅠ	1㎜以下の橙色粒、微細な光沢粒を含む	SE11・12－3 SE11・12－4	
291	SE3	土師器	坏	口縁～底部	12.2	4.6	6.0	Ⅸ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味	ナデ	TⅠ	1.5㎜以下の赤褐色粒、かつ半透明光沢粒を少量、1㎜以下の褐灰色粒を含む	SE3－10，SE3－13	
292	SE3－18	土師器	坏	口縁～底部	12.4	5.2	6.3	Ⅸ	橙 浅黄橙	橙 浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	TⅠ	2㎜以下の黒色光沢粒、微細な光沢粒、かつ1㎜大の茶・黒褐色粒を多く含む	SE3－19	
293	SE3	土師器	坏	体部～底部			7.0	Ⅷ	橙	橙	ナデ、風化気味	ナデ	ナデ	TⅠ	4㎜以下の赤褐・灰褐色粒、0.5㎜大の黒色鈍光沢粒を含む		
294	SE3－3	土師器	坏	体部～底部			7.1	Ⅷ	橙 浅黄橙	橙	風化気味	風化気味	ナデ	DⅠ	3㎜以下の灰白色粒、2㎜以下の黒色光沢粒、微細な光沢粒を含む		
295	SE3－42	土師器	坏	体部～底部			6.4	Ⅷ	にぶい橙 灰褐	にぶい橙	ナデ	回転ナデ	ヘラ	DV？	0.5㎜以下の灰褐・灰白色粒、黒色光沢粒を含む	SL1	
296	SE3	土師器	坏	体部～底部			6.9	Ⅷ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ、一部風化気味	ナデ	TⅠ	2㎜以下の灰褐・赤褐色粒、微細な光沢粒を多く含む		外面に黒色物少し付着
297	SE3－43	土師器	坏	口縁～底部	12.5	5.0	6.9	Ⅷ	黄灰 灰白	黄灰 灰白	ナデ	回転ナデ	ヘラ	WV	1㎜以下の灰白・赤褐・灰褐色粒を含む		
298	SE3	土師器	坏	口縁～体部	11.5			不明	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ、一部風化気味	？	DⅠ	3.5㎜以下の灰白・灰褐・赤褐色粒を含む	SE3－27	
299	SE3－46	土師器	高台付埦	体部～底部			7.2	埦Ⅲc	橙	橙	縦方向のミガキ	ミガキ	ナデ	DV	3.5㎜以下の灰白・灰褐・赤褐色粒、微細な光沢粒を多く含む		
300	SE3	土師器	高台付埦	底部			9.4	埦Va	にぶい黄橙	橙	回転ナデ	風化著しく調整不明	ナデ	TⅠ	2㎜以下の赤褐色粒を含む		厚手
301	SE3	土師器	高台付埦	体部～底部			7.2	高⑤a	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅡ	2㎜以下のガラス質の粒、1.5㎜以下の褐灰色粒を含む		
302	SE3－15	土師器	高台付埦	口縁～底部付近	15.7			不明	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、工具痕、風化気味	回転ナデ、風化気味		TⅠ	5㎜以下の赤褐色粒、2㎜以下の灰色粒を含む		
303	SE3	土師器	高台付埦	口縁～底部付近	13.1			不明	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	2.5㎜以下の赤褐色粒を含む		外面に黒斑
304	SE3－34	黒色土器（内黒）	高台付埦	口縁～底部	14.4	6.67	7.4	Ⅳ	にぶい黄橙	黒	回転ナデ、ヘラ削り、ナデ	回転ナデ、ミガキ	ヘラ切りのあとナデ	黒3	精良、1㎜大の赤褐色粒、微細な光沢粒を含む		
305	SE3	黒色土器（内黒）	高台付埦	口縁～底部	13.9	5.9	7.1	Ⅳ	にぶい黄橙	黒	ヘラ削りの後ナデ	ミガキ、風化気味	回転ナデ	黒2	2㎜以下の灰白色粒を少量含む	SE3－28 SE3－31，SE3－32	底部に炭化物付着？
306	SE3－24	黒色土器（内黒）	高台付埦	体部～底部			8.2	Ⅳ	灰白	暗灰	回転ナデ、風化気味	ミガキ、風化気味	回転ナデ	黒6	2㎜以下の黒褐色粒、1㎜以下の灰白色粒を含む		
307	SE3－5	黒色土器（内黒）	高台付埦	口縁～底部	14.4	6.2	7.8	Ⅳ	にぶい黄橙	黒	回転ナデ	回転ナデ、ミガキ	回転ナデ	黒2	1㎜大の褐色粒、微細な光沢粒を多く含む	SE3－7，SE3－8	
308	SE3－22	土師器	脚付鉢	底部				大Ⅱ	橙 にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ		TⅠ	5㎜以下の赤褐色粒、3㎜以下の乳白色粒、微細な光沢粒を含む	E5－20，E6－487	

報告書番号	遺構	器種	器形	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態	色調		調整		切り離し状況	胎土	胎土	接合関係	備考
									外面	内面	外面	内面					
309	SE4－1	土師器	小皿	口縁～底部	9.8	2.0	6.4	小Ⅲ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ	ヘラ切り板目	WⅠ	1㎜大の茶・灰褐色粒、微細な光沢粒を多く含む		
310	SE5－12	土師器	甕	口縁～胴部	27.5				灰黄褐	にぶい橙	横ナデ	横ナデ			3㎜以下の乳白色粒、2㎜以下の透明光沢粒、微細な黒色光沢粒を含む	一括	
311	SE5－1	土師器	甕	口縁					にぶい褐	黒褐	ナデ	ナデ			2㎜以下の黒色光沢粒、1㎜以下の乳白色粒、透明光沢粒を含む		
312	SE5	土師器	坏	体部～底部			7.15	Ⅶb	灰白	灰白	回転ナデ、風化	丁寧なナデ、風化	ヘラ	WⅠ	2㎜以下の黒褐・灰褐色粒を多く含む		
313	SE5－11	黒色土器(内黒)	高台付埦	底部			6.8	黒高⑤a	灰黄	灰	回転ナデ	ミガキ	ヘラ切り？	黒1	2㎜以下の茶・灰褐色粒を多く含む		
314	SE5	土師器	脚付鉢	底部				大Ⅱ？	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ		TⅠ	4㎜以下の赤褐色粒、1㎜以下の透明・黒色光沢粒、乳白色粒を含む		透かしあり
317	SE6－19	土師器	甕	口縁～頸部	24.6				浅黄橙	にぶい橙	横ナデ、工具による横ナデ、ナデ	横ナデ、ケズリ			3㎜以下の褐色粒を含む		
318	SE6－7	土師器	甕	口縁～頸部					橙	橙	横ナデ、ハケ目の上ナデ、縦方向のハケ目	横ナデ、縦方向のナデ、風化気味			4㎜以下の褐色粒、1㎜以下の白色粒を含む		
319	SE6－21	土師器	坏	底部			6.8	Ⅰ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ、風化著しい	ヘラ？	TⅠ？	2㎜以下の赤褐色粒、微細な透明光沢粒を含む		
320	SE6	土師器	坏	口縁～底部	11.6	4.65	6.5	Ⅱa	橙	橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ、風化著しい	ナデ	DⅢ	2㎜以下の赤褐色粒、微細な透明光沢粒を含む	SE6－6，SE6－10 SE6－13	
321	SE6	土師器	坏	口縁～底部	14.4	4.8	5.9	Ⅲa	橙	橙	ナデ、風化著しい	ナデ、風化著しい	ナデ	DⅡ	2㎜以下の灰白・赤褐色粒を多く含む		
322	SE6－23	土師器	坏	体部～底部			5.4	Ⅲ	浅黄橙 褐灰	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	TⅠ	2㎜以下のにぶい橙色粒、微細な透明光沢粒を含む		
323	SE6－25	土師器	坏	口縁～底部	13.8	5.35	6.2	Ⅳb	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DⅤ	1㎜以下の茶・黒褐色粒を多く、かつ無色透明・黒色光沢粒、微細な光沢粒を含む		
324	SE6－27	土師器	坏	ほぼ完形	12.2	4.9	4.75	Ⅵa	橙	橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ、風化著しい	ヘラ	DⅣ	4㎜以下の赤褐色粒、1㎜以下の灰白色粒を含む		
325	SE6－14	土師器	坏	口縁～底部	14.2	5.3	5.6	Ⅵa	橙	橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ、風化著しい	ナデ	DⅡ	2㎜以下の赤褐・灰白色粒を多く含む	SE6－15	
326	SE6－17	土師器	坏	口縁～底部	13.4	5.25	6.8	Ⅶb－3	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、横方向に粗いナデ	回転ナデ	ナデ		1㎜以下の茶・黒褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む	SE6－18，SE6－19 SE6－20	墨書土器
327	SE6－26	土師器	坏	底部			8.4	Ⅶb	灰　浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	WⅠ	2㎜以下の褐・灰白色粒を含む		見込みに回転ナデ
328	SE6	土師器	坏	体部～底部			6.2	Ⅶ	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	2㎜以下の赤褐色粒を少量含む	SL1－1022 SL1－1023	
329	SE6－31	土師器	坏	口縁～底部	12.9	4.8	6.2	Ⅶ	浅黄橙 黄橙	浅黄橙 黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	TⅠ	2㎜以下の茶・灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
330	SE6－24	土師器	坏	口縁～底部	14.0	5.4	6.0	Ⅸ	にぶい黄橙 褐灰	にぶい黄橙 褐灰	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	1㎜以下の茶・黒褐色粒、微細な光沢粒を含む		
331	SE6－28	土師器	坏	完形	12.9	5.1	6.1	Ⅹ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、一部縦方向に工具痕	回転ナデ	ヘラのあとナデ	TⅠ	1.5㎜以下の赤褐・灰白色粒を少量、微細な透明光沢粒を多く含む		
332	SE6－9	土師器	坏	口縁～底部付近	12.0			不明	橙	橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味		TⅠ	1㎜以下の赤褐色粒、微細な透明光沢粒を含む		
334	SE6	布痕		口縁					橙	橙	ナデ、磨耗気味	布痕			5㎜程のにぶい赤褐色の礫、1㎜程の灰白・赤褐・褐色粒を含む		
339	SE7	土師器	甕	口縁～胴部	14.5				にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	ナデ			3㎜以下の褐・黒・暗灰色粒、微細な光沢粒を含む		外面に線刻
340	SE7	土師器	甕	口縁					灰	にぶい橙	横ナデ、工具痕、一部縦方向のナデ	横・やや斜方向のナデ、斜方向のケズリ			1㎜以下の黒・褐・灰白色粒、微細な光沢粒を含む		外面に黒変
341	SE7	土師器	甕	口縁					にぶい黄橙	灰黄	横ナデ	横ナデ、工具痕、粗いナデ			1㎜以下の褐・黒褐・灰白色粒、微細な黒色・透明光沢粒を含む		
342	SE7	土師器	甕	口縁					橙	橙 にぶい黄橙	横ナデ	横ナデ			2㎜程の褐色粒、1㎜以下の赤褐・褐・黒褐色粒を含む		外面にスス付着？
343	SE7	土師器	甕	頸部					明赤褐	灰黄褐	回転ナデ	ナデ			3㎜以下の橙・暗灰色粒、微細な光沢粒、乳白色粒を含む		
344	SE7	土師器	甕	胴部					灰黄褐	にぶい橙	横ナデ、ナデによる凹線	ケズリ？			5㎜以下の褐・黒色粒、1㎜以下の白色粒を含む		外面に一部スス付着
345	SE7	土師器	甕	胴部					灰黄褐	にぶい黄橙	格子目タタキ	磨耗			精良？		
346	SE7	土師器	坏	口縁～底部	11.9	4.15	6.2	Ⅰa	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅠ	2㎜以下の茶・黒褐色粒を含む	SE7－61	硬質
347	SE7－78	土師器	坏	体部～底部			7.2	Ⅱb－2	橙	橙	ナデ、風化著しい	ナデ、風化著しい	ナデ	DⅡ	3㎜以下の赤褐色粒、微細な透明光沢粒を含む		
348	SE7－79	土師器	坏	底部			6.2	Ⅱb－3	橙　浅黄橙	橙　浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DⅠ	1㎜以下の茶・灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
349	SE7	土師器	坏	体部～底部			6.6	Ⅱc	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DⅡ	3㎜以下の灰褐色粒、微細な透明光沢粒を含む		
350	SE7－75	土師器	坏	底部			6.5	Ⅶa	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DⅠ	2㎜以下の赤褐色粒、微細な無色透明光沢粒を多く含む		
351	SE7－62	土師器	坏	体部～底部			7.35	Ⅶb	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	ヘラのあとナデ	DⅠ	2㎜以下の灰褐・灰白・赤褐色粒を含む		底部に黒変

報告書番号	遺構	器種	器形	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態	色調		調整		切り離し状況	胎土	胎土	接合関係	備考
									外面	内面	外面	内面					
352	SE7	土師器	坏	体部～底部			5.6	Ⅶb	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味	ヘラのあとナデ	WⅡ	1㎜以下の赤褐色粒を含む		
353	SE7	土師器	坏	体部～底部			5.2	不明	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	ヘラ	TⅠ	4㎜以下の赤褐色粒を含む		
354	SE7	土師器	坏	体部～底部			5.6	不明	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅣ	4㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む	D10	
355	SE7－75	土師器	坏	体部～底部			6.8	不明	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ、指押さえ	ヘラ	WⅡ	2㎜以下の褐灰色粒を含む		
356	SE7	土師器	坏	口縁～体部				不明	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ、工具で押さえた跡？風化著しい		TⅠ	3㎜以下の灰白・灰褐・赤褐色粒を含む		
357	SE7	土師器	高台付埦	体部～底部			8.2	埦V	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅢ	6㎜以下の褐色粒、1㎜以下の灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む	SE7－57，SE7－58	
358	SE7	土師器	高台付埦	体部～底部			8.6	高⑤a	橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ、風化気味	放射状	DⅠ	1㎜以下の赤褐・灰褐色粒を含む		
359	SE7－74	土師器	高台付埦	体部～底部			9.2	高⑥a	黄橙 浅黄橙	黄橙 浅黄橙	回転ナデ	ナデ	ナデ	DⅢ	2㎜以下の灰白・灰褐色粒、微細な無色透明光沢粒を含む		
360	SE7－65	土師器	高台付埦	底部			7.6	高⑥b	浅黄橙	褐灰	ナデ、風化著しい	ナデ、風化著しい	ナデ	DⅢ	1㎜以下の灰白・灰褐色粒、かつ無色透明光沢粒を多く含む		
361	SE7	土師器	高台付埦	口縁～底部	15.4	8.0	8.7	高⑧	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	2㎜以下の茶・黒褐色粒、微細な光沢粒を多く含む	SE7－80	
362	SE7	土師器	高台付埦	体部～底部				不明	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ、風化著しい		TⅠ	2㎜以下の灰白・灰褐・赤褐色粒を含む		
363	SE7	土師器	高台付埦	体部～底部				不明	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデのあと斜方向のナデ		DⅤ	1.5㎜以下の褐色粒を含む		
364	SE7	土師器	高台付埦	体部～底部				不明	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	TⅠ	2㎜以下の赤褐色粒を含む		
365	SE7	土師器	高台付埦	底部				不明	橙	橙	ナデ	ナデ	ナデ	DⅠ	1.5㎜以下の灰白・赤褐・灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
366	SE7	土師器	脚付鉢	底部				大Ⅱ	橙	橙	ナデ	ナデ		TⅠ	5㎜以下の褐・灰色粒を含む		
367	SE7	土師器	脚付鉢	胴部				大Ⅱ	にぶい橙	橙	横ナデ	横ナデ		DⅡ	1㎜以下の褐色粒、微細な透明光沢粒を含む		
368	SE7	布痕		底部					橙	橙	ナデ	布痕			8㎜以下の褐色粒、1㎜以下の白色粒、透明光沢粒を含む		
388	SE8	弥生？	鉢	胴部～底部			5.4		暗褐	赤褐	ナデ	ナデ	ナデ		4㎜以下の灰白色粒、1㎜以下の透明・黒色光沢粒を含む		
389	SE8	土師器	坏	体部～底部			6.6	Ⅰ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、工具痕、風化気味	回転ナデ、風化気味	ヘラのあとナデ	DⅢ	4.5㎜以下の灰白・灰褐・赤褐色粒を多く含む		
390	SE8－8	土師器	坏	口縁～底部	12.0	4.6	5.3	Ⅲc	橙	橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ、風化著しい	ヘラ	DⅠ	7㎜以下の灰白・灰褐・赤褐色粒を多く含む		
391	SE8－11	土師器	坏	体部～底部			7.2	Ⅶ	にぶい橙	にぶい橙 褐灰	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあと植物(わら)の圧痕	DⅤ	3㎜以下の赤褐色粒、1㎜以下の白色粒、透明・黒色光沢粒を含む	SL1－232 SL1－234	
392	SE8－4	土師器	高台付埦	体部～底部			6.9	高②	赤褐 にぶい橙	橙	回転ナデ、一部風化気味	回転ナデ	ナデ	DⅣ	2㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を多く、かつ黒色のガラス粒を少量含む		
393	SE8－15	土師器	高台付埦	底部			7.4	高②	灰白 浅黄橙	灰白 浅黄橙	ナデ	回転ナデ	放射状	WⅡ	1㎜以下の茶・灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
394	SE8－18	土師器	高台付埦	底部			6.6	高⑤a	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	ナデ	ナデ	DⅠ	1㎜以下の茶・灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		硬質
395	SE8－12	黒色土器(内黒)	？	口縁～体部	14.7			不明	浅黄橙	黒	回転ナデ	ミガキ		黒6	2㎜以下の赤褐・灰白色粒を含む	SE8－12	
396	SE8	布痕		口縁～胴部					橙	橙	風化著しく調整不明	布痕、風化気味			4㎜以下の褐色粒を含む		
397	SE8	布痕		胴部					橙	橙	ナデ	布痕、風化			7㎜以下の灰色粒、2㎜以下の橙色粒を含む		
401	SE10－1	土師器	大型鉢	底部			13.6	大Ⅰ	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ		DⅤ	3㎜以下の赤褐色粒、1㎜以下の透明光沢粒を含む		
402	SE11－13	土師器	甕	口縁～胴部	15.2				にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ、粘土のつなぎ目、縦ハケのあとナデ	ナデ、ケズリ			2㎜大の灰白色粒、1㎜大の光沢粒、微細な透明・黒色光沢粒を含む	SE11－13，C9	
403	SE11・12－18	土師器	甕	口縁～頸部					にぶい黄橙	にぶい黄橙	横ナデ	横ナデ、風化の為調整不明			2㎜以下の褐色粒を含む	SE11・12－18 SE11・12	
404	SE11・12－11	土師器	甕	胴部					橙	浅黄橙	ナデ、ハケ目？	ケズリ			7㎜以下の赤褐・灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む	SE11・12－11 SE11・12－1，C9－2199	
405	SE11－12	土師器	甕	頸部～胴部					橙 浅黄橙	にぶい橙 にぶい黄橙	縦・横方向のハケ目、縦・横・斜に交差したハケ目	横ナデ、斜方向にケズリ			1～2㎜大の褐灰・灰褐・灰白色粒、1㎜以上の赤褐色粒、1㎜大の透明光沢粒を含む	SE11－17，SE11－19，SE11－24 B9－1968，B10，C9－968，C9－986	
406	SE11・12－8	土師器	甕	口縁～胴部	22.2				橙	橙	横ナデ、縦・横方向のナデ	横ナデ、ケズリ			4㎜以下の褐色粒、1㎜以下の白色粒を含む	SE11・12－15，SE11・12－17 SE11・12－18	外面にスス付着
407	SE11－4	土師器	坏	口縁～底部	12.1	4.4	6.3	Ⅰb	浅黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DⅠ	1㎜以下の茶・灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む	SE11－5，SE11－8，SE11－10 SE11－11，SE11－21	見込み凹凸
408	SE11－2	土師器	坏	体部～底部			5.95	Ⅱd	橙	橙	回転ナデ、ヘラケズリのあと一部指ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅣ	3.5㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む		墨書土器
409	SE11－15	土師器	坏	口縁～底部	11.7	4.45	5.2	Vb	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DⅣ	2㎜大の乳白色粒、1㎜以下の茶・黒褐色粒を多く含む	SE11－16，SE11－17 C9	

報告書番号	遺構	器種	器形	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態	色調		調整		切り離し状況	胎土	胎土	接合関係	備考
									外面	内面	外面	内面					
410	SE11−6	土師器	坏	口縁〜底部	11.3	5.3	5.6	Ⅵc	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	D Ⅰ	微細な光沢粒を含む	SE11−21	
411	SE11−12	土師器	坏	口縁〜底部	12.0	4.7	6.1	Ⅵc	橙	橙	回転ナデ、工具ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅣ	4㎜大の乳白・褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む	SE11−17 SE11−22	
412	SE11−5	土師器	坏	口縁〜底部	12.2	4.7	6.7	Ⅸ	橙	にぶい橙 褐灰	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	D Ⅰ	1㎜大の茶・黒褐色粒を含む	SE11−11，SE11−13 SE11−17，SE11−21	
413	SE11−21	土師器	坏	体部〜底部			6.0	Ⅶb	浅黄橙	橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ	ヘラ	T Ⅰ	2㎜以下の乳白色粒、微細な光沢粒を含む		外面に一部スス付着
414	SE11−21	土師器	坏	体部〜底部			6.0	不明	橙 にぶい黄橙	橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ	ヘラのあとナデ	D Ⅰ	2㎜以下の灰白色粒、1㎜以下の褐灰色粒、微細な光沢粒を含む		内外面漆付着
415	SE11−2	土師器	高台付埦	口縁〜底部	16.1	8.7	7.95	埦Va	浅黄橙 にぶい黄橙	浅黄橙	回転ナデ、粘土のつなぎ目、風化著しい	回転ナデ、風化著しい	ナデ	D Ⅱ	4㎜以下の赤褐・褐灰色粒を含む	SE11−4，SE11	
416	SE11・12−18	土師器	坏	口縁〜底部	12.5	4.2	7.2	Ⅰb	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化	回転ナデ、風化	ヘラのあとナデ	D Ⅰ	3㎜以下の茶・灰褐色粒を多く、かつ無色透明・黒色光沢粒を含む	D9−421	種子痕あり ヒダスキ痕
417	SE11・12−3	土師器	坏	口縁〜底部	13.3	5.0	8.25	Ⅰd	橙	橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味	ヘラ	D Ⅱ	3㎜以下の赤褐・灰褐・灰白色粒を含む	SE11・12−4，SE11・12−35 SE11・12−40	口縁外部に黒色物付着
418	SE11・12−21	土師器	坏	口縁〜底部		5.05	6.4	Ⅱa	にぶい黄橙 にぶい赤橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ、中心部に凹み	ヘラのあとナデ	DV	2㎜以下の赤褐色粒、微細な透明光沢粒を含む		
419	SE11・12	土師器	坏	口縁〜底部	12.9	5.2	6.5	Va	にぶい橙 橙	にぶい橙 橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ　板目	T Ⅰ	2㎜以下の赤褐色粒、微細な透明光沢粒を含む	SE11・12−4，SE11・12−9 SE11・12−15，SE11・12−16	
420	SE11・12−8	土師器	坏	ほぼ完形	15.1	5.95	8.1	Vb	橙	橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ	ヘラ	D Ⅱ	2.5㎜以下の赤褐・灰褐・灰白色粒を含む	SE11・12−9・16・17・33・35・20・21 C9，SE3	底部に一部黒色物付着
421	SE11・12	土師器	坏	口縁〜底部	12.1	5.1	6.0	Ⅵd	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	D Ⅱ	1㎜大の茶・灰褐色粒を多く含む	SE11・12−3，C9−2198 C9−2209，D9−2208	
422	SE11・12−3	土師器	坏	体部〜底部			5.45	Ⅷ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	T Ⅰ	1㎜大の茶・灰褐色粒、微細な光沢粒を多く含む		
423	SE11・12−20	土師器	坏	体部〜底部			7.2	Ⅷ	黄灰	暗黄灰	ナデ	ナデ		43	1㎜以下の透明粒を含む		
424	SE11・12−45	土師器	坏	体部〜底部			7.4	Ⅺ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味	ヘラ	D Ⅱ	2㎜以下の灰白・灰褐・赤褐色粒を含む		
425	SE11・12−17	土師器	坏	体部〜底部			6.0	不明	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、一部風化気味	回転ナデ	ヘラのあとナデ	T Ⅰ	1㎜以下の灰褐・赤褐色粒、微細な光沢粒を含む	SE11・12−20	
426	SE11・12−19	土師器	高台付埦	口縁〜底部	14.0	6.0	7.2	埦Ⅲa	にぶい赤褐	にぶい赤褐	回転ナデ	回転ナデ、布痕	ナデ	DⅣ	2.5㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を多く含む	SE11・P−21 D9−420，D9，西南	見込みに布痕
427	SE11・12−17	土師器	高台付埦	口縁〜底部	13.7	5.7	6.55	埦Ⅵb	にぶい橙 橙	にぶい橙 橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ、風化著しい	ナデ	T Ⅰ	3㎜以下の橙色粒を少量含む	SE11・12−29，D9	
428	SE11−17	土師器	高台付埦	体部〜底部			7.2	高②	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅣ	3㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を多く含む	C9−946，C9−947 B9	
430	SE11−23	土師器	鉢	口縁〜底部	11.0	7.0		鉢	にぶい黄 にぶい橙	にぶい黄橙 浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ		D Ⅲ	微細な黒色及び光沢粒を含む	SE11，C9−1805 D9	
431	SE11・12−9	黒色土器(内黒)	高台付埦	口縁〜底部	15.6			X	黄橙　橙	黒	回転ナデ　風化気味	ミガキ、風化	ナデ、風化	黒2	0.5㎜大のにぶい褐色粒を含む	SE11・12−23，B10 C9・C10，D9，D9−1795，D10	
432	SE11・12−8	黒色土器(内黒)	？	口縁〜体部	12.6			不明	にぶい黄橙	黒	回転ナデ	ミガキ		黒1	微細な光沢粒を含む	SE11・12−9，D9	
433	SE11・12−21	黒色土器(内黒)	大型鉢	口縁〜胴部	23.2			深鉢	にぶい黄橙 黒褐	黒	横ナデ	ミガキ、横ナデ		黒2	3㎜以下の褐色粒、2㎜以下の黒色光沢粒、微細な光沢粒を含む	SE11・12−23，D9	外面口縁部に黒斑
434	SE11・12−4	黒色土器(内黒)	大型鉢	胴部〜底部				深鉢	浅黄橙 にぶい橙	暗灰	ミガキ？　風化	ミガキ	ナデ、風化	黒2	2㎜以下の褐灰・灰白・褐色粒を含む	SE11・12−10，SE11・12−12 SE11・12−43，C9・C10，D9，D9−2187	
435	SE11・12−10	黒色土器(内黒)	高台付埦	体部〜底部				不明	橙	黒	ナデ	ミガキ	ナデ	黒3	3㎜以下の白色半透明粒、2㎜以下の灰白色粒、1㎜以下の褐灰色粒、微細な光沢粒を含む		
436	SE11−5	布痕		口縁〜胴部					橙	橙	風化	風化			3㎜大の灰色粒、2㎜大の赤褐色粒を含む		
441	SE12	土師器	甕	口縁	19.9				橙	橙	回転ナデ	回転ナデ			2㎜以下の光沢粒、赤褐・暗灰色粒、1㎜以下の乳白色粒を含む		
443	SE12−12	土師器	坏	口縁〜底部	12.5	4.65	6.0	Ⅲc	橙	橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ	ヘラ	DⅣ	5㎜以下の褐灰色の岩片を少量、2㎜以下の灰白色粒、1.5㎜以下の半透明のガラス質の粒を多く含む		
444	SE12−13	土師器	高台付埦	体部〜底部			6.6	埦Ⅳc	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	T Ⅰ	5㎜以下の明褐色粒、微細な透明光沢粒を少量含む		
445	SE12	布痕		口縁	14.7				橙	橙	粗いナデ	布痕			8㎜以下の灰褐色の石、2㎜以下の茶褐色粒を含む	SE12−14	
454	SE17−3	土師器	坏	口縁〜底部	13.2	4.4	7.6	Ⅰa	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ、風化気味	ナデ	D Ⅲ	2㎜以下の明赤褐色粒、微細な光沢粒を多く含む		
455	SE24	布痕		口縁					橙　浅黄橙	橙　浅黄橙	ナデ	布痕			2㎜以下の赤・灰褐色粒を多く含む		
457	SE25−20	土師器	甕	口縁〜頸部					灰褐	橙	横ナデ	横ナデ、ケズリか？			2㎜以下の白・黒色粒、1㎜以下の透明光沢粒を含む		外面にスス付着
458	SE25	土師器	甕	頸部					浅黄橙	橙	ナデ、横ナデ	横ナデ、ケズリ			3㎜以下の茶褐色粒、1㎜以下の黒褐色粒、微細な光沢粒を含む		
459	SE25　P1−②	土師器	坏	ほぼ完形	11.35	4.8	5.75	Ⅷ	橙	橙	風化	回転ナデ、風化気味	ナデ	D Ⅱ	1.5㎜以下の灰白色粒、1㎜以下の浅黄橙色粒、微細な光沢粒を含む		
460	SE25−24	土師器	坏	口縁〜底部	13.0	4.6	5.4	Va	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化著しい	ナデ、風化著しい	ナデ	D Ⅲ	4㎜以下の赤褐・灰褐色粒を含む		

報告書番号	遺構	器種	器形	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態	色調		調整		切り離し状況	胎土	胎土	接合関係	備考
									外面	内面	外面	内面					
461	SE25 P1−③	土師器	坏	ほぼ完形	11.4	4.85	5.1	Ⅵb	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅣ	1㎜大の茶褐・乳白色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
462	SE25 P1−①	土師器	坏	ほぼ完形	11.3	4.8	6.05	Ⅵb	黄橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅤ	1㎜以下の乳白・茶褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
463	SE25床−3	土師器	坏	口縁〜底部	10.4	4.2	4.4	Ⅵd	にぶい黄橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ、風化気味	ナデ	TⅠ	1.5㎜以下のにぶい褐色粒、微細な光沢粒を少量含む	SE25床−3 SE25 Ⅰ層上	
464	SE25−29	土師器	坏	口縁〜底部		5.75	6.6	Ⅶ	橙 浅黄橙	橙 浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	2㎜以下の茶・黒褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		外面上部に鉄が付着？
465	SE25−14	土師器	坏	口縁〜底部	14.2	7.0	7.5	Ⅶa−2	浅黄橙 橙	浅黄橙 橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ、風化著しい	ナデ	DⅡ	3㎜以下の茶・黒褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む	SE25−16 SE25Ⅰ層上	
466	SE25−45	土師器	坏	底部			7.6	Ⅶa	橙	橙	ナデ	ナデ	ヘラのあとナデ	DⅡ	2㎜以下の茶褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
467	SE25−30	土師器	坏	口縁〜底部	14.8	6.1	8.4	Ⅶa−2	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅡ	2㎜大の茶褐色粒を多く、かつ無色透明光沢粒を含む	SE25−48	
468	SE25−33	土師器	坏	口縁〜底部	14.0	5.65	7.85	Ⅶb−1	浅黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ（ナデによる沈線？）	回転ナデ	ヘラのあとナデ	TⅠ	1㎜以下の黒色光沢粒、微細な光沢粒を含む	SE25−36，SE25−39	内外面にスス付着
469	SE25−12	土師器	坏	体部〜底部			6.2	Ⅶb	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ	ヘラ	DⅢ	2㎜以下の明赤褐色粒を少量含む		
470	SE25−36	土師器	坏	口縁〜底部		5.75	7.3	Ⅶ	橙	橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ、風化著しい	ナデ	DⅣ	7㎜大の赤褐色の小石、1㎜以下の白色粒、微細な光沢粒を含む		
471	SE25−25	土師器	坏	体部〜底部			5.7	不明	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	DⅣ	2.5㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を多く、柱状黒色光沢粒を少量含む		
472	SE25−42	土師器	高台付埦	底部			7.7	高①	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅡ	3㎜以下の赤褐色粒、微細な光沢粒を少量含む		
473	SE25−52	土師器	高台付埦	底部			7.5	高②a	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	ミガキ	ナデ	DⅠ	2㎜以下の赤褐色粒を少量、微細な光沢粒を多く含む		
474	SE25 Ⅰ層上	土師器	高台付埦	底部			8.4	高②b	橙	浅黄橙	回転ナデ、風化	ナデ、風化	ナデ	DⅢ	1㎜大の赤褐色粒、微細な光沢粒を含む	SE25 Ⅱ層上	
475	SE25	土師器	高台付埦	底部			9.2	高②c	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅣ	1.5㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む		
476	SE25−41	土師器	高台付埦	体部〜底部			7.5	高③	にぶい黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅡ	2㎜以下の茶・灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む	SE25	
477	SE25・30	土師器	高台付埦	底部				不明	淡黄	淡黄	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	WⅡ	1㎜以下の灰白色粒を少量含む		
478	SE25・30	土師器	坏	体部〜底部			5.6	不明	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ、風化気味	ナデ	DⅢ	3㎜以下の赤褐色粒を多く、微細な光沢粒を少量含む		
479	SE25−4	黒色土器(内黒)	高台付埦	ほぼ完形	14.45	6.8	7.9	Ⅳc	橙 黒	黒	回転ナデ	ミガキ、指ナデ	ナデ	黒3	2㎜以下の茶褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む	SE25床−2 SE25 Ⅰ層上	
480	SE25−38	黒色土器(内黒)	高台付埦	底部			7.6	黒高②b	にぶい橙	黒	回転ナデ	ミガキ	回転ナデ	黒3	3㎜以下の明赤褐色粒を少量、微細な光沢粒を多く含む		
481	SE25	布痕		口縁	8.3				橙	橙	ナデ	布痕			7㎜以下の赤褐色粒、1㎜以下の赤褐・乳白色粒を多く含む		
493	SE29	黒色土器(内外黒)	高台付埦	底部			5.8	黒高⑥b	灰	暗灰	回転ナデ	ミガキ	回転ナデ	黒1	きめ細かい灰白色粒、微細な光沢粒を含む		
494	SE30−18	土師器	高台付埦	体部〜底部			7.2	高③b	灰白	灰白	回転ナデ	ミガキ	ナデ	WⅡ	1㎜以下の赤褐色粒を少量含む	SE30−19	
495	SE30−17	黒色土器(内外黒)	高台付埦	体部〜底部				黒高⑥b	灰白	黒褐	回転ナデ、ミガキ	ミガキ	ナデ	黒1	1㎜以下の灰白色粒、微細な光沢粒を含む		
496	SE30−4	黒色土器(内黒)	坏	底部			5.8	黒高①c？	褐灰	褐灰	ナデ	ミガキ	ナデ	黒1	2㎜以下の灰白色粒、微細な光沢粒を多く含む		
497	SE30−26	土師器	甕	頸部					灰黄 にぶい黄橙	灰黄褐	横ナデ	縦方向の工具ナデ、横ナデ、粗い工具ナデ			1㎜以下の灰褐・黒褐色粒を多く、微細な光沢粒を含む		
505	SE35	土師器	坏	底部			6.7	不明	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅣ	3㎜以下のにぶい橙色粒、1㎜以下の灰白色粒を少量、微細な光沢粒を多く含む		
506	SE7	土師器	坏	体部〜底部			6.5	Ⅴ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ?	WⅡ	2.5㎜以下の橙色粒を含む		弥生か？
507	SE3	弥生	甕	胴部					褐灰 にぶい黄橙	明褐	ナデ	ナデ			2㎜以下の乳白・灰褐色粒、金色光沢粒を含む		突帯付
508	SE25 上下	土師器	壺	胴部					にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ			3㎜以下の金色粒、1㎜以下の白色粒を含む		貼付突帯
509	SE7	土師器	不明	底部				不明	灰白	灰白		ナデ	ナデ		1.5㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む		
510	SL1−648	土師器	甕	口縁〜胴部	25.2				灰黄褐 黒褐	浅黄橙	横ナデ	横ナデ、横方向のケズリ			1㎜以下の透明・黒色光沢粒、微細な乳白色粒を含む		外面に一部黒変？
511	SL1−781	土師器	甕	口縁〜胴部	24.2				にぶい褐 黒褐 明赤褐	にぶい黄褐	横ナデ	横ナデ、下から上へやや斜方向のケズリ			3.5㎜以下の乳白色粒、1.5㎜以下の黒色光沢粒、1㎜以下の透明光沢粒を含む		外面に一部黒変
512	SL1−1069	土師器	甕	口縁〜頸部	20.8				にぶい橙 灰黄褐	口唇部に工具による凹線、横ナデ、ハケ目の後横ナデ、斜方向のハケ目	横ナデ、ケズリ				1〜2㎜大の褐・褐灰色粒、1㎜以下の黒色・透明光沢粒を含む		
513	SL1−545	土師器	甕	口縁〜頸部	22.4				橙	にぶい橙	横ナデ、風化気味	ナデ、風化著しい、横・やや斜方向のケズリ			1〜2㎜大の灰白・明褐灰・褐色粒、微細な光沢粒を含む		
514	SL1−536	土師器	甕	口縁〜頸部	17.7				にぶい橙 灰黄褐	にぶい黄褐 灰黄褐	口唇部風化著しい、縦方向のナデの後横ナデ、縦方向のナデ	横ナデ、斜方向のケズリ			1〜4㎜大の明褐灰色粒、1㎜以下の黒色・透明光沢粒を含む		

報告書番号	遺構	器種	器形	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態	色調		調整		切り離し状況	胎土	胎土	接合関係	備考
									外面	内面	外面	内面					
515	SL1－539	土師器	甕	口縁～胴部	18.9				明黄褐 橙	明黄褐 橙	ナデ、工具痕	横ナデ、横ナデの後横方向のケズリ、ケズリの後一部ナデ			2㎜以下の乳白・褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
516	SL1	土師器	甕	口縁～頸部	11.1				にぶい橙	にぶい橙 褐灰	横ナデ、工具痕	横ナデ			3㎜大の灰黄褐色粒、1㎜以下の灰黄褐・褐・黒色粒、微細な光沢粒を含む		外面に一部スス付着、黒変（口唇部にも）
517	SL1	土師器	甕	口縁～胴部	15.5				にぶい黄橙 にぶい黄褐	橙 灰黄褐	ナデ？風化著しく調整不明瞭	横ナデ、ケズリ			1㎜以上の灰白・褐灰・褐色粒、微細な光沢粒を含む		
518	SL1・SE8	土師器	甕	口縁～胴部	15.6				にぶい黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ、ケズリ			1㎜以下の黒褐・灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
519	SL1	土師器	甕	口縁～頸部	34.2				灰褐 黒褐	にぶい黄橙 灰黄褐	横ナデ、工具痕	横ナデ、斜方向のケズリ後一部縦方向にナデか？風化気味			1㎜以下の褐灰・黒褐色粒、透明光沢粒を含む		
520	SL1・SE8	土師器	甕	口縁	24.7				浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ、ケズリ			4㎜以下の茶・灰褐色粒、乳白色粒、微細な光沢粒を含む		
521	SL1－762	土師器	甕	口縁～胴部	23.1				にぶい褐	灰黄褐	横ナデ、粘土のつなぎ目、横・斜方向のハケ目後ナデ	横ナデ、縦方向にケズリ			3㎜以下の白色粒、2㎜以下の褐色粒、微細な透明光沢粒を含む		内面に炭化物付着か？
522	SL1－1083	土師器	甕	口縁～胴部	23.6				赤褐 暗赤褐	明赤褐	縦方向のハケ目の後横ナデ、縦方向のハケ目、縦方向のハケ目の後横方向のハケ目	横ナデ、横ナデの後ナデ、ケズリ			5㎜以下の乳白色粒、微細な光沢粒を含む		
523	SL1・SE5	土師器	甕	口縁～頸部	25.9				にぶい橙	にぶい橙	ナデ	横方向の工具ナデ、ナデ			1～3㎜大のにぶい赤褐色粒、1㎜大の褐灰・透明光沢粒を含む		
524	SL1F－493	土師器	甕	口縁					橙 にぶい黄橙	橙	横ナデ、工具ナデ	ナデ、ケズリ			1㎜以下の茶・灰褐色粒を多く含む		
525	SL1－688床	土師器	甕	口縁～胴部					橙	浅黄橙	横ナデ、工具痕	横ナデ？風化気味			1㎜以下の透明・黒色光沢粒を含む		
526	SL1－1080床	土師器	甕	口縁～頸部					明赤褐	明赤褐	横ナデ、風化	横ナデ			4㎜以下の乳白色粒、2㎜以下の金雲母、1㎜以下の灰黄色粒、透明粒を含む		
527	SL1	土師器	甕	口縁					黒褐	灰褐	横ナデの後、ミガキ	横ナデ			1㎜以下の黒色・透明光沢粒を含む		外面に黒変？
528	SL1－451a	土師器	甕	胴部					明褐	にぶい橙	格子目タタキ	ナデ			2㎜以下の乳白・茶・黒褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
529	SL1－468b	土師器	甕	胴部					にぶい黄橙	明黄褐	タタキ	ナデ?風化			5㎜以下の褐色粒、1㎜以下の灰黄色粒、透明光沢粒、微細な黒色光沢粒を含む		
530	SL1 T6	土師器	甕	胴部					橙	橙	格子目タタキ	ナデ			3㎜以下の褐・白色粒を含む		
531	SL1 619～628	土師器	甕	胴部					にぶい橙	にぶい橙	横方向の平行タタキ	ナデ			3.5㎜以下の褐色粒を含む		
532	SL1－58	土師器	甕	頸部～胴部					黒褐	灰黄褐	横ナデ、工具痕	ナデ？風化気味			微細な黒色・透明光沢粒を含む		外面に黒変？
533	SL1	土師器	甕	胴部					にぶい橙	橙	指による凹、ナデ	工具ナデ			3㎜以下の褐色粒を含む		
534	SL1－494	弥生	高坏	脚					にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ナデ			5㎜以下の赤褐色粒、2㎜以下の灰白・褐灰色粒を含む	SL1－494 SL1－388b	
535	SL1－691	土師器	坏	口縁～底部	12.6	4.35	5.6	Ⅰa	浅黄橙	浅黄橙	ナデ、風化著しい	ナデ、風化著しい	ヘラのあとナデ	DⅡ	3㎜以下の赤褐・灰褐・灰白色粒、微細な光沢粒を多く含む		
536	SL1－564	土師器	坏	口縁～底部	11.9	4.1	6.6	Ⅰa	浅黄橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DⅠ	2㎜以下の茶・灰褐色粒を多く含む		やや硬質
537	SL1	土師器	坏	口縁～底部	13.2	4.75	6.5	Ⅰa	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	1㎜以下の褐灰色粒を少量、微細な光沢粒を含む		
538	SL1－b下層	土師器	坏	口縁～底部	11.9	4.3	5.0	Ⅰa	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味	ヘラ	TⅠ	2㎜以下の赤褐色粒を含む		
539	SL1－967	土師器	坏	口縁～底部	13.3	4.5	7.55	Ⅰa	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DV	2.5㎜以下の赤褐・灰褐色粒、微細な光沢粒を多く含む		
540	SL1・SE7－877	土師器	坏	体部～底部			6.25	Ⅰa	浅黄橙 橙	浅黄橙 橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ、風化著しい	ナデ、板目	TⅠ	2.5㎜以下の褐灰色粒、2㎜以下の橙色粒を含む		
541	SL1－492	土師器	坏	口縁～底部	12.1	4.6	6.0	Ⅰb	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	2㎜以下のにぶい赤褐色粒、柱状黒色光沢粒、微細な透明光沢粒を含む		体部凹凸のあとヨコナデ
542	SL1－535	土師器	坏	口縁～底部	12.55	4.6	7.1	Ⅰb	浅黄橙 橙	橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ	ナデ	DⅠ	2㎜以下の赤褐・灰褐色粒、微細な光沢粒を含む		
543	SL1－462a	土師器	坏	口縁～底部	12.3	4.4	6.9	Ⅰb	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	1㎜以下の茶・黒褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
544	SL1－829	土師器	坏	ほぼ完形	12.8	4.6	6.7	Ⅰc	橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DV	微細な赤褐色粒、半透明粒、黒色光沢粒を含む		
545	SL1－718床	土師器	坏	口縁～底部	13.5	4.5	7.0	Ⅰc	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ、ハケ目状工具ナデ	ナデ	DⅣ	2㎜以下の乳白色粒を含む		
546	SL1	土師器	坏	口縁～底部	13.2	5.1	6.5	Ⅰc	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DⅠ	微細な光沢粒を含む	SL1－574 SL1－1033	やや硬質
547	SL1－1081	土師器	坏	体部～底部			6.2	Ⅰc	橙	橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味	ヘラ	DⅡ	1㎜以下の赤褐色粒、微細な光沢粒を多く含む		
548	SL1 ダンメン③－1	土師器	坏	口縁～底部	13.7	5.0	8.1	Ⅰd	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅢ	4.5㎜以下の橙色粒、2㎜以下の黒色・透明光沢粒、乳白色粒、赤褐色粒を含む		墨書土器
549	SL1	土師器	坏	体部～底部			5.9	Ⅰ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	TⅠ	2㎜以下の褐灰色粒、1㎜以下の赤褐色粒、微細な光沢粒を含む		
550	SL1－1046床	土師器	坏	口縁～底部	12.1	4.6	5.75	Ⅱa	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅢ	2.5㎜以下の赤褐色粒、1㎜以下の透明光沢粒を含む		

報告書番号	遺構	器種	器形	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態	色調		調整		切り離し状況	胎土	胎土	接合関係	備考
									外面	内面	外面	内面					
551	SL1	土師器	坏	ほぼ完形	11.5	4.6	5.9	Ⅱa	橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅢ	微細～3㎜大の赤褐色粒、1㎜以下の乳白・灰・茶褐色粒を含む	SL1－619，SL1－620 SL1－848	
552	SL1・SE7－893	土師器	坏	完形	11.2	4.4	5.5	Ⅱa	橙	橙	回転ナデ、一部指頭痕	回転ナデ	ヘラ	TⅠ	3㎜大の褐色粒を少し、1㎜以下の褐・灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む	SE7	
553	SL1－233	土師器	坏	口縁～底部	11.3	4.35	5.85	Ⅱa	橙	橙	丁寧な回転ナデ	回転ナデ、指押さえ	ナデ	DⅡ	4㎜以下の褐灰色粒を少量、微細な光沢粒を多く含む		
554	SL1－550	土師器	坏	口縁～底部	10.7	4.25	4.4	Ⅱb－1	浅黄橙　橙	浅黄橙　橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅢ	4㎜以下の茶・灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
555	SL1－749	土師器	坏	体部～底部			5.4	Ⅱb－1	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅡ	2㎜以下の茶・黒褐色粒、微細な光沢粒を含む		
556	SL1－276	土師器	坏	体部～底部			5.55	Ⅱb－1	橙	橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味	ヘラのあとナデ	DⅡ	2㎜以下の灰白・灰褐・赤褐色粒を含む		
557	SL1－614	土師器	坏	口縁～底部	12.0	4.4	5.9	Ⅱc	橙　灰白	橙　灰白	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅢ	2㎜以下の赤褐・灰褐色粒、微細な光沢粒を含む		内面に漆、底部に穴
558	SL1	土師器	坏	口縁～底部	11.2	4.4	6.1	Ⅱc	橙	浅黄橙 にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	板目	DⅢ	微細な黒色光沢粒を含む		
559	SL1－964	土師器	坏	体部～底部			6.35	Ⅱc	橙　浅黄橙	橙　浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	粗いナデ	DⅡ	2㎜以下の赤褐色粒、微細な光沢粒を含む		
560	SL1・SE7	土師器	坏	口縁～底部	14.0	4.5	7.3	Ⅲa	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅢ	1㎜大の茶・灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む。焼きひずみあり		
561	SL1・SE7	土師器	坏	底部			6.7	Ⅲa	にぶい橙	浅黄橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味	ヘラ	TⅠ	3㎜以下の明赤褐色粒、2㎜以下の褐灰色粒、1.5㎜以下の黒色光沢粒、微細な光沢粒を含む		
562	SL1－502	土師器	坏	口縁～底部	12.8	4.6	6.0	Ⅲb	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅡ	3㎜以下の灰褐色粒、微細な光沢粒を含む		部分的に漆が付着
563	SL1	土師器	坏	体部～底部			5.0	Ⅲb	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅢ	6.5㎜以下の赤褐色粒を含む		
564	SL1－730	土師器	坏	口縁～底部	12.0	4.9	6.3	Ⅲc	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅢ	5㎜以下の赤褐色粒を含む		
565	SL1－382	土師器	坏	口縁～底部	13.5	4.7	6.6	Ⅲa	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅡ	3㎜以下の赤褐色粒、1㎜以下の乳白色粒を含む		
566	SL1－170	土師器	坏	口縁～底部	12.7	4.85	6.6	Ⅲc	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化著しい	ナデ	TⅠ	5㎜以下のにぶい橙色粒を少量含む		
567	SL1－936	土師器	坏	体部～底部			6.6	Ⅲ	橙	橙	風化の為調整不明	回転ナデ	ヘラ	DⅠ	精良		内面に線刻
568	SL1－999	土師器	坏	体部～底部			6.3	Ⅲ	橙	にぶい黄橙 橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅣ	2㎜以下の茶褐・黒褐・乳白色粒を多く含む		
569	SL1－241	土師器	坏	体部～底部			8.2	Ⅲ	浅黄橙	橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ	ヘラのあとナデ	TⅠ	1㎜以下の赤褐色粒、微細な光沢粒を含む	SL1－245	
570	SL1－804	土師器	坏	体部～底部			5.65	Ⅲ	橙	橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ、風化著しい	ヘラのあとナデ	DⅡ	2㎜以下の赤褐・灰褐・灰白色粒を含む		
571	SL1－375b	土師器	坏	体部～底部			6.6	Ⅲ	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ、ヘラナデ	回転ナデ	ナデ	DⅢ	微細な光沢粒を含む		
572	SL1	土師器	坏	底部			7.0	Ⅲ	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	TⅠ	2㎜以下の赤褐・乳白色粒を含む		
573	SL1	土師器	坏	体部～底部			5.9	Ⅲ	にぶい赤褐 褐灰	にぶい赤褐	回転ナデ	ナデ、指頭痕	ナデ	DⅡ	1㎜以下の茶・赤褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
574	SL1－664床上	土師器	坏	口縁～底部	12.8	4.9	6.0	Ⅳa	淡黄	淡黄　黄灰	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅢ	直径2㎜の高師小僧（赤褐色粒）？、微細な光沢粒を含む		内面・底部に黒斑
575	SL1－302	土師器	坏	口縁～底部	12.4	5.1	5.55	Ⅳa	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味	ナデ	TⅠ	5㎜以下の灰褐・赤褐・灰白色粒、微細な光沢粒を含む		
576	SL1－766	土師器	坏	口縁～底部	12.4	4.95	6.3	Ⅳa	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ、ヘラケズリのあと一部指ナデ	回転ナデ、不定方向のナデ	板目	DⅢ	1㎜以下の茶褐色粒、微細な光沢粒を多く含む		墨書土器
577	SL1－917	土師器	坏	口縁～底部	12.2	4.65	6.2	Ⅳb	橙 にぶい黄橙	橙　灰黄褐	回転ナデ	回転ナデ、風化	ヘラ	DⅢ	5㎜以下の灰白色粒、2㎜以下の褐灰色粒、1.5㎜以下の無色透明光沢粒、微細な光沢粒を含む		
578	SL1－793	土師器	坏	口縁～底部	13.65	5.1	6.6	Ⅳb	橙	橙	回転ナデ、下部に工具によるケズリ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DⅢ	2.5㎜以下の灰褐・灰白色粒を含む	SL1－830，SL1－440a SL1－467a	
579	SL1－395b上層	土師器	坏	口縁～底部	12.4	4.25	6.1	Ⅳb	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化気味	ナデ	ヘラ	29	微細な光沢粒を含む		内面に漆
580	SL1	土師器	坏	体部～底部			6.2	Ⅳb	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ、ヘラナデ	回転ナデ、ナデ	ナデ	DⅢ	微細な光沢粒を含む		墨書土器、「泉」か？
581	SL1－324	土師器	坏	体部～底部			6.1	Ⅳb	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、ヘラナデ	回転ナデ、指押さえのあとナデ	ナデ	DⅠ	6㎜大の茶褐色粒、1㎜以下の茶・灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
582	SL1－668	土師器	坏	体部～底部			7.0	Ⅳb	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	TⅠ	1㎜以下の灰褐・灰白色粒を含む	SL1－1051床	
583	SL1－911	土師器	坏	体部～底部			6.1	Ⅳb	橙　浅黄橙	橙　浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅡ	2㎜以下の茶褐・乳白色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む	SL1－908 SL1－911	外面凹凸
584	SL1－353	土師器	坏	体部～底部			6.2	Ⅳb	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ、底部付近ケズリ	回転ナデ	ヘラ	DⅡ	2㎜以下の赤色粒、1.5㎜以下の透明光沢粒、乳白色粒を含む		墨書土器
585	SL1－1041床	土師器	坏	体部～底部			6.2	Ⅳb	橙	橙 にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ、風化	ナデ	DⅡ	1㎜以下の茶・灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		薄手
586	SL1	土師器	坏	体部～底部			6.5	Ⅳb	橙	橙	風化気味	回転ナデ、指頭痕	ナデ	DⅡ	1.5㎜以下の灰色粒、1㎜以下の灰白・暗灰色粒、黒色光沢粒、微細な光沢粒を含む		

報告書番号	遺構	器種	器形	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態	色調		調整		切り離し状況	胎土	胎土	接合関係	備考
									外面	内面	外面	内面					
587	SL1	土師器	坏	体部～底部			6.5	Ⅳb	黄橙　橙	黄橙 浅黄橙	ナデ、風化気味	ナデ、風化気味	ヘラ	DⅢ	2㎜以下の白色半透明粒、1㎜以下の灰白色粒、0.5㎜以下の灰色粒を含む		
588	SL1－639	土師器	坏	体部～底部			6.2	Ⅳb	橙	灰黄褐	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅡ	4㎜以下の赤褐色粒、微細な光沢粒を含む		内外面に漆
589	SL1－784	土師器	坏	体部～底部			6.05	Ⅳb	橙	橙	ナデ、ヘラナデ、風化気味	回転ナデのあと工具ナデ、指押さえ	ナデ	DⅠ	2㎜以下の灰白・赤褐色粒を含む		
590	SL1－496	土師器	坏	完形	12.4	5.2	5.9	Va	橙	橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味	ナデ	DⅣ	2.5㎜以下の灰白・灰褐・赤褐色粒を含む		
591	SL1－1029	土師器	坏	口縁～底部	12.8	5.05	6.7	Va	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅡ	1㎜以下の白・赤褐色粒、透明光沢粒を含む		
592	SL1－754	土師器	坏	口縁～底部	12.2	4.5	5.8	Va	橙	浅黄橙	回転ナデ、下部に面取り、風化	ナデ、風化	ヘラのあとナデ	DⅠ	2㎜以下の赤褐・茶褐・淡黄色粒、透明・黒色光沢粒を含む		
593	SL1・SE7	土師器	坏	体部～底部			5.4	Va	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	TⅠ	1㎜以下の赤褐色粒を含む		
594	SL1－338	土師器	坏	ほぼ完形	12.65	4.75	5.55	Vb	浅黄橙	浅黄橙	ナデ、下部にケズリ？	ナデ	ヘラ	DⅡ	1～1.5㎜の橙・淡黄色粒を含む		内外面に炭化物付着
595	SL1－90	土師器	坏	ほぼ完形	12.4	5.2	5.7	Vb	黄橙	黄橙	回転ナデ、風化	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DⅢ	3㎜以下の橙・明赤褐色粒を含む	SL1－490床	
596	SL1－201	土師器	坏	口縁～底部	11.8	4.4	6.5	Vb	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ、横方向の工具痕	ナデ、板目	DⅠ	4㎜大の粒2ヶ、微細な黒色光沢粒、乳白・茶褐色粒を含む		底部にスス付着
597	SL1－999	土師器	坏	体部～底部			7.6	Vb	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデのあと板目	DⅡ	1.2㎜以下の赤褐色の石を少量、柱状黒色光沢粒、微細な透明光沢粒を含む	SL1－1001	
598	SL1－？	土師器	坏	口縁～底部	12.0	5.1	6.0	Ⅵa	橙	橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味	ナデ	DⅢ	3㎜大の茶褐色粒を多く含む		
599	SL1－396b下層	土師器	坏	口縁～底部	12.4	5.2	5.0	Ⅵa	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ、風化著しい	ナデ	DⅢ	3㎜以下の赤褐色粒を含む		
600	SL1－655	土師器	坏	口縁～底部	12.4	5.7	5.5	Ⅵa	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅡ	1㎜以下の茶・灰褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
601	SL1－442b	土師器	坏	口縁～底部	12.0	5.3	3.8	Ⅵa	橙	橙　浅黄橙	回転ナデ、風化	ナデ、風化	ヘラ	DⅢ	3㎜以下の赤褐色粒を含む		
602	SL1－456b床	土師器	坏	口縁～底部	13.7	5.5	5.3	Ⅵa	橙　灰黄	橙　灰黄	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅢ	2㎜以下の茶・灰褐色粒を多く含む		
603	SL1－843	土師器	坏	完形	12.8	5.7	5.4	Ⅵa	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅤ	2㎜以下の赤褐色粒、微細な光沢粒を含む		
604	SL1	土師器	坏	体部～底部			5.2	Ⅵa	にぶい黄橙	にぶい黄橙 灰	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅡ	1㎜以下の赤褐・灰白色粒を少量含む		
605	SL1・SE7	土師器	坏	体部～底部			5.8	Ⅵa	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ	ヘラのあとナデ	TⅠ	2㎜以下の灰褐・赤褐色粒を含む		
606	SL1－395b上層	土師器	坏	口縁～底部	11.9	5.4	6.1	Ⅵb	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化著しい	風化著しい	ヘラ	TⅠ	2㎜以下の赤褐・灰褐色粒を含む		底部に線刻か？
607	SL1	土師器	坏	口縁～底部	11.6	5.5	6.1	Ⅵb	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ、風化著しい	板目	TⅠ	2.5㎜以下のにぶい褐色粒、微細な透明光沢粒を少量含む		
608	SL1	土師器	坏	口縁～底部	12.2	5.1	5.0	Ⅵb	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅢ	6㎜以下の赤褐色粒、2㎜以下の黒色光沢粒を含む		
609	SL1	土師器	坏	口縁～底部	12.0	5.4	5.45	Ⅵb	にぶい橙	浅黄橙　橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	TⅠ	1㎜以下の赤褐色粒、微細な透明光沢粒を含む		
610	SL1	土師器	坏	口縁～底部	12.0	5.1	5.6	Ⅵb	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅡ	2㎜以下の赤褐色粒を含む		
611	SL1－1320	土師器	坏	体部～底部			5.7	Ⅵb	にぶい褐	灰黄褐	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅣ	1㎜以下の黄橙色粒を含む	B9－2019，C9	硬質
612	SL1	土師器	坏	体部～底部			6.0	Ⅵb	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅡ	2㎜以下の赤褐色粒を含む	SE8－13	
613	SL1・SE7	土師器	坏	体部～底部			5.4	Ⅵb	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	TⅠ	1㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む		
614	SL1・SE7－862	土師器	坏	体部～底部			5.3	Ⅵb	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅡ	2㎜以下の灰白・赤褐色粒を含む		
615	SL1－474b	土師器	坏	口縁～底部	12.2	4.7	5.7	Ⅵc	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ、風化気味	ヘラ	DⅡ	2㎜以下の黒色光沢粒を少量、微細な光沢粒を多く含む		
616	SL1	土師器	坏	口縁～底部	12.2	4.9	5.7	Ⅵc	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅢ	2㎜以下の赤褐色粒、1㎜以下の乳白色粒、光沢粒を含む		
617	SL1	土師器	坏	口縁～底部	12.0	5.0	5.4	Ⅱa	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ、風化気味	ナデ	DⅢ	2㎜以下の赤褐色粒を含む	SL1－295 SL1－402	
618	SL1－509	土師器	坏	口縁～底部	11.5	5.1	4.75	Ⅵa	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DⅡ	2.5㎜以下の赤褐色粒、1.5㎜以下の灰白色粒を含む	SL1－551 SL1－552	
619	SL1－742	土師器	坏	体部～底部			5.6	Ⅵc	橙	にぶい橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DⅡ	2.5㎜以下の灰白・赤褐・灰褐色粒、微細な光沢粒を含む		
620	SL1－1044床	土師器	坏	口縁～底部	12.6	5.2	6.5	Ⅵd	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	板目	DⅢ	4㎜以下の褐色粒、2㎜大の灰黄色粒、微細な黒色光沢粒を含む		底部にモミ痕
621	SL1－560	土師器	坏	口縁～底部	14.1	6.1	6.8	Ⅵd	にぶい橙 灰白	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅢ	微細な光沢粒を含む		外面凹凸
622	SL1－989	土師器	坏	口縁～底部	13.3	6.3	6.85	Ⅵd	にぶい黄橙	にぶい橙	回転ナデ、外面下部にヘラナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	1㎜以下の赤褐色粒、微細な光沢粒を含む	SL1－1060床	内面凹凸

報告書番号	遺構	器種	器形	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態	色調		調整		切り離し状況	胎土	胎土	接合関係	備考
									外面	内面	外面	内面					
623	SL1－366	土師器	坏	完形	13.0	5.8	6.1	Ⅵd	にぶい橙 浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、下部にヘラナデ？	回転ナデ	ナデ	TⅠ	2㎜以下の赤色粒、微細な透明光沢粒を含む		凹凸
624	SL1－458b床	土師器	坏	口縁～底部	13.0	5.3	6.5	Ⅵd	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、工具痕	回転ナデ、指ナデ	ナデ	DⅢ	1㎜以下の褐色粒、微細な光沢粒を含む		見込みナデ凹凸
625	SL1	土師器	坏	口縁～底部	13.1	5.5	6.1	Ⅵd	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅢ	1㎜以下の赤褐色粒、微細な光沢粒、乳白色粒を少量含む		内外面凹凸
626	SL1・SE7－881	土師器	坏	口縁～底部	11.7	4.9	5.6	Ⅵe	黄橙　橙	黄橙　橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DⅡ	4㎜以下の褐・黒褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む	SL1・SE7－882	
627	SL1－316	土師器	坏	体部～底部			5.8	Ⅵe	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ、指頭痕	ナデ	DⅠ	精良		
628	SL1	土師器	坏	口縁～底部	11.6	5.25	6.2	Ⅵf	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅣ	5㎜以下の橙色粒、微細な光沢粒を含む	SL1－572	
629	SL1	土師器	坏	口縁～底部	10.6	4.9	5.2	Ⅵf	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	DⅠ	5㎜以下のにぶい赤褐色粒を少量含む	SL1－106	
630	SL1－970	土師器	坏	体部～底部			5.8	Ⅵf	黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化	回転ナデ	ナデ	DⅡ	1～2㎜大の赤褐・灰白色粒、微細な粒を含む		
631	SL1	土師器	坏	口縁～底部	10.7	5.2	5.6	Ⅵg	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	板目	DⅠ	精良		
632	SL1－705	土師器	坏	口縁～底部	11.6	5.3	6.2	Ⅵg	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあと板目？	WⅡ	3㎜以下の灰白色粒を少量含む		
633	SL1－384b	土師器	坏	口縁～底部	11.2	4.95	6.1	Ⅵg	浅黄橙 灰黄	浅黄橙 灰黄	回転ナデ、風化著しい	回転ナデ	ナデ	DⅢ	1㎜大の茶・黒褐・乳白色粒を多く含む	SL1－387b，SL1A	
634	SL1－549	土師器	坏	ほぼ完形	10.1	5.0	4.8	Ⅵg	橙	橙	回転ナデ、風化	回転ナデ、風化	ナデ	DⅢ	4㎜大の褐色粒1ヶ、2㎜以下の赤褐・黒褐・灰色粒を含む		
635	SL1	土師器	坏	体部～底部			6.9	Ⅵa	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	TⅠ	2㎜以下の茶・黒褐色粒、微細な光沢粒を含む		
636	SL1－334	土師器	坏	体部～底部			5.9	Ⅵg	浅黄橙 灰黄褐	浅黄橙 暗灰黄	回転ナデ	回転ナデ	放射状圧痕	DⅡ	微細な黒・灰色粒を含む		外面に漆、内面に黒変？
637	SL1－971	土師器	坏	口縁～底部	13.0	4.8	6.4	Ⅰe	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅡ	微細な光沢粒を含む	SL1－619～628	
638	SL1－805	土師器	坏	体部～底部			6.0	Ⅰe	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	TⅠ	1㎜以下の白色粒、微細な光沢粒を含む		
639	SL1	土師器	坏	口縁～底部	13.8	4.8	6.5	Ⅲc	橙	橙	回転ナデ、風化	回転ナデ	ナデ	DⅡ	2㎜大の褐色粒、微細な黒色光沢粒を含む		
640	SL1	土師器	坏	体部～底部			7.1	Ⅲc	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	1㎜以下の赤褐・灰白色粒を含む		
641	SL1－769	土師器	坏	口縁～底部	13.6	6.1	6.3	Ⅶa－1	浅黄橙　橙	浅黄橙　橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	TⅠ	2㎜以下の茶褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
642	SL1－571	土師器	坏	口縁～底部	14.5	5.8	7.5	Ⅶa－1	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	4㎜以下の赤褐色粒、2㎜以下の乳白色粒、微細な光沢粒を含む	SL1－1009	
643	SL1	土師器	坏	体部～底部			7.05	Ⅶa－1	橙	橙	回転ナデ、風化	回転ナデ、風化	ナデ	DⅢ	2㎜以下の茶・黒褐色粒を多く含む		
644	SL1－488	土師器	坏	口縁～底部	13.1	5.85	6.7	Ⅶa－2	浅黄橙	浅黄橙	ナデ、風化著しい	ナデ、一部風化気味	ナデ	TⅠ	1㎜以下の灰褐・赤褐色粒を含む	SL1－732	
645	SL1－361	土師器	坏	口縁～底部	12.0	5.4	6.6	Ⅶa－2	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙 にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	4㎜以下の明褐色粒、微細な光沢粒を少量含む		
646	SL1－21	土師器	坏	体部～底部			7.5	Ⅶa－2	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	2㎜以下の赤褐色粒、微細な光沢粒を含む		
647	SL1－556	土師器	坏	体部～底部			7.1	Ⅶa－2	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	風化気味	ナデ	DⅡ	3㎜以下のにぶい赤褐色粒、2㎜以下の灰色粒、1.5㎜以下の灰白色粒、微細な光沢粒を含む		
648	SL1－1047床	土師器	坏	体部～底部			6.7	Ⅶa－2	にぶい黄橙 灰黄橙	にぶい黄橙 灰黄橙	ナデ	ナデ	ナデ	DⅣ	4㎜以下の灰褐色粒、1㎜以下の乳白・黒褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		
649	SL1－924	土師器	坏	口縁～底部	11.9	5.0	7.3	Ⅶa－3	橙	橙	風化	回転ナデの跡、風化気味	ナデ	DⅢ	6㎜以下の灰褐色粒、3.5㎜以下の褐灰色粒、3㎜以下の灰色粒、2㎜以下のにぶい橙色粒、1㎜以下の黒色粒、微細な光沢粒を含む		
650	SL1・SE7－874	土師器	坏	体部～底部			7.2	Ⅶa－3	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅡ	2㎜以下のにぶい橙色粒を含む		
651	SL1－1070	土師器	坏	口縁～底部	15.2	4.7	6.8	Ⅶa－4	浅黄橙	橙	回転ナデ、風化	回転ナデ	ナデ	DⅠ	5㎜大の灰褐色粒1ヶ、微細な褐色粒、黒色光沢粒を含む	D6－600	
652	SL1－257	土師器	坏	体部～底部			9.35	Ⅶa－5	にぶい黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ	ナデ（指押さえ）	WⅠ	1㎜以下の赤褐・灰褐色粒、微細な光沢粒を含む	SL1－257 SL1－265	
653	SL1－652	土師器	坏	口縁～底部	13.0	5.55	5.3	Ⅶb－1	橙　黄橙	橙	回転ナデ	横ナデ、風化	ナデ	DⅡ	4㎜以下の灰白色粒、2㎜以下の褐灰色粒、1㎜以下の黒色・無色透明光沢粒、微細な光沢粒を含む		
654	SL1－457	土師器	坏	口縁～底部	13.9	5.8	6.9	Ⅶb－2	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	板目	DⅢ	5㎜以下の赤褐色粒、2㎜以下の黒色粒、微細な光沢粒を含む		外面凹凸
655	SL1	土師器	坏	体部～底部			8.0	Ⅶb－2	橙 にぶい黄橙	にぶい橙	回転ナデ	ミガキ	ナデ	DⅢ	1㎜以下の赤褐色粒、微細な光沢粒を含む		作りが丁寧
656	SL1	土師器	坏	体部～底部			7.05	Ⅶb－2	浅黄橙　橙	浅黄橙　橙	回転ナデ	ナデ	ナデ	DⅡ	1㎜大の褐色粒を多く、かつ微細な光沢粒を含む		外面凹凸
657	SL1－519	土師器	坏	体部～底部			6.0	Ⅶb－2	浅黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	風化気味	ヘラ	TⅠ	微細な光沢粒を含む	SL1－619～628	
658	SL1－1068	土師器	坏	口縁～底部	14.0	5.4	6.8	Ⅶb－3	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化著しい	指押さえ	WⅠ	1㎜以下の橙色粒を少量含む		

報告書番号	遺構	器種	器形	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態	色調		調整		切り離し状況	胎土	胎土	接合関係	備考
									外面	内面	外面	内面					
659	SL1	土師器	坏	体部～底部			6.5	Ⅶb	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	1㎜以下の透明光沢粒、赤褐色粒、微細な乳白色粒を含む		見込みに線刻
660	SL1－485	土師器	坏	口縁～底部	11.8	4.3	6.5	Ⅶ	にぶい黄橙 橙	にぶい黄橙 橙	回転ナデ、一部指押さえ	回転ナデ、風化気味	ヘラのあとナデ	TⅠ	2㎜以下の灰白色粒を含む		
661	SL1	土師器	坏	口縁～底部	12.9	5.1	6.75	Ⅶ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	TⅠ	1㎜以下の灰白・灰褐色粒を含む		内面に線刻
662	SL1－248	土師器	坏	口縁～底部	12.5	5.5	6.45	Ⅶ	橙	橙		回転ナデ、風化	ヘラ	DⅢ	2㎜以下の赤褐色粒、微細な乳白色粒、光沢粒を含む		
663	SL1	土師器	坏	口縁～底部	11.8	5.0	6.2	Ⅶ	橙	橙	ナデ、工具痕か？	ナデ	ヘラのあとナデ	DⅡ	4.5㎜以下の赤褐・灰褐・灰白色粒を含む		
664	SL1－636	土師器	坏	口縁～底部	12.6	5.1	6.65	Ⅶ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	TⅠ	0.5㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む		小型
665	SL1	土師器	坏	体部～底部			6.7	Ⅶ	橙	浅黄橙	回転ナデ、風化	回転ナデ	ナデ	TⅠ	2㎜大の黒色光沢粒、1㎜以下の透明光沢粒、橙・乳白・黒色粒を含む		
666	SL1	土師器	坏	体部～底部			6.9	Ⅶ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、下部は粗いナデ	回転ナデ	ナデ	TⅠ	1.5㎜以下の無色透明光沢粒、白色半透明粒、1㎜以下の黒色光沢粒、微細な光沢粒を含む		
667	SL1－637	土師器	坏	口縁～底部	12.6	5.35	6.3	Ⅸ	にぶい黄橙 にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	2㎜以下の黒色・無色透明光沢粒、1.5㎜以下の灰白色粒、微細な光沢粒を含む		外面凹凸
668	SL1－532	土師器	坏	口縁～底部	12.2	5.0	5.9	Ⅸ	橙	浅黄橙　橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味	ナデ	DⅡ	2㎜大の灰褐・淡黄色粒、1㎜以下の赤褐色、白・黒色光沢粒を含む		
669	SL1－182	土師器	坏	口縁～底部	13.0	5.0	7.6	Ⅶ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、粗いナデ、風化著しい	回転ナデ、一部風化気味	ヘラ	TⅠ	3㎜以下の赤褐・灰褐・灰白色粒、微細な光沢粒を多く含む	SE3，SE3－16	
670	SL1	土師器	坏	体部～底部			5.8	Ⅶ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	WⅡ	2.5㎜以下の赤褐・灰白・灰褐色粒、微細な光沢粒を多く含む		
671	SL1－752	土師器	坏	口縁～底部	12.7	4.5	6.0	Ⅶ	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ	DⅠ	1 ～ 2㎜大の灰褐・灰白色粒、微細な光沢粒を含む		
672	SL1－698床	土師器	坏	口縁～底部	11.55	4.2	6.2	Ⅶ	橙	橙	ナデ、風化著しい	回転ナデ	ナデ	DⅣ	2㎜以下の赤褐・灰白・灰褐色粒、黒色透明光沢粒を含む		
673	SL1－1063床	土師器	坏	完形	12.95	5.15	6.2	Ⅸ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅢ	3㎜以下の赤褐色粒、微細な透明・黒色光沢粒を含む		
674	SL1・SE7	土師器	坏	体部～底部			6.8	Ⅶ	浅黄橙	明赤褐	回転ナデ	回転ナデ、風化気味	ナデ	DⅢ	3㎜以下の無色透明光沢粒、2㎜以下の黒・灰白色粒、黒色光沢粒、微細な光沢粒を含む		
675	SL1	土師器	坏	体部～底部			7.0	Ⅶ	明赤褐	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	TⅠ	1.5㎜以下の赤褐色粒、1㎜以下の黒色光沢粒・明褐色粒、微細な光沢粒を含む		
676	SL1	土師器	坏	体部～底部			5.65	Ⅶ	浅黄橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	2㎜以下の灰褐色粒、1.5㎜以下の赤褐色粒、微細な透明光沢粒を含む		内面に顔料付着か？
677	SL1	土師器	坏	体部～底部			6.3	Ⅶ	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅣ	5㎜以下の赤褐色粒、1㎜以下の乳白色粒、微細な光沢粒を含む	SL1－118 SL1－576	
678	SL1・SE7	土師器	坏	体部～底部			6.0	Ⅶ	にぶい橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラのあとナデ	TⅠ	1㎜以下の黒色光沢粒、微細な光沢粒を含む		内面にスス付着
679	SL1	土師器	坏	体部～底部			6.0	Ⅶ	浅黄橙	浅黄橙	ナデ、風化著しい	回転ナデ、風化著しい	ナデ	DⅡ	2.5㎜以下の灰褐・灰白色粒を含む	SE25－29 SE25－31，SE25上	
680	SL1－1063床	土師器	坏	口縁～底部	12.0	4.85	6.2	Ⅹ	橙 灰オリーブ	明黄褐　灰	風化著しく調整不明瞭	風化著しく調整不明瞭	ナデ	DⅡ	3㎜以下のにぶい褐色粒、1.5㎜以下の褐灰色粒を含む		
681	SL1・SE8	土師器	埦	口縁～体部	17.8			不明	灰白　橙	にぶい黄橙	回転ナデ、風化気味	ミガキ		DⅠ	1㎜以下の赤褐色粒、微細な透明光沢粒を含む		内面に線刻
682	SL1	土師器	坏	口縁～体部	15.2			不明	橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ		DⅠ	1㎜以下の褐色粒を含む		
683	SL1	土師器	埦	口縁～体部	13.3			不明	にぶい橙	明赤褐	口唇部ミガキ、ヨコナデ	ミガキ		DⅠ	1㎜以下の灰・茶褐色粒を少量、かつ微細な光沢粒を含む		墨書土器、外面一部黒変あり
684	SL1・SE7	土師器	坏	口縁～体部	11.4			不明	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化気味	回転ナデ、風化気味		TⅠ	1㎜以下の茶・灰褐色粒を多く含む		
685	SL1－700	土師器	坏	口縁～体部	13.7			不明	浅黄橙	浅黄橙	ナデ、風化著しい	ナデ、風化著しい		DⅢ	2.5㎜以下の赤褐・灰褐色粒を含む	SL1－402b下層	
686	SL1－1061	土師器	坏	口縁～体部	12.7			ⅩⅡ	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、風化気味	ナデ、風化著しい		DⅢ	3㎜以下の赤褐・灰白色粒を多く含む		
687	SL1	土師器	坏	口縁～体部				不明	黒　浅黄橙	黒	ナデ	ナデ		DⅢ	微細な光沢粒を含む		漆
688	SL1－1014	土師器	坏	体部～底部			5.8	不明	浅黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	TⅠ	2㎜以下の褐色粒を含む		
689	SL1	土師器	坏	体部～底部			7.2	不明	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ、指押さえ	ナデ	DⅢ	1.5㎜以下の赤褐色粒を含む		
690	SL1	土師器	坏	体部～底部			8.0	不明	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	WⅡ	3㎜以下の透明光沢粒、2㎜以下の黒色光沢粒、1.5㎜以下の灰白色粒、微細な光沢粒を含む		
691	SL1－468床	土師器	高台付埦	口縁～底部	14.0			埦Ⅰa	浅黄橙	橙 にぶい黄橙	回転ナデ、下部はナデ	回転ナデ	ナデ	DV	1㎜以下の褐色粒、微細な黒色・透明光沢粒を含む		
692	SL1－1087	土師器	高台付埦	体部				埦Ⅰb	橙　浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅢ	7㎜以下の褐灰色粒、4㎜以下の灰白色粒、2.5㎜以下の白色粒、2㎜以下の黒色粒、微細な光沢粒を含む		
693	SL1－441b床	土師器	高台付埦	口縁～底部	14.4			埦Ⅱ	橙	橙	回転ナデ、風化	回転ナデ	ナデ	DⅡ	2㎜大の灰色粒、1㎜以下の褐色粒、微細な透明光沢粒を含む		
694	SL1－695	土師器	高台付埦	口縁～底部	14.5	6.4	8.2	埦Ⅲa	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	DⅠ	3㎜以下の赤褐色粒、微細な光沢粒を含む		墨書土器